和　歌　山　城　跡

―和歌山地方合同庁舎新築に伴う発掘調査報告書―

2016 年 3 月

公益財団法人　和歌山県文化財センター

和　歌　山　城　跡

―和歌山地方合同庁舎新築に伴う発掘調査報告書―

2016 年 3 月

公益財団法人　和歌山県文化財センター

巻頭図版１

写真１　調査区全景（東から）

写真２　調査区全景（西から）

巻頭図版２

写真３　織部筒向付

写真４　肥前系染付瓶

序　　文

和歌山市の中心、史跡和歌山城の北と東に所在する和歌山城跡は、かつては和歌山城三の丸に当たり、中・上級藩士の武家屋敷が立ち並んでいた場所です。

和歌山地方合同庁舎新築に伴い、当センターで平成25年度に実施した発掘調査では、庭園苑池跡や地下式倉庫などの武家屋敷の内部に関わる遺構や屋敷地境界施設といった遺構が発見されました。また、陶磁器・瓦や木製品等の遺物も多く発見され、当地における武家屋敷での暮らしやかつての風景を垣間見ることのできる成果となりました。

当センターでは、平成26・27年度に出土遺物等の整理を行い、その成果を本報告書にとりまとめました。これらの成果は、周辺の発掘調査成果や絵図等の文献資料を複合的に検討することで、江戸時代における和歌山城の姿を復原する資料となることが期待されます。

最後になりましたが、本発掘調査の実施にご協力いただきました関係者、周辺住民の方々に感謝を申し上げます。

平成28年３月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

理 事 長　　櫻　井　敏　雄

例　　言

１．本書は和歌山市二番丁に所在する和歌山城跡の発掘調査報告書である。

２．調査は、国土交通省近畿地方建設局による和歌山地方合同庁舎新築に伴い平成 25 年度に発掘調査を実施し、平成 26 年度・27 年度に出土遺物等整理を実施した。

３．業務は、和歌山県教育委員会の指導のもと、公益財団法人和歌山県文化財センターが実施した。

４．業務は、下記の調査組織のもと実施した。

平成 25 年度（発掘調査）

調査主体	公益財団法人和歌山県文化財センター		理事長	工楽善通
	事務局		専務理事	里森　修
			事務局長（管理課長兼務）	勝浦久和
		埋蔵文化財課	課長	井石好裕
		管理課	主査	松尾克人
	調査担当	埋蔵文化財課	主査	高橋智也
			技師	津村かおり

平成 26 年度（出土遺物等整理）

調査主体	公益財団法人和歌山県文化財センター		理事長	工楽善通
	事務局		専務理事	里森　修
			事務局長（管理課長兼務）	嶋田文紀
		埋蔵文化財課	課長	井石好裕
		管理課	主査	松尾克人
	調査担当	埋蔵文化財課	主査	高橋智也

平成 27 年度（出土遺物等整理）

調査主体	公益財団法人和歌山県文化財センター		理事長	櫻井敏雄
	事務局		専務理事	里森　修
			事務局長（管理課長兼務）	米田良博
		埋蔵文化財課	課長	土井孝之
		管理課	主査	松尾克人
	調査担当	埋蔵文化財課	課長補佐	佐伯和也

５．本書の執筆・編集は佐伯が行った。

６．遺構写真は調査担当者（高橋、津村）が、遺物写真は第２次遺物整理担当の佐伯が撮影した。

７．発掘調査および遺物整理業務に際し、下記の方々にご教示・ご協力を得た。記して感謝を表します。

池辺進一、井馬好英、河内一浩、北野隆亮、小阪晃、下津健太朗、高橋克伸、武内善信、

竹中利明、西村　歩、額田雅裕、前田敬彦、松尾信裕、森村健一。

８．遺構番号については、調査区ごと連番で付与した。

９．遺構図の縮尺は、原則として調査区平面図を 1/250、調査区土層断面図を 1/80、個別遺構図を 1/20 ～ 1/150 とした。また、遺物実測図の縮尺は基本的に 1/4 であるが瓦は 1/6、貨幣は 1/2 とした。

10．遺物番号は本文・実測図・写真図版において一致するが、写真図版には全ての遺物を掲載していない。なお、遺物写真の縮尺は任意の大きさである。

11．出土木製品の保存処理は、株式会社文化財サービスに委託した。

12．当事業で作成した図面・写真・台帳類は公益財団法人和歌山県文化財センターが保管している。出土遺物は和歌山県教育委員会が所有・保管している。

13．遺物については「九州陶磁の編年」2000 年２月九州近世陶磁学会を参考にし、諸先生方からのご教示も得た。

凡　　例

１　発掘調査および出土遺物整理は『財団法人和歌山県文化財センター発掘調査マニュアル〈基礎編〉』（2006．４）に準拠して行った。

２　実測図及び地区割りは、平成 14 年国土交通省告示第 9 号により定められた平面直角座標系第Ⅵ系を使用し、数値は「ｍ」単位で表示している。方位は座標北を示す。

３　発掘調査で使用した標高は、東京湾標準潮位（T.P.）を使用した。

４　土色は小山正忠・竹原秀雄編著〈農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色標監修〉『新版標準土色帖』2010 年版を基準とした。

５　遺構平面図には、遺構の重複等で不明瞭な箇所には □ □ □ の網掛けを行った。また、遺物の青磁染付にも □ の網掛けを行った。

８　発掘調査で使用したコードは以下のとおりである。出土遺物・記録資料はこの調査コードを用いて管理している。　発掘調査コード　：　13－01・379（2013 年–和歌山市・和歌山城跡）

目　　次

巻頭図版・序・例言

第１章　調査の経緯と経過 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の経過 …… 1
　第３節　出土遺物整理の経過 …… 1

第２章　位置と環境 …… 2
　第１節　地理的環境 …… 2
　第２節　歴史的環境 …… 3
　第３節　周辺の遺跡 …… 3
　第４節　調査地周辺の環境及び屋敷地の変遷 …… 4
　第５節　和歌山城跡における既往の調査 …… 6

第３章　調査の方法 …… 9
　第１節　地区割りの設定 …… 9
　第２節　調査区 …… 10
　第３節　調査の手順 …… 10
　第４節　記録方法 …… 10

第４章　発掘調査成果 …… 12
　第１節　基本層序 …… 12
　第２節　調査区１の調査成果 …… 14
　　１　第１遺構面 …… 14
　　２　第２遺構面 …… 24
　　３　第３遺構面 …… 63
　　４　第４遺構面 …… 101
　　５　第４遺構面以下 …… 139
　　６　小結 …… 139
　第３節　調査区２・３の調査成果 …… 140
　第４節　その他の遺物 …… 147
　第５節　木製品保存処理の概要 …… 169
　第６節　考察 …… 178

出土遺物観察表 …… 181
図版（遺構・遺物）
報告書抄録

挿図目次

図１　和歌山の地形環境・中世 …… 2
図２　周辺の遺跡 …… 4
図３　和歌山城下町絵図 …… 5
図４　武家屋敷地区画を示す絵図史料 …… 5
図５　既往の調査区 …… 6
図６　和歌山城発掘調査グリッド図 …… 9
図７　基本土層模式図 …… 12
図８　１区東壁・南壁・北壁土層堆積状況図（壁面基本土層） …… 13
図９　１区第１面検出遺構平面図 …… 17
図10　１区第１面　柱穴列１（遺構１～４）・水琴窟（遺構70） …… 19
図11　１区第１面　水琴窟２（遺構78） …… 20
図12　１区第１面　瓦井戸１（遺構87）・瓦井戸２（遺構431） …… 21
図13　１区整地土第１層・第１面検出土器 …… 22
図14　１区第１面検出土器２ …… 23
図15　１区第２面検出遺構平面図 …… 33
図16　１区第２面　土塀基礎（遺構86） …… 35
図17　１区第２面　遺構96 …… 37
図18　１区第２面　遺構96 …… 38
図19　１区第２面　苑池状遺構１（遺構212） …… 39
図20　１区第２面　苑池状遺構１（遺構212） …… 40
図21　１区第２面　焼土充填土坑群（遺構115） …… 41
図22　１区第２面　焼土充填土坑群（遺構115）・周辺遺構 …… 42
図23　１区第２面　焼土充填土坑群（遺構115）・周辺遺構 …… 43
図24　１区第２面　通路状遺構１（遺構244）・周辺遺構 …… 44
図25　１区第２面　通路状遺構１（遺構244）・周辺遺構 …… 45
図26　１区第２面　石敷遺構（遺構188） …… 46
図27　１区第２面　雨落遺構（遺構190）・礎集積箇所（遺構192） …… 47
図28　１区第２面　礎集積箇所（遺構192） …… 48
図29　１区第２面　礎石建物跡（遺構218） …… 49
図30　１区第２面　小礎敷き根固め柱穴（遺構223, 228） …… 50
図31　１区整地土第２層出土土器 …… 51
図32　１区第２面出土土器 …… 52
図33　１区第２面出土土器２ …… 53
図34　１区第２面出土土器３ …… 54
図35　１区第２面出土土器４ …… 55
図36　１区第２面出土土器５ …… 56
図37　１区第２面出土土器６ …… 57
図38　１区第２面出土土器７ …… 58
図39　１区第２面出土土器８ …… 59
図40　１区第２面出土土器９ …… 60
図41　１区第２面出土土器10 …… 61
図42　１区第２面出土土器11 …… 62
図43　１区第３面検出遺構平面図 …… 73
図44　１区第３面　苑池状遺構２（遺構437） …… 75
図45　１区第３面　通路状遺構２（遺構342） …… 76
図46　１区第３面　屋敷地境界溝１（遺構436） …… 77
図47　１区第３面　屋敷地境界柱穴列１（遺構262～276・280・281） …… 78
図48　１区第３面　遺構360・361 …… 79
図49　１区第３面　遺構368 …… 80
図50　１区第３面　遺構350 …… 81
図51　１区第３面　遺構442・419 …… 82
図52　１区第３面　柱穴列２（遺構402, 403, 440）・地下式倉庫（遺構451）・礎石列（遺構454） …… 83
図53　１区第３面　地下式倉庫（遺構451） …… 84
図54　１区第３面　地下式倉庫（遺構451）・礎石列（遺構454） …… 85
図55　１区第３面　柱穴列２（遺構402, 403, 440）・遺構401・438・439 …… 86
図56　１区整地土第３層出土土器 …… 87
図57　１区第３面出土土器 …… 88
図58　１区第３面出土土器２ …… 89
図59　１区第３面出土土器３ …… 90
図60　１区第３面出土土器４ …… 91
図61　１区第３面出土土器５ …… 92
図62　１区第３面出土土器６ …… 93
図63　１区第３面出土土器７ …… 94
図64　１区第３面出土土器８ …… 95
図65　１区第３面出土土器９ …… 96

図66　１区第３面出土土器10 …… 97
図67　１区第３面出土土器11 …… 98
図68　１区第３面出土土器12 …… 99
図69　１区第３面出土土器13 …… 100
図70　１区第４面検出遺構平面図 …… 111
図71　１区第４面
屋敷地境界柱穴列２（遺構528, 529, 539）・
屋敷地境界溝３（遺構541） …… 113
図72　１区第４面　屋敷地境界柱穴列３（遺構538） 114
図73　１区第４面　遺構468・475 …… 115
図74　１区第４面　廃棄土坑群（遺構530, 540, 555） 116
図75　１区第４面　木枠井戸２（遺構527）・
廃棄土坑群（遺構530, 540, 555） …… 117
図76　１区第４面　遺構514・518・519・
素掘井戸群２（遺構536, 537） …… 118
図77　１区第４面　遺構519・
素掘井戸群（遺構536, 537）・遺構502, 503 … 119
図78　１区第４面　大型土坑群
（遺構498, 532, 533, 551） …… 120
図79　１区第４面　遺構562・571・581 …… 121
図80　１区第４面　素掘井戸群１
（遺構474, 476, 478, 481, 486） …… 122
図81　１区第４面　遺構472, 473 …… 123
図82　１区第４面　木枠井戸１（遺構492） …… 124
図83　１区整地土第４層出土土器 …… 125
図84　１区整地土第４層出土土器２ …… 126
図85　１区第４面出土土器 …… 127
図86　１区第４面出土土器２ …… 128
図87　１区第４面出土土器３ …… 129
図88　１区第４面出土土器４ …… 130
図89　１区第４面出土土器５ …… 131
図90　１区第４面出土土器６ …… 132
図91　１区第４面出土土器７ …… 133
図92　１区第４面出土土器８ …… 134
図93　１区第４面出土土器９ …… 135
図94　１区第４面出土土器10 …… 136
図95　１区第４面出土土器11 …… 137
図96　１区第４面出土土器12 …… 138
図97　２－１区第１面・３－１区第２面平面図 …… 143
図98　３－２区西側配管部第２面・第３面平面図 … 144
図99　３－２区東側配管部第２面・第３面平面図 … 145
図100　２－１区第１面・３－２区第２面出土土器 … 146
図101　石製品（硯・砥石） …… 150
図102　瓦１（軒丸瓦） …… 151
図103　瓦２（軒丸瓦・軒平瓦） …… 152
図104　瓦３（軒平瓦・滴水瓦・軒桟瓦）…… 153
図105　瓦４（軒桟瓦・丸瓦） …… 154
図106　瓦５（丸瓦・平瓦） …… 155
図107　瓦６（平瓦・道具瓦他） …… 156
図108　土製品１ …… 157
図109　土製品２ …… 158
図110　金属製品１ …… 159
図111　金属製品２ …… 160
図112　金属製品３（貨幣） …… 161
図113　木製品１（下駄） …… 162
図114　木製品２（下駄） …… 163
図115　木製品３（曲物の底板等） …… 164
図116　木製品４（桶底・曲物の側板） …… 165
図117　木製品５（曲物の側板） …… 166
図118　木製品６（手桶の側板・木簡・楔状木製品・
漆塗り蓋・漆塗り木片） …… 167
図119　木製品７（扇子・漆椀） …… 168
図120　和歌山城跡出土木材の顕微鏡写真１ …… 175
図121　和歌山城跡出土木材の顕微鏡写真２ …… 176
図122　和歌山城跡出土漆器の漆塗膜断面（落射蛍光）・
保存処理前 処理後 写真 …… 177
図123　紀伊国名所図会「岡口御門辺の図」 …… 180

表１　樹種同定結果 …… 170

観察表１　土器類 …… 181
観察表２　瓦類 …… 196
観察表３　土製品・ミニチュア土器 …… 197
観察表４　石製品 …… 198
観察表５　金属製品 …… 199
観察表６　木製品 …… 199

図 版 目 次

巻頭図版１
　１．調査地全景（東から）
　２．調査地全景（西から）
巻頭図版２
　１．織部筒向付（報告№.546）
　２．肥前系染付瓶（報告№.472）

図版１
　１．調査前全景（南東から）
　２．調査前全景（北西から）
　３．調査地（西から）
　４．調査地（南から）
　５．調査地から和歌山城天守を望む
図版２
　１．１区第１遺構面　調査区全景（俯瞰）
　２．１区調査区全景（北から）
　３．１区調査区全景（北から）
　４．１区調査区全景（北西から）
　５．１区調査区全景（北東から）
図版３
　１．１区第１遺構面全景（南東から）
　２．１区和歌山大空襲時の焼土（南西から）
　３．１区遺構 70　水琴窟１（東上から）
　４．１区遺構 78　水琴窟２（南から）
　５．１区遺構１～４　柱穴列（北西から）
　６．１区遺構 87　瓦積井戸１（南から）
　７．１区遺構 431　瓦積井戸２（北東から）
　８．１区遺構６　土層断面（西から）
図版４
　１．１区第２遺構面　調査区全景（俯瞰）
　２．１区遺構 86　土塀基礎全景（北から）
　３．１区遺構 86　土塀基礎全景（南から）
　４．１区遺構 86　断割り（西から）
図版５
　１．１区遺構 212　苑池状遺構１（東から）
　２．１区遺構 212 ｃ－ｃ′土層断面（南東から）
　３．１区遺構 212 ｅ－ｅ′土層断面（南から）
　４．１区遺構 212　瓦集積状況（西から）
　５．１区遺構 212 敷石土坑断割り（南東から）
図版６
　１．１区遺構 115　焼土充填土坑群（東から）
　２．１区遺構 115－５・６ａ－ａ′土層断面（北から）
　３．１区遺構 115－２・５・６ｂ－ｂ′土層断面（北から）
　４．１区遺構 96 ｄ－ｄ′土層断面（北東から）
　５．１区遺構 96 ｆ－ｆ′土層断面（南西から）
図版７
　１．１区遺構 244　通路状遺構（西から）
　２．１区遺構 244 ｆ－ｆ′土層断面（東から）
　３．１区遺構 127 土層断面（南東から）
　４．１区遺構 181 土層断面（西から）
　５．１区遺構 89 土層断面（南から）
　６．１区遺構 234 土層断面（北から）
　７．１区遺構 90 土層断面（南西から）
　８．１区遺構 90 土層断面（南東から）
図版８
　１．１区遺構 91 土層断面（南から）
　２．１区遺構 94 土層断面（南から）
　３．１区遺構 97 土層断面（東から）
　４．１区遺構 100 土層断面（南から）
　５．１区遺構 111 土層断面（北から）
　６．１区遺構 118 土層断面（南から）
　７．１区遺構 119 土層断面（南から）
　８．１区遺構 121 土層断面（南から）
図版９
　１．１区遺構 124 土層断面（北から）
　２．１区遺構 125・126 土層断面（北から）
　３．１区遺構 211　石列（東から）
　４．１区遺構 104 土器出土状況（西から）
　５．１区遺構 188　石敷遺構（南から）
　６．１区遺構 188 ｂ－ｂ′土層断面（南から）
　７．１区遺構 190　雨落状遺構・遺構 192
　　礫集積箇所（北西から）
　８．１区遺構 190　雨落状遺構（西から）
図版 10
　１．１区遺構 190 土層断面（南東から）
　２．１区遺構 190 土層断面（西から）
　３．１区遺構 192 ｃ－ｃ′土層断面（北から）
　４．１区礎石建物跡（北から）
　５．１区遺構 218 ｃ－ｃ′土層断面（西から）
　６．１区遺構 218 ｄ－ｄ′土層断面（西から）
　７．１区遺構 223　小礫根固め柱穴断割り（南西から）
　８．１区遺構 228　小礫根固め柱穴土層断面（西から）
図版 11
　１．１区第３遺構面　調査区全景（俯瞰）
　２．１区調査区全景（西から）
　３．１区調査区南東隅（西から）
　４．１区調査区北西隅（西から）
　５．１区調査区北側（南西から）
図版 12
　１．１区遺構 437　苑池状遺構２（東から）
　２．１区遺構 437 護岸状況（南から）
　３．１区遺構 437 南壁土層堆積状（北西から）
　４．１区遺構 342　通路状遺構２（北から）
　５．１区遺構 342　通路状遺構２（北から）
図版 13
　１．１区遺構 342 ｂ－ｂ′土層断面（南から）

２．１区通路状遺構２土層断面（南から）
３．１区遺構 342 石積み検出状況（北から）
４．１区遺構 438 礫出土状況（北西から）
５．１区遺構 439 礫出土状況（西から）
６．１区遺構 402・403・404 柱穴列（南から）
７．１区遺構 401 小礫検出状況（北から）
８．１区遺構 401 断割り状況（東から）
図版 14
１．１区遺構 436　屋敷地境界溝１（北東から）
２．１区遺構 436 ａ－ａ′ 土層断面（北から）
３．１区遺構 436 屋敷地境界溝１内のラミナ
４．１区屋敷地境界柱穴列１（遺構 262 ～ 276)（南から）
図版 15
１．１区遺構 267 土層断面（西から）
２．１区遺構 271 土層断面（西から）
３．１区遺構 276 土層断面（西から）
４．１区遺構 280 土層断面（西から）
５．１区遺構 281 土層断面（西から）
６．１区遺構 279 土層断面（西から）
７．１区遺構 289 土層断面（西から）
８．１区遺構 277 土層断面（西から）
図版 16
１．１区遺構 360・361　地下式倉庫（東から）
２．１区遺構 360 土層断面（東から）
３．１区遺構 361 土層断面（東から）
４．１区遺構 361 スロープ部（北西から）
５．１区遺構 451　地下式倉庫（北西から）
６．１区遺構 451・452 土層断面（北東から）
７．１区遺構 368 ｇ－ｇ′ 土層断面（西から）
８．１区遺構 368 ｂ－ｂ′ 土層断面（西から）
図版 17
１．１区遺構 368　屋敷地境界溝２（西から）
２．１区遺構 315 土層断面（南から）
３．１区遺構 317 土層断面（南から）
４．１区遺構 320 土層断面（南から）
５．１区遺構 321 土層断面（南から）
図版 18
１．１区遺構 350 土器出土状況（東から）
２．１区遺構 350 土層断面（南から）
３．１区遺構 350 漆椀出土状況
４．１区遺構 442 土層断面（西から）
５．１区遺構 419 ｂ－ｂ′ 土層断面（南東から）
図版 19
１．１区遺構 419 ｃ－ｃ′ 土層断面（南から）
２．１区遺構 453 ｊ－ｊ′ 土層断面（南から）
３．１区遺構 453・454 ｋ－ｋ′ 土層断面（南西から）
４．１区遺構 447 土層断面（東から）
５．１区遺構 448 土層断面（南西から）
６．１区遺構 449 土層断面（西から）
７．１区遺構 450 土層断面（南東から）
８．１区遺構 455 土層断面（南東から）
図版 20
１．１区遺構 456 土層断面（東から）
２．１区遺構 457 土層断面（東から）
３．１区遺構 458 土層断面（西から）
４．１区遺構 459 土層断面（南から）
５．１区遺構 459 完掘状況（南西から）
６．１区遺構 454　礎石列１検出状況（北東から）
７．１区遺構 454 ｍ－ｍ′ 土層断面（西から）
８．１区遺構 454 ｌ－ｌ′ 土層断面（東から）
図版 21
１．１区第４遺構面　調査区全景（俯瞰）
２．１区調査区全景（西から）
３．１区調査区東側（南から）
４．１区調査区北側（南西から）
５．１区調査区中央西端（西から）
図版 22
１．１区遺構 541　屋敷地境界溝３
遺構 539 屋敷地境界柱穴列２（南から）
２．１区遺構 538　屋敷地境界柱穴列３（西から）
３．１区遺構 541 －２土層断面（南から）
４．１区遺構 541 －５土層断面（南から）
５．１区遺構 538 －４土層断面（南から）
６．１区遺構 538 －５土層断面（南から）
図版 23
１．１区遺構 530・540・555 廃棄土坑群（西から）
２．１区遺構 530 土層断面（東から）
３．１区遺構 540 土層断面（南から）
４．１区遺構 540 土層断面（南から）
５．１区遺構 540 土層断面（西から）
図版 24
１．１区遺構 540 土層断面（西から）
２．１区遺構 540 遺物出土状況
３．１区遺構 555 土層断面（南東から）
４．１区遺構 555 墨書荷札出土状況
５．１区遺構 518 土層断面（東から）
６．１区遺構 517 土層断面（北から）
７．１区遺構 503・502 土層断面（南から）
８．１区遺構 498　大型土坑 土層断面（南から）
図版 25
１．１区遺構 532 大型土坑土層断面（東から）
２．１区遺構 533 大型土坑土層断面（南東から）
３．１区遺構 474・476・478・481・486
素掘井戸群（北西から）
４．１区遺構 474 土層断面（北東から）
５．１区遺構 476 土層断面（東から）
６．１区遺構 481 土層断面（北東から）
７．１区遺構 551 大型土坑土層断面（南西から）

８．１区遺構 514 土層断面（東から）

図版 26

１．１区遺構 519 土層断面（南から）
２．１区遺構 562 大型土坑土層断面（南から）
３．１区遺構 481 断割り状況（北東から）
４．１区遺構 486 土層断面（東から）
５．１区遺構 468 土層断面（南東から）
６．１区遺構 468 土層断面（南から）
７．１区遺構 472 土層断面（東から）
８．１区遺構 473 土層断面（北東から）

図版 27

１．１区遺構 473 －２土層断面（北東から）
２．１区遺構 475 ｉ－ｉ′ 土層断面（北から）
３．１区遺構 475 ｈ－ｈ′ 土層断面（南から）
４．１区遺構 536 素掘井戸土層断面（南西から）
５．１区遺構 537 素掘井戸土層断面（南から）
６．１区遺構 536・537 完掘状況（南西から）
７．１区遺構 492 木枠井戸１（南東から）
８．１区遺構 492 木枠井戸１断割り状況（東から）

図版 28

１．１区遺構 527 木枠井戸２土層断面（南東から）
２．１区遺構 554 木枠井戸３土層断面（南東から）
３．１区北壁土層堆積状況（南東から）
４．１区南壁土層堆積状況（北西から）
５．１区東壁土層堆積状況（北西から）

図版 29

１．２－１区第１遺構面完掘状況（西から）
２．２－１区遺構４完掘状況（東から）
３．２－１区第２遺構面検出状況（西から）
４．２－１区西壁土層堆積状況（東から）
５．２－１区南壁東半部土層堆積状況（北西から）
６．２－１区南壁西半部土層堆積状況
７．２－２区全景（西から）
８．２－２区全景（東から）
９．２－２区全景（北から）

図版 30

１．３－１区南側配管部第２遺構面完掘状況（西から）
２．３－２区西側配管部第２遺構面完掘状況（北東から）
３．３－２区東側配管部第２遺構面完掘状況（南から）
４．３－１区第２遺構面　石列遺構（南から）
５．３－２区西側配管部第３遺構面　遺構 14（北東から）
６．３－２区西側配管部第３遺構面　遺構 12（東から）
７．３－２区西側配管部第３遺構面　遺構 13（北東から）
８．３－２区東側配管部第２遺構面　遺構 10（東から）
９．３－２区東側配管部第２遺構面　遺構９（南西から）

図版 31 ～ 50　出土遺物

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

国土交通省近畿地方整備局が周知の埋蔵文化財包蔵地「和歌山城跡」内で和歌山地方合同庁舎新築を計画したことから、和歌山県教育委員会と保存協議を行い事前に確認調査を実施することとなった。和歌山県教育委員会が、平成 22 年 3 月に確認調査を実施した結果、和歌山地方合同庁舎建設予定地に近世から近代にかけての埋蔵文化財が展開していることが判明し、記録保存目的の本発掘調査が必要である旨が国土交通省近畿地方整備局に通知された。

その後、平成 25 年 5 月 28 日付け国近整計第 50 号で、国土交通省近畿地方整備局から和歌山県教育委員会に本発掘調査の実施依頼があり、これを受けて、平成 25 年 5 月 29 日付け文第 211 号により和歌山県教育委員会から公益財団法人和歌山県文化財センターへの本調査の依頼を経て、公益財団法人和歌山県文化財センターが本調査を実施することとなった。

第２節　調査の経過

発掘調査業務については、平成 25 年 7 月 2 日から平成 26 年 3 月 31 日まで国土交通省近畿地方整備局と公益財団法人和歌山県文化財センターが業務委託契約を締結して実施した。

出土遺物等整理業務については、平成 26・27 年度の 2 カ年にわたり、国土交通省近畿地方整備局と公益財団法人和歌山県文化財センターが業務委託契約を締結して実施した。

平成 26 年度は、出土遺物の水洗・接合・復原・注記及び出土遺物の実測、遺構図・出土遺物実測図のトレース等を行い、同時に報告書の執筆を進めた。なお、業務期間は平成 26 年 8 月 19 日から平成 27 年 2 月 28 日までである。

平成 27 年度は、木製品保存処理、出土遺物の実測、遺構図・出土遺物実測図のトレース、組版、遺物登録台帳作成、写真撮影、報告書執筆を行い、発掘調査報告書（本書）を刊行した。なお、業務期間は平成 27 年５月８日から平成 28 年２月 19 日までである。

第３節　出土遺物整理の経過

（26 年度作業）まず、遺物の洗浄、注記、接合、補強作業を実施した時点で、出土遺物の重要性を考慮して発掘調査報告書に掲載する遺物の抽出を行った後、復元作業、実測作業を行った。これらの作業と並行して、報告書掲載の遺構図、遺物実測図のデジタルトレース作業も実施した。なお、遺物洗浄作業は、平成 25 年度の発掘調査時に応急整理として洗浄作業を完了していた残りの遺物を対象に実施した。

（27 年度作業）廃棄土坑から多量に出土している木製品の保存処理作業から開始した。保存処理は重要な遺物を選定し、43 点について専門機関と委託契約を締結し実施した。なお、この結果については、本報告書に専門機関による業務報告の原稿を掲載している。

昨年度からの遺物実測作業と報告書掲載の遺構図および遺物実測図のデジタルトレース作業と並行して遺物登録作業を行った。遺物のトレース作業を行うに先立ち、デジタルカメラにより遺物写真撮影を行い、染付等の絵柄を有する遺物の写真を実測図に貼付けた。次に、遺構・遺物の版組作業原稿執筆を行い、報告書を刊行した。

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

和歌山市の地質は中央構造線が東西に延び、この大断層を境として北と南で大きく異なっている。北側は礫岩・砂岩・泥岩などの堆積岩層で構成される和泉層群、南側は結晶片岩を主体とする三波川変成帯である。

紀ノ川は、この中央構造線に沿うように西流して紀伊水道に注ぎ、河口域で和歌山平野を形成している。和歌山平野は縄文時代前期（約 6000 年前）頃の縄文海進頂期には、奥深い内湾となっており、紀ノ川は日前宮の東に位置する岩橋付近で海に注いでいた。また、縄文海進以降から約 2000 年前にかけて、磯の浦付近から南東の雑賀方面にかけて砂州が形成され、湾は和歌浦付近で開口するようになる。この砂州は後に現在の和歌山市街地の基盤を成すもので、規模は最大で幅約２㎞、延長 10 ㎞以上に渡って確認されている。縄文海進以降、海面の低下とともに紀ノ川の堆積作用が進み、湾であった部分が陸化され三角州が発達する。古代までの紀ノ川の本流は梶取付近で蛇行して現在の土入川・和歌川に沿うようなかたちで和歌浦付近に注ぐようになったとされる。このことにより、沿岸には新たな砂州が形成され海岸線は西側に寄るが、これが昭和 40 年頃まであった水軒浜の原形となる。

古代から中世頃になると、紀ノ川に本流は先の形成された砂州を突き抜けて、雑賀崎北側の大浦付近に注ぐようになる。この名残が現在の水軒川で、当時の河道は、明治期の地図を参照すれば、河口付近から水田となっている箇所を辿ることで復元することができる。中世も後半頃になると、紀ノ川は海岸部の砂州を突破して、ほぼ現在の位置になったとされる。

調査地は和歌山市の中心部、和歌山市二番丁３番地に所在し、和歌山城東堀の東側に位置する。当該地は国土地理院発行「土地条件図　和歌山」によれば、旧紀の川の沖積作用により形成された砂堆の東に広がっていた氾濫平野の一角となっている。

また、和歌山城の築かれた中世末から江戸初期には、天守閣や本丸の立地する独立丘陵の岡山、南の雑賀山、名草山などは先にも記した紀ノ川南岸の三波川系の結晶片岩帯で、その北側には紀ノ川が西流し、西方には砂州が広がっていた風景が見える。

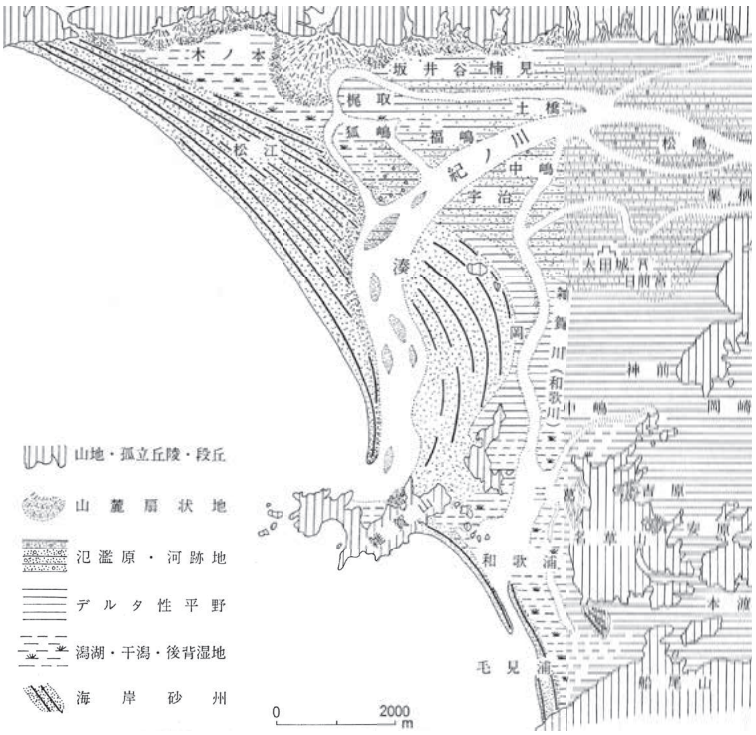


図１　和歌山の地形環境・中世

第２節　歴史的環境

調査地周辺は、「史跡　和歌山城」に指定されている範囲を除く、和歌山城旧三の丸を中心とした一帯が埋蔵文化財包蔵地「和歌山城跡」となっている。和歌山城跡では、過去の発掘調査において中世以前の遺構・遺物はほとんど確認されておらず、遺跡の主体となる時代は和歌山城が築城されて後の時期である。

和歌山城は、三波川変成帯の一角の岩山である岡山に天守郭・本丸を置き、その周辺の砂丘上に郭を設けた近世城郭である。

和歌山城の歴史は、羽柴（豊臣）秀吉が紀州を平定した天正 13 年（1585）に始まる。羽柴秀吉は紀州平定後、異父弟の秀長に命じて岡山を中心とした築城を命じ、翌年からは秀長の城代として桑山重晴が入城して築城を行った。その後、慶長 5 年（1600）に、関ヶ原合戦で軍功のあった浅野幸長が入城し、城郭全体の改修をおこない、城下町を整備するなど、その後の和歌山城の原形を作ったと言われている。元和 5 年（1619）に徳川家康の十男である頼宣が入城し、浅野期の和歌山城を、天守郭・本丸を中心として、周辺に二の丸・三の丸・砂の丸・西の丸・南の丸を配置した御三家の城郭としてふさわしい城に大改築を行った。

その後、何度かの火災によって城内の建物が焼失したが再建され、中でも弘化３年（1846）には天守閣が落雷によって焼け落ちたが、御三家の特権により幕府から再建を許可され嘉永３年（1850）に復興している。

明治維新後は、和歌山城の保存は明治政府により現在の「史跡　和歌山城」の範囲に限られ、三の丸は官公庁用地や民間に払い下げとなる。調査地は、明治に裁判所敷地、戦後は検察庁敷地となり、現在に至っている。

第３節　周辺の遺跡

紀ノ川左岸の和歌山平野にある原始・古代の遺跡の殆どがＪＲ和歌山駅から東側の平野部から岩橋山塊・山麓にかけて展開している。縄文時代の遺跡としては、中期から晩期にかけて花山西麓の南西向き緩斜面に位置する国指定史跡の鳴神貝塚が著名である。弥生時代になると遺跡の数も増加し、それらの中でも、石舌を伴う銅鐸が出土したことでよく知られる太田・黒田遺跡は大規模な環濠集落で、和歌山平野の拠点的な集落として位置づけられている。

古墳時代になると岩橋山塊には数多くの古墳が築かれ、岩橋千塚古墳群、花山古墳群、井辺前山古墳群などの大古墳群を形成する。これらの古墳は紀の川下流域に盤踞した紀氏一族の墓であると考えられており、山麓に展開する鳴神地区遺跡などとの関連性が問われている。

古代では太田黒田遺跡の刳抜き井戸からの和同開珎と万年通宝の出土や、鳴神地区遺跡の掘立柱建物の検出などの事例から官衙的な施設があったと考えられている。

鎌倉時代から室町時代を通して太田・黒田遺跡、鳴神地区遺跡、秋月遺跡などから当該期の遺物が多量に出土している。戦国期になると太田党や紀の川下流域の土豪集団である雑賀衆が秀吉の紀州攻めに対抗するが、太田城の水攻め、根来寺の焼打ちなどにより紀州は平定される。やがて近世、紀州は海上交通の要衝ということもあり御三家の一角を占め、城下町は五十五万五千石の名に恥じぬよう整備され、当時、人口も全国でも上位に位置づけられる。

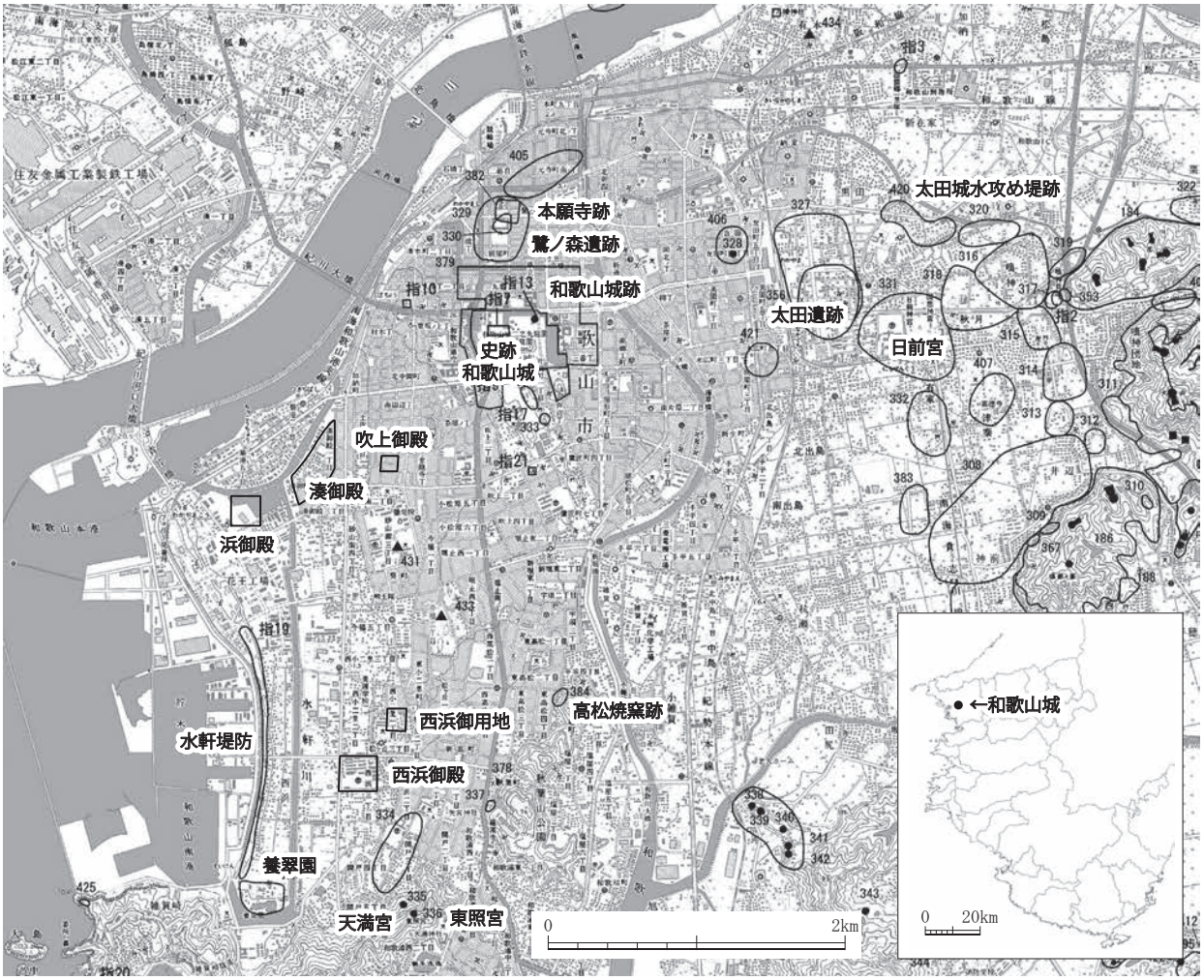


図２　周辺の遺跡

第４節　調査地周辺の環境および屋敷地の変遷

和歌山城の本丸･二の丸の中枢部分を囲む内堀の範囲は、昭和６年に国史跡に指定されており、家臣の屋敷地である三の丸や昭和になってうめたてられた外堀（西汐入川・広瀬川）までの範囲については、周知の埋蔵文化財包蔵地とされている。

三の丸は和歌山城の北側から東側にかけて位置し、紀ノ川と和歌川を結ぶ運河でもある堀川、西汐入川、広瀬川からなる外堀と内堀とに囲まれている。江戸時代の絵図や「紀伊続風土記」などから、外堀の内側に沿って松を植えた土塁が巡っていたことが窺える。

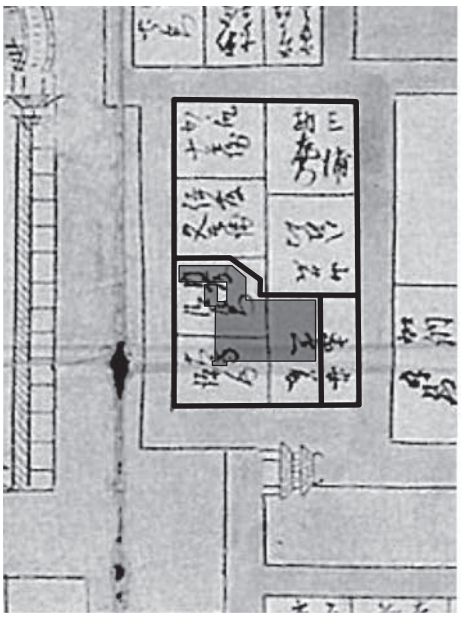
城下と三の丸の出入り口としては、京橋口、湊橋口、広瀬口、北中橋口、三木橋口、東中橋口があり、それぞれには城門がおかれていた。三の丸と城の中枢部との行き来は、二の丸間を繋ぐ一の橋のみとなっている。初期の城の正面は城の南東部にあったとされるが、その後、北側の京橋口が正面となり、一の橋が大手門となる。京橋口から一の橋にかけての三の丸北側は、紀州徳川家の御付家老で新宮城主水野氏、田辺城主安藤氏や、家老である三浦氏の大きな屋敷が配置されている。

今回の調査地は東側三の丸の南端で、内堀を挟んだ本丸の真東に位置し、広瀬口城門の北側にあたる。

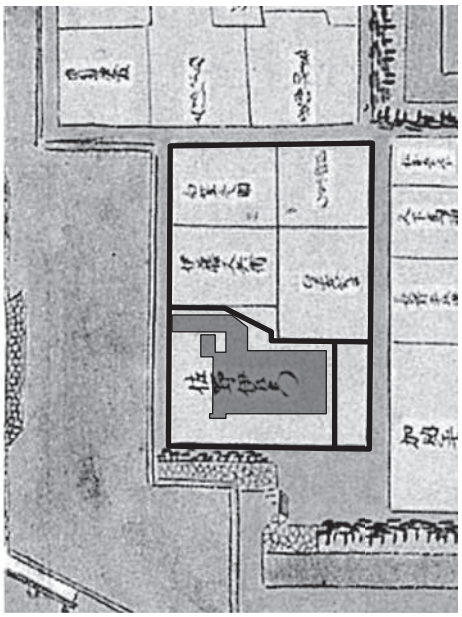
江戸時代に描かれた絵図史料には、武家屋敷群の配置についての記載があり、調査区の範囲に

は多い時期で３家の武家が居を構えていたことがわかる。18 世紀前半には佐野・大高・安藤の３家、18 世紀中頃には佐野・安藤の２家、19 世紀前半からは佐野の１家の屋敷跡があったことがうかがえ、佐野家がその栄達によって屋敷地を拡大していった場所に当たる。

図３　和歌山城下町絵図



和歌山古屋敷絵図（1658-1661）
（和歌山県立図書館　蔵）



和歌山城下町絵図（1855）
（和歌山市立博物館　蔵）

図４　武家屋敷地区画を示す絵図史料

第５節　和歌山城跡における既往の調査

これまでの史跡和歌山城の発掘調査は、和歌山市教育委員会（ 以下、「市教委」）・和歌山市文化体育振興事業団・財団法人和歌山市都市整備公社（ 以下、「市事業団」） で 37 次にわたって行われ、和歌山城跡の発掘調査としては、市教委・市事業団で 19 次、当文化財センターで５次にわたっておこなわれている。このほか和歌山城下町の調査としては、「鷺ノ森遺跡」の範囲内で市事業団によって 13 次にわたって実施されている。

和歌山城跡の発掘調査は、市教委・市事業団・当文化財センターによりこれまで 3,000 ㎡ほどの範囲で実施されているが、総面積（ 約 430,000 ㎡ ）に比べれば極わずかにすぎず、その内容についてはそれほど解明されていないと言える。

以下、和歌山城跡についての既往の調査概要をまとめておくが、市教委・市事業団については「市」、当文化財センターについては「県」として次数の表記をおこなう。また、市教委・市事業団の調査概要については、既に公刊されている 17 次までの収録であることをあらかじめことわっておく。

市１次：1991 年度に砂の丸の北側にある勘定門の北方で、ビル建設にともない市教委によって調査がおこなわれた。調査面積は 10 ㎡。遺構は検出されなかったことから、埋め立てられた

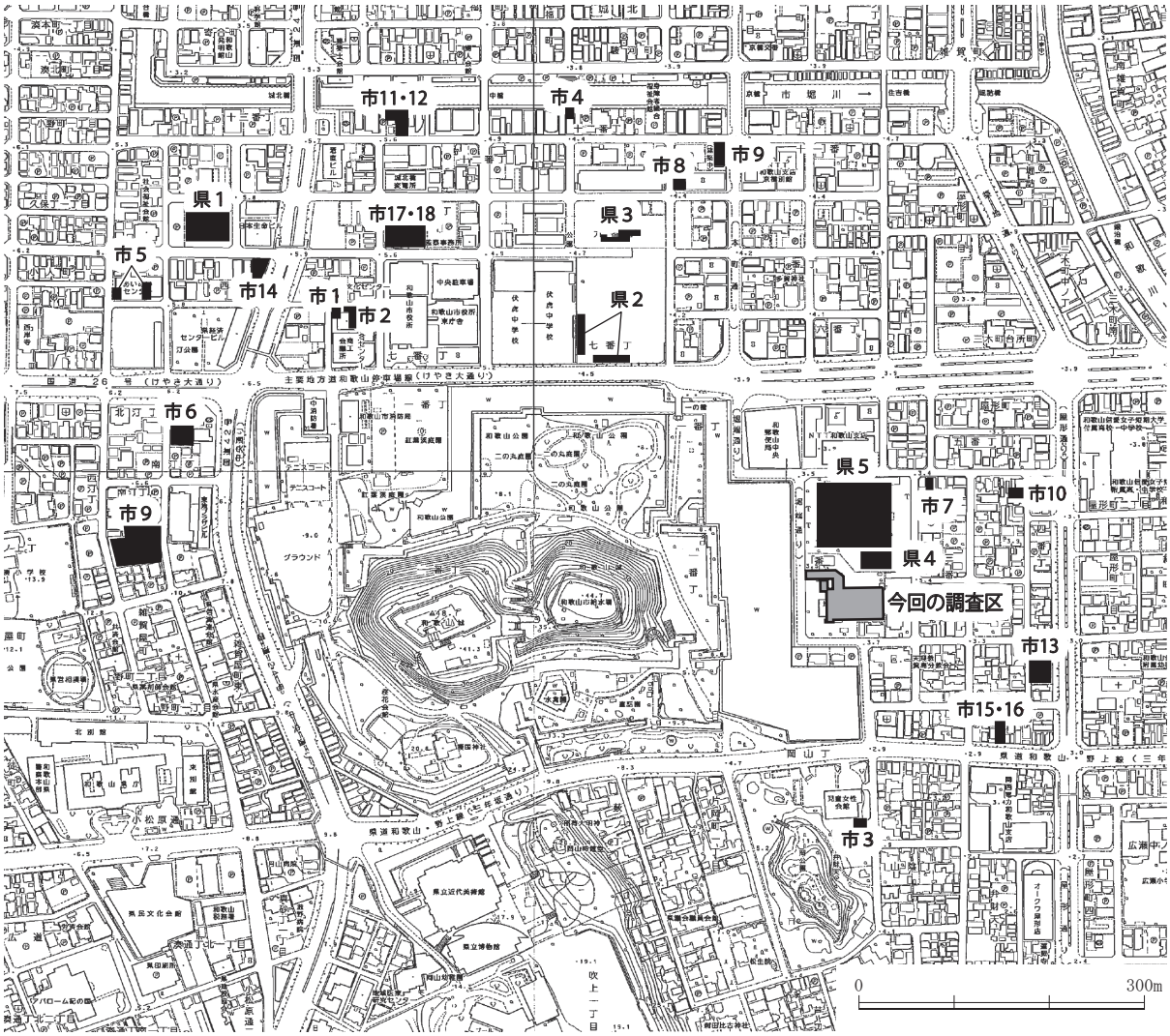


図５　既往の調査区

外堀・西汐入川に相当するものと考えられる。

市２次：1991 年度に市１次調査の東隣で、公共施設の建設に伴い市事業団によって調査がおこなわれている。調査面積は 24 ㎡で、市１次と同様に遺構は検出されず、調査区が堀内に相当するものと考えられる。

市３次：1994 年度に和歌山城の南東で、車輌入口造成に伴って市事業団によって調査がおこなわれている。調査面積は 30 ㎡で、屋敷地を画すると考えられる石組み溝が検出されている。江戸時代に描かれた絵図では､調査区付近に百軒長屋が存在したことがうかがえ､『紀伊名所図会』にある「岡口御門辺の図」では百軒長屋らしき敷地を画する石組溝が描かれている。調査で見つかった溝は、これに相当すると考えられている。

市４次：1994 年度に市堀川に沿った中橋御門の東で、事務所建設に伴い市事業団によって調査がおこなわれている。調査面積は 60 ㎡で、スロープをもった石敷施設が検出されているが、これは明治以降第二次世界大戦まで使われた舟入遺構と評価されている。調査区は外堀に沿い、土塁が存在した箇所に相当することから、江戸時代の遺構が確認できなかったと考えられる。

市５次：1995 年度に三の丸の西端で、公共施設建設に伴い市事業団によって調査がおこなわれている。開発予定地内に２箇所のトレンチを設定し、調査面積は 90 ㎡である。遺構は検出されず、市１・２次と同様に調査区が埋め立てられた外堀・西汐入川の堀内に相当したためと考えられる。

市６次：1996 年度に砂の丸と堀を挟んだ西方で、事務所ビル建設に伴い市事業団によって調査がなされている。調査面積は 90 ㎡である。調査地は江戸時代に描かれた絵図などから武家屋敷があったことがうかがえる。調査地によって江戸時代中期・後期、江戸時代後期から第二次世界大戦期に至る３時期の遺構面が確認され、建物基礎や石列・石垣などが検出されている。

市７次：1996 年度に三の丸東で、医院の建設に伴い調査がおこなわれている。調査面積は 81 ㎡で、武家屋敷に伴う江戸時代後期と末期の２時期の遺構面が確認され、礎石の根石や石組溝などが検出されている。

市８次：2001 年度に三の丸京橋御門の南側で、店舗の増築に伴い市事業団によって調査がおこなわれた。調査地は紀州徳川家付家老水野氏の屋敷地西端付近で、調査面積は 70 ㎡である。江戸時代前期・中期・後期の３時期の遺構面が確認され、規模が大きい礎石建物をはじめ石組溝などが検出されている。

市９次：2002 年度に三の丸京橋御門の南側で、事務所ビル建設に伴い市事業団によって調査がおこなわれている。調査地は市８次調査地北東隣接地で、同様に水野氏の屋敷地に相当する。調査面積 160 ㎡で、江戸時代前期・中期・後期（ ２面 ）の計４面の遺構面が確認され、それぞれの面から礎石建物や石組溝などが検出されている。

市 10 次：調査区は三の丸の屋敷地に相当する箇所であり、事務所建設に伴い約 11 ㎡の調査をおこなった。遺構面については確認できなかったが、包含層から江戸時代の土師器・堺擂鉢などが検出されている。

市 11・12 次：調査地は、和歌山城の三の丸に位置する北外堀に面した土塁と推定される場所である。５㎡ほどの小規模な調査であったが、ここでは北外堀の南側に築かれた土塁の一部が検出されている。

市 13 次：調査地は三の丸の東外堀に面した箇所である。調査面積は約 23 ㎡で、わずかに土塁の可能性のある盛土が確認された。

市 14 次：調査地は三の丸の西外堀に面した箇所である。約６㎡の調査であり、既存建物の基礎により撹乱を受けていたため遺構は確認されていない。

市 15 次：調査地は、三の丸の外堀に面した箇所である。江戸時代の遺構面が２面確認され、遺物としては、近世の土師器小片が検出されている。

市 16 次：前述の 15 次調査を受け、本発掘調査が実施されたものである。調査では、浅野期に遡る石組み暗渠、井戸などが検出された。また、和歌山城以前、鎌倉時代の粘土採掘穴と考えられる土坑群が検出されており、土地利用の一端を垣間見る資料を得ている。

市 17 次：調査地は三の丸に該当する箇所であり、事務所の建設に伴い、約 16 ㎡の内容確認調査が実施された。調査では、一部近代の撹乱により破壊されているものの周囲には江戸時代の遺構面が展開していることが判明した。出土遺物としては、近世の国産陶磁器がある。

市 18 次：調査地は三の丸の範囲に位置し、文献資料では久野八兵衛上屋敷・上野七大夫屋敷地に当たる箇所を 2013 年度にビル建設に先立ち約 918 ㎡の調査を実施している。検出遺構は 17 世紀前半から幕末までの時期のもので、屋敷地の西端を限る塀を構成する２時期の柱穴や雨落ち溝、茶室が設けられていた可能性がある石敷や埋甕等も検出されている。また、下層調査では、平安時代から鎌倉時代の水田跡、古墳時代の包含層も確認している。

県１次:1996 年度に三の丸西部で､県営団地建設に伴い当文化財センターが調査をおこなった。調査面積は 990 ㎡で、江戸時代前期・後期、明治から第二次世界大戦期の３時期の遺構面が確認され、土塀基礎や礎石建物などが検出されている。

県２・３次：2001・2003 年度に三の丸京橋御門から一の橋門に至る大手道に沿う場所で、大学の跡地利用に係る調査を当センターがおこなった。調査区は大きくＡ・Ｂの２つの地区にわかれ、Ａ区は渡辺氏の、Ｂ区は御付家老安藤氏の屋敷地に相当する。調査面積は 712 ㎡で、江戸時代前期・中期・後期、明治から第二次世界大戦期の４時期の遺構面が確認され、礎石建物や井戸などが検出されている。

県４次:2007 年度に和歌山地方･家庭裁判所増築工事に伴って当センターが調査をおこなった。調査面積は 636 ㎡である。調査地は本丸の堀を隔てた東側、今回の調査の南東部に隣接する箇所である。上級家臣の屋敷地に相当する。調査では、中世の遺構面１面と近世の遺構面４面が確認されており、近世の屋敷の境界を画する土塀の基礎のほか井戸･石組溝などが検出されている。中世の遺構面では、柱穴や土坑など一般集落に係るものと思われる遺構が検出されており、和歌山城が築城される以前の資料として着目される。

県５次：2011 年度に和歌山地方・家庭・簡易裁判所の駐車新営工事に伴い当センターが発掘調査を実施した。調査面積は約 2,760 ㎡である。調査地は和歌山城の東側内堀を東に隔てた重臣達が居を構える三の丸の一角である。今回の調査の北側に隣接する箇所である。

絵図に見える武家屋敷地の４区画の調査を実施したが、屋敷地の生活面は残されておらず、災害にあう度に整地し直している。遺構は整地土や削平面の下で検出できる状況で、深く掘り込まれた井戸や溜桝、暗渠などの水回り施設や、柱穴、土坑等を検出している。

第３章　調査の方法

和歌山地方合同庁舎新築に先立ち、和歌山城跡の発掘調査を実施して遺跡の記録保存を行った。なお、発掘調査工事及び測量委託業務を付加業務として行った。

発掘調査工事（表土の機械掘削、包含層・遺構の人力掘削及び埋戻し等）は、入札の結果、株式会社古部組と請負契約を、測量委託業務（基準点測量、航空写真撮影及び図化）は、入札の結果、株式会社南紀航測センターと委託契約を締結して実施した。

発掘調査の実施に当たっては、公益財団法人和歌山県文化財センターの技術職員が発掘調査現場に常駐し、調査に係る指示、記録作業等を行った。

第１節　地区割りの設定

発掘調査の実施に伴う地区割りの設定に当たっては、隣接地の調査（和歌山地簡裁新築に伴う和歌山城跡発掘調査）の地区割りを踏襲した。

その地区割りは、平成 14 年国土交通省告示第 9 号により定められた東経 136 度 0 分 0 秒、北緯 36 度 0 分 0 秒を原点とする平面直角座標系第Ⅵ系を使用した方法である。和歌山城跡を包括する原点 X= － 195.000，Y= － 75.000 を起点とした 100 ｍメッシュに分割した大区画、その大区画を 4 ｍメッシュに分割した小区画を設定し、この区画を元にしたグリッド名を使用して記録及び出土遺物の取り上げを行った。大区画は北東端を基点として西方向へ A ～ J、南方向へ 1 ～ 10 の記号を付し、これを組み合わせて区画名を表記する。また、小区画は大区画の北東端を基点として西方向へ a ～ y、南方向へ 1 ～ 25 の記号を付し、これを組み合わせて区画名を表記する。
なお、本調査区の大半は大区画 J13 にあたる。この地区割りにおいて、調査区は、J13 － a10 ～ t25 グリッド、J14 － a1 ～ s1 グリッド、I13 － y16 ～ y25 グリッド、I14 － y1 グリッドに含まれる。

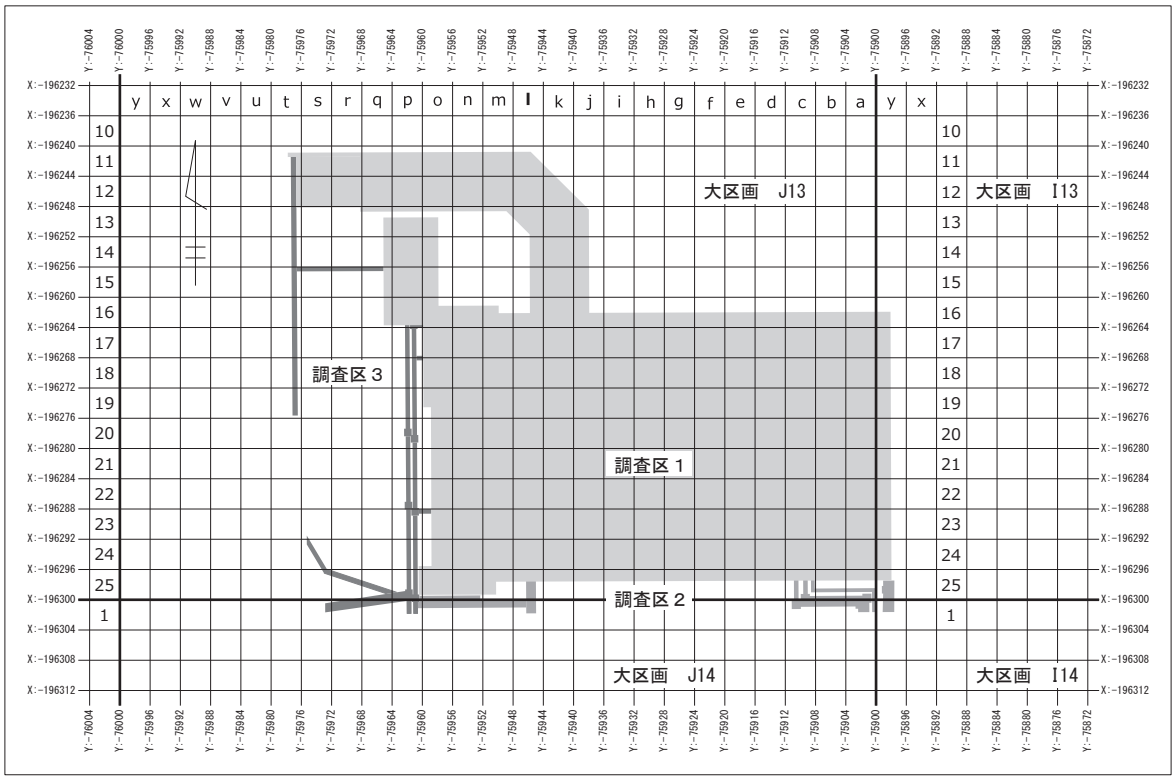


図６　和歌山城発掘調査　グリッド図　1/1000

第２節　調査区

調査区は、その開発深度から、全遺構面の調査が必要な調査区１（庁舎本体部分）、第２遺構面までの調査が必要な調査区２（配管部）、第３遺構面までの調査が必要な調査区３（配管部）に分割して調査を実施した。

調査区１は、約 35 ｍ×約 60 ｍの庁舎本体部分と幅約 8.0 ｍ、延長約 65,0 ｍのスロープ部分からなる。

調査区２は庁舎本体部分（1 区）の南側外を巡る配管部であるため狭小な調査区が２箇所に分かれる。東側を２－１区、西側を２－２区とした。

２－１区の調査区の幅は約 2.0 ～ 3.8 ｍ、延長約 7.0 ｍの狭小な調査区である。２－２区も 1.7 ～ 1.8 ｍと調査区の幅が狭く、延長は約 15 ｍである。

調査区３も配管部であり、庁舎本体部分（1 区）の西側に位置する。この調査区も調査区２と同様に調査区の幅が狭小で、４箇所に分かれる。

南側の東西方向を３－１区・３－３区、北側の南北方向の２箇所を３－２区とした。更に、３－２区を東側配管部、西側配管部と呼称して調査を行った。

３－１区の調査区幅は 0.9 ～ 1.1 ｍ、延長約 10.4 ｍである。３－３の調査区幅は約 1.35 ～ 1.75 ｍ、延長約 10.4 ｍである。

３－２区の東側配管部は、調査区幅 1.7 ～ 2.0 ｍ、延長約 37.40 ｍで、西側配管部は調査区幅 1.0 ～ 1.3 ｍ、延長 26.30 である。

調査面積は、１区の庁舎本体部分と２区・３区の配管部を合わせ 2,824　㎡である。

第３節　調査の手順

諸事情により配管部の調査を先行して終了させる必要があったことから、まずは調査区２・調査区３の調査を実施し、これらの調査を終了した後に調査区１の調査を開始した。

掘削作業

記録作業

調査区１においては、表土・現代攪乱土を重機を用いて除去した後、人力によって慎重に包含層掘削、遺構検出、遺構掘削を行った。新築される和歌山地方合同庁舎により全ての遺構面が破壊されることから、第１遺構面から最終遺構面となる第４遺構面までの調査を実施した。人力掘削においては、調査で発生した排土についてはベルトコンベアを使用して場内に一時堆積を行い場外へ搬出・処分を行った。なお、当初計画では調査終了後の埋戻しが T.P. +1.7 ｍまでに留まっていたことから、埋戻しに必要な土量については場外に搬出せず、埋戻しに使用した。また、調査途中において、委託者である国土交通省近畿地方整備局による和歌山地方合同庁舎新築スケジュールの計画変更に伴い、当初以上の埋戻し土が必要となったことから国土交通省より支給を受けた土砂を使用し、一部について

埋戻しを行った。

調査区2・3においては、表土・現代攪乱土を重機により除去した後、人力によって慎重に包含層掘削、遺構検出、遺構掘削を行った。配管により遺跡の破壊される深度を考慮し、調査区2は第2遺構面まで、調査区3は第3遺構面までの調査を実施した。調査で発生した排土は場内で横置きし、調査終了後に埋戻しを行った。

第4節　記録方法

調査の各段階においては、遺跡の記録を取るため、必要に応じて写真撮影及び実測図作成を行った。

写真撮影においては、全体写真を大判（4in × 5in）カメラ、重要な遺構や土層堆積状況等を中判（6㎝× 7㎝）カメラ、その他35㎜カメラでリバーサル及びモノクロフィルム撮影を行った。なお、35㎜デジタル一眼レフカメラでは、各フィルム撮影と同様のアングル及び調査状況の写真を撮影した。

実測図作成においては、土層堆積状況図（1/20）、遺構配置図（1/40）、個別遺構図（1/20又は1/10）を手測りにより実施した。なお、遺構配置図については、縮小して遺構番号記入にも用いた。遺構完掘状況の平面図については、原則として航空写真測量（1/50）で作成した。重複関係にあった先行する時期の遺構等、航空写真撮影時に残存していない遺構については、遺構配置図（1/40）へ記録した遺構完掘状況や個別遺構図の内容を空中写真測量図に反映させた。土層堆積状況図については、各包含層・遺構面の把握とともに、標準土色帖（2013年度版）による土色及び土質の観察結果を記録した。

航空写真測量

なお、遺構検出においては、遺構の性格に関係なく連番で遺構番号を付与した。ただし、本報告書においては、性格を把握できた遺構については、遺構名称を付与した上で、遺構番号を併記している。

調査委員会

なお、上記のラジコンヘリコプターによる航空写真測量は第1面目の遺構面を2013年11月9日、第2面目を2013年12月12日、第3面目を2014年1月25日、第4面目を2014年2月22日に実施し、同日に、調査員による各遺構面の全景写真を大判カメラで撮影した。

また、2013年12月7日に現地説明会を開催し、約130名の参加者があった。2014年2月12・13日には調査委員会を開催し、現地で調査委員の先生方から調査指導並びに遺構・遺物等についてご教示・ご助言を得た。

現地説明会

第４章　発掘調査成果

第１節　基本層序

本調査においては４面の遺構面を検出した。土層の堆積は江戸時代の度重なる整地によって複雑になっているものの、第０層から第５層の６層に大別することができる。

調査に当たって把握した基本土層は次のとおりである。

第０層　現代攪乱土

第１層　礫混じり砂質土層を主体とする。この層の下面が第１遺構面である。近世及び近代の瓦・陶磁器類や煉瓦等が包含される。

第２層　礫混じり砂質土層を主体とする。この層の下面が第２遺構面である。近世の瓦・陶磁器類が包含される。

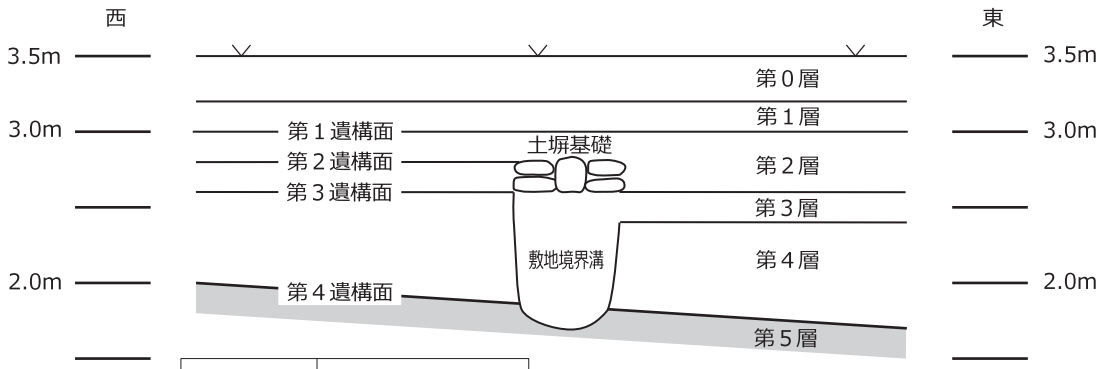
第３層　シルト層を主体とする。この層の下面が第３遺構面である。近世の瓦・陶磁器類が包含される。

第４層　砂層を主体とする。この層の下面が第４遺構面である。近世の瓦・陶磁器類が包含されるが、その量は第２層・第３層に比べ、極端に少ない。

第５層　粘土層を主体とする。無遺物層である。

なお、第１層・第２層は、大規模な造成・整地層であり、礫とともに、多くの遺物を包含する。

また、第３層の主体はシルト層であるが、第１層・第２層と同様の礫混じり砂質土層が混在する。第２層・第３層は、T.P.+3.0ｍからT.P.+2.5ｍまで、２時期に分けて計約50㎝の嵩上げ整地が実施されていることが判明した。一方、第４遺構面から第３遺構面までは、最大0.8ｍの嵩上げ整地が行われており違った様相を呈している。

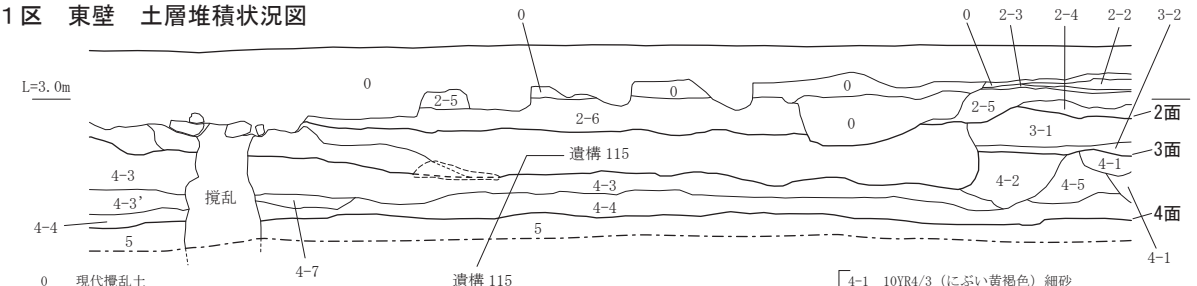


遺構面	標高（T.P.）	
第１遺構面	+3.0m	
第２遺構面	+2.8m	+2.6m
第３遺構面	+2.6m	+2.4m
第４遺構面	+2.0m	+1.7m

※第2遺構面・第3遺構面は、土部基礎及び敷地境界溝を境に標高が異なる。
※第4遺構面は、西から東に向けて、なだらかに下っている。

図７　基本土層模式図（1/50）

1区　東壁　土層堆積状況図



0　現代撹乱土

整地土第2層
- 2-2　7.5YR4/2（灰褐色）細砂、焼土粒多く入る
- 2-3　10YR4/2（灰黄褐）細砂
- 2-4　2.5Y4/4（オリーブ褐色）砂質
- 2-5　2.5Y4/3（にぶい黄褐色）細砂、土器細片・礫層入る
- 2-6　2.5Y4/4（オリーブ褐色）細砂、土器細片含む

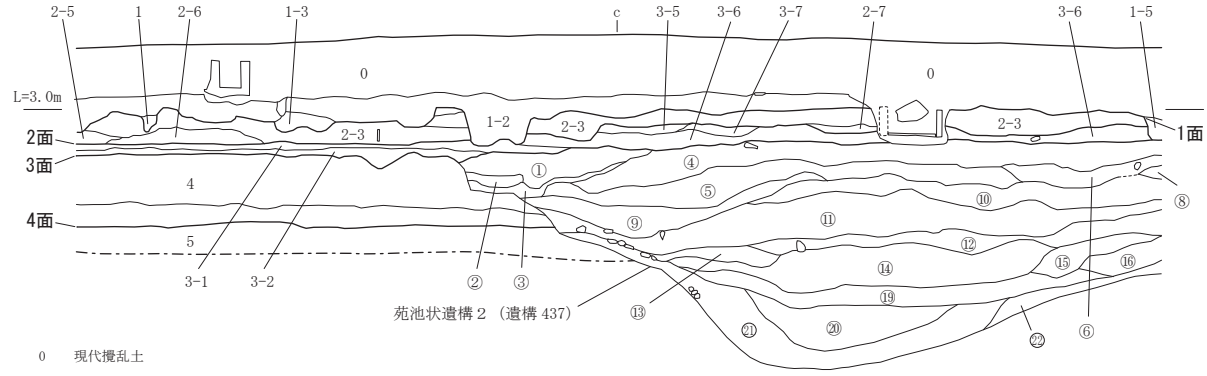
遺構 115
5YR4/3（にぶい赤褐）細砂、片岩片多量に含む

整地土第3層
- 3-1　5Y4/2（灰オリーブ色）細砂、シルト粒混じる
- 3-2　5Y4/3（暗オリーブ色）細砂、シルト粒混じる

整地土第4層
- 4-1　10YR4/3（にぶい黄褐色）細砂
- 4-2　10YR4/3（にぶい黄褐色）細砂、シルト粒混じる
- 4-3　2.5Y4/3（オリーブ褐灰色）細砂
- 4-3'　10YR4/3（にぶい黄褐色）細砂
- 4-4　2.5Y4/3（オリーブ褐灰色）細砂～シルト
- 4-5　10YR4/4（褐色）細砂
- 4-7　2.5Y5/2（暗灰黄色）細砂

5　ベース土 10YR5/3（にぶい黄褐色）細砂～シルト（無遺物層）

1区　南壁　土層堆積状況図



0　現代撹乱土

整地土第1層
- 1-1　2.5Y4/3（オリーブ褐色）砂質
- 1-2　2.5Y4/3（オリーブ褐色）砂質、5mm 大の礫やや含む
- 1-3　2.5Y4.5/3（オリーブ褐色）砂質
- 1-4　2.5Y4/3（オリーブ褐色）砂質、5mm 大の礫多く含む
- 1-5　2.5Y4/3.5（オリーブ褐色）砂質

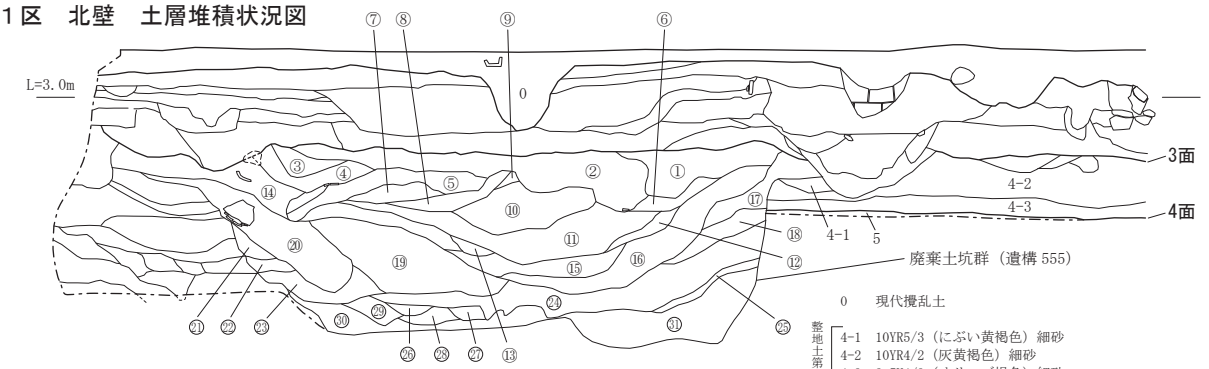
整地土第2層
- 2-3　2.5Y5/4（黄褐色）細砂
- 2-5　2.5Y4/6（オリーブ褐色）細砂
- 2-6　2.5Y4/3（オリーブ褐色）細砂
- 2-7　2.5Y4.5/3（オリーブ褐色）細砂

整地土第3層
- 3-1　5Y4/2（灰オリーブ色）細砂、シルト粒混じる
- 3-2　5Y4/3（暗オリーブ色）細砂、シルト粒混じる
- 3-5　5Y4/3.5（暗オリーブ色）粗砂・細砂
- 3-6　5Y4/2（灰オリーブ色）粗砂・細砂
- 3-7　5Y4/3（灰オリーブ色）粗砂・細砂、3-4 より若干明るい

5　ベース土 10YR5/3（にぶい黄褐色）細砂～シルト（無遺物層）

苑池状遺構２（遺構 437）
- ①　2.5Y4/4（オリーブ褐色）砂質、2～3mm 大礫多く含む
- ②　2.5Y4/4（オリーブ褐色）砂質、焼土粒を含む
- ③　2.5Y4/3（オリーブ褐色）粘質
- ④　2.5Y4/4（オリーブ褐色）砂質、1cm 大礫、焼土粒を多く含む
- ⑤　2.5Y4/3（オリーブ褐色）砂質、2～3mm 大礫を多く含む
- ⑥　2.5Y5/4（黄褐色）砂質、5mm 大礫、炭を多く含む
- ⑦　2.5Y5/4（黄褐色）砂質、5mm 大礫多く含む
- ⑧　2.5Y4/4（オリーブ褐色）砂質、炭を含む
- ⑨　2.5Y4/4（オリーブ褐色）砂質、炭を含む
- ⑩　2.5Y4/4（オリーブ褐色）砂質、5mm 大礫を多く含む
- ⑪　2.5Y5/4（黄褐色）粘質、5mm 大礫をやや含む、砂粒を含む
- ⑫　2.5Y5/3（黄褐色）粘質、5mm 大礫を多く含む
- ⑬　2.5Y4/2（暗灰黄色）砂質
- ⑭　7.5Y4/1（灰色）粘質、5mm 大礫・砂粒を含む
- ⑮　2.5Y4/2（暗灰黄色）砂質、2～3mm 礫を多く含む
- ⑯　5Y4/1（灰色）粘質、2～3mm 礫を多く含む
- ⑰　5Y5/2（灰オリーブ色）粘質、2～3mm 礫を多く含む
- ⑱　2.5Y4/3（オリーブ褐色）砂、5mm 大礫をやや含む
- ⑲　2.5Y4/1（灰色）粘土
- ⑳　2.5Y4/1（暗オリーブ灰色）粘土
- ㉑　7.5GY4/1（暗緑灰色）粘土
- ㉒　10GY4/1（暗緑灰色）粘土

1区　北壁　土層堆積状況図



0　現代撹乱土

整地土第4層
- 4-1　10YR5/3（にぶい黄褐色）細砂
- 4-2　10YR4/2（灰黄褐色）細砂
- 4-3　2.5Y4/3（オリーブ褐色）細砂

5　ベース土 10YR5/3（にぶい黄褐色）細砂～シルト（無遺物層）

廃棄土坑群（遺構 555）
- ①　2.5Y5/2（暗灰黄）砂～細砂
- ②　2.5Y5/2（暗灰黄）細砂、シルト、炭粒含む
- ③　2.5Y4/3（オリーブ褐）細砂
- ④　10YR5/3（にぶい黄褐）細砂～シルト
- ⑤　10YR3/2（黒褐）細砂、焼土粒入る
- ⑥　10YR5/2（灰黄褐）細砂～シルト
- ⑦　10BG5/1（青灰）粘質土
- ⑧　10BG5/1（青灰）粘質土
- ⑨　10YR3/2（黒褐）細砂、焼土粒入る
- ⑩　10BG4/1（暗青灰）粘質土、炭、木片、礫含む
- ⑪　10BG4/1（暗青灰）粘質土～シルト、細砂、木片・貝殻含む
- ⑫　10GY5/1（緑灰）細砂～シルト、風化礫ブロックで入る
- ⑬　2.5Y4/1（黄灰）シルト～細砂
- ⑭　2.5Y4/2（暗灰黄）細砂、シルト混じる
- ⑮　10BG4/1（暗青灰）木片多量に含む、貝殻含む
- ⑯　10GY5/1（緑灰）粘質土、木片多量に含む、貝含む
- ⑰　2.5Y4/2（暗灰黄）細砂、炭含む
- ⑱　10GY5/1（緑灰）シルト～細砂、木片含む
- ⑲　5Y4/1（灰）細砂～シルト、風化礫・礫粒含む
- ⑳　2.5Y4/1（黄灰）シルト～粘質土、礫・瓦多量に含む
- ㉑　10BG5/1（青灰）シルト
- ㉒　10BG5/1（青灰）シルト、10YR4/6（褐）細砂含む
- ㉓　10BG5/1（青灰）シルト
- ㉔　5GY5/1（オリーブ灰）シルト～粘質土、瓦・木片多量に含む
- ㉕　5GY5/1（オリーブ灰）粘質土
- ㉖　N4/0（灰）細砂、木片含む
- ㉗　5GY5/1（オリーブ灰）細砂～シルト
- ㉘　5GY5/1（オリーブ灰）細砂
- ㉙　10GY4/1（暗緑灰）細砂～シルト
- ㉚　N4/0（灰）細砂、10BG5/1（青灰）シルト少量含む
- ㉛　N4/0（灰）粘質土～細砂、木片多く含む（※木簡出土）

0　(1/80)　2m

図８　１区　東壁・南壁・北壁　土層堆積状況図（壁面基本土層）

第２節　調査区１の調査成果

調査区１は、新築庁舎の本体部分に当たる場所である。第１・２遺構面については、調査区の西半が和歌山地方検察庁旧庁舎による攪乱で検出できなかった。また、第３遺構面についても旧庁舎の独立基礎部分で大きな攪乱を受けていた。以下、遺構面ごとに検出された遺構・遺物について報告する。

なお、この節で記す遺物は土器類のみとし、瓦類、土製品、石製品、金属製品、木製品については第４節で記述する。また、出土遺物の詳細については遺物観察表を参照されたい。

第１遺構面は、整地土第１層を除去後検出した。整地土第１層からの出土遺物は１～６である。1・3～５の江戸時代後期の肥前系磁器に混ざって昭和と思われる鉢（２）や猪口（６）なども出土しており、底部に酒造メーカー名が記されている。

１　第１遺構面（図９、図版２）

遺構面の標高は、全面 T.P.+3.0 mであり、傾斜はなくほぼフラットである。

調査区西半では和歌山地方検察庁旧庁舎の攪乱が大きく、遺構がほとんど確認できなかったが、水琴窟２基、瓦積井戸２基、柱穴列１列、集石遺構２基、溝５条、ピット 29 基、土坑 37 基、大型土坑３基が検出された。

遺構面の時期としては、屋敷地境界が確認できず遺構面がフラットな状況から見て一体的な土地利用がされていたと考えられることから、調査区一帯が佐野家の屋敷地となった 19 世紀前半以降と考えられる。また、遺構面上に焼土層の堆積が見られることや遺構面そのものが被熱を受けている場所があることから、昭和 20 年の和歌山大空襲まで同一の面であったと考えられる。

以下、代表的な遺構について報告する。

和歌山大空襲時の焼土（図９、図版３）

調査区北端のスロープ部の東側（ｊ 12～ｌ 14 グリッド）で集中して検出された焼土層である。焼土層の厚さは最大で約 0.2 mを測り、第１遺構面を覆うように堆積し、煉瓦片等の近代遺物が包含されていた。また、その直下の第１遺構面のベース層では地盤そのものが被熱していた。このことから堆積焼土は昭和 20 年７月９日の深夜から 10 日未明にかけてのアメリカ軍による和歌山大空襲の焼土が空襲後に集積されたものと考えられる。

なお、この面からは戦災遺物を含むゴミ穴が多数検出され、ガラス瓶、碍子、ガラス、錠前、煉瓦、タイル、瓦等の戦災遺物が出土している。

水琴窟１（遺構 70）（図 10、図版３）

調査地北側のほぼ中央（ｎ 17・ｉ 17 グリッド）で検出した土坑状遺構である。掘形の平面形はほぼ円形を呈し、規模は直径約 0.55 m、残存の深さは 0.35 mを測る。土坑の上層は漆喰で覆い、焼締陶器製の底を穿孔した鉢を伏せて据えた遺構である。鉢の側面覆土は細砂混じりの灰色系のシルト層で漆喰下まで充填されていた。また、この層には瓦片も数片混ざっていた。鉢内には、廃棄した後に堆積したであろうと考えられる青灰色の細砂がベース面まで堆積していた。鉢を据えた面は焼土混じりの灰色系細砂で固められベース面とし、更に、この層の下には被熱した

平瓦が敷かれていた。以上の状況から、この遺構は手水鉢や蹲踞等の付帯施設およびその痕跡は確認できないが水琴窟遺構と考えられる。なお、被熱した平瓦であるが、これが意図的に置かれたものかどうかは判然としないが、鉢内の水漏れ防止のために敷かれた可能性もある。

７は底部を穿孔した丹波焼の鉢で、外面に粘土を貼付け加飾している。８は水琴窟の土坑内の西側から出土した瀬戸美濃系陶器の緑釉瓶掛である。胴部上方に獣面を貼りつけている。

水琴窟２（遺構 78）（図 11、図版３）

遺構 70（水琴窟１）のやや西側（ｉ 18 グリッド）で検出した。掘形の平面形は西側に攪乱坑があったため不整形となるが、当初は円形であったと考えられる。規模は直径 0.65 ｍ、深さ 0.30 ｍを測る。ここには底部を穿孔した擂鉢を伏せていた。また、土坑内には数点の漆喰片が散乱していたことから、遺構 70 と同様に上面は漆喰張りであったと思われる。また、擂鉢側面の覆土は灰色系の細砂により充填されており、遺構の廃絶後の埋土は灰色系の粗砂が堆積しており、最下層の堆積土には焼締陶器の甕底部破片が遺存していた。この最下層の西端は斜め外方に下がっており、水抜き穴の痕跡とも考えられる。なお、伏せた擂鉢には使用痕は余り認められず、使用済みの擂鉢を転用したものでないと考えられる。この遺構も手水鉢や蹲踞等の付帯施設あるいは痕跡などは確認されなかったが、擂鉢底部の穿孔と逆位設置の状況から水琴窟の遺構に関連する施設であると考えられる。

９～ 12 は水琴窟坑の範囲を確認するために設定したサブトレンチから出土した遺物である。９・10 は土師器小皿である。双方共に胎土は精良で、口縁部には灯明の痕跡はない。11 は唐津碗の口縁部である。12 は口縁部が玉縁状となる備前焼の鉢である。

14 は底部を穿孔し、伏せられていた堺擂鉢である。13 は擂鉢の下に受けるような状態で出土した焼締陶器甕の底部破片である。丹波焼と思われる。

柱穴列１（遺構１～ 4）（図 10、図版３）

空襲時の焼土堆積箇所の南側で検出した柱穴列である。南北方向に４基の根石を充填した柱穴を検出した。掘形の規模は 0.65 ～ 0.95 ｍの範囲のもので、残存の深さは 0.15 ～ 0.20 ｍを測る。根石は 0.05 ～ 0.30 ｍと様々な大きさで、根石除去後の柱穴の断面形状は舟底状を呈する。規模は、南北の芯（遺構１）から芯（遺構４）までの距離は 6.88 ｍを測り、この間は３間である。各々の柱間は南から 1.94 ｍ、1.94 ｍ、3.0 ｍを測る。調査区外の東側に延びて建物を構成する可能性も考えられるが、今は１列の並びのみの検出のため屋敷地内の区画施設の一部と捉えておく。遺構１・２・４からは肥前系磁器の細片が出土している。

15 ～ 17 は遺構４の柱穴からの出土遺物である。15･16 はプリント図柄の肥前系磁器で、15 は皿、16 は小杯である。17 は堺・明石系擂鉢の底部破片である。

瓦積井戸１（遺構 87）（図 12、図版３）

ｆ 17 グリッドで検出した瓦積み井戸である。掘形の平面形状はほぼ円形で、1.14 ｍ× 1.04 ｍを測る。井戸枠の瓦積みの直径は 0.75 ｍを測る。井戸枠の平面形状は円形で、縦 27 ㎝、横 23 ㎝、厚み約 3.0 ㎝の専用瓦を使用して一周８枚で構成している。掘形、井戸枠ともにほぼ垂

直に掘削されている。井戸枠と掘形の間にはＴ．Ｐ．＋1.5ｍ付近までは粗砂と細砂を互層に、Ｔ．Ｐ．＋1.5ｍ以下は粗砂で充填している。

井戸枠内は、コンクリートブロックや瓦礫で充填されていた。構築時期は不明であるが、充填物に煉瓦やガラス、被熱した瓦も多く確認できたことから、戦前まで開口しており、和歌山大空襲の後片付けで埋められたものと考えられる。なお、Ｔ．Ｐ．＋0.9ｍの深さで水が滞水するため、それ以下の調査を断念した。瓦礫層の隙間で深さを確認したところ、Ｔ．Ｐ．－0.5ｍ付近までは井戸枠が構築されていると思われる。

ここからの出土遺物は瓦礫以外は皆無である。

瓦積井戸２（遺構 431）（図 12、図版３）

ｍ 17 グリッドで検出した瓦積み井戸である。この遺構の上部は旧検察庁旧庁舎の基礎で破壊されていたため、第３遺構面の検出となったが、本来は第１遺構面で検出すべき遺構であるためこの項で記載した。掘形の平面形状は円形を呈し、直径は約 1.0 ｍを測る。瓦積みの井戸枠の平面形状も円形で、直径 0.83 ｍを測る。残存する上部の４段目までは縦 28 ㎝、横 25 ㎝の専用瓦、それ以下については縦 25 ㎝、横 23 ㎝の専用瓦を使用して、一周 10 枚で構成している。掘形はほぼ垂直に掘削されているが、井戸枠は下部に若干小振りな瓦を使用することで徐々に内側に傾斜させている。その結果Ｔ．Ｐ．＋0.5ｍ付近では井戸枠の直径が 0.75 ｍまで小さくなっている。井戸枠と掘形の間には一貫して粗砂を充填している。

井戸枠内は瓦礫層で充填されていた。構築時期は不明であるが、充填物に被熱した瓦やガラス、煉瓦等が確認できたことから、この井戸も遺構 87 と同様に和歌山大空襲後の瓦礫整理のための一翼を担った戦災遺構であると言える。

18・20 は近代の遺物で、18 は樽型形状の磁器である。土産物の食料品用の容器と思われる。20 はガラス質の容器である。底部が安定感のある袋物になると思われる。19 は瀬戸美濃系の陶器で、内外面に透明施釉後、緑釉を流し掛けしている。器形は胴部下方が膨らむところからと思われる。

土坑状遺構（遺構６）（図版３）

ｋ 13 グリッドで検出した土坑状遺構である。東側は撹乱されていて形状は不明である。規模は南北約 1.75 ｍ、東西 0.6 ｍ以上を測る。残存の深さは 0.06 ～ 0.10 ｍと浅く、中央が最も深くなる。埋土は細砂～シルトで、炭を含み黒色味を帯び、焼土も少量含む。

21・22・24・25 は肥前系磁器である。21 は仏飯器である。杯部が欠損しているため染付の可能性もある。22 は染付の段重の蓋で、丸文を描く。24 は青磁の香炉である。25 は染付鉢で、外面に草花文を描く。23 は施釉陶器の小振りな蓋である。26・27 は褐釉施釉の徳利で、26 の外面には文字がヘラ描きされている。28 は堺・明石系の擂鉢である。

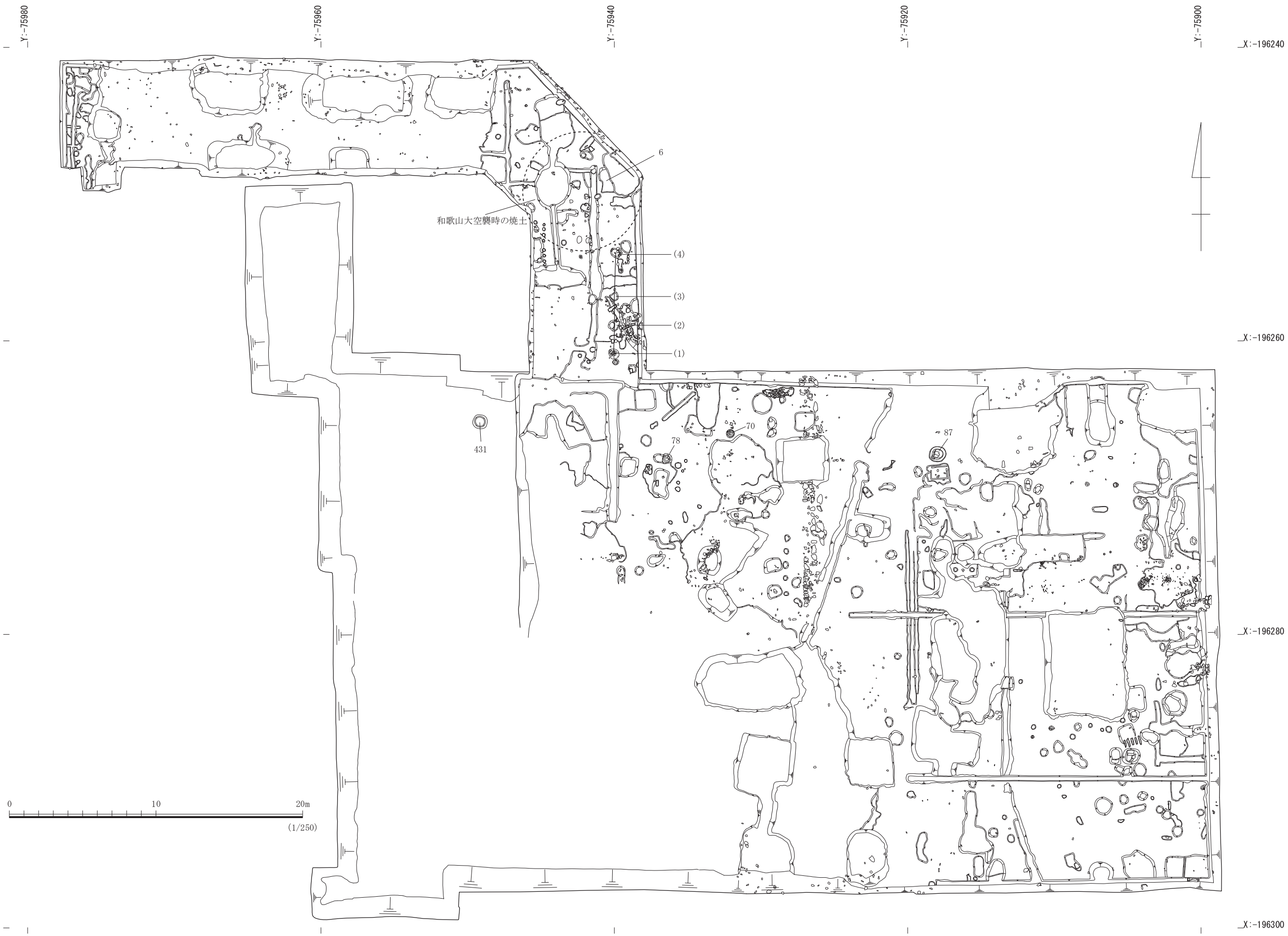
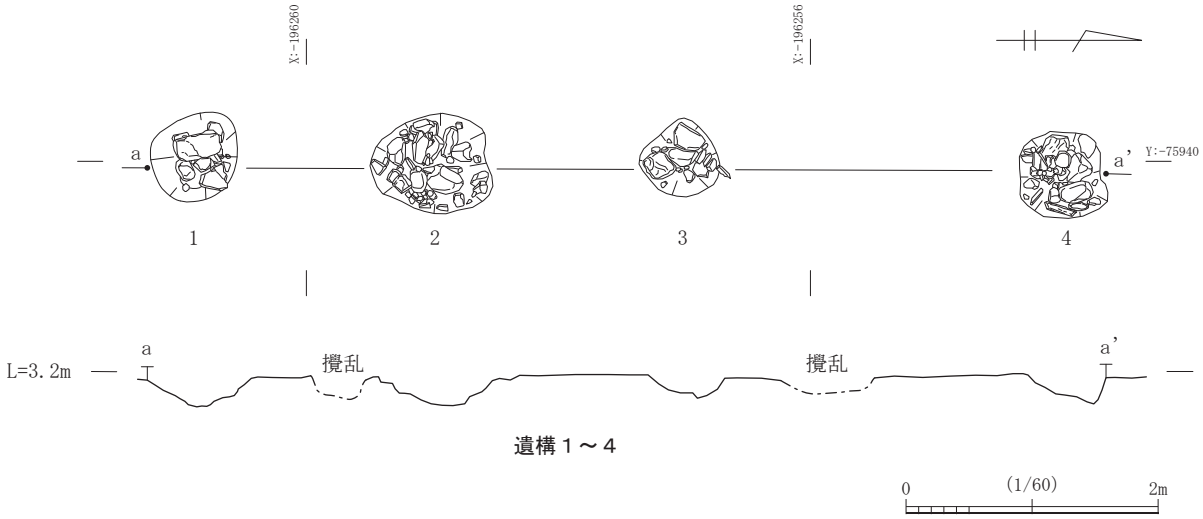
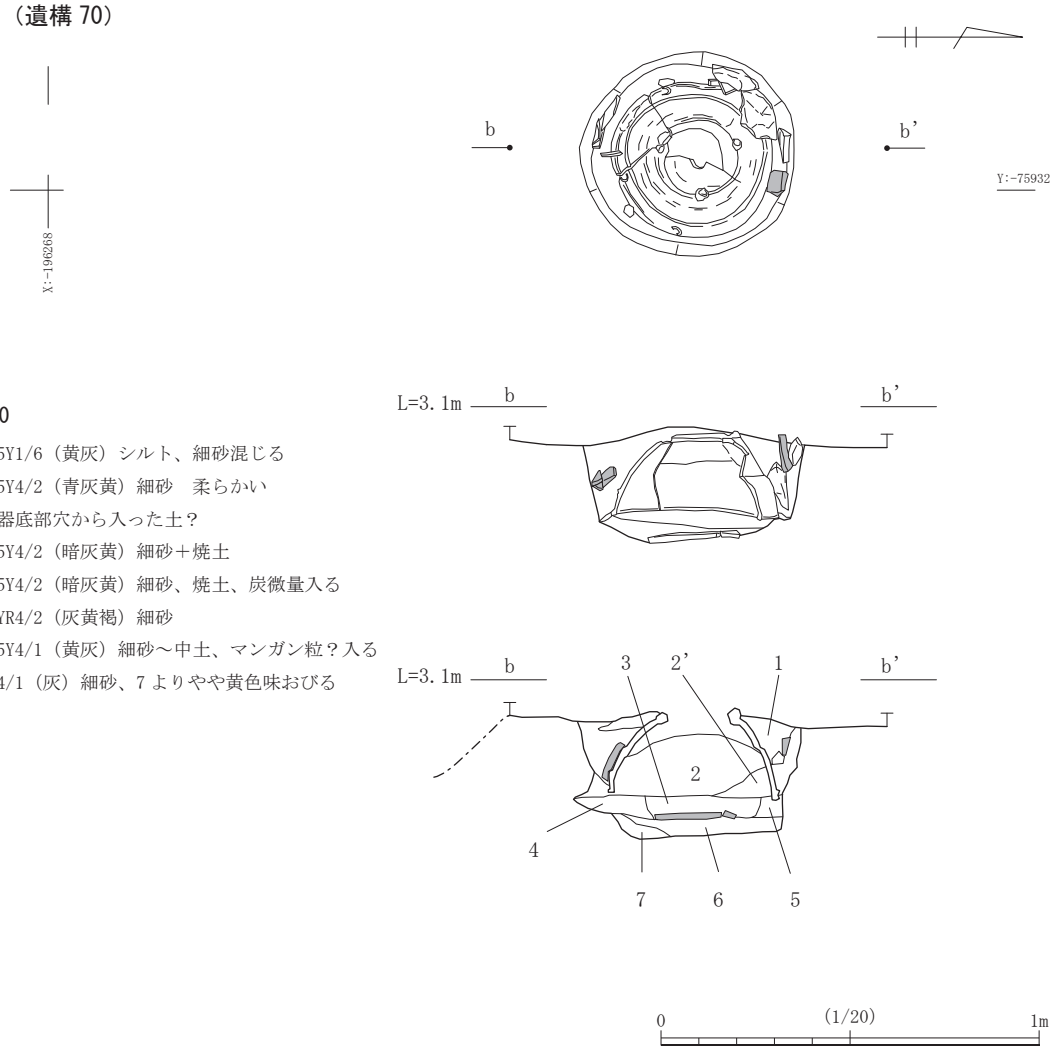


図９　１区第１面検出遺構平面図

柱穴列１（遺構１～４）



水琴窟１（遺構 70）

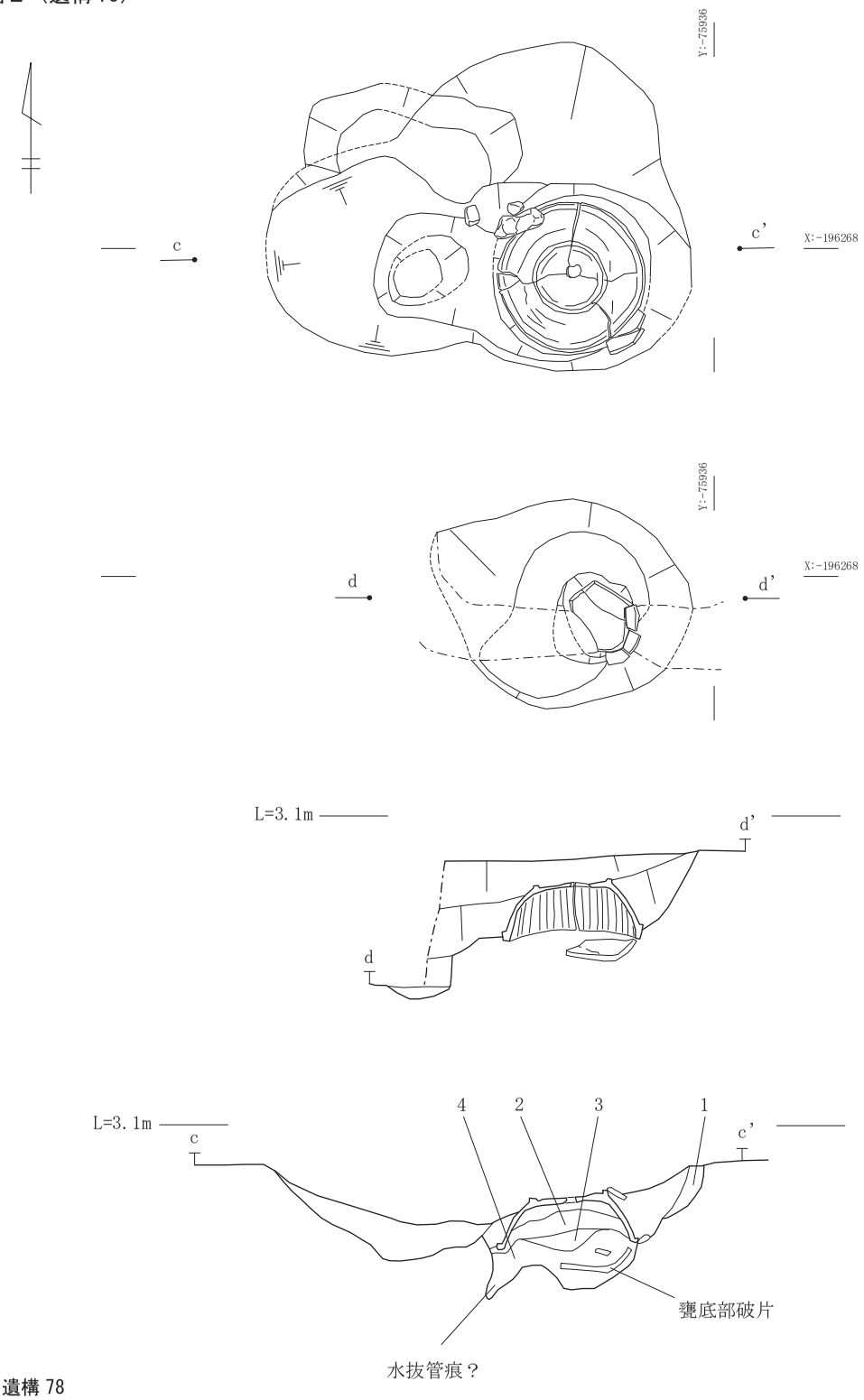


遺構 70

1　2.5Y1/6（黄灰）シルト、細砂混じる
2　2.5Y4/2（青灰黄）細砂　柔らかい
2’土器底部穴から入った土？
3　2.5Y4/2（暗灰黄）細砂＋焼土
4　2.5Y4/2（暗灰黄）細砂、焼土、炭微量入る
5　10YR4/2（灰黄褐）細砂
6　2.5Y4/1（黄灰）細砂～中土、マンガン粒？入る
7　5Y4/1（灰）細砂、7よりやや黄色味おびる

図１０　１区第１面　柱穴列１（遺構１～４）・水琴窟１（遺構 70）

水琴窟２（遺構 78）



遺構 78

1　2.5Y5/1（黄灰）細砂

（土器内埋土）

2　2.5Y4/1（黄灰）粗砂、中央付近１～2cm 大の石入る

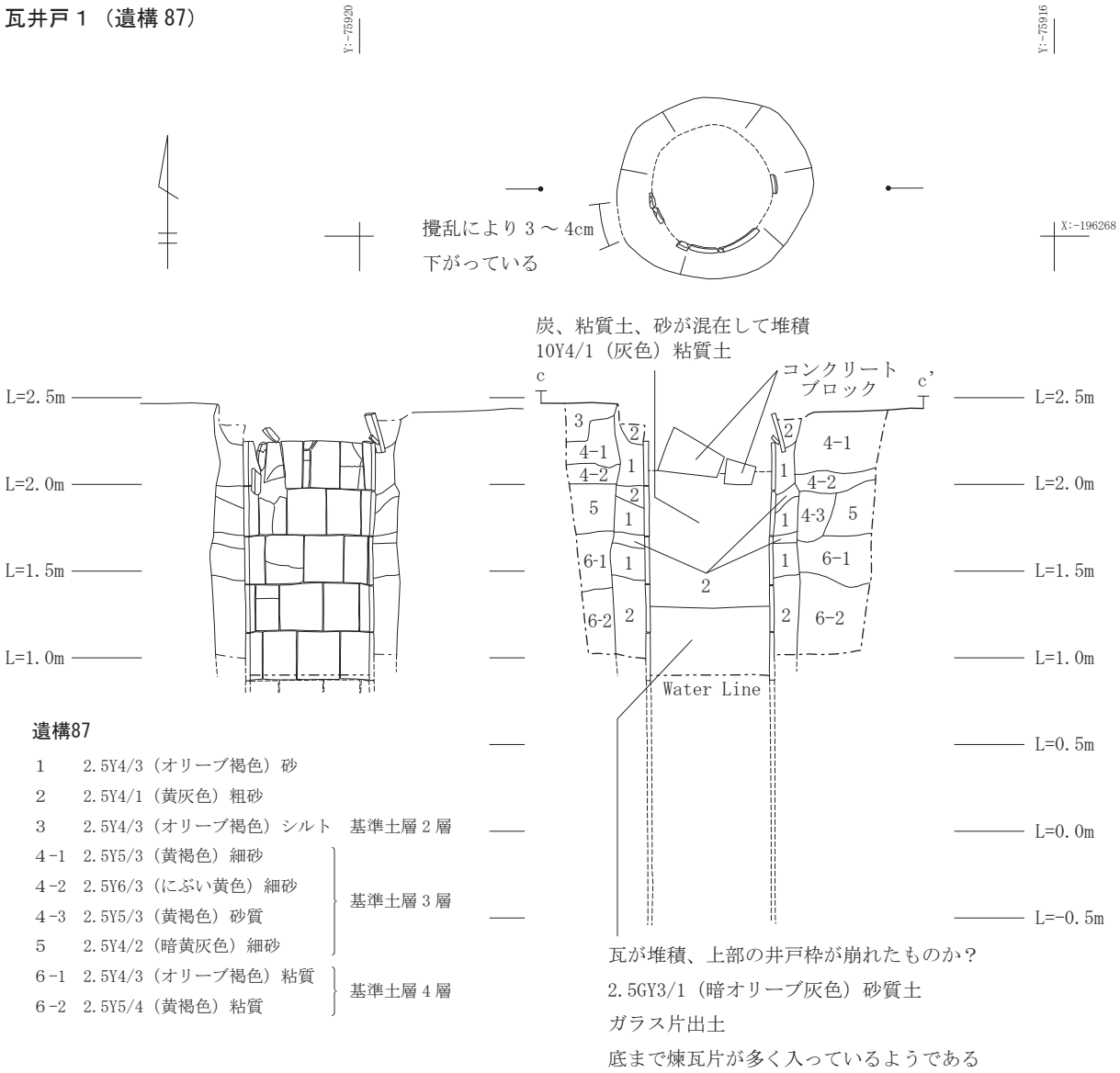
3　2.5Y4/2（暗灰黄）粗砂

4　2.5Y4/2（暗灰黄）細砂、柔らかい、マンガン粒ややシルト質土含む

0　(1/20)　1m

図１１　１区第１面　水琴窟２（遺構 78）

瓦井戸１（遺構 87）

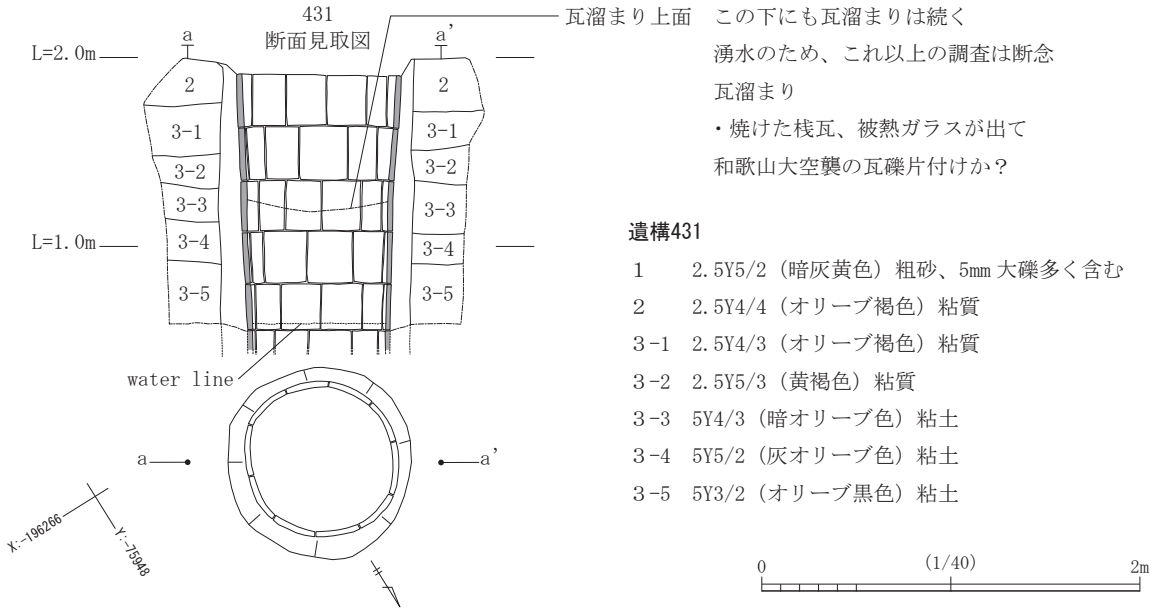


遺構87

1	2.5Y4/3（オリーブ褐色）砂	
2	2.5Y4/1（黄灰色）粗砂	
3	2.5Y4/3（オリーブ褐色）シルト	基準土層２層
4-1	2.5Y5/3（黄褐色）細砂	基準土層３層
4-2	2.5Y6/3（にぶい黄色）細砂	基準土層３層
4-3	2.5Y5/3（黄褐色）砂質	基準土層３層
5	2.5Y4/2（暗黄灰色）細砂	基準土層３層
6-1	2.5Y4/3（オリーブ褐色）粘質	基準土層４層
6-2	2.5Y5/4（黄褐色）粘質	基準土層４層

瓦が堆積、上部の井戸枠が崩れたものか？
2.5GY3/1（暗オリーブ灰色）砂質土
ガラス片出土
底まで煉瓦片が多く入っているようである

瓦井戸２（遺構 431）



この下にも瓦溜まりは続く
湧水のため、これ以上の調査は断念
瓦溜まり
・焼けた桟瓦、被熱ガラスが出て
和歌山大空襲の瓦礫片付けか？

遺構431

1	2.5Y5/2（暗灰黄色）粗砂、5mm 大礫多く含む
2	2.5Y4/4（オリーブ褐色）粘質
3-1	2.5Y4/3（オリーブ褐色）粘質
3-2	2.5Y5/3（黄褐色）粘質
3-3	5Y4/3（暗オリーブ色）粘土
3-4	5Y5/2（灰オリーブ色）粘土
3-5	5Y3/2（オリーブ黒色）粘土

図１２　１区第１面　瓦井戸１（遺構 87）・瓦井戸２（遺構 431）

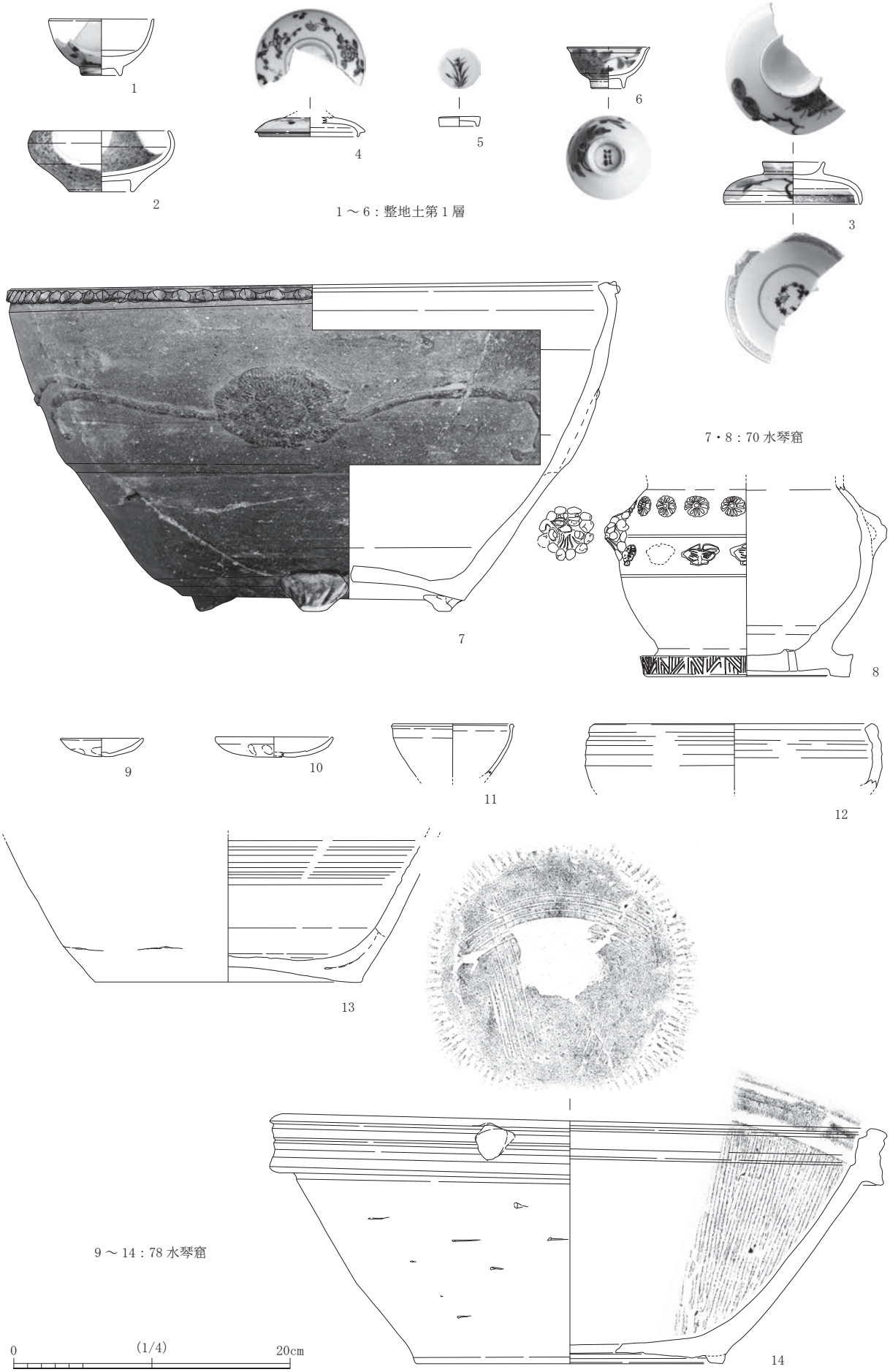


図１３　１区整地土第１層・第１面出土土器

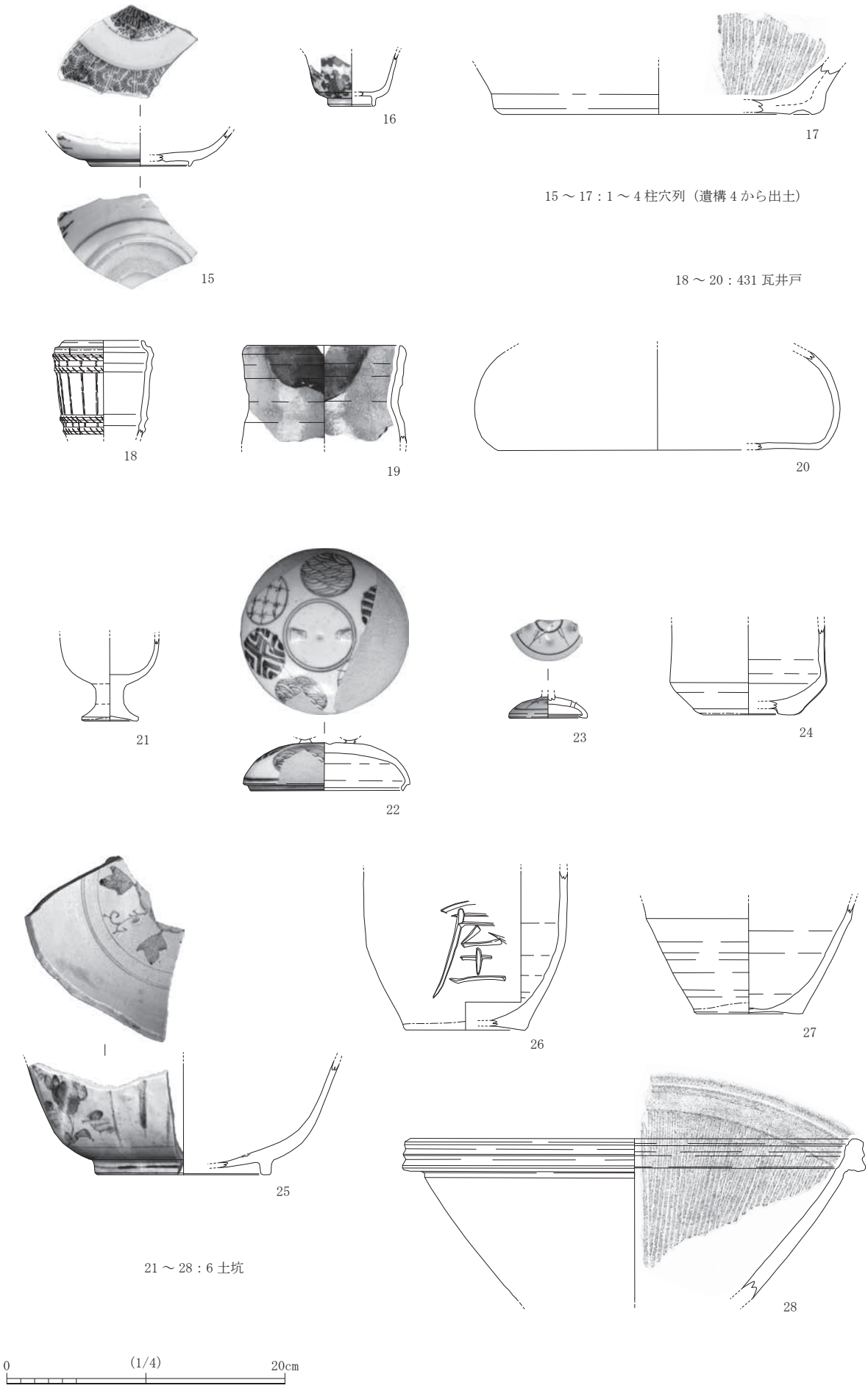


図１４　１区第１面出土土器２

２　第２遺構面（図 15、図版４）

遺構面標高は、後に述べる土塀基礎１（遺構 86）を境に西側が T. P. +2. 8 ｍ、東側が T. P. +2. 6 ｍであり、傾斜はなくほぼフラットな状況となる。

調査区東半では和歌山地方検察庁旧庁舎の攪乱が大きく、遺構がほとんど確認できなかったが、土塀基礎１基、雨落状遺構２基、礎石建物跡１棟、小礫敷き根固め柱穴２基、石敷遺構１基、通路状遺構１基、苑池状遺構１基、焼土充填土坑群１群、石列４基、集石遺構４基、瓦溜遺構２基、溝６条、ピット 58 基、土坑 69 基、大型土坑４基が検出された。

遺構面の時期としては、東西の屋敷地境界が検出されていることから、調査区東側に安藤家、西側に佐野家の屋敷地があった 18 世紀中頃から 19 世紀前半までが考えられ、出土遺物の時期とも齟齬はない。

第２遺構面は整地土第２層を除去して検出した。次に整地土第２層からの出土遺物について簡単に記す。

29 ～ 34 は肥前系磁器で、29 ～ 32 は染付で、29 は皿、30 は蓋、31 は腰が張るタイプの碗である。32 の碗は外側面に一重網目文を描く。33・34 は青磁染付の碗である。
35 は赤絵具と青絵具で加飾した京・信楽系の碗である。36・37 は肥前系陶器である。36 は絵唐津向付、37 は底部糸切の小碗である。

38・39 は褐釉を施釉した土瓶の落とし蓋である。40 は染付の蓋で、小振りな瓶に伴うものか。41 は肥前系と思われる鉄釉の受皿の付いた灯明具である。42 は瀬戸美濃系の灰釉鉢である。43 は堺・明石系擂鉢である。

以下、代表的な遺構について報告する。

土塀基礎（遺構 86）（ 図 16、図版４）

ｇ 16 ～ｇ 20 グリッドで検出された南北方向の石列遺構である。検出幅は約 1. 4 ｍ、検出延長は基底部の残骸範囲をいれると 18. 4 ｍを測る。石列は３列に敷き並べられ、両側を 0. 15 ～ 0. 7 ｍ大の結晶片岩で外側に面を持たせている。中央の列には建物の礎板に使用するものと同様の 0. 4 ～ 0. 5 ｍ大の比較的平らな砂岩を並べている。なお、中央の砂岩は１石である一方、両側の結晶片岩は１石或いは２石の石垣状を呈している。以上の状況から、この石列遺構は土塀の基礎と考えられ、中央列の砂岩には柱間２ｍ弱で芯柱が据えられ、当初の両側の石積みはもう少し高く積まれ、上面は扁平となっていたものと思われる。

先にも遺構検出面の高さで触れたが、この石列を境にして東側と西側は標高が約 0. 2 ｍの段差があることから、屋敷地を東側の屋敷地と西側の屋敷地を区画する南北方向の土塀基礎と考えられる。なお、屋敷地は違うものの、この遺構の北への延長を平成[注1)] 18 年度の和歌山地方・家庭裁判所の増築工事、および平成[注2)] 23 年度の和歌山地方・家庭・簡易裁判所の庁舎新設工事に伴う発掘調査で検出している。

出土遺物は少量の焼締陶器片、瓦片などが石列の間から出させている。

注１）　和歌山城跡 －和歌山地方・家庭裁判所増築工事に伴う発掘調査報告書－　2008 年３月　財団法人和歌山県文化財センター
注２）　和歌山城跡 －和歌山地家簡裁庁舎建設に伴う発掘調査報告書－　2015 年３月　公益財団法人和歌山県文化財センター

落ち込み状遺構（遺構 96）（図 17・18、図版６）

調査区の東側全般で廃棄したと考えられる落ち込み状遺構を検出した。調査当初は、遺物が多量に出土することから廃棄土坑として遺構扱いにしていたが、調査を進めていく過程で、埋土がオリーブ褐色系の細砂混じりのシルトで、基本層序第２層に類似することと、範囲が判然とせず、調査区の南北両端に達し大きすぎることなどから、第１遺構面構築の際の整地土と判断した。範囲はグリッドで示すと、北はａ 16 ～ｅ 16、南はａ 24 ～ｅ 24 グリッドまでである。また、この落ち込みの埋土を掘削中に通路状遺構（遺構 244）、石列１（遺構 211）を検出した。

ここからの出土遺物は多種多様で、肥前系陶磁器、瀬戸美濃系施釉陶器、京･信楽系施釉陶器、灯火具の灯明皿・灯明受け皿・秉燭、土師質土器、瓦質土器、焼塩壷などの土器類、他に、金属製品としては槍先、鎌、釘、木製品では下駄、用途不明加工部材、板材などがある。また、瓦類も多量に出土し、貝類では蛤も数枚出土している。

44 ～ 50 は土師器の灯明皿である。44 ～ 48 は内面に透明釉を施釉する。49 は無釉で、見込み中央部を内側に膨らませ、周囲を油溜としている。50 も無釉である。

51 ～ 53 は土師器の灯明受皿で、内面に透明釉を施釉している。54 は灯明皿で外底部に指頭痕跡顕著である。55 は無釉の秉燭である。56 ～ 58 は施釉陶器の灯明受皿である。
59 ～ 69 は肥前系染付磁器の皿である。59・60 は同タイプの皿で、61・62 は蛇の目凹型高台の皿である。63 は小皿である。64 ～ 69 は器壁が肉厚で、内面は蛇の目釉剥ぎとなる。70 は白磁の稜花皿である。

71 ～ 80 は肥前系磁器の蓋である。71 ～ 78 は染付で内外面に文様が描かれている。79・80 は青磁染付で、双方共に内面には四方襷と五弁花を描く。

81 ～ 102 は肥前系磁器の碗である。81 ～ 89･92 ～ 96･98 ～ 102 は染付で、90･91 は青磁染付、97 は白磁である。この内、81 ～ 85 は丸碗形態、86 は大振りの碗、87・88 の口縁部はやや外反する。89 は筒茶碗の形態を呈する。92 ～ 96 は小碗で、内面は無文で、外面の絵付けも控え目である。97 は白磁としたが染付の可能性もある。98 ～ 101 は広東碗である。102 は高台際の外底部に強い段を有する碗である。底部のみ遺存のため形態は不明である。

103 ～ 120 も肥前系磁器で、107・114 の白磁以外は染付である。103 は蕎麦猪口、104 は段重の一部、105 は小鉢、106 は紅猪口、107 は紅皿である。108 は芙蓉手の鉢で、窓絵には花卉文を描く。109 ～ 112 は蓋で、109 は壷、110 は合子、111 は小壷の蓋となるものと思われる。112 は何の蓋か不明である。113 は仏飯器、114 はままごと道具の鉢か。115 は内面無釉であることから香炉とした。116 の外面上半は青磁で、内面は無釉である。灰落としと考えられる。117 は蛸唐草文の油壷である。118 ～ 120 は瓶である。

121・122・124・125 は肥前系陶器の碗である。何れも高台は土見せとしている。123 も肥前系陶器の瓶で、体部下半まで施釉され、内面は無釉である。126 は瀬戸美濃系と思われ、体部が斜め上方に立上る碗である。白色系の釉で施釉される。127・128 は京・信楽系の灯明皿である。

129 ～ 132 は京・信楽系の碗である。133 は瀬戸美濃系と思われる碗である。134 は肥前系の碗である。

135 は京･信楽系の碗である。136 は瀬戸美濃系の碗である。137 は京･信楽系の稜花皿である。138 ～ 140 は瀬戸美濃系陶器で、140 は蓋で、鉄釉で絵付けされている。139 は輪花皿、140 は丸

碗である。141 は肥前系陶器の盃である。142・143 は瀬戸美濃系陶器で、142 は灰釉の盃、143 は片口である。

144・145 は褐釉の土瓶の落とし蓋である。146 は雪平鍋の把手部分である。147 は丹波焼の徳利で、鉄釉が施釉される。148 は鍋である。外面体部下半に多量の煤が付着する。149 は瀬戸美濃系の鉢である。150 は秉燭で褐釉を施釉する。151 は堺・明石系の擂鉢である。152 は瀬戸美濃系の植木鉢、153 は京・信楽系の徳利で、底部に「ニト」墨書が確認できるが意味不明である。154 は内外面に褐釉を施釉した美濃瀬戸系の甕である。155･156 は土師質土器で 155 は五徳、156 は風炉である。157 は瓦質の火鉢で、底部に４足を貼りつける。158 は焚口が引戸方式の焜炉である。外面はよく磨かれている。159 は管状土錘である。160 ～ 162 は瀬戸美濃系で 160 は緑釉を施釉した鉢、161 は長石釉を施釉した水鉢、162 は灰釉水甕である。

苑池状遺構１（遺構 212）（図 19、図版５）

調査区東端中央、ａ 20・ａ 21 グリッドで検出した落ち込み状遺構で、東側は調査区外に延びる。規模は南北約 7.8 ｍ、東西約 4.6 ｍ以上を測る。深さは約 0.3 ｍを測る。遺構内の南側寄りには瓢箪型に石を巡らせて島状にした箇所や一部分ではあるが 0.5 ～ 2.0 ㎝大の玉砂利を敷いた範囲を検出した。島状の高まりは 0.8 ～ 1.0 ｍの幅で、表面に板状の石材を配し、肩部は石で護岸をしていた様子が見て取れる箇所があった。また、北西部では北側に付出した箇所もあり、南北約 1.2 ｍ､東西約 1.1 ｍのほぼ円形の土坑状となり､上層は５～ 15 ㎝の細かい石を敷いていた。土層の堆積状況は１～８層まで認められ、１～４層は砂質土、５～８層はシルトおよび粘質土となっていることから、１～４層上には甕等が設置されていた可能性もある。このことから武家屋敷の庭園の苑池跡と考えられる。この遺構は、この時期に当所にあった安藤家屋敷地の庭園跡と考えられる。屋敷地のほぼ中央部分にあたることから、中庭であった可能性が高い。

出土遺物には土師器皿、肥前系陶磁器、瀬戸美濃系施釉陶器、焼締陶器などの土器類の他、瓦類では軒丸瓦、軒平瓦、平瓦など、他には塼や鉄釘がある。

163・164 は土師器皿で灯明皿として使用されている。165 ～ 168 は肥前系陶器の碗である。165 は刷毛目唐津、166・167 は灰釉、168 は褐釉を施釉している。169 は瀬戸美濃系の灰釉内禿皿である。

焼土充填土坑群（遺構 115）（図 21・22、図版６）

調査区の南東隅､ａ 22 ～ａ 24 グリッドで検出した土坑群である｡検出した際は南北長約 8.0 ｍ、東西長約 2.5 ｍの楕円形遺構であったが、精査の過程で複数の土坑が連なっていることが判明した。土坑は大小合わせて８基を検出したが、調査の状況から東側の調査区外に延びる可能性も十分ある。残存深さは最も深いもので約 0.6 ｍを測り、埋土には分層は出来るものの一貫して焼土で充填されていた。詳細には細砂、焼土、炭、礫が混在した状況で入っていることから一括で埋められたものと思われる。

遺構の性格としては、形状的に廃棄土坑のような不整形な土坑であることや焼土で充填されていたことから、火災の後片付けの可能性が高いが、焼土以外の遺物が殆ど出土しないため明確でない。掘削深度が第３層のシルト層まで至っていることから粘土採掘坑の可能性も考えられる。

ここからの出土遺物は遺構規模の割には少量ではあるが土師皿、肥前系陶磁器、中国製磁器、焼締陶器、瓦類、金属製品の千枚通し、鉄釘、砥石片などがある。

170～172は土師器の皿である。170･171は白色系で器壁は薄い。172は赤味を帯び､器壁が厚く、側面は強い横ナデにより口縁端部が肥厚する。

173～175は肥前系磁器の染付碗である。176・177は景徳鎮の青花皿である。178は肥前系磁器の皿である。内底面に松が大きく描かれる。179は肥前系青磁の腰折れ皿の口縁部破片である。180は肥前系青磁の合子の身である。181は肥前系染付磁器の壺の蓋と思われ、摘み部分は欠損しているため突起状になるのか環状となるのか不明である。182も肥前系の白磁の蓋で、口縁部を欠き、摘みは球体の突起状をなす。

183は刷毛目唐津の鉢の口縁部破片である。184～186は瀬戸美濃系陶器である。184は碗の底部、185・186は灰釉皿である。187は焼締陶器で器形は不明である。188は土瓶の底部で、混入遺物か。189は鉄釉を施釉した蓋で､瀬戸美濃系と思われる。190は備前焼壺の底部破片である。191は鉢形態の瓦質土器である。

通路状遺構１（遺構244）（図24・25、図版７）

ａ19～ｄ19グリッドで検出した幅約1.2ｍの両側に海鼠壁用の瓦を立て並べて範囲を限っている遺構である。検出長は、遺構の重複や上面からの撹乱などがあるものの、東西約10.7ｍである。立て瓦に挟まれた部分の土は、砂質土にシルトが混ざり周囲より固く締まっていることから、通路として使用されたと考えられる。この遺構の南側には、立瓦に並行して内側に面をもった溝状となる石積みが整地土上に配されていた。性格としては通路際に設けられた排水溝、もしくは南側で検出した中庭（苑池状遺構212）とを区画する塀の雨落ちの可能性が考えられる。溝状遺構の側石は0.15～0.3ｍ大の砂岩が１石あるいは２石が遺存していた。これらの遺構は、検出した地点から推し量るに、この時期に当所にあった安藤家屋敷地内の動線計画に基づいた一端と考えられる。

通路状遺構１周辺の遺構（遺構127・181・234・238）（図25、図版７）

遺構127は通路状遺構１の南側で検出した土坑状遺構である。平面形状は楕円形を呈し、長軸1.35ｍ、短軸1.15ｍを測る。残存の深さは0.1～0.24ｍを測り、埋土は３層に分層でき、何れも細砂混じりのシルトに焼土塊を含む。底には0.05～0.15ｍ大の礫が敷かれた状態で検出された。この遺構からは国産陶器の破片が１片と平瓦片が１片出土している。

遺構181は通路状遺構１の上面で検出した遺構である。平面形状はほぼ円形を呈し、直径は1.1ｍ～1.2ｍを測る。残存の深さは0.18ｍを測り､埋土は細砂混じりのシルトの単一層である。埋土中からは、砂岩の割石と瓦片が多量に出土している。これらは投棄されたものか、意図的に埋められたものかは判然としない。この遺構からは肥前系陶磁器、灯明皿、行平鍋、土瓶、焙烙、塼、平瓦片などが出土している。

192は土師器の皿である。193～197は肥前系染付磁器で､193･194は碗､195は浅鉢､196は鉢、197の高台脇は水平に横に延びていることから皿とした。

198は土瓶の蓋と思われる。199は鉄釉施釉の土瓶の口縁部、200は雪平鍋の底部、201は肥前

系大皿の底部である。202 は焙烙。203 の外面は白化粧土で施釉し、内面は無釉である。火入れとしたが、不確かである。

遺構 234 の平面形状は楕円形を呈し、長径 0.96 m、短径 0.65 mを測る。残存の深さは 0.08 mと非常に浅い。埋土は細砂にシルトブロックを多量に含む単一層である。底は平らとなる。
ここからの出土遺物は皆無である。

遺構 238 は長楕円形の土坑状遺構である。規模は長径 0.70 m、短径約 0.35 mを測り、残存の深さは約 0.15 mで、底は船底状となる。埋土は細砂混じりシルトがレンズ状に堆積し、２層に分層できる。ここからの出土遺物は皆無である。

大型土坑（遺構 101）

通路状遺構１の東側で検出した大型土坑である。この遺構は通路状遺構と重複し、東側は調査区外に延びているため全容は明らかでない。平面形状は、検出した範囲から推し量るに、円形ないし楕円形を呈するものと思われる。規模は南北長約 5.30 m、東西長 3.0 m以上を測る。残存の深さは、中央の最も深い箇所で約 0.95 mを測る。断面の形状は船底状となり、埋土は７層に分層でき、レンズ状の堆積を示す。埋土の土質は、上層から下層まで一貫して砂質土で、シルトに細砂・微砂が混じる。なお、堆積土の全てには炭や焼土、礫が含まれ、下層にいく程大振りの礫が入っている。この状況から、火事場整理のために掘られた大穴で、焼土などの見苦しいものを地中に埋めるために掘削された可能性が考えられる。

この遺構からは、肥前系磁器、瀬戸美濃系陶器、焼締陶器、土瓶などが出土している。
204 ～ 210 は肥前系磁器である。この内、204 ～ 207・210 は染付、208・209 は白磁である。204 は仏飯器の杯部で、印判により施文される。205・206 は半球形の碗である。207 は猪口である。210 は皿である。208 は猪口、209 は口錆の白磁稜花皿である。

211 ～ 213 は瀬戸美濃系の陶器で、211 は内外面を白化粧土で加飾する碗、212 は灰釉碗、213 は灰釉輪花皿である。214･215 は土瓶で、214 は褐釉を施釉、215 は青味を帯びた灰釉を施釉する。216 は褐釉施釉の鍋か雪平鍋の口縁部である。217 は備前焼の壺の底部である。218 は瀬戸美濃系の水鉢である。

焼土充填土坑群・石列１周辺の土坑状遺構（遺構 89・90・91・94・97・100・102・111・118・119・121・124・125・126）（図 23、図版７）

焼土充填土坑群（遺構 115）の西側、石列１（遺構 211）の南側で土坑状遺構を数多く検出した。これらの遺構についての性格などは判然としないが、調査で判ったことを記述する。

遺構 89 の平面形状は楕円形を呈する。規模は長径 0.85 m、短径 0.45 m、残存の深さは 0.16 mを測る。埋土は、黒褐色の細砂が２層に分層でき、炭や焼土を含む。
出土遺物には国産陶器の細片と平瓦片が微量出土している。

遺構 90 は不定形を呈する土坑状遺構である。規模は 1.65 m× 1.40 mで、残存の深さは 0.05 ～ 0.08 mと非常に浅い。埋土は灰黄色系の細砂混じりのシルトで、２層に分層でき、上層には焼土が含まれる。

この遺構からの出土遺物は皆無である。

遺構 91 の平面形状は菱形を呈する。長軸 1.5 m、短軸 0.88 m、残存の深さは 0.05 mと非常に浅く、底面は平坦になる。埋土は細砂混じりのシルトである。

出土遺物には肥前系磁器、京・信楽系碗などが出土遺している。

219 は肥前系磁器の丸碗の蓋で、捻れ線区画内に花弁文を描く。220 は京・信楽系の小杉碗である。

遺構 94 は長細い楕円形を呈する。規模は長軸 2.2 m、短軸 0.42 m、残存の深さは 0.13 mを測り、埋土は細砂の単一層で、焼土と礫を含む。

この遺構からは土師器皿片が１枚出土している。

221 は赤褐色を呈する色調の皿で、口縁部は強い横ナデ、底部はナデ調整を施す。

遺構 97 の平面形状は不定形を呈し、規模は 1.2 m× 0.9 mである。残存深さは 0.15 mを測り、埋土は上下２層に分層でき、双方の層に焼土や炭が含まれる。

ここからの出土遺物には肥前系陶器細片や灯明皿細片が出土している。

222 は唐津の刷毛目鉢で、口縁部が玉縁状となる。223 は甕の口縁部で褐釉を施釉する。

遺構 100・111 は重複し、遺構 100 の方が新しい。遺構 100 は不定形を呈し、規模は 1.2 m× 1.5 mで、残存の深さは 0.09 mを測る。

埋土の細砂混じりシルトからは肥前系磁器、土師器灯明受皿、土瓶の蓋、瓦片などが出土している。

224 は土師器の灯明受皿である。225 は肥前系の染付盃、226・227 は京・信楽系の碗である。228 は褐釉を施釉した土瓶の落し蓋である。

遺構 111 の南側は遺構 100 と重複しているため、全容は明らかでない。規模は 1.35 m以上を測る。残存の深さは 0.09 mと浅く、埋土は細砂混じりシルトの単一層である。

ここからは肥前系磁器、京・信楽系陶器の碗、灯明皿、桟瓦、鉄釘などの細片が出土している。

229・230 は肥前系の染付である。229 は口縁部が端反気味の碗、230 は蓋である。鈕は殆んど欠損しているが熨斗状のものである。段重の蓋か。231 は京・信楽系の碗である。232 は外面に褐釉を施釉し、体部面取りをした徳利である。

遺構 102 は調査区の南東隅で検出し、南側は調査区外に延びているため全容は不明である。

形状は検出した範囲においては四角形を呈する。規模は東西長 1.5 m、南北長 0.6 m以上を測る。埋土には焼土および小礫が含まれる。

この遺構からの出土遺物は皆無である。

遺構 118 は調査区東壁際で検出し、東側は調査区外に延びているため、全容は不明である。検出した範囲から、その形状は楕円形を呈すると思われる。規模は南北長約 1.0 m、東西長 0.46 m以上を測る。残存の深さは 0.04 ～ 0.06 mと窪みに等しい。埋土には僅かな焼土塊が含まれる。

この遺構からの出土遺物は皆無である。

遺構 119 は石列（遺構 211）に沿うように南側で検出した。この遺構の南側の平面形状はやや凹凸があるものの、全体的には長方形を呈する。規模は東西長約 3.7 m、南北長 1.2 ～ 2.0 mを測る。残存の深さは 0.14 ～ 0.22 mで、東端と西端がやや深くなる。埋土は４層に分層でき、細砂混じりのシルトおよび細砂となり、全ての層に焼土粒や炭片が含まれる。

このからは、肥前系磁器、瀬戸美濃陶器、焼締陶器、土師器皿、瓦類などが出土している。

233 ～ 235 は肥前系染付碗で、235 は広東碗である。236 は唐津焼の碗と思われるが、二次焼成を受け釉が爛れる。237 は瀬戸美濃系の天目茶碗、238 は京・信楽系の碗、239 は肥前系の青磁

の香炉で、３足の獣足が付くものと思われる。

遺構 121 は遺構 90 と重複し遺構 121 の方が古い。平面形状は円形で、直径 0.52 ｍを測る。残存の深さは 0.06 ～ 0.08 ｍと浅い。この遺構の埋土にも僅かではあるが焼土が含まれる。
出土遺物は皆無である。

遺構 124 は調査区の南東隅で検出した。この遺構の北側と南側は、上面からの撹乱のため不明となる。平面形状は長方形を呈すると思われる。規模は南北長 1.2 ｍ以上、東西長 0.85 ｍ、残存の深さは 0.16 ｍを測る。埋土は細砂の単一層に炭片と小礫が含まれる。
ここからの出土遺物は皆無である。

遺構 125 と 126 は重複し、遺構 126 の方が新しい。また、遺構 125 の東側は焼土充填土坑（遺構 115 - 8）と重複し不明である。遺構 125 の平面形状は、楕円形と思われる。規模は南北長 1.7 ｍ、東西長 0.8 ｍ以上を測り、残存の深さは 0.03 ｍと窪みに等しい。埋土には焼土を僅かに含む。
ここからの出土遺物は皆無である。

遺構 126 の平面形状は、南側に丸みをもって尖る雫形となる。規模は南北長 2.1 ｍ、東西長 1.4 ｍを測る。残存の深さは 0.12 ｍで、埋土は細砂混じりのシルトで、小礫や焼土が含まれる。

出土遺物は土師器細片が２片のみである。

石列１（遺構 211）（図 21、図版９）

ｃ 22 ～ｅ 22 グリッドで検出した幅約 0.7 ｍ、延長 5.4 ｍの石列遺構である。大きさ 0.2 ～ 0.5 ｍの砂岩と結晶片岩を混在させて並べ、両側に面をもつ。敷き並べられた石は欠損している箇所もある。この遺構は敷地を東西に区画する土塀基礎（遺構 86）に類似する。しかしながら、土塀基礎（遺構 86）よりは規模が小さく、絵図史料にもこの部分の区画が認められないことから、当所にあった安藤家の屋敷地内を区画していた土塀基礎の基底部の可能性がある。屋敷地内区画の在り方を検討する上でも良好な資料といえる。

土坑状遺構（遺構 104）（図 21、図版９）

ｄ 24 グリッドで検出した長楕円形を呈する土坑状遺構である。長辺約 1.45 ｍ×短辺 0.4 ｍの規模で、残存の深さは 0.1 ～ 0.2 ｍと北側へ深くなる。埋土は黄灰色の細砂層の単層で、炭片や焼土が混じる。

ここからは、図示はしていないが堺・明石系擂鉢の口縁部破片と土瓶の底部破片、他に肥前系陶磁器の細片が３、焙烙の細片１が出土している。

石敷遺構１（遺構 188）（図 26、図版９）

ｊ 17・18 グリッドで検出した。規模は南北 3.24 ｍ、東西の最大幅 1.40 ｍを測る石敷き遺構である。平面形状は不定形を呈し、約 0.1 ｍ大の細かく砕いた片岩を深さ 0.08 ｍと浅く掘り凹めた箇所に敷き詰め、平坦面を形成している。位置的には第１面で検出した水琴窟２（遺構 78）の西側、礫集積遺構１（遺構 192）の南側に位置しており、庭園等における排水施設に付随するものと考えられるが詳細は不明である。

この遺構からは土師質土器片（240）と肥前系陶器の皿（241）が出土した。

240 は底部糸切で、破片では灯明の痕がない。241 の内面に口唇部から４条の圏線が巡る。口縁部が数箇所黒ずむところから灯明皿として使用されていた可能性がある。

雨落状遺構（遺構 190）・礫集積遺構１（遺構 192）（図 27、図版９・10）

ｋ 14・15 グリッドで検出した溝状遺構である。この溝状遺構は、小規模な建物遺構の周囲を巡る雨落ち溝と考えられる。溝の掘形は、断面ほぼ台形状を呈し、幅 0.25 ～ 0.35 ｍ、深さ 0.08 ～ 0.25 ｍを測る。溝内には埋土に混じり、0.03 ～ 0.20 ｍ大の角礫や瓦片を敷き詰めている。建物の規模は、礎石等の遺構が検出されていないので検証することできないが、雨落溝とするならば、軒先の規模で言うと溝の中心間で東西長約 1.9 ｍ、南北長約 1.08 ｍを測る。また、溝の底面は北東から西側、南側へと傾斜が付いていることから、この遺構の東側で検出した排水路の残骸と考えられる礫集積箇所に流れ込んでいたものと思われる。また、溝で囲まれた部分は暗灰色系の土を若干盛ってマウンド状にしている。マウンド上には約 0.2 ｍ大の扁平な石が１石遺存していたが、これがこの遺構の礎石と成るかどうかは定かでない。

この建物については規模が余りにも小さいことや屋敷地の北側で検出したことから、氏神等を祀る祠が存在していた可能性も考えられる。

礫集積遺構の範囲は南北長約 3.4 ｍ、東西長約 2.2 ｍを測り、東側は調査区外となる。遺構検出を行うに当り、遺構を構成していないと思われる礫を除去した。次に精査を行い、規模を確認した結果、溝状の遺構を長さ約 1.6 ～ 2.0 ｍ、幅 0.15 ～ 0.32 ｍの細切れな状況で４条検出した。溝は遺構 190 と同様な堆積を呈するが、約 0.3 ｍの縦長の石が埋まっている箇所も検出した。このような石は溝の側石とも考えられる。溝は基本的には底の標高から北西から南東に流れていたものと思われる。この遺構は、形状が判然としないため、これの北および西に存在していた遺構からの排水路の一部と捉えておきたい。

ここからの出土遺物には焼締陶器片、肥前系陶器、丸瓦・平瓦の瓦類細片が出土している。

242 ～ 247 は肥前系磁器である。242 は染付仏飯器の杯部である。243・245 は染付碗である。246 は染付の蓋で、上面に細い線描きが僅かに遺存するが文様は不明である。鈕は欠損している。247 は色絵磁器の鉢と思われる。248 は土師質土器のミニチュアである。
249 は刷毛目唐津皿の底部破片である。250 ～ 253 は焼締陶器破片で、250 ～ 252 は丹波焼の甕の口縁部破片で、253 は堺・明石系の擂鉢である。

礎石建物跡１（図 29、図版 10）

ｋ 13・14 グリッドで検出した礎石建物である。砂岩石４石を南北方向に配した礎石列で、礎石は約 0.22 ～ 0.5 ｍ大のもので、北端のものと、北から３番目のものが大振りである。南北３間の距離は芯々間で 3.68 ｍを測り、柱間は北から 1.28 ｍ、1.60 ｍ、0.8 ｍである。なお、この礎石列の南側の２石は地盤が軟弱なためか根石を巻いている。この列と併行して 1.05 ｍ西側には 0.15 ～ 0.25 ｍ大の砂岩石の礎石列が並ぶ。この礎石列には既に礎石が喪失し、柱間の長い箇所も見受けられる。検出できた礎石は５石で、南北の距離は芯々間で 4.60 ｍを測り、柱間は北から 1.24 ｍ、2.24 ｍ、0.4 ｍ、0.72 ｍである。礎石には礎石として使用するために凹凸を打ち欠いたものや、赤く被熱し、柱痕跡が明瞭に残ったものもあり、火災を受けたことを示唆している。

礎石が検出できたのはこの辺りだけで、東側の礎石列に比べ西側の礎石列は小振りな石材を使用しているところから濡れ縁等が考えられ、建物の本体は東側に求めることができるが、この建物に伴う礎石は喪失していると思われる。

溝状遺構（遺構 218）（図 29、図版 10）

上述の礎石建物跡１と直行して検出した東西方向の溝状遺構である。礎石建物と重複し、礎石がこの溝状遺構の上に配されている。検出したのは延長 6.80 ｍで、東は調査区内で終息するが、西は調査区外に延びる。幅は約 1.60 ｍ、残存の深さは 0.04 ～ 0.10 ｍと浅い。埋土は灰黄色系の細砂層である。

この溝状遺構は礎石列と直行することから、一時期古い、屋敷地内を区画した遺構の痕跡の可能性も考えられる。

この遺構からの出土遺物には、土師皿、肥前系陶磁器、焼締陶器、瓦片、土製品、砥石、鉄釘などがあり、特に瓦片は軒丸・軒平・丸・平を合わせて 270 片余りが出土している。

254･255 は肥前系染付、254 は蓋、255 は内底部が蛇の目釉剥ぎである。256 は丹波の水屋甕で、257 は備前焼の擂鉢である。

小礫敷き根固め柱穴１（遺構 223）（図 30、図版 10）

ｋ 12 グリッドで玉砂利を敷き固めた遺構を検出した。砂利の範囲は 0.8 × 0.9 ｍの楕円形を呈し、0.03 ～ 0.1 ｍ大の敷かれた砂利の中央には 0.15 × 0.3 ｍの長方形状の結晶片岩が据えられていた。なお、上層部分は撹乱により削平を受けていた。断面形は緩いＶ字状を呈し、遺存していた深さは最も深い中央部分で 0.54 ｍを測り、下層まで砂利と瓦片が細砂と黄褐色シルトに混じり充填されていた。また、遺構の東側は若干掘り凹められ約 0.1 ～ 0.2 ｍ大の結晶片岩が配されていた。この片岩は板状を呈し、検出時には乱れはしていたものの、当初は平面を覆うように敷かれていた可能性もある。この遺構からは軒丸瓦片が１片出土した。

以上の検出状況から小礫充填遺構は、中央の結晶片岩上に蹲踞等の手水鉢が置かれ、東側の結晶片岩の敷かれた部分は踊り場と考えられなくもない。

小礫敷き根固め柱穴２（遺構 228）（図 30、図版 10）

ｋ 13 グリッドで検出された玉砂利を敷き固めた遺構である。この遺構の西側は撹乱されているため、掘形の規模は南北長 0.71 ｍ、東西長 0.47 ｍを測る。平面形状は遺存している箇所から推測すると、当初は不整形な円形を呈するものと考えられる。残存の深さは 0.06 ｍと浅く主に 0.02 ～ 0.05 ｍ大の細かい玉砂利が細砂に混じり充填されていた。

この遺構からの出土遺物は皆無である。

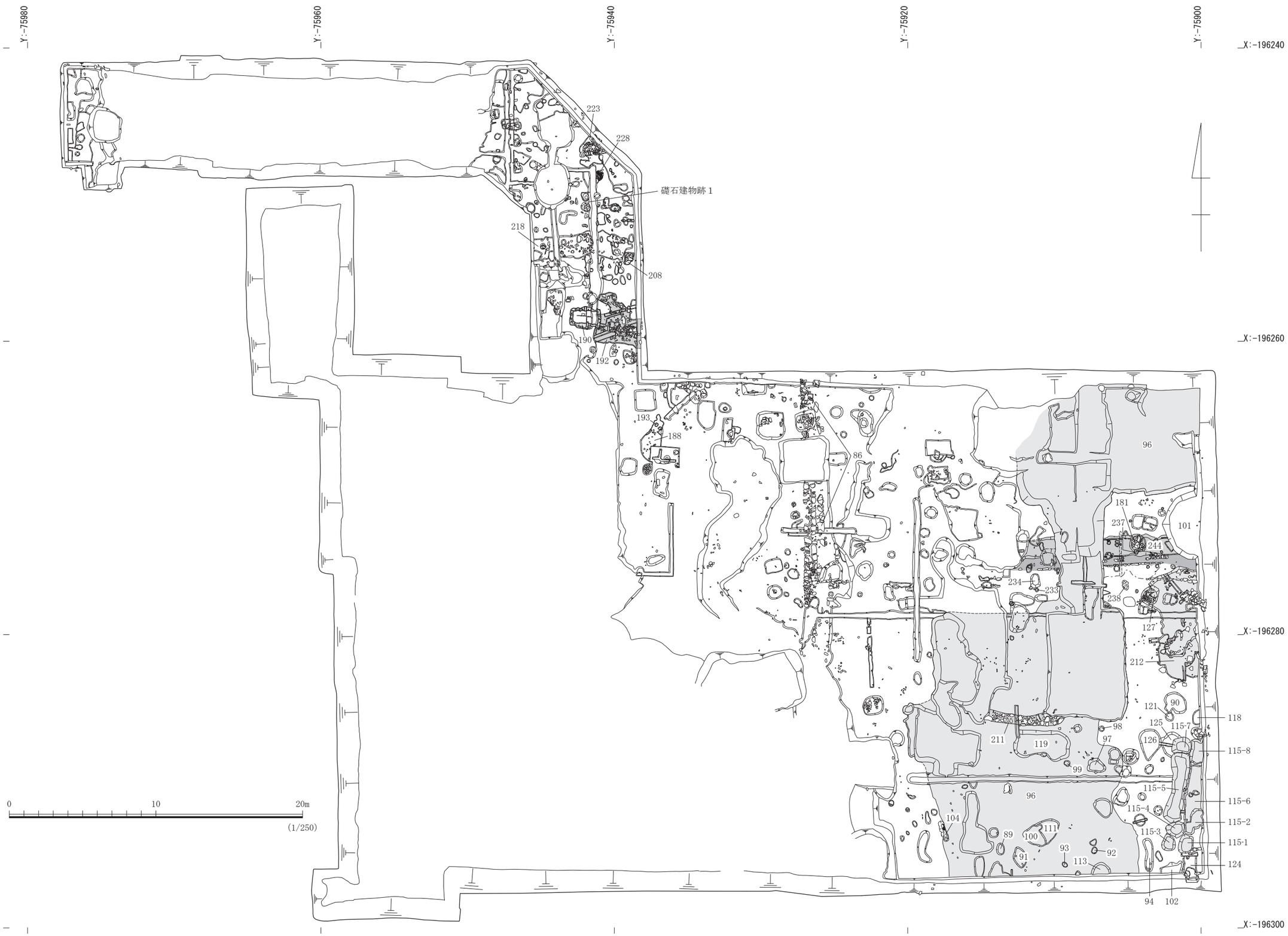


図１５　１区第２面検出遺構平面図

土塀基礎（遺構 86）

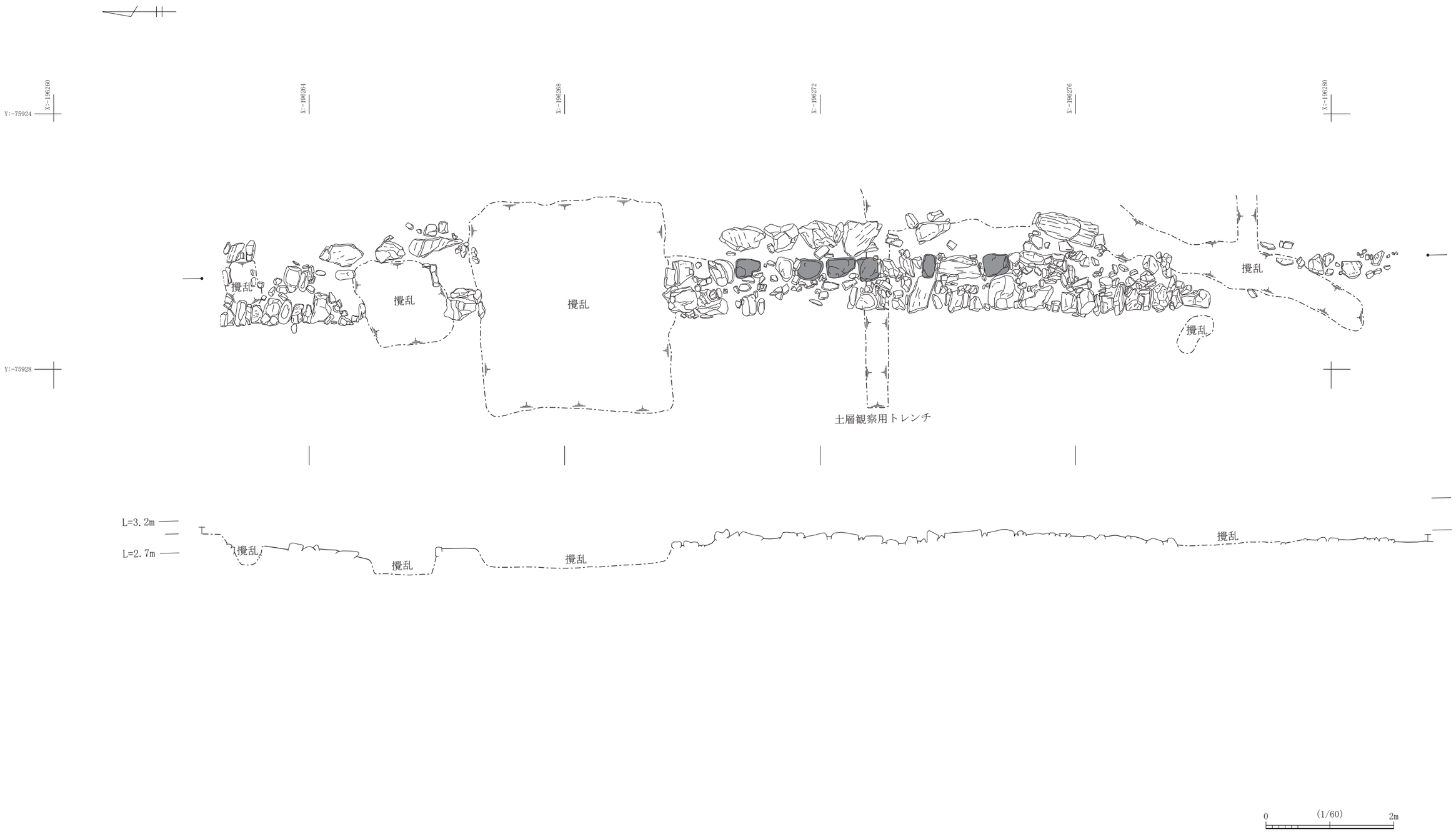
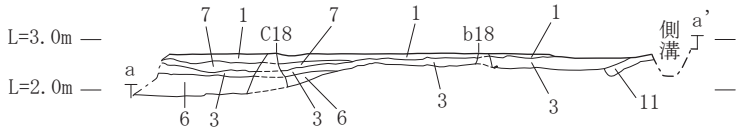
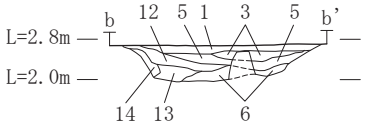


図１６　１区第２面　土塀基礎（遺構 86）

図１７　１区第２面　遺構 96

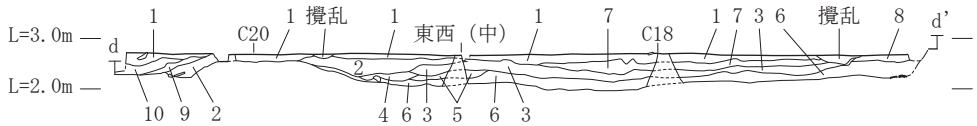
遺構96　東西方向土層断面図

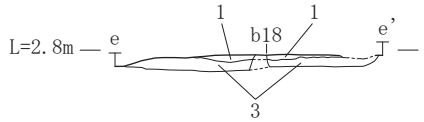


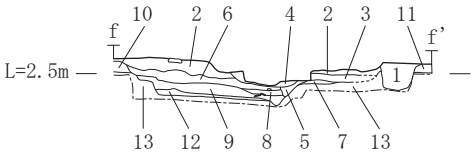


1　2.5Y4/3（オリーブ褐色）砂質　0.5cm大礫・焼土粒をやや含む
2　2.5Y4/3（オリーブ褐色）砂質　3～4cm大礫・焼土塊を多く含む
3　2.5Y4/4（オリーブ褐色）砂質　3～4cm大礫・焼土塊を非常に多く含む
4　2.5Y4/3（オリーブ褐色）砂質　焼土塊をわずかに含む
5　2.5Y5/4（黄褐色）砂質　1～2cm大礫をわずかに含む
6　2.5Y5/4（黄褐色）砂質　3～4cm大礫をわずかに含む
7　2.5Y5/4（黄褐色）細砂　1～2cm大礫・焼土粒わずかに含む
8　2.5Y6/3（にぶい黄色）細砂　1～2cm大礫・焼土粒わずかに含む
9　2.5Y4/3（オリーブ褐色）砂質　5cm大礫やや含む・焼土塊多く含む
10　2.5Y4/2（暗灰黄色）砂質　1～4cm大礫非常に多く含む
11　2.5Y4/4（オリーブ褐色）粘質　炭・焼土塊わずかに含む
12　2.5Y4/3（オリーブ褐色）砂質　5cm大礫わずかに含む・焼土塊やや含む
13　2.5Y4/3（オリーブ褐色）砂質　5cm大礫わずかに含む・あまりしまってない
14　2.5Y4/4（オリーブ褐色）砂質　2～3cm大礫やや含む・あまりしまってない
15　2.5Y4/3（オリーブ褐色）砂質　瓦礫を含む・旧庁舎浄化槽の掘りかたか？

遺構96　南北方向土層断面図







1　攪乱土　2.5Y5/2（暗灰黄）細砂～砂・2.5YR4/4（にぶい赤褐）礫細砂多く混じる・片岩片も含む
2　2.5Y5/3（黄褐）細砂～砂・焼土片・炭粒・礫細片含む
3　2.5Y5/2（暗灰黄）砂・シルト粒状に入る・炭混じる
4　2.5Y4/1（黄灰）細砂・炭粒・焼土粒多く混じる・土器・礫含む
5　10YR4/3（にぶい黄褐）細砂～シルト
6　2.5Y4/3（オリーブ褐）細砂～砂・炭粒・シルト粒混じる
7　2.5Y5/2（暗灰黄）砂・下層にシルト入る
8　2.5Y4/2（暗灰黄）砂・シルト混じる・炭・土器片（焼土？）・礫含む（→No.96下層遺構）
9　10YR4/2（灰黄褐）細砂（固くしまる）・土器片・シルト粒・炭粒状で入る（→No.96下層遺構）
10　10YR4/3（にぶい黄褐）細砂
11　10YR4/3（にぶい黄褐）細砂・炭粒・シルト粒入る
12　10YR4/3.5（にぶい黄褐）細砂・シルト粒入る
13　ベース　2.5Y5/2（暗灰黄）砂

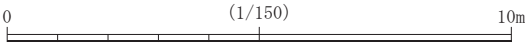


図１８　１区第２面　遺構96

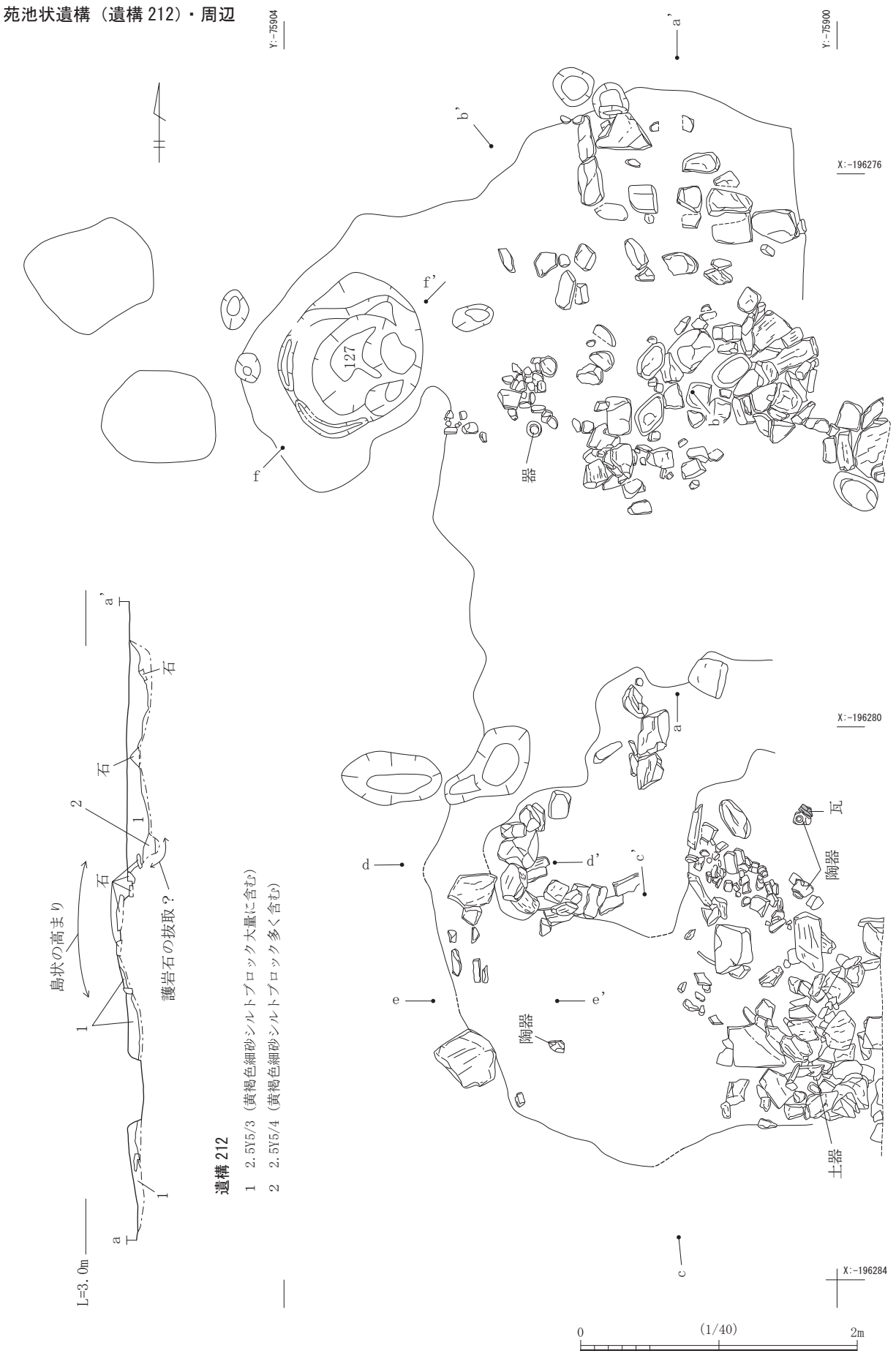
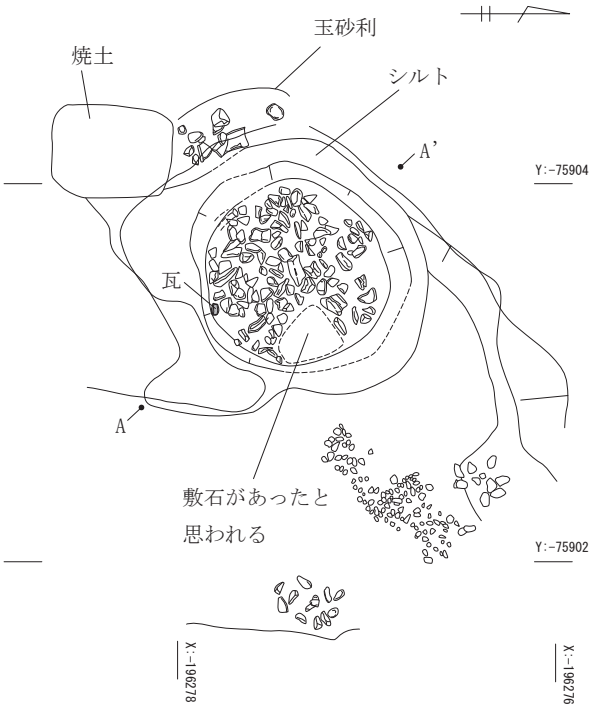
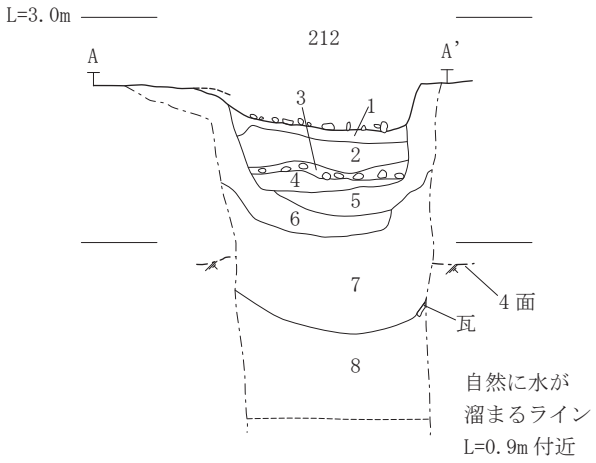


図１９　１区第２面　苑池状遺構１（遺構 212）

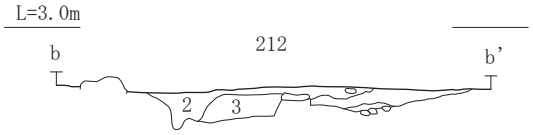
苑池状遺構（遺構 212）・周辺





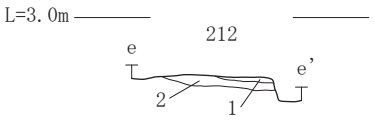
遺構 212（遺構 127 の下）

1　2.5Y4/3（オリーブ褐色砂質土）
2　2.5Y5/4（黄褐色砂質土　灰オリーブ色シルトが混じる）
3　2.5Y4/3（オリーブ褐色砂質土　2cm 大礫を多く含む）
4　2.5Y4/3（オリーブ褐色砂質土　灰オリーブ色シルトが混じる しまっている→土壙内の置土か？）
5　5Y5/2（灰オリーブ色シルト）
6　5Y5/2（灰オリーブ色シルト　オリーブ色シルトを斑に含む）
7　5Y4/2（灰オリーブ色粘土　黒色粘土を斑に含む）
8　2.5Y5/2（暗灰黄色粘質土　炭化物・砂礫をわずかに含む）



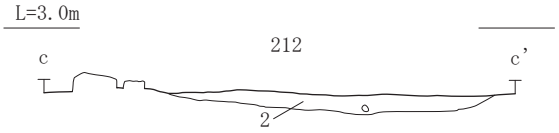
遺構 212

2　2.5Y5/4（黄褐色）細砂、粘性の強い葉状層を含む
3　2.5Y6/3（にぶい黄色）細砂、シルトブロック大量に含む



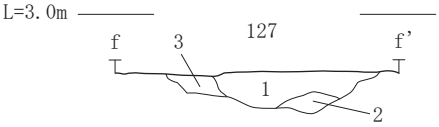
遺構 212

1　2.5Y5/3（黄褐色）細砂
2　2.5Y5/4（黄褐色）細砂、粘性の強い葉状層を含む



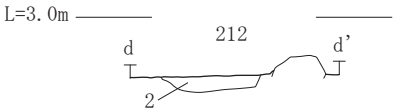
遺構 212

2　2.5Y5/4（黄褐色）細砂、粘性の強い葉状層を含む



遺構 127

1　2.5Y4/3（暗灰黄色）砂質、焼土塊多く含む
2　2.5Y4/3（暗灰黄色）砂質、焼土塊わずかに含む
3　2.5Y4/3（暗灰黄色）細砂、焼土塊わずかに含む



遺構 212

2　2.5Y5/4（黄褐色）細砂、粘性の強い葉状層を含む

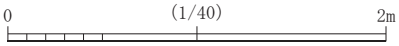


図２０　１区第２面　苑池状遺構１（遺構 212）・周辺遺構

焼土充填土坑群（遺構 115）・周辺

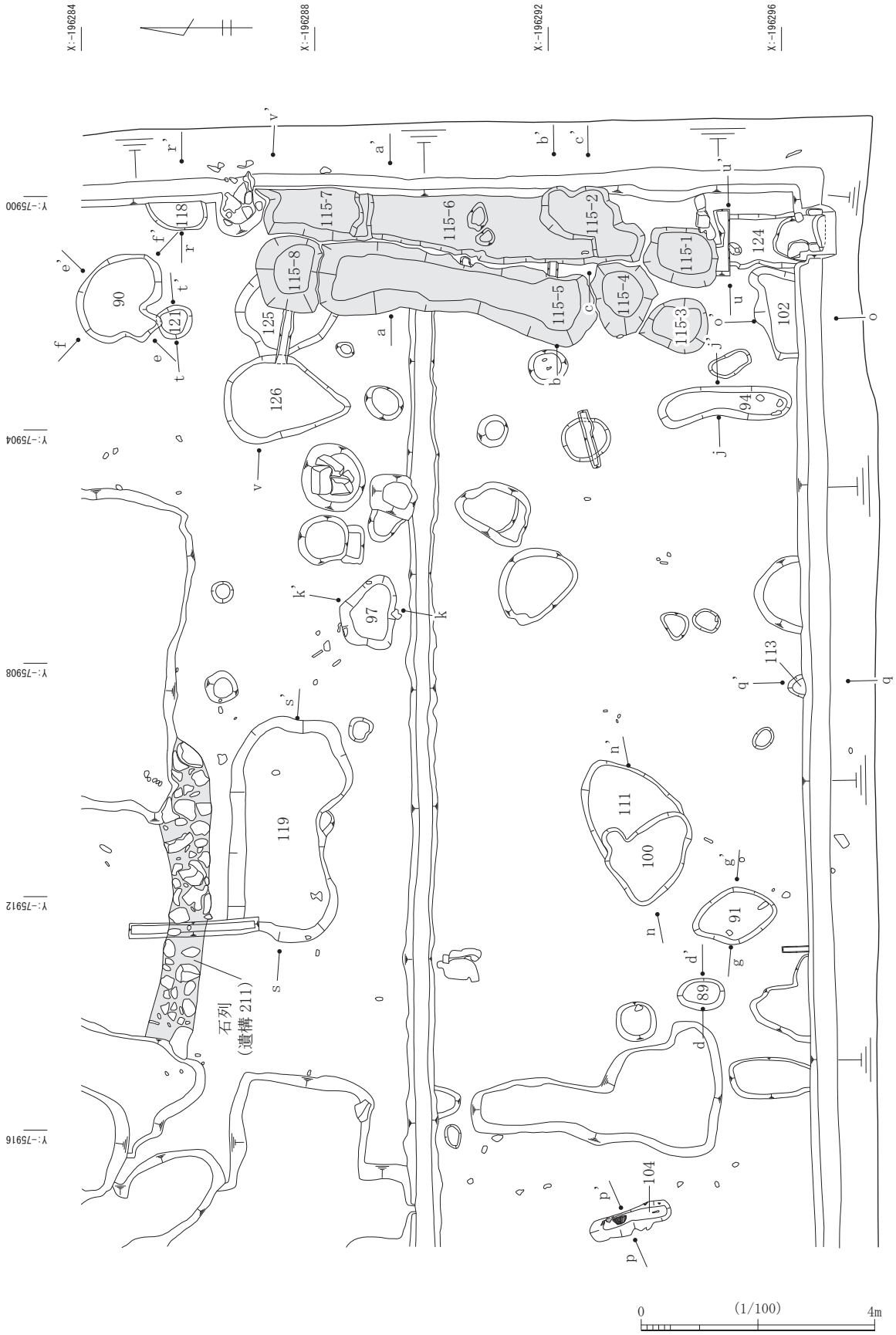
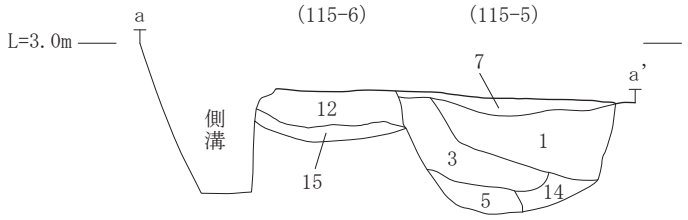
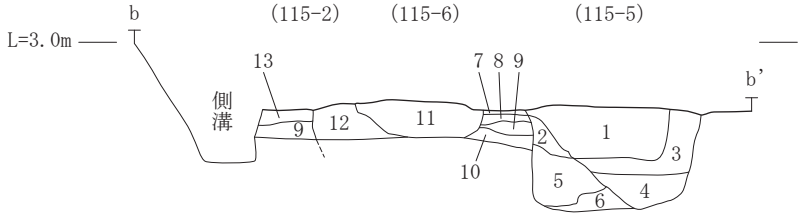
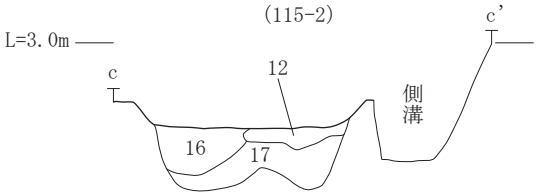


図２１　１区第２面　焼土充填土坑群（遺構 115）・周辺遺構

焼土充填土坑群（遺構 115）・周辺



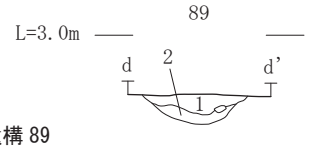




遺構 115

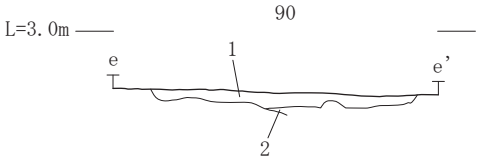
【115 土色】

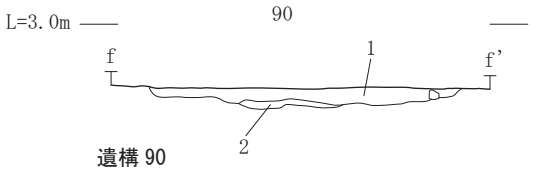
1　10YR4/1（褐灰）細砂、焼土、炭、礫粒多く入る
2　10YR4/6（赤褐）細砂、焼土
3　10YR4/1（褐灰）細砂、焼土、炭入る、礫入る
4　10YR4/1（褐灰）細砂、礫入る
5　10YR4/1（褐灰）細砂、焼土、礫粒で入る
6　10YR4/1（褐灰）細砂、焼土、炭、礫入る
7　10YR4/2（灰黄褐）細砂
8　10YR5/ 3（にぶい黄褐）細砂
9　10YR4/2　細砂、炭粒入る 10　10YR3/3（暗褐）細砂～中砂
11　10YR4/1（褐灰）細砂、焼土、炭、礫粒多く入る
12　10YR4/1（褐灰）細砂、10YR4/6（赤褐）焼土多く入る
13　10YR4/2（灰黄褐）細砂、炭、焼土粒入る
14　10YR4/3（にぶい黄褐）細砂、
　10YR6/2（灰黄褐）シルト混じる、炭粒入る
15　10YR4/3（にぶい黄褐）細砂、
　10YR6/2（灰黄褐）シルト混じる、炭、焼土粒入る
16　10YR4/2（灰黄褐）細砂、焼土、炭、礫入る
17　10YR4/2（灰黄褐）細砂、焼土、炭混じる



遺構 89

1　10YR3/1（黒褐）細砂、
　10YR5/3（にぶい黄褐）シルトブロック、炭粒で入る
2　10YR3/1（黒褐）細砂、炭、焼土粒入る





遺構 90

1　10YR4/2（灰黄褐）細砂、焼土、礫粒入る
2　2.5Y5/2（暗灰黄）細砂～シルト→ベース

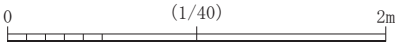
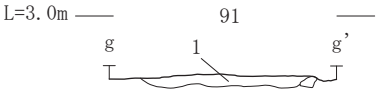


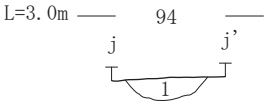
図２２　１区第２面　焼土充填土坑群（遺構 115）・周辺遺構

焼土充填土坑群（遺構 115）・周辺



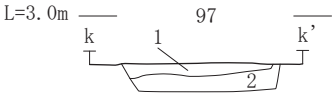
遺構 91

1　2.5Y4/2（暗灰黄）細砂、
　　2.5Y5/3（黄褐）シルト混じる



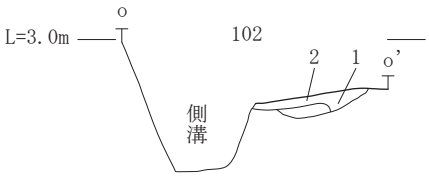
遺構 94

1　10YR4/2（灰黄褐）
　　細砂、焼土、礫粒入る



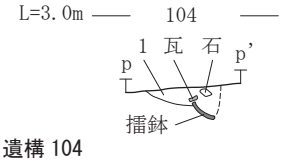
遺構 97

1　2.5Y5/3（黄褐）細砂、焼土粒微量入る
2　ベース土（整地）、
　　10YR4/2（灰黄褐）細砂、焼土、炭粒入る



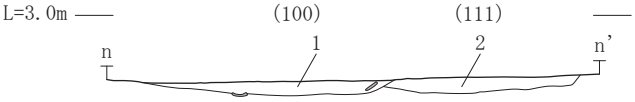
遺構 102

1　2.5Y5/2（暗灰黄）細砂、焼土、礫粒微量入る
2　10YR4/2（灰黄褐）細砂、
　　10YR6/4（にぶい黄褐）シルト混じる



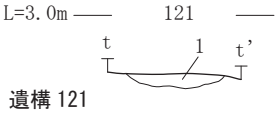
遺構 104

1　2.5Y4/1（黄灰）細砂、炭粒、焼土粒入る



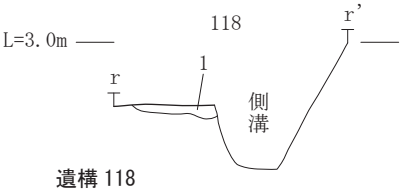
遺構 100, 111

1　10YR5/2（灰黄褐）細砂混じりシルト、小礫が入る
2　10YR4/2（灰黄褐）細砂混じりシルト



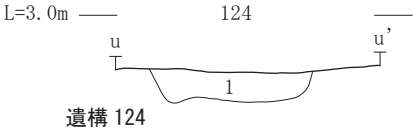
遺構 121

1　2.5Y5/4（黄褐色）細砂、焼土魂わずかに含む



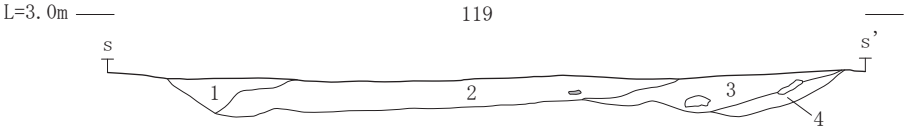
遺構 118

1　2.5Y5/4（黄褐色）細砂、焼土魂わずかに含む



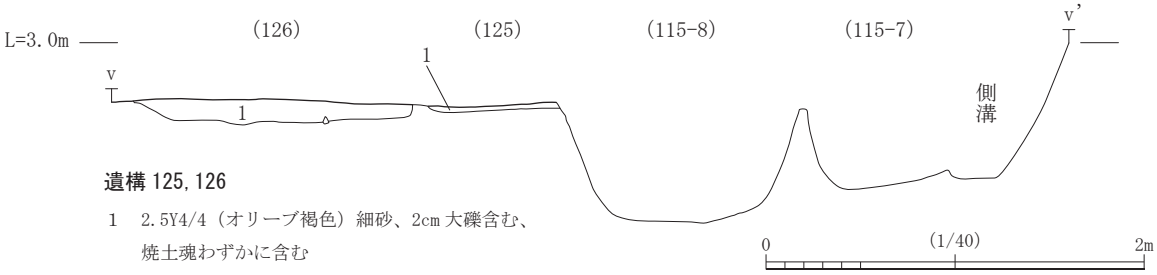
遺構 124

1　10YR4/3（にぶい黄褐）細砂、礫片、炭粒入る



遺構 119

1　2.5Y5/2（暗灰黄）細砂～シルト、焼土、炭粒微量入る
2　10YR4/2（灰黄褐）細砂、焼土、炭粒多く入る
3　10YR4/2（灰黄褐）細砂、焼土微量、炭入る
4　10YR4/2（灰黄褐）細砂、焼土粒入る



遺構 125, 126

1　2.5Y4/4（オリーブ褐色）細砂、2cm 大礫含む、
　　焼土魂わずかに含む

図２３　１区第２面　焼土充填土坑群（遺構 115）・周辺遺構

通路状遺構１（遺構 244）周辺

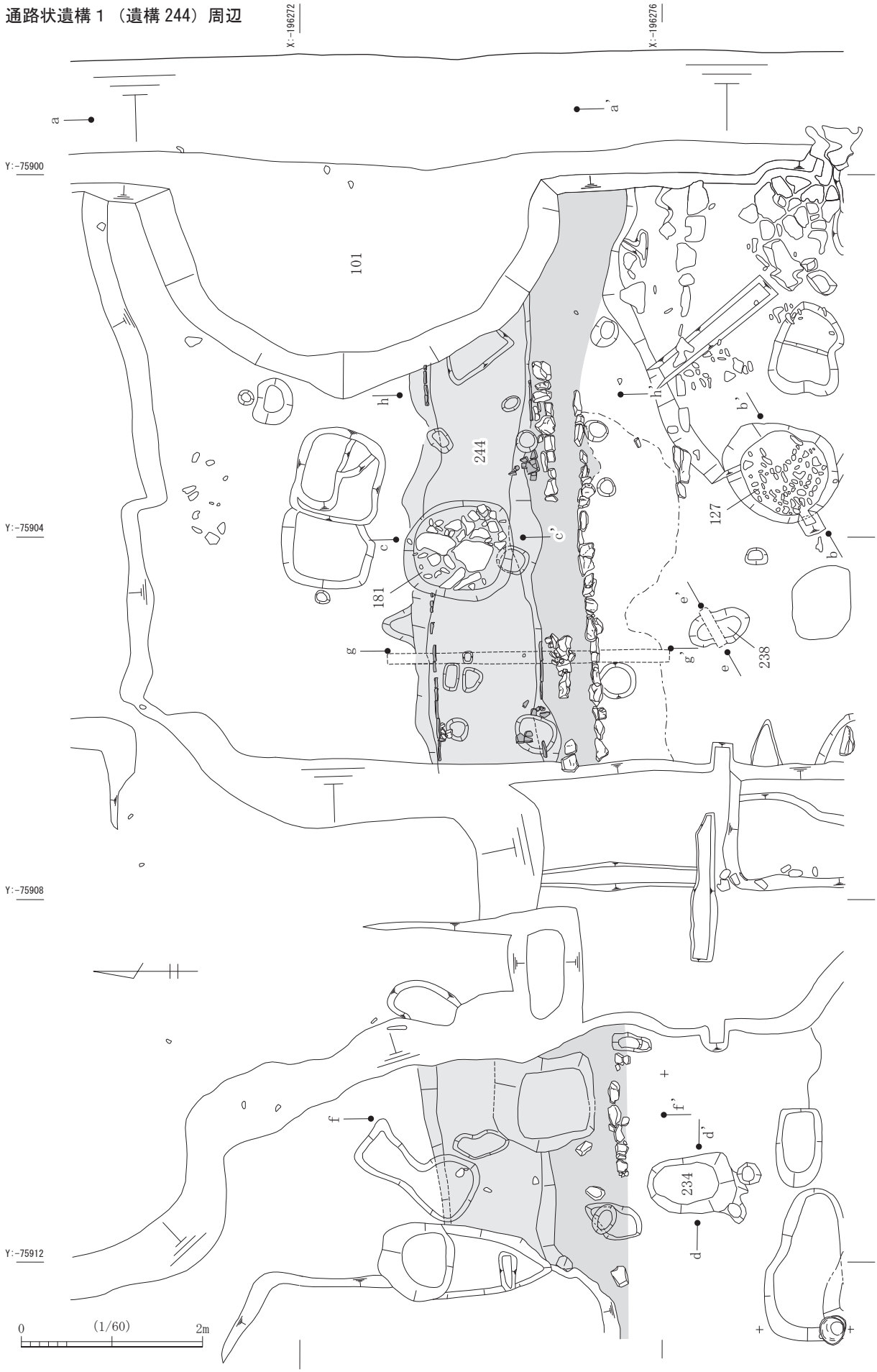
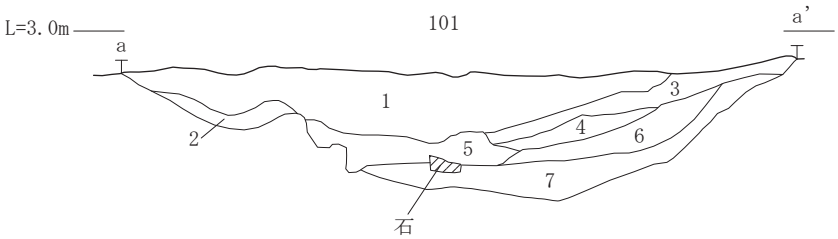


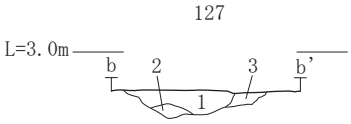
図２４　１区第２面　通路状遺構１（遺構 244）・周辺遺構

通路状遺構１（遺構 244）周辺



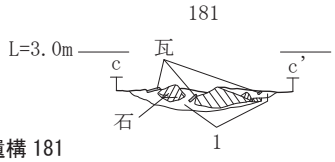
遺構 101

1　2.5Y5/2（暗灰黄）細砂～微砂、炭、焼土、土器細片少量含む
2　10YR4/3（にぶい黄褐）微砂混じりシルト
3　2.5Y4/2（暗灰黄）細砂、焼土粒を含む、礫含む
4　2.5Y4/2（暗灰黄）微砂混じりシルト、焼土粒で入る
5　10YR4/3（にぶい黄褐）微砂混じりシルト、風化礫、礫、遺物を含む
6　2.5Y4/2（暗灰黄）微砂混じりシルト、焼土、礫５～10cm 大、炭少量含む
7　2.5Y5/2（暗灰黄）微砂混じりシルト、焼土、礫 20cm 大以上、炭も含む



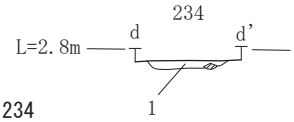
遺構 127

1　2.5Y4/3（暗灰黄色）細砂混じりシルト、焼土魂多く含む
2　2.5Y4/3（暗灰黄色）細砂混じりシルト、焼土魂わずかに含む
3　2.5Y4/3（暗灰黄色）細砂、焼土魂わずかに含む



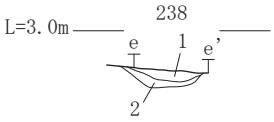
遺構 181

1　2.5Y4/3（オリーブ褐色）細砂、石、瓦多く含む



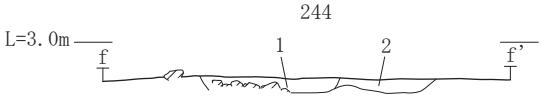
遺構 234

1　2.5Y5/3　細砂、シルトブロック大量に含む



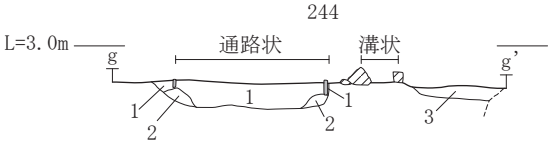
遺構 238

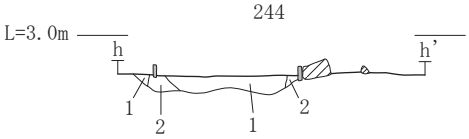
1　2.5Y5/3（黄褐）細砂
2　2.5Y4/4（オリーブ褐）細砂



遺構 244

1　2.5Y5/3（黄褐色）砂質
2　2.5Y4/3（オリーブ褐色）細砂、
　細かなシルトブロックやや含む





遺構 244

1　2.5Y4/3（オリーブ褐色）砂質、
　シルト粒をやや含む、よくしまっている層
2　5Y5/3（灰オリーブ色）砂質、若干粘性をもつ、
　瓦列設置時の置土か？
3　2.5Y5/4（黄褐色）砂質、シルトブロック多く含む、
　整地層

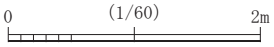


図２５　１区第２面　通路状遺構１（遺構 244）・周辺遺構

石敷遺構（遺構 188）

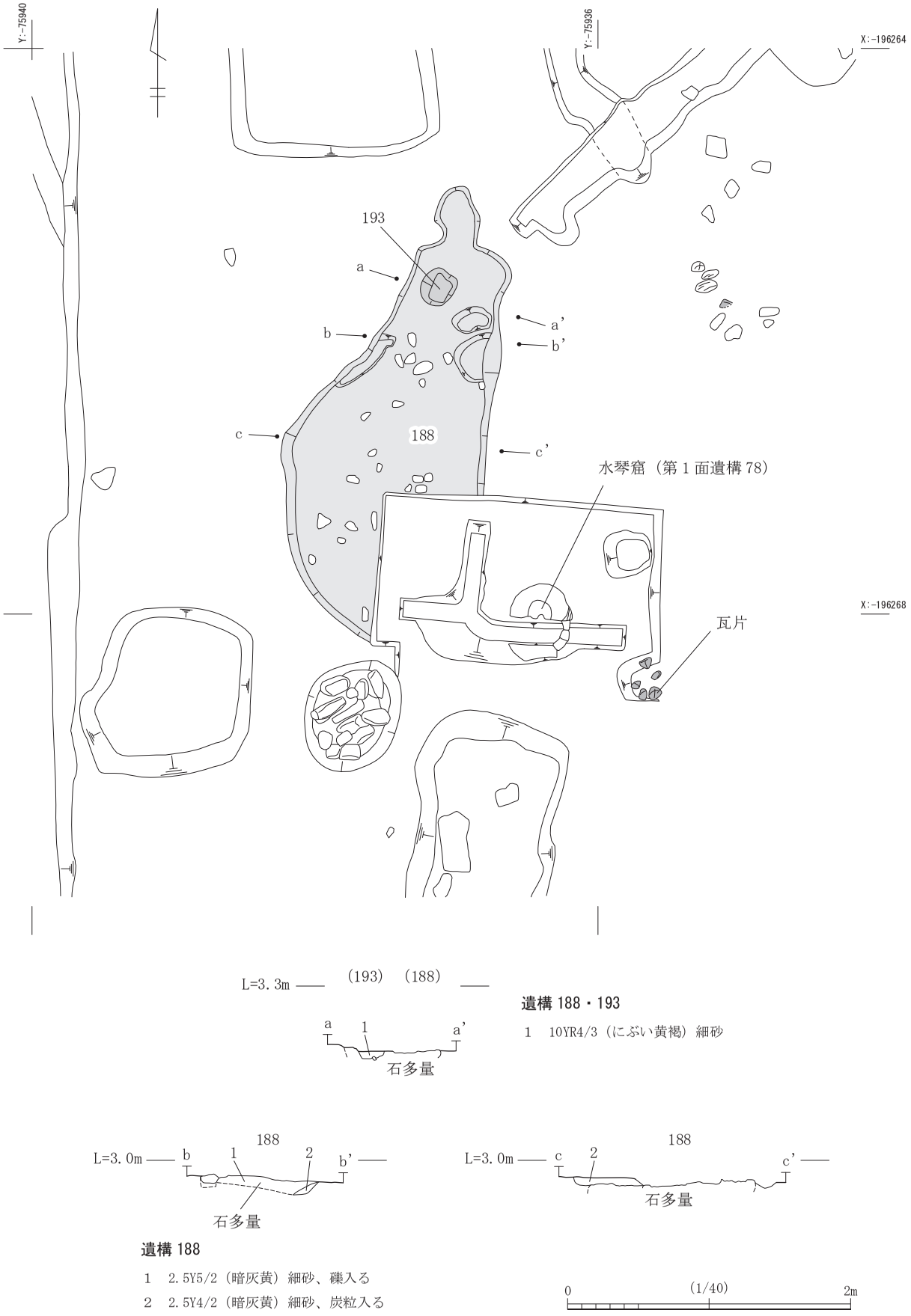
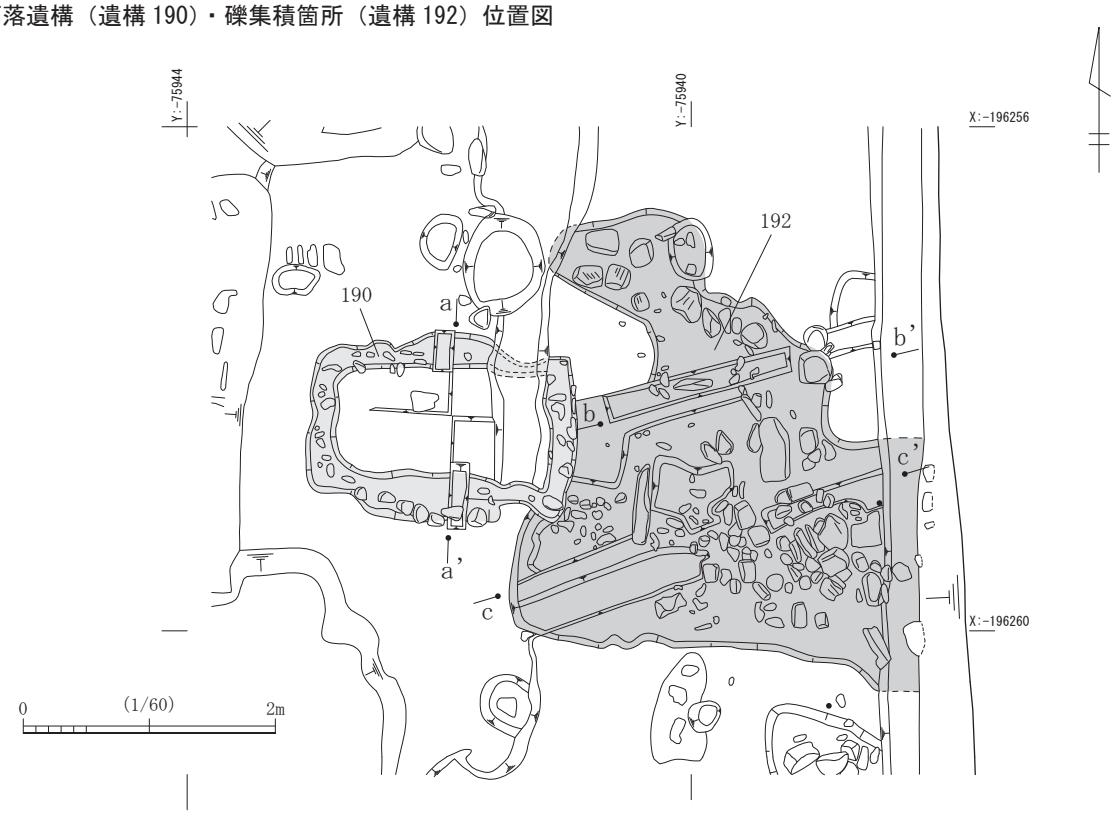


図２６　１区第２面　石敷遺構（遺構 188）

雨落遺構（遺構 190）・礫集積箇所（遺構 192）位置図



雨落遺構（遺構 190）平面図

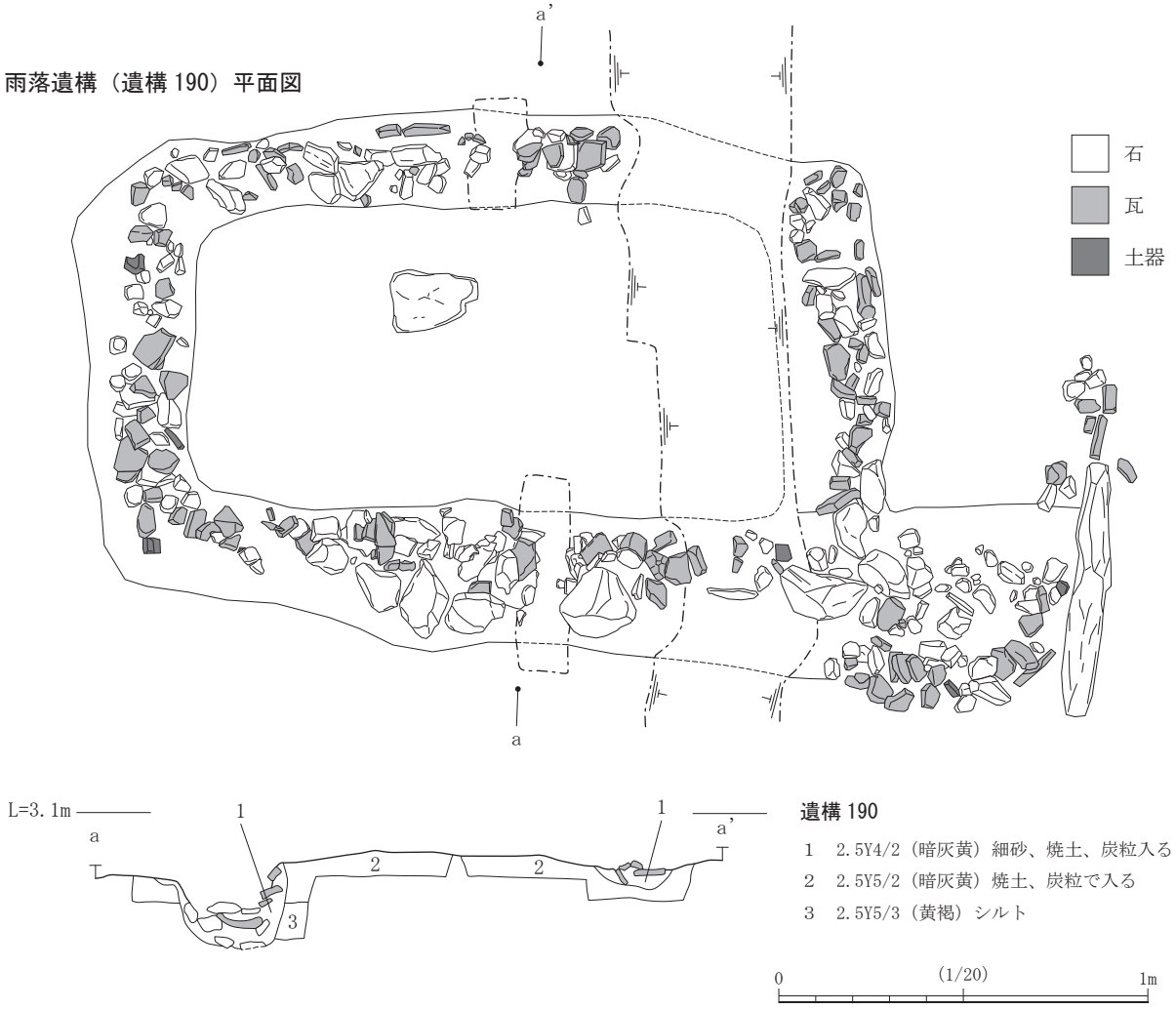
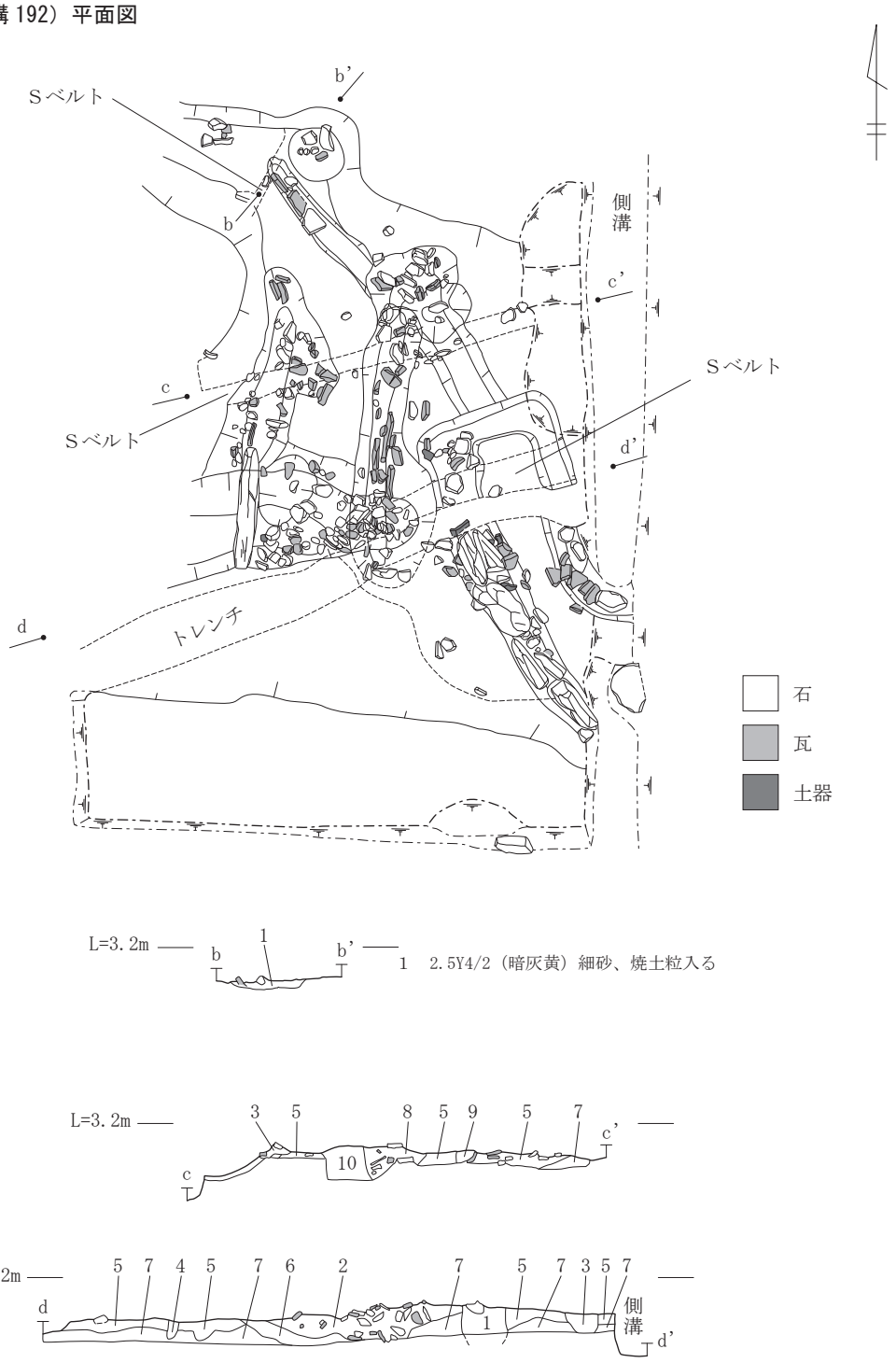


図２７　１区第２面　雨落遺構（遺構 190）・礫集積箇所（遺構 192）

礫集積箇所（遺構 192）平面図



遺構 192

1　5Y4/1（灰）細砂（石列）
2　2.5Y4/2（暗灰黄）細砂、礫多量に入る（遺構 190 ？）
3　5Y4/1（灰）細砂（石列）
4　2.5Y4/2（暗灰黄）細砂、杭？
5　2.5Y5/2（暗灰黄）細砂
6　2.5Y5/1（黄灰）細砂＝ベース土
7　2.5Y5/2（暗灰黄）細砂、2.5Y5/4（黄褐）シルト＝ベース土
8　2.5Y4/2（暗灰黄）細砂、2.5Y6/2（灰黄）細砂混じる礫多量
9　10YR4/2（灰黄褐）細砂、焼土粒微量入る
10　10YR4/1（褐灰）細砂、2.5Y6/2（灰黄）細砂混じる
11　5Y4/1（灰）細砂（石列）シルト、炭粒入る

0　(1/40)　2m

図２８　１区第２面　礫集積箇所（遺構 192）

礎石建物跡（遺構 218）

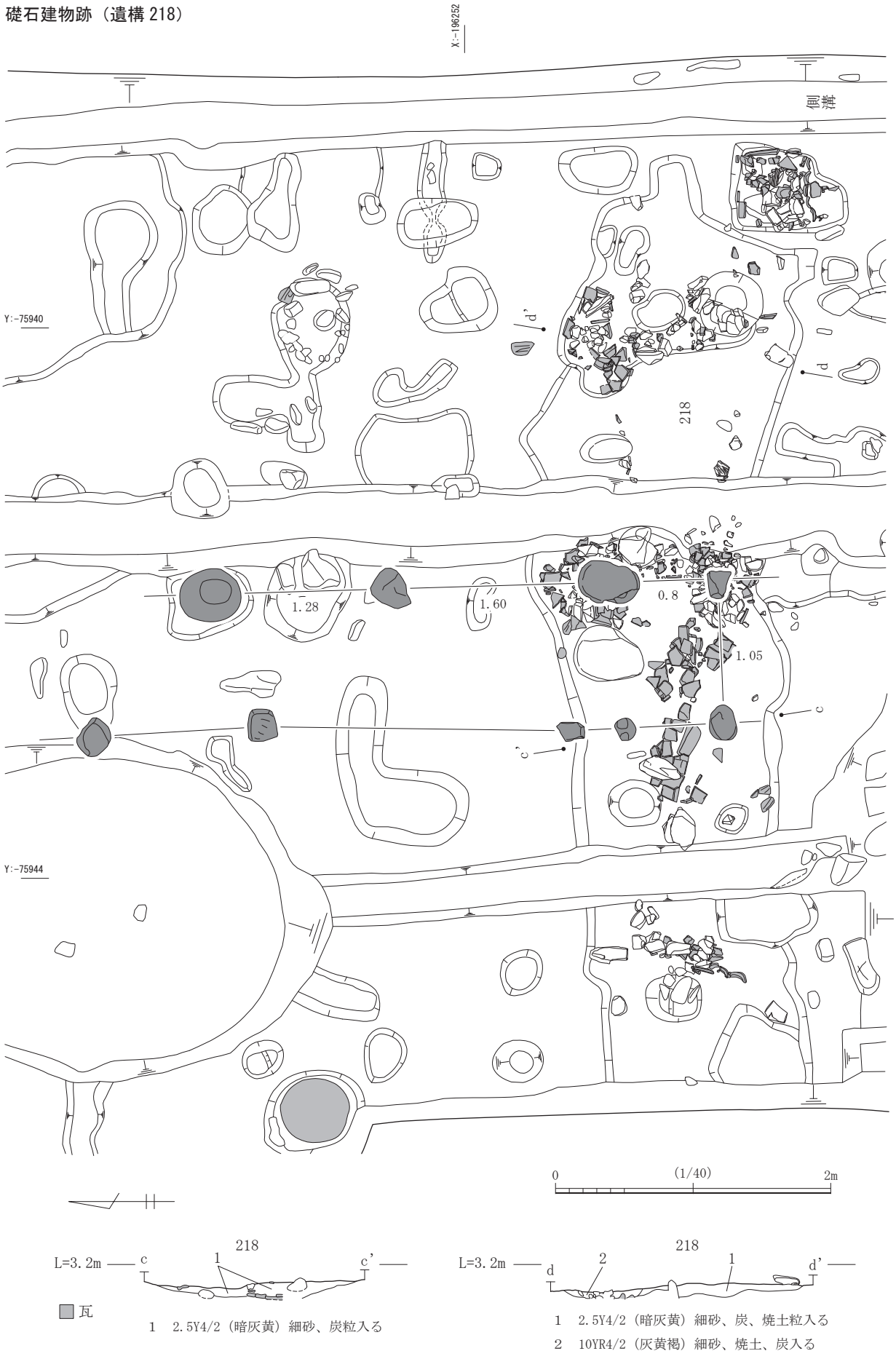
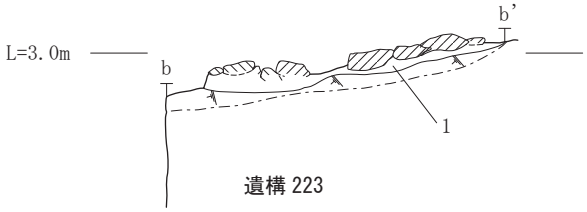


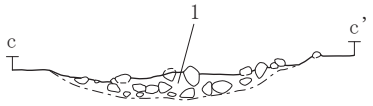
図２９　１区第２面　礎石建物跡・遺構 218

小礫敷き根固め柱穴（遺構 223, 228）



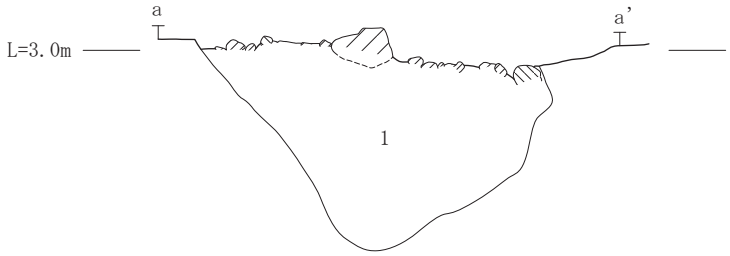
遺構 223

1　10YR4/1（灰黄褐）細砂



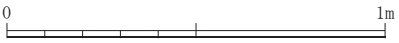
遺構 228

1　10YR4/1（灰黄褐）細砂



遺構 223

1　10YR4/2（細砂）、10YR6/6（シルト粒状に混じる）
　5 ～ 10cm 大の玉石・瓦多重に入る



(1/20)

図３０　１区第２面　小礫敷き根固め柱穴（遺構 223, 228）

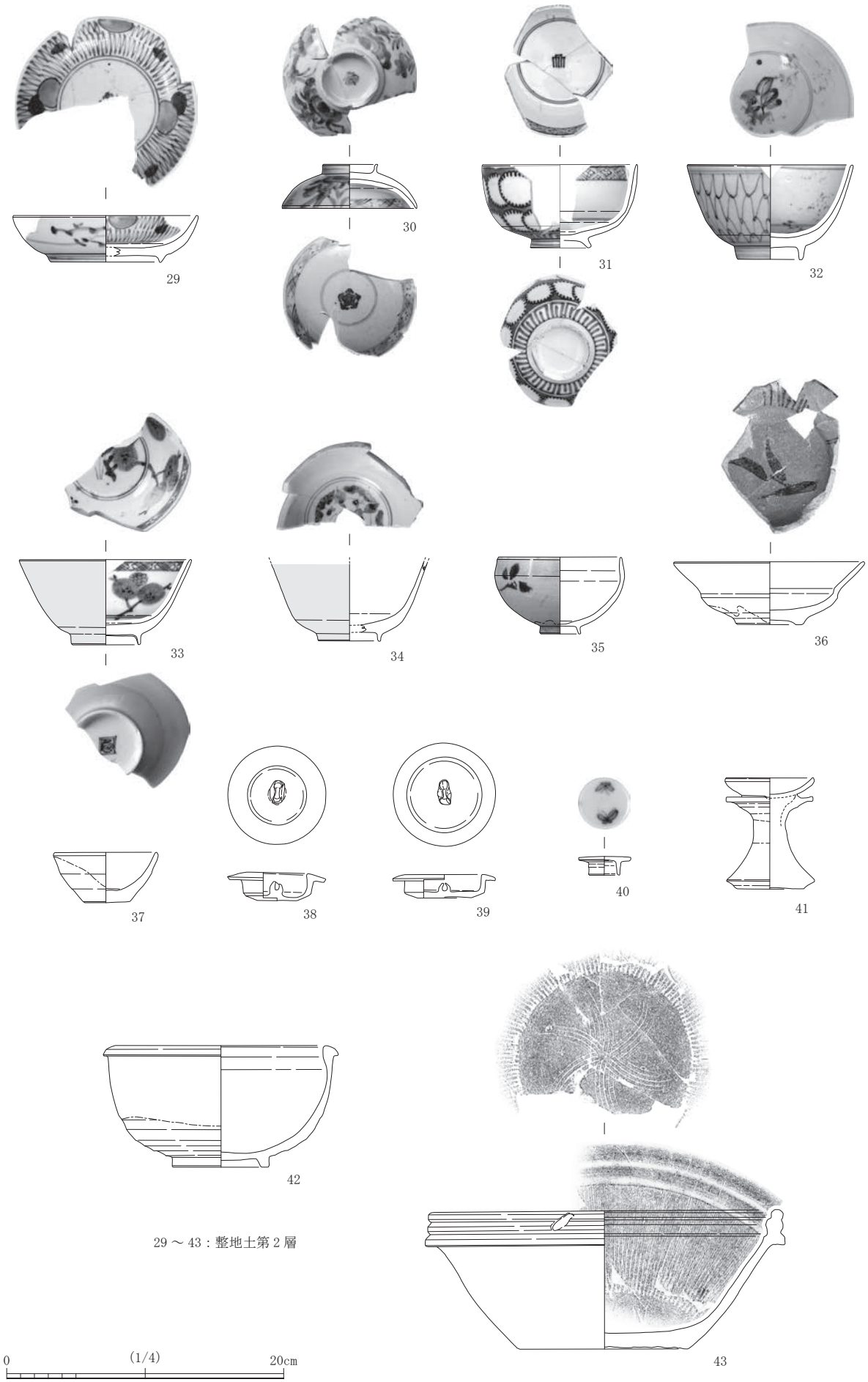


図３１　１区整地土第２層出土土器

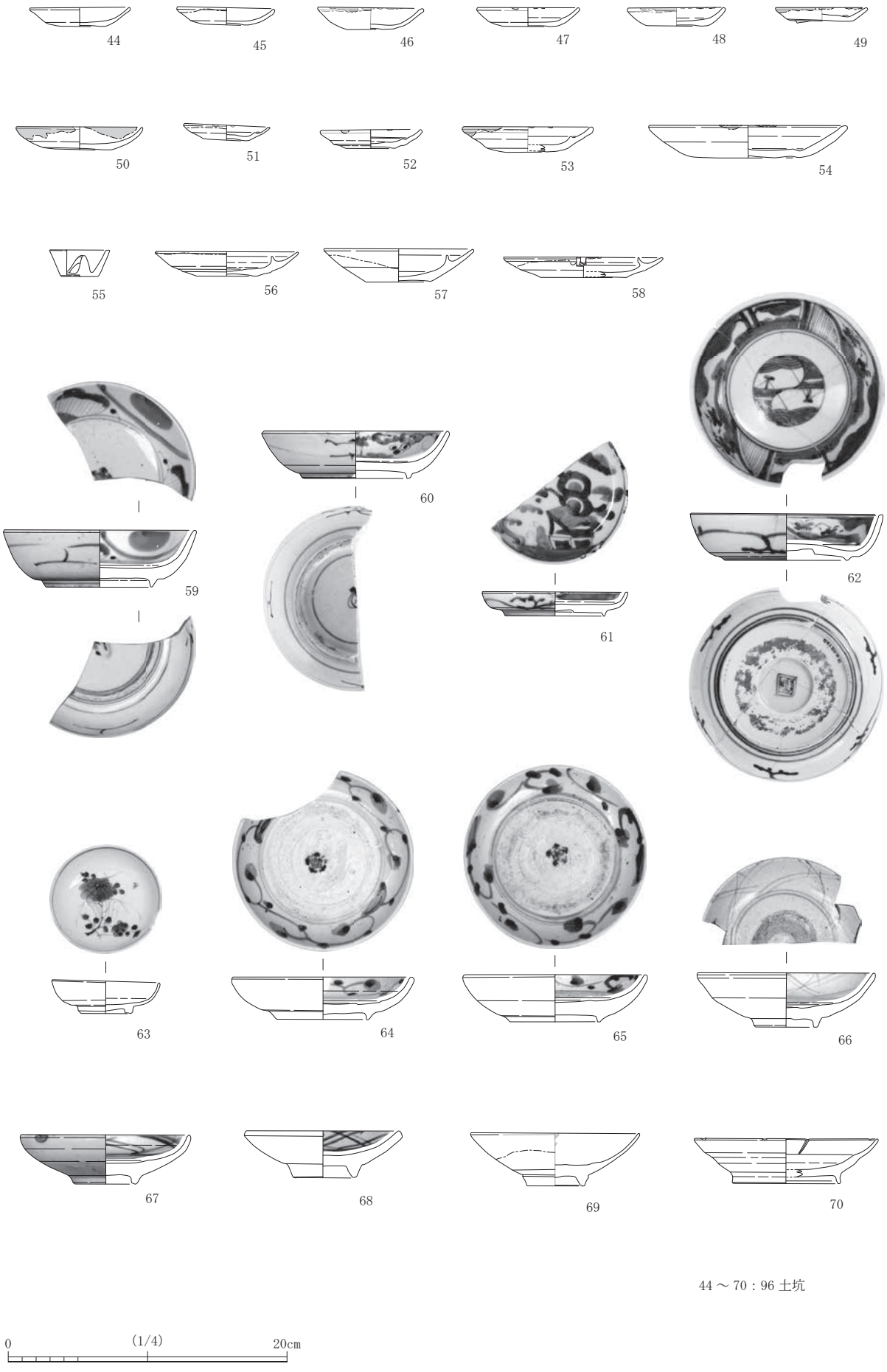
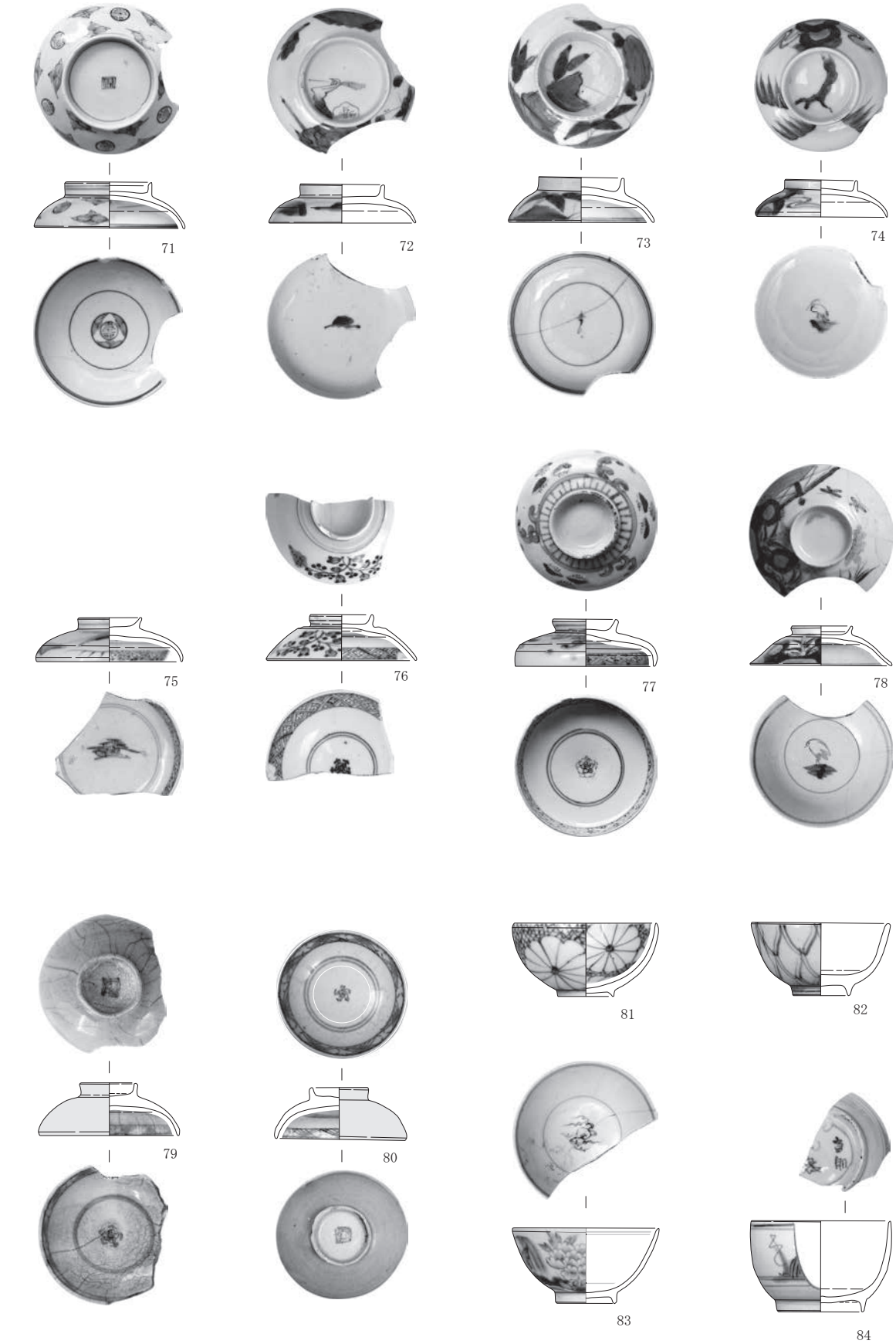


図３２　１区第２面出土土器



71 ～ 84 : 96 土坑

0 (1/4) 20cm

図３３　１区第２面出土土器２

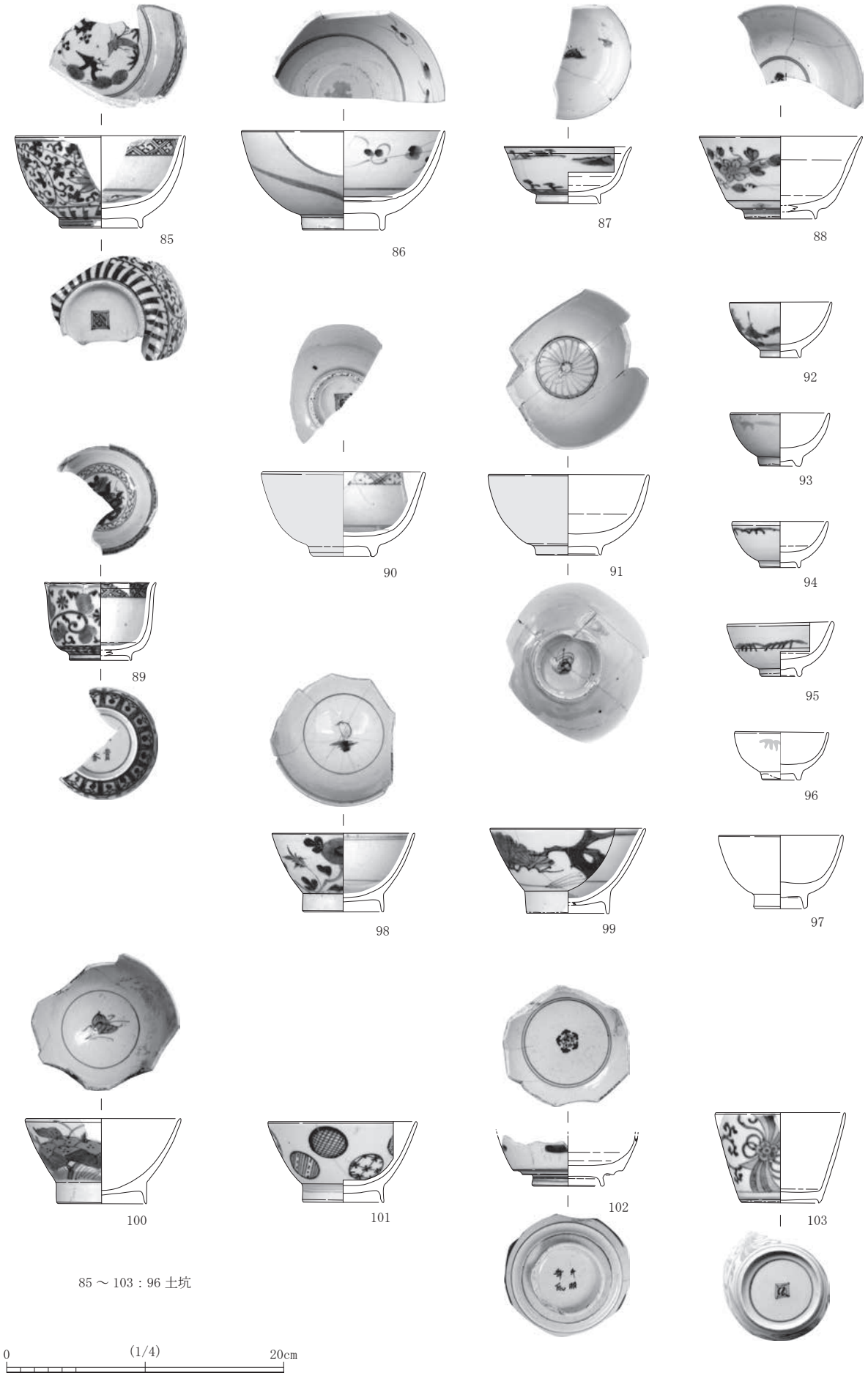


図３４　１区第２面出土土器３

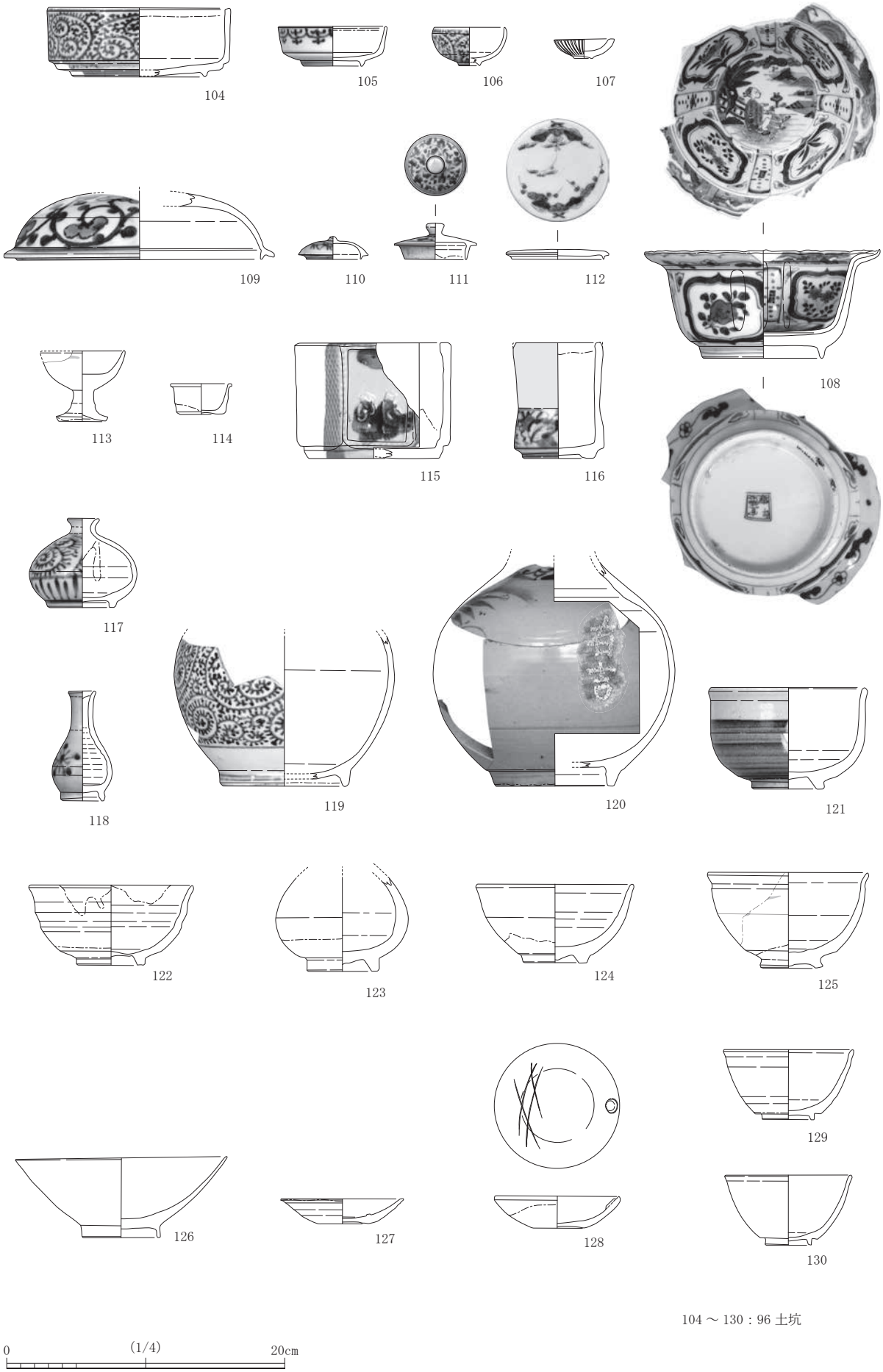
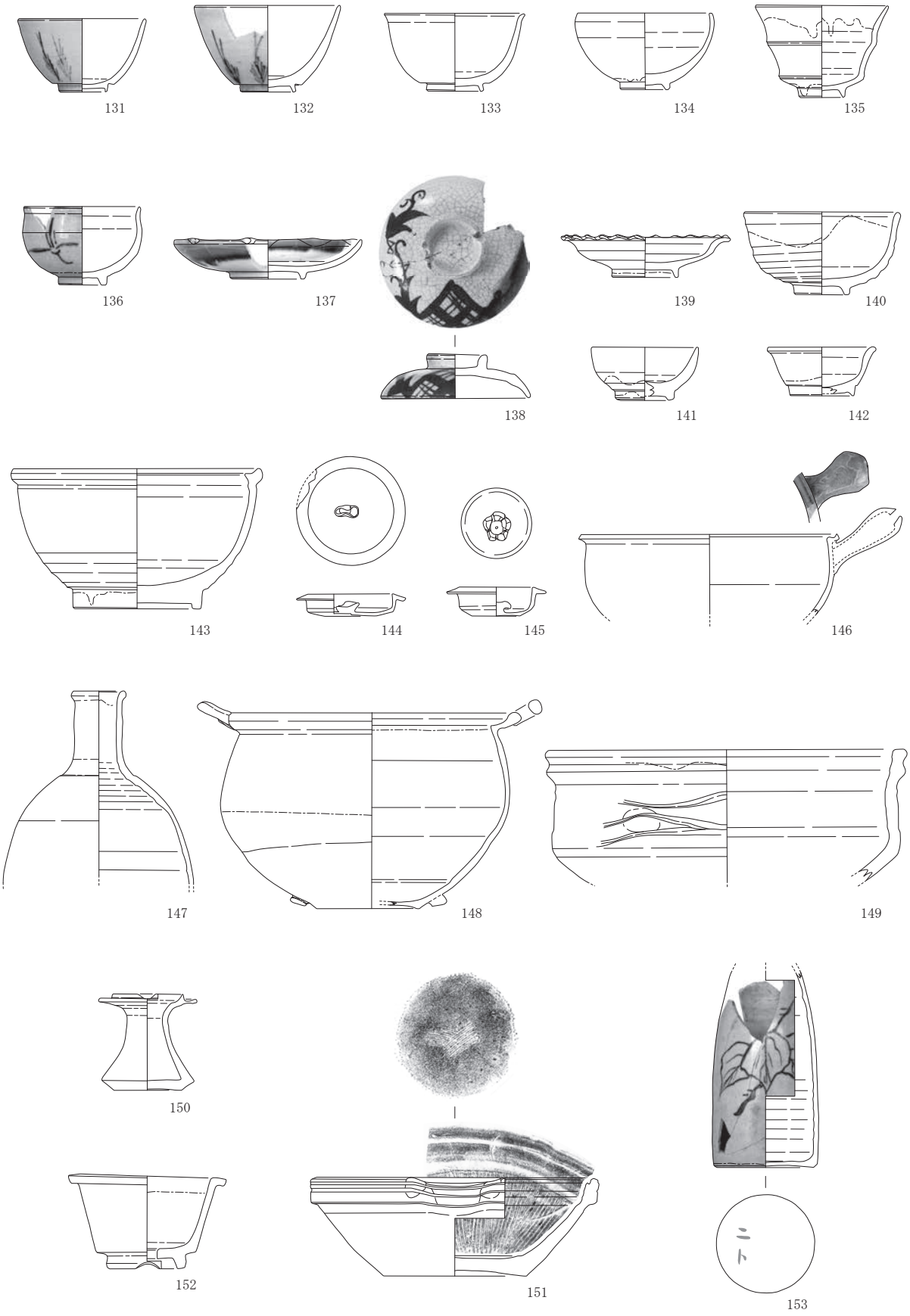


図３５　１区第２面出土土器４



131 ～ 153：96 土坑

0 (1/4) 20cm

図３６　１区第２面出土土器５

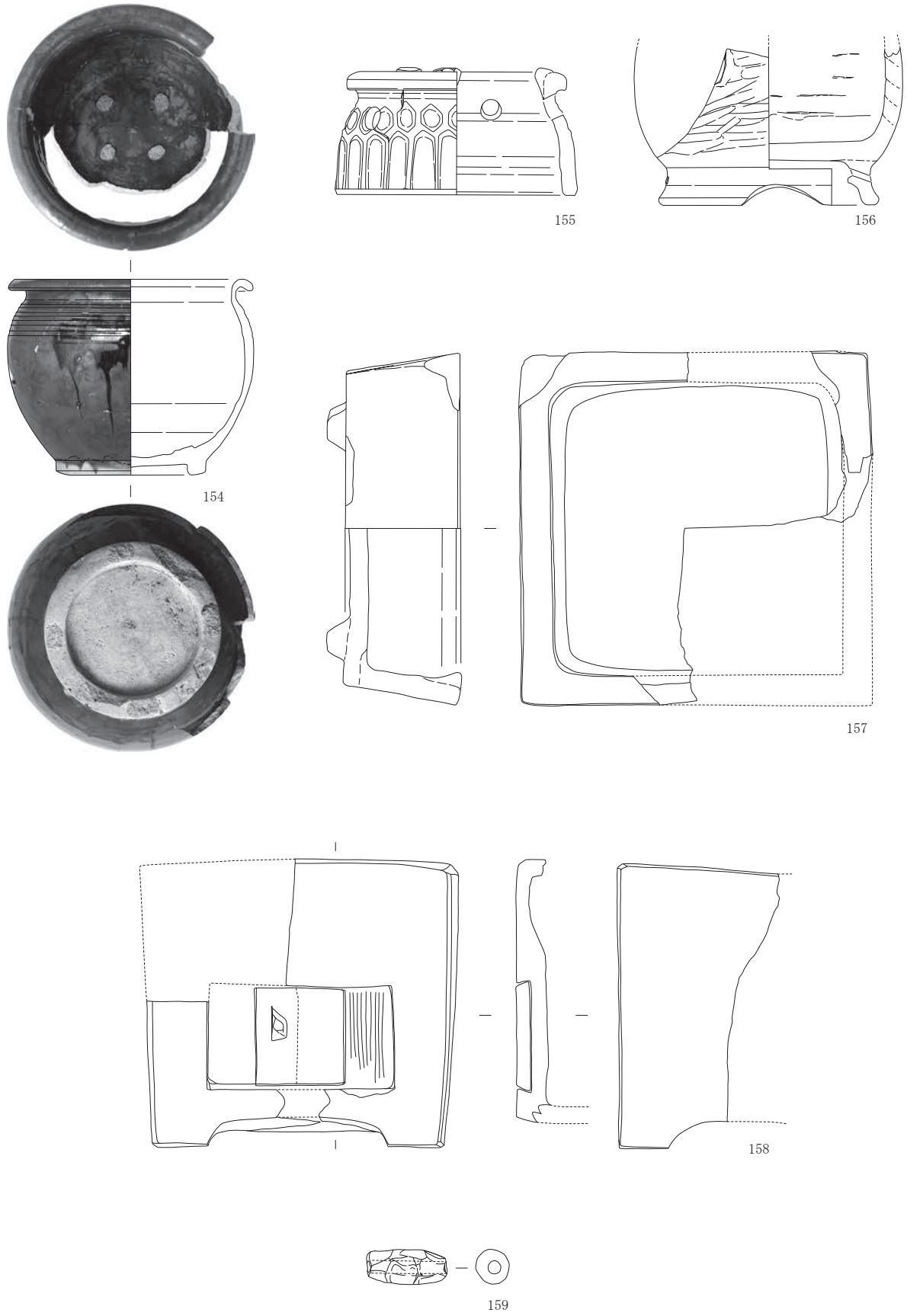


図３７　１区第２面出土土器６

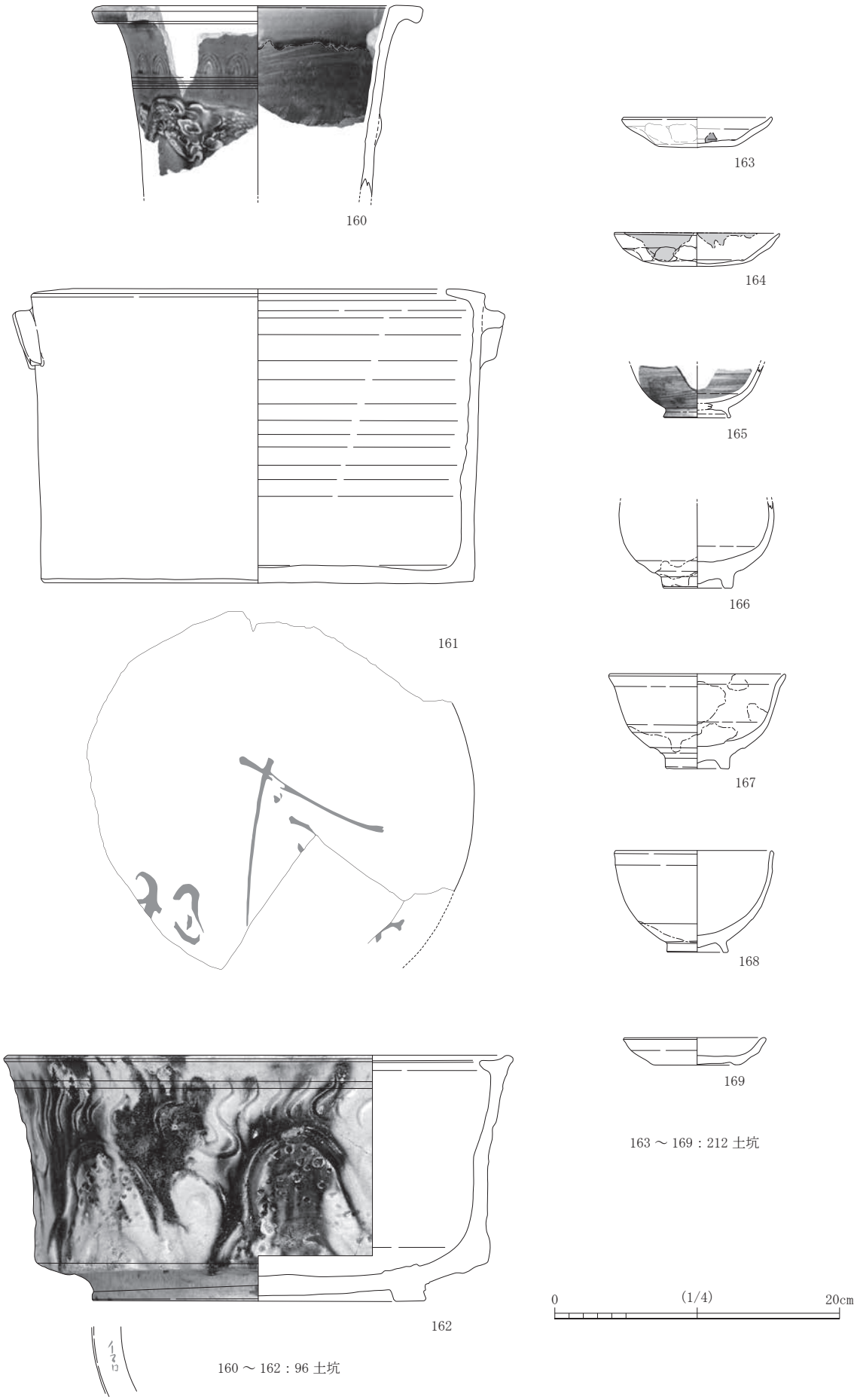


図３８　１区第２面出土土器７

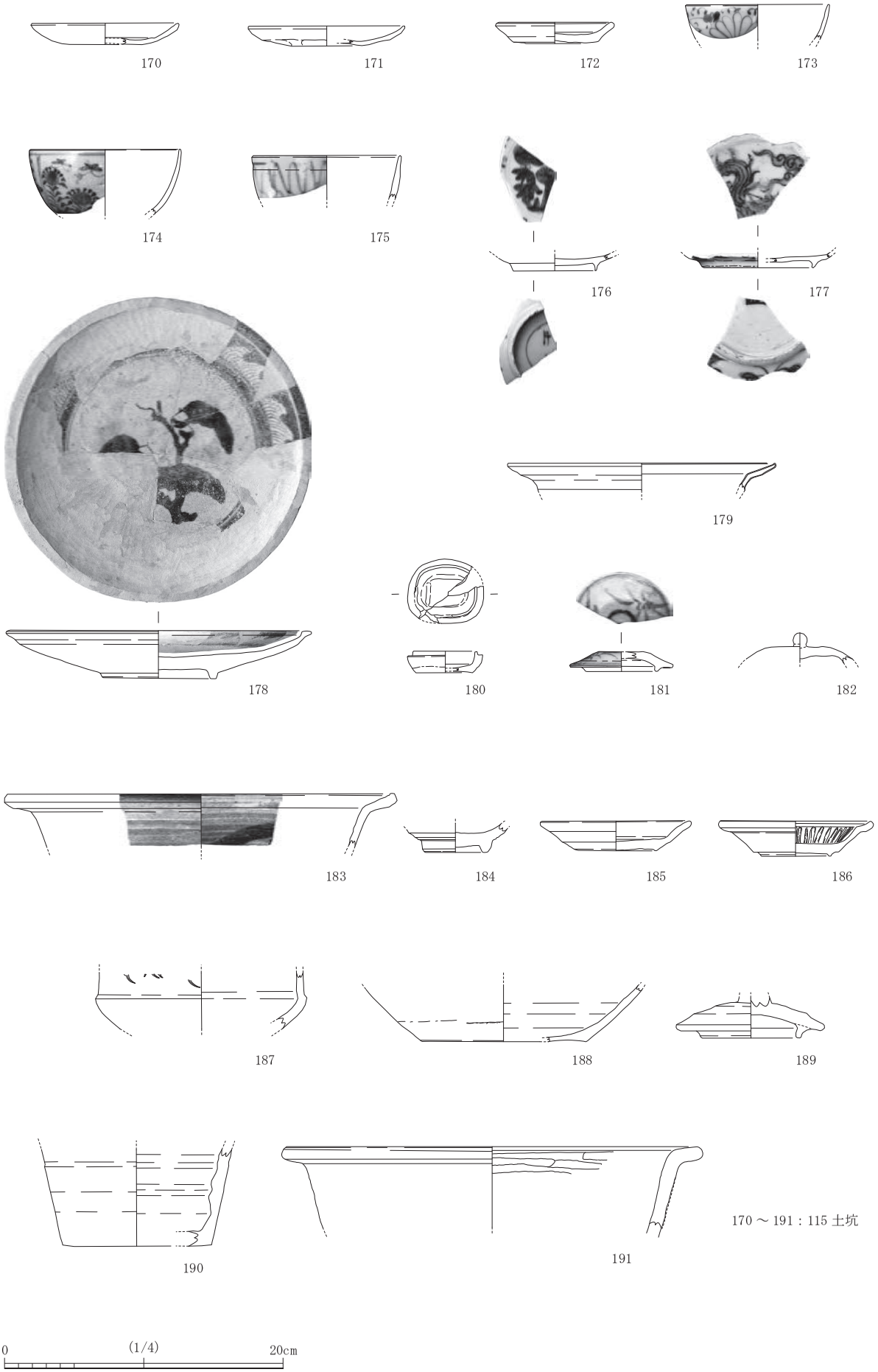


図３９　１区第２面出土土器８

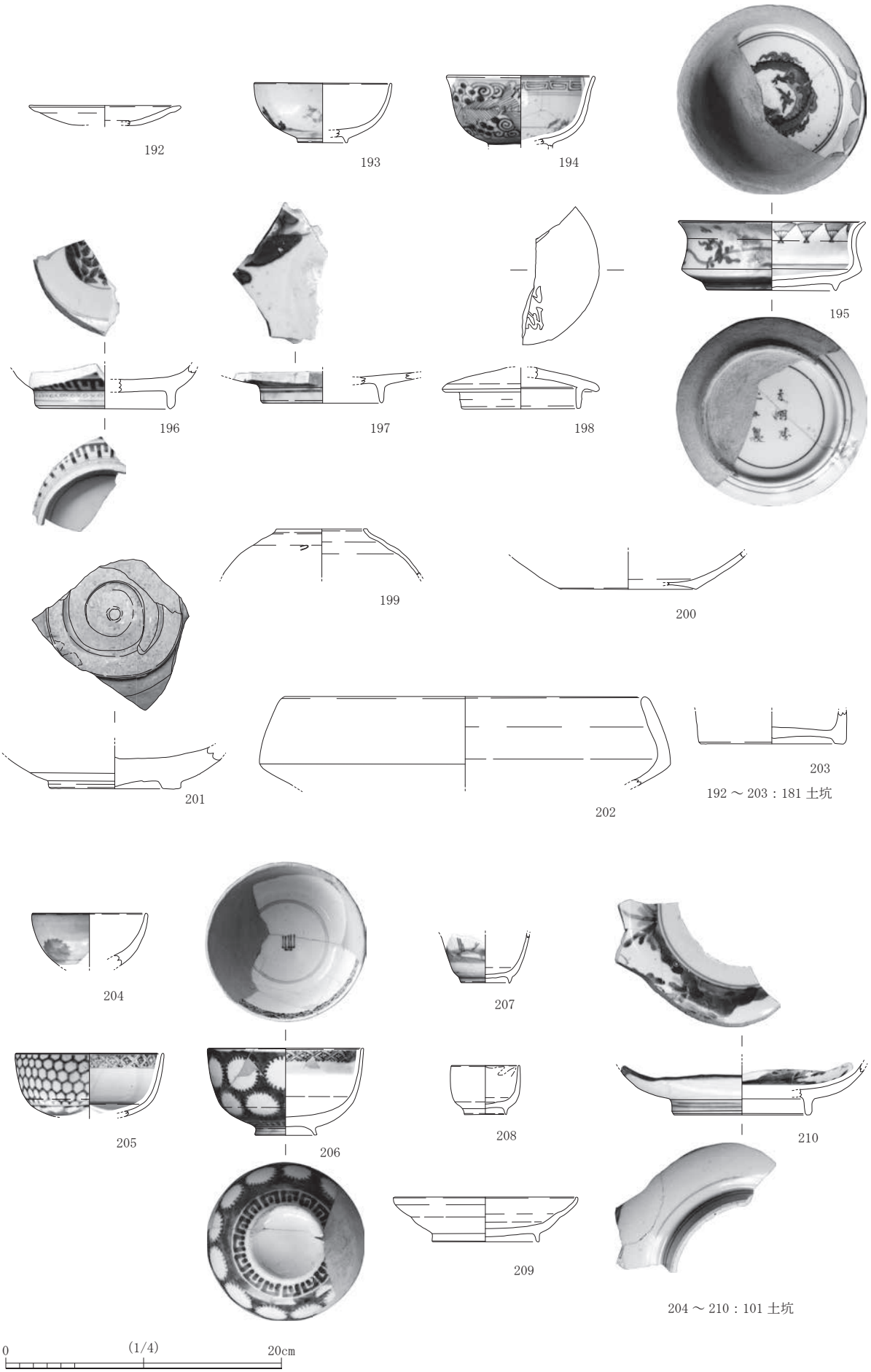


図４０　１区第２面出土土器９

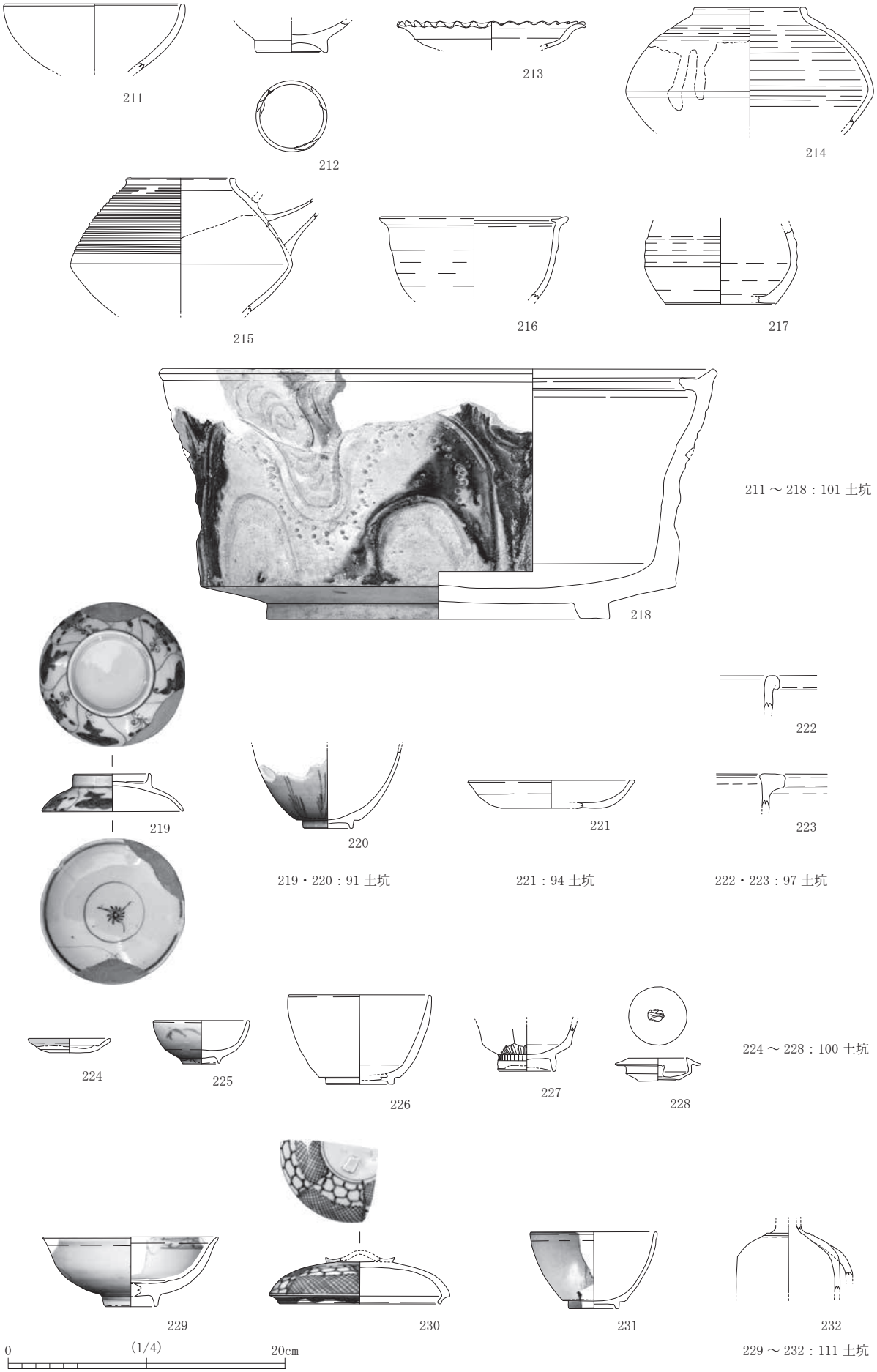


図４１　１区第２面出土土器 10

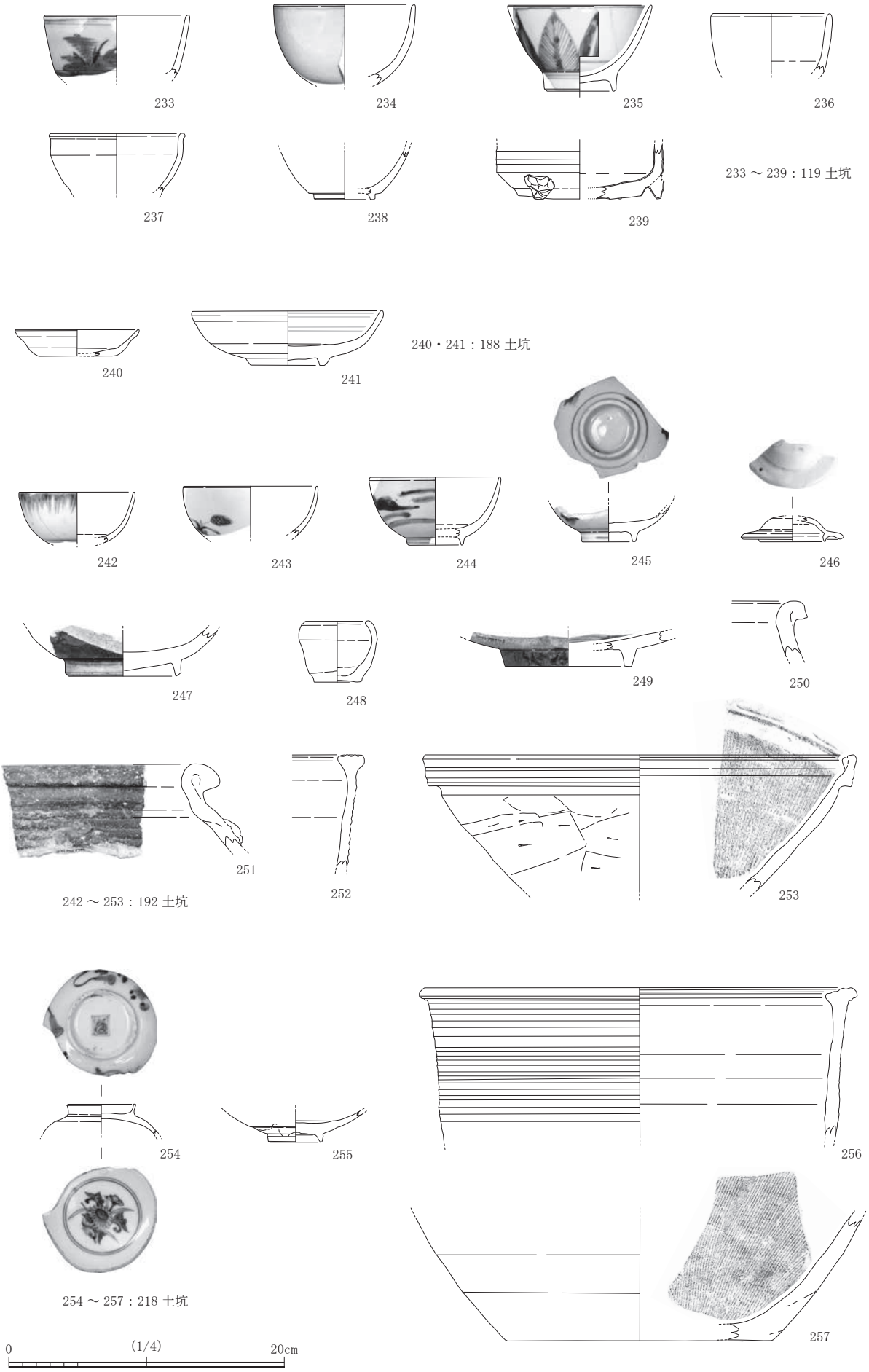


図４２　１区第２面出土土器 11

３　第３遺構面（図 43、図版 11）

遺構面標高は敷地境界溝 1（遺構 436）を境に、西側は T. P. +2. 6 m、東側は T. P. +2. 4 mであり、傾斜はなくほぼフラットとなる。

調査区南西では和歌山地方検察庁旧庁舎の攪乱が大きく、遺構がほとんど確認できなかったが、屋敷地境界溝 2 条、屋敷地境界柱穴列 1 列、地下式倉庫 3 棟、通路状遺構 1 基、苑池状遺構 1 基、柱穴列 4 列、土坑群 1 群、溝 6 条、礎石列 1 列、ピット 27 基、土坑 126 基、大型土坑 7 基が検出された。

遺構面の時期としては、後に述べる南北方向の屋敷地境界溝 1（遺構 436）、屋敷地境界柱穴列 1（遺構 262 ～ 276）及び東西方向の屋敷地境界溝 2（遺構 368）が存在していることから、調査区一帯が安藤家、佐野家、大高家の 3 区画の屋敷地に分割されていた 17 世紀中頃から 18 世紀中頃までが考えられ、出土遺物の時期とも齟齬がない。

遺構および遺構出土遺物の記述の前に第３層整地土から出土した遺物について次に記述する。

258・259 は土師器皿である。258 の色調は赤褐色系で、体部側面を強いナデにより口縁部が肥厚するタイプの皿である。259 の口唇部には煤が付着していることから灯明皿である。260 ～ 263 は肥前系陶器で、260・261 は折縁皿、262・263 は碗である。261 の見込には砂目、262 の畳付には目跡が認められる。264・265 は京・信楽系の小杉碗である。266 ～ 272 は瀬戸美濃系陶器である。この内、266 ～ 268 は天目茶碗で、268 は白天目茶碗である。269 は褐釉の内禿皿、270 は緑釉で加飾した碗である。271・272 志野で 271 は蓋、272 は角向付で、環状の３足を付す。273 は肥前系の青磁香炉である。274 は美濃瀬戸系の鍋蓋で、摘みの周辺に３条の浅い沈線が巡る。275 はおろし皿で、底部は無釉である。276 は備前焼の火入れ、277 は外側面に斜格子タタキが認められる焙烙である。278・279 は外型成型による瓦質の茶釜である。

以下、代表的な遺構について報告する。

苑池状遺構２（遺構 437）（図 44、図版 12）

調査区の南東隅、ｂ 22 ～ｆ 24 グリッドで検出した落ち込み状遺構である。南側は調査区外のため規模および形状は判然としない。遺構は大きく崩壊しているが、落ち込み全体の縁辺部に石垣状の護岸が築かれていた状況を窺うことのできる痕跡を一部で確認できた。また、西側ではテラス状の張り出しを確認した。護岸やテラスなどの造作から大規模な苑池状遺構と判断して調査を進めた。

検出できた範囲ではあるが、平面形状はアメーバー状を呈する。規模は東西長 19. 2 m、南北長 12. 0 m以上を測る。

テラス状の遺構は西辺から舌状に約 5. 8 m苑池内に突き出し、面はほぼ平坦となっている。護岸の石積みの残骸は２箇所で検出した。テラス状遺構の突き出し部分で約 3. 6 mが遺存しており、約 0. 25 ～ 0. 5 m大の砂岩を配していた。この地点と対峙する東側でも曲線状に一部が遺存しており、砂岩の石積み２段分を 2. 8 m検出した。

東西方向での断面形状は緩い「Ｖ」字状を呈し、深さは最も深い箇所で 2. 44 mを測る。調査区の南壁で土層堆積状況を検討したところ、最も深い箇所の底から約 0. 7 mは還元色の粘土層がレンズ状の堆積を示すが、それより上層は水平堆積で、第２遺構面を形成する整地層が堆積し、

敷地造成に伴い埋められたものと考えられる。なお、下層の粘土層からの出土遺物は極少量であったが、出土遺物の殆どは中層、上層からのものである。以上の状況から、下層の土層は苑池として機能していた時期の堆積土と考えられる。また、深さが２m以上に掘削されているのは、帯水層からの自噴による水の維持効果を狙った可能性も考えられる。

出土遺物には肥前系陶磁器、京・信楽系施釉陶器、焼締陶器、土師器皿、土師質土器、焙烙、土瓶、土製品、瓦類などがある。なお、青磁染付、広東碗、紅皿等の 18 世紀中頃以降あるいは 19 世紀に入る遺物もかなり混入している。この状況は、上面からの遺構の重複があった可能性が高いと考えらる。

280・281 は土師器の皿である。280 は透明釉施釉の灯明皿、281 は白色系の土師器皿である。282 ～ 307 は肥前系磁器である。この内、282 ～ 289 は染付碗で、287・288 は腰が張るタイプのものである。289 は小碗で、口縁部の四方襷の絵付け部分が肉厚となり段が付く。290 ～ 294 は染付の蓋である。291・292 は広東碗、290・293・294 は丸碗の蓋である。294 は青磁染付である。295 ～ 299 は広東碗で、298・299 は器高の低いものである。300・301・303 は皿である。300 は器壁が厚く、見込みは蛇の目釉剥ぎとなる。303 は青磁で、三足を付し、内底面に花弁（梅？）を描く。302 は口縁部～体部の一部のみが遺存し、角鉢と思われ、中国製の可能性もある。304 は染付小杯で外面に簡略化した飛鳥を描く。305 は白磁の猪口である。306・307 は小杯で、306 は染付、307 は白磁であるが、図柄の部分が欠損していれば染付の可能性もある。

308 ～ 311 は京信楽系陶器である。308 ～ 310 は小杉碗、301 は皿で、内面に山水文を描く。312 は肥前系陶器で、灰釉施釉後、口縁部に鉄釉の流掛けを施す。313 ～ 315 は瀬戸美濃系陶器である。313 は天目茶碗、314 は鉄釉拳骨茶碗で、外面に長石釉を斑点状に置いて加飾する。315 は口縁部の内外面に緑釉の流掛けを施した皿である。

316 ～ 319 は肥前系磁器で、316・317 は染付仏飯器、318・319 は白磁の紅皿である。320 は京・信楽系の蓋で、燗鍋などの蓋か。321 ～ 324 は落し蓋である。325 ～ 328 は肥前系染付で、325 はお神酒徳利、326 は線香立か。327・328 は瓶で、徳利の形態になると思われる。329 は施釉陶器瓶の底部である。

330 は水注、注口は欠損する。331 は内面無釉のため、観察表で火入れとしたが不確かである。332 は丹波の徳利の底部である。333 は瀬戸美濃系の灰釉筒形香炉。334 は備前焼の火入れである。335 は壺の落し蓋である。

336 ～ 339 は擂鉢である。336・337 は堺明石系、338 は備前焼、339 は肥前系である。

340・341 は備前焼の鉢である。342・343 は丹波焼の甕である。344 は瀬戸美濃系の長石釉施釉の水鉢である。

345 ～ 347 は土師質土器、345 は焙烙、346 は焼塩壺の蓋、347 は風呂である。

通路状遺構２（遺構 342）（図 45、図版 12・13）

ｂ 19 ～ｃ 22 グリッドで検出した溝状に掘り込まれた南北方向に延びる遺構である。遺構の南側は苑池状遺構２（遺構 437）に接続していたと考えられる。また、東側壁面の一部に石積みが残存していた箇所を検出した。

掘り込まれた遺構の検出長は約 16.8 m、幅は約 2.4 ～ 2.8 mを測る。残存の深さは約 0.5 m

を測り、底面は平坦面となる。また、石積みは、壁面に沿って幅約 0.65 m、深さ 0.1 mと溝状に掘られた底面に大振りの砂岩を並べ石積みの基礎とし、その上に結晶片岩の割石を積んだ構造であった。石積みの高さは 0.72 m、延長 1.82 mが残存していた。

なお、壁面沿いに溝状に掘られた遺構は石垣との関連や、土層が水平堆積を示すことから排水のためではなく、石積みの基底部の石を据えるために掘られたものと考えられ、基底石を据えた後は速やかに埋め戻されたと考えられる。以上の状況から、この遺構の構築時は、東西の壁面に石積みの化粧を施し、その間が中庭の苑池へと続く通路として使用されていた可能性が高い。付言すれば、化粧石は壁面のみならず、底面にも結晶片岩の割石を配し、苑池に調和する造作を施していた可能性もある。

溝状の遺構からは肥前系陶磁器、焼締陶器、土瓶、行平鍋、土師器皿、土製品、瓦類などが出土している。

348 は肥前系染付端反碗である。349 は肥前系白磁碗の底部。350 は施釉陶器で、筒茶碗になるのか。351・352 は土瓶、353 は堺擂鉢、354 は丹波焼の徳利である。

348 の端反碗や土瓶等の 19 世紀代の遺物が出土することから、上面からの遺構の重複があった公算が高い。

礫充填土坑（遺構 438・439）（図 55、図版 13）

ａ 18 グリッドで礫を詰めた遺構を２基検出した。２基は約 0.8 m隔てた位置で並立している。遺構 438 の平面形状はほぼ円形を呈し、掘形は直径 0.8 ～ 0.85 mを測る。掘形の内側には 0.2 ～ 0.3 m大の大振りの砂岩、中には 0.05 ～ 0.15 mの小振りな割石が散乱した状況で検出した。遺構 439 の掘形の規模は 1.0 ～ 1.05 mを測り、石の遺存状況は、遺構 438 と同様な状況を示す。残存の深さは、遺構 438 が約 0.3 m、遺構 439 が 0.25 mを測り、若干ではあるが遺構 438 の方が深い。断面形状は双方共に船底状を呈し、底は平坦で、側面はやや斜めに立ち上り掘形の肩部となる。埋土は細砂混じりのシルトである。

この２基の遺構の性格は明確ではないが、平面および断面からの配石状況を観察すると、当初は掘形の内側に大振りな石を３ないし４段程度を積み巡らしていたものと考えられる。検出位置から判断すると、屋敷地の前庭に関係した施設と思われる。

遺構 438 からは瀬戸美濃系灰釉皿・天目茶碗、土師器皿、瓦片などが出土しているが、遺構 439 からの出土遺物は皆無である。

519 は口縁部が肥厚する土師器皿である。520 は瀬戸美濃系の灰釉内禿皿である。

屋敷地境界溝１（遺構 436）（図 46、図版 14）

ｇ 16 ～ｇ 20 グリッドで検出した溝状遺構である。この溝は第２遺構面で検出した土塀基礎（遺構 86）の下層に存在し、方向を土塀基礎と同一にする。また、溝状遺構の両側傾斜面上には柱穴が等間隔に配置されている状況も確認した。

遺構の規模は、検出長約 19.3 mで、北側は調査区外に延び、南側は調査区中程で終息する。幅は約 1.8 ～ 2.0 m、深さは約 0.8 ～ 1.0 mを測り、北から南に若干低くなる。柱穴の掘形の規模は 0.65 ～ 0.85 mを測る。深さは溝底よりも若干深く掘り込まれている。柱間は多少のバラつ

きはあるものの、柱間６尺を意識していると思われる。

溝状遺構および柱穴の埋土には同様なシルトブロックが混ざっているところから、一連の遺構であり、且つ、廃棄時には一括で埋戻されたと思われる。

また、溝底面の土層ではラミナが認められ、水が流れていた可能性がある。そのため、屋敷地が排水溝を兼ねた溝で区画され､この溝の東西において各屋敷が塀を構築していたと考えられる。なお、溝状遺構の東側に肩が幅 0.9 ｍで掘り窪められた箇所があり、東側に所在いていた安藤家屋敷地の排水溝に接続されていた可能性もある。

溝および柱穴を充填していたシルトは、第３遺構面から第２遺構面に整地する際に埋められたものである。そのため、屋敷地境界を溝から土塀に変更する際に充填され、土塀構築のための地固めとして行われたものと考えられる。

溝からは灯明皿、肥前系陶磁器、瀬戸美濃系施釉陶器、焼締陶器、焙烙、焼塩壷、瓦類などが出土している。

355・356 は土師器皿である。双方共に白色系で、胎土はよく水簸されている。357 は瀬戸美濃系の灰釉皿である。358・360 は肥前系染付で、358 は碗、360 は瓶の底部である。359 は肥前系施釉陶器の碗である。361 は瀬戸美濃系の鉄釉施釉の壷と思われる。

屋敷地境界柱穴列１（遺構 262 ～ 276、280・281）（遺構 279・445・289・261）（図 47、図版 14・15）

ｇ 21 ～ｇ 25 グリッドで検出した柱穴列である。ほぼ直線上に 17 個（遺構 262 ～ 276、280・281）の柱穴が並ぶ。これらの柱穴は北側で検出した屋敷地境界溝１（遺構 436）に付随する西側柱穴列の延長線上に位置し、南側の調査区外に延びている。屋敷地境界の塀を構成する柱穴列の可能性がある。

検出できた柱穴列の延長は 12.9 ｍで、規模は直径 0.28 ～ 0.82 ｍまで大小様々で、形状は円形、楕円形、隅丸方形を呈するものがある。残存の深さは 0.06 ～ 0.32 ｍを測る。また、柱穴列は 264・265、266・267、268・269 と近接した柱穴が２個一対の様相を呈し、１スパンを構成しているものと思われる。また、柱穴列の東側に近接して柱穴が点在する。北側から遺構 279・445・289・261 と並び、３間（5.15 ｍ、4.20 ｍ、3.0 ｍ）である。この柱穴列は、屋敷地境界柱穴列１に関係する可能性が高く、補助的な役割を担った柱穴列と思われる。

これら柱穴からの出土遺物は皆無である。

地下式倉庫群（遺構 360・361・451）（図 48・52・53、図版 16）

地下を掘削して室状にした遺構のことを穴蔵あるいは地下室等と呼称するが、ここでは地下式倉庫という呼称で説明する。地下式倉庫を３基検出した。

（遺構 360）ｉ 22・ｋ 22 グリッドで検出した大型土坑である。遺構の東側は撹乱により遺存していない。

平面形状は隅丸長方形を呈する。規模は東西長約 9.5 ｍ、南北長約 3.4 ～ 3.9 ｍを測り、残存の深さは 0.77 ｍを測る。遺構長辺の南側には階段状の昇降部が設けられているところから地下式倉庫と判断した。昇降路の遺存状態は良好でなく、僅かに階段を形成する段を確認できる状況

で、段と段の間は階段の体を成しておらず緩斜面となる。階段幅は約 0.8 ～ 1.30 mで３段から成る。埋土には炭、焼土が大量に投棄されていることから火事場整理の様相が窺えられる。出土遺物には肥前系陶磁器、瀬戸美濃系施釉陶器、中国製磁器、焼締陶器、瓦類、土師器皿、土師質土器などの土器類の他、鉄釘がある。

362・363 はよく水簸された白色系の土師器皿である。双方共に灯明の痕跡はない。

364 ～ 368 は肥前系染付碗で 364 ～ 367 は丸碗、368 は畳付以外を施釉した 358 と同タイプの碗である。374・375、378・379 は肥前系染付皿である。374 は初期伊万里の皿である。370・371 は肥前系磁器の碗で、370 は青磁碗、371 は瑠璃釉碗である。

369・376・377 漳州窯の青花である。369 は饅頭心の碗、376・377 は皿で、外面底部のカンナ痕が明瞭である。380 は龍泉窯系青磁盤の口縁部である。

372・373・381 ～ 393 は肥前系施釉陶器である。372 は皿で、内底に砂目が認められる。373・381・382 は灰釉碗である。383 ～ 388・393 は皿で、383・384 の内底部には胎土目痕、386 は窯内で３枚が溶着したものである。内底部と畳付に砂目が認められる。387 は腰折れで、段が付き、内底部と畳付に砂目が認められる。388 は大皿で、内面白化粧土に鉄絵を描く。393 は刷毛目の上から鉄絵を施す。389 ～ 392 は鉢である。389 は絵唐津、390 は口縁が玉縁状となり、外面に銅緑釉を施釉している。391 は二次焼成を受け、釉が変色する。392 は外面に白化粧土が若干見受けられる。

394・395 は瀬戸美濃系陶器で、394 は三足を付す灰釉皿である。394 は鉄絵で加飾した灰釉盤であるが二次焼成を受けている。

396・397・399 ～ 407 は肥前系磁器で、396 は染付仏飯器、397 は青磁合子の蓋、399 は色絵香炉の破片である。400 は染付茶入れか。401 は環状の鈕を付した青磁の蓋、402 は染付瓶の底部、403 は青磁香炉、404 の体部上半は欠損するが染付の壺と思われる。405・406 の破片は、呉須絵付けが欠損しているのかが不明であるため白磁とし､405 は壺の底部､406 は瓶の鶴首部分である。407 は染付瓶の頸部から肩部である。398 は漳洲窯の青花合子の蓋である。

408 ～ 414 は焼締陶器である。408 ～ 411 は備前焼で、408・409 は徳利の口縁部と底部、410 は壺の底部、411 は水指か。412 は信楽焼の耳付花瓶、413 は肥前系の火入れ、414 も肥前系の鉢である。415 は土師質の鉢で、硬質である。

（遺構 361）遺構 360 の北側に隣接して検出した大型土坑である。場所はｉ 21 ～ｋ 21 グリッドである。遺構 360 と並列して構築され、遺構 360 より東西長が長い。

平面形状は隅丸長方形を呈し、東西長 10.8 m、南北長 2,60 ～ 3.35 mを測る。残存の深さは約 1.2 mを測る。底は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。この遺構もまた南側に階段状の昇降部が取付く構造となっている。階段は６段で、幅は 0.55 ～ 1.0 mを測り、下段にいくほど幅広となる。この状況から地下式倉庫と判断できる。埋土は水平堆積を示し、３層に分層でき、何れの層にも炭、焼土を大量に含むことから火事場整理の一括投棄と思われる。しかしながら、この火災がいつの時期のものかは文献資料では確認できない。

以上、この遺構 360・361 の２基については素掘りの大型土坑であること、階段状の昇降施設や埋土の状況が酷似することから同様の遺構であると考えられるが、用途的には同じなのかとい

う点については判然としない。

この遺構からは肥前系陶磁器、瀬戸美濃系陶器、中国製磁器、瓦類、宋銭が出土している。

416 は土師器皿である。417・418・423・424 は中国製青花である。417・418 は景徳鎮の碗である。423・424 は漳洲窯の皿で、遺構 360 から出土した 376・377 と同タイプのものである。419 ～ 422･425･427 は肥前系の染付である。419 ～ 422･425 は皿で、420 は口縁端部を折れ縁状、421 は端反状にしている。427 は瓶で花生か。混入の可能性もある。426 は肥前系の内型成形による青磁染付皿である。

428 ～ 434 は肥前系陶器の皿である。428 は折縁皿で内底部に砂目､430 の口縁部は鍔縁となり、内底部と畳付に砂目が認められる。431 は刷毛目唐津、432 の体部内面で銅緑釉と灰釉が刷毛目となる。433 は内底部に砂目痕、434 の内面の釉の一部が青緑色に発色する。

435 は瀬戸美濃系の灰釉皿である。436 は備前焼の鉢、437 は肥前系陶器の壺である。

（遺構 451） j 13 ～ k 14 グリッドで検出した南北に長軸をもつ大型土坑である。遺構 452 の土坑と重複する。遺構 452 を掘り切ると遺構 451 の南肩を検出した。東側は僅かな範囲であるが調査区外に延びる。

平面形状は隅丸長方形を呈し､南北長約 4.08 m､東西長 1.98 m以上を測る。残存の深さは約 1.6 mを測る。断面形状は、先述した地下式倉庫 360・361 に類似するところからこの遺構もまた地下式倉庫と考えられる。

土層の堆積状況は 15 層を境にして上層、下層の堆積の様相が違う。下層はほぼ水平堆積を示すが、上層は北からの流れ込みの様相を呈しているところから、長い時間経過をもって埋没したように感じられる。また、土質においても、上層は細砂が主と成るのに対し、下層はシルトが主と成っている。このような状況は、地下式倉庫の遺構を廃絶し、ゴミ穴として活用したとも考えられる。

先述した２基の地下式倉庫との相違点で言えば、昇降部は急勾配で、梯子等の施設が取り付けられていたと考えられる杭跡を検出したこと、遺構の南側短辺に昇降部が付随していること、長辺が南北方向であること、埋土には焼土・炭を含まず、徐々に埋められた様相を呈すること等が挙げられる。

遺構を検出したのは屋敷地境界溝１（遺構 436）の西側、屋敷地境界溝２（遺構 368）の北側の敷地にあたり､この時期に当所に所在していた佐野家屋敷に付随する施設である可能性が高い。出土遺物には肥前系陶磁器、瀬戸美濃系施釉陶器、京・信楽系施釉陶器、焼締陶器、土師皿などの土器類がある。木製品も漆椀、箸、ヘラ状木製品、加工部材、杭といった遺物が一定量出土している。

484 ～ 488 は、口縁部を強い横ナデにより肥厚させた土師器皿である。何れも歪みが著しく、灯明の痕跡は確認できない。489 は塩壺の蓋である。490 は肥前系陶器の碗である。

491・492 は瀬戸美濃系の志野四方向付である。493 は備前焼擂鉢である。

屋敷地境界溝２（遺構 368）（図 49、図版 17）

調査区西端の l 20 ～ o 20 グリッドで検出した東西方向の屋敷地境界溝である。この時期の南

側と北側の屋敷地を区画する溝状遺構と考えられる。

検出長は約 11.0 mを測り、西側は調査区外に延び、東側はｏ 20 グリッドで終息する。検出幅は約 0.55 ～ 1.0 m、残存の深さは 0.12 ～ 0.3 mを測り、溝底は西から東に低くなる。埋土は２層に分層でき、双方ともに黄色系の細砂で充填されていた。なお、1 層には炭や焼土、土層全体にはシルトブロックが混じることから自然堆積と考え難く、遺構 436 と同じく廃棄時に一括で埋められたものと思われる。

南側の隣接する箇所には溝状遺構と同方向に柱穴列（遺構 314 ～ 321）が並ぶ。北側にも２基の柱穴列(遺構 322･323)が遺存するが南側ほど明瞭でない。柱間の距離にはバラつきが目立つが、何れも尺を意識した柱間であると思われる。柱穴掘形の形状は円形あるいは楕円形を呈し、直径約 0.35 ～ 0.65 mを測る。残存の深さは 0.08 ～ 0.15 mと浅いものである。埋土は黄色系の細砂～シルト、あるいは細砂、細砂～微砂などで細砂を主とする溝状遺構と同様な傾向を示す。

この遺構は、溝状遺構と柱穴列の関係から、先に記述した屋敷地境界溝１（遺構 436）と酷似しており、方向は違うものの、同様の遺構が旧検察庁庁舎建設時の撹乱により上部は削平されたが底面付近だけが遺存したものと考えられる。検出面の標高は､遺構 436 の検出面に比べても 0.7 ～ 0.8 m低い地点で検出された。

ここからの出土遺物は皆無である。

土坑状遺構（遺構 350）(図 50、図版 18)

調査区ほぼ中央の北端、ｉ 16・17 グリッドで検出した土坑状遺構である。掘形の平面形は長方形を呈し、規模は東西長 2.45 m、南北長 2.10 mを測る。残存の深さは約 1.10 mを測り、断面の形状は逆台形状を呈する。四周の壁はほぼ垂直気味に掘られている。

埋土については、人為的に埋められた水平堆積となる上層と、自然堆積の下層に分けることができる。上層の埋土には総じて炭片や焼土が認められるが、下層については多量の土器、木器、瓦片などを含む砂混じりの粘土層となる。下層出土の遺物については完形品ではないため、廃棄されたものと考えられることから、ゴミ穴として利用されていた公算が高い。

ここからは、土器類では肥前系陶磁器、京・信楽系施釉陶器、焼締陶器、灯明皿、焙烙、焼塩壺、木製品では下駄、漆椀、曲物の側板・蓋・底板、加工部材、金属製品では簪、石製品では硯、他に瓦類といったような多種多様の遺物が出土した。

438 ～ 440 は土師器皿で、438・439 には灯明の痕跡が見られる。441 は備前焼の灯明皿である。442 は透明釉施釉の灯明受皿である。443 は透明釉施釉の秉燭である。灯芯用の突起が欠損する。

444 ～ 453 は肥前系染付碗である。444 ～ 448 は丸碗、449 ～ 451 は「くらわんか手」と呼ばれる器壁が厚く、内底面を蛇の目釉剥ぎした碗である。452・453 は陶胎染付の腰の張った碗で、胎土は灰色を呈する。

454・455 は京・信楽系陶器の碗で、454 は腰の張った碗、456 は「せんじ」と呼ばれる腰折れ碗である。

456 ～ 462 は肥前系染付である。456 は丸碗の蓋、457 ～ 460 は皿、459・460 は器壁が厚く、蛇の目釉剥ぎである。461・462 は猪口で、双方共に内面は無文である。463 は青磁染付の猪口である。464 は白磁の小杯。

465・466 は京・信楽系の碗で、色絵具で絵付けを施す。

467 ～ 472 は肥前系陶磁器で、467 香炉？ 468・469 は染付仏飯器で、468 は磁器、469 は陶器である。470 は香炉、471・472 は染付の瓶である。472 は染付瓶である。絵付けは丸窓にＡＤのアルファベットを描く。口はコンプラ瓶の形状に似て、二重に突出する。

473 は土瓶のＳ字状の注口部、474 は鉄釉施釉の鍋、475 は瀬戸美濃系灰釉の水注である。

476 ～ 480 は土師質土器で、476 ～ 479 は焙烙である。480 は土堝で、器壁が非常に薄い。

481・482 は堺擂鉢である。483 は風炉で、外面に櫛描き波状文を巡らす。

土坑状遺構（遺構 442）（図 51、図版 18）

ｎ・ｏ 18・19 グリッドで検出した土坑状遺構である。平面形状は隅丸長方形を呈し、東西に長軸をもつ遺構と思われるが、東側は、上面からの撹乱により削平されている。

東西長は 3.3 ｍ以上、南北長約 3.7 ｍを測る。残存の深さは中央部の最も深い箇所で 0.55 ｍを測り、断面形状は両肩から緩やかな傾斜で底面となり、舟底状を呈する。埋土はレンズ状の堆積を示し、３層に分層できる。下層の２・３層は自然堆積の感があるが、上層の１層には焼土や炭が認められるため人為的に埋められたと考えられる。下層の 3 層には礫、瓦片が多量に入る。この遺構の性格は不明である。

遺物には肥前系陶磁器、瀬戸美濃系施釉陶器、中国製磁器、焼締陶器、瓦片などがある。

494 ～ 497・500 ～ 505 は肥前系染付である。494 ～ 497 は碗で、497 は高台を無釉とするタイプのものである。500 は皿、501 は小杯、502 は多角形に面取りをした鉢 503 ～ 505 は瓶である。全て首部は鶴首になるものと思われる。498・499 は中国製染付碗である。

506 ～ 511 は肥前系陶器である。506 ～ 509 は碗で、506 は刷毛目唐津、507 は小碗、508 は内面と外面の釉を掛け分けており、使用によるものか、見込の釉は円形状に禿げている。509 は皮鯨の沓茶碗である。510・511 は灰釉施釉の皿である。512 は瀬戸美濃系の碗である。

土坑状遺構（遺構 419）（図 51、図版 18・19）

調査区中央西寄りで検出した大型の土坑状遺構である。形状はアメーバー状を呈し、遺構底面は凸凹となる。規模は南北約 11.40 ｍ、東西約 6.80 ｍを測る。残存の深さは土層図を作図した箇所で中央の最も深い地点で 0.48 ｍを測る。埋土はレンズ状の堆積を示し、何れの層も細砂～微砂層が主となる。なお、１～６層の最下層以外の層には炭や焼土が混ざり、火事場整理のため埋められた可能性が大きい。

この遺構からは肥前系陶磁器、焙烙、鞴の羽口、瓦類が出土している。

513 は肥前系染付碗で、高台は無釉となる。514 ～ 517 は肥前系陶器、514・515 は双方共に皮鯨で、内面に胎土目が認めらる皿である。516 は美濃唐津の杯、517 は香炉か？

518 は鞴の羽口で、1/2 以上は欠損している。

土坑状遺構（遺構 452・453）（図版 16）

遺構 451 の南側で検出した土坑状遺構２基で、遺構 452 は遺構 451 と重複し、遺構 451 より新しい。遺構 453 は 452 と重複し 452 より新しい。

遺構 452 の規模は南北長約 2.40 m、東西長 2.35 mを測る。残存の深さは最も深い箇所で 0.34 mを測り、側壁は、北側はほぼ垂直に落ちるが、南側は緩い傾斜で底となる。埋土は灰色系の細砂混じりのシルトである。

ここからの出土遺物は土師器皿のみである。

遺構 453 の南側は遺構 454 と重複し、当遺構の方が古い。規模は南北長約 3.50 m、東西長は 1.05 mを測る。断面形状は浅い「U」字状を呈し、残存の深さは 0.44 mを測る。埋土は２層に分層でき、灰黄系シルトが水平堆積を示す。

この遺構からの出土遺物は皆無である。

土坑状遺構およびピット状遺構（遺構 447・448・449・450・455・456・457・458・459）（図 54、図版 19・20）

柱穴列２と遺構 451（地下式倉庫）の周辺で多くの土坑状遺構を検出した。これらの遺構について若干触れておく。

遺構 447 は、遺構 451（地下式倉庫）の埋土の上面で検出した。平面形状は円形を呈し、直径 0.8 mを測る。残存深さは 0.12 mで、埋土は、炭片を多く含む灰色系の細砂混じりのシルトの単一層である。

ここからは丸瓦片と平瓦片が小量出土している。

遺構 448 はほぼ方形を呈し、長軸 1.18 m、短軸 0.76 ～ 0.90 mの規模である。残存の深さは 0.18 mで、断面形状は船底状となる。埋土は上下２層に分層できるが、双方の層にはシルトブロックが認められ、人為的に埋められた公算が高い。

遺物は肥前系磁器１片と焙烙１片が出土しているのみである。

遺構 449 の平面形状は円形で、直径 0.36 m、残存の深さは中心で 0.20 mを測る。断面形状は丸みを帯びた「V」字状となり、埋土は暗灰黄色の細砂混じりのシルトである。ピット状の遺構である。

ここからの出土遺物は皆無である。

遺構 450 の平面形状は楕円形を呈し、長軸 0.76 m、短軸 0.60 mを測る。残存の深さは 0.12 mと浅く、埋土は細砂混じりシルトの単一層である。ここからの遺構も皆無である。

遺構 455 は北側で遺構 452 と重複し、遺構 455 の方が古い。平面形状は不定形を呈し、規模は 1.15 ～ 1.45 mである。残存の深さは約 0.1 mと浅く、埋土は微砂混じりシルトの単一層で、底は多少の起伏がある。

遺物は丸瓦が２片出土している。

遺構 456 は浅いピット状の遺構である。遺構 455 と重複し、遺構 455 より新しい。平面形状は、直径 0.38 mの円形を呈する。残存の深さは 0.06 ～ 0.08 mと非常に浅く、埋土は細砂混じりのシルトの単一層である。

出土遺物は皆無である。

遺構 457 は遺構 459 の埋土上で検出した。平面形状はほぼ円形を呈し、直径 0.46 mを測る。埋土の細砂には炭片が混ざる。また、最も深い箇所には結晶片岩が据えられ、柱穴の柱当たりとも思われる。

ここから焙烙が１片、平瓦が２片出土している。

遺構 458 は、柱穴列２（遺構 454）の西側に近接して検出したピット状遺構である。柱穴列２とは方向性を異にすることから、関連性はないとものと考えられる。平面形はほぼ円形を呈し、直径 0.48 ～ 0.52 ｍを測る。埋土は細砂あるいは微砂混じりのシルトで､最上層には炭が混ざる。残存の深さは 0.30 ｍを測り、底からは、礎石と考えられる大きさ 0.10 ｍ程度の砂岩が出土している。

遺物は平瓦１片、鉄釘破片が１本出土している。

遺構 459 は、柱穴列２（遺構 454）の南側に近接して検出した土坑状遺構である。平面形状は長方形を呈し、南北長約 2.0 ｍ、東西長 1.54 ｍを測る。残存の深さは 0.15 ｍと浅く、埋土はシルトを主とした２層に分層できる。

ここからの出土遺物は皆無である。

礎石列１（遺構 454）（図 54、図版 20）

ｊ 15 ～ｋ 15 グリッドで検出した礎石列である。幅 0.8 ｍ、残存の深さ 0.34 ｍの規模の東西方向の布掘状に掘り込んだ遺構である。その底には３基の礎石が並ぶ。礎石は約 0.25 ～ 0.35 ｍの大きさの砂岩である。

西側は調査区内で終息するが、東側は調査区外に続くため総延長は不明である。この遺構の南北に対応する布掘状の溝や礎石が検出されないことから、比較的規模の大きい東西方向の塀の基礎とも考えられる。なお、礎石２間の芯々間の距離は 3.06 ｍを測り、西から 1.62 ｍ、1.44 ｍである。なお、布掘り状の掘形からの出土遺物は皆無である。

柱穴列２（遺構 402・403・440）（図 55、図版 13）

ｌ 14・ｌ 15 グリッドで検出した南北方向の柱穴列である。検出したのは２間分で、直径 0.2 ～ 0.3 ｍの柱穴３基である。柱穴内には根石、礎板となるような石材は認められなかった。両端の柱穴の距離は芯芯間で 4.26 ｍを測り、北から 2.34 ｍ、1.92 ｍである。柱穴の深さは両端が約 0.15 ｍであるのに対し、真中が約 0.25 ｍと深い。簡易的な柵や建物であれば、柱の上端で寸法を合わせば事が足りると考えられる。なお、遺構 403 から土師質土器の細片が２片のみ出土している。

礫敷き土坑（遺構 401）（図 55、図版 13）

ｋ 14 グリッドで検出した礫を敷き詰めた土坑である。礫は 0.03 ～ 0.1 ｍ大の河原石で、土坑の表面を覆うように敷きつめられている。

平面形状は長楕円形を呈し､東西長約 0.75 ｍ､南北長約 0.6 ｍを測る。残存の深さは 0.05 ～ 0.10 ｍと浅く、北側は南側より浅く、河原石も南側に比べ密でない。礫は表面のみに敷かれており、その下層は砂質土である。断面形状は浅い「Ｕ」字状となり、底面はほぼ平坦である。当初の掘り込みは南壁のように垂直に掘られていたと思われる。

この遺構を検出した場所は、佐野家屋敷地の東側、主屋の裏側にあたると思われること、また、柱穴列２のような簡易な建物を検出した場所に隣接していることから、河原石の上に蹲踞などの手水鉢を置き手洗いの場であった可能性もある。

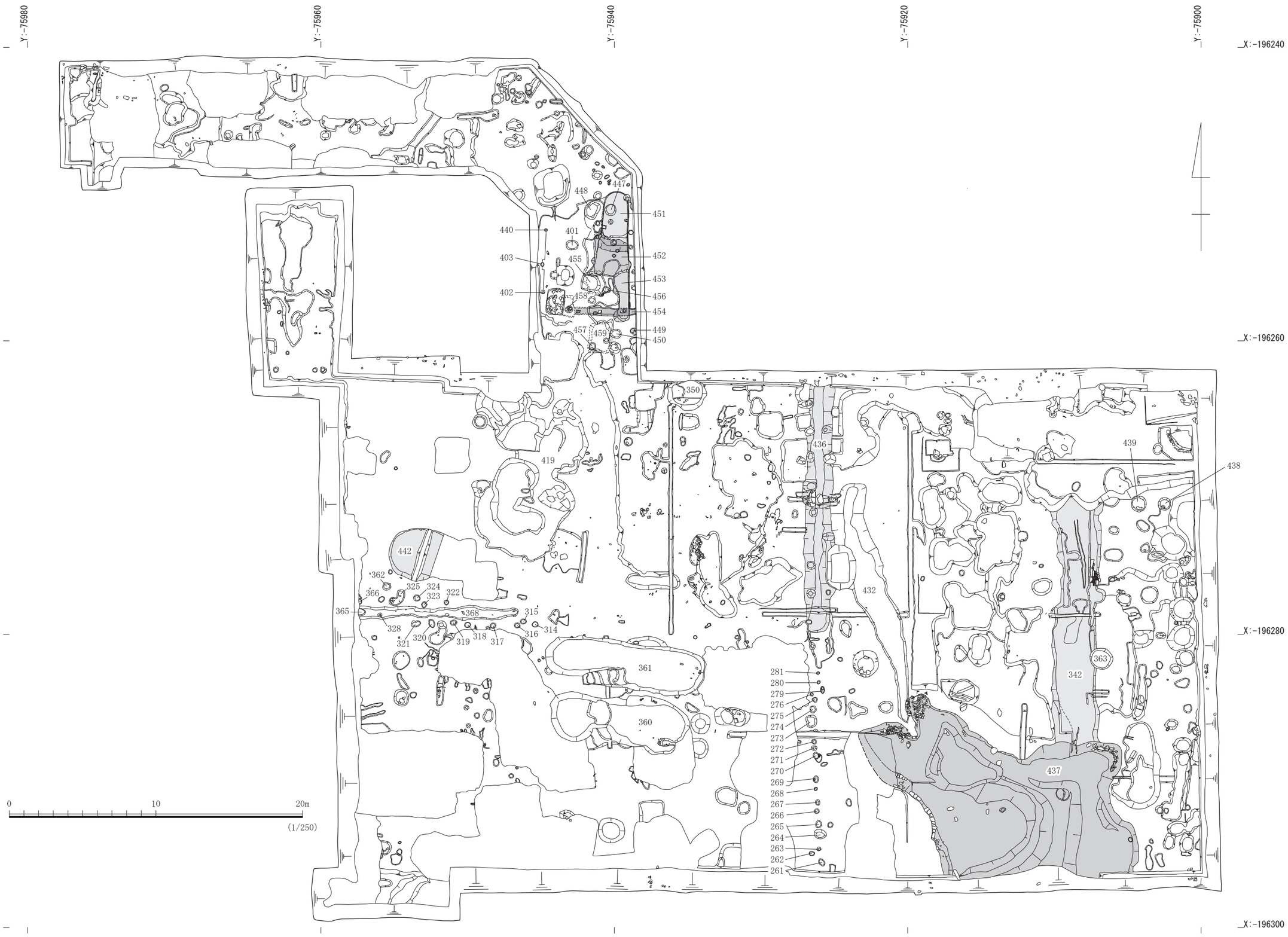


図４３　１区第３面検出遺構平面図

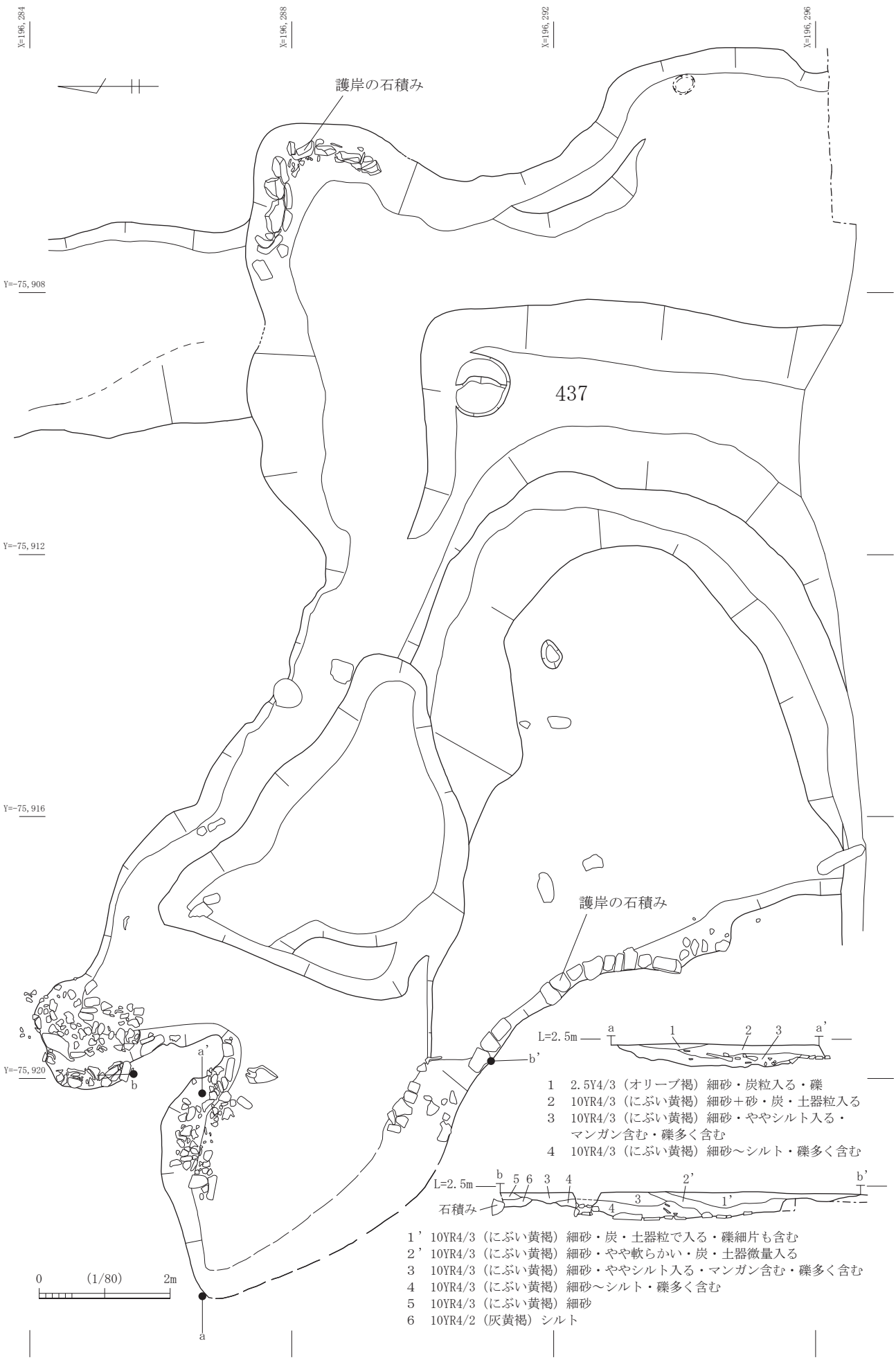
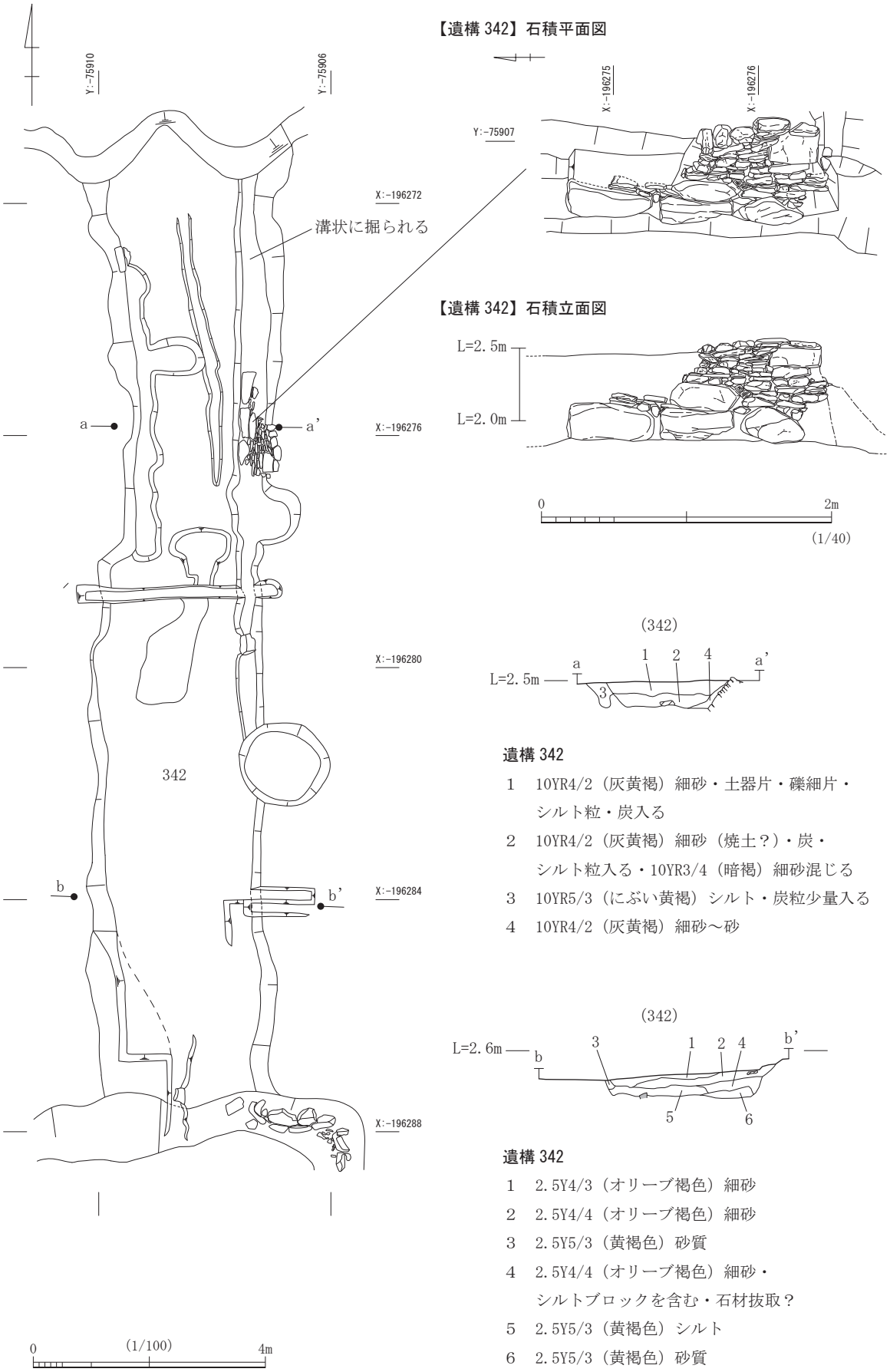


図４４　１区第３面　苑池状遺構２（遺構 437）



遺構 342

1　10YR4/2（灰黄褐）細砂・土器片・礫細片・シルト粒・炭入る
2　10YR4/2（灰黄褐）細砂（焼土？）・炭・シルト粒入る・10YR3/4（暗褐）細砂混じる
3　10YR5/3（にぶい黄褐）シルト・炭粒少量入る
4　10YR4/2（灰黄褐）細砂～砂

遺構 342

1　2.5Y4/3（オリーブ褐色）細砂
2　2.5Y4/4（オリーブ褐色）細砂
3　2.5Y5/3（黄褐色）砂質
4　2.5Y4/4（オリーブ褐色）細砂・シルトブロックを含む・石材抜取？
5　2.5Y5/3（黄褐色）シルト
6　2.5Y5/3（黄褐色）砂質

図４５　１区第３面　通路状遺構２（遺構 342）

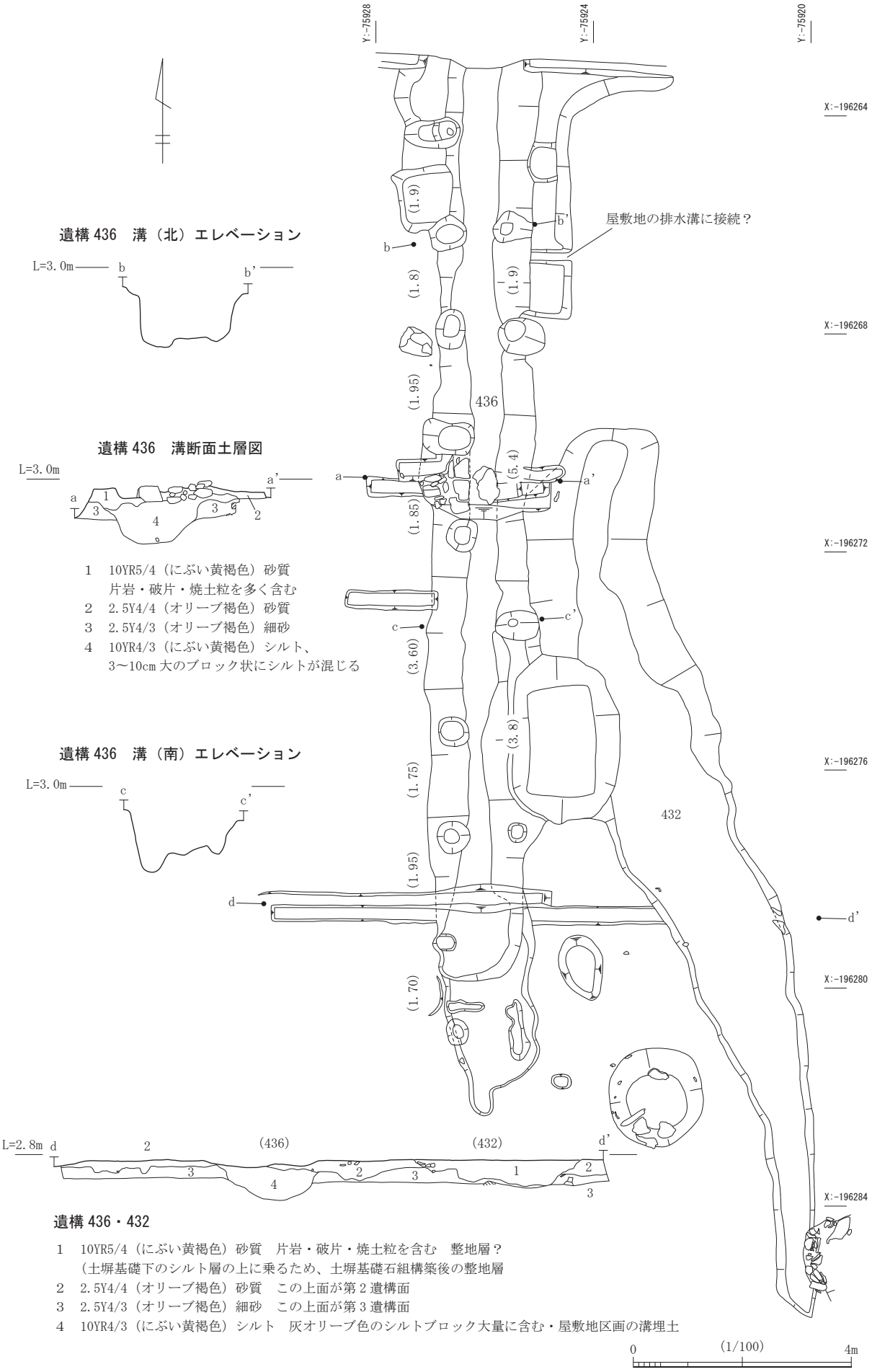
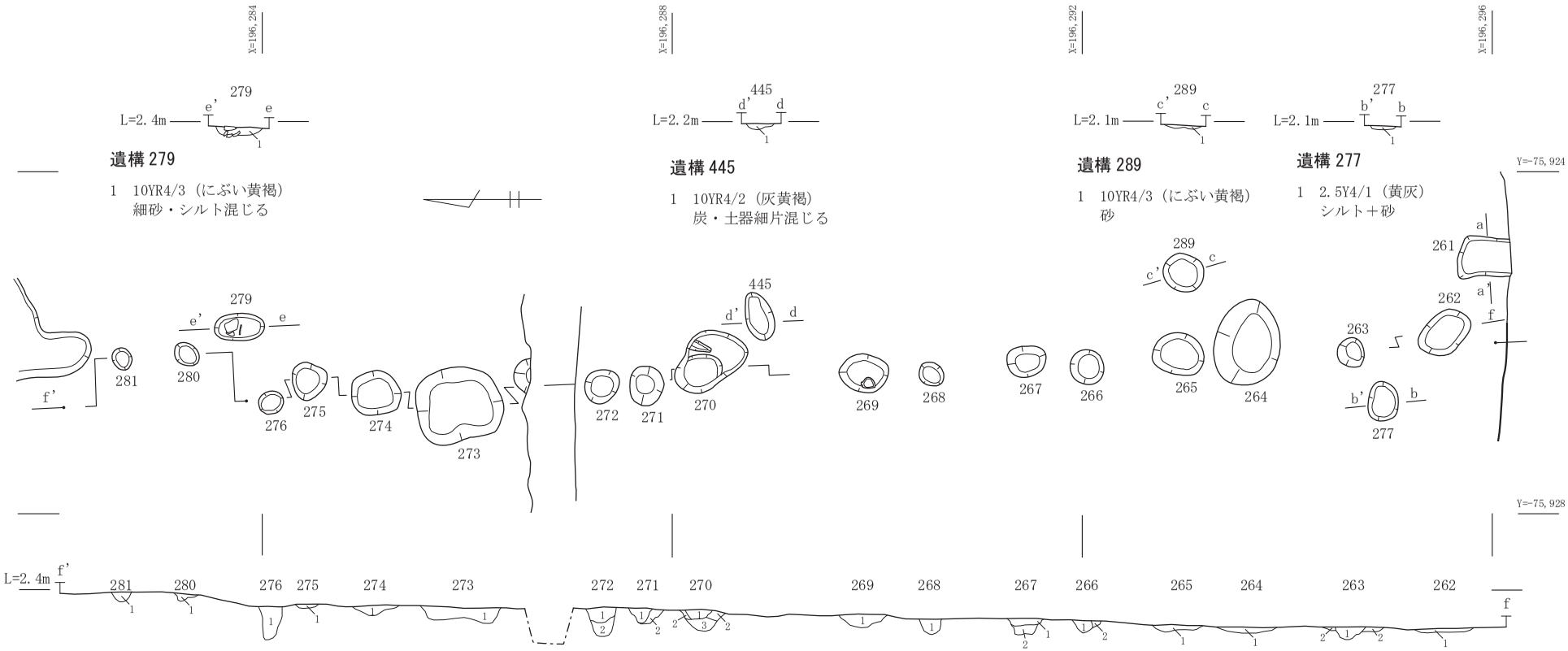


図４６　１区第３面　屋敷地境界 溝１（遺構436）



遺構 281　1　10YR4/3（にぶい黄褐）細砂・ややシルト混じる

遺構 280　1　10YR4/4（褐）砂～細砂・炭微量入る

遺構 276　1　2.5Y5/1（黄灰）シルト

遺構 275　1　2.5Y4/3（オリーブ褐）砂

遺構 274　1　2.5Y4/2（暗灰黄）砂

遺構 273　1　10YR4/2（灰黄褐）砂・炭粒少量入る

遺構 272　1　5Y5/1（灰）＋2.5Y4/2（細灰黄）細砂～シルト
2　2.5Y5/1（黄灰）細砂

遺構 271　1　2.5Y4/2（暗灰黄）細砂
2　2.5Y4/2（暗灰黄）細砂・炭混じる

遺構 270　1　5Y5/2（灰オリーブ）細砂～シルト
2　2.5Y4/3（オリーブ褐）細砂～砂炭・シルト粒で入る
3　2.5Y4/1（黄灰）細砂

遺構 269　1　2.5Y4/2（暗灰黄）細砂～シルト

遺構 268　1　中央部 2.5Y4/2（暗灰黄）シルト
周り 5Y4/2（灰オリーブ）細砂

遺構 267　1　2.5Y4/2（暗灰黄）細砂
2　2.5Y4/3（オリーブ褐）細砂

遺構 266　1　2.5Y4/3（オリーブ褐）細砂～シルト
2　2.5Y4/2（暗灰黄）砂

遺構 265　1　2.5Y4/2（暗灰黄）細砂

遺構 264　1　2.5Y5/3（黄褐）砂

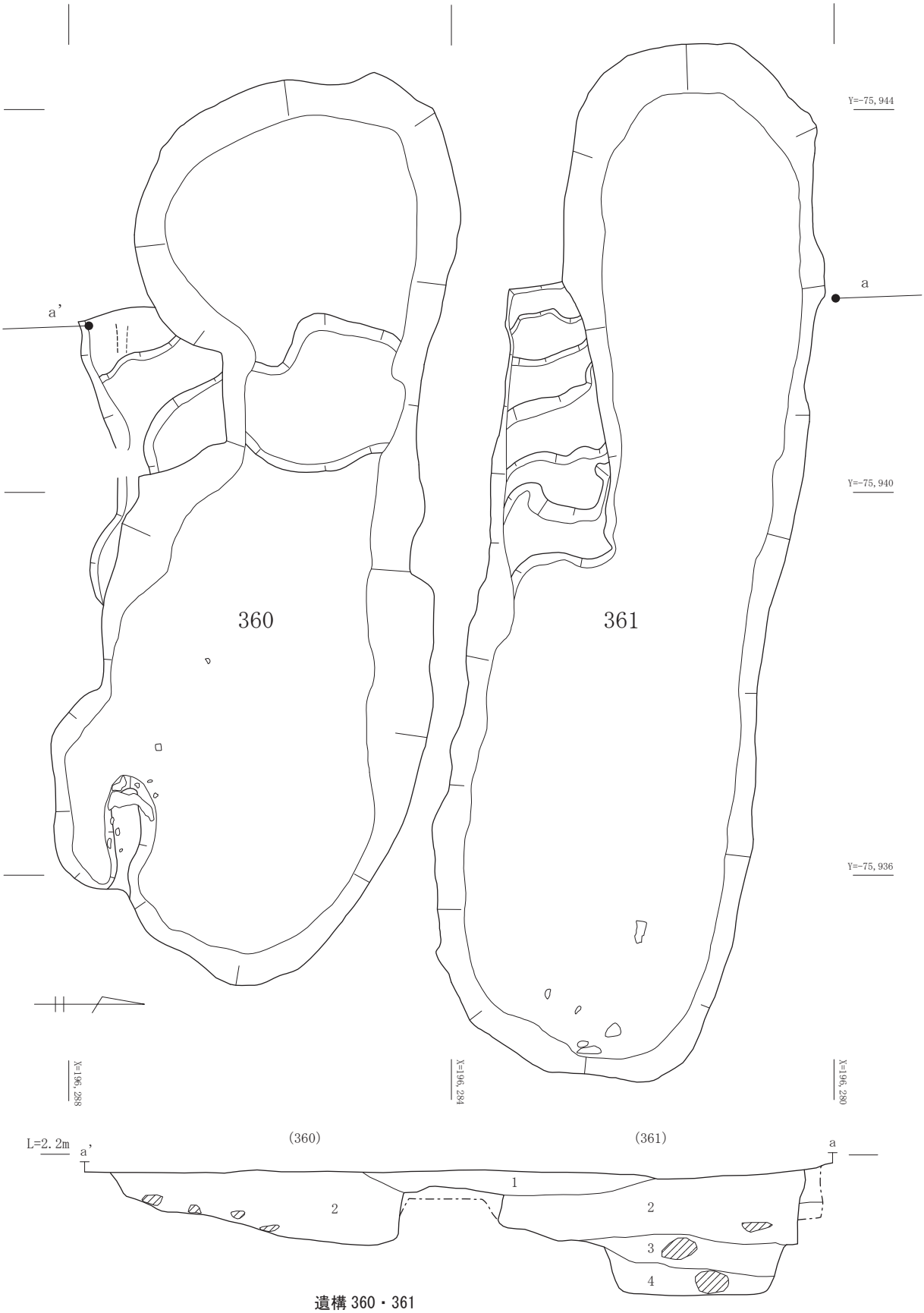
遺構 263　1　7.5Y4/1（黄灰）細砂
2　10YR4/3（にぶい黄褐）砂

遺構 262　1　2.5Y4/2（暗灰黄）砂

遺構 261
1　2.5Y4/2（暗灰黄）細砂

0　(1/60)　2m

図４７　１区第３面　屋敷地境界柱穴列１（遺構 262 ～ 276・280・281）



遺構 360・361

1　5Y5/2（灰オリーブ色）細砂　焼土粒をやや含む　攪乱土（現代）か？
2　10YR4/3（にぶい黄褐色）砂質　炭・焼土粒を大量に含む
3　2.5Y4/2（暗灰黄色）砂質　炭・焼土土を多く含む　オリーブ色シルトブロックを含む
4　10YR4/3（にぶい黄褐色）砂質　炭・焼土粒を大量に含む　基本的に２層と同じ

0　(1/60)　2m

図４８　１区第３面　遺構 360・361

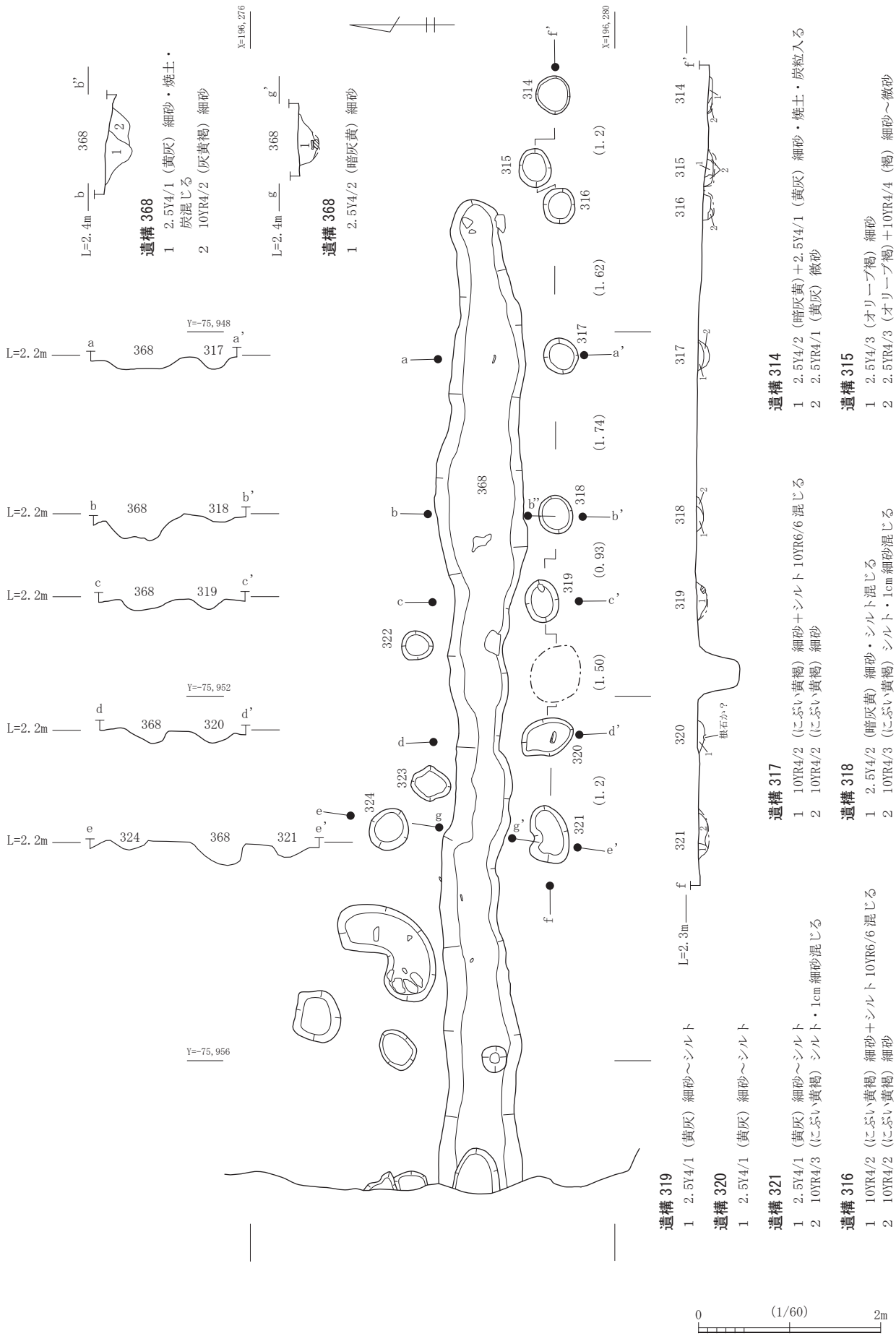
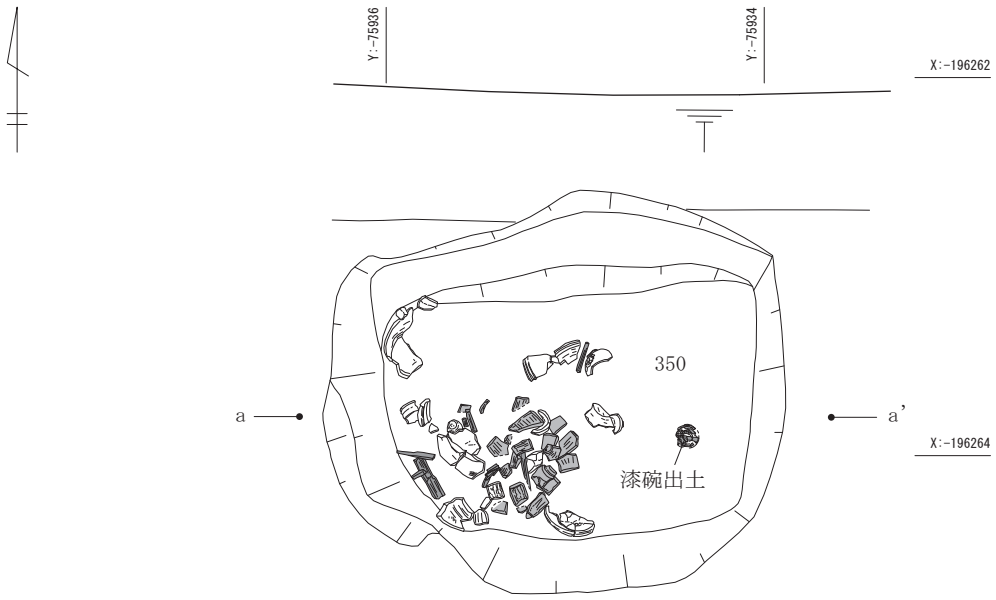
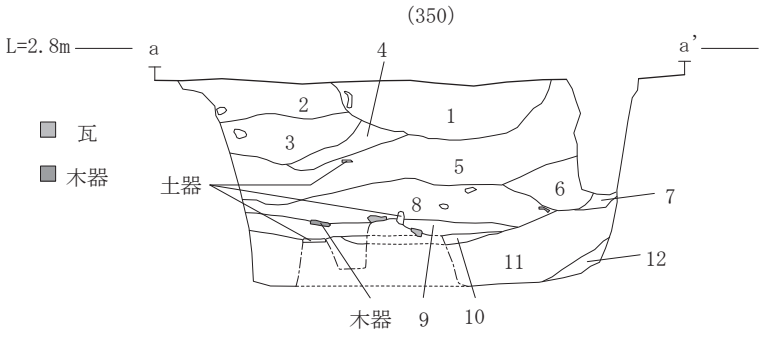


図４９　１区第３面　遺構368周辺





遺構 350

1　10YR4/3（にぶい黄褐）細砂
2　10YR4/3（にぶい黄褐）細砂、焼土、炭粒混じる
3　2.5Y5/1（黄灰）細砂～粗砂、やや粘質土混じる
4　2.5Y4/2（暗灰黄）細砂～シルト、炭混じる
5　10YR4/1（褐灰）細砂、炭粒多量に入る、炭粒混じる
6　10YR4/1（褐灰）細砂、10YR4/3（オリーブ褐）混じる、炭混じる
7　2.5Y3/1（黒褐）細砂
8　N3/0（暗灰）細砂～粗砂、炭、小石混じる、やや粘質～ 5Y4/1（灰）粗砂＋粘質土、水分を多く含むためやや粘質となる

9　2.5Y3/1（黒褐）細砂、木片が多量、木が腐ったようになっている（漆器出土）～ 5Y3/1（オリーブ黒）細砂～粗砂、やや粘質、木片多量
10　5Y4/1（灰）粗砂＋粘土
11　2.5Y3/1（黒褐）細砂＋粘土、多量の木片、土器、瓦等遺物が入る
12　2.5GY4/1（暗オリーブ灰）粘土、炭、木片入る

黒ぽくなり、
有機物の自然堆積となる

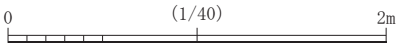
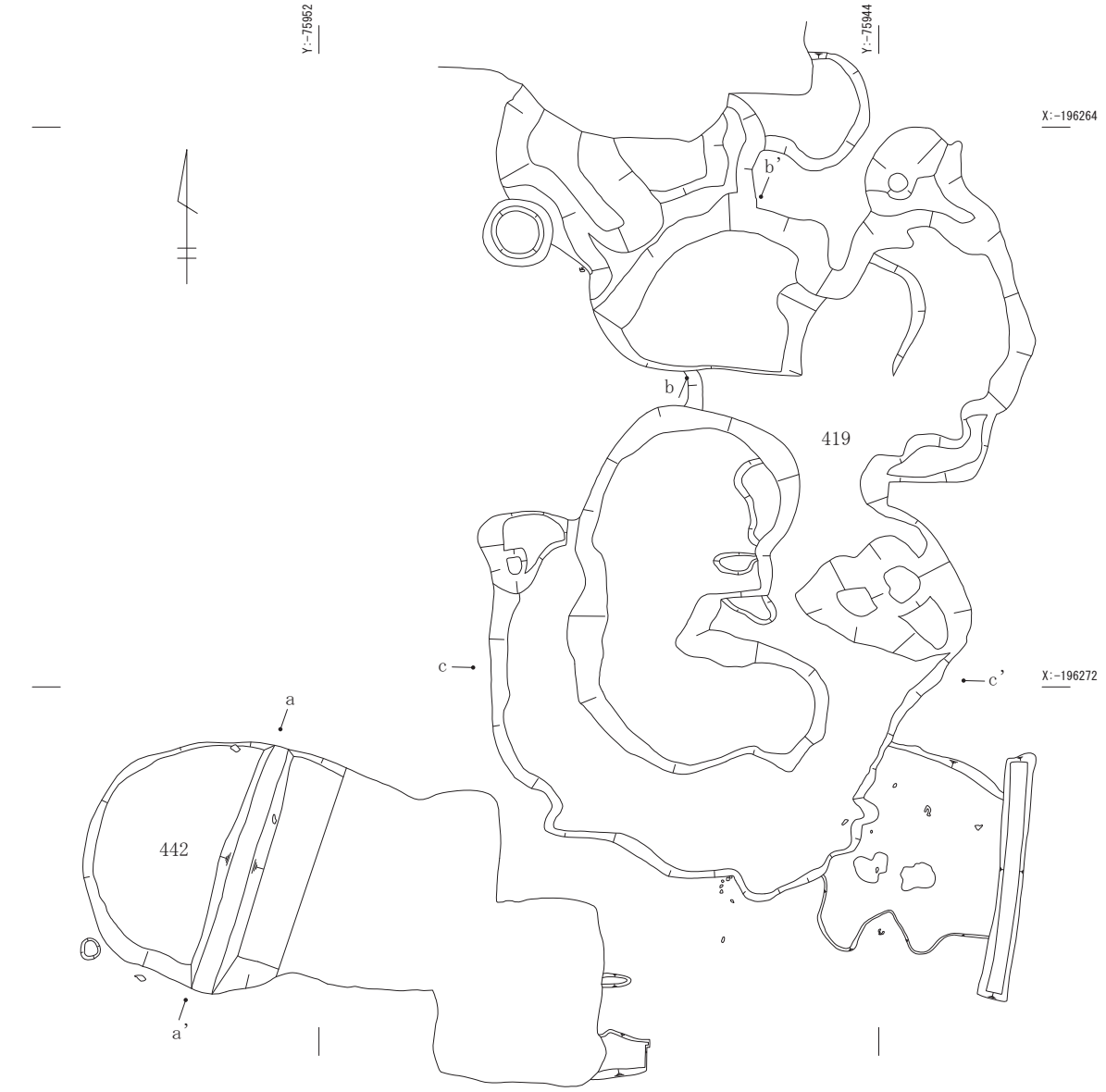
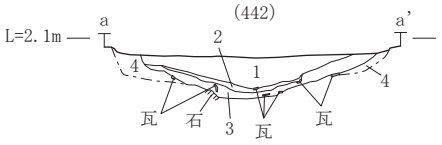
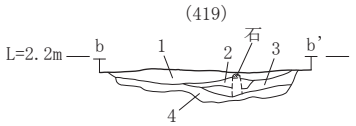


図５０　１区第３面　遺構 350





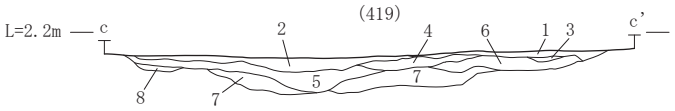


遺構 442

1　5YR4/3（にぶい赤褐）細砂、10YR5/3（にぶい黄褐）シルト粒、焼土粒、炭混じる
2　N4/0（灰）シルト粘質、炭粒微量入る
3　5YR4/3（にぶい赤褐）細砂、10YR5/3（にぶい黄褐）シルト粒、焼土粒、炭混じる、礫、瓦多量に入る
4　10YR4/4（褐）シルト～細砂

遺構 419

1　10YR4/2（灰黄褐）細砂～シルト、炭混じる
2　10YR5/3（にぶい黄褐）シルト～細砂、炭多く入る
3　10YR6/4（にぶい黄褐）シルト
4　10YR4/2（灰黄褐）細砂



遺構 419

1　5Y4/1（灰）細砂、土器片粒で入る
2　2.5Y5/2（暗灰黄）細砂、シルト混じる、炭粒入る
3　5Y4/2（灰オリーブ）細砂～シルト、炭、焼土混じる
4　2.5Y4/2（暗灰黄）細砂、炭、焼土混じる
5　N5/0（灰）＋5Y5/2（灰オリーブ）細砂、シルト混じる、炭 1cm 大で入る
6　2.5Y4/3（オリーブ褐）細砂、炭微量入る
7　2.5Y4/3（オリーブ褐）砂、2.5Y5/2（暗灰黄）シルト混じる
8　10YR4/3（にぶい黄褐）砂

0　(1/100)　4m

図５１　１区第３面　遺構 442・419

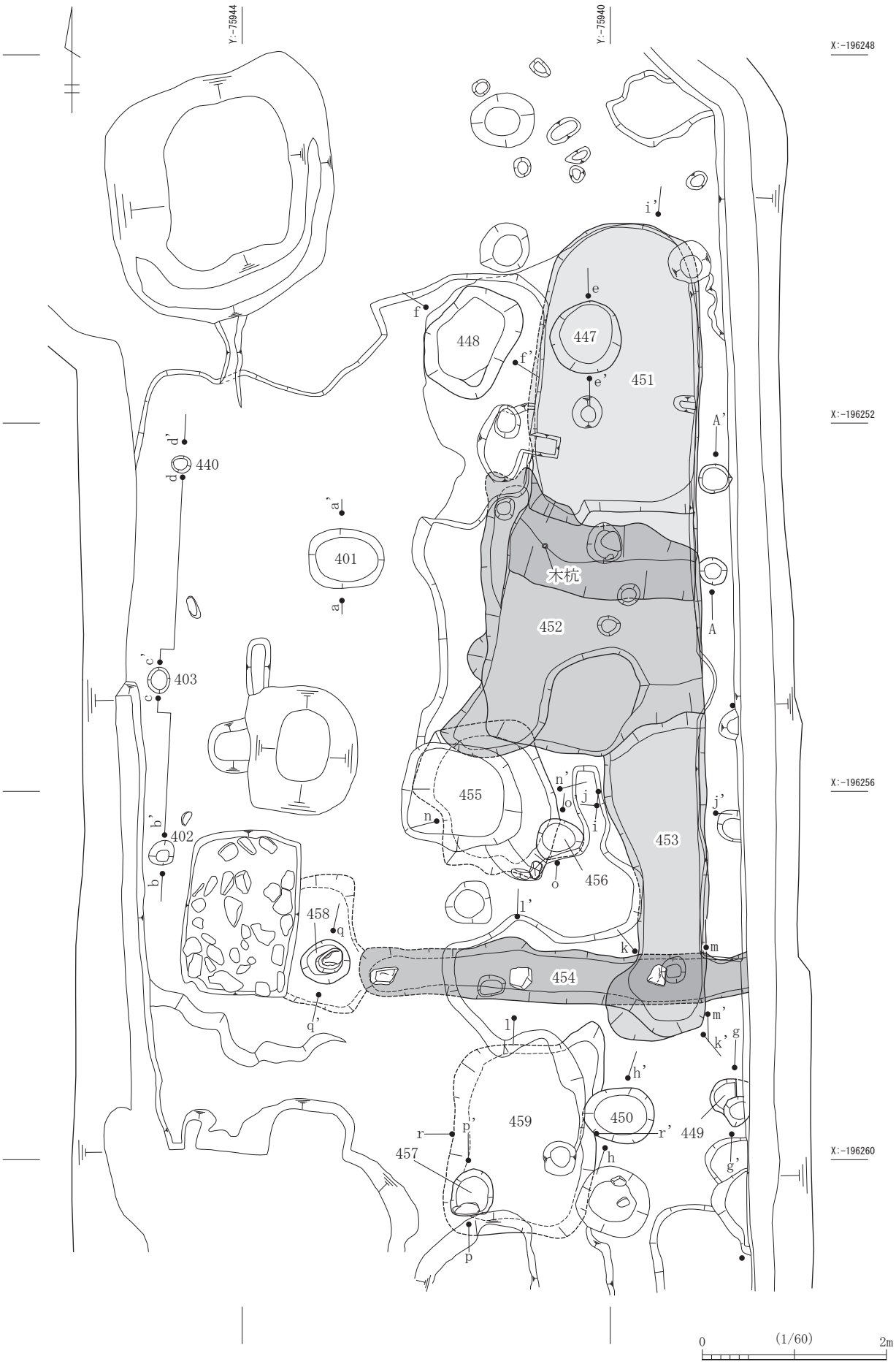
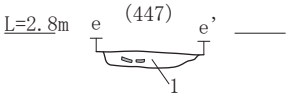


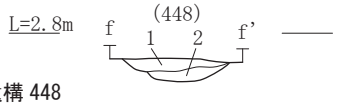
図５２　１区第３面　柱穴列２（遺構 402・403・440）・地下式倉庫（遺構 451）・礎石列（遺構 454）

地下式倉庫（遺構 451）・周辺遺構



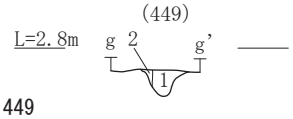
遺構 447

1　10YR4/2（灰黄褐）細砂～シルト・炭多く入る



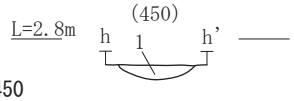
遺構 448

1　10YR4/3（にぶい黄褐）細砂～シルト・
　シルトブロック多く入る
2　10YR4/2（灰黄褐）粗砂・
　1 がブロック状に入る（シルト）



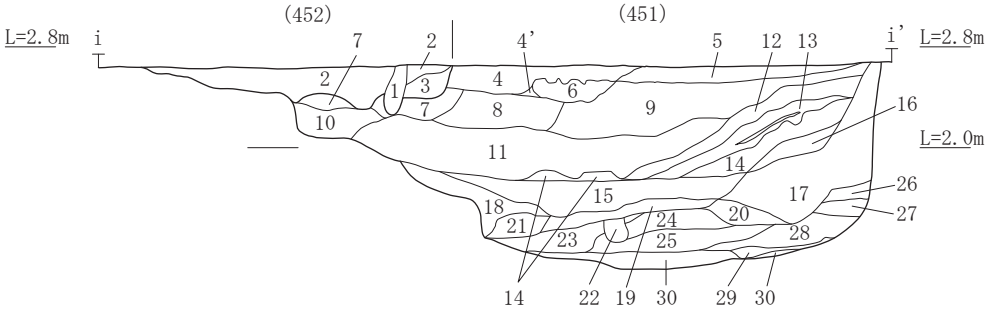
遺構 449

1　2.5Y5/2（暗灰黄）細砂～シルト
2　2.5Y4/2（暗灰黄）シルト・細砂混じる



遺構 450

1　2.5Y5/2（暗灰黄）シルト～細砂



遺構 452

1　10BG4/1（暗青灰）細砂　シルトブロックと粒で入る（杭跡）
2　2.5Y5/2（暗灰黄）細砂　シルト粒で多く混じる・土器片混じる
3　2.5Y4/2（暗灰黄）細砂　シルト粒で混じる・2 より少ない

遺構 451

4　10YR4/2（灰黄褐）細砂　シルト
4'　2.5Y5/2（暗灰黄）細砂　シルト粒で多く混じる・土器片混じる
5　10YR4/2（灰黄褐）細砂　シルト 10cm 大が多く入る
6　2.5Y6/6（明黄褐）風化礫？　上層は 2.5Y5/3（黄褐）細砂
7　2.5Y5/2（暗灰黄）細砂　シルトブロック入る
8　2.5Y4/2（暗灰黄）細砂　シルト粒で入る
9　2.5Y4/3（オリーブ褐）細砂　シルト粒で入る（2 ～ 3cm 大）
10　2.5Y4/3（オリーブ褐）細砂　シルトブロック多く入る
11　2.5Y4/2（暗灰黄）砂　シルトブロック混じる
12　10YR4/3（にぶい黄褐）シルト　細砂・マンガン混じる
13　2.5Y4/3（オリーブ褐）細砂　炭に有機物が入る
14　10YR4/2（灰黄褐）シルト～細砂　炭・
　シルトブロック粒微量入る
15　2.5Y4/2（暗灰黄）粗砂・シルト混じる
16　2.5Y4/3（オリーブ褐）粗砂
17　10YR4/2（灰黄褐）シルト・砂混じる
18　2.5Y4/2（暗灰黄）シルト＋細砂・
　マンガン粒混じる
19　5GY4/1（暗オリーブ灰）砂・木片入る・
　10YR5/2（灰黄褐）砂入る
20　2.5Y4/1（黄褐）シルト・砂混じる・鉄分入る
21　10BG4/1（暗青灰）砂＋粘土
22　10YR3/2（黒褐）風化礫を含む
23　N4/0（灰）砂・やや粘質　木片入る
24　5GY4/1（暗オリーブ灰）シルト・
　N4/0（灰）砂　微量木片入る
25　5GY4/1（暗オリーブ灰）シルト・
　N3/0（灰）シルト　貝入る
26　10YR4/3（にぶい黄褐）砂
27　10YR4/3（にぶい黄褐）シルトに 28 の腐食土入る
28　10YR2/3（黒褐）腐食土
29　2.5Y4/2（暗灰黄）粘土
30　2.5Y3/1（黒褐）粘土

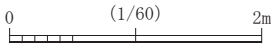
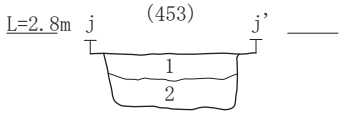


図５３　１区第３面　地下式倉庫（遺構 451）周辺

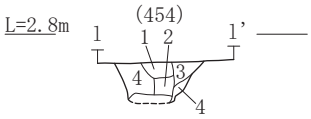
地下式倉庫（遺構 451）・礎石列（遺構 454）周辺



遺構 453

1　10YR4/2（灰黄褐）シルト

2　7.5YR4/2（灰褐）シルト 1 よりやや明るい



遺構 454

1　10YR4/2（灰黄褐）細砂～シルト

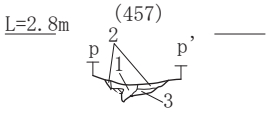
2　2.5Y5/2（暗灰黄）砂

3　10YR4/2（灰黄褐）シルト

4　10YR4/2（灰黄褐）細砂・シルト粒で混じる

遺構 455

1　2.5Y4/2（暗灰黄）砂・シルト粒で混じる

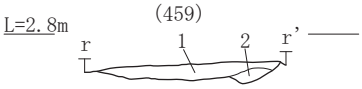


遺構 457

1　10YR5/1（褐灰）細砂・シルト粒で入る

2　2.5Y4/3（オリーブ褐）細砂・炭土器粒で入る

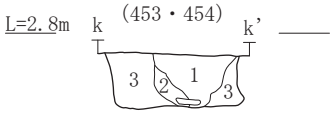
3　7/5Y4/2（暗灰黄）細砂・炭土器粒で入る



遺構 459

1　10YR6/4（にぶい黄褐）シルト

2　10YR6/6（明黄褐）シルト～細砂

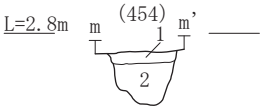


遺構 453・454

1　2.5Y4/2（暗灰黄）シルト＋砂

2　2.5Y4/2（暗灰黄）10YR4/2（灰黄褐）細砂～シルト

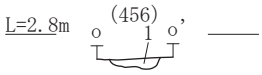
3　10YR4/2（灰黄褐）シルト・マンガン粒入る



遺構 454

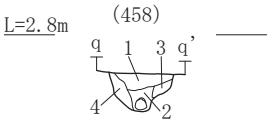
1　2.5Y4/2（暗灰黄）シルト

2　2.5Y4/2（暗灰黄）シルト～細砂



遺構 456

1　2.5Y4/1（黄灰）シルト～細砂
　シルトブロック粒で混じる



遺構 458

1　7.5YR4/3（褐）細砂
　10YR4/2（灰黄褐）シルト混じる・炭土器細片入る

2　10YR5/1（褐灰）細砂～シルト・砂混じる

3　7.5YR4/2（灰褐）・10YR5/1（褐灰）砂混じる

4　2.5Y5/1（黄灰）細砂～シルト

エレベーション図

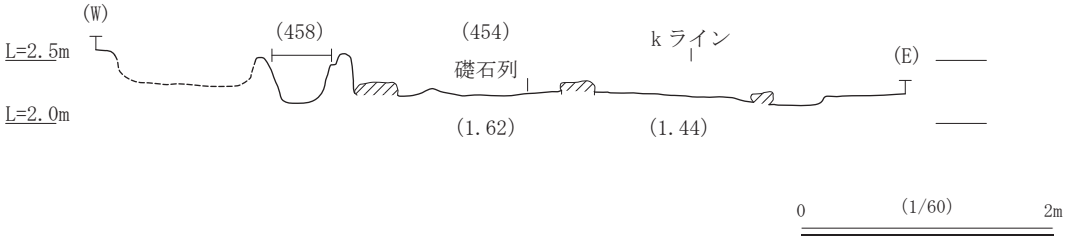
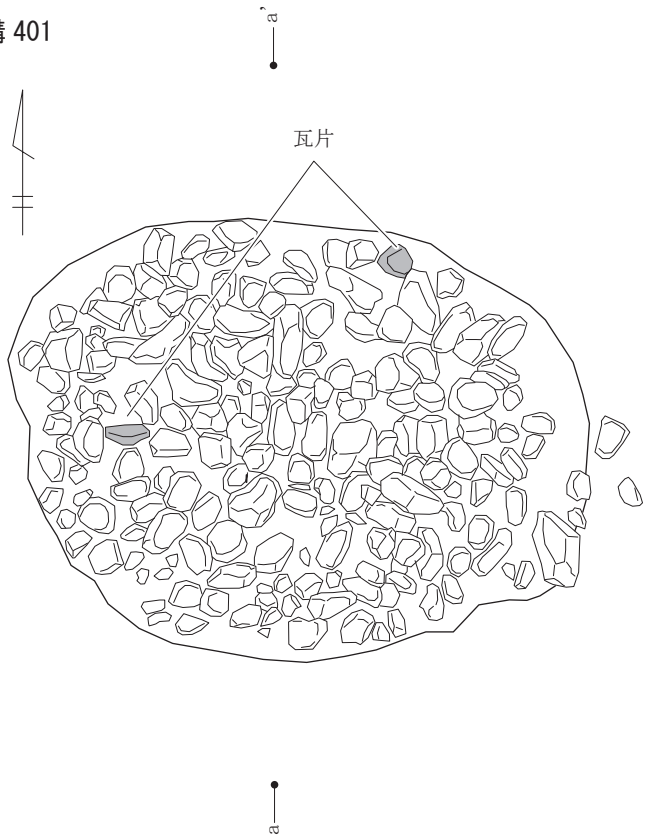
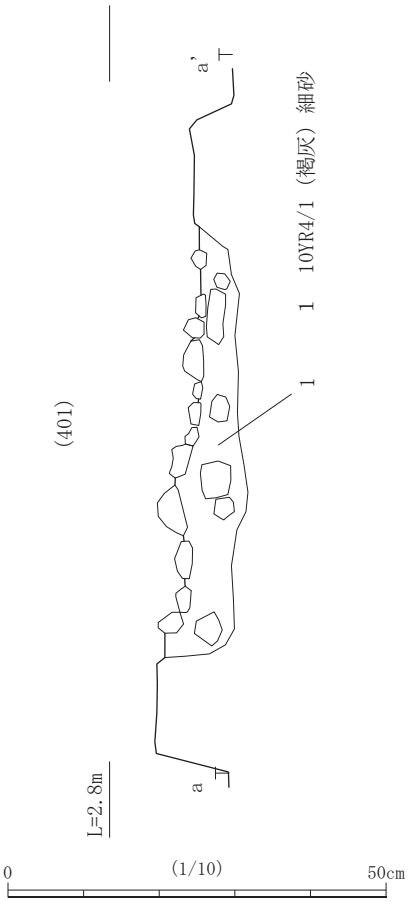


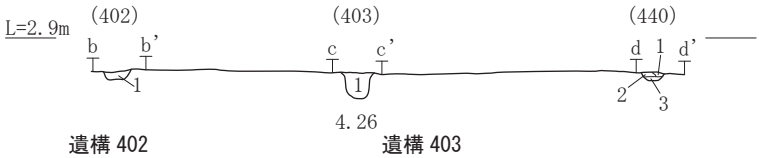
図５４　１区第３面　地下式倉庫（遺構 451）・礎石列（遺構 454）・周辺

遺構 401





柱穴列 2（遺構 402・403・440）



遺構 402

1　2.5YR4/1（黄灰）細砂
　炭・焼土粒多く入る

遺構 403

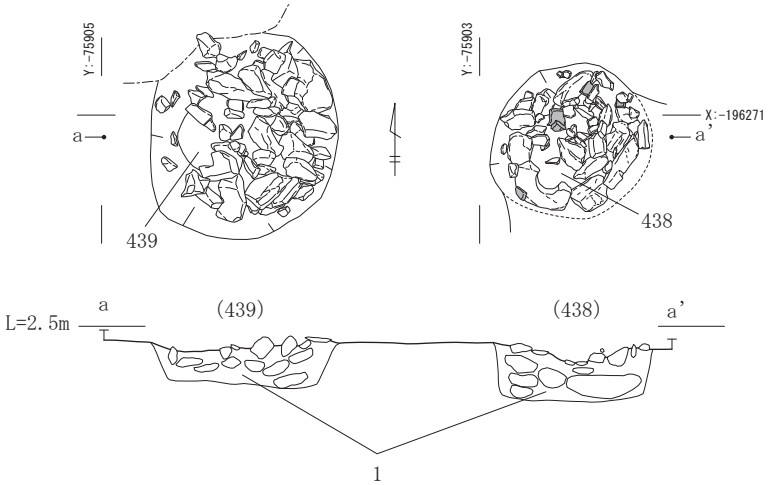
1　2.5YR5/2（暗灰黄）細砂
　焼土粒入る

遺構 440

1　2.5YR4/1（黄灰）シルト～細砂
2　10YR4/2（灰黄褐）シルト～細砂
3　10YR5/3（にぶい黄褐）シルト～細砂
　1,2 のシルトが粒で混じる

0　(1/60)　2m

遺構 438・439

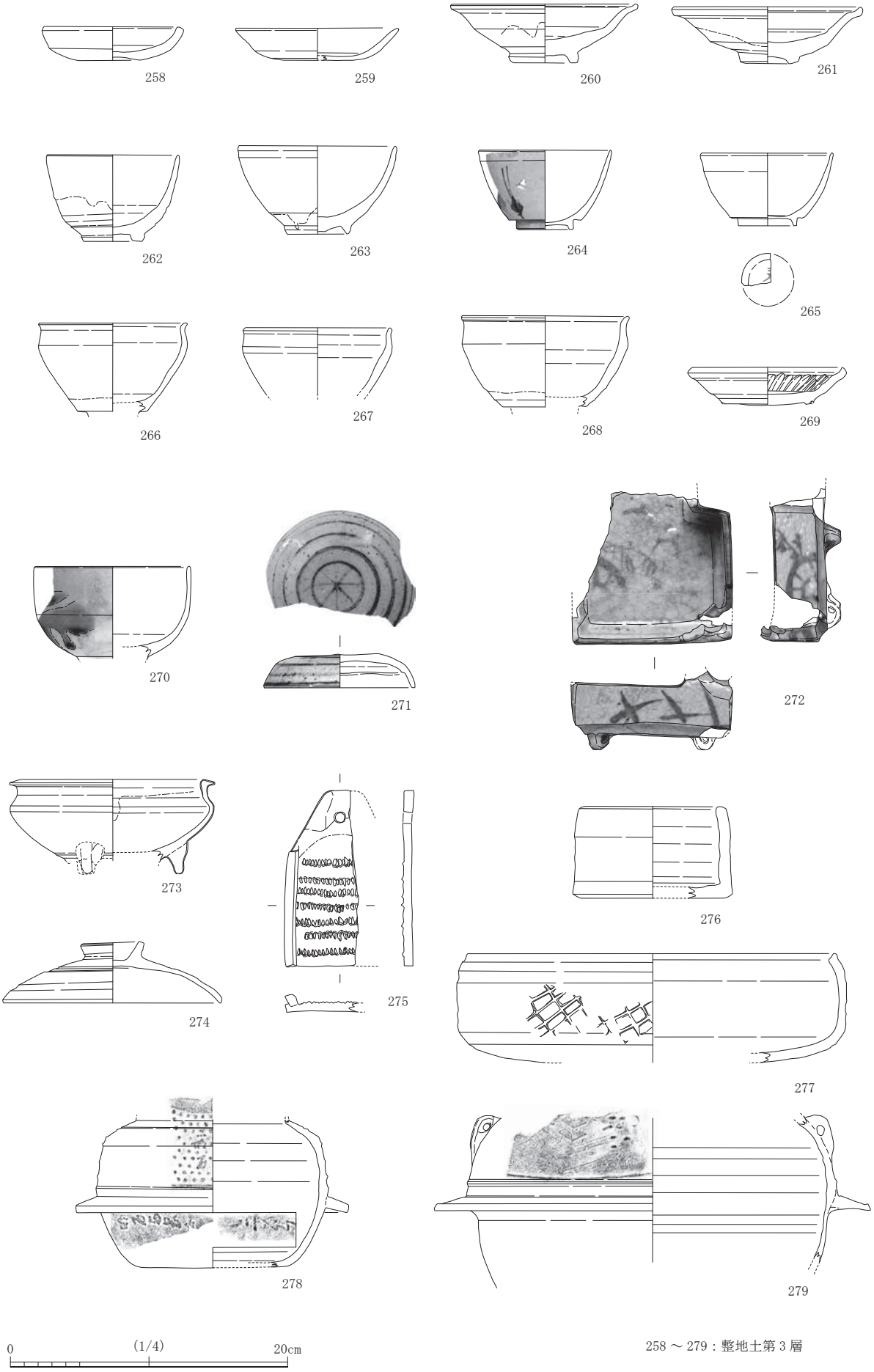


遺構 439・438

1　2.5Y7/2（灰黄）細砂混じりシルト

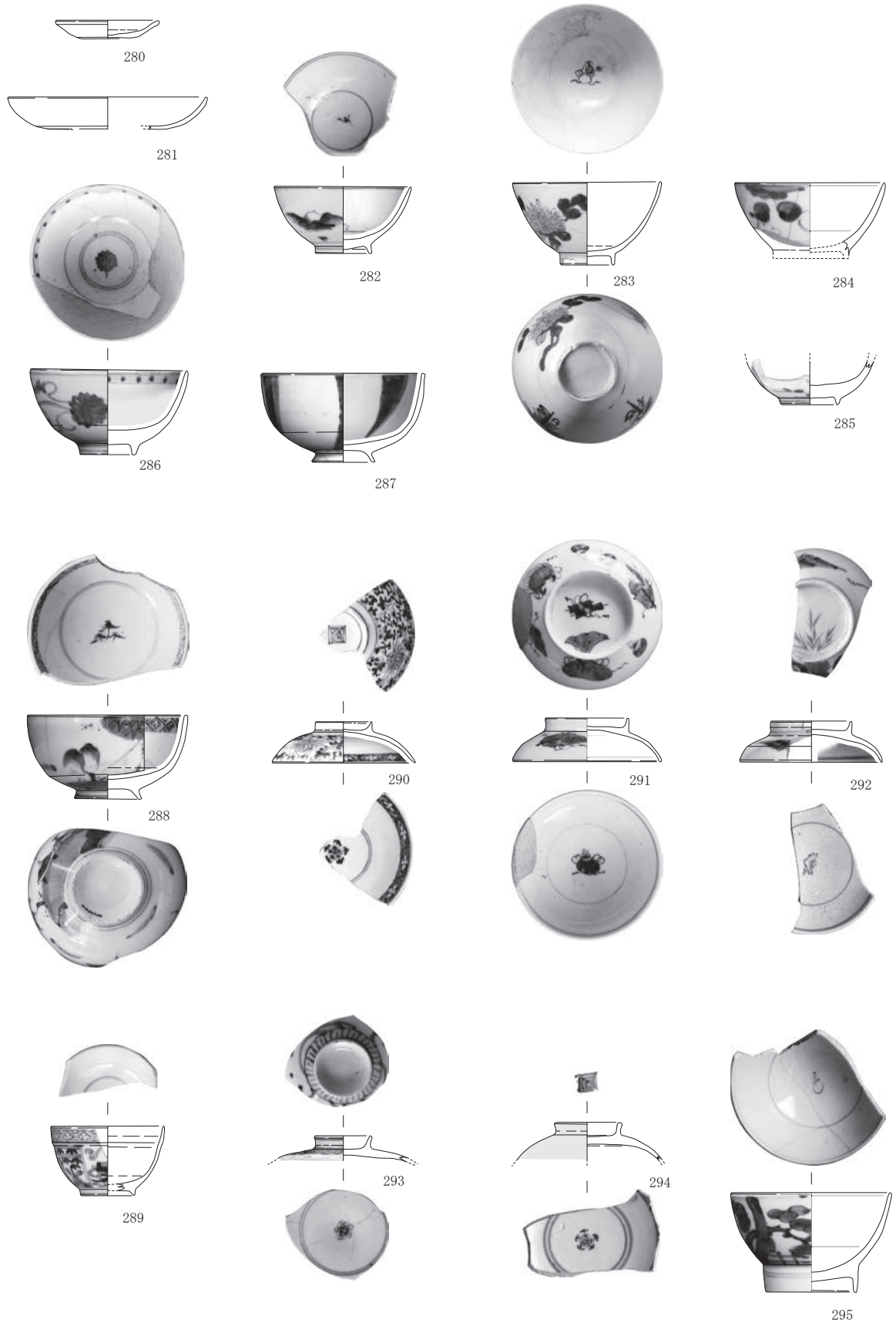
0　(1/40)　2m

図５５　１区第３面　柱穴列２（遺構 402・403・440）・遺構 401・438・439



258 ～ 279：整地土第３層

図５６　１区整地土第３層出土土器



280 ～ 295：437 土坑

0 (1/4) 20cm

図５７　１区第３面出土土器

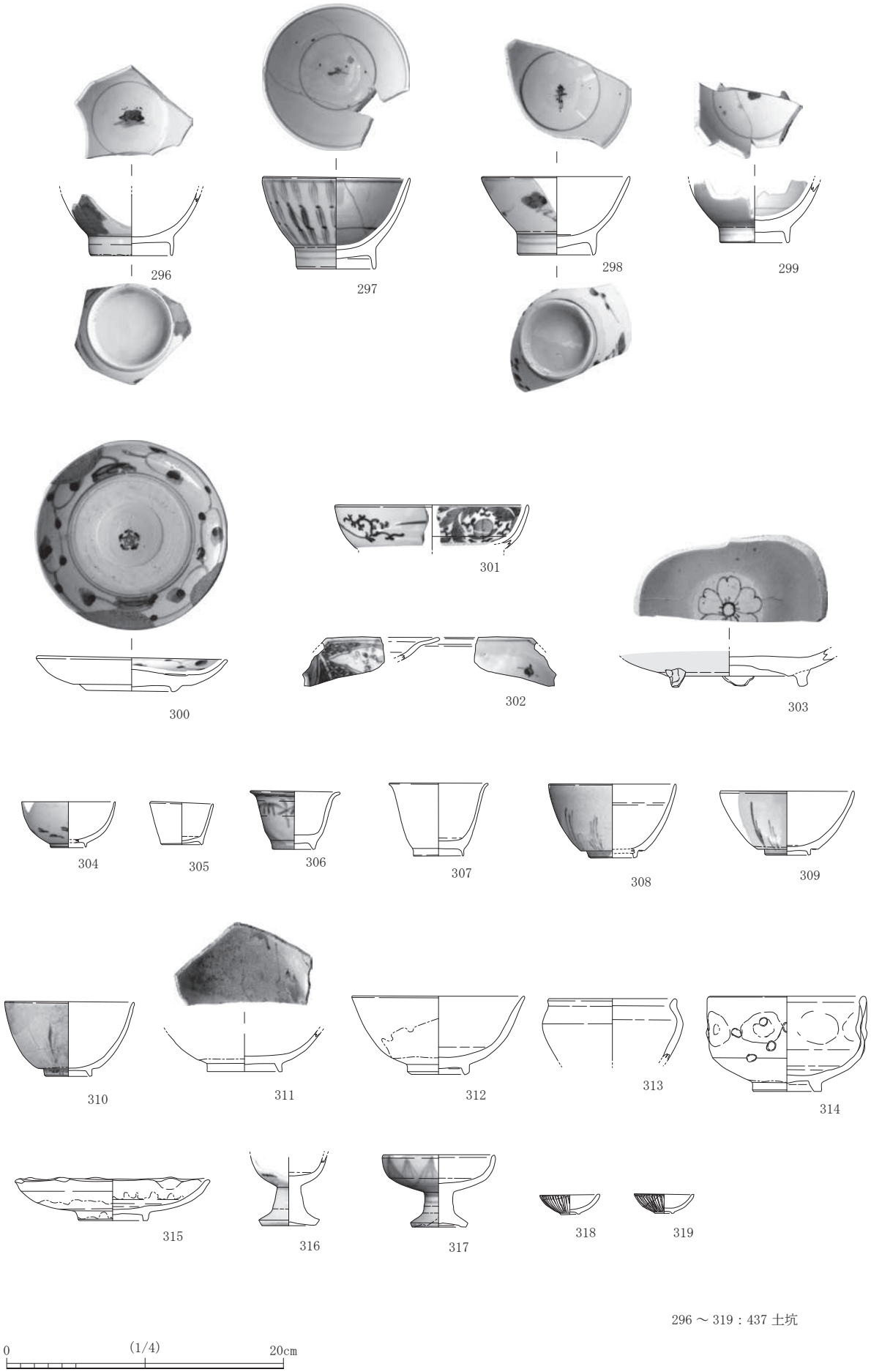


図５８　１区第３面出土土器２

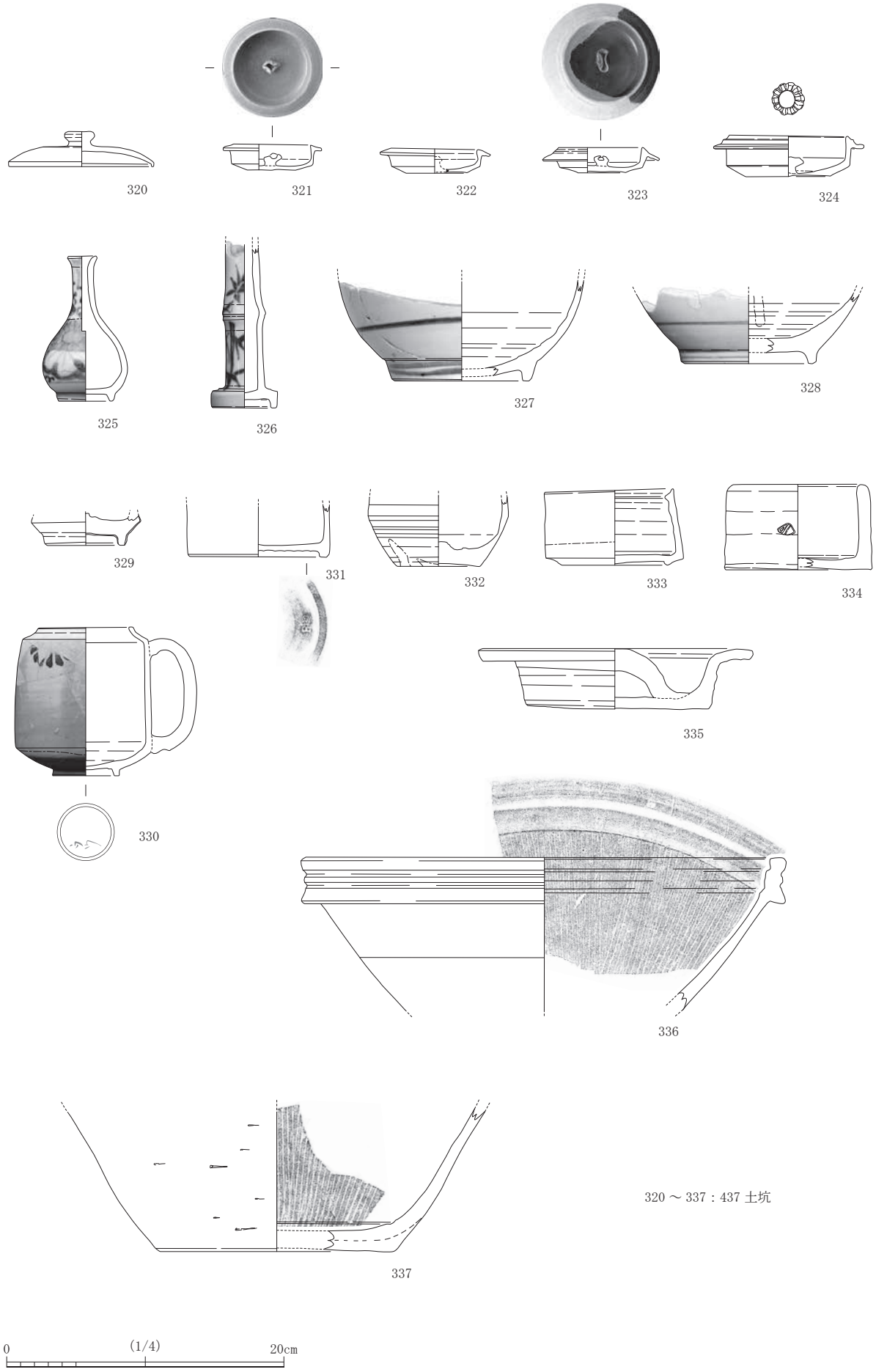
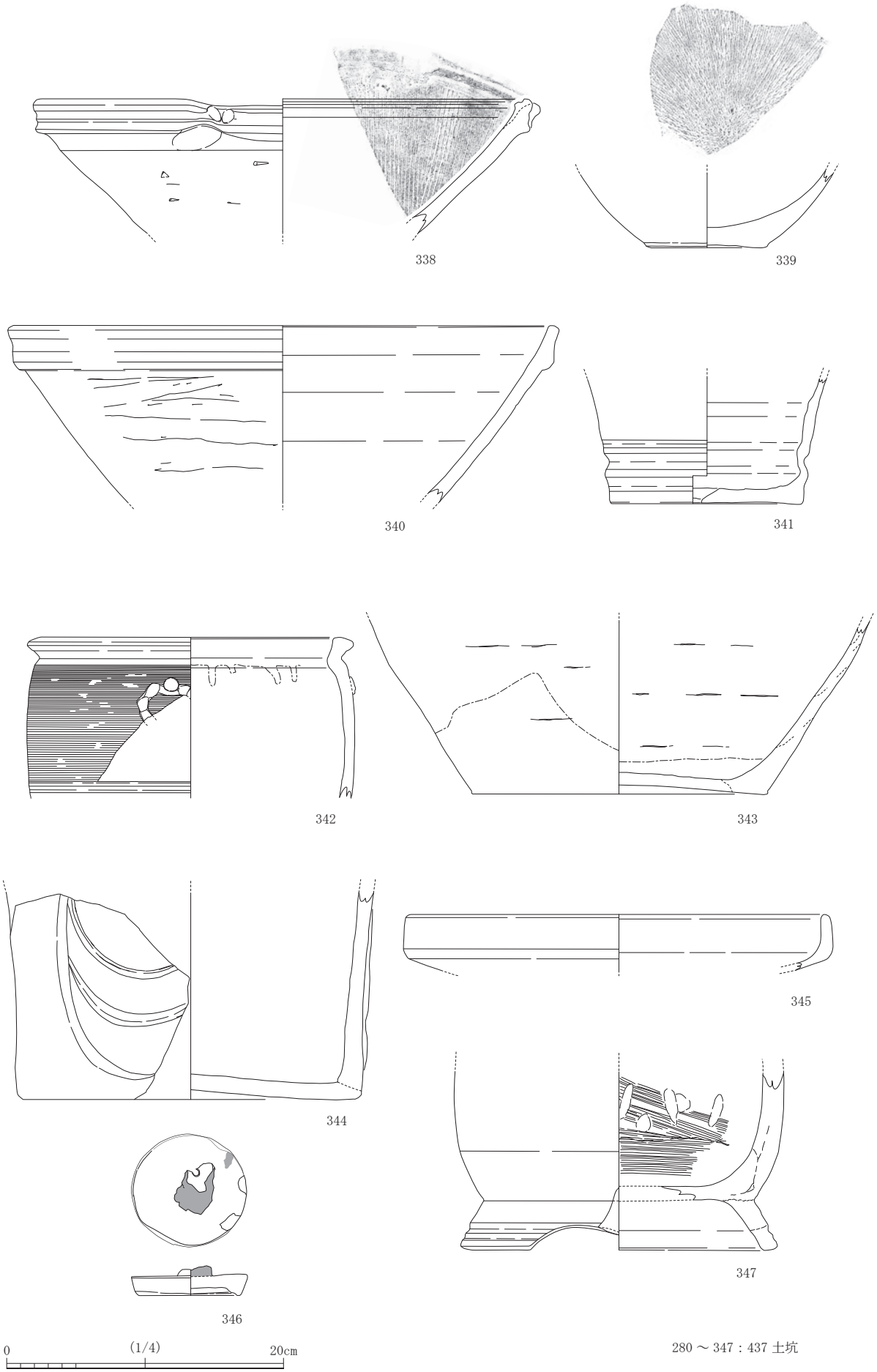


図５９　１区第３面出土土器３



280 ～ 347：437 土坑

図６０　１区第３面出土土器４

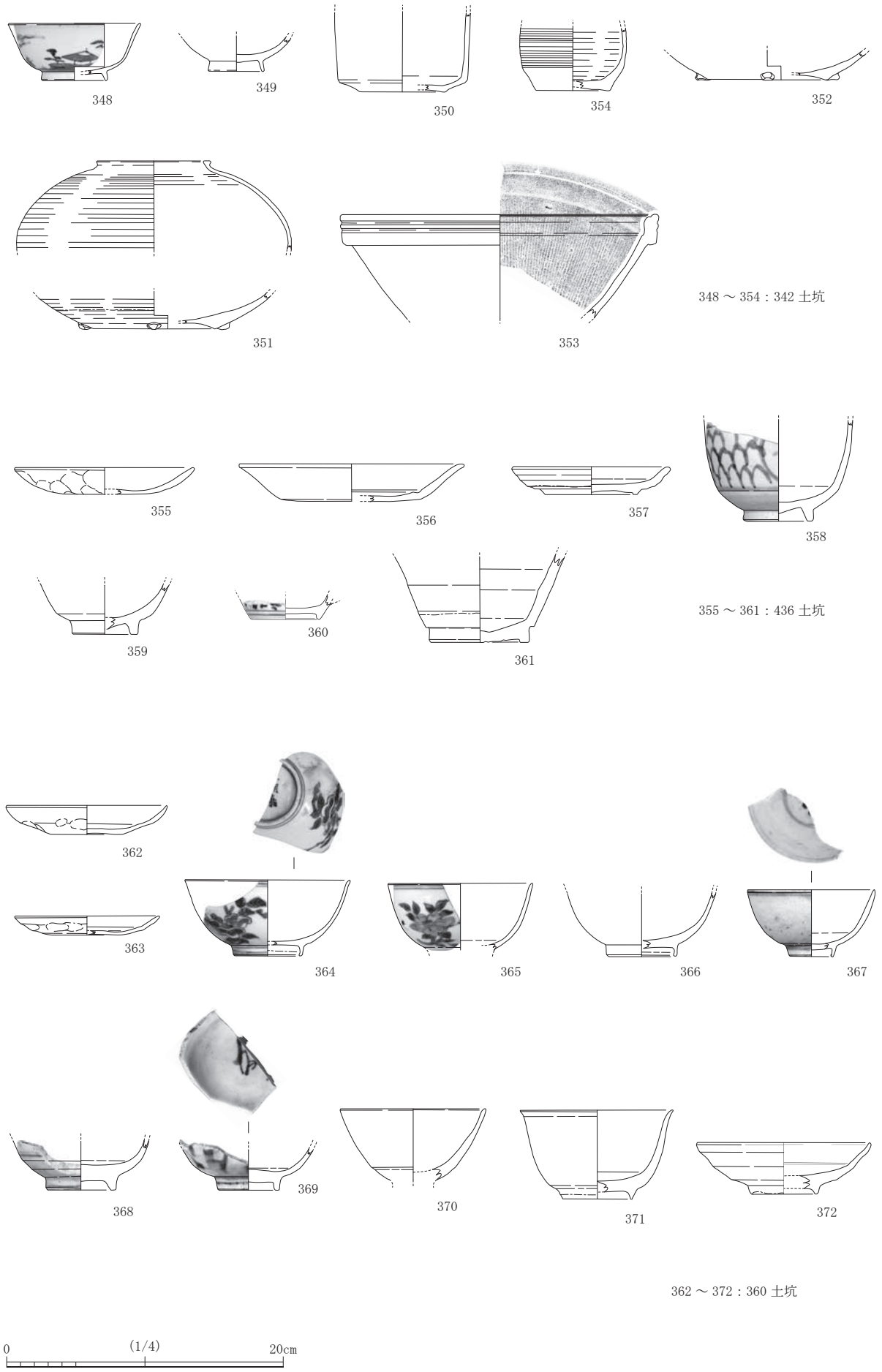


図６１　１区第３面出土土器５

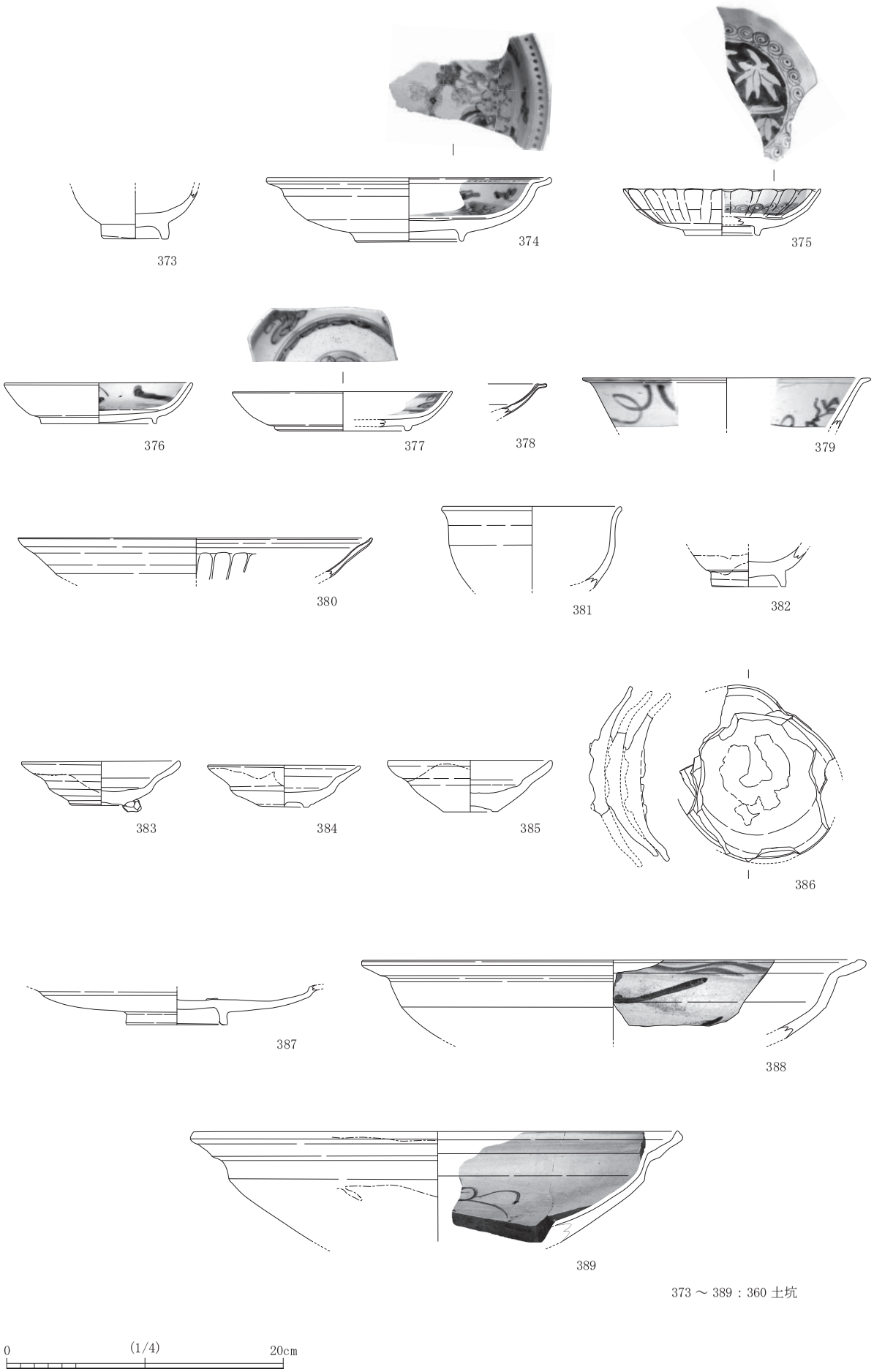


図６２　１区第３面出土土器６

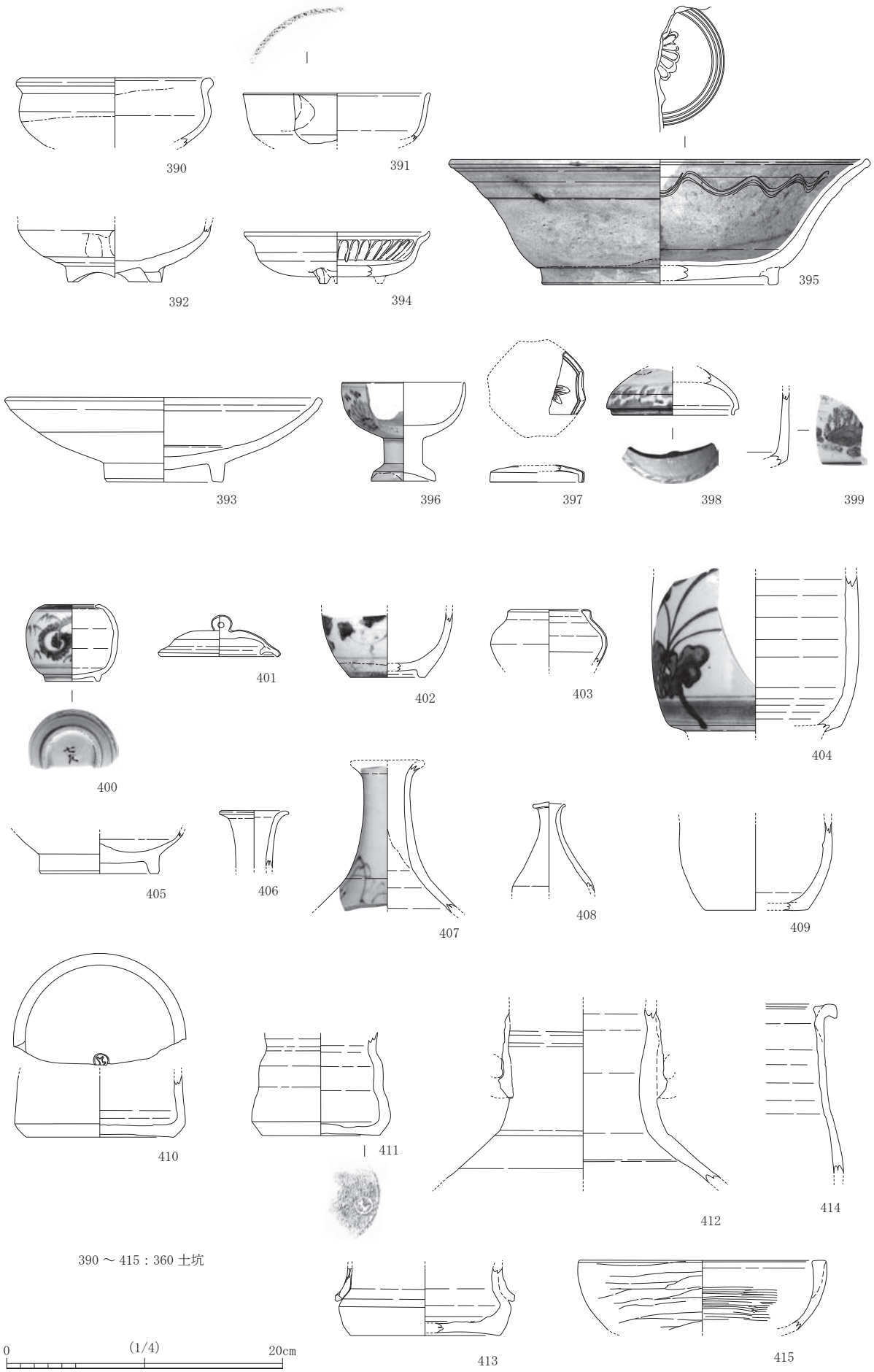
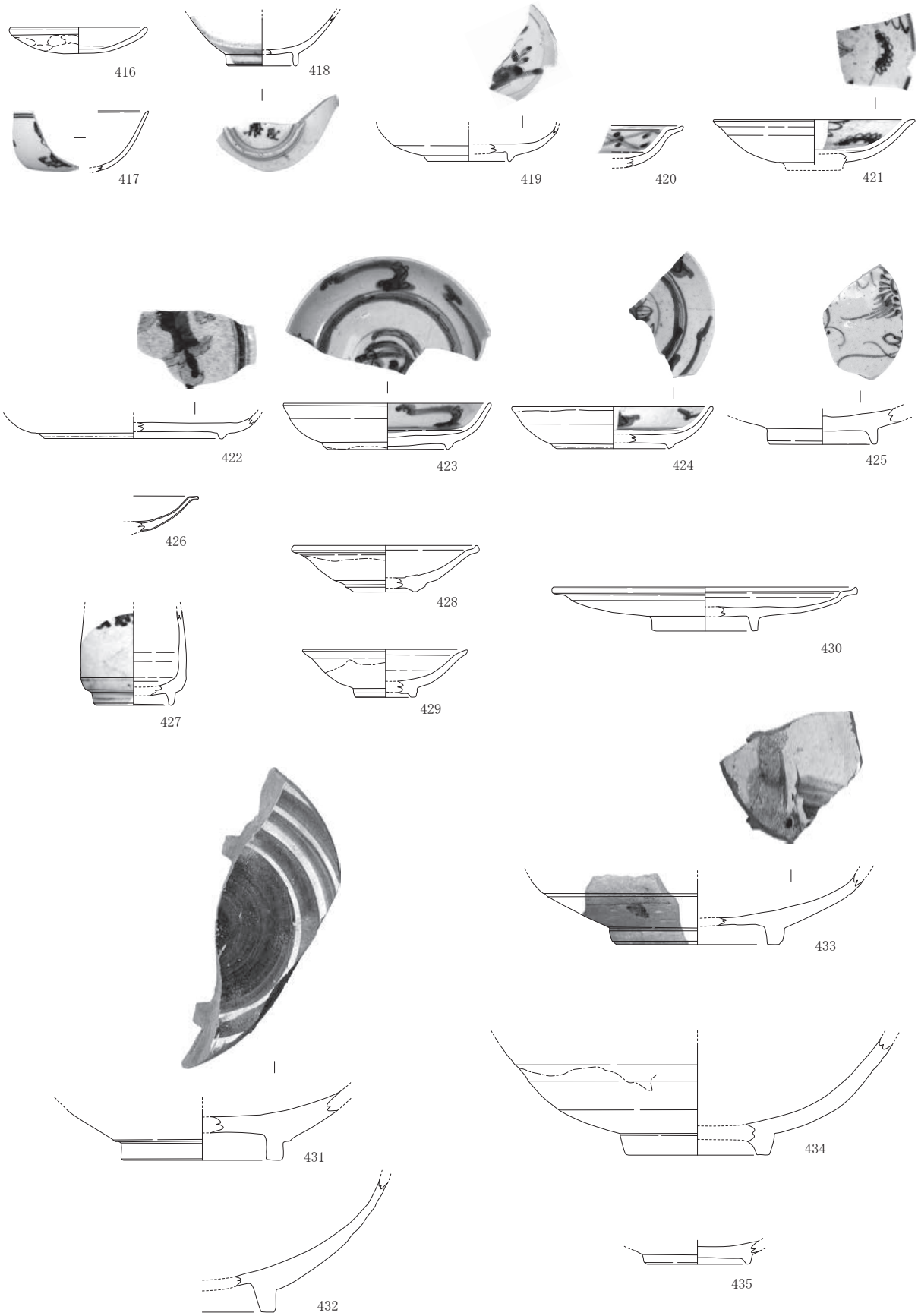


図６３　１区第３面出土土器７



416 ～ 435：361 土坑

0 (1/4) 20cm

図６４　１区第３面出土土器８

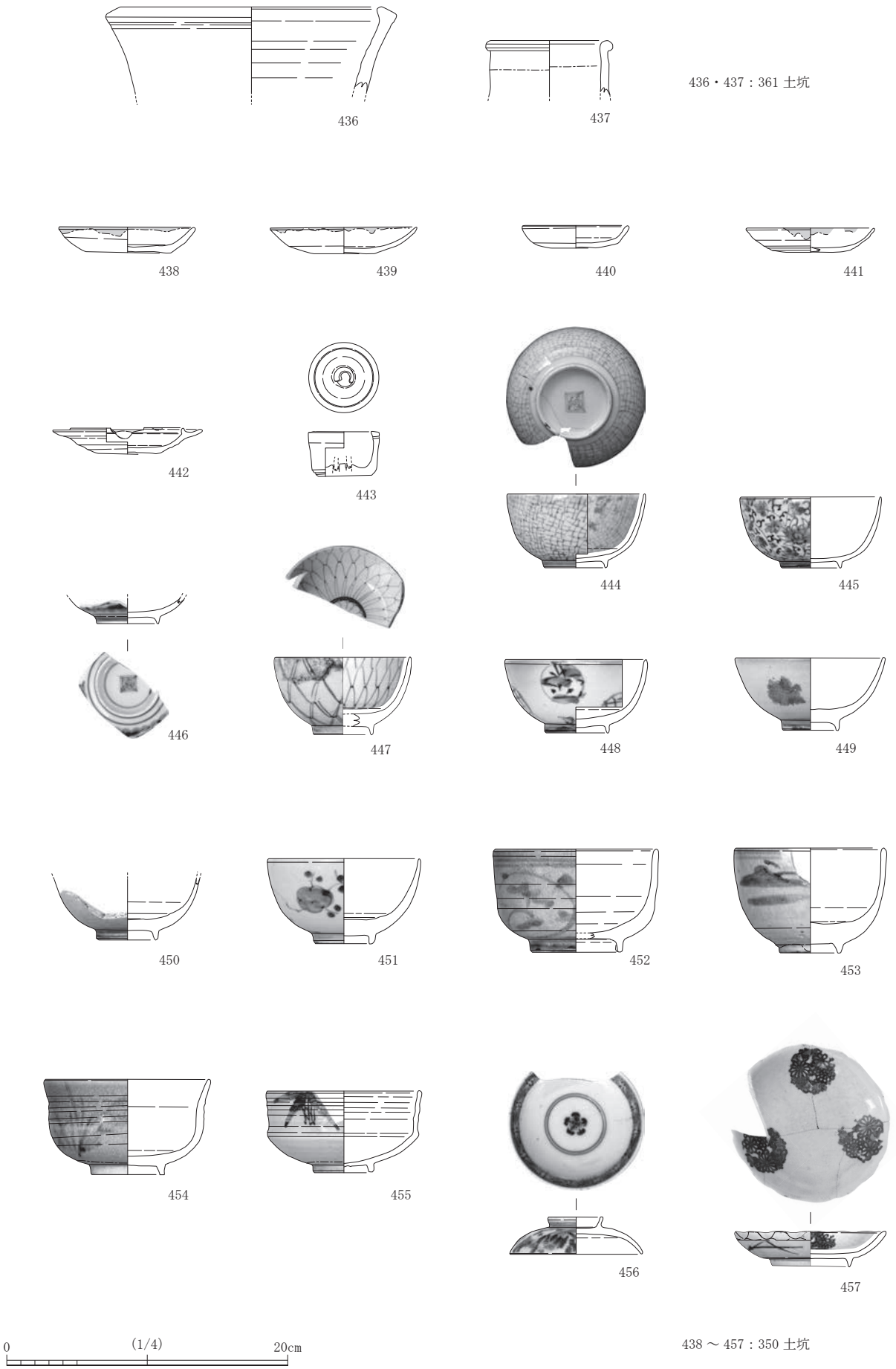


図６５　１区第３面出土土器９

図６６　１区第３面出土土器 10

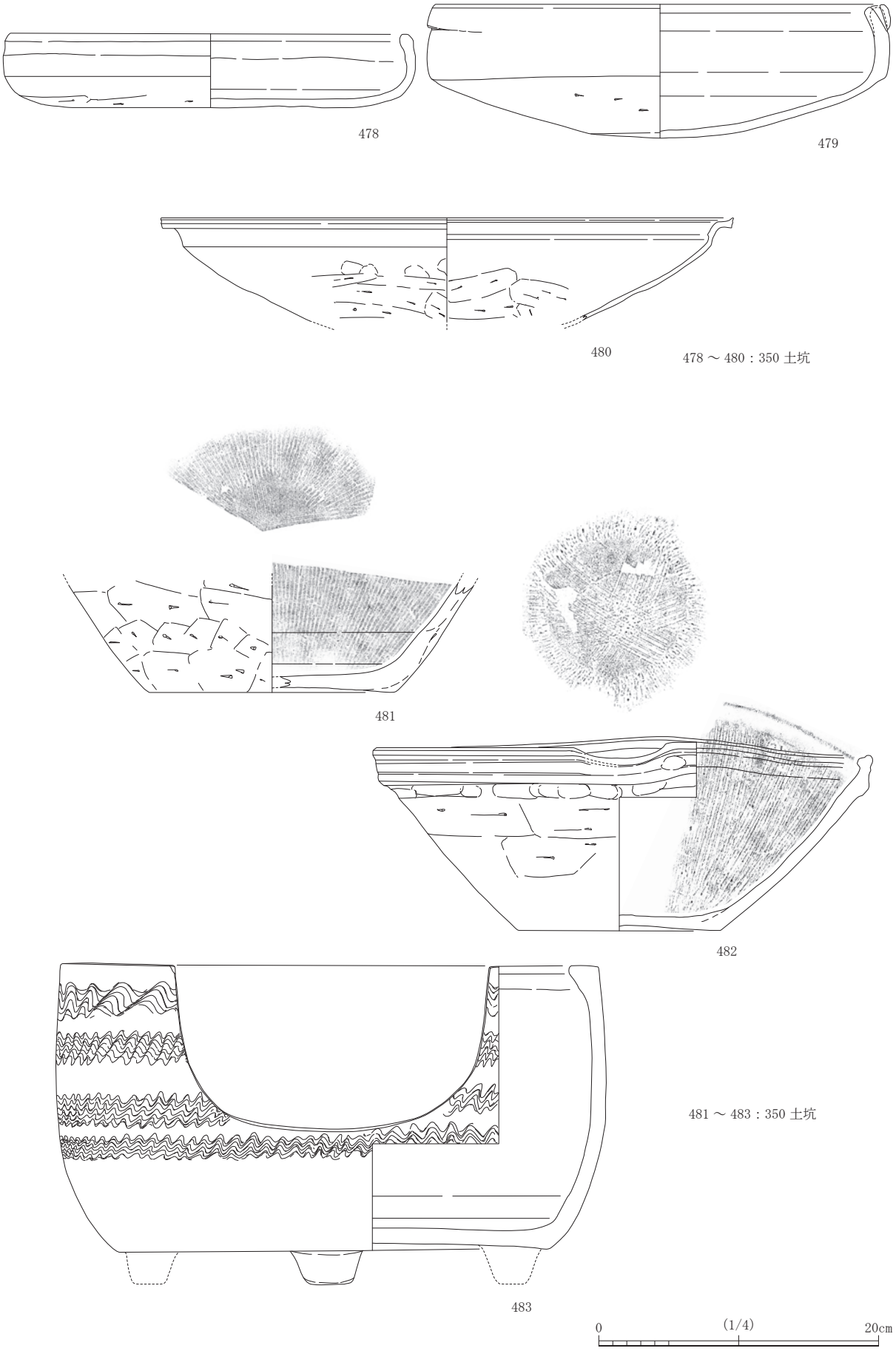


図６７　１区第３面出土土器 11

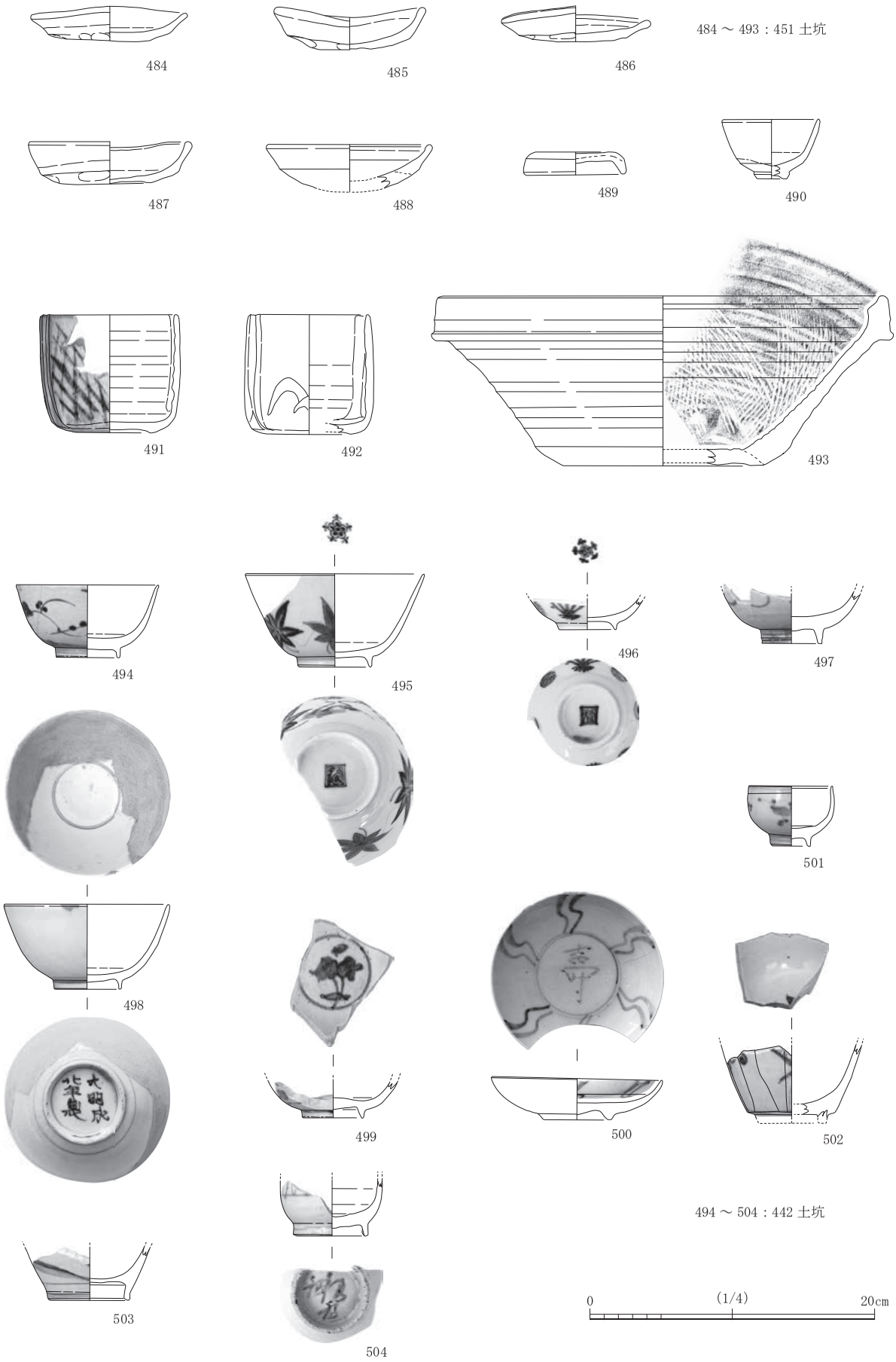


図６８　１区第３面出土土器 12

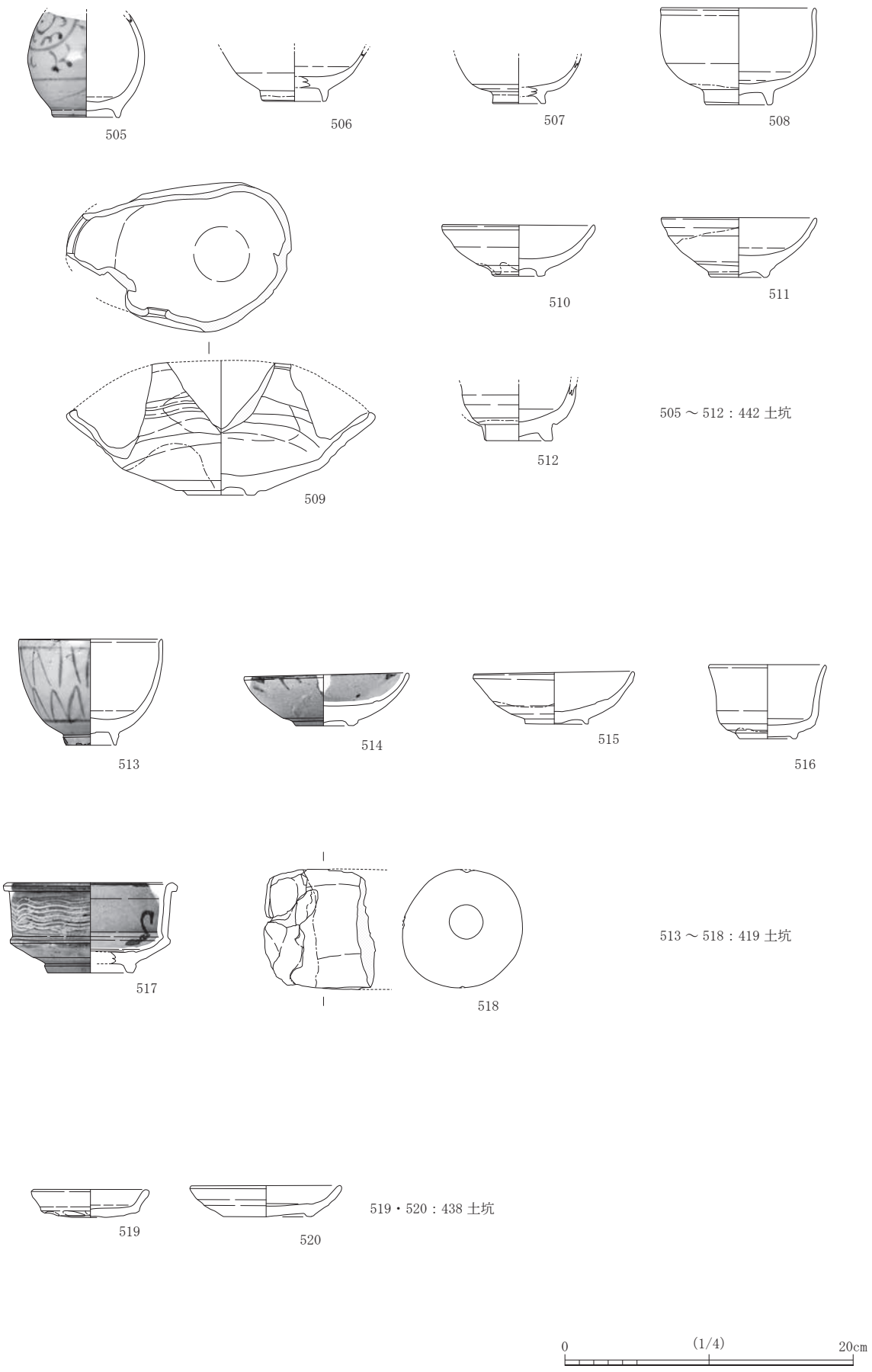


図６９　１区第３面出土土器 13

４　第４遺構面（図 70、図版 21）

遺構面標高は、最東端で T.P.+1.7 m、最西端で T.P.+2.0 mであり、西側から東側へ緩やかに降るよう傾斜している。これより上の遺構面とは、自然傾斜していることで大きく異なっている。

調査区南西では和歌山地方検察庁旧庁舎の攪乱が大きく、遺構がほとんど確認できなかったが、木枠井戸 2 基、素掘井戸群 2 群（素掘井戸 7 基）、廃棄土坑群 1 群（廃棄土坑 3 基）、屋敷地境界溝 1 条、屋敷地境界柱穴列 2 列。溝 2 条、ピット 5 基、土坑 83 基、大型土坑 18 基が検出された。

遺構面の時期としては、柵や塀等の屋敷地境界とみられる南北方向の屋敷地境界溝 3（遺構 541）、屋敷地境界柱穴列 2（遺構 536）や東西方向の屋敷地境界柱穴列 3（遺構 538）が確認できることから、調査区一帯が 3 分割されていた可能性がある。現在知られている絵図においては、3 分割されている状況は 17 世紀中頃から 18 世紀中頃までであることから、第４遺構面もこの中で収まる可能性もあるが、それ以前の絵図が知られていないことや、後に述べる理由から 16 世紀末まで遡る可能性もある。

第４遺構面を検出するに当り、遺構面上の整地土第４層を掘削した。以下、この整地土からの出土遺物について簡単に記す。

521 ～ 528 は土師器皿である。521 ～ 524 は口径 5.2 ～ 6.0 ㎝内に納まる白色系の小皿で、524 のみに灯明の痕跡が確認できるが、基本的には灯明皿としての皿であろう。525 ～ 528 は灯明皿として使用されている。この内、525・526 は底部糸切である。

529 ～ 532 は肥前系陶器の皿である。529 の内底部は蛇の目釉剥ぎ、530 の内底部には砂目が認められる。531 の口縁部は鍔縁となる。532 は刷毛目唐津で、鉄釉で絵付けされている。

533 ～ 539 は肥前系陶磁器である。533・534 は口径の割には深い染付碗で、535 は陶胎染付の碗、537 は陶器の大振りの碗である。538 は青磁碗、539 は口縁部がやや外反する瑠璃釉碗である。536 は口縁部が玉縁の鉢、540 は香炉、541 は天目茶碗である。

542 ～ 546 は瀬戸美濃系陶器である。542 は天目茶碗、543 は筒茶碗、544 は鉄絵皿、544・546 は織部向付である。547 は無釉の秉燭である。

548 ～ 550・552・553 は焼締陶器である。548・549 備前焼の擂鉢、550 は丹波焼の盤で、内面に焼台痕が認められる。552 は信楽焼の壺、553 は中国製の四耳壷である。双方共に茶壺として使用されたと思われる。551 は瓦質の火鉢である。脚は全て欠損している。

以下、代表的な遺構について報告する。

屋敷地境界柱穴列２（遺構 539）（図 71、図版 22）

調査区中央、ｇ 22 ～ 25 グリッドで検出した南北方向に並ぶ 10 基の柱穴列である。掘形の規模は直径 0.2 ～ 0.36 mの範囲で、残存の深さは 0.08 ～ 0.16 mを測る。埋土は全て単層で、黄灰色の粗砂混じりシルトである。なお、遺構 528 の柱穴底には礎石、遺構 539-8 には柱が遺存している。両端の柱穴の芯々間の距離は 14.09 mを測り、柱間の距離は北から 1.60 m・1.58 m・1.54 m・1.62 m・1.57 m・1.62 m・1.48 m・1.62 m・1.46 mを測り、数値に多少のバラつきはあるものの尺寸で言えば５尺内外の長さである。出土遺物は皆無である。

屋敷地境界柱穴列３（遺構 538）（図 72、図版 22）

調査区西端、ｉ 20 ～ｎ 20 グリッドで検出した７基からなる東西方向の柱穴列である。掘形の規模は直径 0.28 ～ 0.30 ｍと全て同程度の大きさである。残存の深さは 0.12 ～ 0.28 ｍを測り、西端の柱穴のみに礎板として石を敷いている。埋土は殆んど２層に分層でき、上層は細砂混じりのシルト、下層は粘性の強いシルトとなる。また、両端の芯々間の距離は 10.10 ｍを測り、柱間の距離は西から 1.68 ｍ・1.64 ｍ・1.76 ｍ・1.68 ｍ・1.72 ｍ・1.62 ｍを測る。この柱穴列も遺構 539 のように柱間の距離に多少のバラつきはあるが、５尺５寸内外で纏まりのある数値と思われる。出土遺物は皆無である。

屋敷地境界溝３（遺構 541）（図 71、図版 22）

調査区のほぼ中央、ｆ 19 ～ｇ 24 グリッドで検出した南北方向の溝状遺構である。この遺構の北側は調査区内で終息し、南側は調査区外に延びており、延長 20.2 ｍを検出した。幅は 0.35 ～ 0.50 ｍ、残存の深さは 0.06 ～ 0.10 ｍと非常に浅い。埋土は黄褐色系の細砂混じりのシルトである。この遺構から約２ｍ西側に隔たって検出した屋敷地境界柱穴列２と若干方向性に差異がみられるが、関連性がある可能性が高い。なお、出土遺物は皆無である。

廃棄土坑群（遺構 530・540・555）（図 74・75、図版 23・24）

調査区の北寄り中央、ｅ 17 ～ｋ 19 グリッドの範囲で大型土坑を３基検出した。何れの土坑からも一定量の陶磁器、瓦類、木製品が出土している。

（遺構 540）調査区中央西寄りで検出した土坑である。掘形は三段となり、中央に向かって深くなっている。平面形から二回の掘り直しが認められ、当初の規模は東西長 4.50 ｍ、南北長 2.65 ｍ、深さ 0.28 ｍ以上の大きさで掘削されていたと思われる。２回目は東西長 1.45 ｍ、南北長 2.80 ｍ、深さ 0.50 ｍの規模で、ほぼ当初の掘削坑の中で納まるように掘られている。３回目は当初の掘削坑の中央に東西長 2.0 ｍ、南北長 1.30 ｍ、深さ約 1.0 ｍの規模で長方形に掘削されている。何れの掘削坑も底はほぼ平坦となり、底には還元色の粗砂層や粘質土が堆積している。最も遺物の出土量が多かったのは、３回目に掘削された５層とした粗砂層で、ここからは木製品が多量に出土している。

出土遺物には肥前系陶磁器、京・信楽系施釉陶器、焼締陶器、焙烙、土瓶などの土器類、木製品は、一定量纏まって出土しており漆椀、下駄、曲物の底板、加工部材、棕櫚縄などがある。他には瓦類、土人形も僅かであるが出土している。

554 ～ 566 ～ 571 は肥前系染付、青磁染付である。554･555 は小丸碗、556 ～ 563 は丸碗である。554 ～ 563 は何れも高台が低い。また、562・563 は他の丸碗に比べ器壁が厚く、胎土もややくすむ。564・565 は「くらわんか手」の碗である。566 は腰の張った碗で、内底面は蛇の目釉剥ぎである。567・568 は青磁染付で、567 は内面に松竹梅文を描く碗、568 は内面中央に花卉文の蓋である。569 ～ 571 は猪口で、569 の口縁部は外反する。

572・573 は陶胎染付で、572 の内底部の釉が薄くなって生地が見えている。茶陶としての使用によるものか。

574・575 は京・信楽系の碗で、574 は小杉碗、575 は褐釉施釉の丸碗である。

576 ～ 581 は肥前系の陶磁器である。576・578・581 は陶器で、576 は拳骨茶碗、578 は内型成形の皿、もしくわ向付と思われる。内底面に呉須絵を描く。581 は刷毛目唐津の大鉢である。

577 は色絵磁器稜花皿で殆ど剥げ落ちている。579 は染付仏飯器、580 は青磁香炉である

582 ～ 586 は土瓶である。鉄釉で絵付けされ、582・583・586 は笹、584 は松、585 は梅が描かれる。注口はＳ字状を呈する。587 ～ 589 は燗鍋である。590・591 は蓋で、591 は釉色から判断して 589 とセットとなる。591 は土瓶の蓋の可能性がある。

592 は備前焼の灯明皿である。593 は京・信楽系の水滴で、容器の上面が欠損する。銹釉の絵付けが若干確認できる。594 は火入れである。595 は褐釉の瓶か。

596 ～ 598 は肥前系染付の瓶で、全て鶴首となる。図柄に因るが、花瓶あるいはお神酒徳利としての使用か。

599 ～ 601 は焙烙である。602・603 は擂鉢で、602 は堺、603 は備前焼である。

（遺構 555）調査区中央北端で検出した大型土坑である。この遺構の北側は調査区外に延びているため全容は明確でない。規模は南北長約 5.70 m、東西長約 5.30 m、深さは約 0.8 ～ 1.40 mを測るが、検出した範囲内での数値のため、当然、これらの数値より大きくなる。底は平坦面となり、南から北へ徐々に下がって調査区外に延びている。土層の堆積は総じてレンズ状を呈し、堆積状況や土質および色調から１～４層、５～９層、10 ～底面と短い時期の中で３期の使用期間が窺えられる。また、南西隅の肩部直下では 0.3 ～ 0.5 m大の砂岩と結晶片岩が投げ込まれた状態で出土し、土層図の礫を多量に含む 12 層に相当する。このような大振りの石材は中庭などの一部に使用されていた可能性が高く、造り変えや廃棄時に投棄されたと思われる。

この遺構からの出土遺物には、肥前系陶磁器、瀬戸美濃系施釉陶器、焼締陶器、灯明皿、焙烙などの土器類、木製品では、漆椀、箸、下駄、曲物の側板、桶の側板、楔状木製品、ヘラ状木製品、加工部材などがあり、瓦類も出土している。他にはチョウセンハマグリやサザエなどの貝類、鹿の頭骨が出土している。

604 ～ 615 は土師器皿である。604 ～ 606 は底部ナデ調整、605 ～ 610 は底部糸切調整、611・612 は底部ナデ調整で、体部側面が斜め上方に延びるタイプのものである。613・614 は側面を強い横ナデ調整により口縁部が肥厚するタイプである。615 はヘソ皿状になる。この内、白色系は 607 ～ 610・615 である。なお、今まで記してきた土師器皿で 613・614 の口縁部が肥厚するタイプのものについては、灯明皿として使用された痕跡が全く認められない。

616 ～ 625 は肥前系陶器の碗である。616 ～ 622・624 は灰釉、623 は透明釉、625 は鉄釉を施釉している。626 ～ 635 は肥前系陶器の皿である。626･629 は内面の底部と体部の境に段をもち、627・628 は内面に段を有しないものである。626 ～ 629 の内底部には胎土目が認められる。630 ～ 632 は丸皿で、632 は皮鯨である。633 の釉は青白色をおびる。634 は内底部に鉄絵、器形が歪むことから向付の可能性もある。635 は溝縁皿である。

636 は肥前系陶器の絵唐津向付である。637 は肥前系陶器の小杯である。638 ～ 641 は瀬戸美濃系陶器の織部向付である。638・639 には環状の３脚を付し、638 の施釉は掛け分けである。

641 は黒織部沓形碗の破片である。642・643 は瀬戸美濃系陶器で、長石釉を施釉し、鉄絵で加

飾する。642 は皿、643 は灯火具の蓋である。

644・645 は備前焼の擂鉢、646 は土師質の鉢形となる土器である。647 は平行タタキが認められる焙烙である。

（遺構 530）この遺構の北側は調査区外に延びているため全容は明らかでない。形状は遺存している範囲では不定形を呈する。規模は東西方向 6.25 m以上、南北 3.35 m以上を測り、深さは最も深い箇所で約 1.4 mを測る。埋土は土質、色調で１～ 10 層を上層、11 ～ 17 層を下層として大別できる。下層は有機物を含む還元色の粘質土が堆積していたことから塵芥溜めとして使用されていたことが窺えられる。この状況は塵芥を処理して直ぐに埋めたのではなく、一定期間放置されていたと思われる。

出土遺物には肥前系陶磁器、京･信楽系施釉陶器、焼締陶器、焼塩壷などの土器類の他、瓦類、木製品では曲物の側板・底板がある。

648・649 は白色系の土師器皿である。648 には灯明の痕跡が認められる。650・651 は透明釉施釉の灯明受皿である。652 は焼塩壷の蓋である。

653 ～ 663 は肥前系磁器で、653 ～ 658・661・662・663 は染付、659・660 は青磁染付である。653 ～ 658 は丸碗で、655・656 は印判による施文である。659 は碗、660 は蓋、双方の「大明年製」の銘款が酷似するところからセットになると思われる。661 は皿、662 は筒茶碗である。663 は小杯である。

664･665 は京･信楽系の陶器で､664 は小杉碗､665 はせんじである。666 は堺･明石系擂鉢である。

大型土坑（遺構 518）（図 76、図版 24）

素掘井戸群２の北側に隣接して検出した大型土坑である。平面形状は隅丸長方形を呈する。規模は東西長 6.05 m、南北長 3.50 m、残存の深さは 0.66 mを測る。南側の壁面はほぼ垂直に掘削されているが、北側は緩やかに落ち込む。埋土はレンズ状の堆積を示し、１～９層まで細分できる。特に２・６層には礫を含み、木片などの有機物が顕著であり、遺物の殆どがこの層から出土している。以上の状況からゴミ穴の様相を呈する。

この遺構からの出土遺物には肥前系陶磁器、瀬戸美濃施釉陶器、灯明皿、焙烙、焼塩壷の土器類、木製品としては漆椀、箸、曲物の側板・底板、加工部材、杭などがある。他にはサザエ、ハマグリ、ナガニシ、イガイ、クボガイの貝類も出土している。

667 ～ 670 は土師器皿である。全て底部糸切で白色系の胎土のもので、口径が約４寸（大)、３寸（中)、２寸（小）の規格である。

671 ～ 683・684 は肥前系磁器である。671 ～ 677 は染付碗で、この内、671 ～ 673 は丸碗、674 は初期伊万里、675 ～ 677 は高台を無釉とし、深めのタイプのものである。　678・680 は青磁染付の碗で、678 の高台は無釉、680 は筒茶碗である。679 は青磁碗である。681 は染付小杯、682 は染付猪口である。683・684 は染付皿で、684 は口縁が稜花の大皿である。

685 ～ 688 は肥前系陶器である。685 ～ 687 は碗で、全て二次焼成を受けている。688 は刷毛目唐津の大皿である。鉄釉と銅緑釉で老松の加飾か？

689・690 は瀬戸美濃系の碗である。689 は天目茶碗、690 は筒形碗である。691・692 は肥前系

の瓶と思われる底部で、691 は二次焼成を受け釉が変色、692 は鉄釉施釉である。693 は肥前系の染付線香立てか？ 694 は白磁合子の身である。

695 ～ 697 は焼締陶器の丹波焼擂鉢である。698 は焼塩壷の身、699 は焙烙である。

肥前系磁器の碗･皿については 17 世紀中頃までのもの（674 ～ 681）と、18 世紀代の遺物（671 ～ 673・682 ～ 684）に大別できる。この状況は、第４面での検出遺構であるので、18 世紀の遺物は上面遺構からの混入の公算が高い。

土坑状遺構（遺構 571）（図 79）

調査区中央南端、ｈ 24 グリッドで検出した土坑状遺構である。南側は調査区外に延びている。そのため全容は不明確である。調査できた規模の割には、遺物が多量に出土している。

平面形状は長方形を呈すると思われ、規模は東西 1.5 ｍ、南北 1.9 ｍ以上を測る。深さは 0.9 ｍを測り、断面形状は「Ｕ」字状を呈する。埋土は大きく上層と下層の２層に分層でき、下層には自然堆積と考えられる還元色を帯びた微砂混じりの粘土が 0.6 ｍの厚みで堆積している。上層は不純物も多く、堆積状況から判断して人為的に埋められたものと思われる。

また、遺構内からは遺構構築に関連する木材や石材の出土は無く、ただ単に素掘りの土坑状遺構であったため、何に使用された穴なのかは判断し難い。

ここからの出土遺物には、灯明皿、肥前系陶磁器、焙烙、瓦質土器、焼塩壷、平瓦片などがある。

700･701 土師器皿、700 は透明釉施釉で、灯明の痕跡がある。701 は白色系の底部糸切の小皿で、灯明の痕跡が認められない。

702 ～ 718・723・727 は肥前系磁器である。この内、702 ～ 708 は染付碗、709・710 は白磁碗、723 は青磁の香炉、他は染付の蓋・皿・鉢・小杯・猪口・瓶である。702・703 は丸文、704 は印判による花卉文、705 ～ 708 は草花文を描く。711 は印判で桐文を施文した蓋である。712 は外面形骸化した唐草文の皿、713 は見込みに蛸唐草を描く鉢、714 は青磁染付の小碗で、外面に「一」の字を描く。715 は口縁部が端反りの小杯、716 は猪口、717・718 は紅猪口である。727 は瓶の底部である。

719 ～ 722 は肥前系陶器である。719 ～ 721 は白土による刷毛目を施文する。722 は鉢で、外面は刷毛目から下半は鉄釉を施釉する。器形は片口の可能性もある。

724 は器形不明の瓦質土器である。725・726 は焙烙である。

土坑状遺構（遺構 502・503）（図 77、図版 24）

調査区中央やや東寄りで検出した 2 基の土坑状遺構である。これらの遺構は重複関係にあり、遺構 502 の方が新しい。遺構 502 の平面形状は楕円形を呈し、規模は南北長 3.40 ｍ、東西長約 2.70 ｍを測る。断面形状は「Ｕ」字状を呈し、深さ約 1.15 ｍを測る。埋土は灰色系の細砂と微砂層、微砂混じりの粘質土となり、特に７層には有機物を多量に含む。最下層の９・10 層は純粋な粘土あるいは微砂層となり安定し、底の形状や堆積状況から掘り直しされたと考えられる。ここからの出土遺物には、土師器皿、土師質土器、肥前系陶器、瓦類がある。

728 は白色系の土師器皿である。遺存率が小さいため灯明の痕跡は認められない。

729 ～ 731 は肥前系陶器の皿である。729・730 は内面に胎土目。731 は口縁部と内底部の境に

段が付き、内面は鉄釉で絵付けする。732 は肥前系陶器の向付で、内面に鉄釉で絵付けし、口唇部を縁取る。733 は瀬戸美濃系の灰釉折縁皿である。見込みは禿げる。

734 は土師質の火鉢である。内面中位には煤の付着が巡り、炭・灰の使用位置を示す。

遺構 503 は南北長約 3.0 m、東西長 1.9 m以上、残存の深さは 0.46 mを測る。埋土は灰色系のシルト層や微砂層となるが、遺構 502 に比べ不純物が少なく純粋な堆積を示す。

これらの遺構は同様な大きさから同じ性格の遺構と考えられ、遺構 502 は新たに掘り直された遺構と考えられ、これらの深さや堆積状況から塵芥溜の可能性がある。

大型土坑群（遺構 498・532・533・551）（図 78、図版 24・25）

調査区中央のｈ 18 ～ｉ 20 グリッドで４基の大型土坑を検出した。形状は何れも円形を呈し、一見、素掘井戸のように見えるが、壁面が内傾しているため井戸とは考え難い遺構である。また、検出面から約 1.0 mを掘り下げた地点で湧水が激しく危険を伴うことから、最も深いもので、検出面から深さ 1.50 mで調査を断念した。

（遺構 498）掘形の直径は約 2.25 mを測る。壁面は緩い傾斜で下方に掘削されている。深さは検出面から 1.4 mを調査した。埋土は１～８層と９～ 12 層とに大別でき、上層は灰色系の粗砂やシルト層で、６～８層には緑灰色シルトのブロックが含まれている。下層は還元色を帯びたシルト層および砂層となり、暗灰色のシルトブロックを含んだ層である。上層、下層ともにブロックを含む状況から人為的に埋められた可能性がある。

出土遺物は１点のみで、10 層から唐津焼の碗が出土している。

735 は肥前系陶器で、灰釉施釉の碗である。口縁部直下から見込みに貫入。

（遺構 532）掘形の直径は 2.1 mを測る。約 1.0 mまで掘り下げた。

壁面はほぼ垂直に掘削され、埋土は５層の砂層を境に上下で堆積の様相が違う。上層はレンズ状の堆積を示すのに対し、下層はシルト層がブロック状となる堆積を示す。図示はしていないが９層からは腐食が著しい曲物、土師器皿片１、丸瓦片１が出土している。

（遺構 533）掘形の平面形状はやや楕円形を呈し、長軸約 1.65 m、短軸約 1.45 mを測る。壁面は垂直気味に掘削されており、検出面から 1.2 m掘り下げた。埋土は１～７層までは細砂と微砂、シルトが混在する層で、人為的に埋められた様相をしめす。８層は灰色粘土層で自然堆積層と思われる。この層には､石材として使用されたであろう扁平な大振りの砂岩が落ち込んでいた。土師質土器片、土師器皿片、磁器片が微量出土している。

（遺構 551）掘形の直径は 1.42 mを測る。壁面は垂直に掘削されており、検出面から 1.50 m下方まで掘り下げ調査を行った。埋土は南から北方向に細砂層やシルト層が斜め堆積を示す。何れの層にも 0.05 ～ 0.2 m大のシルトブロックが大量に混在しているところから、意図的に南から埋められたことが推測できる。

なお、この遺構からの出土遺物は皆無である。

土坑状遺構（遺構 514・519）（図 76・77、図版 25・26）

遺構 514 は土坑状遺構である。この遺構は遺構 518 と重複し、遺構 518 より古い。平面形状は長楕円形を呈し、南側は深さ 0.06 mと浅く、北側は 0.38 mとかなりの比高差が付く２段構成となる。深い北側の側壁は緩く下方に下がり、底は平らとなる。埋土はレンズ状の堆積を示し、シルト、微砂、粘土の互層となる。この遺構からは灯明皿、肥前系陶磁器、土人形、丸瓦などが微量出土している。

736 ～ 738 は土師器皿で、736 は底部糸切の白色系土器、737･738 は白色系だが灰色味を帯びる。全ての皿に灯明の痕跡が認められる。739･740 は肥前系陶器の碗で、双方共に畳付に砂が付着し、740 の内底面には多量の砂が付着する。

遺構 519 は遺構 514 の南側に接して検出した土坑状遺構である。形状は楕円形を呈し、規模は東西長約 1.90 m、南北長約 2.20 m、残存の深さは最も深い中心部で 0.57 mを測る。断面形状は船底状となり、埋土はレンズ状に堆積している。最下層以外の埋土は、灰色系の微砂ないし細砂を含むシルトの堆積層である。

この遺構からの出土遺物には灯明皿や肥前系陶磁器がある。

741･742 は白色系の土師器皿である。741 の口縁部は灯明の痕跡が全周する。742 は底部糸切で、灯明の痕跡が認められる。743・744 は肥前系染付碗で、743 は高台が無釉のタイプ、744 は繊細な絵付けを施す。745・746 は肥前系陶器の皿で、745 は溝縁皿と思われる。746 は大皿で、内面は鉄絵を描く。

大型土坑（遺構 562）（図 79, 図 26）

スロープ部分の北端で検出し、この遺構の北側は調査区外に延びているため全容は不明である。土層堆積状況は、調査区の北壁で作図した。規模は東西約 2.55 m、南北約 1.55 m以上を測る。検出面からの深さ 1.8 m地点で、湧水が激しく危険なため調査を断念した。

掘形の断面形状は「U」字状を呈し、壁面はほぼ垂直に掘削され、底で丸く収まると思われる。埋土は１～５層、6 ～ 12 層に大きく分けられ、上層は灰色系の細砂とシルトを主とするのに対し、下層は還元色の粘土を主としている。また、下層はブロックなどを含まず、レンズ状の堆積を示すのに対し、上層は細砂層にシルトブロックや有機物を含む。土層観察からの判断であるが、この遺構の性格は判らないまでも、下層は掘削されてからの自然堆積で、上層は人為的に埋められたと考えられる。

この遺構からの出土遺物には中国製青花１点、木製品では桶の底、箸、板材などがあり、貝類のアカニシも１点出土している。遺構の規模の割には遺物が微量である。

747 は漳州窯の青花碗で、二次焼成を受けている。

素掘井戸群１（遺構 474・476・478・481・486）（図 80、写真 26）

調査区東端で隣接して素掘り井戸と考えられる遺構を５基検出した。グリッド範囲ではａ 20 ～ｂ 23 である。何れの遺構も平面形状は円形を呈し、同一の屋敷地内に存在したものと考えられる。また、今回の調査地の北側でこのような井戸に類似した遺構を、和歌山地方・家庭裁判所増築工事に伴う発掘調査において検出している。なお、掘形が狭いことや湧水地点が浅いことか

ら深さ約 1.30 mまでで調査を断念した。

（遺構 474）掘形の直径は約 0.85 mを測る。掘形はやや傾斜しながら下方に掘削している。掘形が狭いため、調査できたのは検出面から約 1.3 mの深さまでである。

埋土は４層に分層でき、上層は酸化色を呈し、下層は還元色を呈する粗砂を含むシルトである。底まで調査できなかったため井戸底とする桶や曲物等の有無は確認できていない。

（遺構 476）遺構 474 の東側、調査区東限の間際で検出した。掘形の直径は 0.97 mを測り、肩からほぼ垂直に掘り下げられている。埋土は砂質土と粘土の互層になり、調査し得た下層の砂質土中には片岩礫が多量に含まれている。

748 は小振りな瓶で草花文を描く。

（遺構 478）この遺構も調査区東限間際で検出した。最上層は砂質土で覆われていたため、調査当初は他の遺構よりやや大きいものと思われたが、最上層を除去したところ掘形の直径は上方で 0.98 mを測るが、下方にゆくに連れ徐々に狭くなる。検出面から 0.9 m掘り下げた地点で直径 0.5 m強となる。上層には 0.1 ～ 0.2 m大の礫が多量に含まれていた。

（遺構 486）５基検出した内で、この遺構だけが南側に隔たった地点で検出された。掘形の直径は 0.76 mを測り、調査し得た深さは約 0.10 mである。側面の掘形はやや斜めに掘削されて、埋土は調査できた範囲で、下層に粗砂の混じりの青灰シルト層が厚く堆積している。

（遺構 481）５基の素掘り井戸を検出したが、文頭で断ったように深さ 1.0 mまでの調査となった。それで、このような遺構の深さや底の堆積土を確認しておく必要があるため機械で断割ったところ、検出した５基の中で掘形の直径が最も大きく約 1.1 m、深さは 1.42 mを測る。断面形状は砲弾系を呈し、底が丸く狭まる。埋土は、上層が灰色系の粗砂混じりのシルト層で、下層は自然堆積と考えられる還元色を帯びた粗砂混じりのシルト～粘質土となる。また、底では曲物などを井戸底として設置した施設は確認できなかった。

なお、遺構 476・478 の埋土中には礫を多量に含むことから、全ての井戸は第 3 遺構面を構築する際に埋められ整地された公算が高い。埋められていた結晶片岩片や砂岩は、当初、これらの井戸の周辺に踊り場として配されていた可能性もある。

遺物は遺構 476 から肥前系染付瓶、焼締陶器擂鉢片、瓦類の破片が出土しており、遺構 474・478・481・486 からは皆無である。

素掘井戸群１周辺の土坑状遺構（遺構 468・472・473・475）（図 73、図版 26）

素掘り井戸群１の南側で検出した４基の土坑状遺構について若干触れておく。何れの遺構も単なる穴であるため、その性格については不明であるが、ある程度の遺存規模があるため、屋敷地内の構築施設に付随した掘削坑の可能性が十分考えられる。

（遺構 468）形状は東西に長い長方形を呈する。規模は長辺 1.95 m、短辺 1.10 mを測る。深さは、北側は浅く 0.14 m、南側は深く 0.54 ～ 0.60 mの２段構成となり、双方の底は平坦となる。側壁はほぼ垂直に下がり、断面形状は「U」字状を呈する。埋土の上層（１層を主とする）は細砂・微砂にシルトブロックが入るが、中層（５層を主とする）、下層（７層を主とする）は細砂～微砂層となる。

この遺構からの出土遺物は皆無である。

（遺構 472）遺構 468 の南側に接して検出した。形状は南北方向に長い長方形を呈する。規模は南北 2.22 m、東西約 2.0 m、残存の深さは 0.42 mを測る。壁面はやや斜め方向に下がり平坦な底部となる。埋土は、若干の色調の違いや含むシルトの形状の違いで細分できるが、全て微砂層である。

この遺構からの出土遺物には肥前系陶磁器、灯明受皿、擂鉢、漆塗りの加工部材、瓦類などがある。

750 は透明釉施釉の灯明受皿である。751 は堺・明石系の擂鉢の口縁部である。

（遺構 473）遺構 472 と重複し、当遺構の方が古い。形状は楕円形を呈し、長軸 2.9 m、短軸 2.3 mを測る。この遺構の南西隅は深くなり、段がつく。深さは、湧水のため 0.74 mまでしか確認できなかった。埋土は灰黄色系の細砂～微砂層が主となり、下層ではかなりの水分を含む。

ここからの出土遺物は図示できるものはないが丸瓦片が出土している。

（遺構 475）形状は長楕円形を呈し、長軸約 2.70 m、短軸 0.54 ～ 0.90 mを測る。残存の深さは、北側は深く 0.42 m、南側が浅く 0.16 mを測り、２段となる。埋土は全て黄色系の細砂あるいは細砂～微砂となり、レンズ状の堆積を示す。

ここからは肥前系陶磁器、瓦類が出土している。

749 は刷毛目唐津の皿で内面には飛びカンナで施文する。

素掘井戸群２（遺構 536・537）（図 76、図版 27）

素掘井戸群１から約 26 m西側で２基の円形素掘井戸を検出した。調査区のほぼ中央、グリッドでいうとｈ 19 ～ ｉ 20 である。

（遺構 536）掘形の直径は 0.76 mを測り、深さも 0.76 mと浅い。断面形状は砲弾形を呈する。埋土は黄色系のシルト質で水平堆積を示すが、最下層の埋土には褐灰色シルトのブロックを含むことから人為的に埋められたものと思われる。出土遺物は皆無である。

（遺構 537）遺構 536 の北東側に接して検出し、遺構 536 との隔たりは僅か 0.1 mである。
掘形の直径は約 0.9 mを測り、深さは湧水のため検出面から 0.80 m下方までしか確認できなかった。掘削は、ほぼ垂直に掘られ一部胴膨らみの箇所もみられる。５層とした粗砂層以外は水平堆積を示し、灰黄色系の粗砂混じりのシルトである。また、４層には青灰色のシルトブロックを含

むことから、５層以外は人為的に埋められたものと思われる。

素掘井戸群１についても言えることであるが、第４面が屋敷地として機能していた往時には、これらの遺構の周囲に石あるいは木による其れなりの造作が施されていたと考えられる。この遺構からの出土遺物も皆無である。

木枠井戸１（遺構 492）（図 82、図版 27）

ｆ 21 グリッドで検出した木枠井戸である。掘形の平面形状は円形を呈し、規模は 1.15 ～ 1.26 ｍを測る。掘形内には、直径 0.96 ｍを測る組合せの木枠で井戸側を設置していた。木枠は、複数の板目材を縦位置に円形に配置し、約 0.4 ｍの間隔で竹製の箍で固定した桶状のものである。一枚の木枠の幅は約 0.18 ｍ、厚みは約 0.04 ｍで、長さは途中で朽ちているため不明である。両端は円形に組み合わすため、若干内側の幅が狭くなるように鉋がけを行い、面を平滑に仕上げている。井戸側の直径から推し量るに当初は 16 ～ 17 枚の板材が使用されていたと考えられる。

井戸側内の埋土は、上層は褐色系の砂礫層で、下層はシルト～粘質土となり、井戸の廃棄時には、屋敷の中庭などに使用されていたと思われる結晶片岩、砂岩の大振りの石材が投棄されていた。井戸側と掘形の間は砂層となる。

断割りはＴ．Ｐ．－ 0.1 ｍの地点まで行ったが粘土層であり、湧水層である砂層までは達しないまでも湧水が激しいため、それ以下の掘削については危険を伴うため断念した。断割った最下層の黄褐シルト層で板材を検出したが、これが井戸底となるのか判然としない。

なお、掲載した図および写真は下方で狭まっているが、安全上の勾配をつけて断割ったための結果であり、井戸側は基本的には垂直に構築されていた。出土遺物は井戸側内から国産陶器１片のみである。

木枠井戸２（遺構 527）（図 75、図版 28）

ｎ 21 グリッドで検出した木枠井戸である。平面形状は円形を呈し、掘形の直径約 1.0 ｍを測る。掘形内に円形に巡る木枠痕跡を確認したが、腐食が著しいため土層観察のみにとどまった。井戸の埋土は確認できた地点で３層に分層できた。下層の２層については水分を多量に含み脆弱な土質となる。また、井戸の掘形が狭く深いため、検出面から深さ 0.9 ｍまでしか調査できなかった。ここからは焼締陶器の細片１片のみが出土している。

木枠井戸３（遺構 554）（図版 28）

木枠井戸 527 の南西で検出した木枠井戸である。平面形状は円形を呈し、掘形の直径は約 1.20 ｍを測る。この井戸もまた、掘形内に円形に巡る木枠の痕跡を確認したが、遺構 527 と同様に腐食が著しかった。木枠の直径は約 0.8 ｍを測る。土層は断割りにより、検出面から約 1.50 ｍの深さまで確認したが、崩落の危険を伴うため断念した。全体的に砂の層で、２層や３層には礫あるいはシルトのブロックが含まれている状況から人為的に埋められ廃棄されている。遺物は平瓦片が３片出土しているのみである。

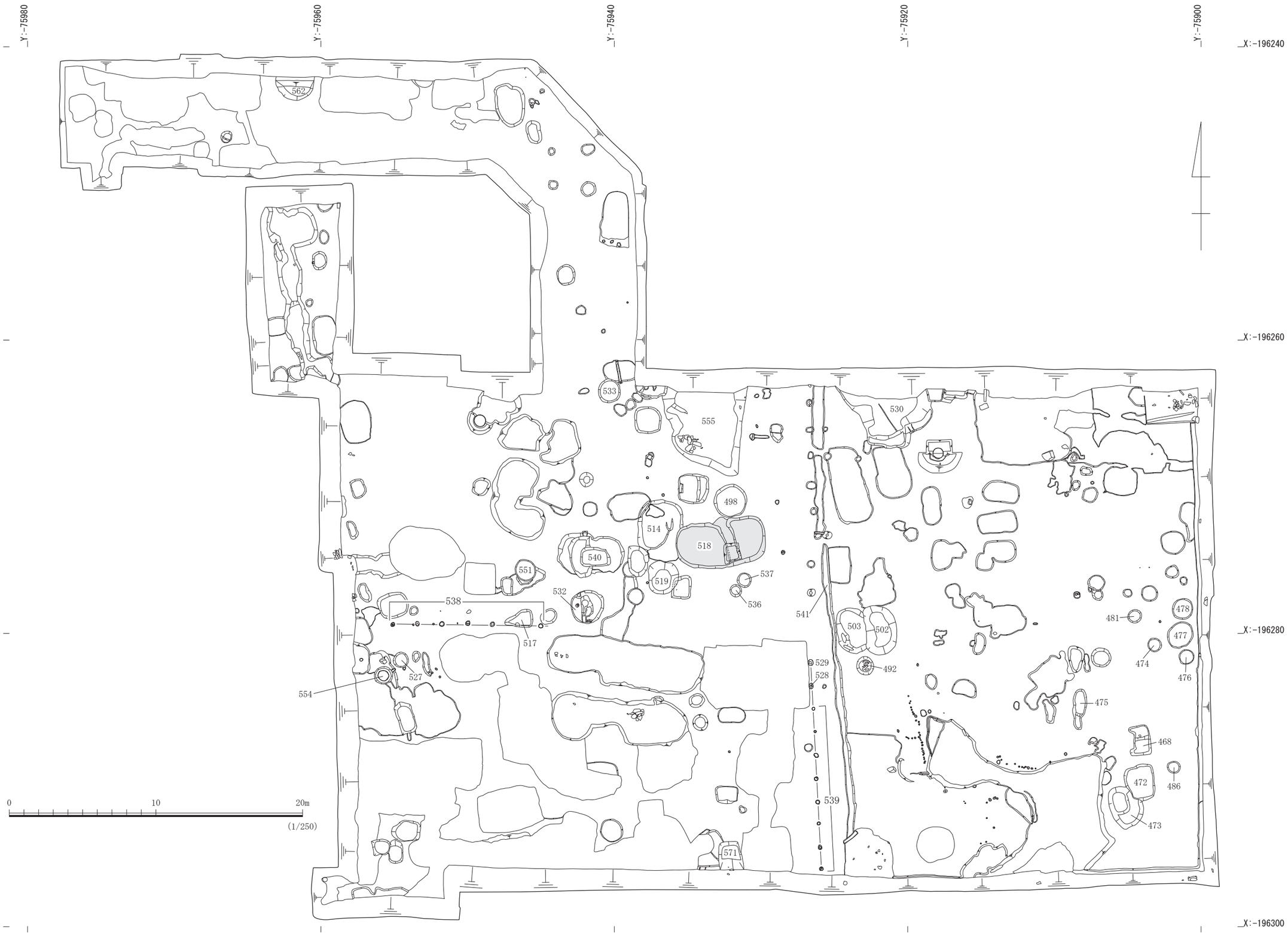


図７０　１区第４面検出遺構平面図

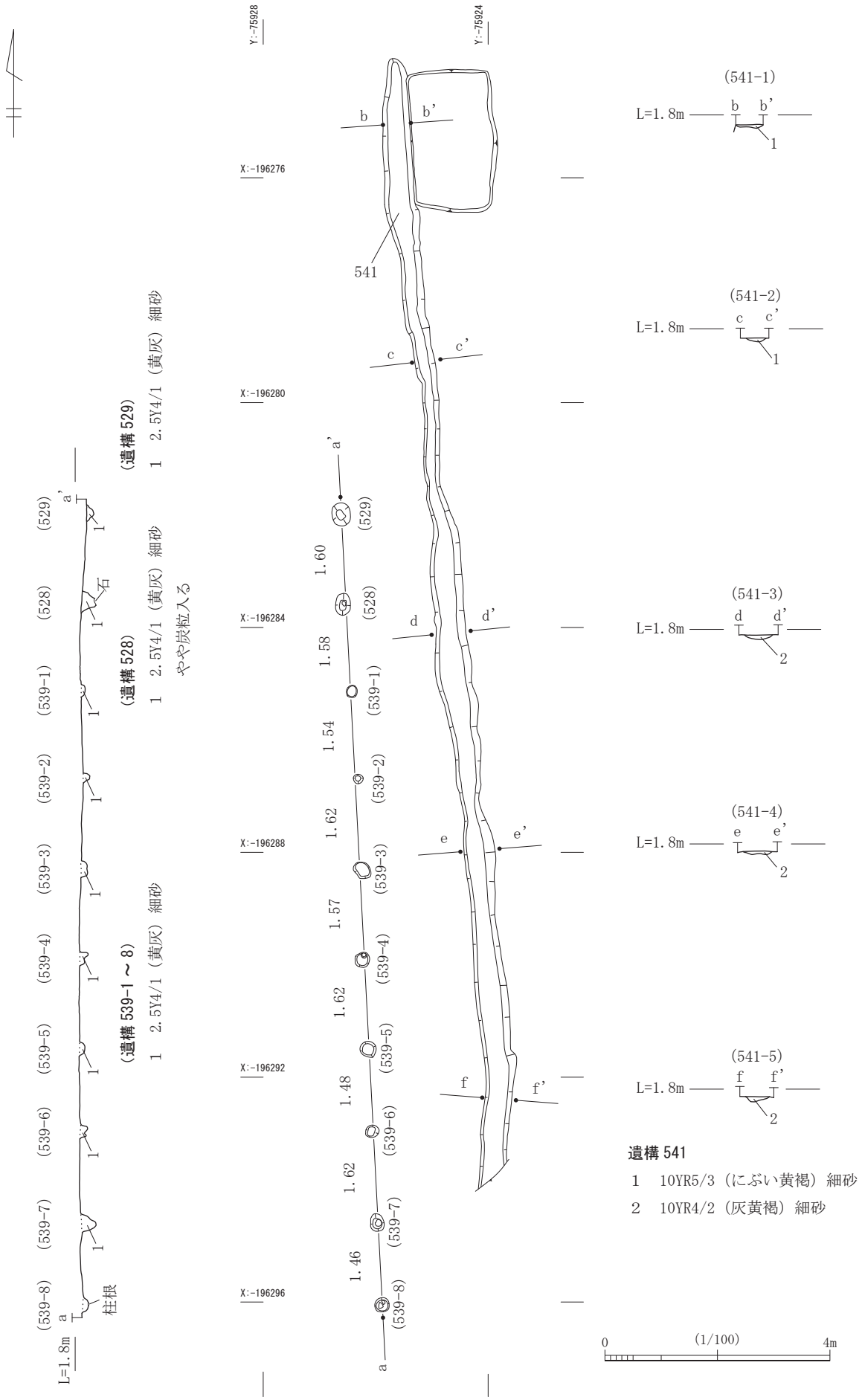
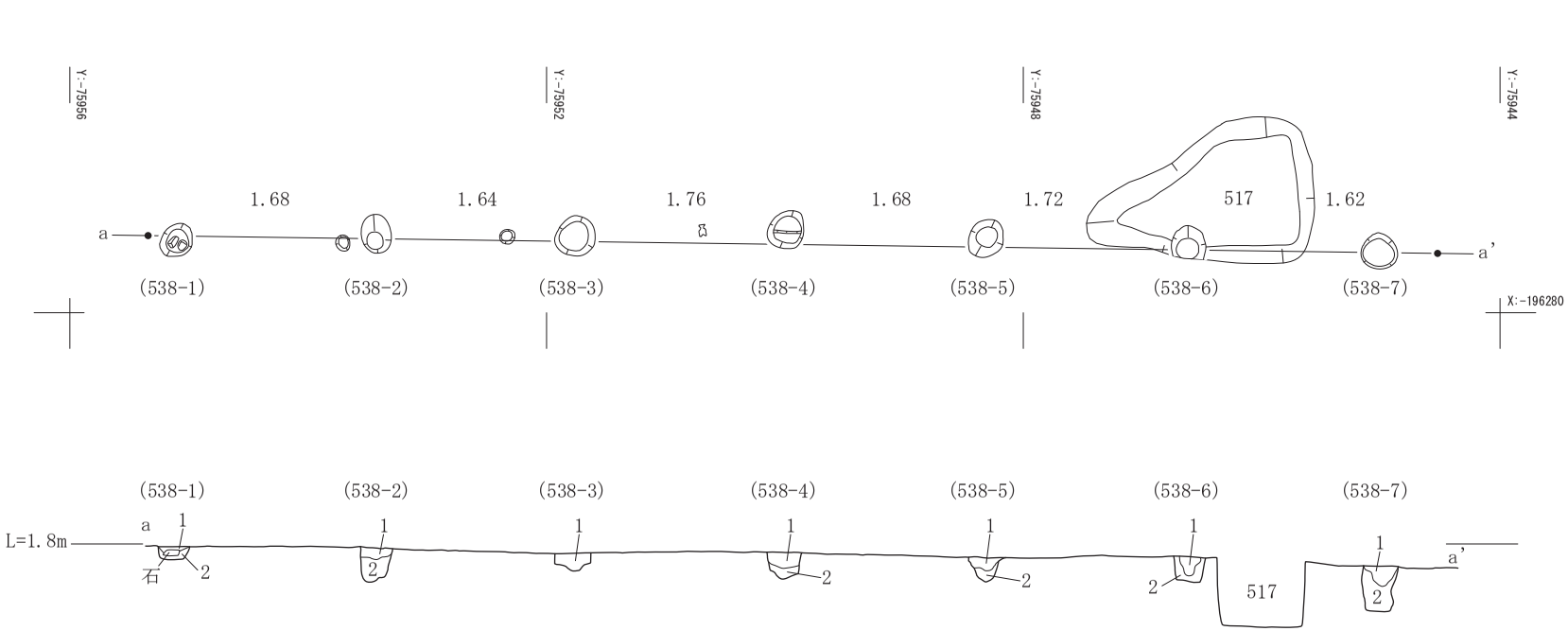


図７１　１区第４面　屋敷地境界　柱穴列２（遺構 528,529,539）・屋敷地境界　溝３（遺構 541）



（遺構 538-1）

1　2.5Y5/1（黄灰）細砂～砂

2　10YR6/6（明黄褐）シルトやや粘質土

（遺構 538-2）

1　2.5Y5/1（黄灰）細砂～砂

2　10YR6/6（明黄褐）シルトやや粘質土

（遺構 538-3）

1　10GY5/1（緑灰）シルトに砂含む

（遺構 538-4）

1　2.5Y5/1（黄灰）細砂

2　10YR6/6（明黄褐）シルトやや粘質土

（遺構 538-5）

1　2.5Y5/1（黄灰）細砂

2　10YR6/6（明黄褐）シルトやや粘質土

（遺構 538-6）

1　2.5Y5/1（黄灰）細砂

2　2.5Y5/3（黄褐）シルトやや粘質

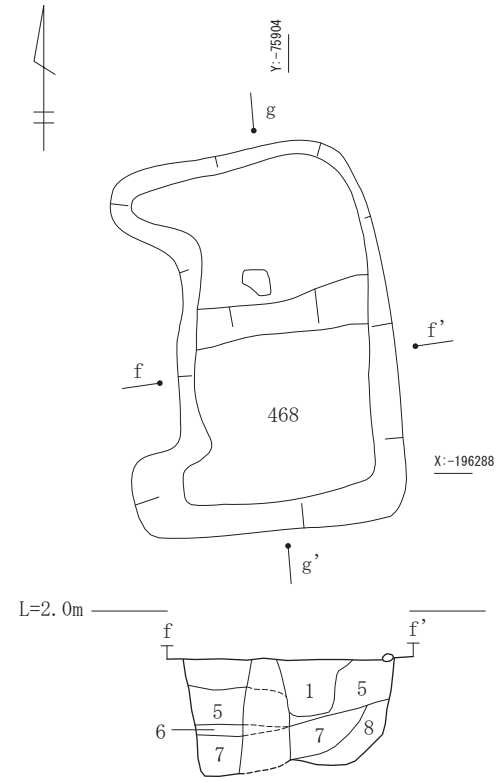
（遺構 538-7）

1　10YR6/2（灰黄褐）シルト～砂

2　10YR5/4（にぶい黄褐）シルトやや粘質

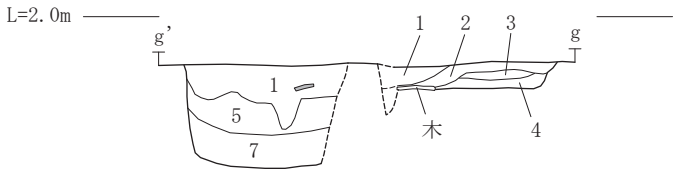
0　(1/60)　2m

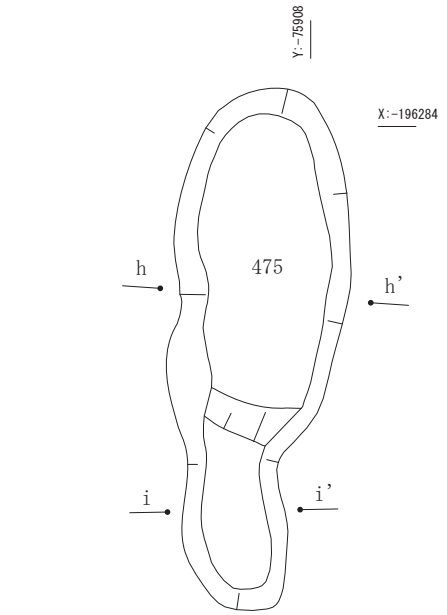
図７２　１区第４面　屋敷地境界　柱穴列３（遺構538）

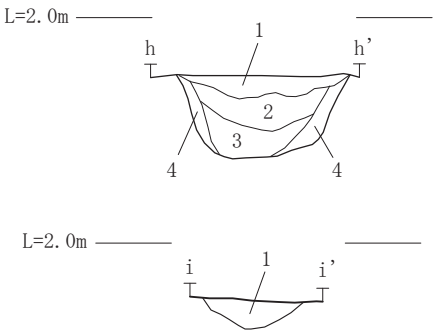


遺構 468

1　10YR4/2（灰黄褐）砂、
　シルトブロックで少量入る、炭入る
2　2.5Y5/3（黄褐）シルト、
　マンガン粒（？）入る
3　10YR4/3（にぶい黄褐）砂
4　10YR4/4（褐）シルト
5　2.5Y4/2（暗灰黄）～
　10YR4/3（にぶい黄褐）砂
6　2.5Y5/2（暗灰黄）砂、炭入る
7　10YR4/2（灰黄褐）砂
8　2.5Y4/3（オリーブ褐）砂







遺構 475

1　2.5Y5/1（黄灰）細砂
2　10YR5/3（にぶい黄）細砂
3　10YR5/4（にぶい黄）細砂～砂
4　2.5Y5/1（黄灰）砂

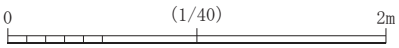
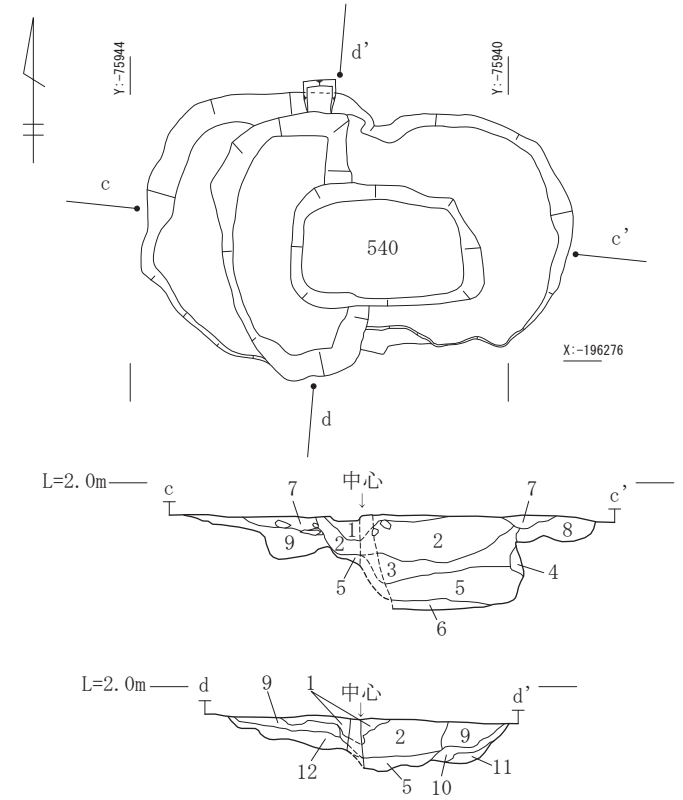
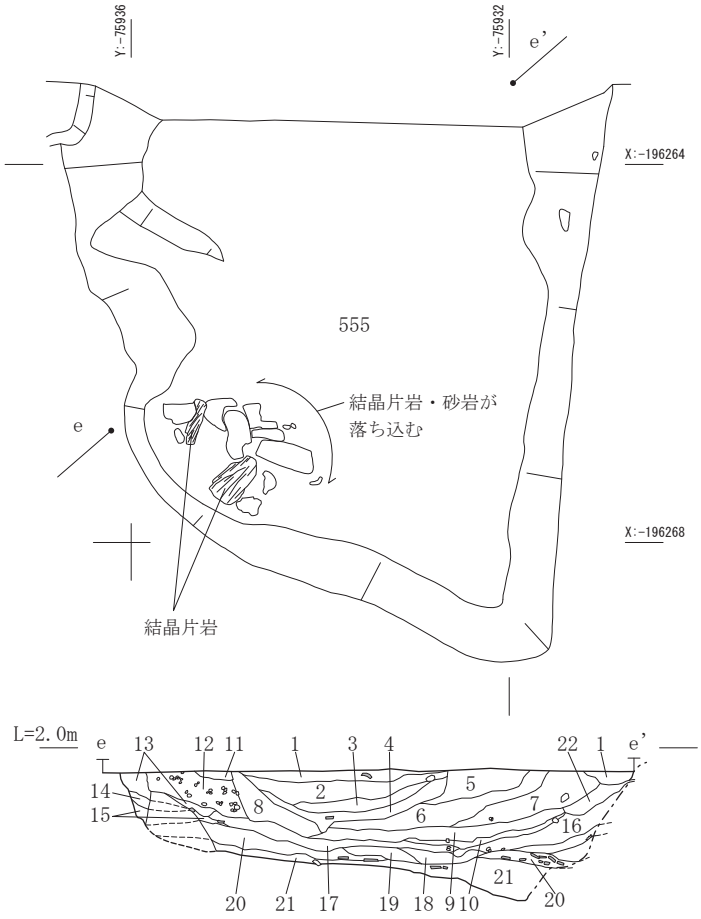


図７３　１区第４面　遺構 468, 475



遺構 540

1　N4/0（灰）細砂、炭粒、礫入る、漆器出土
2　N4/0（灰）細砂、粘質土混じる
3　N5/0（灰）粘質土　瓦、遺物多く入る
4　10GY5/1（緑灰）粘質土
5　10YR3/1（黒褐）砂、木片多く入る、漆器出土
6　N5/0（灰）粘質土
7　5Y4/1（灰）細砂、焼土層
8　2.5Y5/3（黄褐）砂
9　10GY5/1（緑灰）シルトやや粘質
10　10GY4/1（暗緑灰）砂
11　10GY5/1（緑灰）粘質土
12　10GY4/1（暗緑灰）砂、粘質土含む、4と同じ？

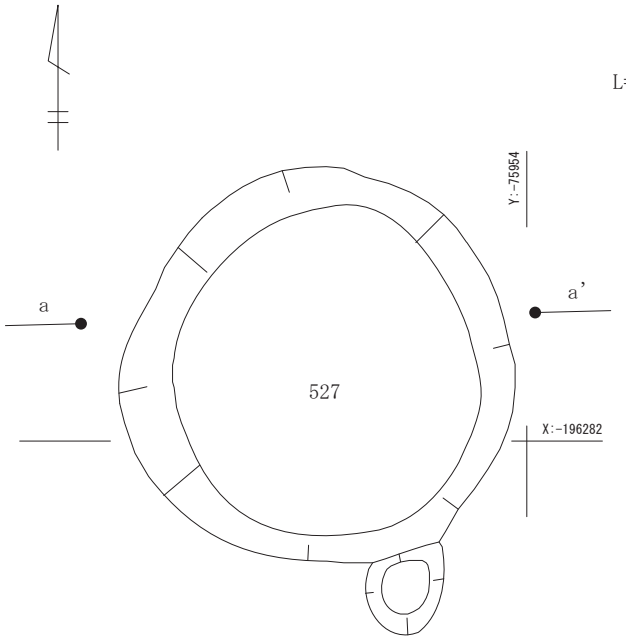


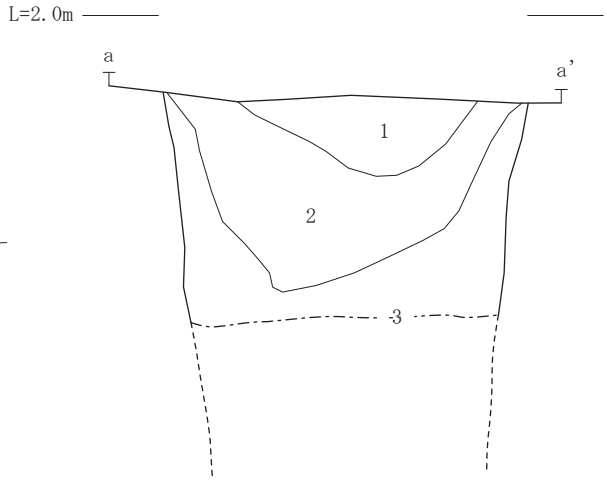
遺構 555

1　2.5Y5/3（黄褐）細砂、炭粒、土器細片含む
2　2.5GY4/1（暗オリーブ炭）粘質土、砂混じる
3　N3/0（暗灰）砂、木片多量に含む
4　N3/0（暗灰）砂・2.5GY4/1（暗オリーブ灰）
　粘質土混じる
5　N5/0（灰）粘質土、炭、木片含む
6　N5/0（灰）砂～粘質土、炭、木片含む
7　N5/0（灰）粘質土、木片、貝、土器片多量に含む
8　N5/0（灰）粘質土～砂
9　N3/0（暗灰）砂、木片多量に含む
10　5GY4/1（暗オリーブ灰）粘質土、木片多く含む
11　2.5Y5/3（黄褐）細砂、礫含む
12　10YR5/2（灰黄褐）細砂、5cm大の礫多量に含む
13　2.5Y5/3（黄褐）細砂
14　N5/0（灰）砂
15　N5/0（灰）砂～シルト
16　N3/0（暗灰）・5GY4/1（暗オリーブ灰）粘質土
17　2.5GY4/1（暗オリーブ灰）粘質土、木片含む
18　2.5GY4/1（暗オリーブ灰）粘質土
19　10BG4/1（暗青灰）砂
20　10BG4/1（暗青灰）砂、木片含む
21　N4/0（灰）粘質土、木片、瓦、土器含む
22　N5/0（灰）砂～シルト、炭、木片含む

0　(1/80)　2m

図７４　１区第４面　廃棄土坑群（遺構 530,540,555）



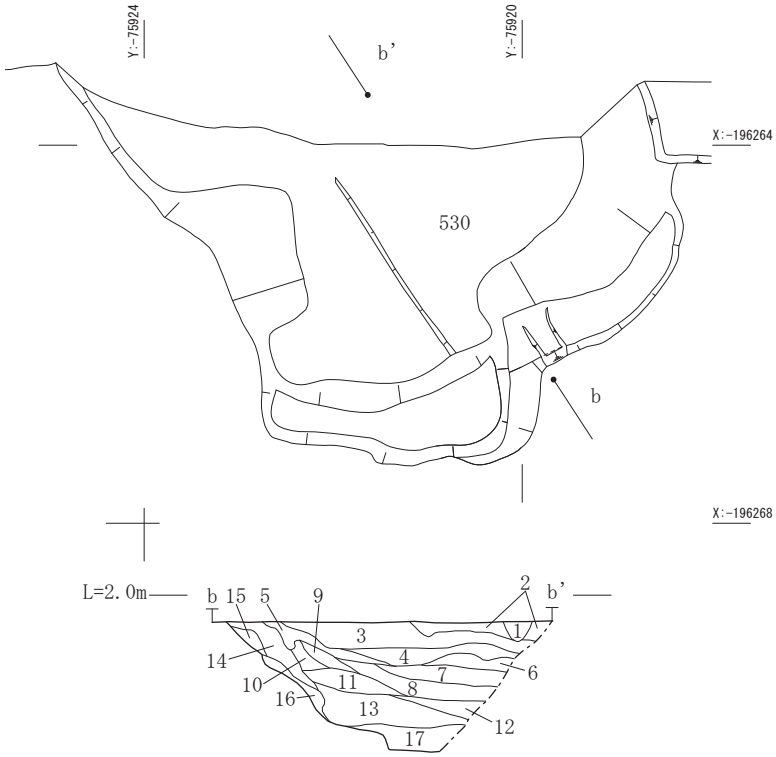


木枠井戸２（遺構 527）

1　10YR5/3（にぶい黄褐）シルトに炭粒入る
2　10YR5/3（にぶい黄褐）粗砂、水分多い
3　10YR5/3（にぶい黄褐）粗砂、水分多い

0　(1/20)　1m

廃棄土坑群（遺構 530,540,555）

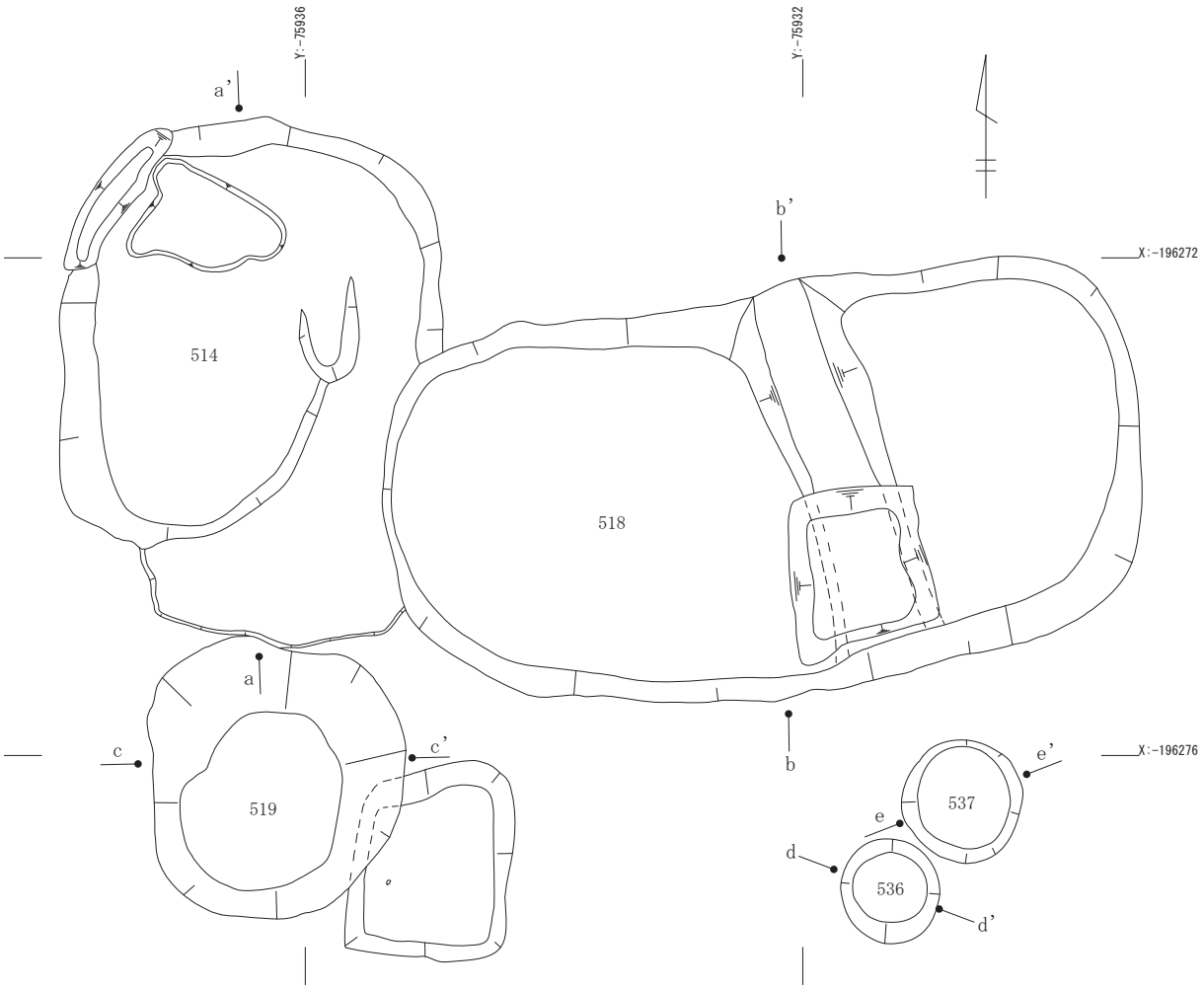


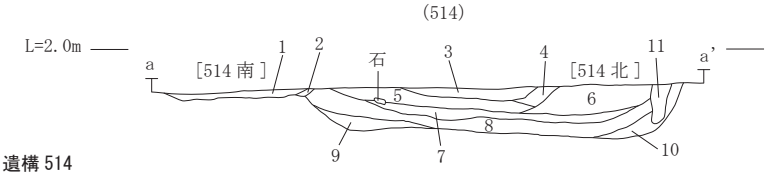
遺構 530

1　10Y4/1（灰色）砂質
2　2.5Y4/3（オリーブ褐色）砂質
3　10YR4/3（にぶい黄褐色）砂質
4　5Y4/2（灰オリーブ色）砂質
　炭焼土粒わずかに含む
5　2.5Y4/4（オリーブ褐色）砂
6　7.5Y4/1（灰色）細砂
7　N4/0（灰色）粘土
8　10Y4/1（灰色）細砂　炭を含む
9　10YR4/3（にぶい黄褐色）砂質
10　2.5Y5/4（黄褐色）シルト
　暗褐色シルトブロックを斑に含む
11　7.5Y4/1（灰色）粘土
12　N4/0（灰色）粘土
13　5GY4/1（暗オリーブ灰色）シルト
　暗オリーブ色シルトを含む
14　2.5Y4/4（オリーブ褐色）シルト
　暗褐色シルトブロックを斑に含む
15　2.5Y4/2（オリーブ褐色）砂
16　2.5Y5/4（黄褐色）シルト
　砂を多く含む　池山風化土
17　10GY5/1（緑灰色）粘土

0　(1/80)　2m

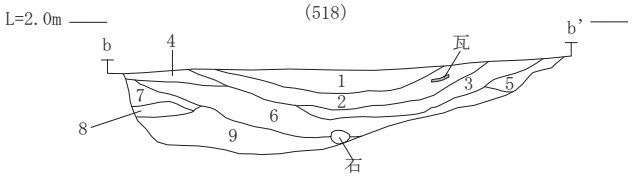
図７５　１区第４面　木枠井戸２（遺構 527）・廃棄土坑群（遺構 530,540,555）





遺構 514

1　2.5Y4/2（暗灰黄色）砂質：[514 南] 埋土
2　2.5Y5/2（暗灰黄色）シルト：[514 南] 埋土
3　7.5Y4/1（灰色）シルト
4　5Y4/2（灰オリーブ色）砂
5　10Y5/1（灰色）粘土
6　5Y5/2（灰オリーブ色）砂、2 ～ 3cm 大礫わずかに含む
7　10Y4/1（灰色）粘土、砂が混じる
8　5Y5/1（灰色）砂、シルトブロックを含む
9　7.5Y4/2（灰オリーブ色）砂
10　5Y5/1（灰色）砂
11　5Y5/2（灰オリーブ色）シルト

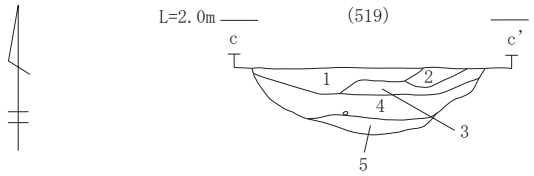


遺構 518

1　2.5Y4/4（オリーブ褐色）粗砂
2　5Y4/1（灰色）粘土、礫、木片を含む
3　10Y4/1（灰色）粘土
4　2.5Y4/2（暗灰黄色）砂質
5　7.5Y4/1（灰色）、2.5Y4/4（オリーブ褐色）砂混じる
6　7.5Y4/1（灰色）砂質、瓦、貝、礫、木片を多く含む
7　5Y4/2（灰オリーブ色）砂質
8　2.5Y5/3（黄褐色）砂、同色シルトブロック含む
9　7.5Y4/1（灰色）砂

0　(1/60)　2m

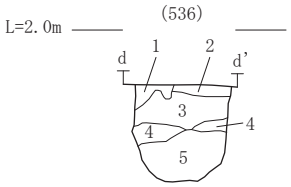
図７６　１区第４面　遺構 514・518・519・素掘井戸群（遺構 536,537）



遺構 519

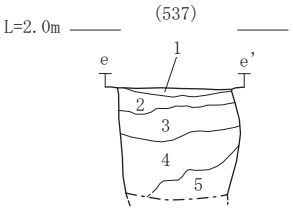
1　2.5Y4/3（オリーブ褐色）砂、炭を含む
2　5Y4/2（灰オリーブ色）シルト、砂を含む
3　5Y5/2（灰オリーブ色）シルト、砂を含む
4　5Y4/1（灰色）粘質土、炭、砂粒を含む
5　7.5Y5/2（灰オリーブ色）粘土

素掘井戸群（遺構 536,537）



遺構 536

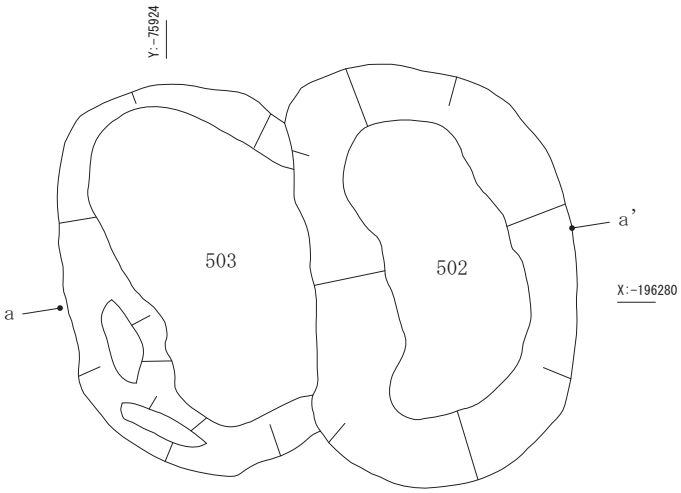
1　2.5Y5/1（黄灰）砂
2　2.5Y6/3（にぶい黄）シルト
3　10YR5/4（にぶい黄褐）シルト
4　10YR5/1（褐）砂・
　10YR5/4（にぶい黄褐）シルト混じる
5　10YR5/4（にぶい黄褐）シルト・
　10YR4/1（褐灰）シルトブロック粒で含む

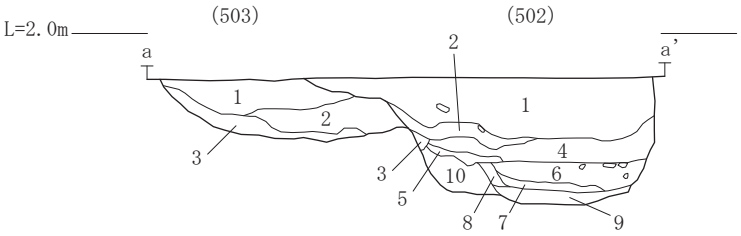


遺構 537

1　N4/1（灰）細砂・微砂、炭多く含む
2　2.5Y4/1（黄灰）細砂・微砂、シルト粒が混じる
3　2.5Y5/2（暗灰黄）細砂・微砂、炭含む、シルト粒が混じる
4　2.5Y5/2（暗灰黄）細砂・微砂、
　10BG6/1（青灰）シルトブロック含む、鉄分含む
5　10YR5/3（にぶい黄褐）細砂・微砂

遺構 502,503





遺構 502

1　10YR4/1（褐灰）～
　10YR4/2（灰黄褐）砂、礫、
　シルトブロックで入る
2　2.5Y4/2（暗灰黄）砂、シルト混じる
3　2.5Y4/1（黄灰）砂
4　N4/0（灰）砂～粘質土
5　N4/0（灰）砂～粘質土
6　2.5Y4/2（暗灰黄）粘質土、
　礫多く入る、20cm 大
7　N4/0（灰）有機物（木くず？）含む
8　2.5Y5/3（黄褐）シルト
9　N5/0（灰）粘土
10　N5/0（灰）砂

遺構 503

1　10YR4/2（灰黄褐）砂、シルト粒、炭入る
2　10YR4/2（灰黄褐）＋10YR5/1（褐灰）砂
3　10YR5/2（灰黄褐）砂～シルト

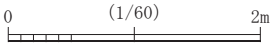
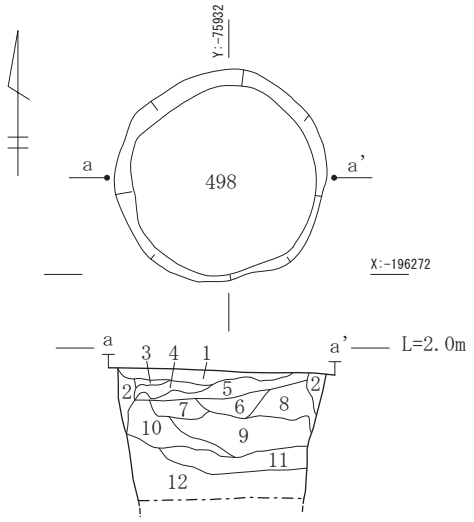
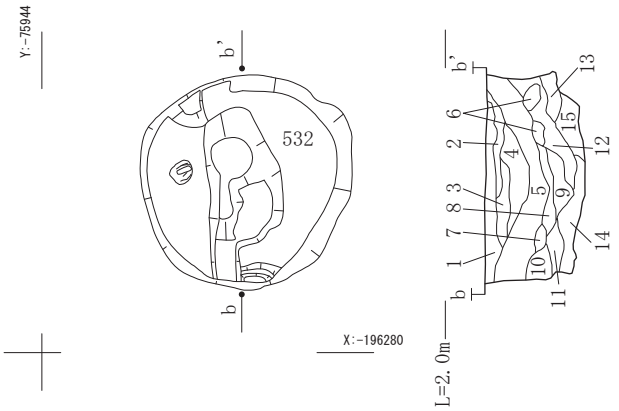


図７７　１区第４面　遺構 519・素掘井戸群（遺構 536,537）・遺構 502,503



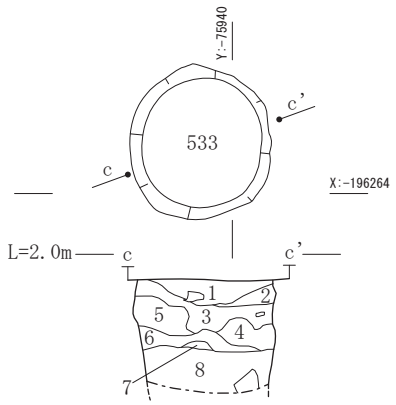
遺構 498

1　2.5Y5/1（黄灰）砂、鉄分多く含み・N6/0（灰）シルト含む
2　2.5Y6/2（灰黄）砂　固い鉄分多く含む、やや炭混じる
3　2.5Y5/1（黄灰）砂、シルト少量含む、鉄分含む
4　N6/0（灰）砂に３の砂含む、鉄分含む
5　N6/0（灰）シルト～砂、鉄分含む
6　N6/0（灰）シルト、
　N4/0（灰）シルトブロック、砂、鉄分少量含む
7　N6/0（灰）砂、7.5GY6/1（緑灰）シルトブロック入る
8　N6/0（灰）砂、7.5GY6/1（緑灰）シルトブロック、鉄分含む
9　10GY5/1（緑灰）砂～シルト
10　10GY5/1（緑灰）砂、シルト粒状に含む、炭、土器細片少量含む
11　10GY5/1（緑灰）シルト～砂、N3/0（暗灰）シルトブロック含む
12　10GY5/1（緑灰）砂～シルト



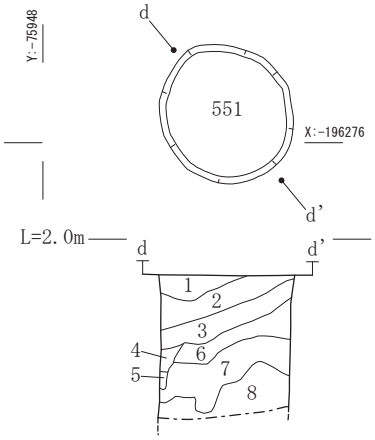
遺構 532

1　10YR6/3（にぶい黄褐）シルト、砂混じる
2　10YR4/2（灰黄褐）砂、炭少量入る、シルト混じる
3　10YR6/4（にぶい黄褐）シルト、やや粘質
4　10YR5/3（にぶい黄褐）シルト
5　2.5Y5/2（暗灰黄）砂
6　10YR5/4（にぶい黄褐）シルト
7　10BG5/1（青灰）シルト
8　10YR5/2（灰黄褐）砂
9　10YR5/2（灰黄褐）砂、10BG5/1（青灰）シルト混じる
10　10YR4/3（にぶい黄褐）シルト
11　10YR4/3（にぶい黄褐）シルト、鉄分含む
12　10YR4/2（灰黄褐）砂
13　10YR5/4（にぶい黄褐）シルト、砂混じる
14　10YR4/2（灰黄褐）砂
15　10YR5/2（にぶい黄褐）シルト



遺構 533

1 10BG6/1（青灰）砂
2　10YR5/2（灰黄褐）砂
3　2.5YR5/2（暗灰黄）砂、シルト 10BG6/1（青灰）混じる
4　10YR5/2（灰黄褐）砂
5　10YR5/2（灰黄褐）～10YR6/4（にぶい黄褐）砂
6　10YR5/2（灰黄褐）シルト、砂混じる
7　10BG6/1（青灰）粘質土
8　N5/0（灰）粘質土



遺構 551

1　2.5Y4/3（オリーブ褐色）砂質　シルト粒わずかに含む
2　5Y5/3（灰オリーブ色）シルト
3　5Y4/4（暗オリーブ色）細砂　シルトブロック大量に含む
4　5Y4/4（暗オリーブ色）シルト
5　7.5Y4/2（灰オリーブ色）粘質
6　7.5Y4/2（灰オリーブ色）細砂　シルトブロック大量に含む
7　2.5GY4/1（暗オリーブ灰色）細砂　シルトブロック大量に含む
8　5GY4/1（暗オリーブ灰色）細砂

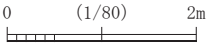
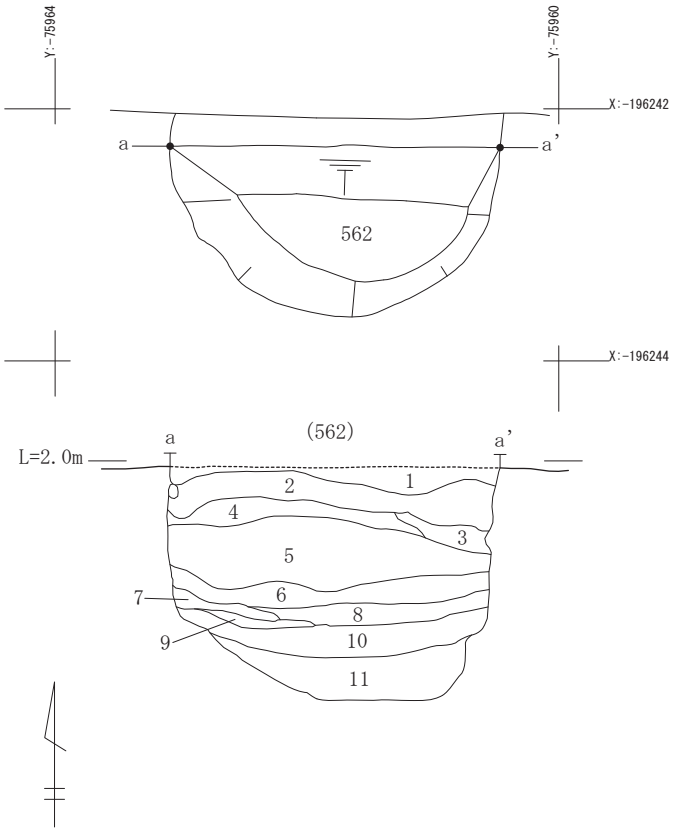
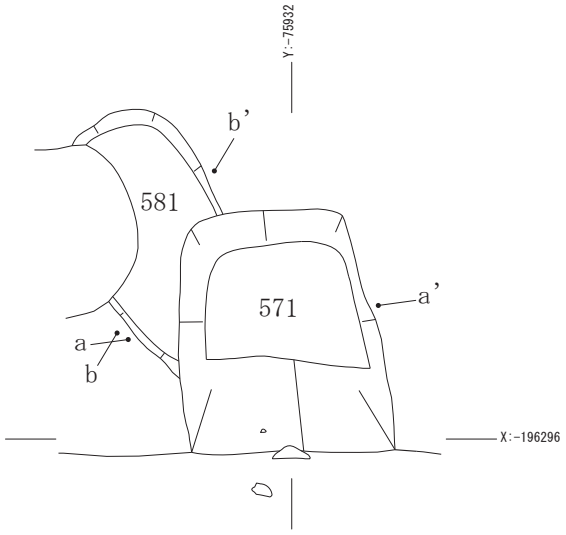


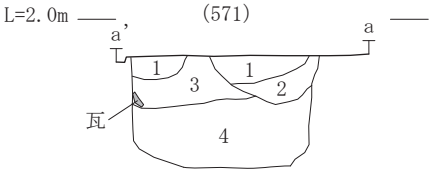
図７８　１区第４面　大型土坑群（遺構 498,532,533,551）



遺構 562

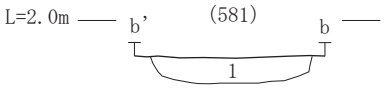
1　2.5Y5/4（黄褐色）シルト、
　　暗オリーブ褐色シルトブロック多く含む
2　2.5GY4/1（暗オリーブ灰色）細砂、
　　シルト粒含む
3　2.5GY4/1（暗オリーブ灰色）細砂、
　　シルトブロック含む
4　N3/0（灰白色）細砂、植物繊維、炭を多く含む
5　2.5GY5/1（オリーブ灰色）細砂
6　7.5GY5/1（緑灰色）シルト
7　5GY6/1（オリーブ灰色）粘土
8　2.5GY4/1（暗オリーブ灰色）粘土
9　7.5GY4/1（暗緑灰色）粘土
10　5GY4/1（暗オリーブ灰色）粘土
11　10GY6/1（緑灰色）粘土





遺構 571

1　2.5Y4/3（オリーブ褐）細砂、炭、焼土粒入る
2　2.5Y4/1（黄灰）砂、水分多い
3　N4/0（灰）砂
4　10BG4/1（暗青灰）砂～粘質土



遺構 581

1　10YR4/2（灰黄褐）砂

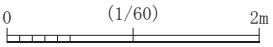
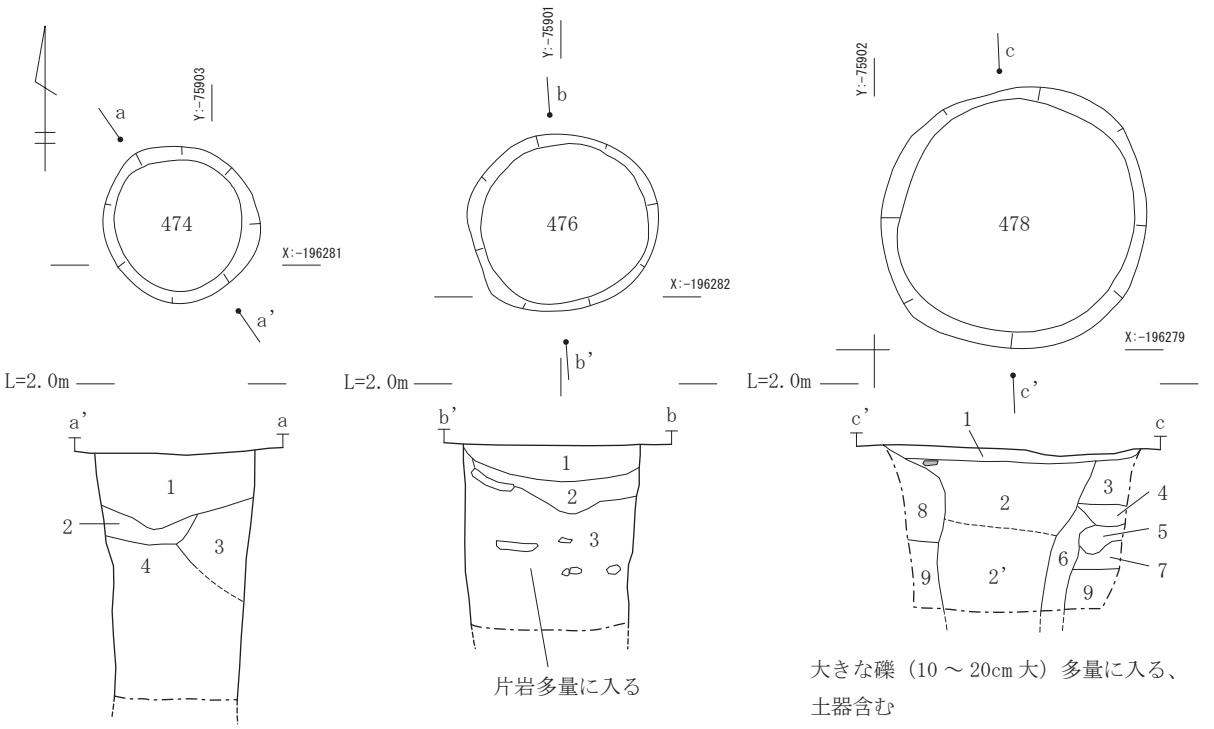


図７９　１区第４面　遺構 562・571・581



遺構 474

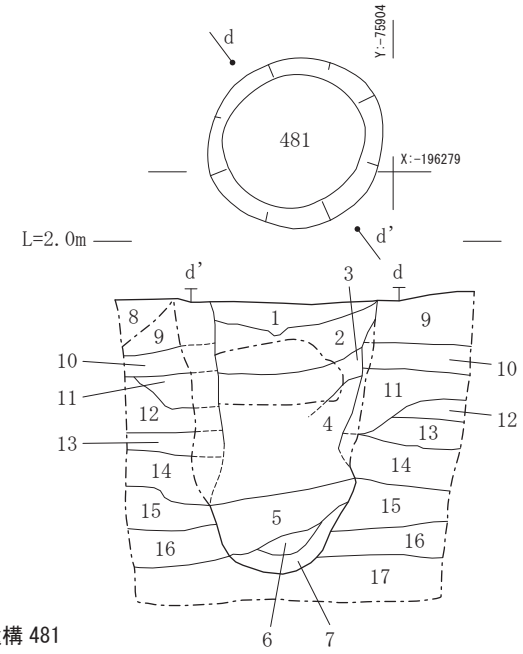
1　2.5Y5/2（暗灰黄）粗砂
2　2.5Y4/4（オリーブ褐）シルト
3　10BG5/1（青灰）粗砂
4　2.5Y4/2（暗灰黄）粗砂

遺構 476

1　2.5Y4/3（オリーブ褐）砂
2　2.5Y5/2（暗灰黄）粘土、鉄分含む
3　2.5Y4/1（黄灰）砂、礫多量、
　　7.5YR4/3（褐）混じる

遺構 478

1　2.5Y4/2（暗灰黄）砂
2　2.5Y4/2（暗灰黄）砂、礫多量に入る
2'　2.5Y4/2（暗灰黄）砂、やや水分を含み粘質
3　2.5Y4/2（暗灰黄）砂、
　　10YR4/3（にぶい黄褐）シルト混じる
4　10YR4/2（灰黄褐）砂
5　2.5Y6/3（にぶい黄）粘質土
6　10YR4/2（灰黄褐）砂
7　2.5Y4/2（暗灰黄）砂
8　10YR4/3（にぶい黄褐）シルト、
　　ベース土と似ている
9　10YR4/3（にぶい黄褐）砂、
　　10BG5/1（青灰）砂混じる←北側に少し



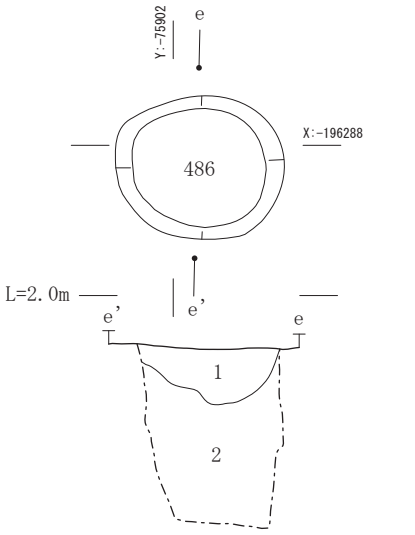
遺構 481

井戸の埋土

1　2.5Y4/2（暗灰黄）砂、
　　2.5Y6/4（にぶい黄褐）シルト混じる
2　2.5Y4/1（黄灰）砂、シルト粒で混じる
3　2.5Y4/2（暗灰黄）砂、鉄分粒入る
4　2.5Y4/1（黄灰）砂
5　2.5Y5/2（暗灰黄）砂、
　　やや粘質、玉石入る
6　10GY5/1（緑灰）砂～シルト
7　2.5Y5/1（黄灰）～
　　2.5Y5/2（暗灰黄）粘質土、砂混じる

ベース土

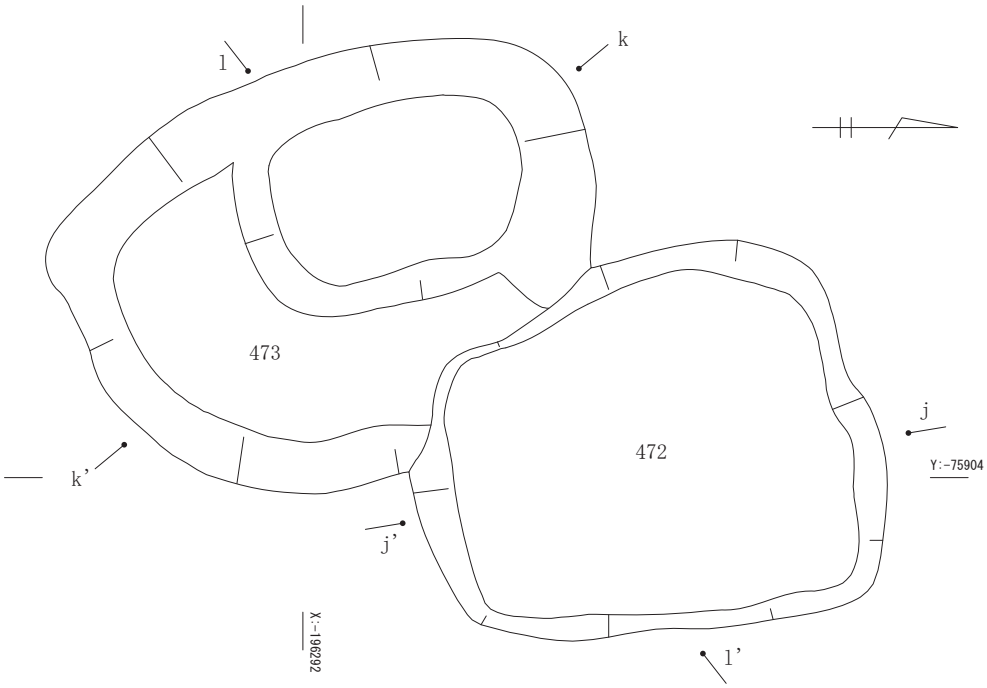
8　10YR4/2（灰黄褐）砂
9　10YR5/3（にぶい黄褐）シルト
10　10YR5/3（にぶい黄褐）シルト～粘質土
11　10YR6/3（にぶい黄橙）粘質土
12　10YR5/3（にぶい黄褐）シルト
13　5Y5/1（灰）酸化マンガン粒入る、粘質土
14　10YR4/1（褐灰）シルト～粘質土
15　2.5Y6/2（灰黄）シルト
16　10YR7/8（黄褐）粘質土
　　（10BG6/1 に 10YR7/8 入る感じ）
17　10BG6/1（青灰）粘質土



遺構 486

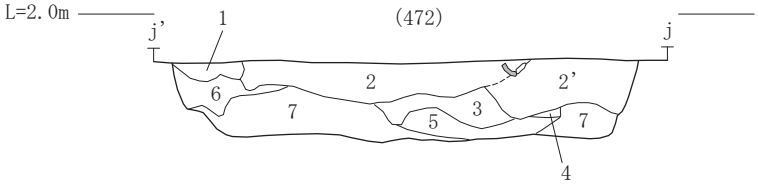
1　2.5Y5/2（暗灰黄）砂
2　10BG6/1（青灰）＋
　　7.5YR5/6（明褐）砂混じる

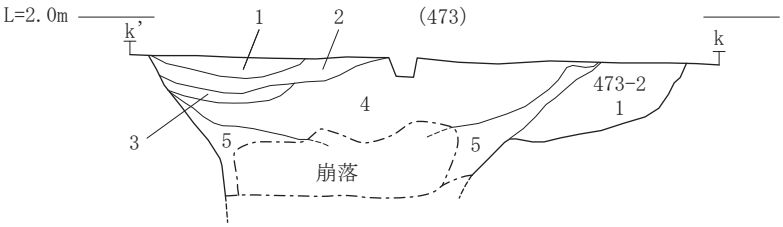
図８０　１区第４面　素掘井戸群（遺構 474, 476, 478, 481, 486）



遺構 472

1　2.5Y4/2（暗灰黄）砂、鉄分入る
2　2.5Y4/2（暗灰黄）砂、
　シルトブロックで入る、炭入る
2'　2.5Y4/2（暗灰黄）砂
3　2.5Y4/2（暗灰黄）砂、シルト入る
4　2.5Y5/2（暗灰黄）砂～シルト
5　10YR4/2（灰黄褐）砂、風化礫含む
6　2.5Y4/2（暗灰黄）砂
7　10YR4/1（褐灰）砂





遺構 473

1　10YR4/3（にぶい黄褐）砂
2　2.5Y6/2（灰黄）砂
3　10YR5/2（灰黄褐）砂、シルト（有機物？）と砂で層となる、炭粒含む
4　10YR4/2（灰黄褐）砂、炭含む
5　2.5Y5/1（黄灰）砂

遺構 473-2

1　10YR6/3（にぶい黄褐）シルト、マンガン粒

472・473 の切り合い関係

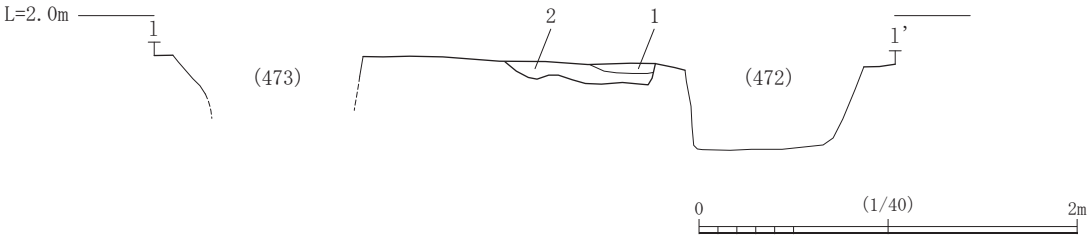
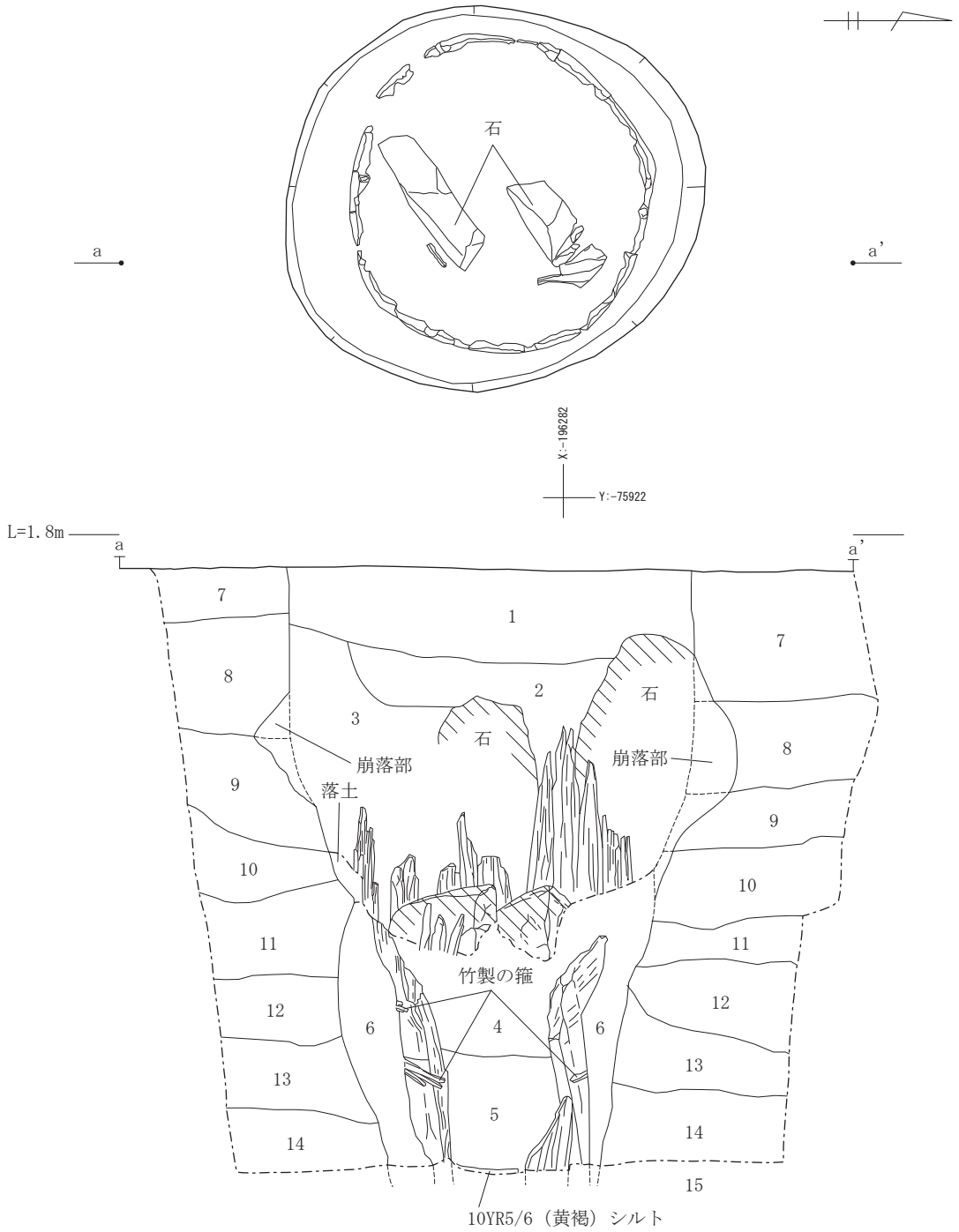


図８１　１区第４面　遺構 472,473

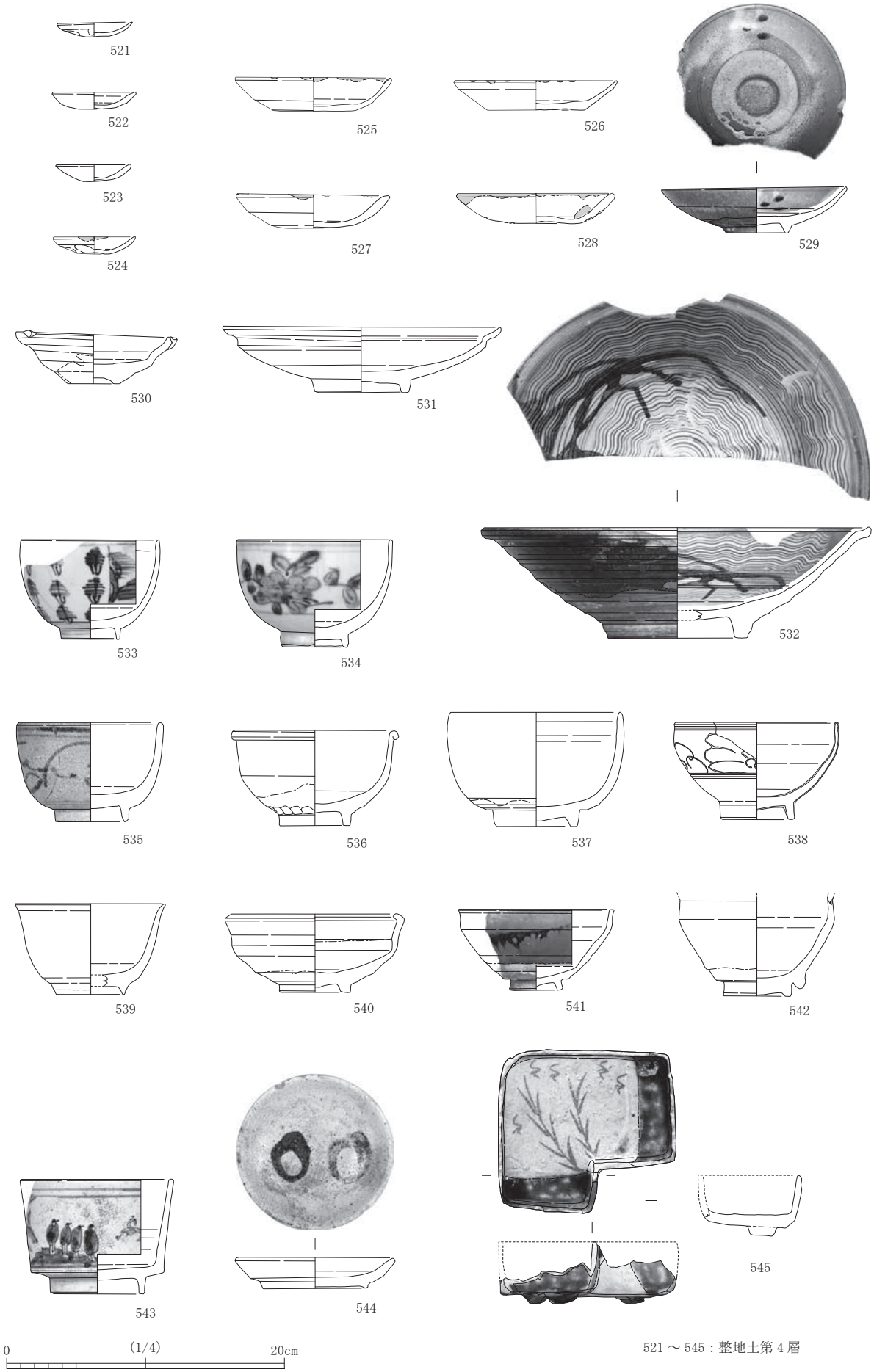
木枠井戸１（遺構 492）



1　10YR4/1（褐灰）砂　礫粒含む
2　10YR4/2（褐灰）砂
3　10YR4/3（にぶい黄褐）シルト
4　N 4/0（灰）砂～粘質土
5　N5/0（灰）粘質土
6　N4/0（灰）砂
7　10YR4/3（にぶい黄褐）シルト
8　10YR4/3（にぶい黄褐）シルト～粘質土
9　10YR6/3（にぶい黄褐）粘質土
10　10YR4/1（褐灰）粘質土
11　2.5Y6/4（にぶい黄）粘質土
12　2.5Y6/4（にぶい黄）～N6/0（灰）粘質土
13　N6/0（灰）粘質土
14　N4/0（灰）～2.5Y4/1（黄灰）粘質土
15　N4/0（灰）粘質土　砂混じる

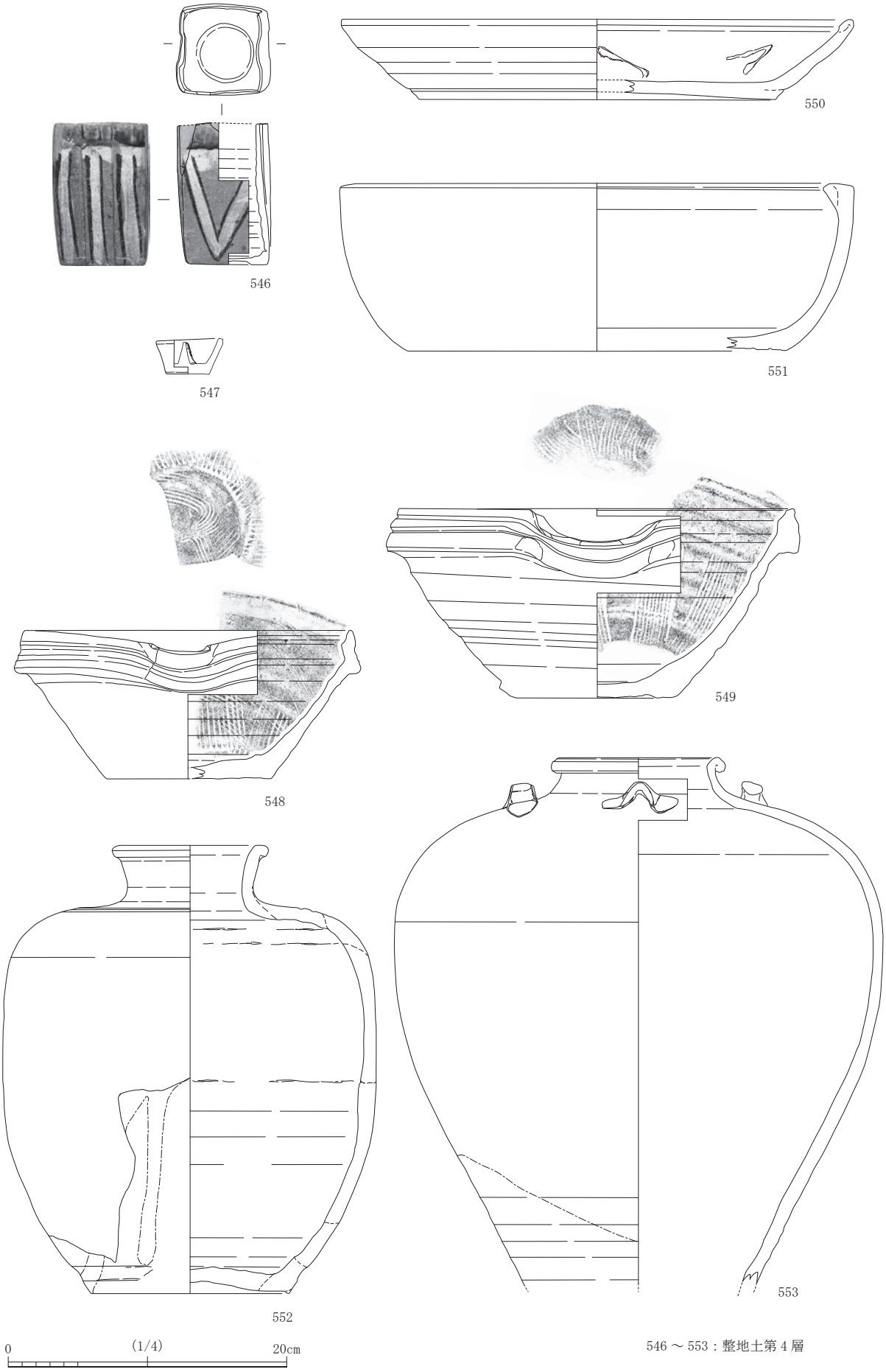
0　(1/20)　1m

図８２　１区第４面　木枠井戸１（遺構 492）



521 ～ 545：整地土第４層

図８３　１区整地土第４層出土土器



546 ～ 553：整地土第４層

図８４　１区整地土第４層出土土器２

554 ～ 576 : 540 土坑

図８５　１区第４面出土土器

図８６　１区第４面出土土器２

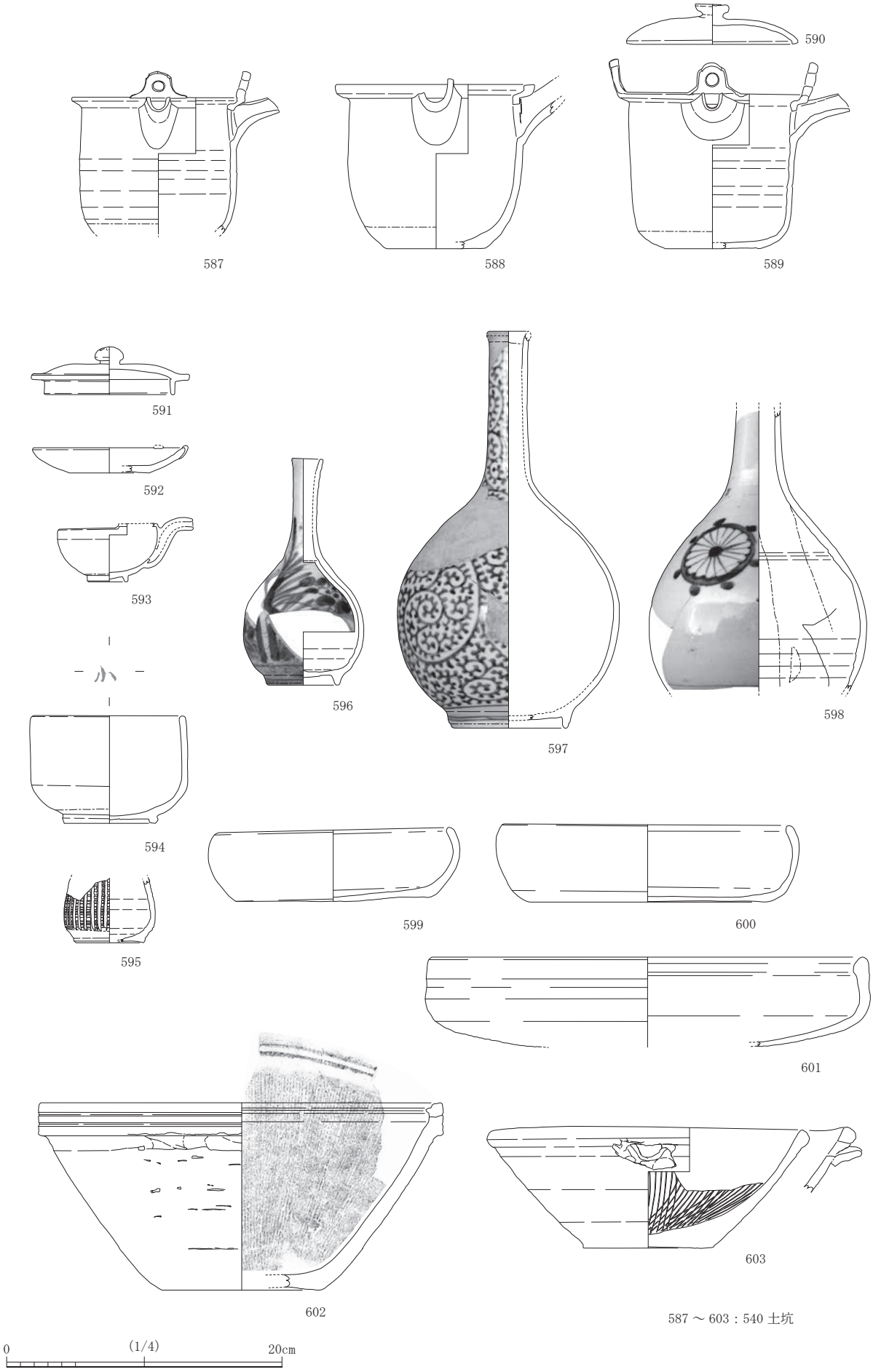


図８７　１区第４面出土土器３

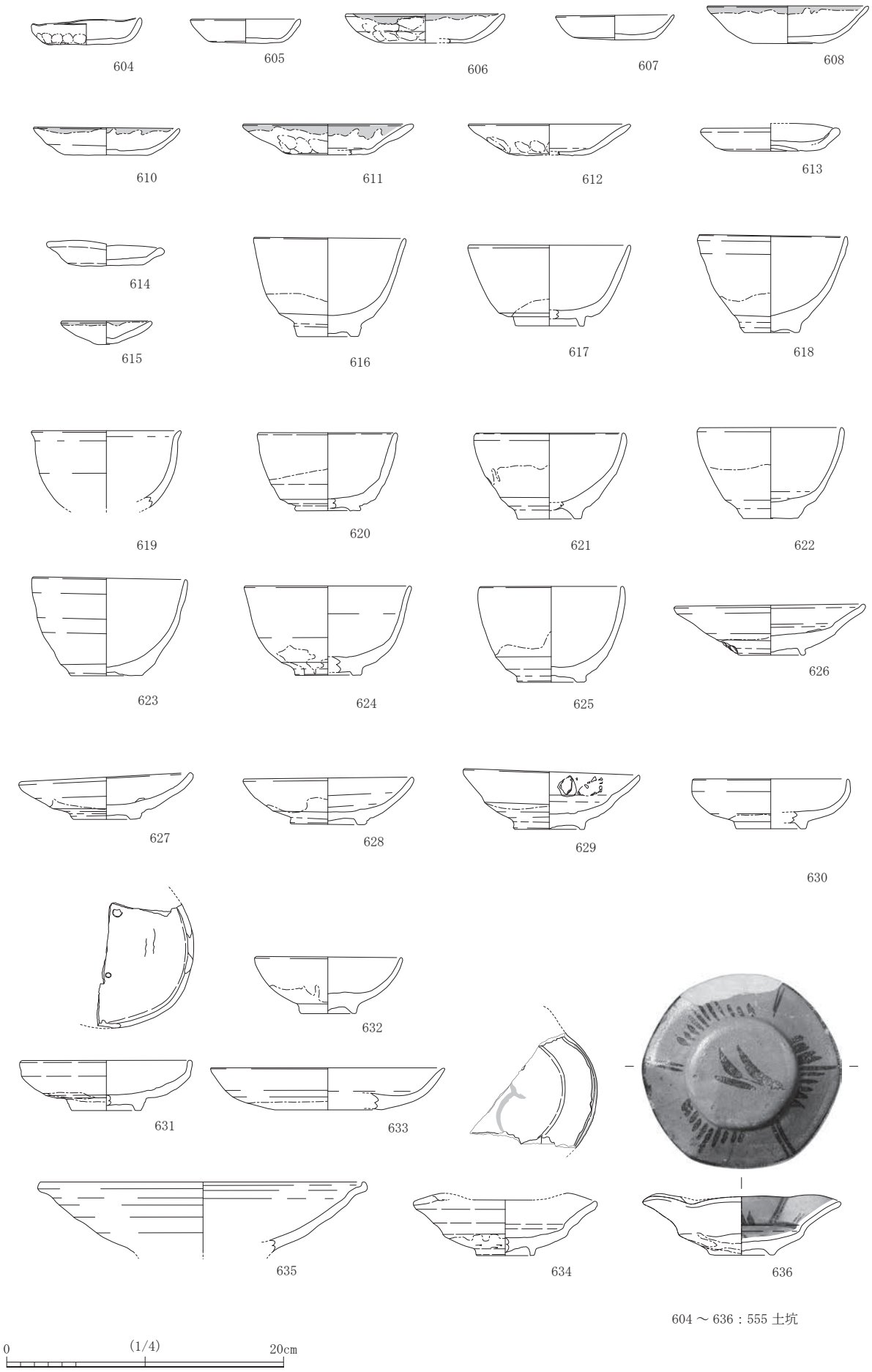
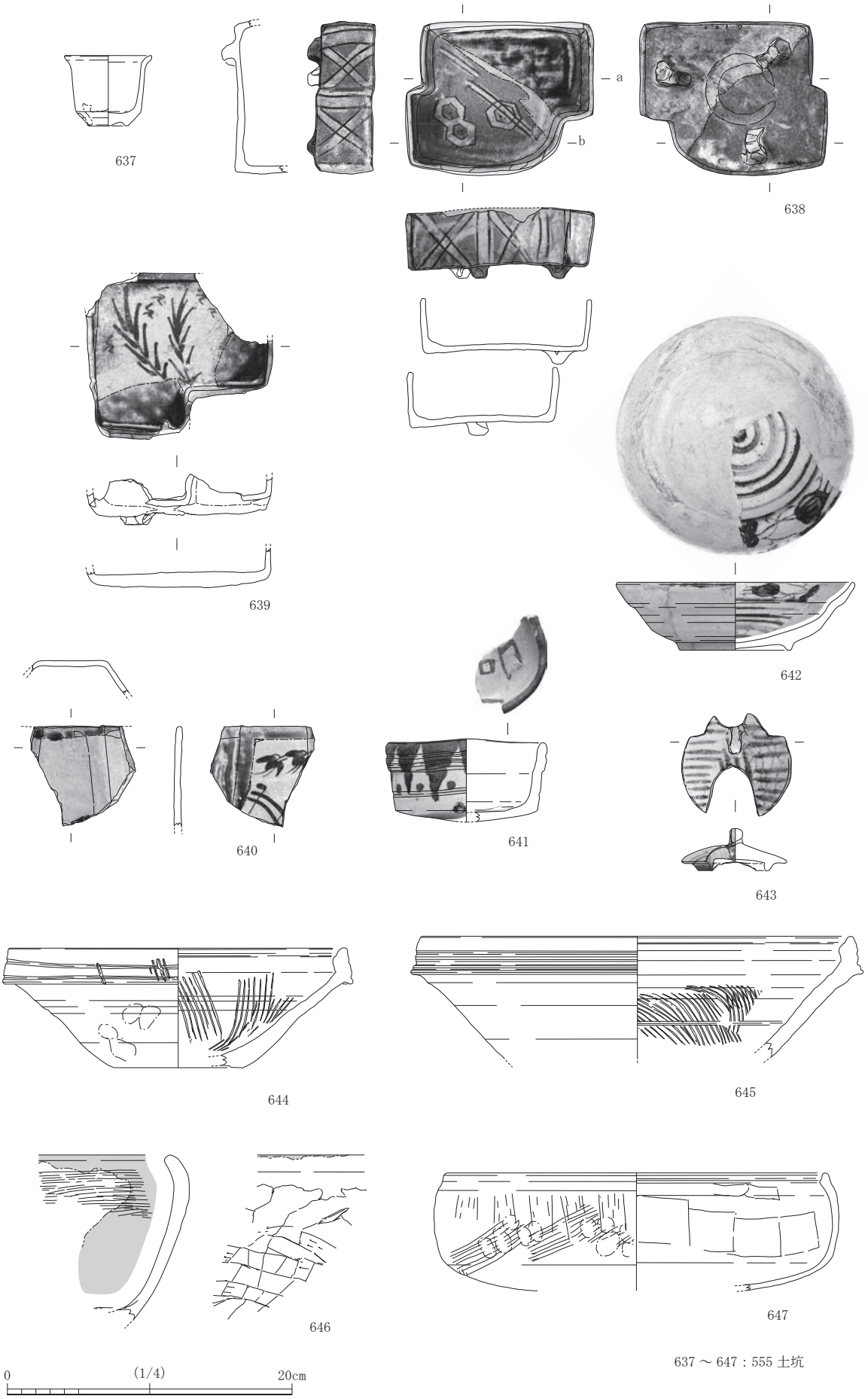


図８８　１区第４面出土土器４



637 ～ 647 : 555 土坑

図８９　１区第４面出土土器５

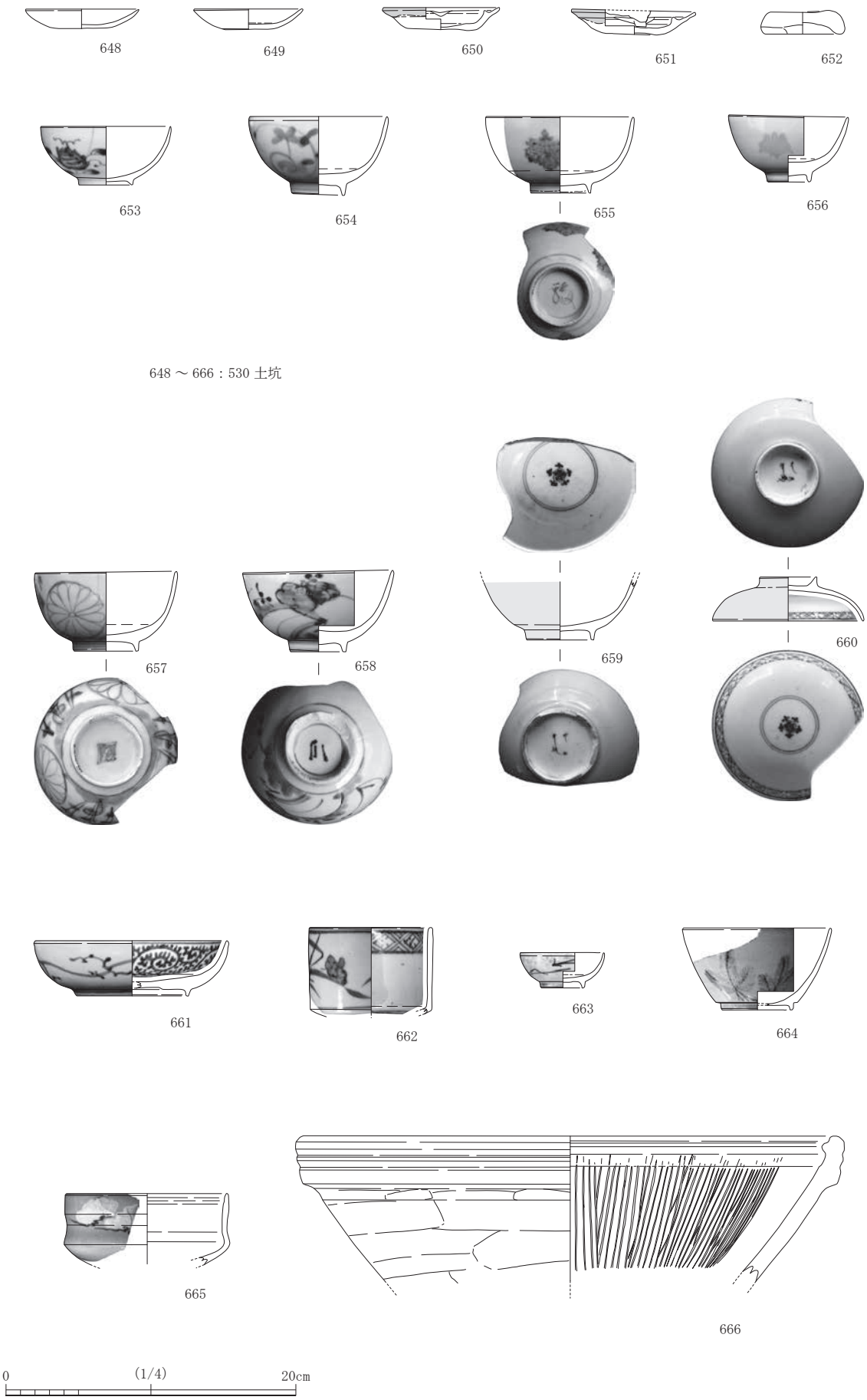
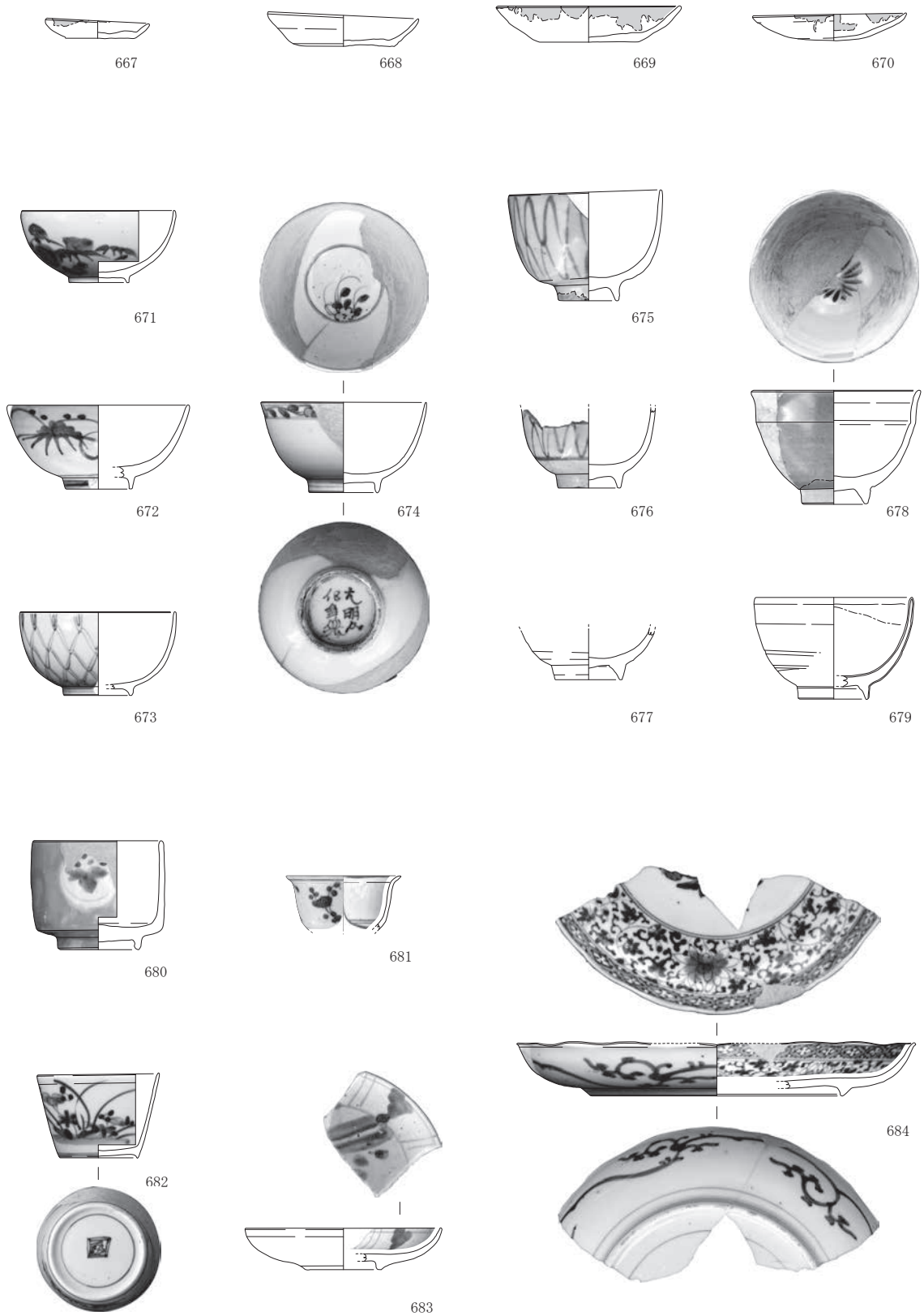


図９０　１区第４面出土土器６



667 ～ 684：518 土坑

0 (1/4) 20cm

図９１　１区第４面出土土器７

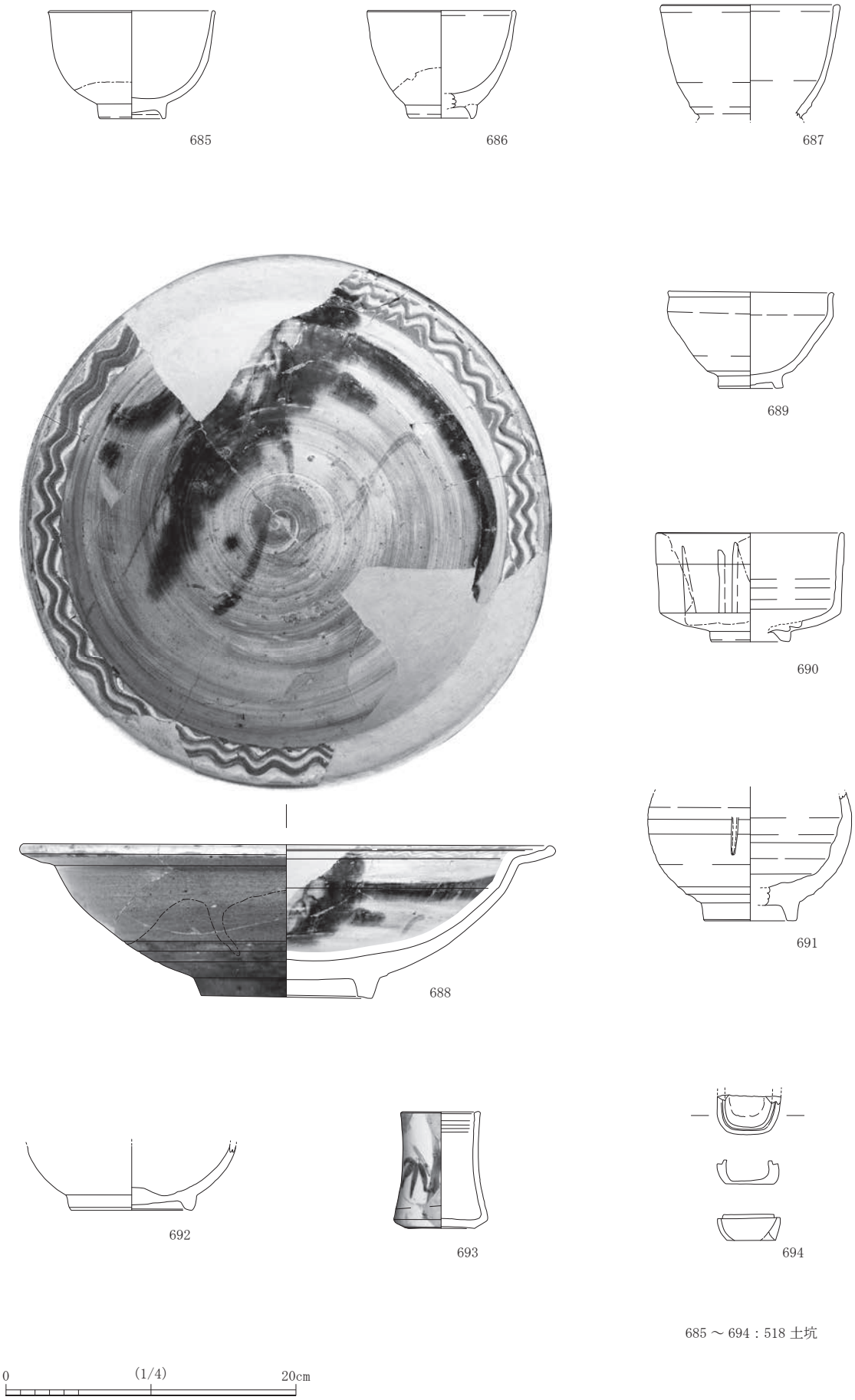
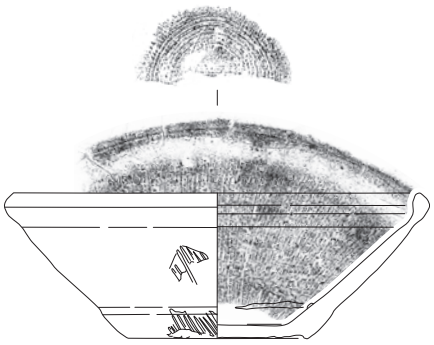
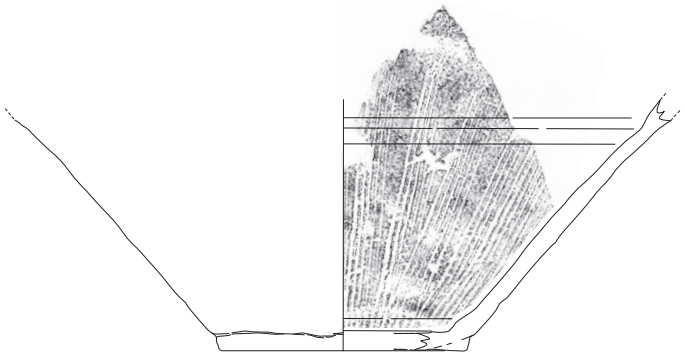


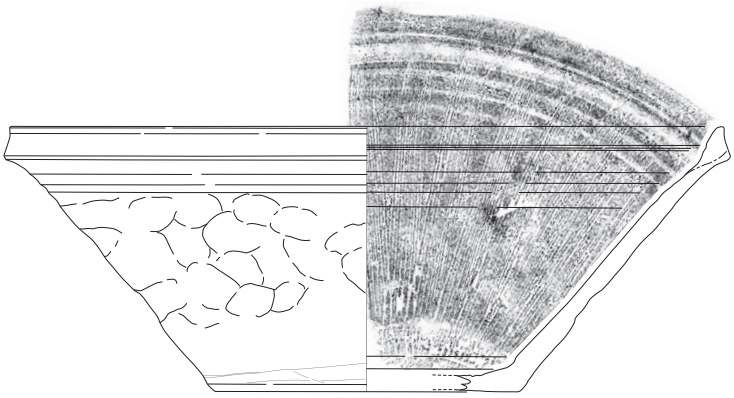
図９２　１区第４面出土土器８



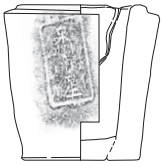
695



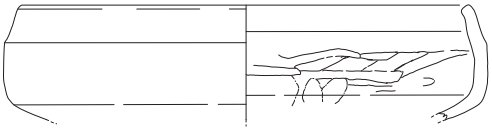
696



697



698



699

695 ～ 699：518 土坑

0 (1/4) 20cm

図９３　１区第４面出土土器９

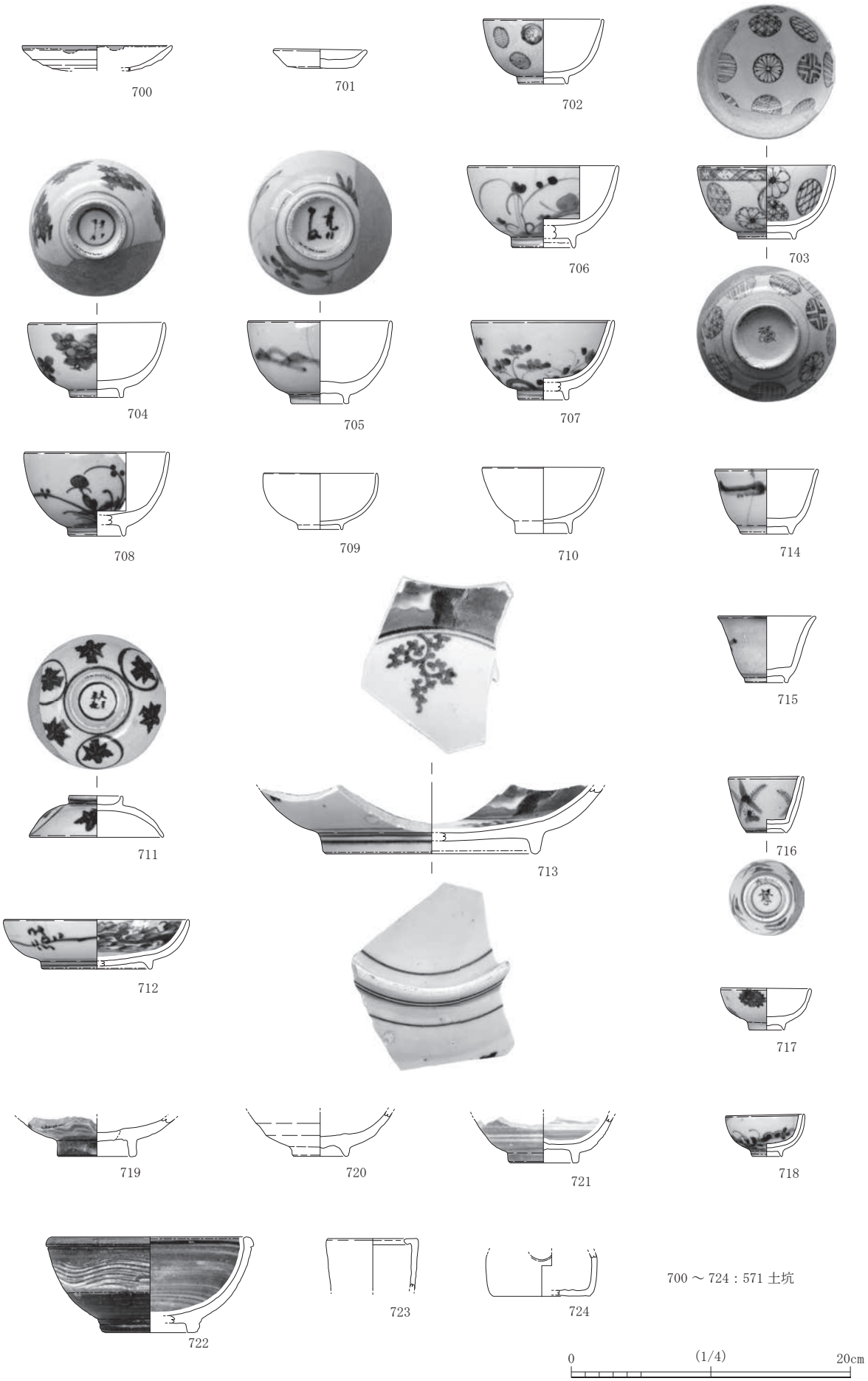


図９４　１区第４面出土土器 10

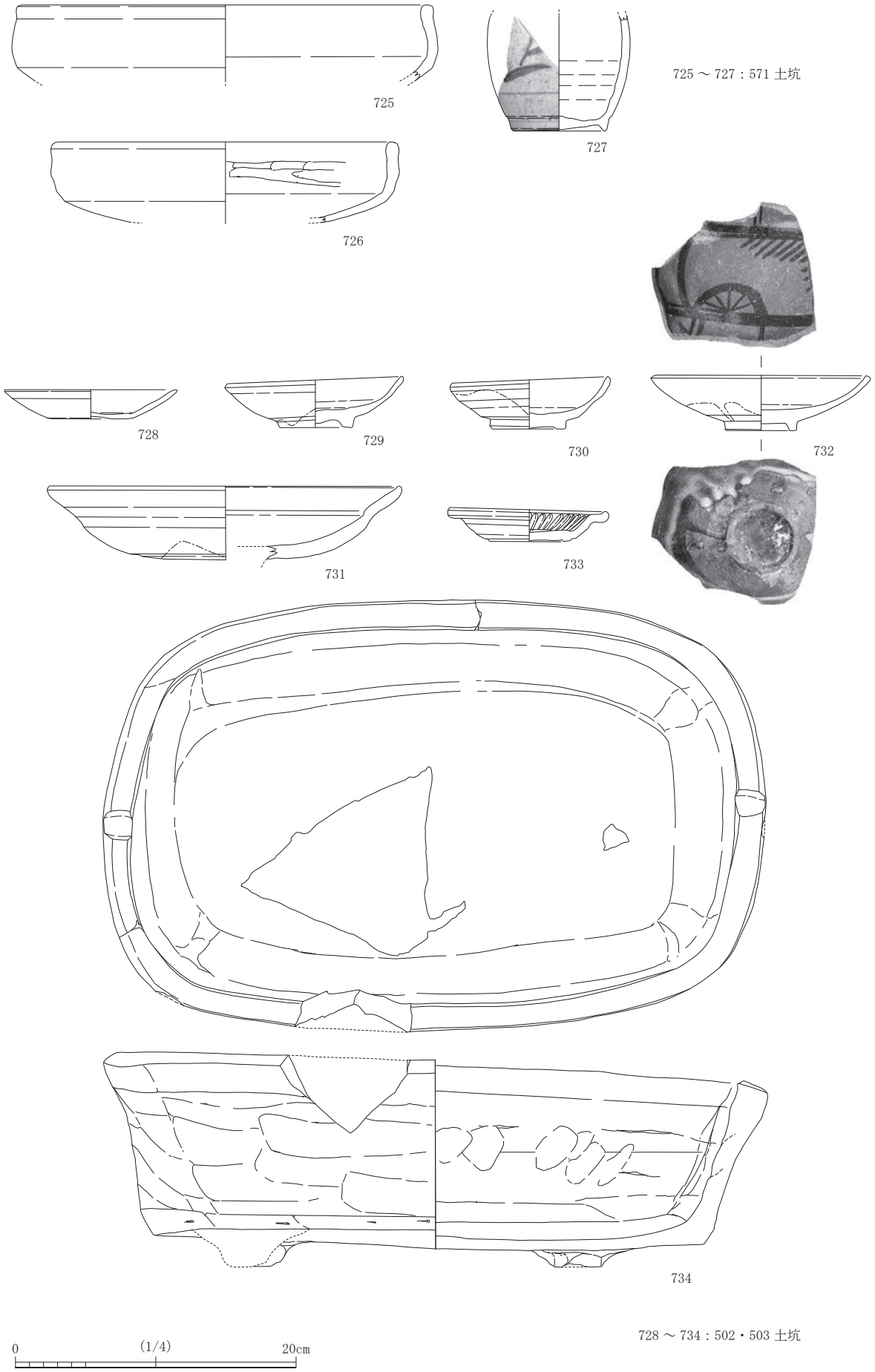


図９５　１区第４面出土土器 11

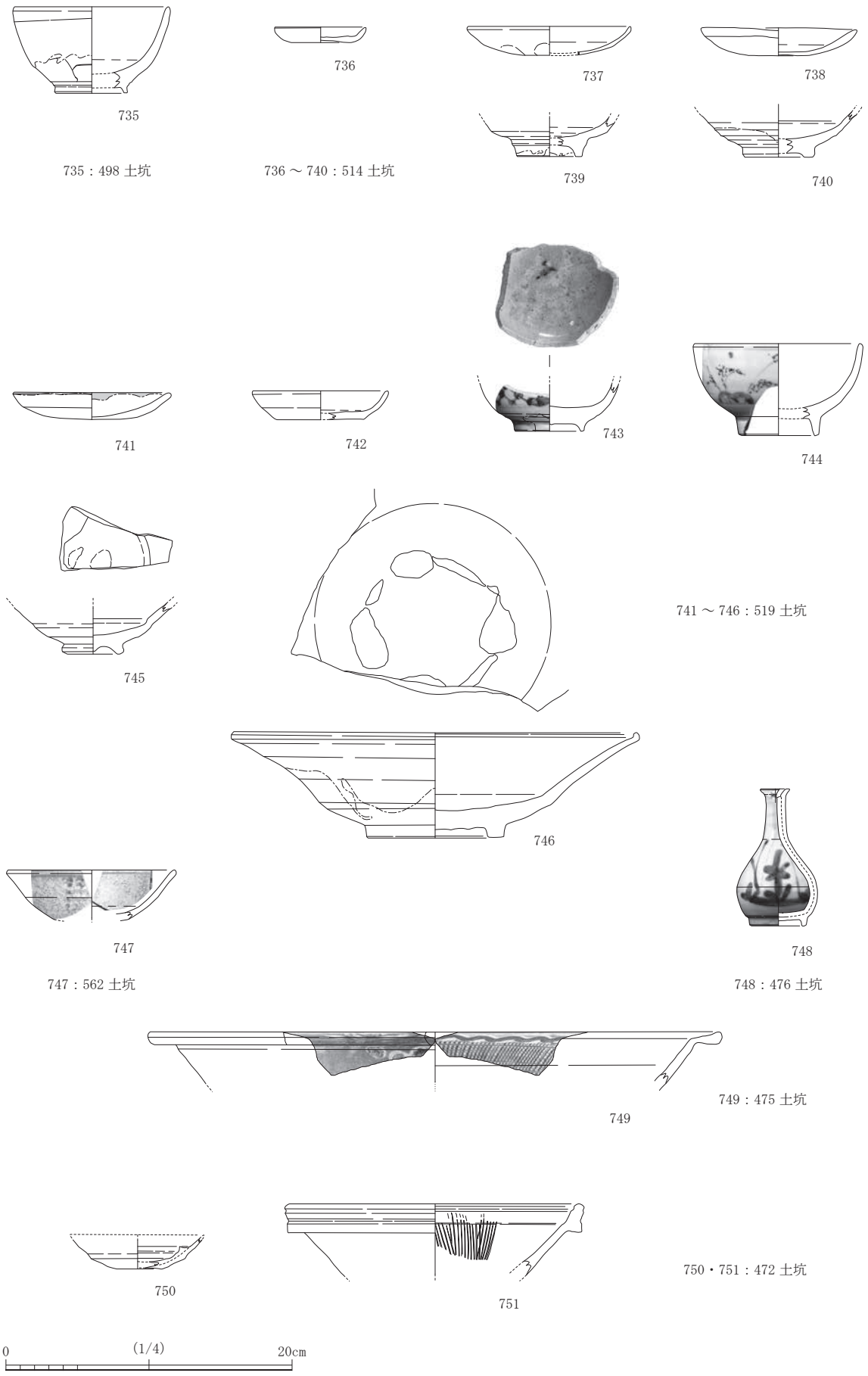


図９６　１区第４面出土土器 12

５　第４遺構面以下

第４遺構面のベース層である第５層は粘質土層であり、表面 10 ㎝厚では生活面として若干汚れた様相を呈する。しかしながら、それより以下は不純物をほとんど含まない粘土層が堆積しており、この層からは遺物の出土は見られなかったため、これ以下には埋蔵文化財は存在しないと考えられる。

６　小結

以上、第１遺構面から第４遺構面までの主要な遺構を記述してきたが、検出した遺構は断片的なもので、 遺構間の関連性や連続性に欠けるものが多く、 遺構の性格付けを行うに当り屋敷地区画の施設と考えられる遺構を検出できたことにより、その他の個別遺構の所在がどの屋敷地に帰属するのかが判明した。以下に屋敷地を区画していた遺構を整理してみたい。

第１遺構面は、調査地全域が佐野家の屋敷地なる 19 世紀前半以降である。この面は、調査対象地の南西側から南東側にかけて、旧検察庁の庁舎による撹乱が著しく、その時期の顕著な遺構を検出できなかった。検出できた範囲は、調査対象地の北側中央部からスロープ部の南側であった。

検出遺構は、調査地の北側中央で水琴窟と考えられる遺構を２基検出した。これら２基については、下部の伏せ鉢部分のみが遺存し、上部の付帯施設である手水鉢や蹲踞は検出できなかった。

第２遺構面で検出した最も意義のある遺構は、南北方向の土塀基礎（遺構 86）であった。この土塀基礎は東と西の敷地を画するものである。なお、この面では他に、屋敷地を画するような遺構は検出されていないため、東には安藤家の屋敷地、西には佐野家の屋敷地が 18 世紀中頃から 19 世紀前半までの時期に存在していたことが古絵図から判っている。調査区東端で検出した苑池状遺構１（遺構 212）は明らかに安藤家の屋敷地内のもので、屋敷地内では中庭に当たる位置と考えられる。また、苑池状遺構の北側で検出した東西方向の通路状遺構１（遺構 244）なども安藤家の主屋に通じる道である可能性が高い。

礎石建物跡１や雨落状遺構、礫集積遺構１は土塀基礎の西側で検出しているため、佐野家の屋敷地に帰属する遺構である。礎石建物１は東に延びていた可能性があり、佐野家の敷地では北端の建物に相当する。礫集積遺構１は溝状となり、屋敷地の北または西の遺構からの排水施設の一部と捉えられる。

第３遺構面でも屋敷地を画すると考えられる南北方向の屋敷地境界溝１（遺構 436）を検出した。この溝は、第２遺構面で検出した土塀基礎の下層に当たり、ほぼ同位置である。この境界溝の南側延長線上でも屋敷地境界柱穴列１とした遺構を検出している。また、調査区の西側でも東西方向の屋敷地を画していたと考えられる屋敷地境界溝２を検出した。これらの境界溝や柱穴列を検出したことにより、調査地一帯は、17 世紀中頃から 18 世紀中頃までの古絵図に描かれている様相（東に安藤家、北西に佐野家、南西に大高家）と合致することになる。

第４遺構面においても屋敷地の境界を画すると考えられる、南北方向の屋敷地境界溝３（遺構 541）や、東西方向の屋敷地境界柱穴列３を検出した。古絵図では 17 世紀中頃以前のものがないため、時期については断定できないが、出土遺物から、第３遺構面より先行する時期のものと思われる。

今回の調査においては、各遺構面で屋敷地を区画する施設を確認したことにより、検出した個別の遺構が３家のどの屋敷地に帰属していたかが明らかとなった。

第３節　調査区２・３の調査成果

調査区２・３は、配管部分の調査であり、幅 0.7 ～ 1.0 m程度の狭小な調査区であったため、明確に性格付けのできる遺構を検出することはできなかった。

また、和歌山地方検察庁旧庁舎による攪乱により、遺構面そのものを検出できなかった場所も存在したことから断片的な調査に留まった。それ故、調査区１との関係性を捉えるのも困難であった。

そのような状況であったが、わずかに判明した遺構・遺物について、以下報告する。

なお、調査区の呼称であるが、２区は２箇所に分かれているため２－１区、２－２区とし、３区は３箇所に分かれているため３－１区、３－２区、３－３区とした。ただ、３－２区については２筋の配管部分のため東側、西側とした。これらの調査区の位置については図 97 で示した。

１　第１遺構面の検出遺構（図 97・99）

この面で遺構を検出できたのは２－１区、３－２区西側配管部分であった。主だった遺構について触れておく。

２－１区では土坑状遺構とピット状遺構を検出した。

遺構４は、調査区の幅以上の大きな土坑状遺構である。北側と東側は調査区外に延びているため全容は不明である。規模は東西長 1.8 m以上、南北長 3.2 m以上、残存の深さは最も深い箇所で 0.32 mを測る。肩部の周辺には 0.15 ～ 0.4 m大の角礫が散らばっていたことから、性格は不明であるが、この遺構の縁石の可能性もある。また、埋土は３層に分層できるが、焼土や礫が混入し、堆積状態から、南側から掻き込まれ埋められた様相を呈する。この遺構からは多量の遺物が出土している。出土遺物には肥前系陶磁器、中国製磁器、焙烙、土瓶の蓋などがある。中国製磁器には図示はしていないが、青磁盤、青花皿、小杯などの破片がある。この遺構の時期は肥前系磁器から 18 世紀後半と考えられる。

752・753 は土師器皿で、752 はくすんだ白色系、753 は赤褐色である。双方共に灯明の痕跡は認められない。残存率が小さい故か。

754 ～ 756 は肥前系染付である。754 は内外面に微塵唐草を施文する。755 は内面に草花文を描く小皿である。756 は蓋で外面に暦文を描く。757 は端反の碗で、瀬戸美緒系か？ 758 は内面から外面中位に褐釉施釉の小鉢である。

遺構１・２・３も土坑状遺構で、何れも調査区外に延びているため全容は不明である。
遺構１からは備前焼擂鉢片と壺片が出土したのみである。遺構２からは肥前系磁器の碗１片と皿１片が出土しているが細片である。他に、焙烙２片、産地不明の施釉陶器２片が出土している。遺構３からは瀬戸美濃系灰釉陶器細片１片、焙烙１片が出土している。

３－２区西側配管部のほぼ中央で遺構１（土坑状遺構）を検出した。西側は調査区外に延びているため、この遺構についても全容は不明である。規模は南北長 0.95 m、南北長 0.70 m以上を測る。遺構の中には 0.3 ～ 0.4 m大の角礫が投棄された状態で入り込み、礫の大きさから遺構構築に使用されていた石材と考えられる。

ここからは土瓶の蓋１片のみ出土した。

２　第２遺構面検出の遺構（図 97 ～ 99）

３－１区と３－２区西側配管部および３－２区東側配管部で遺構を検出した。検出した遺構の殆どが土坑状遺構である。前述したが調査区が狭小なため、遺構の全容が判然としない故、取り敢えず土坑状遺構と呼称する。

３－１区の西寄りで､幅 0.5 ～ 0.6 ｍの浅い掘形内に南北方向の石列を検出した。石材は約 0.3 ｍ大の砂岩と結晶片岩を使用し、１段だけが遺存し、西側に面をもつ。また、この遺構の東側、調査区の中央付近では、東西幅が約 4.4 ｍの落ち込みを検出し、その中央には遺構構築に使用されたと考えられる砂岩と結晶片岩の石材が纏まって出土した。埋土には多量の焼土や小礫を含むことから、火事場整理の一環として投棄されたと思われる。

３－２区西側配管部の中央で土坑状遺構を４基検出した。遺構９は南北長 0.95 ｍ、東西方向は調査区外の両側に延び、0.9 ｍ以上を測る。ここからは 0.3 ～ 0.5 ｍ大の石材が出土した。石材には規則性がみられないことから、この遺構に投棄されたものと思われる。遺構９の北側に隣接して遺構 10 を検出した。規模は南北長約 0.8 ｍ、東西長は、西側が調査区外に延びているため 0.75 ｍ以上を測る。この中からも大振りな石材が出土している。

土器も微量であるが、染付瓶の底部破片と急須の蓋破片が出土している。

他の遺構は、遺構９から南側で遺構２～８の土坑状遺構やピット状遺構を検出している。

３－２区東側配管部では土坑状遺構や石列、ピット状遺構などを 13 基検出した。

調査区中央では大きな土坑状遺構である遺構２を検出した。規模は南北約 5.5 ｍ、東西長は調査区の両幅以上である。残存の深さは 0.35 ～ 0.40 ｍを測る。

この遺構からは多量の遺物が出土し、肥前系陶磁器、焼締陶器（備前焼擂鉢・堺明石系擂鉢）、瀬戸美濃系施釉陶器、土瓶などがあり、唐津焼の胎土目痕のある古い時期の皿も混じっている。

759 は口縁部が肥厚するタイプの皿である。760 ～ 762 は肥前系染付で、760 は丸碗、761 は皿、762 は内底面蛇の目釉剥ぎの鉢である。763 は肥前系陶器の碗で二次焼成を受けている。764 は鉢で、外面は白化粧土で刷毛目を施す。

765・766 は丹波焼の擂鉢である。766 の内外面には焼台痕が確認できる。

遺構３からは 767 の褐釉施釉の壺が出土している。産地は不明である。

調査区南寄りで 0.05 ～ 0.20 ｍ大の礫を集石した遺構 10 を検出した。南北の範囲は約 6.0 ｍで、東西は調査区外のため、集石の形状などは不明である。また、この遺構の南側で検出している遺構９とした東西方向に延びる石列と接しているため関連性が高いと考えられる。

遺構 10 からは肥前系陶磁器、灯明皿、土師質火鉢、焙烙などの遺物が多量に出土している。

768 ～ 770 は、口縁部を強い横ナデにより口縁端部が肥厚する皿である。器形は歪む。

771 ～ 775 は肥前系磁器である。771・772 は碗、773・774 は皿、775 は瓶で、頸部はラッパ状となり、外面に柳を描く。776 は瀬戸美濃系陶器の汁次の底部か？

３　第３遺構面検出の遺構（図 98・99）

この面で検出できた調査区は、３－２区西側配管部と３－２区東側配管部である。

３－２区西側配管部では土坑状遺構を６基検出した。形状的には溝状のものもあるが、調査幅

が狭いため土坑状遺構と呼称する。

調査区の中央で遺構 14 とした土坑から大振りな石材が出土した。その脇には小振りな石材が東西方向に並んでいるかのように出土したが、これら石材の配置には規則性が認められないため、投棄されたものと考えられる。この遺構の北側には大型の土坑状遺構 15 や土坑状遺構 16、南側には東西方向の溝状となる遺構 13 や土坑状遺構 11・12 を検出している。

３－２区東側配管部では、調査区中央南寄りで北側に落ち込む遺構の肩部を検出した。肩部の周辺には 0.1 ～ 0.2 m大の割石が散乱していた。この落ち込み状の遺構に使用されていた石材の可能性が高い。調査区北端で遺構４・５とした２基の土坑状遺構を検出した。この 2 基は重複し、遺構４の方が新しい。遺構４は殆どが調査区外である

ここからは施釉陶器の灯明皿片が一点出土している。

遺構 5 の規模は南北長 2.4 m、東西は調査区外のため 1.0 以上である。残存の深さは 0.05 m と非常に浅い。整地面の窪みの可能性もある。

ここからは備前焼鉢の破片が出土している。

４　小結

調査区 2 区および 3 区は建物の配管部分の調査で、1 区の西側と南側に調査区を設定して調査を実施した。第４章第３節でも記したが、設定した調査区の幅は全てにおいて狭小であったため、遺構を検出しても、その全容を捉えることができなかった。そのため、遺構の性格を把握できなかったのが現状である。

調査区の設定位置は第 97 図でも示したが、配管を埋設する部分が幾筋にも分かれていたため、細いトレンチ状の調査区となった。南側に設定した調査区を２－１区、２－２区、西側に設定した調査区を３－１区、３－２区、３－３区とした。３－２については東側配管部と西側配管部に分けて調査区を設定した。また、2・3 区の調査は掘削深度に合わせ第３面までを実施したが、殆どの調査区では近代の撹乱で遺構は壊されていた。

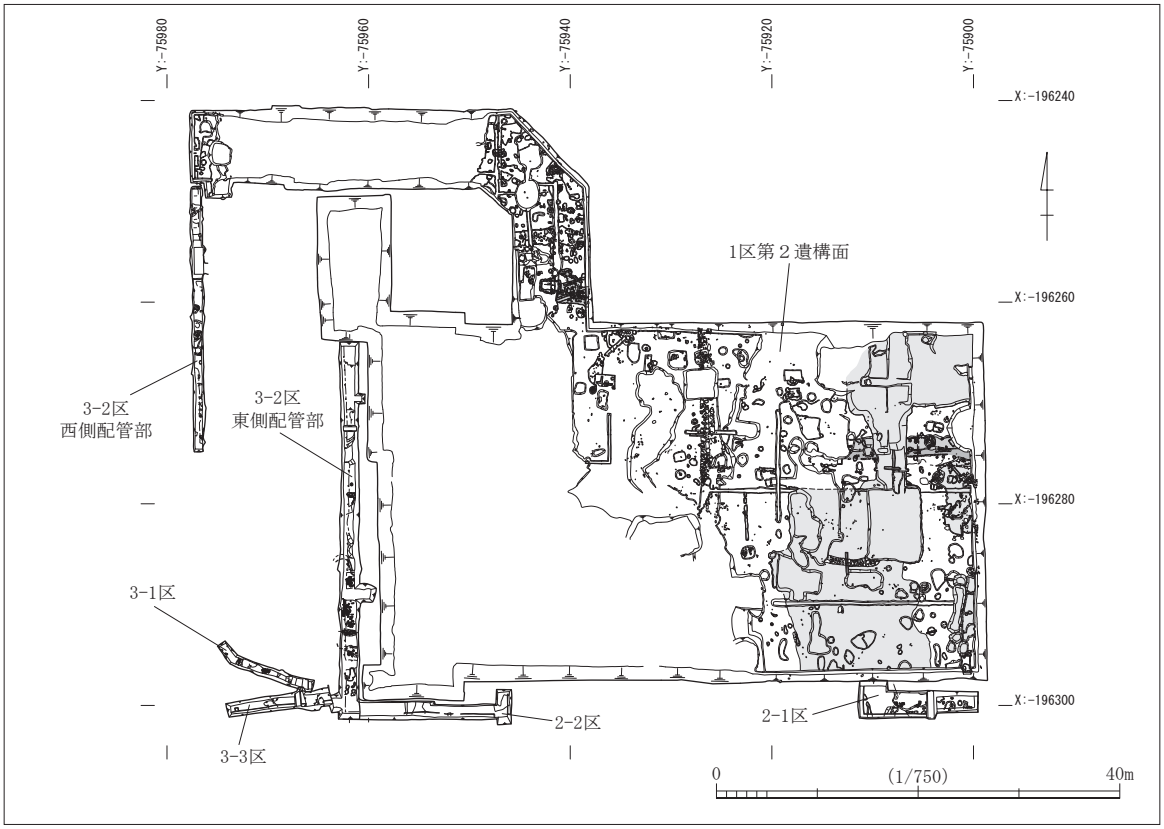
第 1 面で遺構を検出できたのは、２－１区と３－２区であった。２－１区で検出した土坑状遺構（遺構 4）については調査区外に延びていため全容は不明で角礫が散乱し、土層の堆積状況は南側から掻き込まれて埋められた様相を呈していた。また、3 － 2 区で検出した土坑状遺構（遺構 1）も調査区外に延びているため、全容は不明で角礫が入り込んでいた状況であった。

第２面で遺構を検出できたのは３－１区、３－２区であった。３－１区では遺構内に石列を構築していた遺構や、焼土で埋められた遺構上に砂岩や片岩が投棄された状態で検出された土坑状遺構を検出した。また、３－２区の西側配管部においても、石材が投棄されたと考えられる土坑状遺構９や土坑状遺構 10 を検出している。

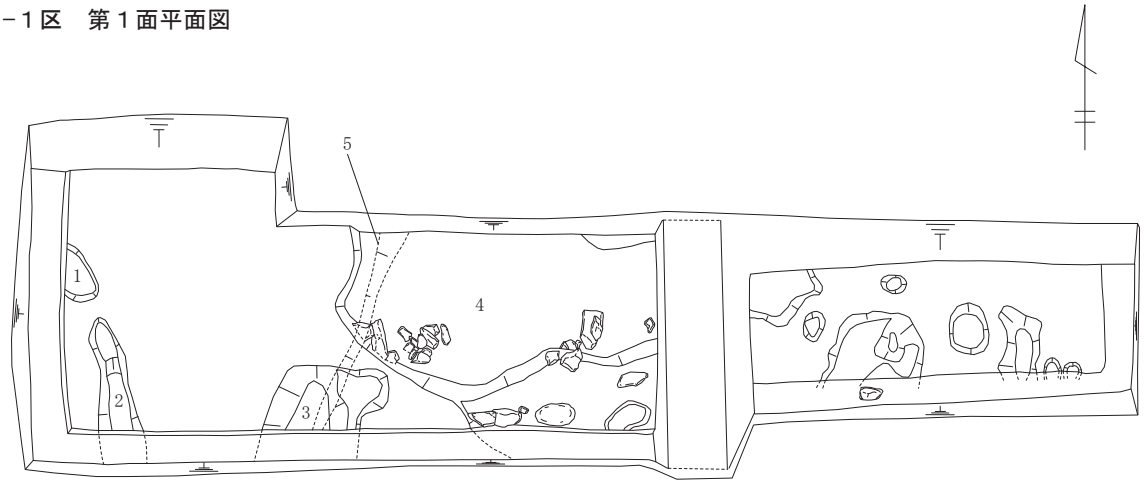
第 3 面で遺構を検出できたのは３－２区の東側配管部と西側配管部だけである。特に遺構 14 の土坑状遺構からは、大振りな礫を投棄したかの様な状況が窺えられた。

以上、2･3 区における調査の状況と、検出遺構の概略である。検出した遺構について言えるのは、3 － 2 区の東配管部で検出した遺構９の様な、大振りな石材を使用し、一方に面を持たせた石積みも確認できるが、その他の遺構は壊され、かつて遺構として機能していた掘込み穴に投棄されたものが殆どであった。この状況は、敷地替えや火災などの整地時に行われた可能性が高く、敷地の外縁を区画する土壁基礎の石材の可能性も十分ありえる。

２区・３区　位置図



２−１区　第１面平面図



３−１区　第２面平面図

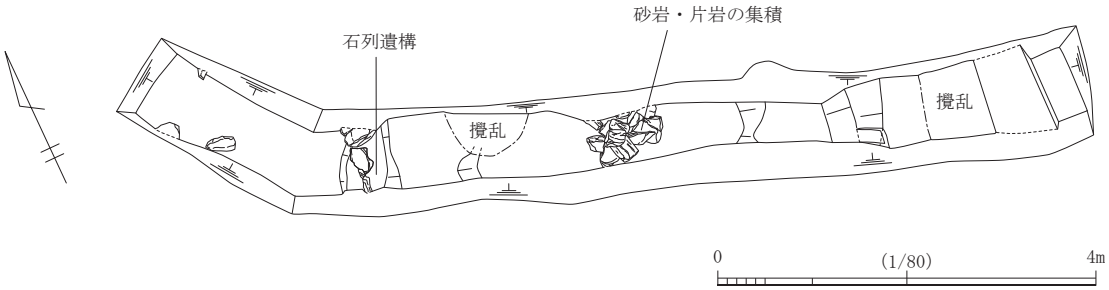
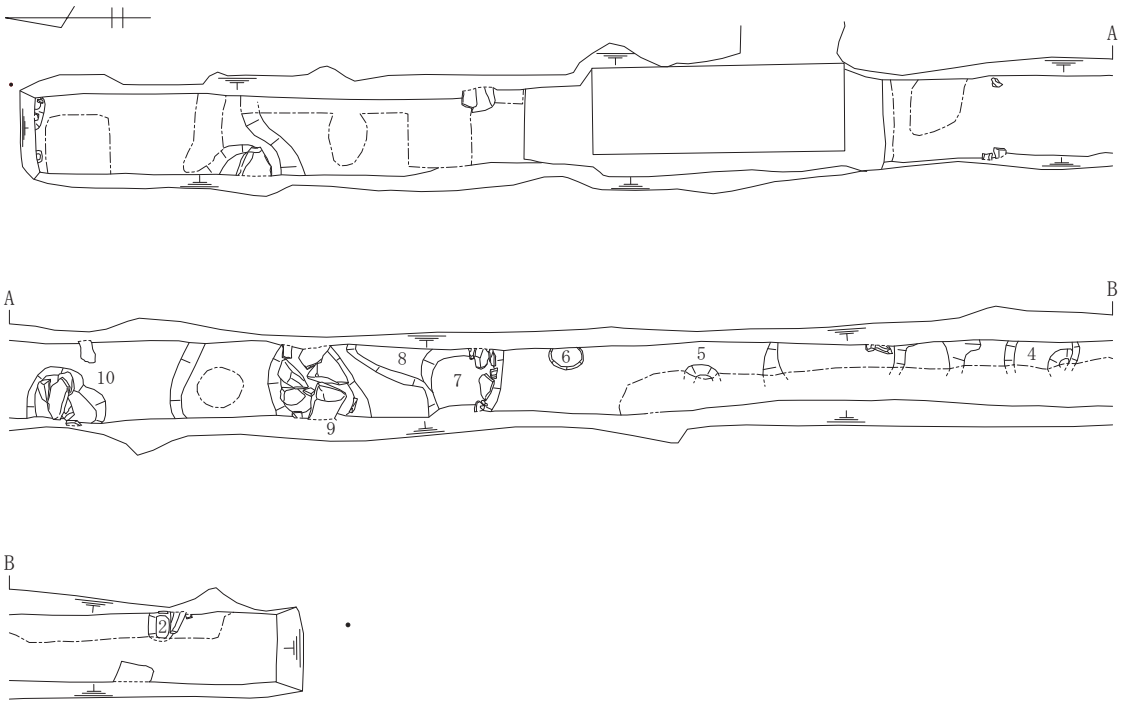


図９７　２−１区第１面・３−１区第２面　平面図

３−２区西側配管部　第２面平面図



３−２区西側配管部　第３面平面図

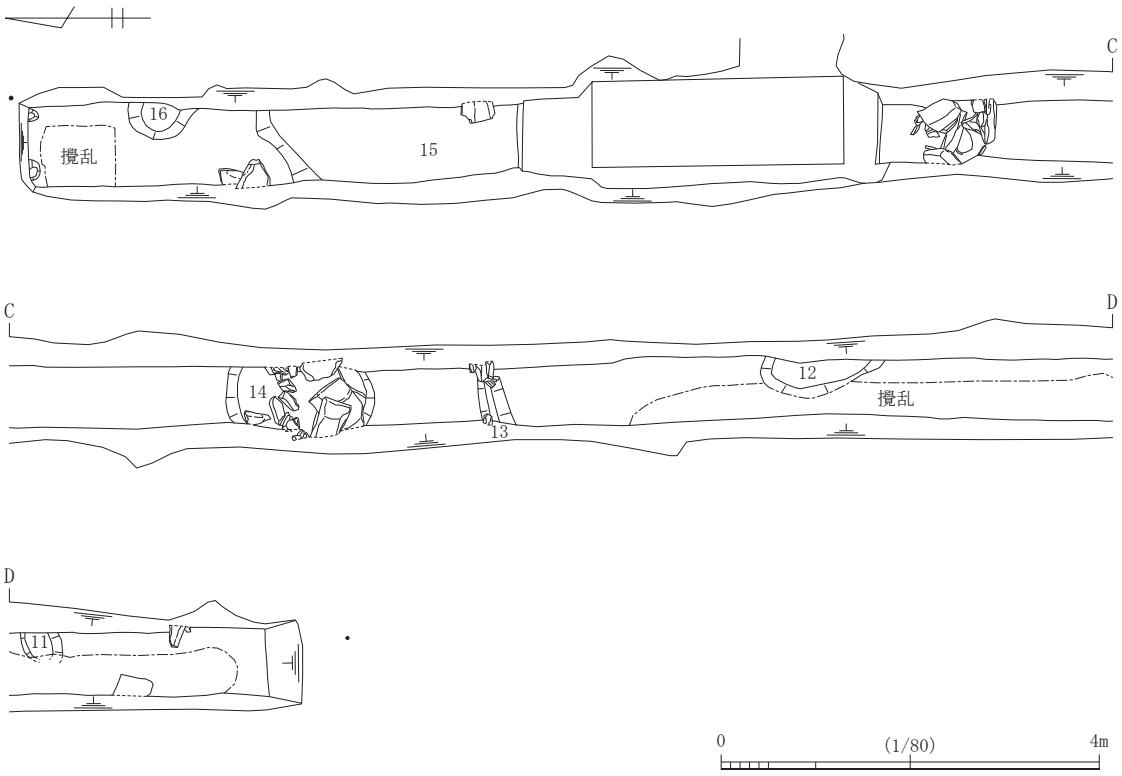
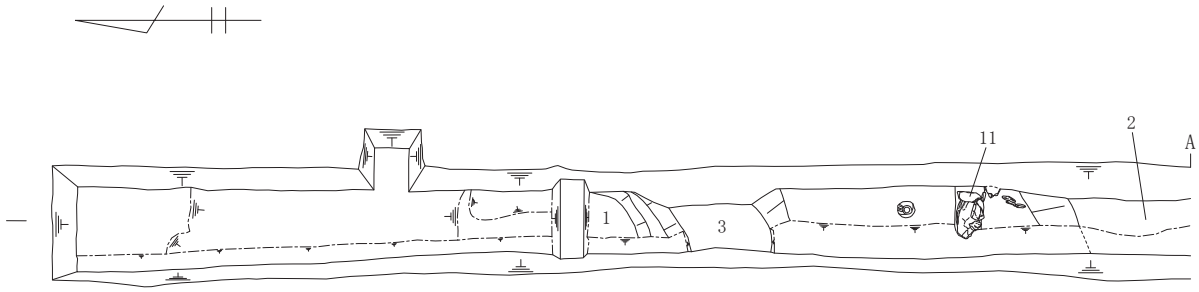
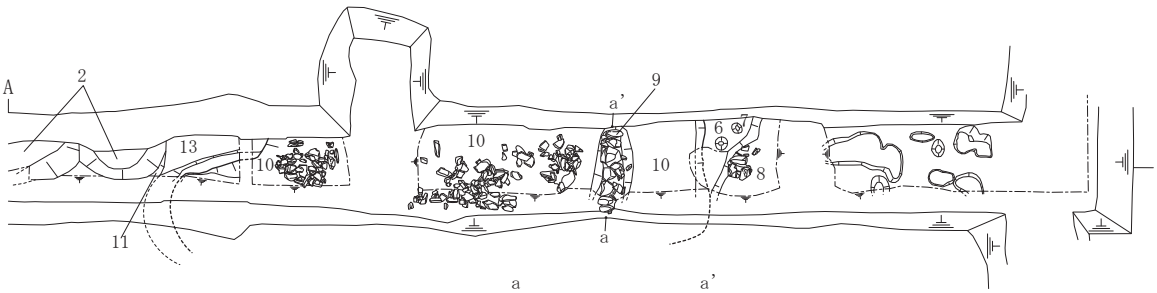


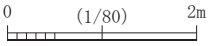
図９８　３−２区西側配管部　第２・３面　平面図

3－2区東側配管部　第２面　平面図

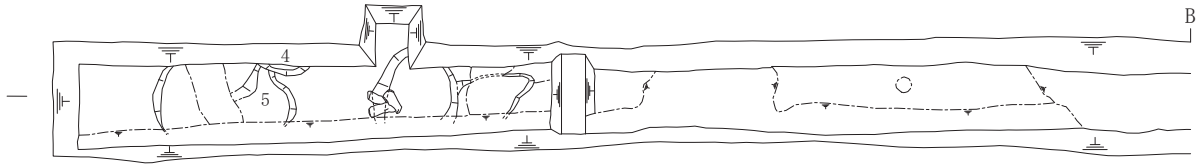


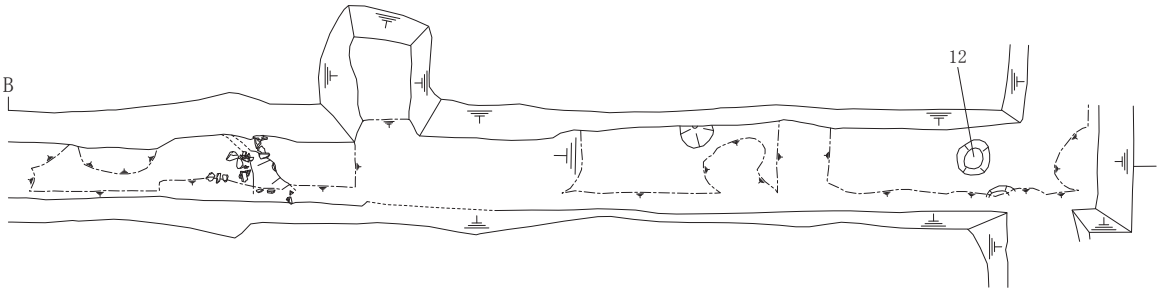


遺構９　土層断面図（1/80）



3－2区東側配管部　第３面　平面図





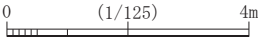


図９９　3－2区東側配管部　第２・３面　平面図

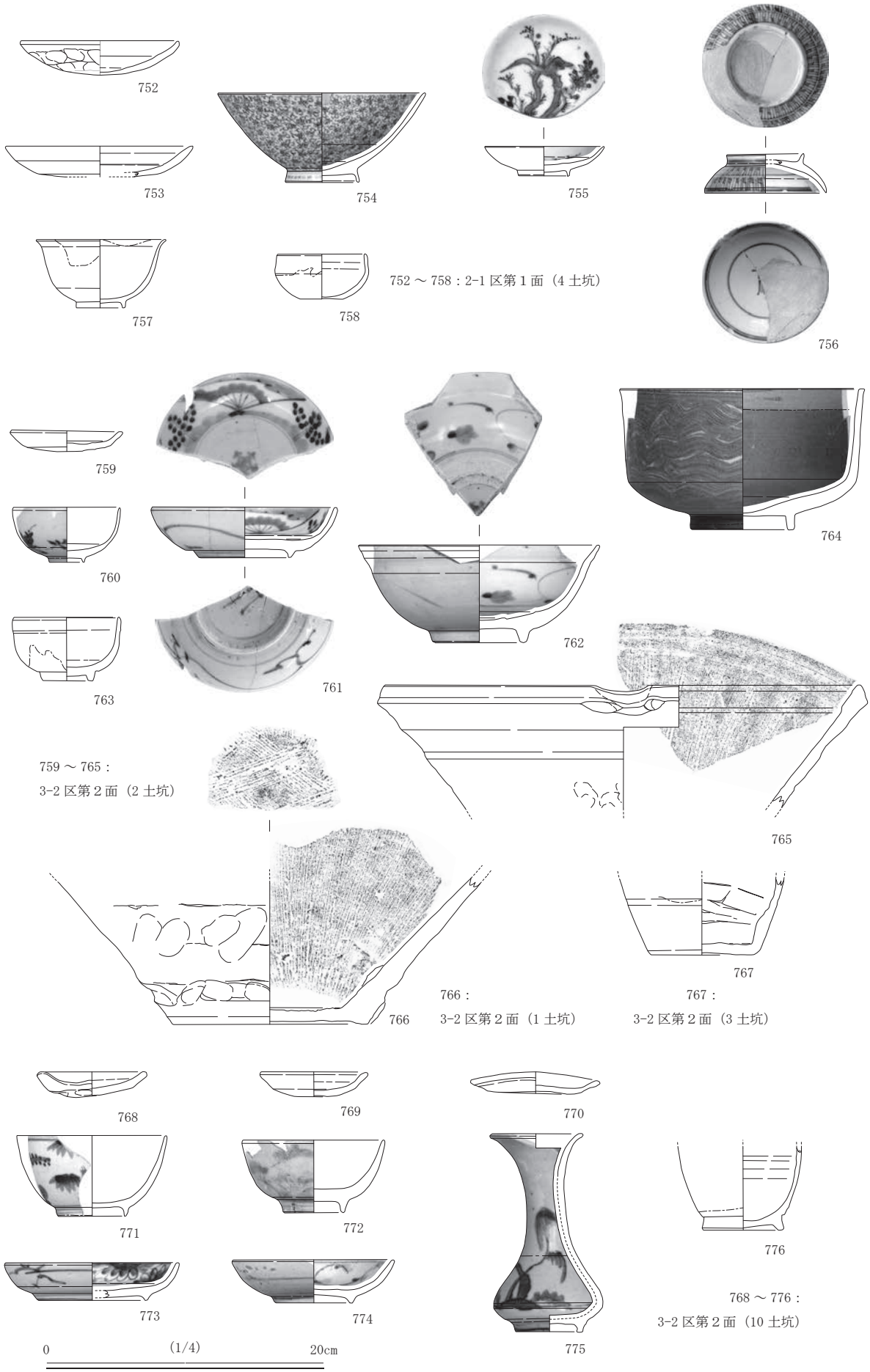


図１００　２－１区第１面・３-２区第２面出土土器

第４節　その他の遺物

〈瓦類〉

瓦は、調査で出土した全遺物量の半分程度を占める。調査区全域の撹乱坑、整地土、遺構から出土した。量的には最も平瓦片が多く、次に丸瓦、その次に軒丸瓦と軒平瓦、道具瓦の順となり、当然の如く使用頻度順となり、江戸時代前期から明治時代までのものがある。

（軒丸瓦） 777・783 は瓦当径に対して巴径が小さい。帰属時期は 18 世紀後半である。778・780 ～ 782 は巴が右巻きである。778・781 は同笵と思われ、尾が延びて円を形成する。帰属時期は 17 世紀前半と考えられる。780 は瓦当径に対して巴径が小さい。782 も尾が延びて円形を呈する。778･781 に比べると珠文が繊細である。784 は瓦当面に離型剤のキラコが認められる。785 は内面に布目、786・787 は内面に粗いゴザ状の布目が認められ同笵である。17 世紀前半に帰属する。789・790 は瓦当面の径に対し巴の径が小さく纏まる。18 世紀代である。788・791 は瓦当面下部だけの遺存であるが、珠文と巴の尾から判断して 790 よりは古い時期と思われる。792 の巴の頭は台形状を呈し、793 は破片であるが珠文や巴の尾から双方共に 17 世紀代の様相を呈する。794 は 786・787 と同笵で、帰属時期は 17 世紀前半である。

（軒平瓦） 795 は「谷川瓦株式會社」の刻印があり、明治 22 年以降である。796 の中心飾りは橘である。797 は唐草の巻込みから 18 世紀中、798 の中心飾りは三葉で、17 世紀代前半である。799 は波状文で 17 世紀初めか？ 800 は均整唐草文の中央が凹み、中心飾りは単弁の花文である。801 は均整唐草文で、瓦当には離型剤のキラコが認められる。帰属時期は 18 世紀前半である。802 の中心飾りは三葉で、唐草の巻込みも 798 に比して強い。803 は破片で均整唐草文である。804・805 は中央を凹ませた均整唐草文で、中心飾りはまだ滴型になる手前で、18 世紀前半～中と考えられる。806 は大型の瓦で、中心飾りは菊花文、脇の唐草文は中央を凹ませ、17 世紀前半と思われる。807･808 は滴水瓦である。唐草文の中央を凹ます。808 の焼成は軟質である。滴水瓦は、調査区の北側（県５次調査）でも出土している。

（軒桟瓦） 809・810 は撹乱坑 19 からの出土である。809 は一文字型軒桟瓦で、裏面に滑り止めを施す。明治期の産物と思われる。810 は石持軒瓦で、瓦当面には「松葉菱の図柄中に土、登録商標、泉州、谷川瓦〇〇會社、製造人田中浅太郎」の方形刻印が認められる。〇〇の部分は薄いため判読不能であるが、「株式」であり、谷川瓦の株式会社設立が明治 22 年であるため帰属時期はそれ以降である。811 も撹乱坑 25 から出土の石持軒瓦である。810 と同様に瓦当面に「泉州谷川、製造元、田中六平」の方形刻印認められる。812 は整地土第１層から出土した谷川瓦である。瓦当面が欠損しているが、裏面に「松葉菱の図柄の中に土、登録商標、泉州〇〇製造人〇〇」の方形刻印が認められる。

813 は整地土第３層からの出土で、中心飾りは形骸化した橘である。18 世紀代と考えられる。814 は整地土第４層からの出土である。瓦当面から頭にかけて残存するが、袖部分が欠損している。中心飾りは蓮で、脇は唐草で瓦当面を飾っている。18 世紀前半と考えられる。

815 は土坑 437 出土である。瓦当面は橘の中心飾で、両脇は均整唐草文である。花弁の中央が雫型となることから 18 世紀中頃以降の時期と思われる。

（丸瓦） 816 は撹乱 19 からの出土で、凸面（背）に「松葉菱の図柄の中に土、登録商標、泉州、谷川瓦株式會社、製造人池田治一」の刻印が認められる。817 は整地土第１層からの出土で、

凸面（背）に「松葉菱の図柄の中に土、登録商標、泉州、谷川〇〇〇」の刻印が認められる。

818 は整地土第２層からの出土である。頭部が欠損しているため軒丸瓦の可能性もある。内面に粗いゴザ状の布目痕が認められる。819・820 は整地土第３層から出土した。双方共に内面には粗いゴザ状の布目痕が認められる。821・822 は整地土第４層からの出土で、821 内面はゴザ状の粗い布目痕が認められる。凸面中央に釘穴を穿つ。822 の内面には粗いゴザ状の布目痕と吊り紐痕が顕著に認められる。

823・824 は第２面検出の土坑状遺構から出土した。823 は遺構 111 からの出土で、内面は粗いゴザ状の布目痕が認められ、その上から縦方向にヘラ調整を施す。824 は遺構 212 から出土した。この瓦の内面にも粗いゴザ状の布目痕が認められる。

（平瓦） 825 は撹乱坑から出土した大振りな瓦である。裏面には滑り止めとして、先端の尖った工具で突き刺した痕が深く刻まれている。普通の家屋では耐えられないと考えられ、特別な建物に葺かれたものと思われる。帰属時期は不明ながら、丸瓦 816 が出土した撹乱 19 から出土しているため明治期の可能性が大きい。なお、明治 19 年には、当地に旧裁判所が建設されており、その建物に使用された公算が高い。

826 も大振りな瓦で、３－２区東側配管部の撹乱坑から出土した。平瓦に比べると曲率が緩く、四周側面は丁寧な仕上げで、接合を考えた上での調整がなされている感がつよい。屋根瓦としての用途ではなく、井戸枠として使用された可能性が高い。

827 ～ 833 は遺構から出土した。827 は第２面検出の遺構 111 から出土した。828 は第３面検出の遺構 360 からで、凹面は横方向に粗いナデを施す。829 も第３面検出の遺構 437 からの出土で、凹面の調整は 828 と同様であるが、二次焼成を受けているためか硬質となる。830 は第４面検出の遺構 530 の廃棄土坑から出土した。平瓦にしては曲率が緩く、側面四周は丁寧な仕上げで、角はほぼ直角となり、井戸側として製作されたものと思われる。831 は第２面検出の遺構 244 通路状遺構２の両側に半裁された状態で立て並べられた瓦である。瓦には平面の端寄りに左右対称の直径８～９ｍｍの穿孔があり、完形品は両側に４つの穿孔があったものと思われ、海鼠壁用の瓦を転用したものと考えられる。832 は第２面検出の遺構 181 土坑状遺構から出土した厚みのある瓦の破片である。塼の可能性もある。

833・834 は第１面検出の遺構 431 瓦積井戸２の井戸枠に使用されていた。双方共に曲率が緩く、側面四周は丁寧な仕上げ、角はほぼ直角となり、平面形はやや長方形を呈する。

（鬼瓦） 835・836 は撹乱坑から出土した。835 は跨鬼の脚部分で近代の遺物と思われる。836 は鬼瓦の右脚部分で、竹管を施文する。837 は出土遺構の記述はしていないが、第３面検出の遺構 288 土坑状遺構から出土した小振りな鬼瓦である。周縁の裏貼りは明瞭に確認できる。838 は家紋鬼瓦で、遺構 96 から多量の土器類に混じり出土している。家紋は『下り藤』で、調査地内に屋敷地があった安藤家の家紋である。

〈土製品・ミニチュア〉

土製品は調査地全域から一定量が出土している。最も多く出土しているのは各整地土層からで、他に撹乱坑や遺構からは少量ではあるが出土した。また、3 － 2 区の遺構２（土坑状遺構）からは纏まって出土している。土人形、ままごと道具のミニチュア土器、遊具の泥面子などが出土しているが、目立って多いのは土人形である。

839 ～ 844 は１区の撹乱坑からの出土である。839 は虚無僧で、頭部が欠損する。側面には型合わせの痕が明瞭に残る。840 ～ 842 は何れも破片で形状は不明である。843 は独楽である。844 は染付碗のミニチュアである。外面に草花文を描く。紅猪口の可能性もある。

845 ～ 848 は整地土第１層から出土した。845 は箱庭道具の塔である。846 は仏像で頸部から上は欠損する。847 は泥面子である。848 はミニチュアの磁器の碗で、赤絵付けを施す。

849 ～ 857 は整地土第２層出土の遺物である。849 は天神、850 は顔面が欠損しているため不明である。851 は騎馬武者で、上半身と馬の脚部が欠損する。852 は粗い仕上げの犬である。853 は中空で、布袋の大振りな人形である。854 は灰釉陶器の布袋形の水滴である。855 は扇を型押しした泥面子である。856・857 はままごと道具のお釜の蓋と皿である。

858 ～ 865 は整地土第３層からの出土遺物である。858 は大黒、859 は飾り馬、860 は狐、861 は鷹である。862 は頭部欠損のため不明である。863 は中空の亀である。864 は泥面子、865 はままごと道具のミニチュアの鍋である。

866 ～ 868 は整地土第４層から出土した。866 は騎馬武者で、上半身が欠損する。867 は鳩、868 は中空の兎であるが、片面は欠損する。

869 ～ 880 は１区の遺構､881 ～ 888 は３区の遺構から出土した。869 は騎馬武者､870 は飾り馬、871 は頭部欠損の西行、872 は大夫の頭部、873 は仏像の台座部分、874 は擬人化した猿、875 は中空の巫女である。876 は雀で、中には玉がある。877 は鶏、878 は陶器製の烏帽子を被った猿である。879 は箱庭道具の鳥居、880 は泥面子か？ 881 は飾り馬、882 は頭部欠損の鳥、883 は裃を着た人形であるが何かは不明。884 ～ 888 は施釉陶器製である。884 は犬、885 ～ 888 は鉢の形状を呈する。887 の体部には穿孔がある。

〈石製品〉

石製品の出土数は少ない。硯が１区の整地土第２層から２面、３－２区の遺構３から１面出土している。他に、砥石が１区の遺構 350 から１枚出土している。

889 は硯である。海部が欠損する。890 も硯で砥石である。使用の際の擦面が左に偏る。891 は砥石で、主に両面を使用している。892 も 889 と同様に海部が欠損する。

〈金属製品〉

金属製品は、整地土中からが最も多く出土している。特に釘が圧倒的に多く、次いで銭貨である。銭貨については表を参照されたい。

893 ～ 896 は撹乱坑から出土した。898 は錠前、894 は樋受け、895 は庖丁、895 はキセルの吸口である。897 は整地土第２層からの出土した出刃庖丁である。898 ～ 903 は整地土第３層から出土した。898 は角釘、899 は口金、900・901 はキセルの雁首部分である。902 は鎹、903 は熊手である。904 ～ 907 は整地土第４層から出土のもので、904・905 は角釘、906 は用途不明のお玉状の鉄製品、907 は鎌で、刃先が欠損する。

908 ～ 916 は各遺構から出土した。908 ～ 911 は角釘である。912 はキセルの雁首、913 は鎌、刃部が欠損する。914 は槍先である。915 は用途不明の円盤状鉄製品、916 は簪である。

〈木製品〉

大型土坑や廃棄土坑から多量の木製品が出土した。当調査地においては、木製品が出土する遺構は、深度のある大きな土坑状遺構に限られる。普段から塵穴として使用されたか、屋敷地改変

の整地時に投棄されたと考えられる。

933 ～ 943 は下駄である。下駄は、大きく一木刳抜きの連歯下駄と差歯下駄に分かれる。933・934・936 ～ 938・940 ～ 943 は連歯下駄、935・939 は差歯下駄である。どの下駄も遺存状態が良好でない。936 と 939 の台には僅かに漆膜が認められる。939 の台の裏側後部には、商標と思われる焼印が浅く押されている。

944 ～ 963 は曲物や桶などの一部と考えられる。944 ～ 946・948 ～ 952・954 は底板と考えられる。945 と 951 の側面に、側板を結合のための竹釘の孔が認められる。947 は桶の蓋と考えられ、栓をするための孔を穿つ。953 は蓋で、表面には樺が遺存する。958 ～ 963 は側板である。殆どのものには結合のための樺が遺存している。

964・970 は手桶の側板の一枚である。持手を挿し込むための臍穴を穿つ。966 ～ 969 は箸である。箸は他にも多量に出土している。971 ～ 974 は楔状木製品、965 は抉りが入るため荷札と考えられる。表裏に墨書があるが判読不能である。975 は何かの蓋で、上面には黒漆を塗布する。976 も漆が塗布された木片で、製品の一部と考えられる。977 は扇子の親骨と要部分である。978 は工具の柄で、挿込み根元の金属が遺存している。

979 ～ 990 は漆塗り椀である。出土した漆塗り椀は、バラバラに破砕しているか、一部が欠損して残存率の低いものが殆どであった。漆の塗布は、基本的には外面黒漆、内面赤漆、または内外面共に黒漆で、外面に赤漆で文様を描く類のものである。982・983 等については蒔絵を施している。樹種および漆膜については、第５節の保存処理報告書に詳しい。

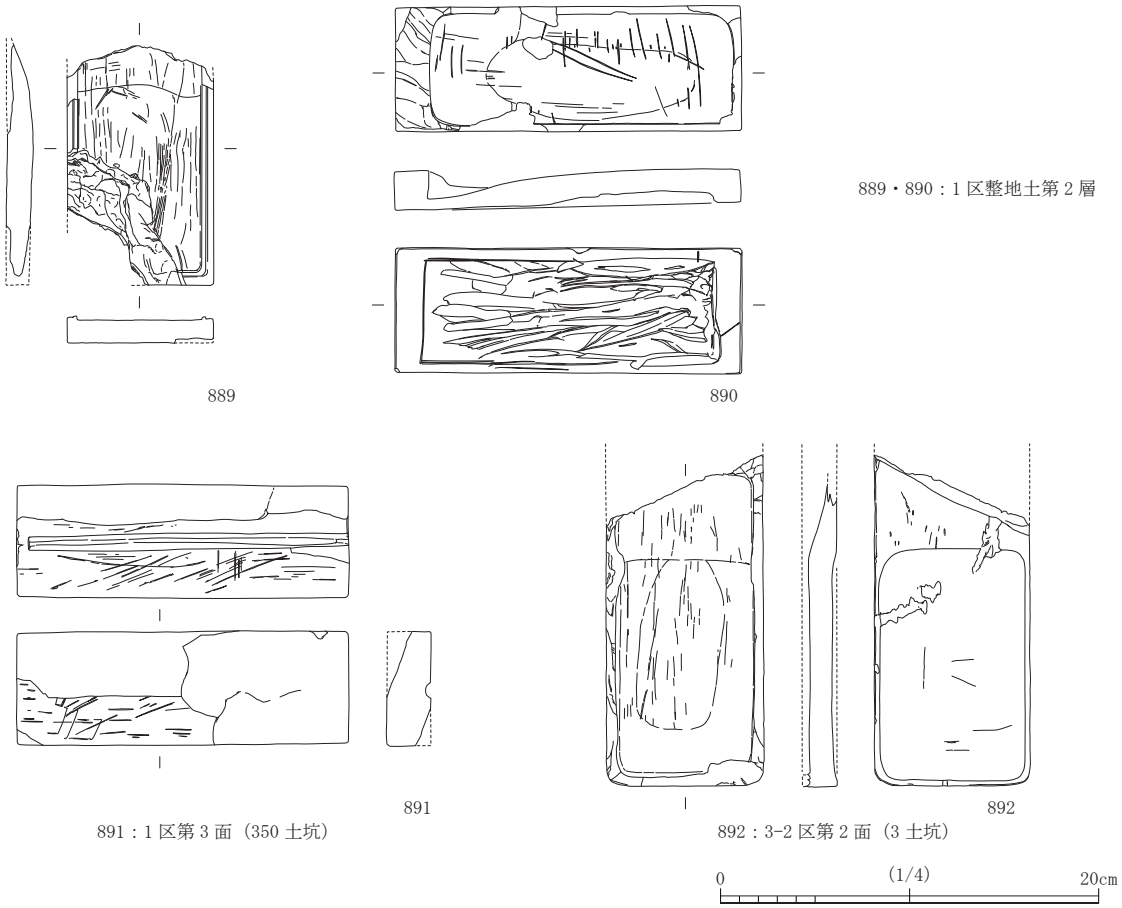


図１０１　石製品（硯・砥石）

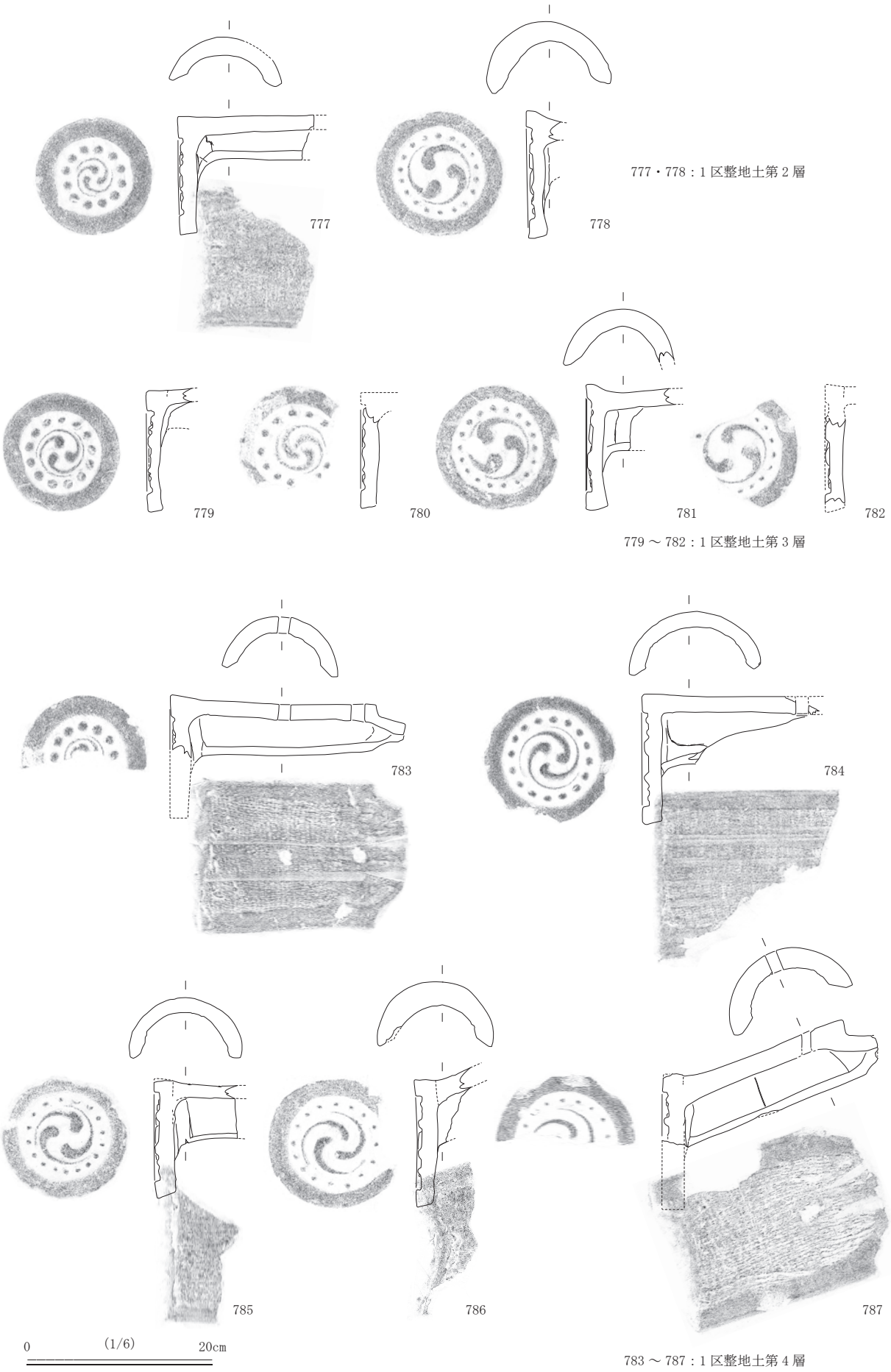
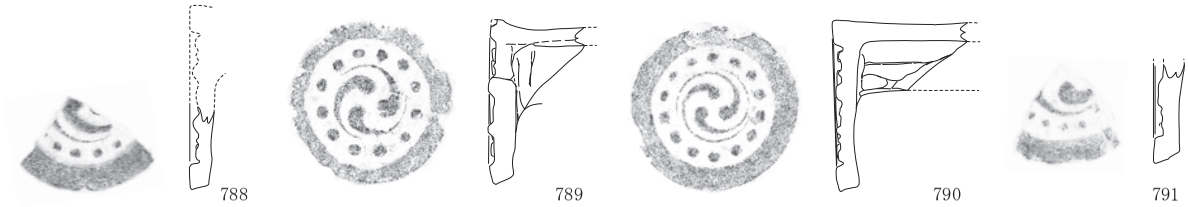
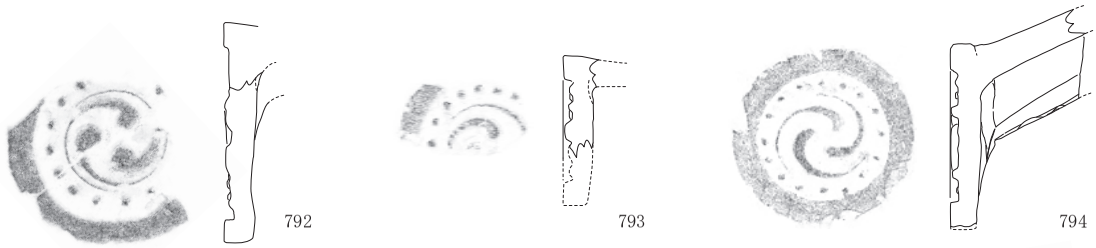

777
778
777・778：1 区整地土第 2 層
779
780
781
782
779 ～ 782：1 区整地土第 3 層
783
784
785
786
787
0
(1/6)
20cm
783 ～ 787：1 区整地土第 4 層

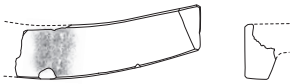
図１０２　瓦１（軒丸瓦）

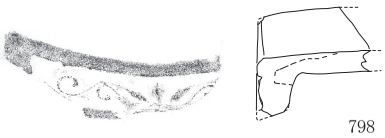


788：1 区第 2 面（111 土坑）　789：1 区第 3 面（350 土坑）　790：1 区第 3 面（437 土坑）　791：1 区第 2 面（212 土坑）

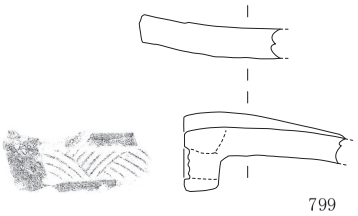


792：1 区第 2 面（218 土坑）　793：1 区第 2 面（192-1 土坑）　794：1 区第 4 面（555 土坑）



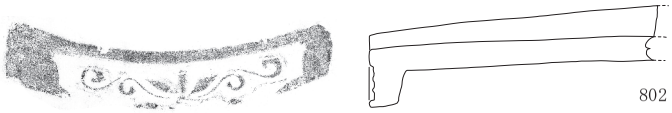


795 ～ 798：1 区攪乱



799：1 区整地土第 1 層

800・801：1 区整地土第 3 層

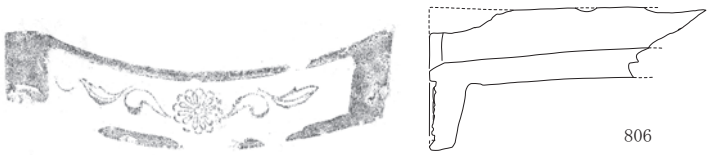


802：1 区第 3 面（343 土坑）

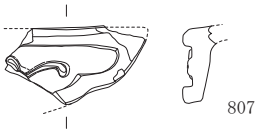
0　(1/6)　20cm

図１０３　瓦２（軒丸瓦・軒平瓦）

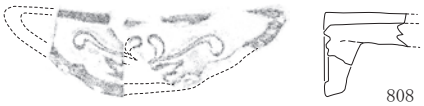
803・804：1 区第 2 面（218 土坑）　　805：1 区第 2 面（192 土坑）



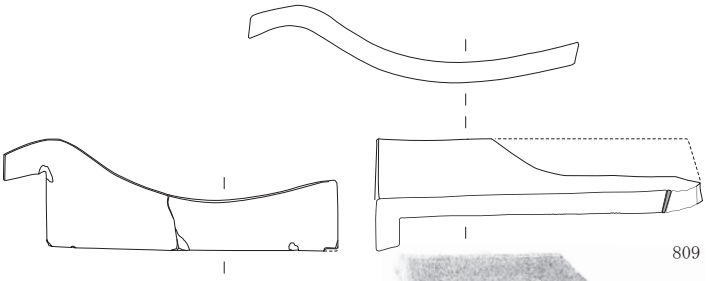
806：1 区第 4 面（555 土坑）

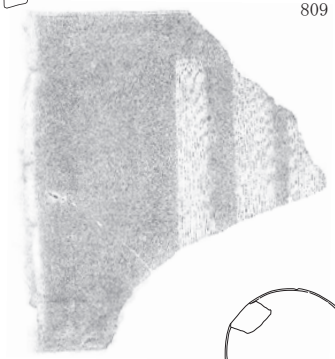


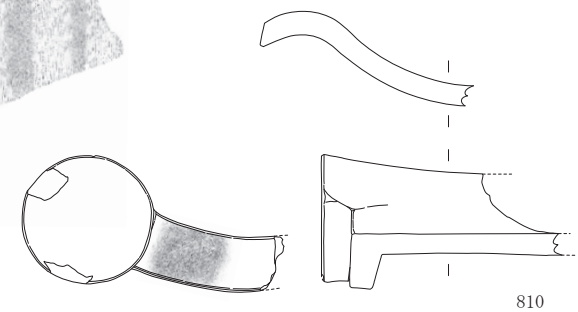
807：1 区第 2 面（192 土坑）



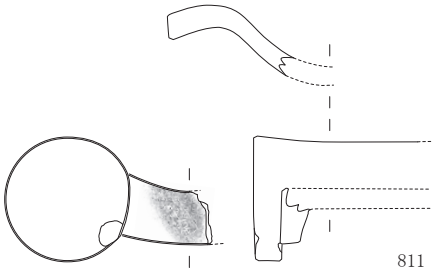
808：3-2 区第 2 面（3 土坑）







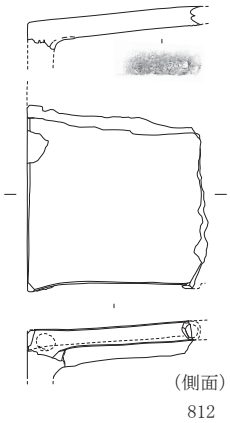
809・810：1 区攪乱（K19）



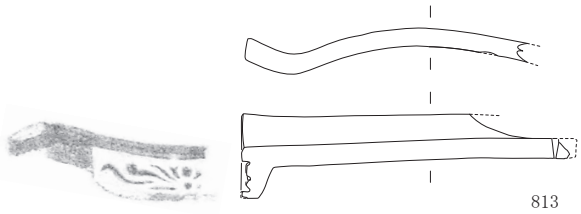
811：1 区攪乱（K25）

0　(1/6)　20cm

図１０４　瓦３（軒平瓦・滴水瓦・軒桟瓦）



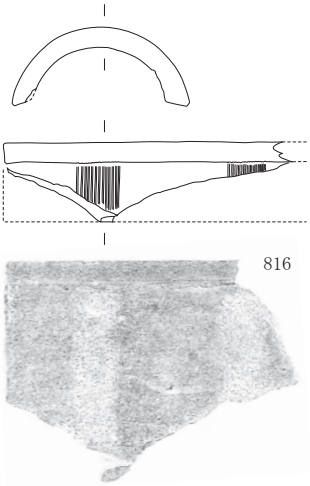
812：1 区整地土第 1 層



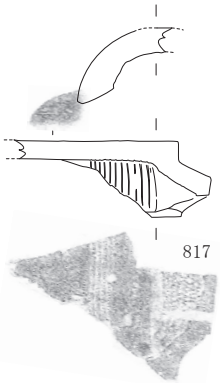
813：1 区整地土第 3 層

814：1 区整地土第 4 層

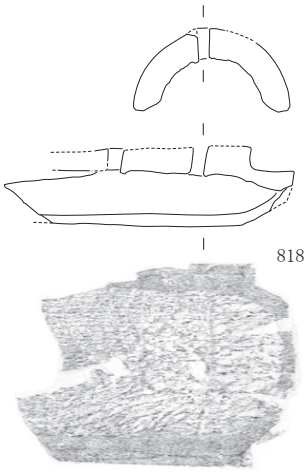
815：1 区第 3 面（437 土坑）



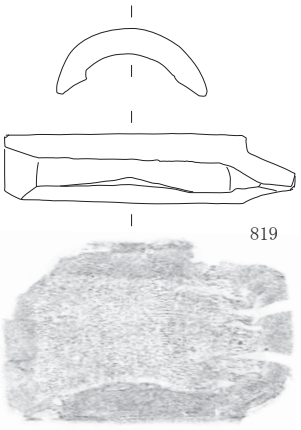
816：1 区攪乱（k19）

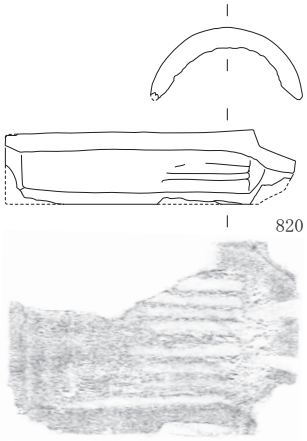


817：1 区整地土第 1 層



818：1 区整地土第 2 層





819・820：1 区整地土第 3 層

0　(1/6)　20cm

図１０５　瓦４（軒桟瓦・丸瓦）

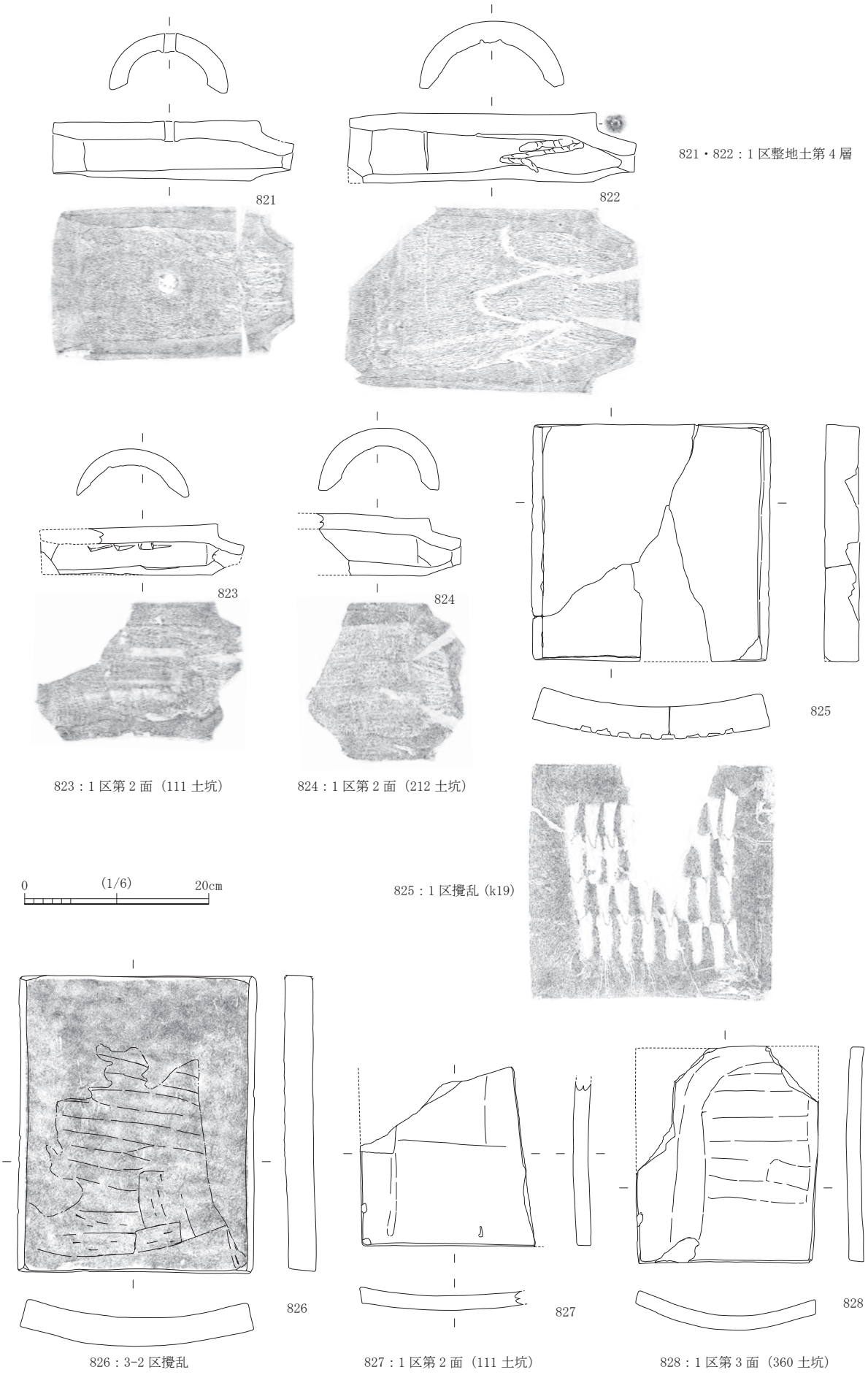
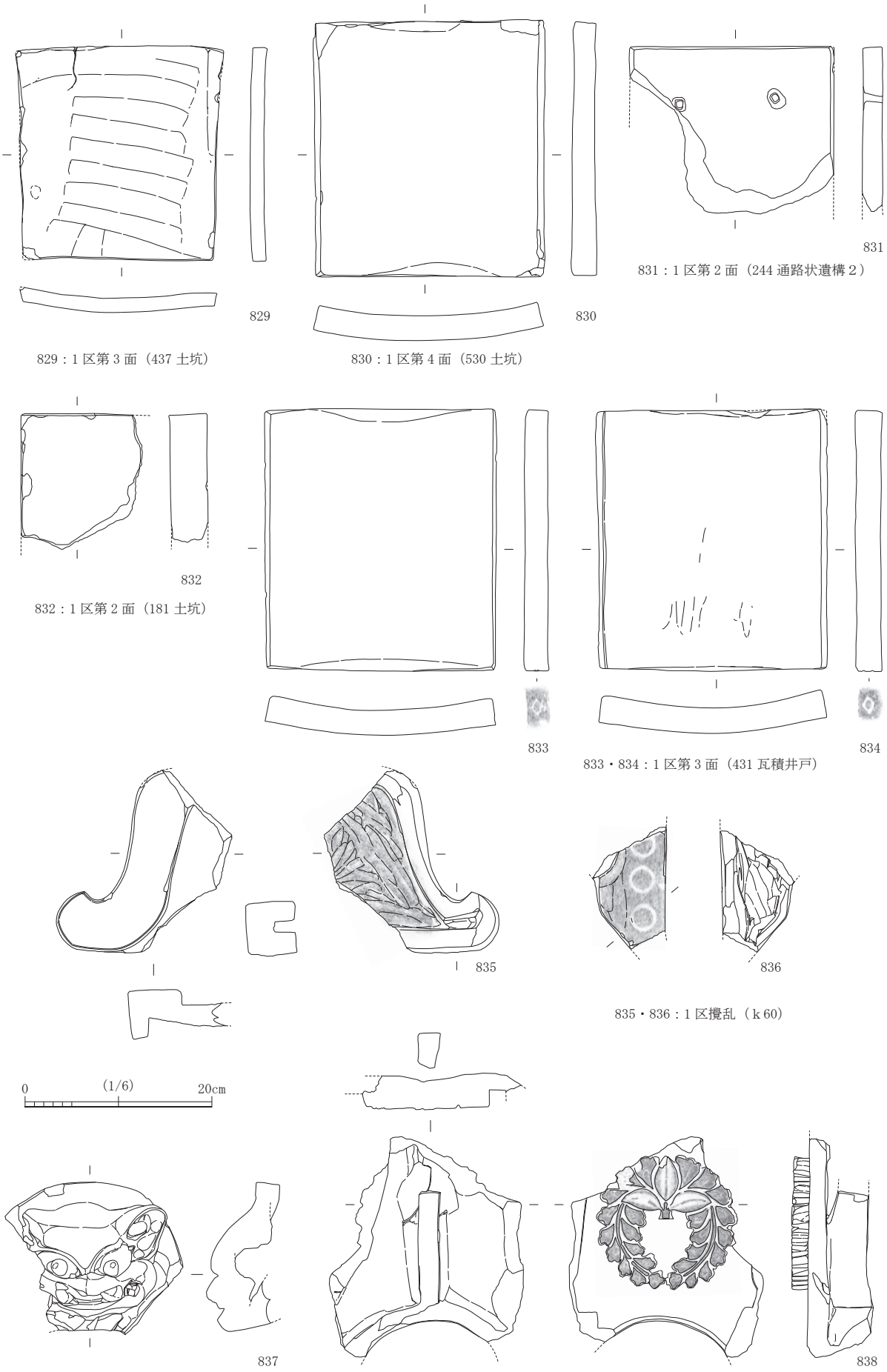

821
822
821・822：1 区整地土第 4 層
823
824
825
823：1 区第 2 面（111 土坑）
824：1 区第 2 面（212 土坑）
825：1 区攪乱（k19）
0
(1/6)
20cm
826
827
828
826：3-2 区攪乱
827：1 区第 2 面（111 土坑）
828：1 区第 3 面（360 土坑）

図１０６　瓦５（丸瓦・平瓦）



829：1 区第 3 面（437 土坑）

830：1 区第 4 面（530 土坑）

831：1 区第 2 面（244 通路状遺構２）

832：1 区第 2 面（181 土坑）

833・834：1 区第 3 面（431 瓦積井戸）

835・836：1 区攪乱（ｋ60）

837：1 区第 3 面（288 土坑）

838：1 区第 2 面（96 土坑）

図１０７　瓦６（平瓦・道具瓦他）

図１０８　土製品１（ミニチュア）

図１０９　土製品２（ミニチュア）

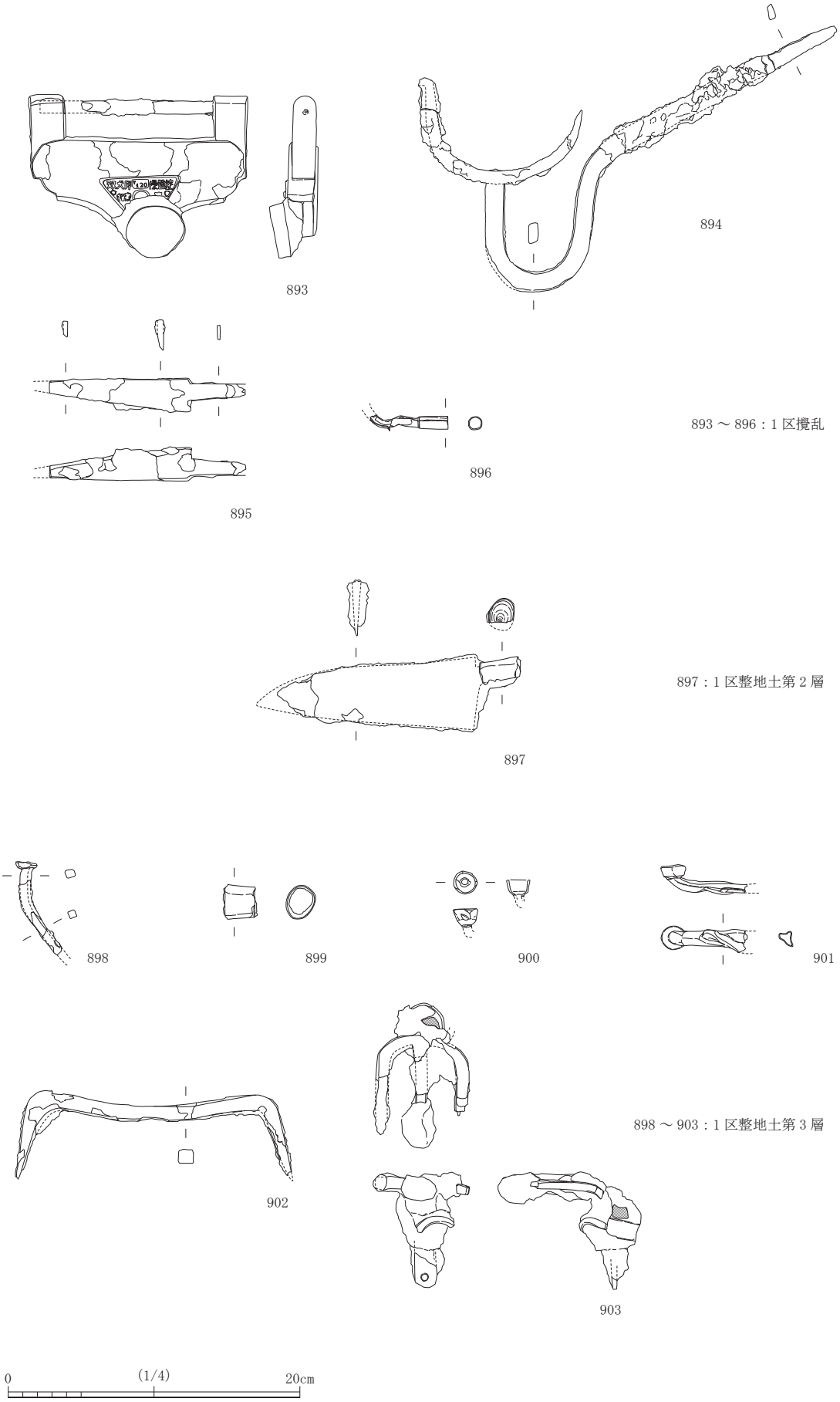

893
894
895
896
893 ～ 896：1 区攪乱
897
897：1 区整地土第 2 層
898
899
900
901
902
903
898 ～ 903：1 区整地土第 3 層
0
(1/4)
20cm

図１１０　金属製品１

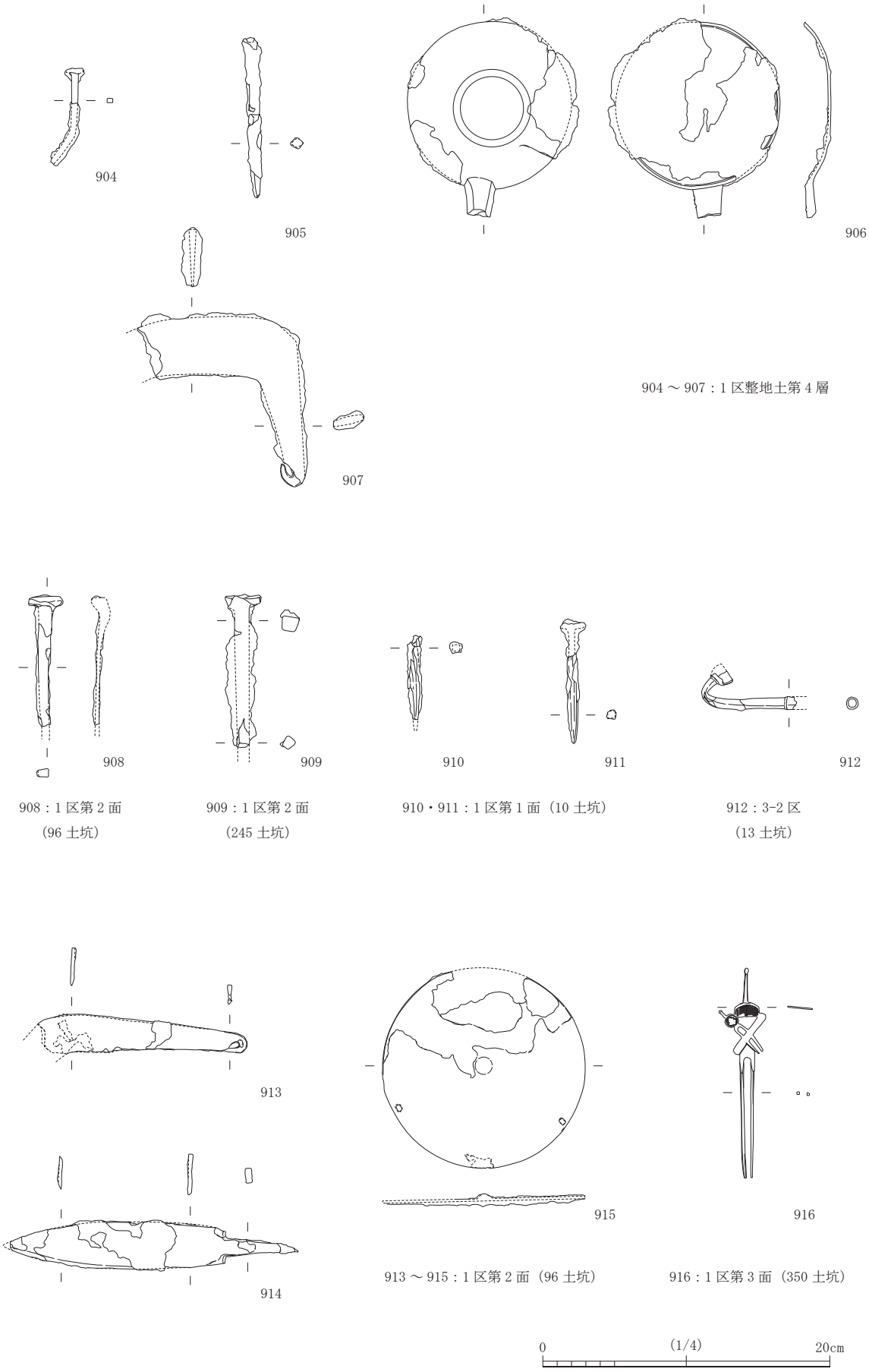
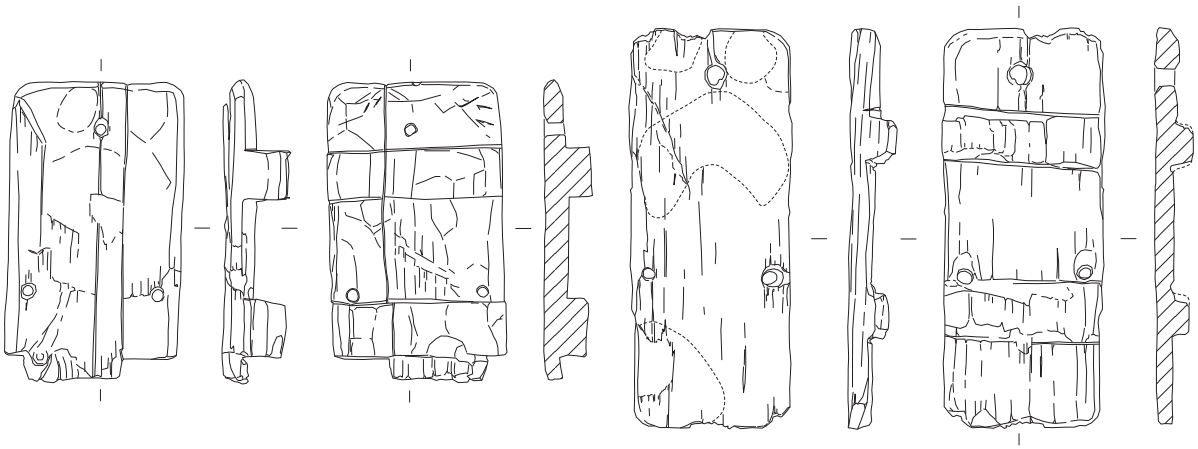
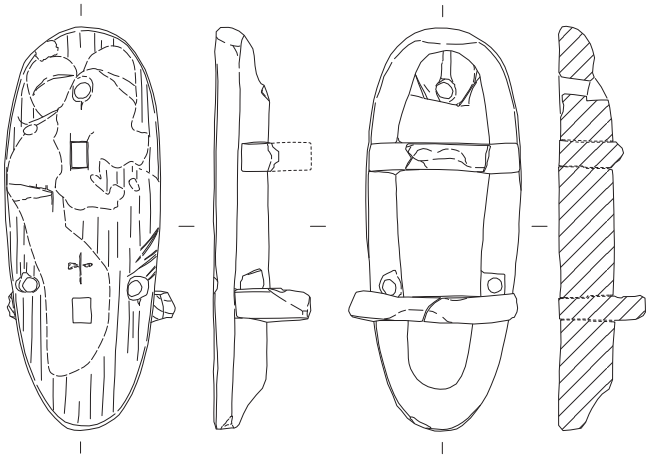

904
905
906
907
904 ～ 907：1 区整地土第 4 層
908
909
910
911
912
908：1 区第 2 面
(96 土坑)
909：1 区第 2 面
(245 土坑)
910・911：1 区第 1 面（10 土坑）
912：3-2 区
(13 土坑)
913
914
915
916
913 ～ 915：1 区第 2 面（96 土坑）
916：1 区第 3 面（350 土坑）
0
(1/4)
20cm

図１１１　金属製品２

報告書No.	初鋳年/新・古	地区	大区画	小区画	遺構No.	検出面	層位	種類	直径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	残存率	備考
917	1023	1区	J13	c18	Gr			天聖元宝	2.5	0.13	3.3	100	宋銭。篆書体。
918	1094	1区	J13	h16	242	第2面		天聖元宝	2.36	0.15	1.62	50	宋銭。篆書体。
919	1078	1区	J13	a23			2層	元豊通宝	2.47	0.12	2.97	100	宋銭。篆書体。
920	1078	1区	J13	a18	438	第3面		元豊通宝	2.44	0.11	1.96	80	宋銭。右側輪部の40%が欠損。
921	1101	3-2区	西側配管		7	第2面		元豊通宝	2.39	0.12	2.91	100	宋銭。「建中靖国元年」初鋳。
922	1101	1区	J13	k21		第3面		聖宋元宝	2.41	0.12	2.3	97	宋銭。左上の輪の一部が若干欠損。
923	－	1区	J13	h17	攪乱			判読不能	2.42	0.11	2.7	100	面の摩耗が著しい。 『紹聖元宝』の可能性あり。 糸偏が読み取れる。
924	1624	1区	J13	m・n11・12			機械掘削	寛永通宝(古)	2.49	0.14	3.72	100	背は無文。
925	1624	1区	J13	n12・13	416	第3面		寛永通宝(古)	2.48	0.14	3.6	95	左上の輪の一部が欠損。
926	－	1区	J13	f23			3層	寛永通宝(新)	2.43	0.14	3.15	100	背は無文。
927	－	1区	J13	k14			3層	寛永通宝(新)	2.47	0.12	3.4	100	背は無文。
928	－	1区	J13	e20			3層	寛永通宝(新)	2.31	0.11	2.01	100	背は無文。
929	－	3-2区	東側配管		10	第2面		寛永通宝(新)	2.5	0.15	2.6	100	背は無文。
930	－	1区	J13	l11	攪乱			寛永通宝(新)	2.38	0.14	2.25	100	面、背ともに緑青が著しい。
931	－	1区	J13	c23			1層	寛永通宝(新)	－	0.1	0.71	40	僅かに通と永の字が判読できたので『寛永通宝』とした。
932	1873	1区	J13	d・e20～23	攪乱			一銭銅貨	2.79	0.15	6.48	100	面、背ともに緑青が著しい。鋳造年は明治7年か？判読困難。

図１１２　金属製品３（貨幣）





933 ～ 935：1 区第 4 面（555 廃棄土坑）

936・937：1 区第 4 面（540 廃棄土坑）

0 (1/4) 20cm

図１１３　木製品１（下駄）

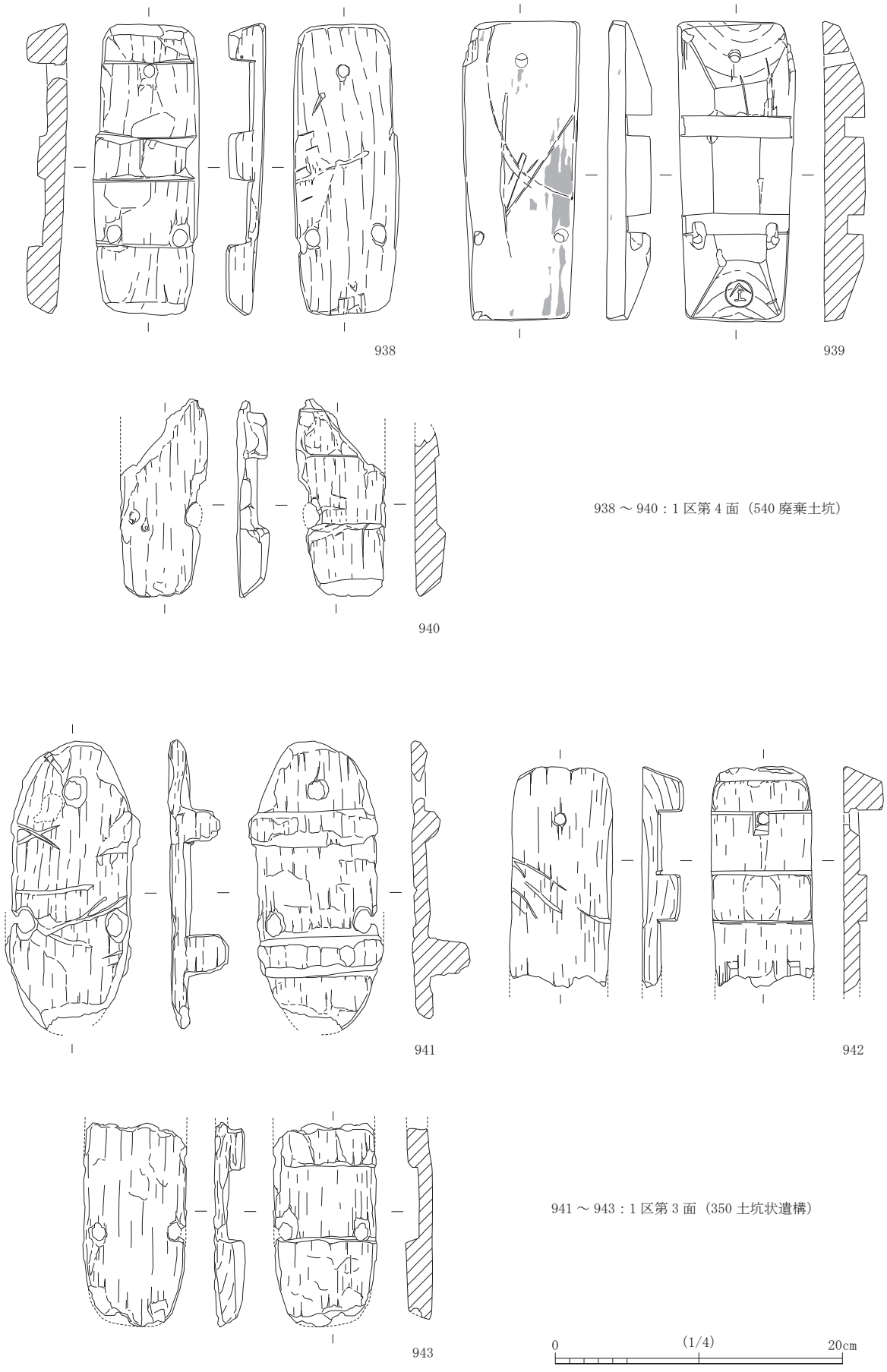
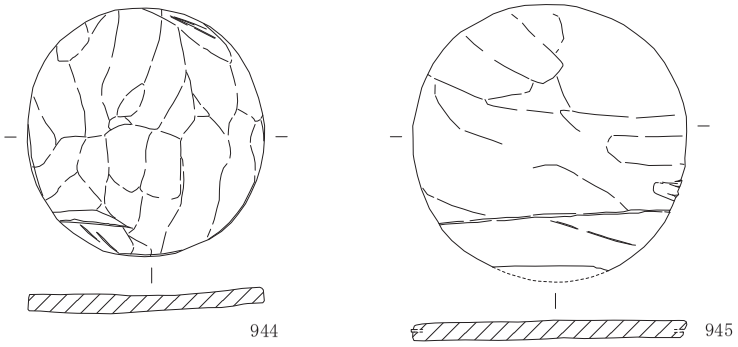
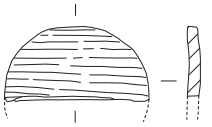
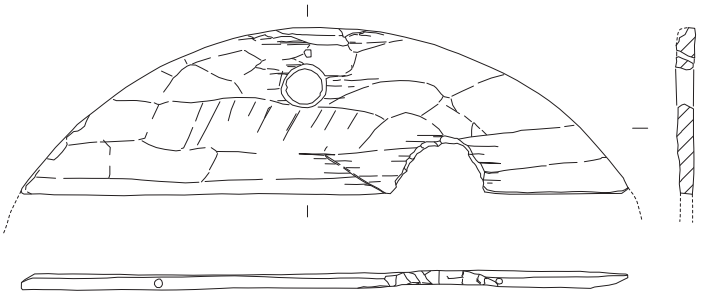

938
939
940
938 ～ 940 : 1 区第 4 面（540 廃棄土坑）
941
942
943
941 ～ 943 : 1 区第 3 面（350 土坑状遺構）
0
(1/4)
20cm

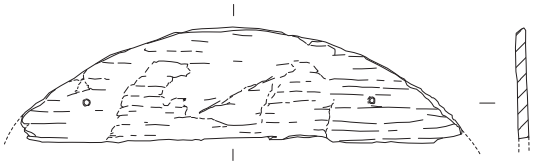
図１１４　木製品２（下駄）

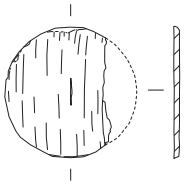


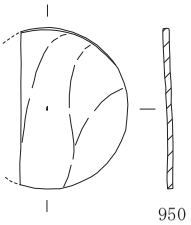




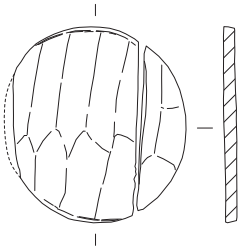
944 ～ 947：1 区第 4 面（555 廃棄土坑）

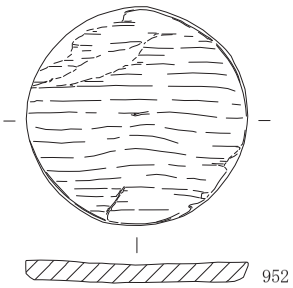


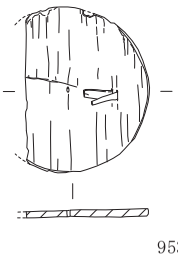


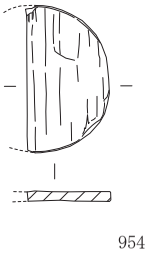


948 ～ 950：1 区第 4 面（540 廃棄土坑）









951：1 区第 3 面（530 廃棄土坑）　952：1 区第 4 面（518 大型土坑）　953・954：1 区第 3 面（350 土坑状遺構）

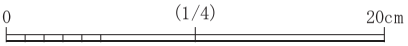
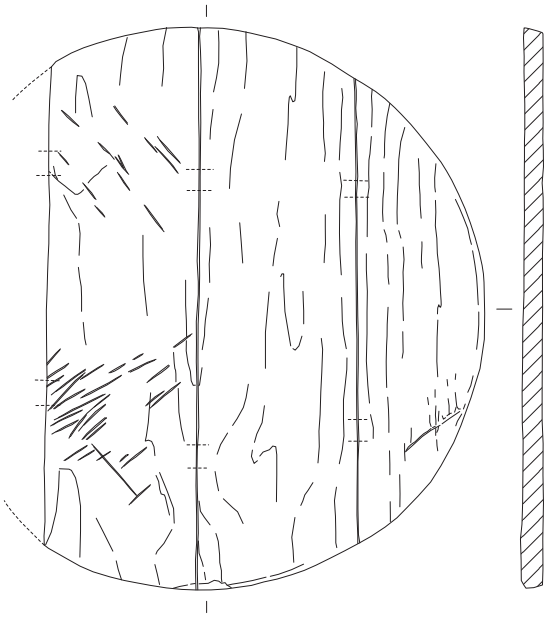
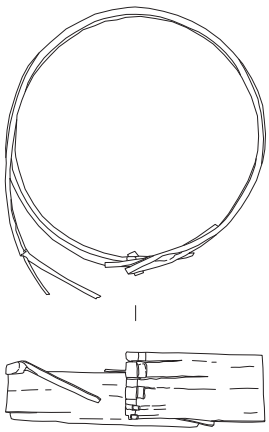


図１１５　木製品３（曲物の底板等）

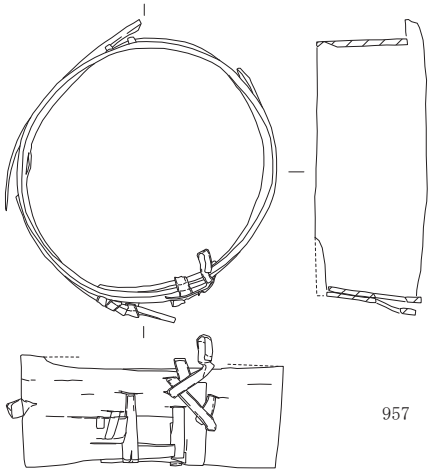


955

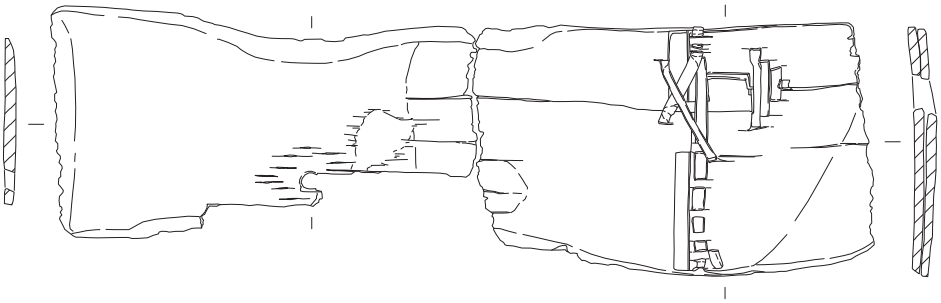
955：1 区第 3 面（562 大型土坑）



956



957

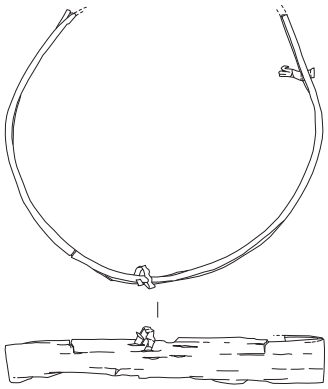


958

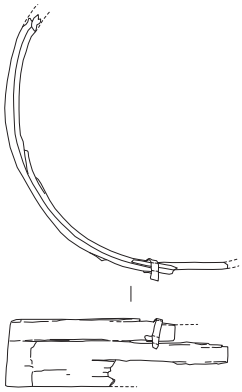
956 ～ 958：1 区第 4 面（555 廃棄土坑）

0 (1/4) 20cm

図１１６　木製品４（桶底・曲物の側板）

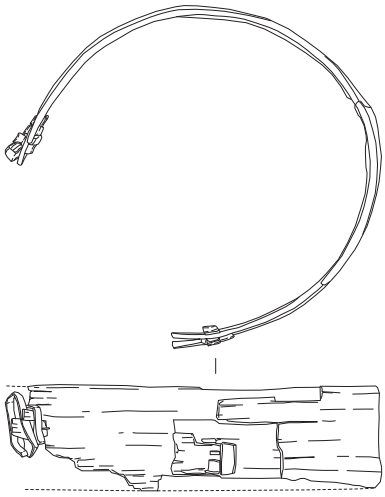


959



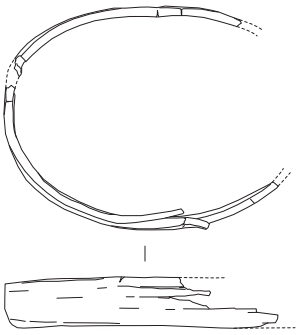
960

959・960：1 区第 4 面（530 廃棄土坑）

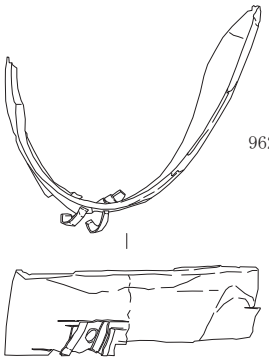


961

961：1 区第 4 面（518 大型土坑）



962



963

962・963：1 区第 3 面（350 土坑状遺構）

0 (1/4) 20cm

図１１７　木製品５（曲物の側板）

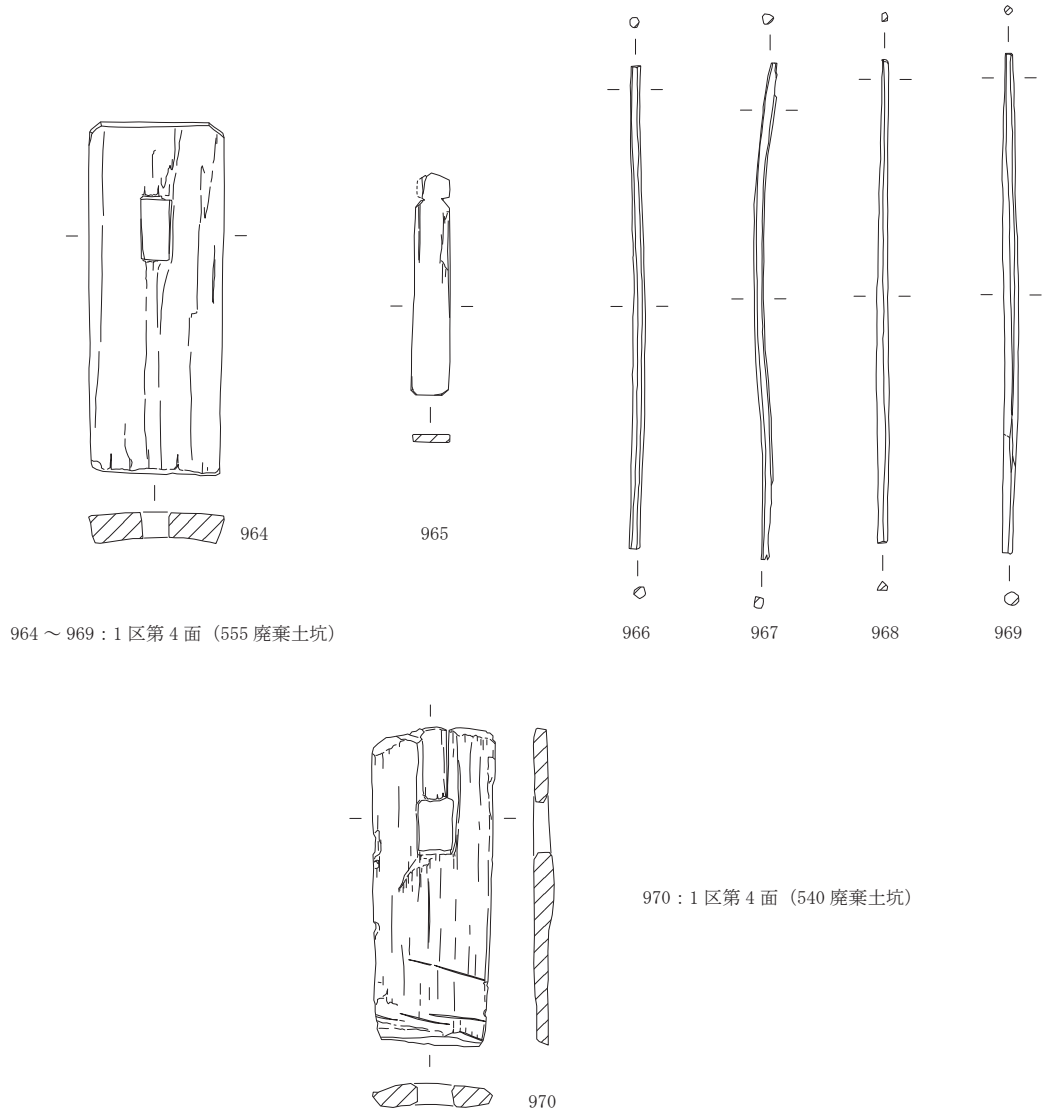
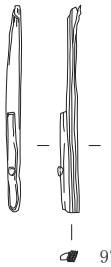
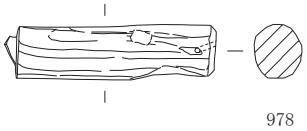


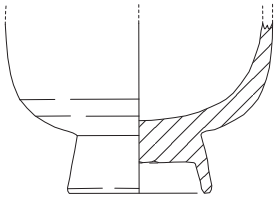
図１１８　木製品６（手桶の側板・木簡・箸・楔状木製品・漆塗り蓋・漆塗り木片）

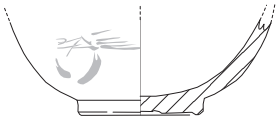


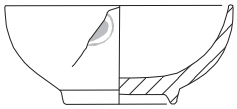
977：1 区第 3 面（451 地下式倉庫）



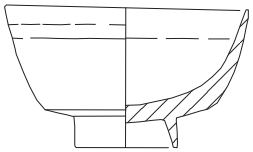
978：1 区第 3 面（350 土坑状遺構）

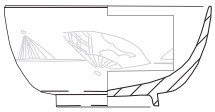


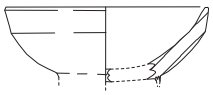




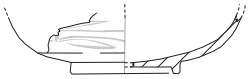
979 ～ 981：1 区第 4 面（555 廃棄土坑）

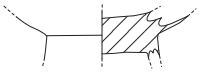


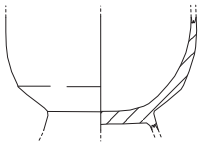




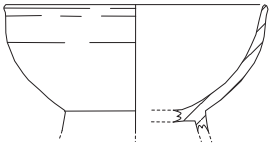
982 ～ 984：1 区第 4 面（540 廃棄土坑）



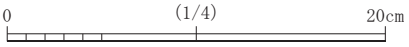


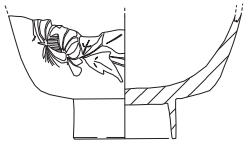


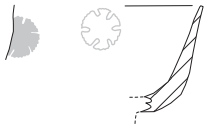
985 ～ 987：1 区第 4 面（518 大型土坑）



988：1 区第 3 面（451 地下式倉庫）







989・990：1 区第 3 面（350 土坑状遺構）

図１１９　木製品７（扇子・漆碗）

第５節　木製品保存処理の概要

第３・４遺構面で検出した大型土坑や廃棄土坑（遺構 350・518・540・555）から、多くの木製品が出土した。これらについては、水分を多く含んでおり、保存に適さないことから、その一部について専門機関と委託契約を締結し保存処理を行ったため、概要を報告しておきたい。

和歌山地方合同庁舎新築に伴う
和歌山城跡出土遺物等整理業務に係る木製品保存処理業務

株式会社文化財サービス　植村　明男

1、はじめに

和歌山城跡より出土した木製品 43 点の保存処理及び樹種同定を実施した。また、988（遺物№.29）の内面、986（遺物№.33）の外面、987（遺物№.34）の外面の漆器 3 点に関しては漆塗膜分析も合わせて実施した。ただし、遺物№.b に関しては、漆塗膜のみで木地が残存していなかったため樹種同定を行えず実施しなかった。また、935（遺物№.58）の差歯下駄は、台の他に前歯、後歯も残存していたため、台の他に前歯、後歯も合わせて樹種同定を実施した。

2、保存処理工程

（１）処理前調査（保存処理前観察表作成）

処理前調査として、デジタルカメラによる写真撮影と遺物の状態を把握するための肉眼観察を行い、合わせて樹種同定を行った。樹種同定結果については後述する。965（遺物№.59）を除く全ての遺物 はポリエチレングリコール（PEG）含浸、965（遺物№.59）は真空凍結乾燥法で実施した。

（２）洗浄

蒸留水を用いて実施した。

（３）脱色処理

エチレンジアミン四酢酸 -2 ナトリウム 2 水和物（EDTA-2Na）0.1％水溶液に 24 時間浸漬した。その後、脱 EDTA-2Na 処理として、流水にて 36 時間程度洗浄した。但し、遺物№.59 の木簡については墨書が見えなくなる可能性があるため、脱色作業は行わなかった。

（４）樹脂含浸・真空凍結乾燥

4-1 PEG 含浸法　965（遺物№.59 以外）

樹脂含浸は、遺物を不織布を用いて養生し、漆器に関しては個別に容器に入れ実施した。PEG 濃度は最初 20％から開始し、段階的に 20％ずつ上昇させ、最終的には PEG 濃度を 100％まで上昇させた。PEG 含浸完了後、溶液から取り上げ余分な PEG を拭き取り 5 日間自然乾燥させた。

4-2 真空凍結乾燥法　965（遺物№.59）

樹脂含浸は、遺物を不織布で養生した。PEG 濃度は最初 5％から開始し、段階的に 5％ずつ上昇

させ、最終的にはPEG 濃度を40%まで上昇させた。 PEG 含浸が完了後、遺物を -50℃で凍結させ、真空凍結乾燥を実施した。

（５）表面処理

表面処理は、以下の工程を実施した。

60℃に加温したエタノールを用いて遺物表面に析出した余分なPEG を可能な限り除去した。その後３日間自然乾燥させた。

（６）接合

接合が必要な遺物はエポキシ系接着剤（クイック５：コニシ株式会社）を用いて接合を行った。また、遺物№.ｂは、木地が残存せず、消失し、漆塗膜のみが残存している状態であったため水のりを水で溶いたものを用いて和紙に貼り付けた。

（７）処理後調査

処理後調査として、保存処理前観察表を用いて遺物の変形や破損等が発生していないかの確認を行った。

3、樹種同定及び漆塗膜分析

（１）分析方法

1-1 樹種同定

各遺物の木取りを観察した上で、剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を直接採取する。切片をガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）、Richter 他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

報告書No.	遺物No.	器種	木取り	樹種	備考
941	1	連歯下駄	板目	クスノキ科	楕円
－	8	曲物（側板）	板目	ヒノキ	
977	16	扇子	－	イネ科タケ亜科	持ち手の部分
962	17	曲物（側板）	板目	ヒノキ科	
975	18	蓋又は栓	板目	ヒノキ	円形
976	19	蓋又は栓	板目	ヒノキ科	
963	25	曲物（側板）	板目	ヒノキ	U字型
989	26	漆器椀	横木地板目取	トチノキ	内：赤、外：黒
990	27	漆器椀	横木地板目取	トチノキ	内：黒、外：黒
988	29	漆器椀	横木地	トネリコ属	内：赤、外：赤
961	30	曲物（側板）	板目	ヒノキ	
985	32	漆器椀	横木地板目取	トチノキ	内：赤、外：黒
986	33	漆器椀	横木地柾目取	トチノキ	内：赤、外：黒
987	34	漆器椀	横木地板目取	ブナ属	内：赤、外：赤
959	36	曲物（側板）	板目	ヒノキ科	半円状
960	37	曲物（側板）	板目	ヒノキ	半円状
938	38	連歯下駄	板目	ツブラジイ	
939	46	差歯下駄（台）	板目	モミ属	一部に黒漆が残る
940	47	連歯下駄	板目	スダジイ	
937	49	連歯下駄	柾目	トネリコ属	一部欠損
936	50	差歯下駄（台）	柾目	ヒノキ科	一部に黒漆が残る
982	53	漆器椀	横木地柾目取	トチノキ	内：黒、外：黒
984	54	漆器椀	横木地板目取	ブナ属	内：赤、外：黒
983	55	漆器椀	横木地板目取	トチノキ	内：赤、外：黒
935	58	差歯下駄（台）	柾目	ヒノキ科	右足
		差歯下駄（前歯）	柾目	マツ属複維管束亜属	
		差歯下駄（後歯）	柾目	マツ属複維管束亜属	
965	59	木簡	板目	ヒノキ	墨書有
956	60	曲物（側板）	板目	ヒノキ	
980	61	漆器椀	横木地板目	クリ	内：赤、外：黒
981	62	漆器椀	横木地板目取	トチノキ	内：赤、外：黒
957	63	曲物（側板）	板目	ヒノキ	柄杓
966	64	箸	削出棒状	スギ	断面多数角
967	65	箸	削出棒状	スギ	断面多数角
968	66	箸	削出棒状	スギ	断面三、四角
969	67	箸	削出棒状	スギ	断面多数角
933	69	連歯下駄	芯持材	ヒノキ	
958	71	曲物（側板）	板目	ヒノキ	
－	72	曲物（側板）	板目	ヒノキ	桶巻
979	73	漆器椀	横木地柾目取	クリ	内：赤、外：黒
934	74	連歯下駄	板目	ヒノキ科	
－	b	漆器椀	－	同定不能	内：赤、外：黒
－	c	漆器椀	横木地板目取	トチノキ	内：黒、外：黒
－	f	漆器椀	横木地	ブナ属	内：赤、外：黒
－	g	紐	－	シェロ属	

表１　樹種同定結果

1-2 薄片作成・観察

塗膜片は木地を含めた状態で採取し、塗膜の水分を拭き取った後、合成樹脂に包埋し、樹脂を固化させる。紐は、アルコールシリーズ（エタノール 50%, 70%, 90%, 95%, 100%, エタノール：ブタノール 1:1, ブタノール , ブタノール：キシレン 1:1, キシレン）で脱水した後、合成樹脂に包埋し、樹脂を固化させる。各試料について、目的の断面が出るようにダイヤモンドカッターで切断し、切断面を研磨する。研磨面をスライドグラスに接着し、反対側も切断と研磨を行ってプレパラートとする。プレパラートは生物顕微鏡、落射蛍光顕微鏡、偏光顕微鏡を用いて塗膜の構造、混和物、紐の組織構造などを観察する。

（２）結果

2-1 樹種同定

樹種同定結果を表 1 に示す。木製品は、針葉樹 5 分類群（マツ属複維管束亜属・モミ属・スギ・ヒノキ・ヒノキ科）と広葉樹 7 分類群（ブナ属・クリ・ツブラジイ・スダジイ・クスノキ科・トチノキ・トネリコ属）とイネ科タケ亜科に同定された。また、薄片作成を実施した紐はシュロ属に同定された。

2-2 漆塗膜

・988（遺物№.29）

内面の塗膜で、肉眼で茶褐色に見える。木地の上の下地は、種類を明らかにできなかったが、厚い部分で 120 μ m を超える。下地の上には漆層が 3 層認められる。下地の直上は赤色顔料を混ぜた赤漆が約 20 ～ 30 μ m、その上に褐色～茶褐色の漆層が 10 ～ 20 μ m の厚さで入り、さらに最上部に赤色顔料を混ぜた赤漆が約 40 μ m の厚さで塗られる。赤色顔料の反射顕微鏡下で見られる色調はベンガラに似ている。また、褐色～茶褐色の漆層（漆層 2）も何らかの混和物があると考えられるが、混和物を特定することはできなかった。漆層 2 の存在により、赤漆が肉眼で茶褐色に見えていると考えられる。

・986（遺物№.33）

外面の塗膜は肉眼では黒色を呈する。木地の上には炭粉を使った下地層があり、厚い部分で 100 μ m を超える。下地の上には、透明漆が 1 層のみ約 20 μ m の厚さで塗られる。透明漆を通して下地を見ることで、肉眼で黒色を呈すると考えられる。

・987（遺物№.34）

外面の塗膜で、肉眼では赤色を呈する。木地の上の下地は炭粉を用いた下地で、厚い部分で約 150 μ m に達する。下地の上には赤色顔料を混ぜた赤漆が 1 層、10 ～ 20 μ m の厚さで塗られる。赤色顔料は、肉眼および反射顕微鏡下での発色からベンガラの可能性がある。

（３）考察

分析を実施した木製品は、伊東・山田 (2012) の木器分類を参考にすれば、服飾具（下駄）、

容器（漆器椀・曲物・桶巻・蓋又は栓）、食事具（箸）、遊戯具・日用品（扇子）、計量具・文房具（木簡）、その他（紐）に分けられる。

服飾具は下駄9試料がある。下駄には、一木で台と歯を作る連歯下駄と、台と歯を別材で作る差歯下駄があり、935（遺物№.58）の差歯下駄には前歯・後歯が残存している。連歯下駄は、6点の試料に6種類の樹種が認められる。このうち、ヒノキ科はヒノキの可能性があり、ツブラジイとスダジイはよく似た種類である。これらを考慮しても6点の試料に4種類であり、点数に対して利用される種類数が多い。比較的軽い、針葉樹のヒノキ、ヒノキ科が利用される一方で、重硬な材質を有する広葉樹のツブラジイ、スダジイ、トネリコ属も利用されており、利用される木材の材質に幅がある。下駄の用材については、利用者の性別、年齢、嗜好等が関係しており、それによって様々な材質の木材が利用されたと考えられる。なお、連歯下駄のうち、938（遺物№.38）と940（遺物№.47）は、形状から同タイプであるが、前者がツブラジイ、後者がスダジイで同じシイ属の木材を利用している点は、下駄の制作者などを考える上でも興味深い結果である。一方、差歯下駄は、939（遺物№.46）と936（遺物№.50）が陰卯下駄、935（遺物№.58）が露卯下駄である。陰卯下駄2点は、いずれも黒漆が塗られた塗下駄であり、形状もよく似ていることから、同タイプの下駄と考えられる。陰卯下駄2点の台はモミ属とヒノキ科、露卯下駄1点の台はヒノキ科であり、いずれも針葉樹が利用される。点数が少ないことが影響している可能性もあるが、連歯下駄と比べると、軽い材質の木材に偏った木材利用といえる。前歯と後歯が残っている935（遺物№.58）についてみると、台がヒノキ科、歯2点がマツ属複維管束亜属であり、歯には強度・保存性の高い木材を利用したことが推定される。また、陰卯下駄2点は、樹種が異なっており、同タイプの下駄で少なくとも2種類が利用されたことが推定される。

容器では、漆器椀を中心に曲物側板、桶巻、蓋又は栓がある。漆器椀は、木取りが確認できた資料は全て横木地であり、板目取りが多いが、柾目取りも認められる。漆塗りを見ると、内面が赤色、外面が黒色に塗られた資料が多いが、内外面とも黒色990，982，ｃ（遺物№.27,53，ｃ）や内外面とも赤色を呈する988，987（遺物№.29,34）という資料もある。また、外面に朱漆で模様が描かれる資料990，985，980，981，ｃ（遺物№.27,32,61,62，ｃ）や、銀色で模様が描かれる資料983（遺物№.55）がある。このうち、990（遺物№.27）とｃには同じ模様が描かれており、同一制作者の製品と考えられる。

これらの漆器椀の木地は、15点中9点がトチノキで、他にブナ属、クリ、トネリコ属が認められる。漆塗りや木取りと樹種を比較しても、とくに傾向は認められず、全体的にトチノキを主体とした木材利用が推定される。伊東・山田（2012）のデータベースでも、ブナ属やトチノキは、ケヤキと共に近世に大量に利用されたことが伺える。

北野（2005）によれば、近世の漆器では、サビ下地を施し、水銀朱を使うなど、堅牢で組成的に優品に属する資料にはケヤキを用い、炭粉下地を施し、ベンガラを利用するなど、極めて一般的な資料にはブナを用いているとされる。また、一般品の範疇に入るものの、銀を使った蒔絵や石黄加飾等で家紋や図柄の加飾を施すなど、やや程度の良い資料にはトチノキやカツラ等が利用される。本遺跡の漆器は、内外面とも赤色に塗られる資料や、外面に銀色の模様が描かれる資料があるが、ケヤキは含まれていない。一方、銀模様が施される983（遺物№.55）はトチノキであり、北野（2005）の指摘とも整合的である。

今回の資料のうち、988（遺物№.29）の内面、986（遺物№.33）、987（遺物№.34）の外面について、塗膜断面の観察を実施した。その結果では、ブナ属とトチノキに同定された986（遺物№.33）、987（遺物№.34）は、炭粉下地が施され、986（遺物№.33）では下地の上に透明漆、987（遺物№.34）では赤色顔料を混和した漆がそれぞれ1層塗られており、比較的簡単な作りである。一方、木地がトネリコ属に同定された988（遺物№.29）は、木地が薄手で、上記2点とは異なる下地が施され、漆塗りを3回施すなど、より丁寧な作りの漆器といえる。木地のトネリコ属は、現代のろくろ木地の調査では、優品に使われるケヤキと同じように扱われることが指摘されている（橋本，1979）。以上の点を考慮すると、今回の漆器にはケヤキは認められないが、トネリコ属がその代替として使われていた可能性がある。塗膜分析を実施しなかった資料の中では、980（遺物№.61）に認められたクリもケヤキと同じように利用するとされる樹種である。

漆器以外の容器では、蓋又は栓2点、曲物側板8点、桶巻2点のいずれもヒノキあるいはヒノキ科に同定され、加工性の高い木材の選択・利用が推定される。なお、曲物の側板は、全て板目の木取りで作られている。板目は、目が詰まった晩材部が板の厚さ方向に入るために、柾目板に比べて水を透過させにくい性質を持つとされる。今回の曲物については、木取りから液体を入れる容器として利用され、より耐水性の高いヒノキが利用された可能性もある。

食事具は、箸4点がある。全て削出棒状で、スギに同定され、分割加工が容易な樹種が利用されている。箸は、加工時に生じる余材等からも製作可能である。これまでの調査例では、調査対象の各遺跡の他の木製品に多く認められる針葉樹材が箸にも多く利用されることが多い。しかし、本遺跡では、スギは箸のみに認められており、興味深い結果である。スギ材の利用状況については、城下町も含めて検討する必要がある。

遊戯具・日用品では、扇子1点がある。持ち手の部分であり、タケ亜科に同定された。伊東・山田（2012）のデータベースでは、扇子19例について樹種を調査した例が掲載されている。その結果を見ると、針葉樹のスギあるいはヒノキが利用される例が多いが、タケ・ササ類が利用される例は行元寺跡（東京都新宿区）と丸の内一丁目遺跡（東京都千代田区）で2例報告されている。計量具・文房具では、木簡1点がある。木簡はヒノキであり、加工性の高い木材を選択・利用したことが推定される。また、板目取りであることから、文字を書くことを考慮して、年輪の目立たない木取りにしている可能性がある。

その他は紐1点がある。2本の糸を撚って作られている。1本の糸は、径150μm（0.15㎜）程度の繊維多数を束ねている。繊維はいわゆるシュロの毛であり、紐はシュロ縄と考えられる。シュロの毛は、繊維質に富むシュロ皮から採取され、腐りにくく伸縮性に富むことから、縄や敷物等として利用される。本遺跡でも縄として利用されていたことがうかがえる。

4、まとめ

和歌山城跡より出土した木製品の保存処理及び樹種同定、漆塗膜分析の結果について報告した。樹種同定の結果、針葉樹5分類群（マツ属複維管束亜属・モミ属・スギ・ヒノキ・ヒノキ科）と広葉樹7分類群（ブナ属・クリ・ツブラジイ・スダジイ・クスノキ科・トチノキ・トネリコ属）とイネ科タケ亜科、シュロ属に同定された。このような樹種同定や漆塗膜分析を行うことによって和歌山城跡から出土した木製品の特色が垣間見られたのではないかと思われる。本報告が木材

利用や木製品製作時の樹種の選択、遺跡の性格等の研究の発展に少しでも役立てて頂けたら幸いである。

引用文献

林　昭三,1991, 日本産木材　顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.

伊東隆夫,1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料,31, 京都大学木質科学研究所,81-181.

伊東隆夫,1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料,32, 京都大学木質科学研究所.66-176.

伊東隆夫,1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料,33, 京都大学木質科学研究所,83-201.

伊東隆夫,1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料,34, 京都大学木質科学研究所,30-166.

伊東隆夫,1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料,35, 京都大学木質科学研究所,47-216.

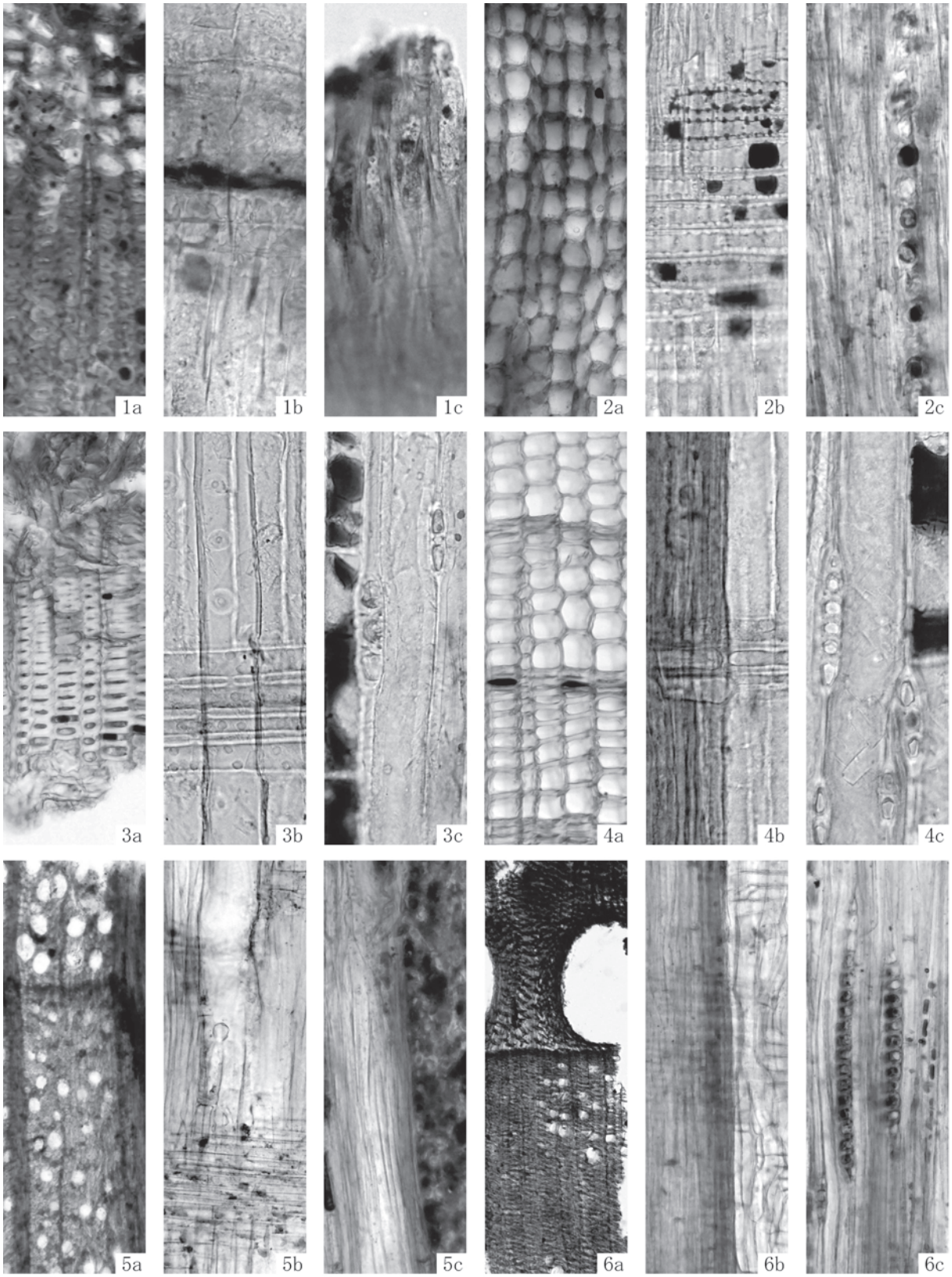
伊東隆夫・山田昌久(編),2012, 木の考古学　出土木製品用材データベース. 海青社,449p.

北野信彦,2005, 近世出土漆器の研究. 吉川弘文館,394p.

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編）,2006, 針葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘（日本語版監修）, 海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].

島地　謙・伊東隆夫,1982, 図説木材組織. 地球社,176p.

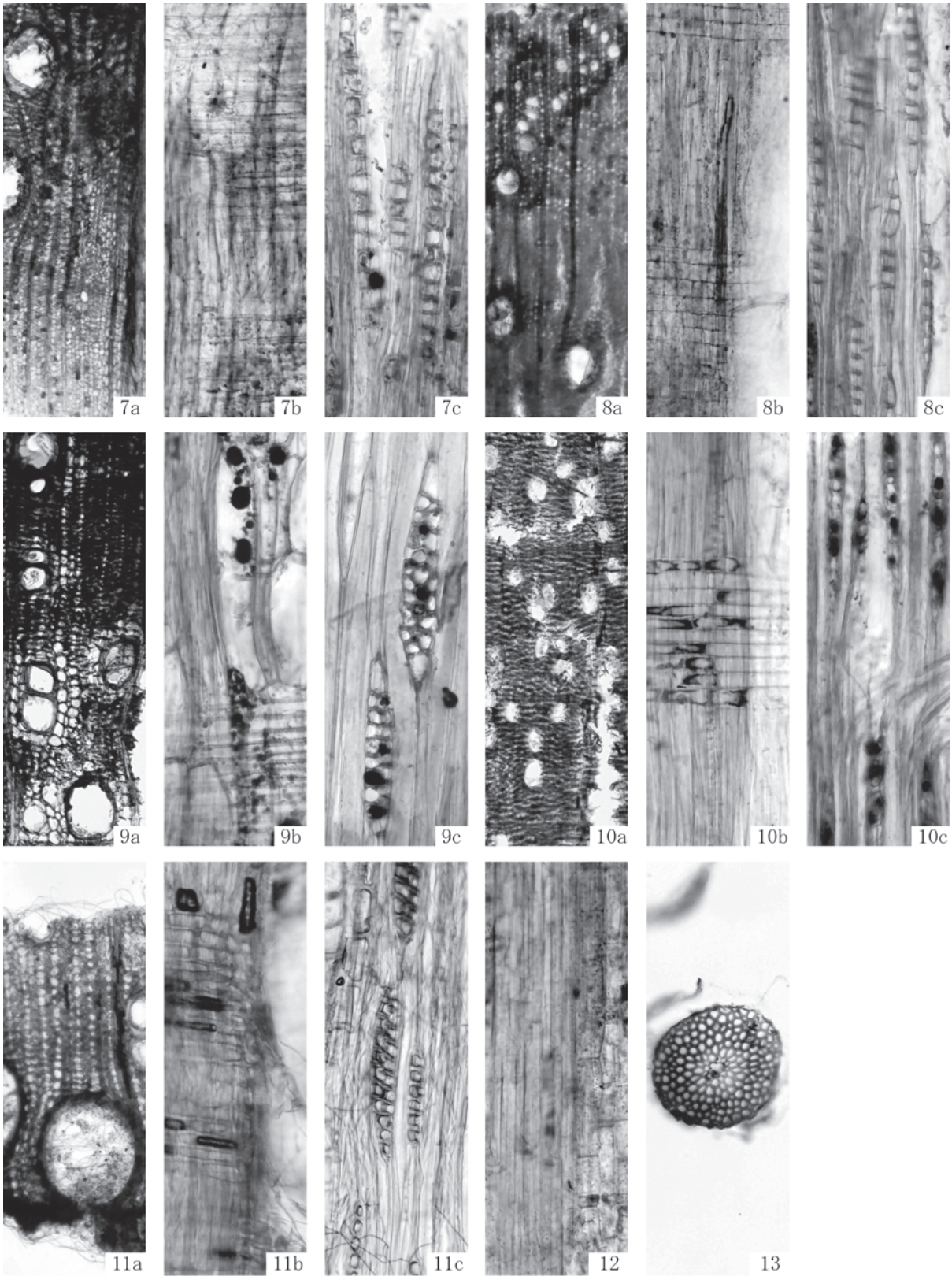
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）,1998, 広葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修）, 海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].



1. マツ属複維管束亜属(935, 遺物No.58;前歯)
2. モミ属(939, 遺物No.46)
3. スギ(967, 遺物No.65)
4. ヒノキ(961, 遺物No.30)
5. ブナ属(984, 遺物No.54)
6. クリ(980, 遺物No.61)
　a：木口面，b：柾目面，c：板目面

100μm:5-6a
100μm:1-4a, 5-6b, c
100μm:1-4b, c

図１２０　和歌山城跡出土木材の顕微鏡写真１



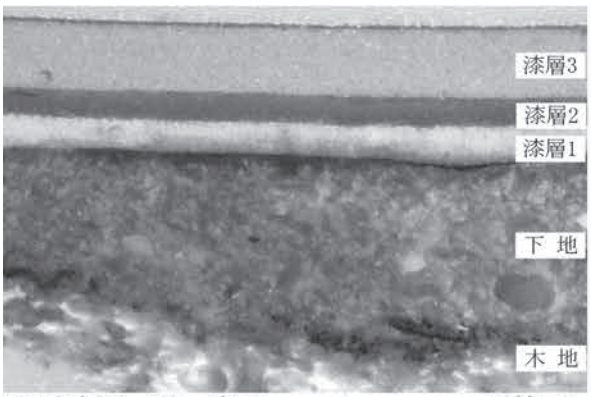
7. ツブラジイ(938, 遺物No.38)
8. スダジイ(940, 遺物No.47)
9. クスノキ科(941, 遺物No.1)
10. トチノキ(990, 遺物No.27)
11. トネリコ属(988, 遺物No.29)
12. イネ科タケ亜科(977, 遺物No.16)
13. シュロ属(-, 遺物No.g)

100 μm:7-11a
100 μm:7-11b, c, 12, 13

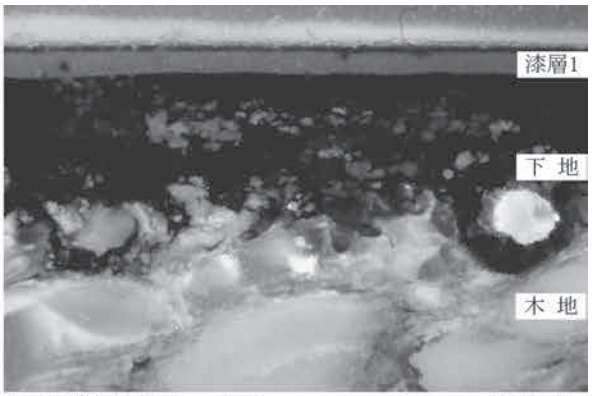
a：木口面，b：柾目面，c：板目面, 12：縦断面，　13横断面

図１２１　和歌山城跡出土木材の顕微鏡写真２

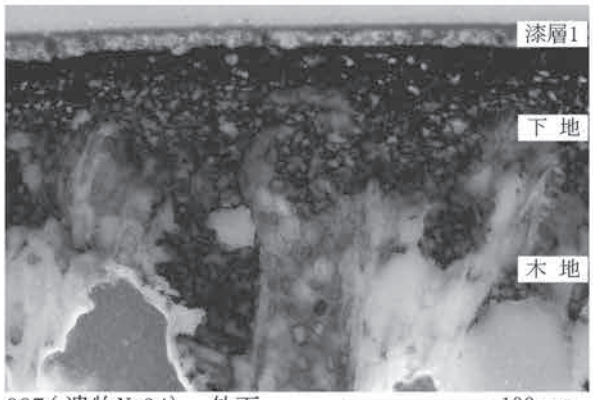
和歌山城跡出土漆器の漆塗膜断面（落射蛍光）



988（遺物No.29）　内面　100μm



986（遺物No.33）　外面　100μm

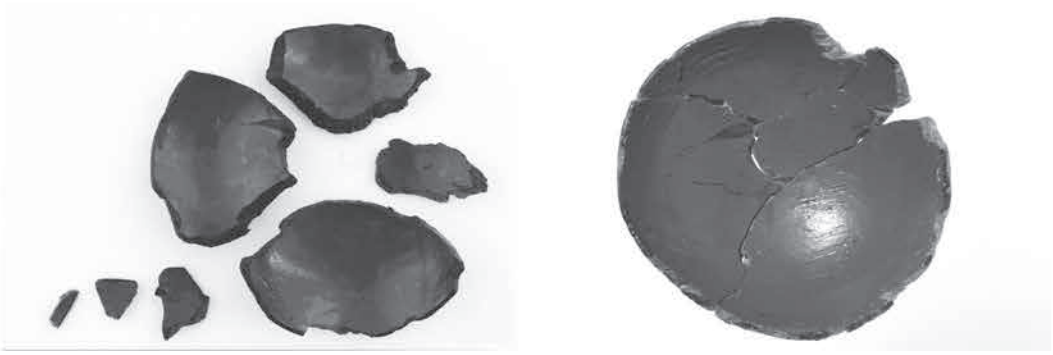


987（遺物No.34）　外面　100μm

保存処理前・処理後写真

939（遺物 No. 46）（右：処理前、左：処理後）

965（遺物 No. 59）（右：処理前、左：処理後）



984（遺物 No. 54）（右：処理前、左：処理後）

図１２２　和歌山城跡出土漆器の漆塗膜断面（落射蛍光）・保存処理前 処理後 写真

第６節　考察

Ⅰ．各遺構面の時期比定

各遺構面上の整地土や、各遺構面で検出した遺構から多量の遺物が出土した。土器類では陶磁器、土師器、土師質土器、瓦質土器が出土している。この中でも最も多いのが陶磁器で、時期的には当然なことであるが肥前系陶磁器が圧倒的に多い。瓦類も相当量が出土しており、出土遺物のコンテナ数の約半分を占める。金属製品では釘が多く、銭（宋銭・寛永通宝）、槍先、キセル、簪なども出土している。木製品では下駄、漆椀、箸が目だって多い中、荷札も１点出土しているが、判読不能である。石製品は少量で、硯、砥石など、土製品では土人形、箱庭道具、ままごと道具、泥面子などが出土している。また、貝類、獣骨なども廃棄土坑から出土している。

第１遺構面検出の遺構で水琴窟がある。水琴窟からの出土の緑釉瓶掛（８）や伏せ鉢（14）として転用されていた堺擂鉢は 19 世紀前半と考えられる。遺構６からの染付の蓋（22）や鉢（25）、擂鉢（28）も 18 世紀後半から 19 世紀前半の時期に帰属すると思われる。第１遺構面の時期は絵図の 19 世紀前半以降と齟齬はないと考えられる。

第２遺構面で最も遺物量の多い遺構 96 からは、青磁染付蓋（80･81）、蛸唐草の図柄の染付（117･119）などが見受けられ、広東碗（98 ～ 101）なども出土している。その一方では、17 世紀前半と考えられる肥前系陶器（124・125）なども含まれる。遺構 101 の大型土坑からの出土遺物は 18 世紀中頃から 18 世紀後半の遺物で纏まる。中には土瓶（214･215）や瀬戸美濃系の水瓶（218）などは 19 世紀に入ってもいいような遺物も出土している。その反面、苑池状遺構（遺構 212）からは、肥前系陶器碗（165 ～ 168）、瀬戸美濃系灰釉皿（169）といったような 17 世紀前半代と考えられる遺物、焼土充填土坑群（遺構 115）からは 17 世紀代と考えられる肥前系染付や青磁・白磁（174・175・178 ～ 182）が出土している。また、16 世紀代の中国製染付（176・177）も出土している。しかし、18 世紀中頃と考えられる刷毛目唐津（183）も出土している。この状況は、第３遺構面で検出すべき遺構なのか、第３遺構面の時期の火災で、第２遺構面の造成時に火事場整理として投棄したものか。

第２面検出の遺構から出土する遺物は、最も新しい遺物で 19 世紀前半までの遺物が見受けられ、古い時期の遺物では 17 世紀のものも出土している。故に、上限は古絵図から 18 世紀中頃、下限は遺物から 19 世紀前半と考えられる。

第３遺構面では地下式倉庫（遺構 360・361・451）を３棟検出している。まず、遺構 360 からの出土遺物には肥前系染付碗（364 ～ 368）があり、これらの時期は 17 世紀中頃から後半、肥前系施釉陶器（381 ～ 393）は 17 世紀の第３四半期までの時期と考えられる。遺構 361 からも同様な時期の遺物が出土している。なお、中国製の染付もこれら２棟の地下式倉庫から若干ではあるが出土しており、肥前系遺物よりやや古く 16 世紀末から 17 世紀初頭の時期で、伝世品であろう。遺構 451 からは口縁部が肥厚する土師皿（484 ～ 488）が出土している。この土師皿は、他の遺構の出土傾向から 17 世紀前半の遺物と共伴する。志野向付（491･492）などは 17 世紀初頭、備前焼擂鉢（493）も同様の時期と思われる。土坑状遺構（遺構 442）は 17 世紀代、18 世紀代の遺物が混ざるが 18 世紀中頃を前後する時期でおさまるものと思われる。苑池状遺構（遺構 437）の遺物は 18 世紀末から 19 世紀に帰属する遺物も見受けられるが、何れも上層からの出土で、上層は第２面の整地造成土であるため、19 世紀代の遺物は混入である。第３遺構面の時期は 17 世紀初頭あるいは前半の遺物も含まれるが、概ね、17 世紀中頃から 18 世紀中頃を前後する時期と

思われる。

第４遺構面は廃棄土坑（遺構 555）から多量の遺物が出土している。肥前系陶器碗・皿（616 ～ 628）は 17 世紀前半、美濃窯の織部・志野（638 ～ 643）といった 17 世紀初頭とする遺物も数点出土した。また、大型土坑（遺構 518）で出土している肥前系染付は 17 世紀代から 18 世紀前半の時期に帰属する。従って、第４面は、遺物の時期範囲でいえば 17 世紀初頭から 18 世紀中頃といえる。ただ、17 世紀中頃以前の遺物が一定量纏まって出土しているため、17 世紀第２四半期には屋敷地があった可能性が高い。

以上、遺物量の多い遺構で遺構面の時期を判断してきたが、混入遺物もあるため大筋を記した。

Ⅱ．屋敷地内の遺構

１　地下式倉庫

今回の調査の第３遺構面において、地下式倉庫を３棟検出した。検出時の形状は、隅丸方形を呈していたが、構築時は何れも長方形であったと考えられる。規模は、大きいもので長辺が 10 m以上、短辺が約４ｍで、残存の深さは、最も深いもので約 1.6 ｍであった。

３棟の地下式倉庫のうち、２棟は長辺を東西方向に向け、階段状の昇降部をもち、残りの１棟は長辺を南北に向け、梯子状の昇降施設を取り付けた痕跡を確認できた。配置や形態が異なっている背景には、その倉庫を造った武家が異なっていることに起因すると思われ、検出位置から前者の２棟は大高家、後者の１棟は佐野家が作ったものと考えられる。ただし、南側に昇降部をもつことで共通しているが、この点についてはおそらく、双方とも暗い倉庫内にできるだけ光を取り入れる工夫を施したためと考えられる。

また、本調査地の北側で実施した県５次調査においても、地下室状遺構（遺構 423）として類似した遺構が検出されている。この遺構には、明確な昇降施設は確認されていないが、北壁の内側には片岩積みの石組が 0.5 m遺存していた。このことから、今回検出の地下式倉庫の内側に石積みを施し、昇降部の階段や床面には石が貼られ堅固な造作を行っていた可能性が高い。しかし、防湿という観点からは、石より板貼りの方が良いようにも思えるが、腐食などのデメリットもあり、適材適所に利用していたのかもしれない。

２　苑池遺構

屋敷地内の庭園の存在を示す遺構として苑池状遺構を２箇所で検出した。絵図史料の記載から双方ともに安藤家屋敷地の庭園遺構と考えられる。苑池状遺構１としたものは第２遺構面、苑池状遺構２としたものは第３遺構面で検出した。苑池状遺構２は規模が大きく、17 世紀中頃から 18 世紀中頃には屋敷地裏の南西部一帯が庭園となっていたことが窺える。この庭園は 18 世紀中頃から 19 世紀の段階で埋められたようである。その後、苑池状遺構１が作られるが、苑池状遺構２に比べれば規模が小さく、位置的には、屋敷地の中心にあたる場所に所在することから中庭的な性格の庭と捉えられる。

安藤家の屋敷地は、19 世紀前半以降は佐野家の屋敷地に統合され、庭園に関係する遺構は水琴窟が２基が認められるだけとなる。しかし、「紀伊国名所図会」からは、東長屋門から式台までの南隅と北隅には土塀で囲繞された植栽がみえる。また、大正時代の佐野家屋敷地跡に該当する場所の南部から東部に林が見え、大規模な庭園であった名残の可能性もある。紀州藩老中格の屋敷地としてふさわしい景観であったと考えられる。

Ⅲ．屋敷地の変遷

１　絵図からの武家屋敷地の変遷

本調査において最も大きな成果は、時期ごとの屋敷地区画の施設を検出したことに尽きる。幸い、今回の調査地がどのような屋敷地区画の変遷を辿ったかという点において、江戸時代に描かれた絵図により検証することができた。

絵図から読みとれたのは、調査地一帯には、17 世紀中頃から 18 世紀前半までは佐野、大高、安藤の３家の武家が居を構え、18 世紀中頃には佐野、安藤の２家となり、19 世紀前半からは佐野の１家の屋敷地となっている。

この内、佐野家は絵図にみられる当初から存在する武家で、本調査のキーとなる武家である。佐野家の屋敷地は 17 世紀中頃には検察庁敷地の北西の一角であったものが、18 世紀中頃にはかつての大高家の敷地を取込み、調査地の西側半部を占めている。更に 19 世紀中頃には安藤家の屋敷地も吸収して、現在の和歌山地方合同庁舎・検察庁を併せた敷地全体に広がっている。この状況は発掘調査で判明した屋敷地区画施設の構築と廃棄の状況からも傍証できる。この頃の佐野家は目覚ましい出世を遂げ、紀州藩の老中格となっていた武家の屋敷地にふさわしい広さであったことが窺えられる。また、佐野出羽守（佐野伊左衛門）は文久３年４月（1863 年）の勝海舟が伝法御殿来訪の際に久野丹波守（紀州藩田丸城代・紀州藩家老）、岡野平太夫（紀州藩家老）ほか海防掛かり数人が対応し、友ヶ島防御について議論を行っている。

２　検出遺構からの武家屋敷地の変遷

屋敷地を区画していたと考えられる施設は、小結の項でも若干記述したが、ここではもう少し詳細に検討したい。

屋敷地区画施設は、第１遺構面を除く第２遺構面～第４遺構面の各々の面で確認した。これらの区画施設にはいくつかの種類があり、それらが併存して屋敷地を区画していたと考えられる。

第１遺構面は調査地全体が佐野家の屋敷地となった時期である。この状況は、多少の誇大表現はあるとしても「紀伊国名所図会」からも佐野家の長屋門に取付く土塀が確認できる。今回の調査地は佐野家の屋敷地を取り巻く土塀には及んでいないと考えられ、敷地を区画する遺構、あるいはその痕跡さえ確認できなかった。

第２遺構面では調査区中央やや東寄りで、南北方向の土塀基礎（遺構 86）を検出した。この遺構は石材を３列に敷き並べ、両側は結晶片岩で外側に面を造り、中央は扁平な砂岩を２m弱間隔に配し、芯柱の礎石としている。この状況から明らかに東と西の屋敷地を区画する施設である。

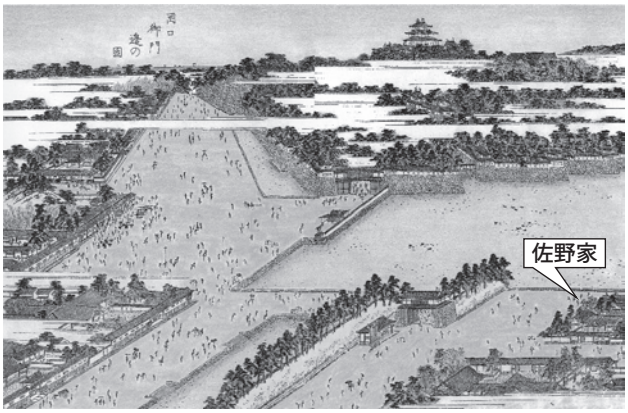


図１２３　紀伊国名所図会「岡口御門辺の図」
城下町の風景 –カラーでよむ「紀伊国名所図会」–　から転載

東に安藤家、西に佐野家の屋敷地があったとされる 18 世紀中頃～ 19 世紀前半の時期である。

なお、3-1 区や 3-2 区で検出された土坑状遺構から大振りな砂岩、片岩などが投棄された状態で検出されている。これらの石

材は屋敷地を区画する土塀基礎の石積みに使用されていた可能性も考えられる。

第３遺構面では、第２遺構面で検出した土塀基礎（遺構 86）の直下で南北方向の屋敷地を区画する溝（遺構 436）を検出した。溝の東西には等間隔で柱穴が並んでいることから、屋敷地は排水路を兼ねた屋敷地区画溝で区画され、その溝の両側に各屋敷が塀を構築していたものと思われる。この施設の南側への延長は柱穴列（屋敷地境界柱穴列１）となり、調査区の南端に達している。また、調査区の西端においても、遺構 436 と同様な東西方向の溝（遺構 368）を検出し、両側に柱穴が並ぶ状況を確認している。

上記の状況から、この時期の屋敷地区画には、排水路の両側に木塀、あるいは木塀のみの施設が考えられ、南北方向の溝（遺構 436）を境に東に安藤家、西側に大高家、佐野家の屋敷が存在する。なお、大高家と佐野家は東西方向の溝（遺構 368）によって区画されている。時期は３家が存在した 17 世紀中頃～ 18 世紀中頃と思われる。

第４遺構面では、南北方向の屋敷地境界溝（遺構 541）と西側に隣接して同方向の屋敷地境界柱穴列（遺構 539）を検出した。南北方向でも屋敷地境界柱穴列（遺構 538）を屋敷地境界溝（遺構 368）の直下で検出した。第３遺構面で検出した柱穴列と同様に、南北方向は排水路に木塀、東西方向は木塀の可能性が考えられる。

この面で検出した区画施設は、第３遺構面と同じ場所を踏襲しているが、東西方向では違った構造となり、屋敷地区画の施設構造が変わったことを示すよい資料である。

この検出面においても、第３遺構面と同様な位置および方向性で３家の屋敷地に区画されていることになる。しかしながら、絵図からは 17 世紀中頃以前の区画が読み取ることのできる資料がないため、何家の屋敷地であったのかは不明である。

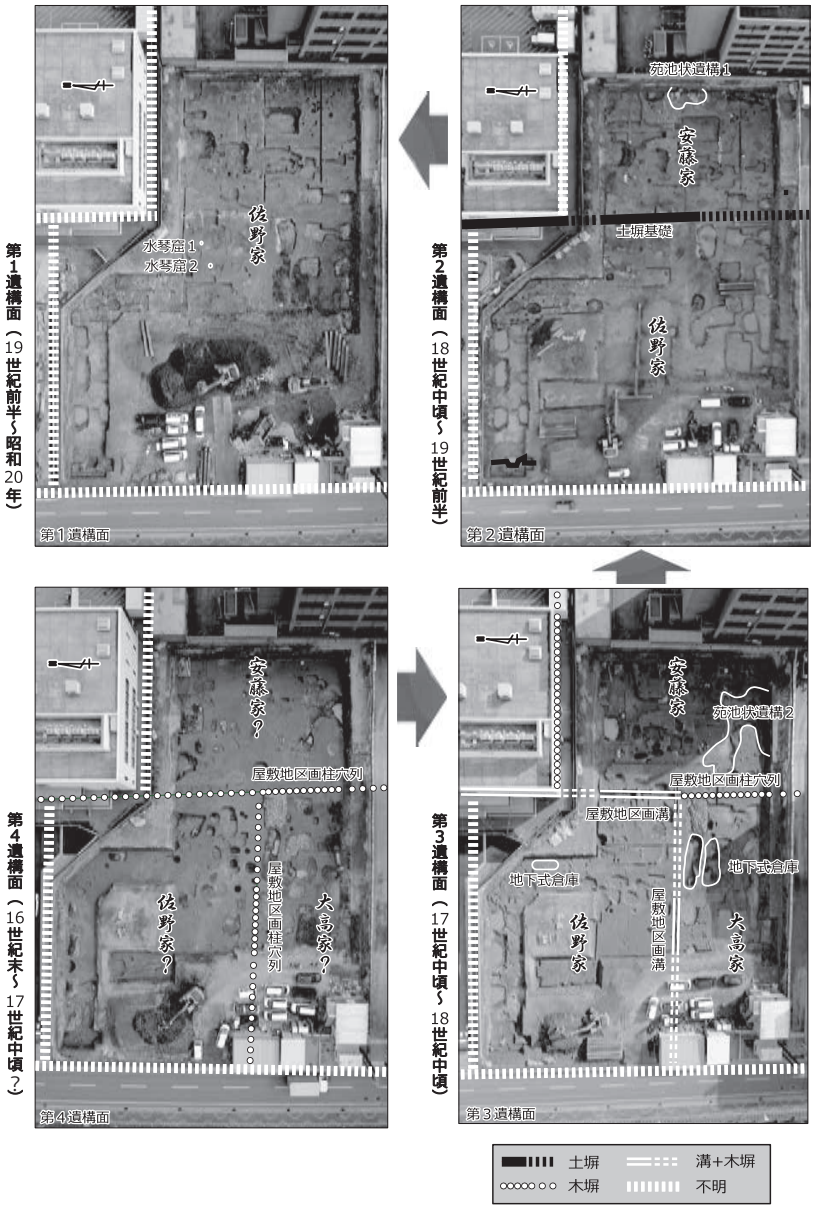


図１２４　屋敷地境界の変遷

観察表１　土器類

※産地は曖昧なものについては空欄。

報告書 No.	登録 No.	地区	大区画	小区画	遺構 No.	検出面	層位	産地	種類	器種	残存率	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	備考
1	T-375	1 区	J13	k15		整地土	第 1 層	肥前系	染付	小碗	40%	7.4	4.1	2.8	外面は草花文。畳付に砂付着。反転復元。
2	T-366	1 区	J13	e19		整地土	第 1 層	肥前系	染付	小鉢	30%	9.8	4.4	4.6	口錆。畳付き釉掻取り。内外面に吹き墨。体部中位反転復元
3	T-365	1 区	J13	d24		整地土	第 1 層	肥前系	染付	蓋	55%	9.8	3.1	摘み 4.2	外面は松に花文。草花文。内側目に四方襷文が巡る。内面中央に二重圏線内松竹梅。
4	T-375	1 区	J13	k15		整地土	第 1 層	肥前系	染付	蓋	70%	内径 7.1 外径 8.0	(1.4)	-	上面に草花文。摘みは欠損。壺の蓋か？
5	T-370	1 区	J13	a19		整地土	第 1 層	肥前系	染付	蓋	100%	2.8	0.7	-	瓶の蓋か？上面に花卉文。
6	T-399	1 区	J13	e21		整地土	第 1 層		染付	盃	98%	6.0	3.0	2.4	外面に花卉文（牡丹）。外底面に『大日本竹泉製』の酒造マーカーの銘。
7	T-046	1 区	J13	h・i17	70	第 1 面		丹波	焼締陶器	鉢	98%	43.6	23.8	20.2	外面口縁端部は指で大きな刻みを入れ加飾。体部下端に三足を貼り付ける。外面上方には粘土を貼り付け、中央に牡丹文、両脇に唐草文？を貼付ける。
8	T-034	1 区	J13	i17・h17 水琴窟西側	70	第 1 面		瀬戸美濃系	緑釉陶器	瓶掛け	50%	-	(13.8)	14.8	外面緑釉を施釉。体部内面に泥醤。底部から直径 5 mm の穿孔 2 箇所あるが、片方は貫通していない。最大胴径：18.2cm。一部反転復元
9	T-040	1 区	J13	i17・18	78	第 1 面			土師器	皿	30%	6.0	1.3	-	よく水篩されている。煤の付着は認められない。反転復元。
10	T-040	1 区	J13	i17・18	78	第 1 面			土師器	皿	30%	8.4	1.4	-	よく水篩されている。煤の付着は認められない。反転復元。
11	T-040	1 区	J13	i17・18	78	第 1 面		肥前系	施釉陶器	碗	10% 以下	8.6	(3.7)	-	灰釉を施釉。口縁玉縁状となる。反転復元
12	T-040	1 区	J13	i17・18	78	第 1 面		備前焼	焼締陶器	鉢	10% 以下	20.0	(4.5)	-	口縁部は玉縁状となる。反転復元。
13	T-685	1 区	J13	j17・18	78	第 1 面		丹波？	施釉陶器	甕底部	10%	-	(10.1)	19.2	外面は褐釉、内面は灰釉を施釉。底部に焼台痕。
14	T-047	1 区	J13	j17・18	78	取上 1 ～ 4		堺	焼締陶器	擂鉢	95%	42.4	18.0 ～ 17.0	22.0	水琴窟として転用していたため見込みには 5 ㎝内外のほぼ円形の穿孔あり。口縁部に片口を造るために巾 8.5 センチ間隔の指の挟込みの痕 2 箇所あり。片口はあまりも形骸化してる。擂目は左回りに 7 本 / 3 ㎝。体部外面はヘラ状工具によるケズリ。見込みには三角状の擂目と焼成時の 3 箇所の焼台痕跡。
15	T-003	1 区	J13	jk14	4	第 1 面			染付	皿	20%	-	(2.2)	7.0	外底部は蛇の目凹型高台。内外の施文はプリント。反転復元。
16	T-003	1 区	J13	jk14	4	第 1 面			染付	小碗	40%	-	(3.6)	3.2	外面の施文はプリント。反転復元。
17	T-003	1 区	J13	jk14	4	第 1 面			焼締陶器	擂鉢	10% 以下	-	(3.2)	23.7	櫛目の単位 7 条 /2.7㎝。反転復元。
18	T-045	1 区		m17	431	第 1 面			磁器	樽	45%	5.6	(6.8)	-	樽型容器。土産物の容器と思われる。昭和か？反転復元。
19	T-045	1 区		m17	431	第 1 面		瀬戸美濃系	施釉陶器	片口か？	25%	13.7	(6.9)	-	瀬戸美濃系？内外面に透明釉を施釉し、口縁端部から内外面に緑釉を流し掛け。内外面に貫入。反転復元。
20	T-045	1 区		m17	431	第 1 面			磁器	器種不明	10% 以下	-	(7.0)	23.0	内外面に褐釉。器面光沢あり。昭和の遺物か？反転復元。
21	T-005	1 区	J13	k13	6	第 1 面		肥前系	白磁	仏飯器	60%	-	(5.8)	4.0	底部は無釉。欠損部があるため白磁ｏｒ染付？反転復元。
22	T-005	1 区	J13	k13	6	第 1 面		肥前系	染付	蓋	30%	-	(3.0)	-	上面に丸文を描く。摘み欠損。段重の蓋か？反転復元。
23	T-005	1 区	J13	k13	6	第 1 面		不明	施釉陶器	蓋	40%	5.6	(1.6)	-	上面は鉄絵と緑釉で加飾する。上面に 1 mm 程度の穴を穿つ。
24	T-005	1 区	J13	k13	6	第 1 面		肥前系	青磁	香炉	15%	-	(6.3)	6.4	内面無釉。底部は無釉。反転復元
25	T-005	1 区	J13	k13	6	第 1 面		肥前系	施釉陶器	鉢	20%	-	(7.8)	-	外面に 8 等分の草花文の絵付か？内底面に草花文を描く。畳付の釉は削り取り。反転復元。
26	T-005	1 区	J13	k13	6	第 1 面			施釉陶器	徳利	30%	-	(11.2)	8.6	外面に褐釉を施釉。底部は無釉。「屋」のヘラ描き。通い徳利か？反転復元。
27	T-005	1 区	J13	k13	6	第 1 面			施釉陶器	徳利	30%	-	(7.8)	7.8	外面褐釉を施釉。底部は無釉。一部反転復元。
28	T-005	1 区	J13	k13	6	第 1 面		堺・明石系	焼締陶器	擂鉢	20%	32.0	(11.4)	-	櫛目の単位は 10 条 /3.4㎝。反転復元。
29	T-434	1 区	J13	b19		整地土	第 2 層	肥前系	染付	皿	70%	13.2	3.3	8.0	外面に退化した唐草文。内面網文。内底面に五弁花。
30	T-451	1 区	J13	b18		整地土	第 2 層	肥前系	染付	蓋	75%	9.6	3.2	-	外面に草花文、摘み内に渦福。内面口縁に四方襷、中央に二重圏線内スタンプによる五弁花。摘み 4.0㎝。
31	T-436	1 区	J13	a ～ f・ 23 ～ 25		整地土	第 2 層	肥前系	染付	碗	40%	11.0	6.0	4.2	外側面に雪輪文、高台際に雷文帯状の文様が巡る。内面口縁に四方襷。反転復元。
32	T-446	1 区	J13	c20		整地土	第 2 層	肥前系	染付	碗	30%	11.8	6.8	4.7	外面に一重網目文。内底面二重圏線内に葉文。畳付は釉掻き取り。
33	T-420	1 区	J13	i・j16・17		整地土	第 2 層	肥前系	青磁染付	碗	25%	12.4	6.1	4.8	内面口縁に四方襷。内側面から内底に松文。外底面は二重方形枠内に渦福。
34	T-427	1 区	J13	i18・19		整地土	第 2 層	肥前系	青磁染付	碗	30%	-	(5.5)	4.4	内底面は二重圏線内に草花文。口縁部は欠損しているが、内面に四方襷の端がみられる。
35	T-408	1 区	J13	d23		整地土	第 2 層	京・信楽系	施釉陶器	小碗	25%	8.8	5.5	2.9	内外面灰釉。高台無釉。外面に赤絵具と青絵具による上絵付け。内外面に細かい貫入。反転復元。
36	T-429	1 区	J13	k・l14・15		整地土	第 2 層	肥前系	施釉陶器	向付	20%	13.6	4.5	4.6	絵唐津向付。内面に鉄絵。外面中位から内面に灰釉。内底面に胎土目。底部外面ちりめん皺。
37	T-406	1 区	J13	d・e22		整地土	第 2 層	肥前系	施釉陶器	小碗	70%	7.3	3.6	3.3	底部糸切。外面中位から内面に灰釉を施釉。体部中位反転復元。
38	T-441	1 区	J13	c19		整地土	第 2 層		施釉陶器	蓋	100%	7.0	2.0	-	土瓶の蓋。外面は褐釉を施釉。内面は無釉。摘み 1.7 × 1,1㎝。
39	T-477	1 区	J13	c24・25		整地土	第 2 層		施釉陶器	蓋	100%	7.4	1.7	-	土瓶の蓋。外面は褐釉を施釉。内面は無釉。摘み 1.8 × 1.0㎝。
40	T-452	1 区	J13	f19		整地土	第 2 層	肥前系	染付	蓋	100%	3.7	1.4	-	瓶の蓋か？上面に蝶を描く。
41	T-451	1 区	J13	b18		整地土	第 2 層		施釉陶器	受皿付灯明具	80%	6.2	8.0	4.8	外面に鉄釉を施す。底部糸切。反転復元。
42	T-434	1 区	J13	b19		整地土	第 2 層	瀬戸美濃系	施釉陶器	鉢	45%	15.3	8.7	6.9	外面中位から内面に灰釉施釉。器面全体に貫入。口縁端部が外面外に突出。反転復元。
43	T-434	1 区	J13	b19		整地土	第 2 層	堺・明石系	焼締陶器	擂鉢	80%	25.0	10.0	12.0	内底面に放射状の櫛目。底部に簀子状の圧痕有り。内底は使用のため摩耗している。
44	T-310	1 区	J13	c24	96	第 2 面			土師器	皿	100%	7.1	1.4	3.4	内面は透明釉を施釉。底部糸切。
45	T-329	1 区	J13	d24	96	第 2 面			土師器	灯明皿	100%	6.9	1.3	3.2	内面は透明釉を施釉。底部糸切。煤付着の痕跡は認められないが灯明皿として使用の皿である。
46	T-329	1 区	J13	d24	96	第 2 面			土師器	灯明皿	80%	7.5	1.6	3.3	内面は透明釉を施釉。底部糸切。煤付着の痕跡。
47	T-278	1 区	J13	a17	96	第 2 面			土師器	灯明皿	80%	7.2	1.4	3.4	透明釉がかかる。底部糸切。口縁端部に煤付着。
48	T-329	1 区	J13	d24	96	第 2 面			土師器	灯明皿	90%	6.9	1.4	4.2	内面は透明釉を施釉。底部糸切。煤付着の痕跡。

報告書No.	登録No.	地区	大区画	小区画	遺構No.	検出面	層位	産地	種類	器種	残存率	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	備考
49	T-312	1区	J13	c17・18	96	第2面			土師器	灯明皿	85%	6.5	1.2	4.5	内外面の口縁端部に煤付着。底部糸切。
50	T-314	1区	J13	c18	96	第2面			土師器	灯明皿	50%	9.0	1.6	4.8	内外面の口縁端部に煤付着。底部糸切。
51	T-310	1区	J13	c24	96	第2面			土師器	灯明受皿	98%	6.1	1.2	3.2	内面は透明釉を施釉。底部糸切。
52	T-278	1区	J13	a17	96	第2面			土師器	灯明受皿	80%	7.1	1.4	3.6	透明釉がかかる。底部糸切。口縁端部に煤付着。
53	T-329	1区	J13	d24	96	第2面			土師器	灯明受皿	25%	9.2	1.9	-	内面および外面口縁端部まで透明釉を施釉。口縁端部に煤付着。釉剥離目立つ。底部糸切。受部径：6.0㎝反転復元。
54	T-289	1区	J13	b・c20	96	第2面			土師器	灯明皿	25%	14.2	2.3	7.6	口縁端部に煤付着。内面は見込みと体部の境を強いナデで凹ます。反転復元。
55	T-333	1区	J13	f24	96	第2面			土師質土器	乗燭	60%	4.3	1.9	2.6	器形は逆台形。灯芯用突起の先に煤付着。無釉のタイプ。反転復元。
56	T-314	1区	J13	c18	96	第2面		京・信楽系	施釉陶器	灯明受皿	45%	10.2	1.7	4.2	内面口縁端部まで施釉。受部径：6.5㎝。底部糸切。反転復元。
57	T-309	1区	J13	b16・17	96	第2面		京・信楽系	施釉陶器	灯明受皿	48%	10.6	2.4	4.6	内面口縁端部まで施釉。反転復元。
58	T-279	1区	J13	a18	96	第2面		京・信楽系	施釉陶器	灯明受皿	48%	(外) 11.4 (内) 7.9	1.4	6.2	外面口縁直下から内面に施釉。煤付着。反転復元。
59	T-233	1区	J13	d・e21	96	第2面		肥前系	染付	皿	25%	13.6	4.1	7.6	外面唐草文(簡略)？内面体部と見込みの境に二重圏線。見込みに五弁花。高台内の文様は不明。高台畳付に砂付着。反転復元。
60	T-318	1区	J13	c23	96	第2面		肥前系	染付	皿	48%	13.2	3.4	7.4	外面に唐草文。体部内面草花文？見込みの二重圏線内は五弁花。畳付の釉掻き取り。畳付に砂付着。反転復元。
61	T-309	1区	J13	b16・17	96	第2面		肥前系	染付	皿	50%	5.4	1.7	7.0	外側面に唐草文、内面に山水文を描く。底部は蛇の目凹型高台。
62	T-310	1区	J13	c24	96	第2面		肥前系	染付	皿	95%	13.8	3.4	8.8	外面には唐草文、内側面には樹木と花を描き、見込みには青海波と帆船を描く。高台は蛇の目凹型高台。高台内は二重方形枠内に壽の字。高台内釉剥ぎ部に重ね焼き痕(チャツ)が円形に巡る。
63	T-314	1区	J13	c18	96	第2面		肥前系	染付	小皿	95%	7.7～7.9	2.2～2.4	3.6	見込みに花卉文。
64	T-301	1区	J13	b23	96	第2面		肥前系	染付	皿	80%	12.8	3.0	6.6	内側面に唐草文、見込み中央に五弁花。見込みは蛇の目釉剥ぎ。高台畳付に砂付着。
65	T-329	1区	J13	d24	96	第2面		肥前系	染付	皿	100%	12.9	3.4	6.5	内側面に唐草文、見込み中央に五弁花。見込みは蛇の目釉剥ぎ。高台畳付に砂付着。
66	T-335	1区	J13	e23	96	第2面		肥前系	染付	皿	48%	12.6	3.9	4.4	内底面蛇の目釉剥ぎ。反転復元
67	T-328	1区	J13	d20・21	96	第2面		肥前系	染付	皿	45%	12.0	3.5	4.4	見込みは蛇の目釉剥ぎ。高台畳付は砂付着。一部反転復元。
68	T-313	1区	J13	c17	96	第2面		肥前系	染付	皿	100%	11.0	3.4	4.6	見込みは蛇の目釉剥ぎ。高台畳付は砂付着。
69	T-313	1区	J13	c17	96	第2面		肥前系	染付	皿	30%	12.0	3.8	4.1	見込みは蛇の目釉剥ぎ。見込みに円形の重ね焼き痕（砂）が認められる。外面の釉は体部半部まで掛かり下方は露胎。反転復元。
70	T-299	1区	J13	b24	96	第2面		肥前系	白磁	稜花皿	40%	13.2	3.2	7.6	口錆。畳付釉掻き取り。高台畳付に僅かに砂付着。反転復元。
71	T-330	1区	J13	d・e23	96	第2面		肥前系	染付	蓋	80%	10.2	3.2	5.9	外面は丸文を描く。丸文は丸の中に「壽」の字。外面の中央には一重方形枠の中に「壽」、内面の中央には丸の中に「壽」を描く。
72	T-320	1区	J13	d・e21	96	第2面		肥前系	染付	蓋	60%	10.0	5.6	-	摘み内に人物の文様。内面中央にも文様を描く。丸碗の蓋か？
73	T-281	1区	J13	a16・17	96	第2面		肥前系	染付	蓋	90%	9.9	3.1	-	外面に牡丹、笹文。内面に二重圏線、一重圏線、中央に小さく「寿」の崩し字。丸碗の蓋。摘み径：5.8㎝
74	T-335	1区	J13	e23	96	第2面		肥前系	染付	蓋	90%	9.0	2.6	-	外面柳文。内面中央に鷺文。摘み径4.9㎝。
75	T-299	1区	J13	b24	96	第2面		肥前系	染付	蓋	40%	10.0	3.0	-	外面は山水文。内面は下端直上に四方襷文と二重圏線内に山水文か？。摘みの上端面釉掻き取り。つまみ径4.3㎝。丸碗の蓋。一部反転復元。
76	T-296	1区	J13	b・c・20・21	96	第2面		肥前系	染付	蓋	55%	10.2	3.1	-	外面は草花文。口部内面に四方襷文を巡らす。つまみ径:4.2㎝。見込みに五弁花。一部反転復元。
77	T-310	1区	J13	c24	96	第2面		肥前系	染付	蓋	100%	9.6	3.2	-	外面には摘みの脇に櫛歯文状？と波涛文？を描く。内面は側面に四方襷、中央部に二重圏線、中心に五弁花を描く。丸碗の蓋。つまみ径：4.5㎝
78	T-308	1区	J13	c16・17	96	第2面		肥前系	染付	蓋	90%	9.7	2.7	-	外面には花と蝶の文様。内面には圏線内に鷺の文様を描く。つまみ径:4.1㎝。一部二次焼成か？
79	T-301	1区	J13	b23	96	第2面		肥前系	青磁染付	蓋	60%	9.6	3.6	-	内面端部に四方襷文が巡り、中央は二重圏線内に五弁花。摘み内中央に二重方形枠の渦福？内外面全体に粗い貫入。一部反転復元。
80	T-306	1区	J13	b・c22	96	第2面		肥前系	青磁染付	蓋	100%	8.9	3.6	3.9	内面下端に四方襷文。二重圏線内中央に五弁花。二次焼成を受けている。摘み内の二重方形枠内の銘は不明。
81	T-333	1区	J13	f24	96	第2面		肥前系	染付	碗	60%	9.6	5.0	3.8	丸碗。内外面に菊花文。高台内の銘款は無い。
82	T-310	1区	J13	c24	96	第2面		肥前系	染付	碗	100%	9.4	5.0	3.9	外面には二重網目文。器面全体がボテッとした感がある。高台畳付に砂付着。
83	T-281	1区	J13	a16・17	96	第2面		肥前系	染付	碗	60%	10.0	5.1	4.0	外面は牡丹、笹文。内底面には雲文。
84	T-328	1区	J13	d20・21	96	第2面		肥前系	染付	碗	20%	9.5	6.2	5.9	外面の文様不明。内面無文。高台畳付の釉掻き取り。畳付に砂付着。丸碗。
85	T-308	1区	J13	c16・17	96	第2面		肥前系	染付	碗	30%	12.2	6.6	5.6	外面は花唐草文。見込みは二重圏線内に松竹梅文。内面口縁直下に四方襷文が巡る。高台内に二重方形枠の渦福の銘款。一部反転復元
86	T-303	1区	J13	a・b・17・18	96	第2面		肥前系	染付	碗	35%	14.6	7.1	5.9	内外面に草花文。見込みは蛇の目釉剥ぎ。高台畳付は釉掻き取り。畳付に砂付着。見込みに五弁花。
87	T-299	1区	J13	b24	96	第2面		肥前系	染付	碗	48%	9.0	4.1	4.6	外面に山水文。内底面にも山水文？口縁部端反り。反転復元。
88	T-281	1区	J13	a16・17	96	第2面		肥前系	染付	碗	25%	11.8	5.9	5.0	外面は花唐草を描く。口縁部はやや端反る。見込みは二重圏線中に五弁花。反転復元。
89	T-330	1区	J13	d・e23	96	第2面		肥前系	染付	碗	48%	8.0	5.6	4.4	稜花筒茶碗。外面は花唐草文、見込みには花卉文、内面口縁部直下は四方襷を描く。高台内の銘款は欠損しているが「富貴長春」である。反転復元。
90	T-334	1区	J13	f23	96	第2面		肥前系	青磁染付	碗	35%	11.6	6.1	4.4	内面口縁直下に四方襷。見込みは二重圏線内に五弁花。反転復元。
91	T-314	1区	J13	c18	96	第2面			青磁染付	碗	65%	11.5	5.8	4.5	見込みは丸文内に菊花。高台内は渦福。畳付に砂付着。一部反転復元。
92	T-303	1区	J13	a・b・18・19	96	第2面		肥前系	染付	小碗	60%	7.2	4.0	2.8	外面に山水文を描く。高台畳付は釉掻き取り、砂付着。
93	T-329	1区	J13	d24	96	第2面		肥前系	染付	小碗	95%	7.0	3.8	3.0	畳付に砂付着。外面口縁直下に笹文。内外面の施釉は厚いため外面の染付模様が不鮮明。紅皿か？

報告書 No.	登録 No.	地区	大区画	小区画	遺構 No.	検出面	層位	産地	種類	器種	残存率	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	備　　考
94	T-299	1 区	J13	b24	96	第 2 面		肥前系	染付	小碗	100%	6.8	3.3	2.8	外面口縁部直下一部に鉄釉で笹文を描く。高台畳付に砂付着。紅猪口。
95	T-282	1 区	J13	b23・24	96	第 2 面		肥前系	染付	盃	80%	7.6	3.7 ～ 3.9	2.8	外面体部上方に形骸化した笹文。高台畳付に砂付着。施釉は畳付以外。
96	T-279	1 区	J13	a18	96	第 2 面		肥前系	染付	小碗	65%	6.7	3.5	2.7	外面口縁部直下に鉄釉で笹文を描く。高台畳付に砂付着。紅猪口。
97	T-310	1 区	J13	c24	96	第 2 面		肥前系	白磁	碗	60%	8.9	5.3	3.5	畳付に僅かに砂付着。
98	T-310	1 区	J13	c24	96	第 2 面		肥前系	染付	広東碗	30%	10.3	5.7	5.8	小型の広東碗。外面には牡丹唐草文。内面見込みには一重圏線内に鷺文を描く。内外面に粗い大振りな貫入が認められる。。
99	T-310	1 区	J13	c24	96	第 2 面		肥前系	染付	広東碗	48%	11.0	6.1	3.9	外面は松と宝の文様を描く。見込みは一重圏線内に文様を描くが欠損のため不明。反転復元。
100	T-308	1 区	J13	c16・17	96	第 2 面		肥前系	染付	広東碗	45%	11.2	6.1	6.4	外面には大振りな草花文。内体には一重圏線内に草花文？一部反転復元。
101	T-292	1 区	J13	b・c19・20	96	第 2 面		肥前系	染付	広東碗	55%	10.7	5.8	5.8	外面の文様は丸文ちらし。内底面に目跡。反転復元。
102	T-313	1 区	J13	c17	96	第 2 面		肥前系	染付	碗	45%	-	(3.5)	5.0	外面に粗い貫入。内面体部と見込みの境に二重圏線。見込みに五弁花。高台内に「大明年製」。
103	T-315	1 区	J13	c19	96	第 2 面		肥前系	染付	蕎麦猪口	30%	9.2	6.5	5.6	外面は蛸唐草に宝文？。高台内には二重方形枠内に渦福。畳付は釉削り取り。一部反転復元
104	T-284	1 区	J13	b・c23	96	第 2 面		肥前系	染付	段重	38%	13.0	5.0	9.4	体部側面に蛸唐草文。口縁端部と底部下端は釉掻き取り。反転復元。
105	T-336	1 区	J13	e・f23	96	第 2 面		肥前系	染付	小鉢	48%	7.6	2.8	4.2	体部外面に唐草文？を巡らす。高台畳付は釉掻き取り。反転復元。
106	T-303	1 区	J13	a・b・18・19	96	第 2 面		肥前系	染付	紅猪口	48%	5.0	2.8	1.4	外面は蛸唐草文。畳付釉削り取り。高台の径は極端に小さい。反転復元。
107	T-323	1 区	J13	d22・23	96	第 2 面		肥前系	白磁	紅皿	100%	2.3	1.4	1.2	外面型押し。
108	T-329	1 区	J13	d24	96	第 2 面		肥前系	染付	稜花鉢	80%	16.7	7.8	8.6	芙蓉手。見込みには人物と山水文。側面の窓絵は花卉文。外面の窓絵も花卉文。高台内には二重方形枠に「宣徳年製」の銘。高台畳付に砂付着。
109	T-306	1 区	J13	b・c22	96	第 2 面		肥前系	染付	蓋	30%	17.6	(4.7)	-	壺の蓋と思われ、摘みは欠損する。破砕面に白濁した帯状の痕跡が残る。釉薬を用いた焼継ぎ痕と思われる。施釉は合わせ部以外。外面の文様は花唐草文。反転復元。
110	T-310	1 区	J13	c24	96	第 2 面		肥前系	染付	蓋	60%	3.9	1.6	-	合子の蓋？外面は笹文を描く。つまみ径：0.8㎝
111	T-279	1 区	J13	a18	96	第 2 面		肥前系	染付	蓋	90%	4.4	2.6	-	外面は繊細な唐草文。小壺の蓋。つまみ径：1.3㎝
112	T-329	1 区	J13	d24	96	第 2 面		肥前系	染付	蓋	100%	6.6	0.7	-	容器の蓋 (何の蓋かは不明)。外面に松竹梅の文様を配す。内面は合わせ以外施釉で無文。
113	T-334	1 区	J13	f23	96	第 2 面		肥前系	染付	仏飯器	70%	6.0	5.1	3.4	外面上方に僅かに染付が遺存。一部反転復元。
114	T-337	1 区	J13	p24	96	第 2 面		肥前系	白磁	ミニチュア鉢	60%	4.4	2.2	3.0	外底面以外施釉。一部反転復元。
115	T-337	1 区	J13	p24	96	第 2 面		肥前系	染付	香炉	15%	-	8.3	-	外側面型押しで器形は六角の筒状となる。人物の型押し部分に呉須で濃を入れる雑な仕上げの側面と刺突文状の面が遺存。施釉は外面から内面中位まで。反転復元。
116	T-333	1 区	J13	f24	96	第 2 面		肥前系	青磁染付	灰落し	60%	6.0	8.3	5.0	外面上半は青磁、下半は染付である。内面は口縁直下まで青磁釉が掛かる。口唇部は釉が剥落している。染付の文様は宝文か？一部反転復元。
117	T-310	1 区	J13	c24	96	第 2 面		肥前系	染付	壺	75%	2.2	6.4	4.6	油壺。形態は胴部が張り、頸部が短い。外面は頸部から体部中程まで蛸唐草、体部下半は櫛歯状の文様を描く。高台畳付は砂付着。
118	T-323	1 区	J13	d22・23	96	第 2 面		肥前系	染付	お神酒徳利	100%	1.9	7.9	3.0	外面に笹と花弁の文様。ミニチュアか？高台畳付に砂付着。
119	T-320	1 区	J13	d・e21	96	第 2 面		肥前系	染付	瓶	-	-	(10.6)	8.8	外面蛸唐草文。高台側面二重圏線。外面全体に貫入。高台畳付釉掻き取り。反転復元
120	T-301	1 区	J13	b23	96	第 2 面		肥前系	染付	瓶	20%	-	15.9	8.5	外面施釉。高台畳付は釉掻き取り。畳付に砂付着。肩部に笹文を描く。体部中位に『有吉』の打掻あり。反転復元。
121	T-317	1 区	J13	c16・17	96	第 2 面		肥前系	施釉陶器	碗	35%	11.0	7.3	5.0	胴部に鉄釉で刷毛目。高台際から高台は露胎。見込みに目跡。反転復元。
122	T-279	1 区	J13	a18	96	第 2 面		肥前系	施釉陶器	碗		11.6	5.7	4.7	外面体部下方から内面を施釉。口縁部の一部の内外面に鉄釉垂らし掛け。反転復元。
123	T-300	1 区	J13	b・c18	96	第 2 面		肥前系	施釉陶器	瓶	30%	-	(6.6)	5.0	遺存は体部中程から高台。施釉 (灰釉) は外面体部中程まで、体部下端から高台は露胎。高台内は兜巾となる。一部反転復元。
124	T-289	1 区	J13	b・c20	96	第 2 面		肥前系	施釉陶器	碗	55%	11.2	5.6	4.6	高台内に兜巾。高台際から上方に横方向のケズリ。高台は露胎。一部反転復元。
125	T-290	1 区	J13	b21	96	第 2 面		肥前系	施釉陶器	碗	30%	11.4	6.9	4.4	絵唐津。鉄釉の文様が僅かに遺存。高台内中央に兜巾。高台際から上方に２段の横方向のケズリ。体部中程で膨らみ口縁直下で外方に屈曲する。高台は露胎となる。反転復元。
126	T-320	1 区	J13	e・d21	96	第 2 面		肥前系	施釉陶器	碗	55%	15.1	4.5 ～ 4.8	5.3	全面に細かな貫入。
127	T-309	1 区	J13	b16・17	96	第 2 面		京・信楽系	施釉陶器	灯明皿	48%	8.8	1.8	3.6	内面口縁端部まで施釉。内底面に目跡。一部反転復元。
128	T-328	1 区	J13	d20・21	96	第 2 面		京・信楽系	施釉陶器	灯明皿	100%	9.0	2.3	3.2	内面に円形の浮文を貼付け、ヘラで斜格子状の文様を描く。釉は外面体部半部まで掛かる。
129	T-296	1 区	J13	b・c・20・21	96	第 2 面		京・信楽系	施釉陶器	碗	48%	9.3	5.0	3.7	遺存破片では絵付けは認められない。
130	T-286	1 区	J13	b19	96	第 2 面		京・信楽系	施釉陶器	碗	55%	9.0	5.0	3.2	小杉碗。遺存破片では絵付けは認められない。
131	T-329	1 区	J13	d24	96	第 2 面		京・信楽系	施釉陶器	碗	48%	8.6	5.1	3.2	小杉碗。外面に鉄釉で若杉２本を描く。一部反転復元。
132	T-301	1 区	J13	b23	96	第 2 面		京・信楽系	施釉陶器	碗	50%	10.0	6.0	3.5	小杉碗。鉄絵で若杉文様を２本を描く。
133	T-329	1 区	J13	d24	96	第 2 面		瀬戸美濃系？	施釉陶器	碗	25%	9.8	5.4	3.8	灰釉を施釉。内外面粗い貫入。口縁は端反。反転復元。
134	T-299	1 区	J13	b24	96	第 2 面		肥前系？	施釉容器	碗	25%	9.4	5.8	3.2	高台は露胎。一部反転復元。
135	T-323	1 区	J13	d22・23	96	第 2 面		京・信楽系	施釉陶器	碗	65%	9.2	6.4	3.0	内面から外面体部まで施釉し、口縁内外面に緑釉を施釉。高台は露胎となる。一部反転復元。施釉に剥離が目立つ。二次焼成か？
136	T-283	1 区	J13	b22	96	第 2 面		瀬戸美濃系？	施釉陶器	碗	90%	8.0	5.5	3.2	外面は鉄釉と染付で形骸化した花弁？文様を３箇所に描く。内外面に細かい貫入。高台は露胎。口錆。
137	T-303	1 区	J13	a・b・18・19	96	第 2 面		京・信楽系？	施釉陶器	稜花皿	48%	13.0	2.8	5.0	内外面に細かい貫入。口縁部内外面に緑釉を施釉。口縁端部を内側に折り稜花とする。一部反転復元。
138	T-333	1 区	J13	f24	96	第 2 面		瀬戸美濃系	施釉陶器	蓋	90%	10.4	3.1	-	内外面に貫入。施釉は長石釉に鉄釉で絵付け、口縁一部に緑釉を漬け掛け。つまみ径：4.0㎝。
139	T-320	1 区	J13	d・e21	96	第 2 面		瀬戸美濃系	施釉陶器	輪花皿	65%	11.9	2.9	4.6	高台畳付釉掻き取り。器面全体に貫入。一部反転復元
140	T-318	1 区	J13	c23	96	第 2 面		瀬戸美濃系	施釉陶器	碗	70%	10.8	5.7	3.8	内外全面に細かい貫入。畳付の釉掻き取り。高台畳付に砂付着。反転復元。
141	T-323	1 区	J13	d22・23	96	第 2 面		肥前系	施釉陶器	盃	45%	7.4	3.7	3.4	褐釉漬け掛け。反転復元。
	T-335	1 区	J13	e23	96	第 2 面		肥前系	施釉陶器	盃	48%	7.4	3.8	4.0	775 と接合 (同一個体)。反転復元。

報告書 No.	登録 No.	地区	大区画	小区画	遺構 No.	検出面	層位	産地	種類	器種	残存率	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	備考
142	T-306	1 区	J13	b・c22	96	第 2 面		瀬戸美濃系	施釉陶器	盃	30%	7.6	3.4	4.4	灰釉を施釉。施釉は体部外面から内面。内外面に細かい貫入。反転復元
143	T-337	1 区	J13	p24	96	第 2 面		瀬戸美濃系	施釉陶器	片口鉢	65%	17.2	9.8	8.8	外面と内面に黄釉を施釉。高台は露胎となる。内底面に目跡。片口の部分は欠損。一部反転復元。
144	T-282	1 区	J13	b23・24	96	第 2 面			施釉陶器	蓋	90%	(外) 7.6 (内) 6.0	1.5	-	鉄釉土瓶の蓋。つまみ：1.7 × 0.9㎝。
145	T-323	1 区	J13	d22・23	96	第 2 面			施釉陶器	蓋	100%	5.0	2.0	3.3	土瓶の蓋。外面に鉄釉を施釉。摘みは五弁花風。
146	T-282	1 区	J13	b23・24	96	第 2 面			施釉陶器	行平鍋	10% 以下	17.8	-	-	内外面に細かい貫入。釉はやや緑色に発色。把手断面は潰れた六角形を呈し、上面は型押しの文様。文様は不明。裏面は無文。反転復元。
147	T-303	1 区	J13	a・b・18・19	96	第 2 面		丹波焼	施釉陶器	徳利	10%	3.4	(13.3)	-	遺存は口縁部から肩部と体部上方の一部。外面に鉄釉を施釉。肩部から下方は二次焼成を受ける。一部反転復元。
148	T-309	1 区	J13	b16・17	96	第 2 面			施釉陶器	鍋	95%	20.0	14.5	7.2	外面体部中程から内面に施釉。蓋受け端部は露胎となる。底部脇に団子状の 3 個の脚が付く。口唇部に半楕円形の把手が対象位置に付く。
149	T-337	1 区	J13	p24	96	第 2 面		瀬戸美濃系	施釉陶器	鉢	10% 以下	24.8	(9.2)	-	内外面に灰釉を施釉。内外面に細かい貫入。口縁部の一部に鉄釉垂し掛け。二次焼成をうける。反転復元。
150	T-310	1 区	J13	c24	96	第 2 面		大谷焼？	施釉陶器	乗燭	85%	4.9	6.7	4.8	外面および内面に褐釉を施釉。口唇部に灯芯出しを凹ませる。底部糸切。
151	T-329	1 区	J13	d24	96	第 2 面		堺・明石系	焼締陶器	擂鉢	65%	20.0	6.9	10.0	小型の擂鉢。見込みにクロス状の刷毛目。片口は幅約 3 ㎝で押しつける程度。櫛目の単位は 7 本 /1.5㎝。底面には簀の子状の痕跡が付く。
152	T-310	1 区	J13	c24	96	第 2 面		瀬戸美濃系	施釉陶器	植木鉢	90%	9.2（外径） 11.0	6.0	5.3	体部外面および内面口縁直下まで灰釉を施釉。見込み中央に径約 1.0㎝の穿孔。高台は露胎。
153	T-329	1 区	J13	d24	96	第 2 面		京・信楽系	施釉陶器	徳利	80%	-	(13.6)	6.8	口縁部から頸部、体部の上方は欠損。外面は鉄釉で葉文を描く。底面に「ニト」の墨書。反転復元。
154	T-315	1 区	J13	c19	96	第 2 面		瀬戸美濃系	施釉陶器	甕	70%	16.0	13.5	10.4	褐釉を内外面に漬掛け。高台は露胎。鉄釉を胴部対象位置 4 箇所に流し掛け。見込みと高台に重ね焼きの痕跡。
155	T-309	1 区	J13	b16・17	96	第 2 面			土師質土器	五徳	20%	13.5	8.8	16.5	口縁内面に煤付着。外面型押しで、頸部に亀甲文。頸部と体部の境に径 1.5㎝程度の穿孔が 6 つあったと思われる。内面頸部下半はきついナデ。反転復元。
156	T-333	1 区	J13	f24	96	第 2 面			土師質土器	風炉	30%	-	10.8	14.8	風炉としたが胎部上方が欠損。外面丁寧なミガキ調整を施す。。体部と高台の接合面を内面でナデ消している。
157	T-305	1 区	J13	b20	96	第 2 面			瓦質土器	火鉢	70%	-	9.3	-	平面形は方形。底部外面四隅に突起状の脚を貼付ける。口唇部と側面はミガキ調整。内面はナデ調整で、粘土接合痕が明瞭な部分も確認できる。反転復元。一辺 24.4 × 24.3㎝。
158	T-317	1 区	J13	c16・17	96	第 2 面		三河	土師質土器	焜炉	20%	-	-	-	外面はミガキ、内面は粗い刷毛目調整を施す。通風口は引き戸式。引き戸の裏面は粗い指ナデで粘土貼付け。内面の突起は欠損している。底部の 4 隅に「L」字状の脚を貼付け。刻印は確認できない。
159	T-776	1 区	J13	b･c18 ～ 20	96	第 2 面			瓦質土器	土錘	98%	2.4(径)	5.5（長さ）	-	管状土錘。胎土に 1 ～ 2mm 大の長石、石英粒を多く含む。
160	T-317	1 区	J13	c16・17	96	第 2 面		瀬戸美濃系	施釉陶器	鉢	20%	23.2	(13.2)	-	外面と内面口縁部直下に緑釉を施釉。外面体部に竜の型押し（陽刻）。植木鉢か？反転復元。
161	T-311	1 区	J13	a・b・17・18	96	第 2 面		瀬戸美濃系	施釉陶器	水鉢	45%	28.4（内） 31.8（外）	20.6	30.2	外面底部以外を施釉。両側に半円状の輪状の耳を添付。底面裏に墨書あり（判読不明）。外面体部の上方は釉垂れ。内面底部に重ね焼痕。反転復元。
162	T-311	1 区	J13	a・b・17・18	96	第 2 面		瀬戸美濃系	施釉陶器	水甕	48%	35.0	17.2	23.2	施釉は灰釉に褐釉と緑釉を流し掛け。内面底部に胎土目。内面底部に雨粒状に緑釉が散らばる。
163	T-133	1 区	J13	a21	212	第 2 面			土師器	灯明皿	60%	10.4	2.0	5.4	外側面および外底面指押さえ。内面はナデ調整で、側面と見込みの境に段が付く。見込みに金糞付着。反転復元。
164	T-133	1 区	J13	a21	212	第 2 面			土師器	灯明皿	95%	11.6	2.4		外側面および外底面指押さえ。内面はナデ調整で、側面と見込みの境に段が付く。口縁部に煤付着。
165	T-132	1 区	J13	a20	212			肥前系	施釉陶器	碗	30%	-	(3.5)	4.6	刷毛目唐津碗。内外面白化粧土で刷毛目文。口縁部から体部中位まで欠損。反転復元。
166	T-128	1 区	J13		212	第 2 面		肥前系	灰釉陶器	碗	20%	-	(5.8)	5.0	施釉は灰釉で、高台脇まで掛ける。高台内は兜巾となる。見込みは轆轤挽きで出来た凸部には釉が掛かっていない。反転復元。
167	T-129	1 区	J13		212	第 2 面		肥前系	灰釉陶器	碗	45%	12.2	6.6	4.4	口縁部は端反る。高台内に兜巾。釉の掛かりが不均一で、特に内面は斑に掛かる。体部下半反は転復元。
168	T-130	1 区	J13		212	第 2 面		肥前系	施釉陶器	碗	50%	10.9	7.1	4.2	内面および外面下半まで褐釉を施釉。高台内低い兜巾。高台内に縮緬皺。
169	T-131	1 区	J13		212	第 2 面		瀬戸美濃系	灰釉陶器	皿	98%	9.9	1.9	6.0	内面底部の内禿部に目跡あり。外面底部に輪トチあり。内外面に貫入。
170	T-066	1 区	J13	a24	115-1	第 2 面			土師器	皿	15%	10.6	1.5	-	薄い作りで、内面の体部と見込みに段の付くタイプ。胎土は非常に精良。反転復元。
171	T-069	1 区	J13	a24	115-5	第 2 面			土師器	皿	25%	11.2	1.4	-	薄い作りで、内面の体部と見込みに段の付くタイプ。胎土は非常に精良。反転復元。
172	T-070	1 区	J13	a23	115-6	第 2 面			土師器	皿	口縁部 25%	(8.6)	2.0	(6.2)	口縁部肥厚する。内外面はナデ。粘土接合痕が明瞭に確認できる。反転復元。
173	T-066	1 区	J13	a24	115-1	第 2 面		肥前系	染付	碗	10%	10.2	(2.4)	-	丸碗。外面に菊花文と唐草文。反転復元。
174	T-070	1 区	J13	a23	115-6	第 2 面		肥前系	染付	碗	口縁部 34%	(10.8)	(4.6)	-	外面体部は区画間文様で、花と蝶、宝文を描く。内外面は細かい貫入。反転復元。
175	T-067	1 区	J13	a23	115-2	第 2 面		肥前系	染付	碗	20%	10.6	(3.0)	-	外面に一重網目文。反転復元。
176	T-069	1 区	J13	a24	115-5	第 2 面		景徳鎮	青花	皿	10%	-	(0.9)	6.0	見込みの文様は不明。外底面の銘款は欠損のため不明。反転復元。高台畳付に砂付着。
177	T-069	1 区	J13	a24	115-5	第 2 面		景徳鎮	青花	皿	10%	-	(0.8)	7.8	外面牡丹唐草文。見込みには雲が描かれているが他は不明。畳付は釉ケズリ取り。高台の内側にケズリ込む。外底面にカンナ痕。銘款は不明。反転復元
178	T-070	1 区	J13	a23	115-6	第 2 面		肥前系	染付	皿	底部 70%	(13.8)	3.5	(8.2)	図柄は内底面に松、内側面に波涛文。内外面に細かい貫入。高台畳付は釉を削り取り。畳付に砂付着。一部反転復元。
179	T-066	1 区	J13	a24	115-1	第 2 面		肥前系	青磁	皿	10% 以下	19.2	(1.9)	-	折縁皿。反転復元。
180	T-066	1 区	J13	a24	115-1	第 2 面		肥前系	青磁	合子	80%	4.4 × 3.8	1.5	4.1 × 3.3	合子の身。受部と底部は無釉。
181	T-069	1 区	J13	a24	115-5	第 2 面		肥前系	染付	蓋	40%	5.2	(1.4)	-	上面に笹文？内面無釉。反転復元。
182	T-068	1 区	J13	a24	115-3	第 2 面		肥前系	白磁	蓋	10%	-	(1.9)	-	小壺の蓋？摘みは団子状の形態で外径は 1.0cm。一部反転復元
183	T-067	1 区	J13	a23	115-2	第 2 面		肥前系	刷目唐津	鉢	10%	27.6	(3.6)	-	刷毛目の上に鉄絵。口縁部は「く」の字状。反転復元。

報告書No.	登録No.	地区	大区画	小区画	遺構No.	検出面	層位	産地	種類	器種	残存率	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	備考
184	T-070	1区	J13	a23	115-6	第2面		瀬戸美濃系	施釉陶器	碗	底部100%	-	2.1	(4.6)	内面は長石釉を施釉。一部反転復元。
185	T-070	1区	J13	a23	115-6	第2面		瀬戸美濃系	灰釉陶器	皿	20%	(10.8)	2.2	5.8	内外面施釉。見込みに目跡あり。一部反転復元
186	T-070	1区	J13	a23	115-6	第2面		瀬戸美濃系	灰釉陶器	折縁皿	40%	(10.8)	2.5	(5.0)	灰釉折縁皿。内面は型押しによる菊の花弁。内底面は無釉。見込みに目跡。反転復元。
187	T-069	1区	J13	a24	115-5	第2面		肥前系	施釉陶器	香炉？	10%以下	-	(4.1)	-	香炉もしくは火入れ？備前焼か？体部は鉄釉。底部は露胎。胴部最大径：15.2cm。反転復元。
188	T-070	1区	J13	a23	115-6	第2面			施釉陶器	土瓶	不明	-	(4.0)	(11.8)	土瓶の底部破片か？胴部下半まで鉄釉を施釉。反転復元
189	T-071	1区	J13	a23	115	第2面	第2層	瀬戸美濃系？	施釉陶器	蓋	25%	10.6	(2.8)	-	上面に黒釉を施釉。軟質である。反転復元
190	T-067	1区	J13	a23	115-2	第2面		備前	焼締陶器	壺？	10%以下	-	(6.9)	10.6	内面は強い轆轤ナデ。反転復元。
191	T-070	1区	J13	a23	115-6	第2面			瓦質土器	鉢	10%	(29.6)	(5.75)	-	口縁から頸部のみ遺存。口縁は接合部を外に折り曲げる。外面は磨滅が著しい。反転復元。
192	T-097	1区	J13	a・b19	181	第2面			土師器	皿	20%	(11.0)	(1.4)	-	轆轤成形。胎土はよく水簸されている。反転復元。
193	T-097	1区	J13	a・b19	181	第2面		肥前系	染付	碗	35%	(10.0)	4.3	(3.6)	外面の文様は不明。内面無文。反転復元。
194	T-097	1区	J13	a・b19	181	第2面		肥前系	染付	碗	20%	(10.6)	(5.1)	-	外面に唐草文と蕉葉文。内面の口縁部直下に雷文を巡らす。内外面に粗い貫入。反転復元。
195	T-097	1区	J13	a・b19	181	第2面		肥前系	染付	浅鉢	45%	(13.6)	5.0	(9.4)	口錆。外面の唐草文。内面口縁部直下に扇文を巡らす。内底面に龍を描く。口縁部は大きく外反する。外底に「大明成化年制」の銘款。反転復元。
196	T-097	1区	J13	a・b19	181	第2面		肥前系	染付	鉢	25%	-	(3.05)	(9.5)	高台外側面に○×文様が巡る。高台畳付の釉掻き取り。焼き継ぎ痕有り。
197	T-097	1区	J13	a・b19	181	第2面			染付	皿	不明	-	(2.15)	(8.6)	底部の一部のみ遺存。畳付の釉掻き取り。反転復元。
198	T-097	1区	J13	a・b19	181	第2面			施釉陶器	蓋	20%	(8.6)	(3.0)	-	外面に灰釉を施釉。鉄釉で文字を記すが欠損のため判読不明。土瓶の蓋か？最大径：(11.4cm)。反転復元。
199	T-097	1区	J13	a・b19	181	第2面			施釉陶器	土瓶	20%	(6.6)	(3.35)	-	内面上位から外面に鉄釉を施釉。反転復元。
200	T-097	1区	J13	a・b19	181	第2面			施釉陶器	雪平鍋	13%	-	(2.1)	(9.8)	内面に灰釉を施釉。外底面に煤付着。反転復元。
201	T-097	1区	J13	a・b19	181	第2面		肥前系	施釉陶器	皿	50%	-	(3.0)	9.6	内面に透明釉を施釉。唐津大皿か？反転復元。
202	T-097	1区	J13	a・b19	181	第2面			土師質土器	焙烙	10%以下	(31.0)	(7.0)	-	外底側面に煤付着。内底面も使用のためか黒ずむ。反転復元。
203	T-097	1区	J13	a・b19	181	第2面			施釉陶器	火入れ？	不明	-	(2.3)	10.4	外面に白化粧土を施釉。一部反転復元。
204	T-060	1区	J13	a18・19	101	第2面		肥前系	染付	仏飯器	25%	(8.4)	(3.75)	-	仏飯器の坏部。外面は印判で施文。反転復元。
205	T-060	1区	J13	a18・19	101	第2面		肥前系	染付	碗	20%	(10.8)	(5.6)	-	外面に亀甲文。内面口縁部直下に四方襷文。
206	T-060	1区	J13	a18・19	101	第2面		肥前系	染付	碗	60%	(11.4)	6.3	4.5	外面に白抜きの丸文を千鳥に配し、高台上部に連弁文？を巡らす。内面口縁直下に四方襷文。畳付の釉掻き取り。内外面に粗い貫入。一部反転復元。
207	T-060	1区	J13	a18・19	101	第2面		肥前系	染付	猪口	50%	-	(3.3)	(3.6)	文様は外面のみと思われる。文様は不明。
208	T-060	1区	J13	a18・19	101	第2面		肥前系	白磁	猪口	75%	5.0	3.6	3.1	畳付の釉掻き取り。
209	T-060	1区	J13	a18・19	101	第2面		肥前系	白磁	皿	50%	(13.4)	3.3	7.8	白磁稜花皿。口錆。畳付は釉掻き取り。畳付に微量に砂付着。一部反転復元。
210	T-060	1区	J13	a18・19	101	第2面		肥前系	染付	皿	25%	-	(4.6)	(10.0)	内面の草花文を描く。畳付の釉は掻取り。反転復元。
211	T-060	1区	J13	a18・19	101	第2面		瀬戸美濃系	施釉陶器	碗	10%	(13.0)	(4.7)	-	内外面を白化粧土で加飾。反転復元。
212	T-060	1区	J13	a18・19	101	第2面		瀬戸美濃系	施釉陶器	碗	50%	-	(2.2)	5.2	灰釉碗。内外面に細かい貫入。高台畳付に砂目。一部反転復元。
213	T-060	1区	J13	a18・19	101	第2面		瀬戸美濃系	施釉陶器	皿	12%	(13.6)	(1.95)	-	灰釉輪花皿。反転復元・
214	T-060	1区	J13	a18・19	101	第2面			施釉陶器	土瓶	35%	(8.0)	(8.4)	-	内面の口縁部直下から外面にかけて褐釉を施釉。反転復元。
215	T-060	1区	J13	a18・19	101	第2面			施釉陶器	土瓶	35%	(8.0)	(9.6)	-	外面に灰釉を施釉。外面に轆轤による沈線文。注ぎ口は鉄砲口。糸目土瓶。一部反転復元。
216	T-060	1区	J13	a18・19	101	第2面			施釉陶器	鍋	17%	(13.6)	(5.85)	-	内外面は褐釉を施釉。反転復元。
217	T-060	1区	J13	a18・19	101	第2面		備前	焼締陶器	壺	25%	-	(5.3)	(8.0)	轆轤成形。体部中位から上は欠損。小壺か？反転復元。
218	T-060 T-031	1区	J13	a18・19	101	第2面		瀬戸美濃系	施釉陶器	甕	30%	39.6	18.0	24.5	水甕。口唇部から外面に透明釉を施釉。銅緑釉と褐釉を流し掛け。外面にヘラで装飾。内底部に目跡。高台は無釉。反転復元。
219	T-054	1区	J13	d24	91	第2面		肥前系	染付	蓋	65%	10.4	2.7	-	外面は8等分の捻線区画内に花を描く。内面中央の一重圏線内に花弁を描く。　つまみ外径：5.6cm
220	T-054	1区	J13	d24	91	第2面		京・信楽系	施釉陶器	碗	45%	-	(5.6)	3.6	内外面に灰釉を施釉。鉄釉で若杉文を描く。高台は無釉。一部反転復元。
221	T-056	1区	J13	a24	94	第2面			土師器	皿	30%	12.0	2.0	7.2	口縁部内外面は横ナデ調整。外底面はナデ調整。反転復元。
222	T-057	1区	J13	b23	97	第2面		肥前系	施釉陶器	鉢	10%以下	-	(2.3)	-	刷毛目唐津。口縁玉縁状となる。片口鉢か？
223	T-057	1区	J13	b23	97	第2面			施釉陶器	甕	10%以下	-	(2.4)	-	内外面褐釉を施釉。
224	T-059	1区	J13	c24	100	第2面			土師器	灯明受皿	40%	6.0	1.0	3.0	内面に透明釉を施釉。底部糸切。
225	T-059	1区	J13	c24	100	第2面		肥前系	染付	盃	55%	6.8	3.1	2.6	外面に笹文。畳付の釉掻き取り。畳付に砂付着。
226	T-059	1区	J13	c24	100	第2面		京・信楽系	施釉陶器	碗	25%	10.2	6.4	4.8	内外面に透明釉を施釉。高台は露胎。内外面に微細な貫入。小杉碗？反転復元。
227	T-059	1区	J13	c24	100	第2面		京・信楽系	施釉陶器	碗	20%	-	(3.2)	4.0	内外面に微細な貫入。高台畳付は釉掻き取り。反転復元。
228	T-059	1区	J13	c24	100	第2面			施釉陶器	蓋	98%	2.2	1.7	1.9	土瓶の蓋。外面に褐釉を施釉。
229	T-064	1区	J13	c24	111	第2面		肥前系	染付	碗	25%	12.6	5.0	3.6	内底面は蛇の目釉剥ぎ。口縁は端反る。反転復元。
230	T-064	1区	J13	c24	111	第2面		肥前系	染付	蓋	25%	11.6	(3.3)	-	外面に網目文。つまみ巾：1.0cm。反転復元。
231	T-064	1区	J13	c24	111	第2面		京・信楽系	染付	碗	20%	9.0	5.5	3.6	外面に若杉文。反転復元。
232	T-064	1区	J13	c24	111	第2面			施釉陶器	徳利	10%以下	-	(4.6)	-	外面に褐釉を施釉。反転復元。
233	T-073	1区	J13	c・d22	119	第2面		肥前系	染付	碗	10%	10.4	(4.4)	-	"外面の文様は不明。透明釉は青味を帯びる。反転復元。
234	T-073	1区	J13	c・d22	119	第2面		肥前系	染付	碗	20%	10.2	(5.7)	-	欠損のため絵柄は不明。内面無文。反転復元。
235	T-073	1区	J13	c・d22	119	第2面		肥前系	染付	碗	20%	10.4	6.2	4.8	広東碗。外面に蕉葉文を描く。高台畳付は釉掻き取り。畳付に微量の砂付着。反転復元。
236	T-073	1区	J13	c・d22	119	第2面		肥前系？	施釉陶器	碗	10%以下	8.6	(4.2)	-	二次焼成を受け、釉は白ずみ、器面は爛れる。元は鉄釉か？唐津碗？反転復元。
237	T-073	1区	J13	c・d22	119	第2面		瀬戸美濃系	施釉陶器	碗	10%以下	9.6	(4.2)	-	天目茶碗。二次焼成を受ける。反転復元。

報告書 No.	登録 No.	地区	大区画	小区画	遺構 No.	検出面	層位	産地	種類	器種	残存率	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	備考
238	T-073	1 区	J13	c・d22	119	第 2 面		京・信楽系	施釉陶器	碗	20%	-	(3.4)	4.2	小杉碗。反転復元。
239	T-073	1 区	J13	c・d22	119	第 2 面		肥前系	青磁	香炉	20%	-	(3.8)	9.0	底部は蛇の目に釉掻き取り。獣足で三足か？反転復元。
240	T-098	1 区	J13	j17・18	188	第 2 面			土師器	皿	25%	9.0	1.9	5.4	底部糸切。胎土はよく水簸されている。反転復元。
241	T-098	1 区	J13	j17・18	188	第 2 面		肥前系	施釉陶器	皿	40%	13.8	(3.9)	5.4	内側面の口縁端部と下端に鉄釉による圏線が巡る。内底面に砂目。高台は釉を削り取り。高台内に兜巾。二次焼成を受ける。
242	T-105	1 区	J13	k・l16	192	第 2 面		肥前系	染付	仏飯器	30%	8.4	(3.7)	-	外面に雨降文。内面は無文。反転復元。
243	T-106	1 区	J13	j15	192	第 2 面		肥前系	染付	碗	15%	9.6	(3.6)	-	外面に草花文。反転復元。
244	T-105	1 区	J13	k・l16	192	第 2 面			染付	碗	25%	9.4	4.9	3.8	畳付き釉削り取り。器面内外に粗い貫入。外面の文様は不明。内面は無文。
245	T-108	1 区	J13	k14	192-1	第 2 面		肥前系	染付	碗	30%	-	(2.4)	3.8	畳付き釉削り取り。外面の文様は不明。
246	T-106	1 区	J13	j15	192	第 2 面		肥前系	染付	蓋	25%	内：4.8 外：7.4	(1.8)	-	摘み部分欠損。内面は無釉。壺の蓋と思われる。
247	T-104	1 区	J13	j15・16	192	第 2 面		肥前系	色絵	鉢？	10% 以下	-	(3.2)	7.8	底部のみ遺存。色絵磁器で外面は緑絵具と紫絵具による絵付けがあるが、絵柄は欠損のため不明。高台側面と内面は黄絵具。畳付きの釉は削り取り。畳付に砂付着。
248	T-108	1 区	J13	jk15	192	第 2 面			土師器	ミニチュア	60%	4.6	4.4	3.6	底部糸切。口縁が内彎する。径 1 ミリ以下の長石、雲母粒含む。
249	T-105	1 区	J13	k・l16	192-1	第 2 面			施釉陶器	皿	10% 以下	-	(2.5)	9.2	刷毛目唐津皿。内底面は白土による刷毛目文。反転復元。外面は透明釉に鉄釉を流し掛けか？鉄釉が高台側面に垂れる。畳付の釉は削り取り。
250	T-104	1 区	J13	j15・16	192	第 2 面		丹波	焼締陶器	壺	-	(23.0)	(3.9)	-	表面剥離が著しい。
251	T-104	1 区	J13	j15・16	192	第 2 面		丹波	焼締陶器	甕	-	(34.4)	(5.9)	-	肩部上方に凹線文。耳（輪状？）貼付け。
252	T-104	1 区	J13	j15・16	192	第 2 面		丹波	焼締陶器	甕	-	(32，8)	(8.1)	-	口縁は「T」字状となり、口唇部に 3 条の沈潜が巡る。外面にも沈潜が巡る。
253	T-108	1 区	J13	k14	192-1	第 2 面		堺・明石系	焼締陶器	擂鉢	10% 以下	31.0	(9.8)	-	擂り目の単位は 11 条 /2.5㎝。反転復元。
254	T-142	1 区	J13	k14	218	第 2 面		肥前系	染付	蓋	40%	-	(2.0)	-	外面は二重圏線枠内に渦福。内面に花卉文。外面草花文。反転復元。摘み 4.8㎝。
255	T-142	1 区	J13	k14	218	第 2 面		肥前系	染付	皿	20%	-	(2.0)	3.8	見込み蛇の目釉剥ぎ。高台無釉。畳付に砂付着。
256	T-141	1 区	J13	k14	218	第 2 面		丹波？	施釉陶器	水甕	10% 以下	30.8	(10.7)	-	外面に灰釉を施釉。口唇部に三条の凹線。
257	T-139	1 区	J13	j・k14	218	第 2 面		備前焼	焼締陶器	擂鉢	10% 以下	-	(8.7)	19.2	擂り目の単位は 15 条 /2.5㎝。反転復元
258	T-518	1 区	J13	a20		整地土	第 3 層		土師器	皿	98%	9.7	2.4	4.3	口縁部は横ナデ調整。底部ナデ調整。口縁部は肥厚する。底部外面に粘土接合痕が明瞭。
259	T-491	1 区	J13	b･c18		整地土	第 3 層		土師器	皿	60%	11.6	2.3	5.0	口縁部内外面横ナデ調整。外側面指押さえ。外底面ナデ調整。
260	T-494	1 区	J13	d21		整地土	第 3 層	肥前系	施釉陶器	皿	30%	13.3	4.2	4.6	溝縁皿。二次焼成を受け、全体に釉が変色。体部中位反転復元
261	T-512	1 区	J13	c・d18		整地土	第 3 層	肥前系	施釉陶器	皿	40%	13.4	4.1	4.2	溝縁皿。見込みに砂目。体部中位反転復元。
262	T-546	1 区	J13	j・k13 ～ 15		整地土	第 3 層	肥前系	施釉陶器	碗	40%	9.4	6.2	4.2	外面中位から内面に灰釉を施釉。畳付きに目痕二か所あり。胎土に 1mm 以下の長石粒含む。体部下位反転復元。
263	T-537	1 区	J13	b20		整地土	第 3 層	肥前系	施釉陶器	碗	25%	11.2	6.3	4.4	外面下位から内面に灰釉を施釉。器面全体に貫入。二次焼成を受け一部の釉変色。反転復元。
264	T-506	1 区	J13	f23		整地土	第 3 層	京・信楽系	施釉陶器	小杉碗	55%	9.4	5.7	1.8	小杉碗。外面に若松文。
265	T-493	1 区	J13	f24･25		整地土	第 3 層	京・信楽系	施釉陶器	碗	25%	9.4	5.2	4.2	小杉碗。底部に墨書ありが欠損のため判読不明。内外面に細かい貫入。反転復元。
266	T-501	1 区	J13	i17 ～ 20		整地土	第 3 層	瀬戸美濃系	施釉陶器	天目茶碗	20%	10.7	(6.4)	(5.1)	外底無釉。内外面は曜変。反転復元。
267	T-518	1 区	J13	a20		整地土	第 3 層	瀬戸美濃系	施釉陶器	天目茶碗	10% 以下	10.4	(4.7)	-	口縁部から体部中位の一部のみ遺存。反転復元。
268	T-074 T-490	1 区	J13	c18　d19		整地土	第 3 層	瀬戸美濃系	施釉陶器	天目茶碗	15%	12.0	(5.7)	-	白天目茶碗。内外面に粗い貫入。反転復元。
269	T-498	1 区	J13	d20		整地土	第 3 層	瀬戸美濃系	施釉陶器	皿	30%	10.8	2.7	6.6	内外面褐釉。内側面を鑿で花弁を施文。内底面釉削り取り。畳付釉削り取り。反転復元。
270	T-536	1 区	J13	i16 ～ 18		整地土	第 3 層	瀬戸美濃系	施釉陶器	碗	30%	11.0	(6.6)	-	外面に透明釉を施釉し、緑釉で加飾。内外面に細かい貫入。反転復元。
271	T-537	1 区	J13	b20		整地土	第 3 層	瀬戸美濃系	施釉陶器	蓋	55%	10.8	2.4	-	志野。鉄釉で円圏状の文を絵付けの後、内外面は長石釉を掛け、内側面は釉を削り取る。
272	T-496	1 区	J13	g19		整地土	第 3 層	瀬戸美濃系	施釉陶器	向付	60%	-	-	-	志野角向付。鉄釉で絵付け。内外長石釉。環状の脚で 2 脚が遺存。上部のアーチ状の把手は欠損。
273	T-506	1 区	J13	f23		整地土	第 3 層	肥前系	青磁	香炉	25%	13.0	6.8	-	三足貼付け。内面無釉。反転復元。
274	T-494	1 区	J13	d21		整地土	第 3 層	瀬戸美濃系	施釉陶器	鍋蓋	80%	15.8	4.4	摘み 4.0	外面に沈線状の円圏が巡る。内面中央は無釉。摘みの上端は釉削り取り。
275	T-494	1 区	J13	d21		整地土	第 3 層	肥前系？	施釉陶器	おろし皿	60%	縦 12.7	横 -	厚み 0.8	縦に約半分欠損している。吊下げ用の穴を穿っている。内面に施釉。
276	T-496	1 区	J13	g19		整地土	第 3 層	備前	焼締陶器	火入れ	45%	10.0	6.6	10.4	径 1mm 大の長石、チャート粒含む。反転復元。
277	T-498	1 区	J13	d20		整地土	第 3 層		土師質土器	焙烙	10%	26.6	(7.8)	-	体部中位に格子状のタタキ。
278	T-493	1 区	J13	f24･25		整地土	第 3 層		瓦質土器	茶釜	25%	-	(10.6)	10.6	外面に雲母付着。外型成型。鍔から下に『明石西○○』？　『○二○○』の型押しの銘あり。鍔から下は煤付着。
279	T-493	1 区	J13	f24･25		整地土	第 3 層		瓦質土器	茶釜	10% 以下	-	-	-	口縁と底部欠損。外面に雲母付着。外型成型。鍔から下は煤付着。金属器の模倣と思われる。
280	T-212	1 区	J13	b23・24	437	第 3 面			土師器	灯明皿	70%	7.0	1.3	-	外面口縁部から内面は透明釉。口唇部に煤付着。底部糸切。
281	T-222	1 区	J13	d・e24	437	第 3 面			土師器	皿	口縁部～ 底部 20%	(13.6)	(2.2)	(8.1)	胎土はよく水簸されている。口縁場は、底部から緩く内彎しながら立ち上る。反転復元。
282	T-212	1 区	J13	b23・24	437	第 3 面		肥前系	染付	碗	40%	(9.4)	4.6	3.8	外側面に山水文を描く。内底面に文字が一字書かれているが判読不明。畳付は釉掻き取り。反転復元。
283	T-212	1 区	J13	b23・24	437	第 3 面		肥前系	染付	碗	100%	10.2	5.7	(3.7)	外側面に菊花と寿、内底面にはヒョウタンを描く。
284	T-212	1 区	J13	b23・24	437	第 3 面		肥前系	染付	碗	60%	10.3	(4.9)	-	外面に草花文を描く。底部欠損。
285	T-210	1 区	J13	c・d24	437	第 3 面		肥前系	染付	碗	40%	-	(2.9)	3.8	体部下方から高台まで遺存。外面文様は草花文？高台畳付に砂付着。反転復元。
286	T-222	1 区	J13	d・e24	437	第 3 面		肥前系	染付	碗	口縁部～ 底部 60%	(10.7)	(5.9)	(3.8)	絵柄は外面は花唐草文、内面は口縁に列点文が巡る。内底面には一重圏線および二重圏線の中央に花？高台畳付に砂付着。一部反転復元。
287	T-212	1 区	J13	b23・24	437	第 3 面		肥前系	染付	碗	40%	11.3	6.1	4.2	内外面に渦紋。

報告書 No.	登録 No.	地区	大区画	小区画	遺構 No.	検出面	層位	産地	種類	器種	残存率	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	備考
288	T-212	1 区	J13	b23・24	437	第 3 面		肥前系	染付	碗	70%	11.0	5.7	4.6	外面は山水文。内面は口縁内面に四方襷文が巡り内底面には二重圏線内に樹木を描く。高台畳付は釉掻き取りで僅かに砂付着。
289	T-212	1 区	J13	b23・24	437	第 3 面		肥前系	染付	小碗	30%	(7.8)	4.8	(3.6)	外面口縁下に段が付き、上に四方襷文、下に草花文と宝文を描く。
290	T-210	1 区	J13	c・d24	437	第 3 面		肥前系	染付	蓋	30%	(9.8)	2.8	-	丸碗蓋。文様は外側面に花唐草文、摘み内に二重方形枠内に渦福。内面は下方に四方襷を巡らし、中央に二重圏線内に五弁花。つまみ外径：3.9cm。
291	T-222	1 区	J13	d・e24	437	第 3 面		肥前系	染付	蓋	口縁部～底部 95%	10.2	3.0	5.7	広東碗の蓋。絵柄は外面に宝づくし文、内面は一重圏線の中央に宝。
292	T-212	1 区	J13	b23・24	437	第 3 面		肥前系	染付	蓋	30%	9.8	2.8		広東碗のの蓋。外面に草花文。内面は縁に二重圏線、中央に一重圏線内に不明文様（形骸化）。反転復元。内外面に貫入。
293	T-212	1 区	J13	b23・24	437	第 3 面		肥前系	染付	蓋	30%	-	(1.8)	-	内面二重圏線内中央に五弁花。摘み外径 3.9cm。反転復元。
294	T-210	1 区	J13	c・d24	437	第 3 面		肥前系	青磁染付	碗	30%	-	(2.5)	-	端部は欠損。外面摘み内中央に二重方形枠内に崩れた渦福。内面の二重圏線内中央に五弁花。摘み外径 4.4cm。おそらく内面側面には四方襷文が巡る。反転復元。
295	T-212	1 区	J13	b23・24	437	第 3 面		肥前系	染付	碗	45%	10.9	6.8	6.2	広東碗。外面に松を描く。口縁内面は圏線が巡り、底面も一重圏線内中央に寿の字を配す。反転復元。
296	T-210	1 区	J13	c・d24	437	第 3 面		肥前系	染付	碗	40%	-	(4.3)	5.9	広東碗の底部。外面の文様は不明。内底面は一重圏線内に山水文？反転復元。
297	T-212	1 区	J13	b23・24	437	第 3 面		肥前系	染付	碗	90%	10.5	6.7	5.7	広東碗。外面に稲束を連結したような文様を上下を一重圏線で画す。内面は上端部に一重圏線、見込みに一重圏線内中央に寿か？高台畳付に砂付着。
298	T-212	1 区	J13	b23・24	437	第 3 面		肥前系	染付	碗	40%	(10.7)	5.6	5.4	広東碗。外面草花文。内底面は一重圏線内に寿。
299	T-212	1 区	J13	b23・24	437	第 3 面		肥前系	染付	碗	30%	-	(4.1)	5.0	体部欠損。内底面に一重圏線内潰れた五弁花。反転復元
300	T-210	1 区	J13	c・d24	437	第 3 面		肥前系	染付	皿	80%	13.7	2.6	6.4	内底面は蛇の目釉剥ぎ。見込み中央に五弁花。口縁部内面は唐草文が巡る。高台畳付に砂付着。
301	T-212	1 区	J13	b23・24	437	第 3 面		肥前系	染付	皿	30%	(13.9)	(3.1)	-	体部のみ遺存。外側面に唐草文、内側面には花と唐草文を描く。反転復元
302	T-210	1 区	J13	c・d24	437	第 3 面		中国？	染付	鉢	10% 以下	-	(1.5)	-	角鉢？中国製か？内外面の文様は不明。景徳鎮？
303	T-212	1 区	J13	b23・24	437	第 3 面		肥前系	青磁	三脚皿	30%	-	(1.8)	9.0	底部に 3 足を貼付ける。底部外縁の釉を輪状に削り取る。内底面に花弁文を呉須で描く。反転復元。
304	T-212	1 区	J13	b23・24	437	第 3 面		肥前系	染付	小杯	48%	6.7	3.3	2.5	外面飛鳥文。雁か？反転復元。
305	T-210	1 区	J13	c・d24	437	第 3 面		肥前系	白磁	猪口	55%	4.5	3.2	2.9	底部畳付釉削り取り。
306	T-222	1 区	J13	d・e24	437	第 3 面		肥前系	染付	小坏	口縁部～底部 40%	(6.4)	(4.2)	(3.0)	外面に笹文。畳付は釉削り取り。一部反転復元。
307	T-222	1 区	J13	d・e24	437	第 3 面		肥前系	白磁	小坏	口縁部～底部 40%	(7.0)	(5.2)	(3.6)	高台畳付に砂付着。反転復元。
308	T-212	1 区	J13	b23・24	437	第 3 面		京信楽系	施釉陶器	碗	35%	(9.0)	5.3	(3.0)	小杉碗。若杉文を描く。反転復元。
309	T-212	1 区	J13	b23・24	437	第 3 面		京信楽系	施釉陶器	碗	30%	(9.6)	4.6	3.0	小杉碗。外面に若杉文を描く。反転復元。
310	T-212	1 区	J13	b23・24	437	第 3 面		京信楽系	施釉陶器	碗	80%	9.3	5.4	3.3	小杉碗。内外面に細かい貫入。
311	T-212	1 区	J13	b23・24	437	第 3 面		京信楽系	施釉陶器	碗	35%	-	(2.7)	5.4	体部の上方は欠損。内底面に絵付け（山水文）。内外面には細かい貫入。高台は露胎。
312	T-212	1 区	J13	b23・24	437	第 3 面		肥前系	施釉陶器	碗	45%	(12.4)	5.6	4.0	高台脇と高台以外は灰釉を施釉し、口縁部内外面を鉄釉掛け流し。内外面に細かい貫入。反転復元。
313	T-212	1 区	J13	b23・24	437	第 3 面		瀬戸美濃系	施釉陶器	天目碗	10%	9.0	-	-	外面頸部に強いナデ。反転復元
314	T-212	1 区	J13	b23・24	437	第 3 面		瀬戸美濃系	施釉陶器	碗	30%	11.0	6.8	5.0	鉄釉拳骨茶碗。施釉は内外面で、外面に長石釉を斑点状に置く。高台は露胎。高台内は鉄泥。反転復元。
315	T-212	1 区	J13	b23・24	437	第 3 面		京・信楽系？	施釉陶器	皿	35%	(14.0)	3.1	5.0	稜花皿。高台側面まで施釉。口縁部の内外面緑釉を施釉。反転復元。
316	T-212	1 区	J13	b23・24	437	第 3 面		肥前系	染付	仏飯器	70%	-	(4.9)	3.8	上部の杯部分は欠損。底部無釉。高台内の抉りが浅い。外面の文様は欠損のため不明。
317	T-212	1 区	J13	b23・24	437	第 3 面		肥前系	染付	仏飯器	60%	8.0	5.2	3.8	外面は杯部上方に違い鋸歯文、脚部上方に二重圏線が巡る。底部は無釉。高台内の抉りは浅い。反転復元。
318	T-212	1 区	J13	b23・24	437	第 3 面		肥前系	白磁	紅皿	100%	4.3	1.5	1.4	貝殻状型押し。施釉は内面および外面口縁付近。口縁幅が広い。
319	T-212	1 区	J13	b23・24	437	第 3 面		肥前系	白磁	紅皿	100%	2.3	1.4	1.4	貝殻状型押し。施釉は内面および外面上半部まで。
320	T-210	1 区	J13	c・d24	437	第 3 面		京信楽系	施釉陶器	蓋	48%	(10.5)	3.5	-	外面に施釉。外面全体に微細な貫入。つまみ外径：2.1cm。容器の蓋。燗鍋の蓋か？反転復元。
321	T-210	1 区	J13	c・d24	437	第 3 面		京信楽系	施釉陶器	蓋	100%	-	1.9	-	土瓶の落とし蓋。外面は灰釉を施釉。摘みは蕾状を呈する。口径（最大径）は 7.1cm。
322	T-210	1 区	J13	b23・24	437	第 3 面		京信楽系	施釉陶器	蓋	90%	6.3	1.8	4.5	急須の蓋。外面に灰釉を施釉。
	T-212			b23・24											
323	T-210	1 区	J13	c・d24	437	第 3 面		京信楽系	施釉陶器	蓋	40%	-	1.8	3.4	土瓶の落とし蓋。外面は褐釉を施釉。摘みは両側から上方に折り曲げる。口径（最大径）は 8.5cm。反転復元。
324	T-212	1 区	J13	b23・24	437	第 3 面			施釉陶器	蓋	98%	8.5	3.0	6.1	土瓶の落とし蓋。摘みの形状は花弁。上面は褐釉を施釉。最大径 10.9cm。
325	T-210	1 区	J13	c・d24	437	第 3 面		肥前系	染付	徳利	60%	2.0	10.4	4.0	形態は鶴首。外面に花卉文を描く。高台畳付に砂付着。内面無釉。
326	T-212	1 区	J13	b23・24	437	第 3 面		肥前系	染付	線香立？	80%	-	(11.7)	4.6	上部欠損。形状は竹を模している。絵柄は竹。内面無釉。一部反転復元
327	T-212	1 区	J13	b23・24	437	第 3 面		肥前系	染付	徳利	20%	-	(7.1)	(9.7)	底部のみ遺存。畳付釉削り取り。畳付に砂付着。反転復元。
328	T-210	1 区	J13	c・d24	437	第 3 面		肥前系	染付	徳利	20% 以下	-	(4.9)	(9.6)	底部のみ遺存。高台畳付に砂付着。高台側面と体部下方に圏線が巡る。反転復元。
329	T-211	1 区	J13	e22	437	第 3 面		肥前系	施釉陶器	瓶	10% 以下	-	(2.3)	-	花瓶か？底部のみ遺存。畳付釉削り取り。全面に貫入。
330	T-210	1 区	J13	c・d24	437	第 3 面		京信楽系	施釉陶器	水注	70%	(6.8)	10.6	4.8	注口は欠損。内外面灰釉を施釉。体部上方に鉄絵で花弁を描く。高台と高台脇は露胎。高台内に「ウツ」の墨書。
331	T-437	1 区	J13	e22	437	第 3 面		京・信楽系？	施釉陶器	火入れ？	-	-	(3.6)	9.8	外底面に『○光山』？の刻印。一部反転復元。

報告書 No.	登録 No.	地区	大区画	小区画	遺構 No.	検出面	層位	産地	種類	器種	残存率	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	備考
332	T-222	1 区	J13	d・e24	437	第 3 面		丹波	陶器	徳利	50%	-	(4.9)	6.0	体部下方から底部のみ遺存。底部糸切。胎土には雲母粒を含む。内外面に鉄泥。一部反転復元。
333	T-212	1 区	J13	b23・24	437	第 3 面		瀬戸美濃系	施釉陶器	香炉	100%	9.2	5.5 ～ 5.2	7.6	灰釉筒型香炉。口唇部から体部外面下方に施釉。底部やや歪む。
334	T-210	1 区	J13	c・d24	437	第 3 面		備前	焼締陶器	火入れ	45%	(9.5)	6.1	(10.5)	体部中位に刻印のようなものが認められるが判読不明。反転復元。
335	T-210	1 区	J13	c・d24	437	第 3 面		瀬戸美濃系	施釉陶器	蓋	70%	-	4.4	13.2	壺の落とし蓋。外面側面まで褐釉を施釉。把手は半輪状の粘土紐を上面中央に貼り付ける。口径（最大径）19.7cm。
336	T-222	1 区	J13	d・e24	437	第 3 面		堺・明石系	施釉陶器	擂鉢	15%	(34.2)	(10.9)	-	櫛目は一単位 8 本 /2.8㎝。反転復元。
337	T-212	1 区	J13	b23・24	437	第 3 面		堺・明石系	焼締陶器	擂鉢	10%	-	(10.0)	16.8	内底面が平滑になり擂り目摩耗。反転復元。
338	T-212	1 区	J13	b23・24	437	第 3 面		備前	焼締陶器	擂鉢	10% 以下	35.2	(9.6)	-	櫛目 10 本 /2.8㎝。反転復元。
339	T-212	1 区	J13	b23・24	437	第 3 面		肥前系	施釉陶器	擂鉢	30%	-	(5.3)	(8.8)	底部糸切。櫛目の単位は 10 本 / 3㎝
340	T-222	1 区	J13	d・e24	437	第 3 面		備前	焼締陶器	鉢	8%	(38.8)	(12.7)	-	胎土は精良で僅かに長石粒を含む。反転復元。
341	T-222	1 区	J13	d・e24	437	第 3 面		備前	焼締陶器	鉢	25%	-	(9.0)	(13.8)	内面中央を打掻き穿孔。植木鉢に転用。反転復元。
342	T-210	1 区	J13	c・d24	437	第 3 面		丹波	焼締陶器	甕	10% 以下	(20.6)	(11.5)	-	体部上側面に輪状の形骸化した耳を貼り付ける。口縁部内面に鉄泥？を流し掛け。
343	T-222	1 区	J13	d・e24	437	第 3 面		丹波	焼締陶器	甕	15%	-	(12.4)	(21.2)	内外面に鉄泥刷毛塗り。胎土には長石粒が多く認められる。反転復元。
344	T-212	1 区	J13	b23・24	437	第 3 面		瀬戸美濃系	白磁	水鉢	20%	-	(14.8)	24.0	内外面を長石釉で施釉。外底面無釉。内外に貫入。反転復元。
345	T-211	1 区	J13	e22	437	第 3 面			土師質土器	炮烙	10% 以下	29.9	(4.0)	-	胎土に雲母粒を含む。底部煤付着。反転復元。
346	T-210	1 区	J13	c・d24	437	第 3 面			土師質土器	蓋	99%	7.3	1.5	-	焼塩壺の蓋。内面に布目痕あり。歪み著しい。外側面はナデ。
347	T-212	1 区	J13	b23・24	437	第 3 面			土師質土器	風炉	10%	-	(12.7)	(22.8)	脚部は貼付け。体部外面ヘラ磨き。
348	T-185	1 区	J13	b22	342	第 3 面		肥前系	染付	碗	30%	(9.6)	4.1	(4.6)	絵柄は外面に山水文。口縁部が端反る。反転復元。
349	T-183	1 区	J13	b・c19・20	342	第 3 面		肥前系	白磁	碗	15%	-	(2.4)	(4.0)	高台畳付は釉削り取り。内外面貫入。
350	T-183	1 区	J13	b・c19・20	342	第 3 面		肥前系	施釉陶器	碗	20%	-	(5.6)	(6.2)	筒茶碗？底部無釉。反転復元。
351	T-185	1 区	J13	b22	342	第 3 面			陶器	土瓶	80%	-	(2.9)	8.3	底部のみ遺存。外面は褐釉を施釉。底部脇に団子状の 3 脚が付く。
	T-212			b23 ～ 24	437	第 3 面									
	T-185	1 区		b22	342	第 3 面			陶器	土瓶	15%	(8.2)	(6.4)	-	
352	T-185	1 区	J13	b22	342	第 3 面			施釉陶器	雪平鍋	8%	-	(2.0)	(8.6)	底部の破片。褐釉を施釉。底部脇に団子状の脚が 1 つ遺存。底部に煤付着。
353	T-185	1 区	J13	b22	342	第 3 面		堺	焼締陶器	擂鉢	15%	(22.8)	(7.4)	-	細い摺り目を密に施す。櫛目の単位は 10 条 /1.7㎝。反転復元。
354	T-183	1 区	J13	b・c19・20	342	第 3 面		丹波	陶器	徳利	20%	-	(3.5)	(5.4)	外面褐釉。内面無釉。底部砂付着。反転復元。
355	T-218	1 区	J13	g19・20	436	第 3 面			土師器	灯明皿	30%	12.8	1.9	6.0	内外面ナデ調整。外底面指押さえ。よく水簸されている。反転復元。
356	T-218	1 区	J13	g19・20	436	第 3 面			土師器	皿	25%	26.2	2.7	10.2	体部は斜め外方に直線的に立上り、口縁端部はやや外反する。よく水簸されている。反転復元。
357	T-218	1 区	J13	g19・20	436	第 3 面		瀬戸美濃系	施釉陶器	皿	40%	11.2	2.0	6.6	高台内以外は灰釉を施釉。反転復元。
358	T-218	1 区	J13	g19・20	436	第 3 面		肥前系	染付	碗	50%	-	(7.2)	4.8	高台畳付以外は施釉。外側面に線描で青海波文。畳付は釉を掻取り。一部反転復元。
359	T-218	1 区	J13	g19・20	436	第 3 面		肥前系	施釉陶器	碗	10%	-	(3.5)	4.6	施釉は灰釉の上に白化粧土を掛け、体部下端で釉垂れとなっている。畳付は釉掻き取り。反転復元。
360	T-218	1 区	J13	g19・20	436	第 3 面		肥前系	染付	不明	-	-	(1.3)	5.0	底部のみ遺存。底部外面碁笥底。高台畳付釉掻き取り。砂付着。
361	T-218	1 区	J13	g19・20	436	第 3 面		瀬戸美濃系	施釉陶器	壺	-	-	(6.0)	7.0	底部から体部下半まで遺存。体部外面に鉄釉。被熱痕有り。一部反転復元。
362	T-194	1 区	J13	i ～ k21	360	第 3 面			土師器	皿	25%	11.6	2.1	5.2	態度はよく水簸され、器壁は薄い。反転復元。
363	T-194	1 区	J13	i ～ k21	360	第 3 面			土師器	皿	10%	10.4	1.4	5.0	態度はよく水簸され、器壁は薄い。反転復元。
364	T-194	1 区	J13	i ～ k21	360	第 3 面		肥前系	染付	碗	10%	12.0	5.5	4.8	口縁部に二重圏線、高台際に一重圏線で区画し、中に花卉文を描く。高台側面にも二重圏線。銘款は『大明嘉靖年製』と思われる。反転復元。
365	T-193	1 区	J13	j ・k22	360	第 3 面		肥前系	染付	碗	10%	10.4	(4.8)	-	外面口縁端部に二重圏線。外面の文様は花卉文。胎土中に気泡。
366	T-194	1 区	J13	i ～ k21	360	第 3 面		肥前系	染付	碗	20%	-	(4.5)	4.8	外面下端から畳付および高台内は無釉。反転復元銘款は『大明嘉……』までで、靖年製であろう。
367	T-194	1 区	J13	i ～ k21	360	第 3 面		肥前系	染付	碗	25%	9.2	4.8	3.2	畳付砂付着。内外面粗い貫入。外面口縁端部と高台に二重圏線を巡らす。内面も口縁端部と見込み外縁に圏線を巡らす。反転復元。
368	T-194	1 区	J13	i ～ k21	360	第 3 面		肥前系	染付	碗	40%	-	(3.5)	4.9	畳付に砂付着。全面に細かな貫入。文様不明。一部反転復元。
369	T-195	1 区	J13	i ～ k22	360	第 3 面		中国製	青花	碗	15%	-	(2.8)	4.4	漳洲窯。饅頭心。外面に簡略化した牡丹唐草文。畳付に粗い砂が多量に付着する。反転復元。
370	T-194	1 区	J13	i ～ k21	360	第 3 面		肥前系	青磁	碗	10%	10.4	(5.1)	-	内外面に貫入。器形は体部下方に段が付き若干屈曲する。反転復元。
371	T-193	1 区	J13	j ・k22	360	第 3 面		肥前系	瑠璃釉	碗	25%	11.0	6.4	5.0	内外面に瑠璃釉を施釉。口縁は端反。高台釉掻取り。反転復元。
372	T-194	1 区	J13	i ～ k21	360	第 3 面		肥前系	施釉陶器	皿	40%	12.4	3.7	4.6	高台および見込みに砂目。反転復元。
373	T-193	1 区	J13	j ・k22	360	第 3 面		肥前系	施釉陶器	碗	40%	-	(3.3)	4.6	体部下端から高台のみ遺存。内外面に微細な貫入。高台畳付に砂付着。一部反転復元。
374	T-194	1 区	J13	i ～ k21	360	第 3 面		肥前系	染付	皿	10%	20.5	(4.6)	7.6	内面の文様は底面に草花文、口縁端部は列点状文が巡る。外面は無文。口縁端部は折縁となる。高台畳付に砂付着。施釉は畳付以外。反転復元。
375	T-194	1 区	J13	i ～ k21	360	第 3 面		肥前系	染付	皿	30%	24.2	3.4	5.4	稜花皿。型打ち。高台畳付内部に砂付着。内面の口縁部下に渦紋を巡らす。内底面に線描きで葉文を入れ、周囲は濃み地。反転復元。
376	T-193	1 区	J13	j ・k22	360	第 3 面		中国	青花	皿	30%	13.6	2.9	8.4	漳州窯。底部にカンナ痕。畳付に粗い砂付着。内側面の図柄は竜か？反転復元。
377	T-195	1 区	J13	i ～ k22	360	第 3 面		中国製	青花	皿	20%	15.8	2.8	9.0	漳州窯。底部にカンナ痕。畳付に粗い砂付着。反転復元。
378	T-194	1 区	J13	i ～ k21	360	第 3 面		肥前系	青磁染付	皿	-	-	(2.3)	-	口縁部は端反。内面菊花型押し。反転復元。
379	T-194	1 区	J13	i ～ k21	360	第 3 面		肥前系	染付	皿	10% 以下	20.8	(3.5)	-	口縁部は端反り。。反転復元。
380	T-195	1 区	J13	i ～ k22	360	第 3 面		中国製	青磁	盤	10% 以下	25.6	(2.8)	-	龍泉窯青磁盤。内面は型押しによる花弁模様。口錆。反転復元。
381	T-194	1 区	J13	i ～ k21	360	第 3 面		肥前系	施釉陶器	碗	10%	12.8	(5.8)	-	口縁部は外販する。二次焼成を受け被熱のため変質。反転復元。
382	T-194	1 区	J13	i ～ k21	360	第 3 面		肥前系	施釉陶器	碗	15%	-	(2.4)	5.3	底部のみ遺存。高台は露胎となる。釉薬は長石成分の多い灰釉。一部反転復元。

報告書 No.	登録 No.	地区	大区画	小区画	遺構 No.	検出面	層位	産地	種類	器種	残存率	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	備考
383	T-193	1 区	J13	j・k22	360	第 3 面		肥前系	施釉陶器	皿	40%	11.4	3.2	3.8	見込み胎土目。高台外に胎土目貼り付く。一部反転復元。
384	T-194	1 区	J13	i ～ k21	360	第 3 面		肥前系	施釉陶器	皿	70%	11.0	3.0	3.6	灰釉施釉。高台内に兜巾。見込みに胎土目。
385	T-195	1 区	J13	i ～ k22	360	第 3 面		肥前系	施釉陶器	皿	30%	11.6	3.7	4.0	歪み著しい。見込みと口縁部の立上りの境目にキツイ段が付く。反転復元。
386	T-195	1 区	J13	i ～ k22	360	第 3 面		肥前系	施釉陶器	皿	-	-	-	-	灰釉溝縁皿。三枚が溶着する。内底部と高台畳付に砂目。
387	T-194	1 区	J13	i ～ k21	360	第 3 面		肥前系	施釉陶器	皿	30%	-	(2.5)	7.3	内外面に細かな貫入。見込みおよび高台に砂目。
388	T-194	1 区	J13	i ～ k21	360	第 3 面		肥前系	施釉陶器	大皿	10% 以下	36.2	(5.6)	-	体部上端で口縁部が鍔縁状となる。内面は白化粧土の上に簡略な鉄絵を描く。反転復元。
389	T-193	1 区	J13	j・k22	360	第 3 面		肥前系	施釉陶器	鉢	10%	35.0	(7.9)	-	絵唐津 (内面白濁釉で上から鉄絵)。胴部は屈曲して口縁部に達する。反転復元。鉢としたが皿形態か？
390	T-194	1 区	J13	i ～ k21	360	第 3 面		肥前系	施釉陶器	鉢	10%	13.2	(4.9)	-	片口鉢か？口縁部は玉縁。外面体部中位まで銅緑釉を施釉。二次焼成をうける。反転復元。
391	T-194	1 区	J13	i ～ k21	360	第 3 面		肥前系	施釉陶器	鉢？	15%	13.4	(3.4)	-	二次焼成を受け釉が変質。内外面は銅緑釉か？口唇部に刻み目。反転復元。
392	T-194	1 区	J13	i ～ k21	360	第 3 面		肥前系	施釉陶器	鉢	20%	-	(4.0)	6.8	底部のみ遺存。外面に白濁釉で施文。割高台。被熱痕有り。反転復元。
393	T-194	1 区	J13	i ～ k21	360	第 3 面		肥前系	施釉陶器	皿	25%	22.5	6.1	8.3	見込みに砂目。体部内面に白化粧土刷毛目を施し、その上から鉄絵。高台は無釉。二次焼成をうけ釉薬が一部変色。反転復元。
394	T-195	1 区	J13	i ～ k22	360	第 3 面		瀬戸美濃系	施釉陶器	皿	25%	(13.4)	3.7	-	灰釉皿。平面形は楕円を呈す。三脚が付くが一脚。のみ遺存。畳付以外に全面施釉。内側面型押し。見込みに粗い貫入。反転復元。
395	T-194	1 区	J13	i ～ k21	360	第 3 面		瀬戸美濃系	施釉陶器	盤	25%	30.0	9.0	17.0	灰釉盤。内面に鉄釉で絵付。内面口縁部中位に 4 本櫛で波状文を巡らす。二次焼成を受ける。反転復元。
396	T-194	1 区	J13	i ～ k21	360	第 3 面		肥前系	染付	仏飯器	55%	8.8	7.1	4.6	外面は花（菊）唐草文。高台内無釉。一部反転復元。
397	T-195	1 区	J13	i ～ k22	360	第 3 面		肥前系	青磁	蓋	25%	(7.0)	(1.2)	-	合子の蓋。推定復元。内面側面は露胎。
398	T-195	1 区	J13	i ～ k22	360	第 3 面		中国製	青花	蓋	15%	8.8	(3.3)	-	漳州窯。外縁に連続文が巡る。反転復元。
399	T-195	1 区	J13	i ～ k22	360	第 3 面		肥前系	染付	香炉	10% 以下	-	(5.1)	-	色絵香炉。被熱により上絵変色。山水文か？内面無釉。
400	T-194	1 区	J13	i ～ k21	360	第 3 面		肥前系	染付	茶入れ？	55%	3.4	5.5	4.0	外面の口縁端部に帯状の文様を巡らし、上下の区画線の間には如意雲？と笹を描く。高台畳付釉掻き取り。畳付砂付着。濃茶入れか？
401	T-194	1 区	J13	i ～ k21	360	第 3 面		肥前系	青磁	蓋	45%	8.6	3.0	-	小壺の蓋。摘みは環状。一部反転復元。外面被熱。
402	T-194	1 区	J13	i ～ k21	360	第 3 面		肥前系	染付	瓶	15%	-	(4.5)	5.4	花瓶か？底部のみ遺存。高台および高台脇は無釉。文様は底部近くに一重区画圏線を巡らし、上部に文様を描く。
403	T-194	1 区	J13	i ～ k21	360	第 3 面		肥前系	青磁	香炉	20%	4.6	(5.0)	-	外面に若干の粗い貫入。反転復元。
404	T-194	1 区	J13	i ～ k21	360	第 3 面		肥前系	染付	壺	不明	-	(11.1)	-	口縁部～頸部と高台部欠損。文様は草花文と思われ、下方には太い区画線が巡る。反転復元。遺存する最大胴径 15.0㎝。
405	T-194	1 区	J13	i ～ k21	360	第 3 面		肥前系	白磁	壺	5%	-	(2.8)	8.5	底部のみ遺存。高台畳付砂付着。高台畳付釉掻き取り。反転復元。
406	T-194	1 区	J13	i ～ k21	360	第 3 面		肥前系	白磁	瓶	10% 以下	5.0	(4.0)	-	口縁端部から頸部半部まで遺存。
407	T-194	1 区	J13	i ～ k21	360	第 3 面		肥前系	染付	瓶	10%	-	(9.9)	-	花瓶か？口縁から頸部まで遺存。鶴首。文様は簡略化した草花文か？反転復元。最大径 9.6㎝。
408	T-194	1 区	J13	i ～ k21	360	第 3 面		備前	焼締陶器	徳利	10%	1.8 ～ 2.2	(6.3)	-	口縁から頸部が遺存。口縁部は歪む。一部反転復元。
409	T-194	1 区	J13	i ～ k21	360	第 3 面		備前	焼締陶器	徳利	10%	-	(6.2)	7.5	外面体部下端から底部にかけて火襷。反転復元。
410	T-194	1 区	J13	i ～ k21	360	第 3 面		備前	焼締陶器	壺	10%	-	(4.3)	10.8	底部回転糸切。反転復元。
411	T-193	1 区	J13	j・k22	360	第 3 面		備前	焼締陶器	水指？	40%	-	(7.4)	8.6	底部に○の中に上？のスタンプあり。一部反転復元
412	T-194	1 区	J13	i ～ k21	360	第 3 面		信楽	焼締陶器	壺	-	-	(12.0)	-	耳付花瓶。頸部から肩部のみの遺存。頸部から肩部にかけて自然釉が掛かる。長石多量に入る。反転復元。頸部径 10.6㎝。
413	T-194	1 区	J13	i ～ k21	360	第 3 面		肥前系	焼締陶器	火入れ	20%	-	(4.8)	10.8	胎土に長石粒を多量に含む。反転復元。
414	T-194	1 区	J13	i ～ k21	360	第 3 面		肥前系	焼締陶器	鉢	-	-	(12.1)	-	唐津鉢。口縁部は外折。体部上方に一重沈線が巡る。二次焼成をうける。反転復元。
415	T-194	1 区	J13	i ～ k21	360	第 3 面		大和？	土師質土器	鉢	10%	17.8	(5.0)	-	胎土に雲母を含む。外面横方向のヘラ磨き。反転復元。
416	T-196	1 区	J13	i ～ k21	361	第 3 面			土師器	皿	20%	9.4	1.8	-	よく水簸されている。内面は体部と見込みの境に強いナデにより段付く。反転復元。
417	T-196	1 区	J13	i ～ k21	361	第 3 面		中国製	青花	碗	10% 以下	-	(4.2)	-	景徳鎮。外面口縁部に二重圏線。体部の文様は不明。
418	T-196	1 区	J13	i ～ k21	361	第 3 面		中国製	青花	碗	10%	-	(3.3)	4.8	景徳鎮。畳付釉掻き取り。反転復元。
419	T-196	1 区	J13	i ～ k21	361	第 3 面		肥前系	染付	皿	30%	-	(2.2)	5.8	高台畳付は釉削り取り。畳付砂付着。反転復元。
420	T-197	1 区	J13	i ～ k22	361	第 3 面		肥前系	染付	皿	10% 以下	-	(2.9)	-	口縁端部は折縁となり、内面に列点文を描く。反転復元。
421	T-197	1 区	J13	i ～ k22	361	第 3 面		肥前系	染付	皿	10%	14.0	(3.0)	-	初期伊万里。口縁端部は端反。内面の文様は不明。反転復元
422	T-196	1 区	J13	i ～ k21	361	第 3 面		肥前系	染付	皿	15%	-	(1.3)	12.4	内底に鳥を描き、太い圏線で区画する。畳付釉掻き取り。外底の銘款は欠損のため判読不明。反転復元。
423	T-196	1 区	J13	i ～ k21	361	第 3 面		中国製	青花	皿	45%	14.4	3.2	8.4	漳州窯。蚊龍文を描く。底部にカンナ痕。畳付に粗い砂付着。反転復元。
424	T-197	1 区	J13	i ～ k22	361	第 3 面		中国製	青花	皿	25%	14.0	2.9	7.6	漳洲窯。高台に粗い砂付着。外底面にカンナ痕。反転復元。
425	T-196	1 区	J13	i ～ k21	361	第 3 面		肥前系	染付	皿	10%	-	(2.5)	7.4	畳付釉掻取り。反転復元
426	T-197	1 区	J13	i ～ k22	361	第 3 面		肥前系	青磁染付	皿	10% 以下	-	(2.5)	-	内面菊花型押し。見込みは染付。669 と同一個体。反転復元。
427	T-196	1 区	J13	i ～ k21	361	第 3 面		肥前系	染付	瓶	10%	-	(6.4)	5.3	花瓶か？高台畳付釉削り取り。体部下方と高台側面に一重圏線を巡らす。体部の図柄は不明。反転復元。
428	T-196	1 区	J13	i ～ k21	361	第 3 面		肥前系	施釉陶器	皿	25%	12.8	3.3	4.4	溝縁皿。見込みに砂目。高台内にも若干砂付着。施釉は外面口縁部から内面。反転復元。
429	T-196	1 区	J13	i ～ k21	361	第 3 面		肥前系	施釉陶器	皿	40%	11.4	3.3	4.3	外面体部中位から内面に灰釉を施釉。反転復元。
430	T-197	1 区	J13	i ～ k22	361	第 3 面		肥前系	施釉陶器	皿	20%	21.0	3.0	-	見込みおよび高台に砂目。口縁部は鍔縁。胎土はよく水簸され、淡黄白色を呈する。反転復元。
431	T-197	1 区	J13	i ～ k22	361	第 3 面		肥前系	施釉陶器	大皿	20%	-	(4.7)	11.0	刷毛目唐津。反転復元。

報告書 No.	登録 No.	地区	大区画	小区画	遺構 No.	検出面	層位	産地	種類	器種	残存率	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	備　　考
432	T-196	1 区	J13	i ～ k21	361	第 3 面		肥前系	施釉陶器	大皿	10% 以下	-	(8.9)	-	見込みに被熱痕あり。一部銅緑釉と灰釉が刷毛目状になる。
433	T-196	1 区	J13	i ～ k21	361	第 3 面		肥前系	施釉陶器	大皿	10% 以下	-	(4.4)	11.3	見込みに砂目。内面は白化粧土の上に鉄釉の絵付けを施す。二次焼成をうけ釉が変色。反転復元。
434	T-196	1 区	J13	i ～ k21	361	第 3 面		肥前系	施釉陶器	鉢	10%	-	(7.6)	(10.0)	外面は鉄釉掛けの後褐釉掛けか？内面は灰釉が青緑色に発色しているのか？反転復元。
435	T-197	1 区	J13	i ～ k22	361	第 3 面		瀬戸美濃系	施釉陶器	皿	15%	-	1.6	7.4	底部のみ遺存。内面に粗い貫入。灰釉皿。
436	T-196	1 区	J13	i ～ k21	361	第 3 面		備前	焼締陶器	鉢	10% 以下	28.6	(6.0)	-	反転復元。
437	T-196	1 区	J13	i ～ k21	361	第 3 面		肥前系	施釉陶器	壺	5%	8.4	(3.8)	-	口縁部は玉縁状となる。施釉は口縁部および頸部下方に鉄釉（泥漿）を施す。反転復元。
438	T-176	1 区	J13	i・j・16・17	350	第 3 面			土師器	灯明皿	85%	9.6	1.9	6.1	底部糸切。口縁端部の大半に煤付着。
439	T-176	1 区	J13	i・j・16・17	350	第 3 面			土師器	灯明皿	75%	10.4	1.9	4.4	底部糸切。口縁端部の大半に煤付着。
440	T-268	1 区	J13	j16・17	350	第 3 面			土師器	皿	98%	7.3	1.6	-	底部に指頭圧痕。内側面は強いナデ。
441	T-267	1 区	J13	i・j17	350	第 3 面		備前	焼締陶器	灯明皿	30%	9.0	1.7	-	口縁に煤付着。石組第 3 面
442	T-176	1 区	J13	i・j・16・17	350	第 3 面			土師器	灯明受皿	90%	10.6	1.9	4.2	外面に透明釉を施釉。底部糸切。外面下半はヘラ削り。外側口縁に煤付着。
443	T-176	1 区	J13	i・j・16・17	350	第 3 面			土師器	秉燭	90%	10.0	3.2	3.8	内外面に透明釉を施釉。体部上方の両側に焼成前に径 1 mm 程度の穿孔をする。底部糸切。灯芯部は欠損。
444	T-176	1 区	J13	i・j16・17	350	第 3 面		肥前系	染付	碗	80%	9.8	5.2	4.4	内外面に網目状の文様。外底は二重方形枠内に渦福。高台畳付に砂付着。
445	T-173	1 区	J13	i・j16・17	350	第 3 面		肥前系	染付	碗	75%	10.0	5.0	4.3	外面は花唐草文。内面は無文。外底面は二重方形枠に渦福。内外面に細かい貫入。
446	T-268	1 区	J13	j16・17	350	第 3 面		肥前系	染付	碗	20%	-	(1.7)	4.4	底部のみ遺存。高台畳付の釉削り取り。高台内の二重方形枠内に渦福。
447	T-176	1 区	J13	i・j16・17	350	第 3 面		肥前系	染付	碗	40%	9.6	5.5	4.0	外面は二重網目文で、内面は一重網目文。内底に菊紋。畳付は釉削り取り。砂付着。反転復元。
448	T-173	1 区	J13	i・j16・17	350	第 3 面		肥前系	染付	碗	100%	10.0	5.2	4.4	外面に丸文。高台畳付は釉削り取り。口縁端部に煤が巡る。
449	T-268	1 区	J13	j16・17	350	第 3 面		肥前系	染付	碗	45%	10.6	5.1	4.0	内底面蛇の目釉剥ぎ。外面は印判による施文。高台畳付きの釉削り取り。砂付着。口縁部に被熱痕。
450	T-268	1 区	J13	j16・17	350	第 3 面		肥前系	染付	碗	60%	-	(4.3)	4.0	内底面蛇の目釉剥ぎ。高台は釉削り取り。砂付着。
451	T-176	1 区	J13	i・j16・17	350	第 3 面		肥前系	染付	碗	100%	10.8	6.0	4.0	外面に草花文。内底面は蛇の目釉剥ぎ。畳付は釉削り取り。砂付着。
452	T-176	1 区	J13	i・j・16・17	350	第 3 面		肥前系	陶胎染付	碗	45%	11.4	7.8	6.2	施釉は高台畳付以外。施文は外面に唐草文。内外面に貫入。畳付釉削り取り。畳付砂付着。反転復元。
453	T-176	1 区	J13	i・j・16・17	350	第 3 面		肥前系	陶胎染付	碗	30%	10.5	7.4	4.3 ～ 4.4	施釉は高台畳付以外。施文は外面に山水文。内外面に貫入。畳付釉削り取り。畳付砂付着。反転復元。
454	T-176	1 区	J13	i・j・16・17	350	第 3 面		京・信楽系	施釉陶器	碗	65%	11.6	6.7	5.2	内外面灰釉を施釉。細かい貫入。高台は露胎。鉄絵で草を描く。
455	T-176	1 区	J13	i・j・16・17	350	第 3 面		京・信楽系	施釉陶器	鉢	60%	10.8	5.8	4.1	内外面に透明釉を施釉。高台は露胎。内底面に目跡。外面には鉄絵で笹文を描く。
456	T-176	1 区	J13	i・j16・17	350	第 3 面		肥前系	染付	蓋	85%	9.4	2.6	-	丸碗の蓋。外面にの文様は滲む。摘み内に二重方形枠に渦福。内面は端部に四方襷、中央は二重圏線内に五弁花。つまみの径は 3.8㎝。
457	T-173	1 区	J13	i・j16・17	350	第 3 面		肥前系	染付	輪花皿	90%	10.8	2.5	5.5	内面は印判による菊紋。高台畳付は釉削り取り。
458	T-173	1 区	J13	i・j16・17	350	第 3 面		肥前系	染付	皿	40%	12.0	3.1	7.4	外面は唐草文。内面は濃みによる図柄（不明）。高台畳付は釉削り取り。
459	T-176	1 区	J13	i・j16・17	350	第 3 面		肥前系	染付	皿	65%	12.3	3.6	3.7	絵付けは内面に一筋の葉文？を描く。内底面は蛇の目釉剥ぎ。外面下半から高台は無釉。
460	T-176	1 区	J13	i・j・16・17	350	第 3 面		肥前系	染付	皿	90%	12.0	3.8	4.4	内底面は蛇の目釉剥ぎ。施文は体部内面に簡略な文様。
461	T-176	1 区	J13	i・j・16・17	350	第 3 面		肥前系	染付	猪口	48%	7.0	5.0	3.4	外面口縁部に雨降り文。高台畳付は釉削り取り、砂付着。
462	T-176	1 区	J13	i・j16・17	350	第 3 面		肥前系	染付	猪口	48%	9.2	6.0	502	蕎麦猪口。口縁部は端反。外面は山水文を描く。外底面には二重方形枠に渦福。内外面に細かい貫入。反転復元。
463	T-176	1 区	J13	i・j・16・17	350	第 3 面		肥前系	青磁染付	猪口	95%	9.2	6.0	4.5	口縁部は端反。口錆。高台畳付の釉は削り取り。内底面に五弁花、外底面には二重方形枠内に渦福。
464	T-267	1 区	J13	i・j17	350	第 3 面		肥前系	白磁	小杯	20%	6.0	2.6	3.1	高台畳付の釉削り取り。反転復元。石組第 3 面
465	T-176	1 区	J13	i・j・16・17	350	第 3 面		京・信楽系	施釉陶器	碗	45%	6.6	3.5	2.5	内外面に灰釉を施釉し、赤絵具を中心とした上絵付けを施す。上絵付けの色がとんでいる。高台は無釉。内外面に細かい貫入。
466	T-176	1 区	J13	i・j・16・17	350	第 3 面		京・信楽系	施釉陶器	碗	60%	-	(3.5)	3.1	内外面に灰釉もしくわ透明釉を施釉し、緑絵具を中心とした上絵付けを施す。高台は無釉。内外面に細かい貫入。
467	T-176	1 区	J13	i・j・16・17	350	第 3 面		肥前系	施釉陶器	香炉	80%	8.8,10.0	8.4	6.6	器形は側面に 5 分割の括れを入れ、花弁を模る。施釉は灰釉を内面中程から外面に施す。高台は露胎となる。外面には鉄釉で竹を描く。内外面には細かい貫入。
468	T-176	1 区	J13	i・j・16・17	350	第 3 面		肥前系	染付	仏飯器	85%	7.4	5.4	4.1	外面に雨降り文を描く。
469	T-176	1 区	J13	i・j・16・17	350	第 3 面		肥前系	施釉陶器	仏飯器	98%	8.0	5.5	4.4	二次焼成をうけ釉は灰白色に変色。外面唐草文。
470	T-176	1 区	J13	i・j・16・17	350	第 3 面		肥前系	施釉陶器	香炉	60%	9.9	7.6	5.6	外面刷毛目。二次焼成をうける。施釉は内面上端から外面は高台側面まで。一部反転復元。
471	T-268	1 区	J13	j16・17	350	第 3 面		肥前系	染付	瓶	70%	-	(7.0)	3.6	花生？外面に草花文。高台畳付の釉削り取り。
472	T-176	1 区	J13	i・j16・17	350	第 3 面		肥前系	染付	瓶	98%	3.2	20.5	7.8	外面の絵柄は花卉文に鳥、丸窓の中に AD のアルファベットを描く。突出した二重の口は栓をした後、布等を紐で縛るためのもの。畳付は釉削り取り。畳付に砂付着。
473	T-174	1 区	J13	i・j・16・17	350	第 3 面			施釉陶器	土瓶	不明	-	-	-	土瓶の注口部のみ残存。灰釉を施釉。面取りをした S 字状の注口部。中心で貼合せ整形。
474	T-176	1 区	J13	i・j・16・17	350	第 3 面			施釉陶器	鍋	48%	15.0	8.1	7.0	内外面に鉄釉を施釉。環状の把手を対象位置の口唇部に貼り付ける。底部は団子状の三足（一足のみ遺存）を貼付ける。底部全面に煤が付着。反転復元。
475	T-176	1 区	J13	i・j16・17	350	第 3 面		瀬戸美濃系？	施釉陶器	水注	98%	9.4	15.9	11.7	外面は灰釉を施釉。陽刻線により外面を 8 分割。把手は貼付け。畳付は釉削り取り。
476	T-176	1 区	J13	i・j・16・17	350	第 3 面			土師質土器	焙烙	30%	24.0	(5.2)	-	胎土に雲母粒が入る。反転復元。
477	T-175	1 区	J13	i・j・16・17	350	第 3 面			土師質土器	焙烙	40%	27.2	6.2	-	体部の一部分が高熱をうけ硬質となる。焼成時なのか二次焼成をうけたのか判断し難い。
478	T-176	1 区	J13	i・j・16・17	350	第 3 面			土師質土器	焙烙	40%	28.4	5.2	-	外面に煤付着。瓶部は扁平。
479	T-176	1 区	J13	i・j・16・17	350	第 3 面			土師質土器	焙烙	80%	32.0	9.5	-	両側口唇部に 6 ～ 7 mm の穿孔あり。胎土に雲母粒が入る。

報告書 No.	登録 No.	地区	大区画	小区画	遺構 No.	検出面	層位	産地	種類	器種	残存率	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	備　　考
480	T-176	1 区	J13	i・j16・17	350	第 3 面			土師質土器	土堝	10%	40.6	(7.3)	-	外面上半はナデ、下半はケズリ。
481	T-268	1 区	J13	j16・17	350	第 3 面		堺	焼締陶器	擂鉢	20%	-	(7.5)	17.6	外底に簀状の圧痕。擂り目の単位は８本 /2.2㎝。反転復元
482	T-177	1 区	J13	j16・17	350-⑤	下層		堺	焼締陶器	擂鉢	80%	34.7 ～ 35.1	13.9	14.6	櫛目の単位は７本 /3.5㎝。内底面にクロス状の擂り目。
483	T-268	1 区	J13	j16・17	350	第 3 面			土師質土器	風炉	40%	38.2	22.9	30.5	外側面ミガキ。１単位７本櫛の波状文を外側面に４条巡らす。三足の支脚を貼りつける。
484	T-227	1 区	J13	j・k・13・14	451	第 3 面			土師器	皿	80%	9.8 ～ 10.8	1.8 ～ 2.4	-	口縁部は肥厚する。歪み著しい。灯明皿として使用した痕跡は認められない。反転復元。
485	T-227	1 区	J13	j・k・13・14	451	第 3 面			土師器	皿	100%	10.3 ～ 10.7	2.3 ～ 3.0	-	口縁部は肥厚する。歪み著しい。灯明皿として使用した痕跡は認められない。
486	T-227	良好	J13	j・k・13・14	451	第 3 面			土師器	皿	60%	9.8 ～ 10.1	1.5 ～ 2.5	-	口縁部は肥厚する。歪み著しい。灯明皿として使用した痕跡は認められない。
487	T-227	1 区	J13	j・k・13・14	451	第 3 面			土師器	皿	70%	11.2	3.0	-	口縁部は肥厚する。灯明皿として使用した痕跡は認められない。
488	T-227	1 区	J13	j・k・13・14	451	第 3 面			土師器	皿	45%	11.4	3.0	-	口縁部は肥厚する。歪み著しい。灯明皿として使用した痕跡は認められない。反転復元。
489	T-228	1 区	J13	j 13	451	第 3 面	中層		土師質土器	焼塩壺蓋	60%	6.9	1.7	-	外面はナデ調整。内面に指押さえによる指頭痕が確認できる。
490	T-228	1 区	J13	j 13	451	第 3 面	中層	肥前系	施釉陶器	小杯	30%	6.6	4.1	2.1	灰釉を施釉。体部下半は無釉。
491	T-228	1 区	J13	j 13	451	第 3 面	中層	瀬戸美濃系	施釉陶器	向付	40%	9.8 × 9.8	8.2	5.2	志野四方向付。内外全面に長石釉を施釉し、粗い貫入が入る。外面に鉄釉で絵付け。碁笥底。反転復元。
492	T-227	1 区	J13	j・k・13・14	451	第 3 面		瀬戸美濃系	施釉陶器	向付	30%	8.5 × 8.5	8.3	5.8	志野四方向付。内外全面に長石釉を施釉し、粗い貫入が入る。碁笥底。底部に重焼き痕。反転復元。
493	T-227	1 区	J13	j・k・13・14	451	第 3 面		備前	焼締陶器	擂鉢	25%	31.0	11.9	14.0	放射状の擂り目を粗くひく。擂り目の単位は 11 本 / ４㎝。
494	T-233	1 区	J13	n・m19	442	第 3 面		肥前系	染付	碗	401%	10.0	5.1	4.4	外面草花文を描く。高台畳付は釉削り取り。一部反転復元
495	T-233	1 区	J13	n・m19	442	第 3 面		肥前系	染付	碗	40%	12.6	6.5	5.0	外面に紅葉を描く。内底に五弁花、外底に二重方形枠内に渦福を描く。体部は高台脇から斜め上方に直線的に立上る。一部反転復元。
496	T-233	1 区	J13	n・m19	442	第 3 面		肥前系	染付	碗	20%	-	(1.9)	4.0	底部のみ遺存。外面は丸文散らし。内底に五弁花。外底は二重方形枠内に渦福。畳付は釉掻取り。一部反転復元
497	T-233	1 区	J13	n・m19	442	第 3 面		肥前系	染付	碗	50%	-	(3.4)	4.1	高台部は無釉。高台畳付を平坦に削る。。畳付に砂付着。外面の図柄は欠損のため不明。
498	T-233	1 区	J13	n・m19	442	第 3 面		中国	青花	碗	45%	11.5	5.9	4.6	施文は内底面に二重圏線、高台際に一重と二重圏線のみ。外底面に一重圏線内に迫力のある「大明成化年製」の銘款。内外面に粗い貫入。一部反転復元。
499	T-233	1 区	J13	n・m19	442	第 3 面		中国	青花	碗	20%	-	(2.5)	4.0	漳洲窯。饅頭心。施文は内底部に一重圏線内に花弁文、外面は不明。施釉前に漢字の「十」の様な墨書あり。畳付に砂付着。内外面に貫入。一部反転復元。
500	T-233	1 区	J13	n・m19	442	第 3 面		肥前系	染付	皿	90%	12.0	3.0 ～ 2.8	4.8	" 内面中央に二重圏線内に寿の旧字体『壽』を描き、
501	T-233	1 区	J13	n・m19	442	第 3 面		肥前系	染付	小杯	80%	0.8	4.2	2.7	外面に葡萄文か？畳付はゆうを掻き取り、高台内に砂付着。
502	T-233	1 区	J13	n・m19	442	第 3 面		肥前系	染付	鉢	20%	-	(4.9)	-	外形多角形に面取り。高台欠損。小破片のため絵柄は不明。高台部径は割れ口からの計測値 5.2 ㎝。外側には渦が放射状に描かれる。外面は無文。畳付は釉を削り取り、多量の砂付着。
503	T-233	1 区	J13	n・m19	442	第 3 面		肥前系	染付	瓶	10%	-	(3.6)	5.4	外面の文様は不明。畳付釉削り取り。砂付着。
504	T-233	1 区	J13	n・m19	442	第 3 面		肥前系	染付	瓶	-	-	(3.9)	4.6	高台畳付は釉削り取り。砂付着。外面僅かに一重網目文様が遺存。外底の銘款は判読不明（達筆のため）。一部反転復元。
505	T-233	1 区	J13	n・m19	442	第 3 面		肥前系	染付	瓶	50%	-	(7.0)	4.6	外面唐草文を描く。高台畳付の釉削り取り。
506	T-233	1 区	J13	n・m19	442	第 3 面		肥前系	施釉陶器	碗		-	(3.3)	2.0	刷毛目唐津碗。見込みに蛇の目釉剥ぎ。高台畳付は釉掻き取り。畳付に砂付着。反転復元。
507	T-233	1 区	J13	n・m19	442	第 3 面		肥前系	施釉陶器	小碗	20%	-	(3.0)	3.6	内外面に鉄釉を施釉。高台畳付は釉削り取り。反転復元。
508	T-233	1 区	J13	n・m19	442	第 3 面		肥前系	施釉陶器	碗	35%	10.6	6.7	4.4	器形は高台際から上方に立上り、口縁部でやや外反する。施釉は外面は白化粧土、内面は鉄釉。高台畳付に砂付着。内外掛け分け。高台は露胎。見込は円形に釉禿、使用によるものか？一部反転復元。
509	T-233	1 区	J13	n・m19	442	第 3 面		肥前系	施釉陶器	沓茶碗	45%	-	(5.5 ～ 9.1)	4.6	唐津沓茶碗。施釉は外面中位から内面に灰釉を施釉。口錆。白化粧土による刷毛目文。更に上から鉄釉の絵付け？も認められる。高台は低い。
510	T-233	1 区	J13	n・m19	442	第 3 面		肥前系	施釉陶器（唐津）	皿	25%	10.4	3.5	3.6	内外面灰釉を施釉。高台は露胎。口錆。高台内に僅かな兜巾。反転復元。
511	T-233	1 区	J13	n・m19	442	第 3 面		肥前系	施釉陶器	皿	60%	10.6	4.1	4.0	外面中位から内面に灰釉を施釉。高台内に若干の兜巾。一部反転復元。
512	T-233	1 区	J13	n・m19	442	第 3 面		瀬戸美濃系	施釉陶器	碗	40%	-	(3.7)	4.4	内外面鉄釉を施釉。灰釉を掛け流す。高台脇から下部は露胎となる。一部反転復元。
513	T-208	1 区	J13	k17	419	第 3 面		肥前系	染付	碗	50%	9.8	7.3	3.5	外面に鋸歯文状の一重網目文。高台無釉。一部反転復元。
514	T-207	1 区	J13	l・k18	419	第 3 面		肥前系	施釉陶器	皿	40%	11.3	3.7	4.0	外面中位から内面に灰釉を施釉。口唇部に鉄釉を施釉（皮鯨）。内底部に目跡。
515	T-207	1 区	J13	l・k18	419	第 3 面		肥前系	施釉陶器	皿	75%	11.0	3.1	4.3	外面中位から内面に灰釉を施釉。口唇部に鉄釉を施釉（皮鯨）。内底部に目跡。
516	T-209	1 区	J13	m・l18	419 南	第 3 面	南	肥前系	施釉陶器	坏	45%	8.0	5.1	4.0	内外面は灰釉施釉後に長石釉を施釉。美濃唐津。高台は無釉。一部反転復元。
517	T-208	1 区	J13	k17	419	第 3 面		肥前系	施釉陶器	香炉？	40%	12.0	6.2	5.8	口唇部に鉄釉を施釉（皮鯨）。外面体部に鉄釉の泥醤を掛け、刷毛目を施文する。内面と高台は無釉。
518	T-716	1 区	J13	k・l18	419				土師質土器	鞴の羽口	不明	8.2（径）	-	-	残存長 7.5㎝のため長さ不明。直径 2.4㎝の孔を穿つ。
519	T-221	1 区	J13	a18	438	第 3 面			土師器	皿	25%	7.8	1.9	-	底部未調整。口縁部は横ナデにより肥厚する。
520	T-221	1 区	J13	a18	438	第 3 面		瀬戸美濃系	施釉陶器	皿	55%	10.4	2.2	6.2	灰釉内禿皿。一部反転復元。
521	T-610	1 区	J13	h・i17 ～ 19		整地土	第 4 層		土師器	皿	100%	5.4	1.1	-	外面底部は指頭圧痕のためややヘソ気味となる。内外面ナデ。
522	T-610	1 区	J13	h・i17 ～ 19		整地土	第 4 層		土師器	皿	100%	6.0	1.2	-	外面底部は指頭圧痕のためややヘソ気味となる。内外面ナデ。
523	T-610	1 区	J13	h・i17 ～ 19		整地土	第 4 層		土師器	皿	100%	5.2	1.2	-	外面底部は指頭圧痕のためややヘソ気味となる。内外面ナデ。

報告書 No.	登録 No.	地区	大区画	小区画	遺構 No.	検出面	層位	産地	種類	器種	残存率	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	備　　考
524	T-582	1 区	J13	h・i20・21		整地土	第 4 層		土師器	皿	95%	5.9	1.3	-	外面底部は指頭圧痕のためややヘソ気味となる。内外面ナデ。口縁部に煤付着。
525	T-583	1 区	J13	h・i16・17		整地土	第 4 層		土師器	皿	70%	11.2	2.5	5.8	底部糸切。灯明皿としての使用痕跡あり。
526	T-583	1 区	J13	h・i16・17		整地土	第 4 層		土師器	皿	45%	11.6	2.1	7.0	底部糸切痕に簀状の圧痕。灯明皿としての使用痕跡あり。
527	T-583	1 区	J13	h・i16・17		整地土	第 4 層		土師器	皿	60%	11.0	2.6	-	口縁部は横ナデ調整。体部および底部はナデ調整。灯明皿としての使用痕跡あり。
528	T-603	1 区	J13	g・h17・18		整地土	第 4 層		土師器	皿	100%	11.1	2.2	-	底部指押え。口縁部は横ナデ調整。灯明皿としての使用痕が全周する。
529	T-571	1 区	J13	c19・20		整地土	第 4 層	肥前系	施釉陶器	皿	60%	12.7	3.3	4.4	外面中位から内面に灰釉を施釉。内底面は蛇の目釉剥ぎ。
530	T-567	1 区	J13	j・k19 ～ 21		整地土	第 4 層	肥前系	施釉陶器	皿	98%	11.6	3.8	3.8	外面中位から内面に透明釉を施釉。外面の一部と内面に白化粧土で加飾。内底面に砂目 3 箇所。口縁端部 3 箇所を内側に折り曲げる。
531	T-567	1 区	J13	j・k19 ～ 21		整地土	第 4 層	肥前系	施釉陶器	皿	70%	20.0	4.7	6.2	内底面及び畳付きに砂目痕 5 箇所あり。口縁部は鍔縁となる。
532	T-567	1 区	J13	j・k19 ～ 21		整地土	第 4 層	肥前系	施釉陶器	皿	48%	27.6	7.9	10.0	刷毛目唐津皿。内面は白化粧土により刷毛目文様を施す。鉄釉で絵付。反転復元。口縁部は溝縁状となる。
533	T-582	1 区	J13	h・i20・21		整地土	第 4 層	肥前系	染付	碗	45%	10.0	7.1	4.0	外面壽文と山水文で四分割。高台畳付は釉削り取り。畳付に砂付着。反転復元。
534	T-569	1 区	J13	i ～ k19 ～ 21		整地土	第 4 層	肥前系	染付	碗	90%	11.0	7.7	4.6	外面に花卉文。内面無文。高台の釉は削り取り。畳付に砂付着。内外面に粗い貫入
535	T-567	1 区	J13	j・k19 ～ 21		整地土	第 4 層	肥前系	陶胎染付	碗	60%	10.2	7.1	5.2	外面に唐草。高台畳付釉削り取り。体部下位反転復元
536	T-568	1 区	J13	j・k16 ～ 18		整地土	第 4 層	肥前系	施釉陶器	鉢	60%	11.4	6.8	5.0	外面中位から内面に褐釉を施釉。口縁部は玉縁。
537	T-567	1 区	J13	j・k19 ～ 21		整地土	第 4 層	肥前系	施釉陶器	碗	48%	12.2	8.2	5.8	泥醤を刷毛塗り後、灰釉を漬け掛け。畳付は釉掻き取り後調整。反転復元。
538	T-611	1 区	J13	j・k18・19		整地土	第 4 層	肥前系	青磁	碗	40%	11.6	7.0	5.1	外面上位はヘラによる唐草文。畳付き釉掻取り。内外面に粗い貫入。
539	T-581	1 区	J13	k ～ m24･25		整地土	第 4 層	肥前系	瑠璃釉	碗	25%	10.6	6.5	4.8	内外面に瑠璃釉を施釉。高台際は釉が厚く濃色となるが、内外面の上半は薄い発色を呈す。反転復元。
540	T-567	1 区	J13	j・k19 ～ 21		整地土	第 4 層	肥前系	施釉陶器	香炉	45%	11.6	5.6	5.0	施釉は外面下位から内面の口縁直下まで。二次焼成のためか釉色は白濁する。口縁端部を内側に折り曲げる。底部に若干の兜巾。縮緬皺。
541	T-607	1 区	J13	o・p14		整地土	第 4 層	肥前系	施釉陶器	天目茶碗	20%	11.2	5.8	3.8	体部中位から内面褐釉で施釉。内外面は鉄釉で加飾。反転復元。
542	T-568	1 区	J13	j・k16 ～ 18		整地土	第 4 層	瀬戸美濃系	施釉陶器	天目茶碗	40%	-	(7.0)	4.8	外面下位から内面に鉄釉を施釉。外面は下位は厚く釉垂れする。反転復元。
543	T-570	1 区	J13	i・j16		整地土	第 4 層	瀬戸美濃系	施釉陶器	筒茶碗	40%	10.8	8.2	6.4	外面に鳥と山水文を描く。内外面に透明釉を施釉。畳付は釉削り取り。内外器面に貫入がはいる。
544	T-569	1 区	J13	i・k19 ～ 21		整地土	第 4 層	瀬戸美濃系	施釉陶器	皿	99%	11.2	2.2	7.5	鉄絵皿。内底面に鉄釉で絵付け。内底面と外底面に目跡 3 箇所づつあり。外底部は無釉。
545	T-603	1 区	J13	g・h17・18		整地土	第 4 層	瀬戸美濃系	施釉陶器	向付	60%	-	-	-	織部向付。底部に扁平な 3 足を貼付け。内面は秋草と鳥の鉄絵。上部殆ど欠損。
546	T-596	1 区	J13	m・n20・21		整地土	第 4 層	瀬戸美濃系	施釉陶器	向付	70%	5.9	5.8	10.1	織部筒向付。輪積み成形。外面口縁部に緑釉、以下は褐釉を施釉。白土で幾何学文を描き、鉄釉で緑取る。
547	T-573	1 区	J13	j・k24・25		整地土	第 4 層		土師器	秉燭	100%	4.8	2.5	3.0	内底面に灯芯貼付け。灯芯に煤付着。胎土に赤色酸化粒多く含む。
548	T-568	1 区	J13	J･k16 ～ 18		整地土	第 4 層	備前	焼締陶器	擂鉢	25%	23.4	10.6	11.6	櫛目の単位は 11 本 /3.5㎝。摺り目磨滅著しい。胎土に 1 ～ 2mm 大の砂粒を含む。反転復元。
549	T-606	1 区	J13	e・f21・22		整地土	第 4 層	備前	焼締陶器	擂鉢	70%	28.4	11.8	13.6	櫛目の単位は 10 本 /2.5㎝。胎土に 1 ～ 2㎜大の砂粒を多く含む。
550	T-606	1 区	J13			整地土	第 4 層	丹波	焼締陶器	盤	25%	(36.4)	5.7	(25.5)	焼台の痕跡あり。
551	T-612	1 区	J13			整地土	第 4 層		瓦質土器	火鉢		(36.8)		(27.0)	脚の接合面に櫛による掻き目。三脚か？
552	T-595	1 区	J13	h ～ I19・20		整地土	第 4 層	信楽	焼締陶器	壺	80%	10.0	32.0	14.0	（茶壺。）外底部に轆轤軸の痕跡あり。口縁から体部中位まで自然釉が掛かり、底部まで釉垂れ。胎土に長石粒を多量に含む。二次焼成を受けた痕跡あり。
553	T-595	1 区	J13	h・i19・20		整地土	第 4 層	中国	施釉陶器	壺	60%	11.5	(37.5)	-	褐釉四耳壺（茶壺）。胎土に砂粒を多く含む。二次焼成を受けた痕跡あり。
554	T-271	1 区	J13	j・k19	540	第 4 面		肥前系	染付	小碗	99%	7.7	4.0	3.0	外面は草花文。内面は無文。高台畳付は釉削り取り。
555	T-271	1 区	J13	j・k19	540	第 4 面		肥前系	染付	碗	75%	8.4	3.8	3.4	外面に印判で桐文。印判は 6 分割で上下に散らす。内面は無文。
556	T-271	1 区	J13	j・k19	540	第 4 面		肥前系	染付	碗	30%	(9.9)	(5.0)	3.5	外面に草花文。高台は低い。一部反転復元。
557	T-271	1 区	J13	j・k19	540	第 4 面		肥前系	染付	碗	40%	(10.05)	(5.0)	4.0	外面は草花文。内面は無文。
558	T-271	1 区	J13	j・k19	540	第 4 面		肥前系	染付	碗	80%	(9.8)	(4.9)	(4.0)	外面に鶴と松、竹が描かれている。欠損箇所に梅もあるのか？反転復元。
559	T-271	1 区	J13	j・k19	540	第 4 面		肥前系	染付	碗	50%	(10.2)	4.8	4.2	外面に草花文。高台畳付は釉削り取り。内外面に細かい貫入。一部反転復元。
560	T-271	1 区	J13	j・k19	540	第 4 面		肥前系	染付	碗	95%	10.1	4.9	3.9	外面は草花文に蝶文。内面は無文。高台畳付は釉削り取り。
561	T-271	1 区	J13	j・k19	540	第 4 面		肥前系	染付	碗	55%	(9.9)	4.8	4.3	内外面に菊花文を散らす。高台畳付は釉削り取り。一部反転復元。
562	T-271	1 区	J13	j・k19	540	第 4 面		肥前系	染付	碗	55%	(9.6)	(5.15)	4.3	"外面に菊花文と草花文を描く。高台内に渦福。高台畳付に砂付着。内外面に貫入。一部反転復元。
563	T-271	1 区	J13	j・k19	540	第 4 面		肥前系	染付	碗	75%	9.6	5.4	3.9	外面に花唐草文。内面は無文。高台内に潰れた福。
564	T-271	1 区	J13	j・k19	540	第 4 面		肥前系	染付	碗	50%	(11.0)	6.1	(4.3)	外面は草花文。畳付釉削り取り。高台畳付に砂付着。反転復元。
565	T-271	1 区	J13	j・k19	540	第 4 面		肥前系	染付	碗	90%	10.7	5.5	4.0	外面は草花文。見込みは蛇の目釉剥ぎ。高台畳付に砂付着。
566	T-271	1 区	J13	j・k19	540	第 4 面		肥前系	染付	碗	40%	(11.7)	5.7	(5.0)	外面は丸文内に草花を描く。見込みは蛇の目釉剥ぎ。
567	T-271	1 区	J13	j・k19	540	第 4 面		肥前系	青磁染付	碗	45%	(12.0)	6.1	4.8	内面の口縁に四方襷文が巡り、体部は松竹梅文。外底部に銘款（欠損のため不明）。反転復元。
568	T-271	1 区	J13	j・k19	540	第 4 面		肥前系	青磁染付	蓋	33%	(10.5)	3.6	(4.6)	内面の口縁に波状文様をめぐらし、中央は二重圏線の中に牡丹文？を描く。摘み内に二重方形枠で枠内は不明。反転復元。
569	T-271	1 区	J13	j・k19	540	第 4 面		肥前系	染付	猪口	60%	(9.0)	6.1	7.4	口縁は端反。外面には山水文。外底面には二重方形枠渦福。内外面に貫入。反転復元。
570	T-271	1 区	J13	j・k19	540	第 4 面		肥前系	染付	猪口	25%	(8.5)	6.4	6.1	外面は草花文。高台内は二重方形枠内に渦福。一部反転復元。
571	T-271	1 区	J13	j・k19	540	第 4 面		肥前系	染付	猪口	95%	9.3	6.3	6.4	外面は葡萄唐草文と飛蝶を描く。内底面には花卉文。高台畳付は釉削り取り。
572	T-271	1 区	J13	j・k19	540	第 4 面		肥前系	陶胎染付	碗	45%	(11.1)	(7.7)	5.6	外面は上下の圏線内に絵柄（山水文か？）あり。高台畳付は釉掻取り。内外面に貫入。一部反転復元
573	T-273	1 区	J13	k19	540	第 4 面		肥前系	陶胎染付	碗	13%	(10.6)	5.9	-	腰張りの形態。外面の模様は不明（唐草文か？）。二次焼成をうける。反転復元。
574	T-273	1 区	J13	k19	540	第 4 面		京・信楽系	施釉陶器	碗	12%	-	4.8	(5.4)	小杉碗。反転復元。

報告書 No.	登録 No.	地区	大区画	小区画	遺構 No.	検出面	層位	産地	種類	器種	残存率	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	備考
575	T-273	1 区	J13	k19	540	第 4 面		京・信楽系	施釉陶器	碗	60%	(9.3)	5.0	3.3	施釉は褐釉を高台部以外に掛ける。口縁部は内彎する。反転復元。
576	T-271	1 区	J13	j・k19	540	第 4 面		肥前系	施釉陶器	拳骨茶碗	63%	(12.2)	6.8	4.7	内外面に褐釉を施釉。外面は白色の釉を垂らし掛け。二次焼成をうける。高台畳付は釉削り取り。反転復元。
577	T-271	1 区	J13	j・k19	540	第 4 面		肥前系	白磁	皿	20%	(18.2)	(2.85)	(12.3)	色絵稜花皿。高台畳付は釉掻き取り。絵柄は剥落ため ' 不明。反転復元。
578	T-271	1 区	J13	j・k19	540	第 4 面		肥前系	施釉陶器	皿	40%	-	2.8	10 × 6.5	向付か？内型成形。皮鯨。口径は長径 15.1cm、底径の長径（10.0）cm ×短径（6.5）cm。高台は貼付け。内面に草花文と鳥を描く。外底面の方形枠の銘款（不明）。反転復元
579	T-271	1 区	J13	j・k19	540	第 4 面		肥前系	染付	仏飯器	85%	6.9	4.7	3.6	外面は笹文。二次焼成をうける。
580	T-271	1 区	J13	j・k19	540	第 4 面		肥前系	青磁	香炉	25%	(8.2)	5.9	(7.0)	内外面に施釉。高台内は無釉。三足付き。反転復元。
581	T-271	1 区	J13	j・k19	540	第 4 面		肥前系	施釉陶器	大鉢	70%	34.2	12.4	12.9	刷毛目唐津大鉢。外面は体部中位まで鉄釉を刷毛塗りし、それより下位は露胎。内面は白化粧土を施釉し、刷毛目でで直線や波状文を描き、口縁部から褐釉を垂らし掛けする。
582	T-271	1 区	J13	j・k19	540	第 4 面			施釉陶器	土瓶	60%	10.5	12.8	(7.5)	灰釉掛けで笹文（鉄絵）を描く。細かい貫入。注口は S 字状。反転復元。
583	T-273	1 区	J13	k19	540	第 4 面			施釉陶器	土瓶	10%	(9.5)	(10.0)	-	体部上半に鉄釉による笹文（図柄の全容は不明）を描く。反転復元。
584	T-271	1 区	J13	j・k19	540	第 4 面			施釉陶器	土瓶	10% 以下	(4.6)	9.0	-	内外面は灰釉を施釉。外面に鉄釉により松を描く。注口は S 字状。
585	T-273	1 区	J13	k19	540	第 4 面			施釉陶器	土瓶	60%	9.7	9.6	-	鉄釉による花弁（梅）の文様を体部上半に大きく対象位置に描く。注口は S 字状となる。底部に火にかけた痕跡あり。
586	T-271	1 区	J13	j・k19	540	第 4 面			施釉陶器	土瓶	70%	9.0	10.8	(6.7)	外面に笹文（鉄絵）。内外面に細かい貫入。注口は面取りを施した S 字状。反転復元。
587	T-271	1 区	J13	j・k19	540	第 4 面			施釉陶器	燗鍋	30%	(11.4)	11.6	-	内外面に灰釉を施釉。体部下端は熱を受け灰色となる。体部径 11.4cm。
588	T-271	1 区	J13	j・k19	540	第 4 面			施釉陶器	燗鍋	68%	(12.7)	12.2	(7.4)	底部と蓋受けぶ以外は灰釉を施釉。底部に比を受けた痕跡あり。内外面に細かい貫入。反転復元。
589	T-271	1 区	J13	j・k19	540	第 4 面			施釉陶器	燗鍋	80%	13.0	13.4	(6.8)	底部と蓋受けぶ以外は灰釉を施釉。底部に比を受けた痕跡あり。反転復元。
590	T-271	1 区	J13	j・k19	540	第 4 面			施釉陶器	蓋	80%	11.6	2.9	-	燗鍋の蓋。外面は灰釉を施釉。つまみ外径 2.4cm。589 とセットになる。
591	T-271	1 区	J13	j・k19	540	第 4 面		京信楽系？	施釉陶器	蓋	宝殊～口縁部 75%	2.0	3.5	9.4	土瓶の蓋？外面は灰釉を施釉。内面は無釉。
592	T-271	1 区	J13	j・k19	540	第 4 面		備前焼	焼締陶器	灯明皿	30%	(10.8)	1.8	(5.9)	内面は透明釉を施釉。貼付けによる浮文状の耳あり。口唇部と口縁外面に煤付着。反転復元。
593	T-273	1 区	J13	k19	540	第 4 面		京・信楽系	施釉陶器	水滴	70%	7.1	4.7	2.8	上部が欠損する。割れ口から、欠損した上部には鉄釉で細い線描きの施文が施されていたと思われる。
594	T-271	1 区	J13	j・k19	540	第 4 面			施釉陶器	火入れ？	70%	10.7	7.8	6.6	高台部と内面の口縁下から見込みまで無釉。外面の図柄は龍文等を描く。見込みに『小』の墨書あり。施釉範囲は貫入。京・信楽系か？
595	T-271	1 区	J13	j・k19	540	第 4 面			施釉陶器	瓶か？	20%	-	4.6	(4.9)	外面に褐釉を施釉。反転復元。
596	T-271	1 区	J13	j・k19	540	第 4 面		肥前系	染付	瓶	80%	2.1	16.4	5.1	鶴首瓶。外面に草花文。高台畳付は釉を削り取り。反転復元。
597	T-271	1 区	J13	j・k19	540	第 4 面		肥前系	染付	瓶	60%	【推定】2.9	28.3	8.2	外面に蛸唐草文。高台畳付は釉削り取り。体部最大径は 16.0cm。反転復元。
598	T-271	1 区	J13	j・k19	540	第 4 面		肥前系	染付	瓶	25%	-	20.2	-	口縁部と底部が欠損。外面は丸文？で中は菊か？体部最大径 15.7cm。反転復元。
599	T-271	1 区	J13	j・k19	540	第 4 面			土師質土器	焙烙	60%	(16.55)	(5.35)	14.2	轆轤成形。底部は扁平。胎土はよく水簸されている。一部反転復元。内外面ともにうすくまばらに煤付着。
600	T-271	1 区	J13	j・k19	540	第 4 面			土師質土器	焙烙	75%	20.7	5.6	17.3	轆轤成形。底部は扁平。胎土はよく水簸されている。
601	T-271	1 区	J13	j・k19	540	第 4 面			土師質土器	焙烙	48%	(31.2)	(6.5)	(26.8)	胎土に雲母粒が僅かに認められる。外面に煤がまばらに付着。
602	T-271	1 区	J13	j・k19	540	第 4 面		堺	焼締陶器	擂鉢	45%	(29.0)	13.5	(11.4)	擂り目の単位は 14 本 /3.0㎝
603	T-271	1 区	J13	j・k19	540	第 4 面		備前	焼締陶器	擂鉢	75%	(22.4)	8.7	9.4	注ぎ口は穿孔し、外面に注ぎ口を添付。擂り目の単位は 11 本 /4.0㎝。反転復元。
604	T-274	1 区	J13	h・I16 ～ 18	555	第 4 面			土師器	皿	100%	7.8	1.9	4.5	内外面ナデ調整。口縁部はやや内彎気味に立ち上る。
605	T-274	1 区	J13	h・I16 ～ 18	555	第 4 面			土師器	皿	50%	(7.8)	1.75	(5.5)	内外面ナデ調整。内面底に煤（タール）付着。口縁部は歪む。
606	T-274	1 区	J13	h・I16 ～ 18	555	第 4 面			土師器	皿	30%	(11.4)	(2.1)	(5.7)	内外面ナデ調整。口縁部に煤付着。反転復元。
607	T-274	1 区	J13	h・I16 ～ 18	555	第 4 面			土師器	皿	75%	8.5	1.8	5.9	底部糸切で板状の圧痕あり。
608	T-274	1 区	J13	h・I16 ～ 18	555	第 4 面			土師器	皿	35%	(11.0)	(2.7)	(4.2)	底部糸切。口縁部に煤付着。反転復元。
609	T-275	1 区	J13	h・I16 ～ 18	555	第 4 面			土師器	皿	28%	(9.7)	2.0	(6.0)	底部糸切。口縁部内外面に煤付着。反転復元。
610	T-274	1 区	J13	h・I16 ～ 18	555	第 4 面			土師器	皿	85%	10.5	2.0	6.1	底部糸切。口縁部に煤付着。
611	T-274	1 区	J13	h・I16 ～ 18	555	第 4 面			土師質土器	皿	20%	(12.2)	(2.2)	(6.0)	内外面ナデ調整。体部と底部の境を指押さえ。口縁部に煤付着。反転復元。
612	T-274	1 区	J13	h・I16 ～ 18	555	第 4 面			土師器	皿	25%	(11.6)	(2.25)	(6.0)	内外面ナデ調整。反転復元。
613	T-275	1 区	J13	h・I16 ～ 18	555	第 4 面			土師器	皿	45%	(9.7)	2.0	(7.1)	全体に歪みが著しい。外面のきついナデのため口縁部が肥厚する。反転復元。
614	T-275	1 区	J13	h・I16 ～ 18	555	第 4 面			土師器	皿	100%	8.0	1.5	5.5	全体に歪みが著しい。外面のきついナデのため口縁部が肥厚する。
615	T-274	1 区	J13	h・I16 ～ 18	555	第 4 面			土師器	皿	50%	(6.4)	(1.65)	1.25	内外面ナデ調整。器形はややヘソ皿っぽい。口縁部に煤付着。一部反転復元。
616	T-274	1 区	J13	h・I16 ～ 18	555	第 4 面		肥前系	施釉陶器	碗	75%	(10.85)	(7.1)	4.4	内外面に灰釉を施釉。高台は露胎。高台内面に低い兜巾。高台脇の削りがシャープで、高台との区分が明瞭。
617	T-274	1 区	J13	h・I16 ～ 18	555	第 4 面		肥前系	施釉陶器	碗	20%	(11.6)	5.8	(5.0)	体部外面から内面に灰釉を施釉。高台脇の削りがシャープで、高台との区分が明瞭。反転復元。
618	T-274	1 区	J13	h・I16 ～ 18	555	第 4 面		肥前系	施釉陶器	碗	40%	(10.55)	(7.0)	4.0	体部上半から内面に灰釉を施釉。高台内に兜巾。一部反転復元。
619	T-274	1 区	J13	h・I16 ～ 18	555	第 4 面		肥前系	施釉陶器	碗	15%	(10.6)	(5.5)	-	口縁部は端反る。内外面灰釉を施釉。反転復元。
620	T-275	1 区	J13	h ～ j16・17	555	第 4 面		肥前系	施釉陶器	碗	40%	(9.9)	5.6	(4.6)	外面体部上半から内面に灰釉を施釉。高台際の削りは明瞭。枚外面に貫入。反転復元。
621	T-274	1 区	J13	h・I16 ～ 18	555	第 4 面		肥前系	施釉陶器	碗	50%	(10.6)	6.2	(4.6)	施釉は外面上半から内面。二次焼成をうけ内外面に煤が付着し、釉色も灰白となる。高台内に兜巾。反転復元。
622	T-274	1 区	J13	h・I16 ～ 18	555	第 4 面		肥前系	施釉陶器	碗	60%	(10.2)	6.5	4.0	外面体部上半から内面に灰釉を施釉。底部は糸切のまま。反転復元。
623	T-274	1 区	J13	h・I16 ～ 18	555	第 4 面		肥前系	施釉陶器	碗	35%	(11.0)	(7.1)		外面体部上半から内面に透明釉を施釉。高台の削り出しが甘い。兜巾は目立たない。反転復元。

報告書 No.	登録 No.	地区	大区画	小区画	遺構 No.	検出面	層位	産地	種類	器種	残存率	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	備　　考
624	T-274	1 区	J13	h・I16 ～ 18	555	第 4 面		肥前系	施釉陶器	碗	30%	(11.8)	6.4	4.8	口縁部がやや端反。内外面褐釉を施釉。高台は露胎。反転復元。
625	T-274	1 区	J13	h・I16 ～ 18	555	第 4 面		肥前系	施釉陶器	碗	30%	(10.2)	6.9	4.8	外面上半から内面に鉄釉を施釉。反転復元。
626	T-274	1 区	J13	h・I16 ～ 18	555	第 4 面		肥前系	施釉陶器	皿	80%	13.55	3.65	4.8	外面上半から内面に灰釉を施釉。内底面に胎土目。高台内に兜巾。
627	T-274	1 区	J13	h・I16 ～ 18	555	第 4 面		肥前系	施釉陶器	皿	80%	12.4	3.3	4.8	外面上半から内面に灰釉を施釉。内底面に胎土目。高台部は雑な作り。
628	T-274	1 区	J13	h・I16 ～ 18	555	第 4 面		肥前系	施釉陶器	皿	80%	12.1	3.4	5.4	外面上半から内面を透明釉で施釉。内面に薄く鉄絵のような絵付けが見えるが不明。
629	T-274	1 区	J13	h・I16 ～ 18	555	第 4 面		肥前系	施釉陶器	皿	90%	12.6	4.4	5.0	外面上半から内面に灰釉を施釉。内底面に胎土目。二次焼成のため釉色は灰白となる。高台内に兜巾。
630	T-274	1 区	J13	h・I16 ～ 18	555	第 4 面		肥前系	施釉陶器	皿	20%	(11.1)	(3.6)	(5.0)	口縁部は内彎する。外面から内面を灰釉で施釉。反転復元。
631	T-275	1 区	J13	h ～ j16・17	555	第 4 面		肥前系	施釉陶器	皿	25%	(12.0)	3.6	(5.0)	内底面に胎土目。
632	T-274	1 区	J13	h・I16 ～ 18	555	第 4 面		肥前系	施釉陶器	皿	50%	10.45	4.1	4.0	外面上半から内面に灰釉を施釉。皮鯨。高台内に兜巾。内外面に貫入。
633	T-274	1 区	J13	h・I16 ～ 18	555	第 4 面		肥前系	施釉陶器	皿	20%	(16.8)	(3.0)	(7.7)	二次焼成か？釉色は青みを帯びた白色となる。反転復元。
634	T-275	1 区	J13	h ～ j16・17	555	第 4 面		肥前系	施釉陶器	皿	38%	(13.0)	(4.5)	(4.1)	施釉は灰釉を外面上半から内面。皿としたが、口縁の形状（歪み）から向付の可能性有り。内底面に鉄絵の皮鯨。。内底面と口縁部の境に明瞭な段が付く。反転復元。
635	T-274	1 区	J13	h・I16 ～ 18	555	第 4 面		肥前系	施釉陶器	皿	20%	(23.4)	(5.0)	-	溝縁皿。内外面に灰釉を施釉。二次焼成をうけ口縁の一部が釉剥落。反転復元。
636	T-274	1 区	J13	h・I16 ～ 18	555	第 4 面		肥前系	施釉陶器	向付	90%	14.1	4.4	4.6	絵唐津向付。形態は六角。外面上半から内面に透明釉を施釉。鉄釉で口唇部を縁取り、六角の区画線の中と見込みに抽象的な植物を描く。
637	T-274	1 区	J13	h・I16 ～ 18	555	第 4 面		肥前系	施釉陶器	小坏	50%	(6.0)	4.9	(2.8)	口縁部は端反る。体部外面から内面に灰釉を施釉。体部下端から高台は露胎。反転復元。
638	T-274	1 区	J13	h・I16 ～ 18	555	第 4 面		瀬戸美濃系	施釉陶器	向付	80%	10.8 × 13.2	4.9	10.3 × 12.5	織部向付。内外面に渡り褐釉と緑釉の掛け分け。外側面と内面に鉄釉で幾何学文を絵付け。底部は環状の三足を貼付ける。
639	T-275	1 区	J13	h ～ j16・17	555	第 4 面		瀬戸美濃系	織部	向付	40%	11.7 × 13.0	(3.5)	-	織部向付。体部と底部の一部が欠損のため器形の全容が不明。内底面に鉄釉で草と飛鳥。脚は帯状の粘土を貼付けて環状にする。３脚で１脚は欠損。
640	T-274	1 区	J13	h・I16 ～ 18	555	第 4 面		瀬戸美濃系	施釉陶器	向付	不明	-	(6.9)	-	織部向付。外面鉄絵の破片のため器形および絵柄は不明。
641	T-274	1 区	J13	h・I16 ～ 18	555	第 4 面		瀬戸美濃系	施釉陶器	沓形碗？	20%	(11.0)	(4.8)	(10.0)	黒織部沓形碗。口唇部から体部に掛けて鉄釉による鋸歯文。破片のため器形および文様は不明。反転復元。
642	T-274	1 区	J13	h・I16 ～ 18	555	第 4 面		瀬戸美濃系	施釉陶器	皿	20%	(16.5)	(4.75)	(7.8)	内外面に長石釉を施釉。内面に褐釉で瓜文と螺旋状(渦)の文様を描く。内外面に貫入。反転復元。
643	T-274	1 区	J13	h・I16 ～ 18	555	第 4 面		瀬戸美濃系	施釉陶器	灯火具蓋	100%	-	2.9	5.2	志野。外面に長石釉、鉄絵で絵付け。環状の摘みを貼付け。摘みの外径は 0.8 × 1.75cm。粗い貫入。内面に煤付着。
644	T-274	1 区	J13	h・I16 ～ 18	555	第 4 面		備前	焼締陶器	擂鉢	20%	(23.6)	(8.35)	(9.1)	口縁端部内面に強いナデによる凹線。斜め方向の擂り目。擂り目の単位は７本 /2.2㎝。反転復元。
645	T-274	1 区	J13	h・I16 ～ 18	555	第 4 面		備前	焼締陶器	擂鉢	15%	(30.0)	(8.4)	-	口縁端部内面に強いナデによる凹線。斜め方向の擂り目。擂り目の単位は９本 /2.2㎝。反転復元。
646	T-274	1 区	J13	h・I16 ～ 18	555	第 4 面			土師質土器	鉢	10% 以下	-	(11.5)	-	内面の口縁直下は横刷毛。外面体部はヘラ削り。口縁端部と内面に煤付着。火鉢か？
647	T-274	1 区	J13	h・I16 ～ 18	555	第 4 面			土師質土器	焙烙	20%	(26.5)	(8.2)	-	器高が高く、体部下半に平行タタキ。口縁部端面内に段を持つ。。反転復元。
648	T-249	1 区	J13	e ～ g16・17	530	第 4 面			土師器	灯明皿	85%	7.7	1.3	-	口縁端部の内外面に煤付着。底部糸切。
649	T-250	1 区	J13	e17	530	第 4 面			土師器	皿	45%	(7.5)	1.4	(3.8)	底部糸切。胎土はよく水簸されている。反転復元。
650	T-249	1 区	J13	e ～ g16・17	530	第 4 面			土師器	灯明受皿	99%	8.1	1.6	4.4	透明釉を施釉。一部に煤付着。
651	T-249	1 区	J13	e ～ g16・17	530	第 4 面			土師器	灯明受皿	95%	8.5	2.0	4.0	透明釉を施釉。内外面共に煤付着。
652	T-250	1 区	J13	e17	530	第 4 面			焼塩壷	蓋	100%	5.3	1.5	-	内面に布目痕あり。胎土には雲母粒が僅かに入る。
653	T-249	1 区	J13	e ～ g16・17	530	第 4 面		肥前系	染付	小碗	70%	8.8	4.0	3.8	外面に花唐草文を描く。内面は無文。
654	T-249	1 区	J13	e ～ g16・17	530	第 4 面		肥前系	染付	碗	60%	9.4	5.4	3.6	丸碗。外面は唐草文。内面は無文。外底面に崩れた大明年製。高台畳付に砂付着。
655	T-249	1 区	J13	e ～ g16・17	530	第 4 面		肥前系	染付	碗	25%	(10.1)	5.2	4.1	丸碗。外面に印判による桐文。内面は無文。外底面に渦福。反転復元。
656	T-249	1 区	J13	e ～ g16・17	530	第 4 面		肥前系	染付	小碗	75%	8.2	4.6	2.8	外面は印判による桐文。
657	T-250	1 区	J13	e17	530	第 4 面		肥前系	染付	碗	55%	9.9	5.4	5.4	丸碗。外面に菊紋と草花文を描く。外底には二重方形枠に崩れた渦福。
658	T-249	1 区	J13	e ～ g16・17	530	第 4 面		肥前系	染付	碗	60%	10.4	5.6	3.8	丸碗。外面は草花文。内面は無文。高台畳付に砂付着。
659	T-249	1 区	J13	e ～ g16・17	530	第 4 面		肥前系	青磁染付	碗	35%	-	(4.0)	4.6	内底面は二重圏線内に五弁花。外底に崩し文字で大明年製の銘款。
660	T-249	1 区	J13	e ～ g16・17	530	第 4 面		肥前系	青磁染付	蓋	80%	10.4	3.0	-	内面二重圏線内に五弁花。内面下方に四方襷が巡る。口錆。つまみ外径：3.9cm。
661	T-249	1 区	J13	e ～ g16・17	530	第 4 面		肥前系	染付	皿	25%	(23.2)	3.8	(7.6)	外面は唐草文で、内面は蛸唐草文。内底面に五弁花。高台は蛇の目凹形高台。反転復元。
662	T-249	1 区	J13	e ～ g16・17	530	第 4 面		肥前系	染付	筒茶碗	20%	(8.4)	(5.9)	-	外面は草花文。内面口縁部に四方襷を巡らす。反転復元。
663	T-249	1 区	J13	e ～ g16・17	530	第 4 面		肥前系	染付	小杯	45%	(5.8)	2.4	2.8	外面の文様は不明。反転復元。
664	T-249	1 区	J13	e ～ g16・17	530	第 4 面		京信楽系	施釉陶器	碗	45%	(10.2)	5.6	(4.8)	小杉碗。反転復元。
665	T-250	1 区	J13	e17	530	第 4 面		京信楽系	施釉陶器	せんじ	30%	(11.0)	(4.9)	-	外面に白化粧土を貼付け鉄絵を描く。内外面に細かい貫入。反転復元。
666	T-249	1 区	J13	e ～ g16・17	530	第 4 面		堺・明石系	焼締陶器	擂鉢	20%	(36.6)	(10.0)	-	外面体部ヘラ削り。内面は口縁直下に段を持つ。擂り目の単位は７本 /2.7㎝。反転復元。
667	T-266	1 区	J13	h・i19	518	第 4 面			土師器	灯明皿	85%	6.6	3.3	4.5	底部糸切。口縁部に煤付着。
668	T-266	1 区	J13	h・i19	518	第 4 面			土師器	皿	80%	9.8	3.3	6.1	底部糸切。胎土はよく水簸されている。灯明の痕跡はないが、おそらく灯明皿であろう。
669	T-266	1 区	J13	h・i19	518	第 4 面			土師器	灯明皿	80%	12.0	2.3	6.6	底部糸切。底部に簀状の圧痕。口縁部に煤付着。
670	T-266	1 区	J13	h・i19	518	第 4 面			土師器	灯明皿	50%	10.0	1.8	4.3	口縁部内面横ナデ調整。外底面ナデ調整。外面体部に指頭痕が顕著。口縁部に煤付着。
671	T-266	1 区	J13	h・i19	518	第 4 面		肥前系	染付	碗	35%	(4.9)	4.7	4.0	外面対象位置に草花文。外底部に砂付着。一部反転復元。
672	T-266	1 区	J13	h・i19	518	第 4 面		肥前系	染付	碗	20%	(11.7)	5.4	(4.4)	外面に草花文。見込みは蛇の目釉剥ぎ。畳付に砂付着。反転復元。
673	T-266	1 区	J13	h・i19	518	第 4 面		肥前系	染付	碗	30%	(10.0)	5.5	(4.0)	外面に二重網目文。反転復元。
674	T-266	1 区	J13	h・i19	518	第 4 面		肥前系	染付	碗	35%	(8.8)	4.9	4.6	内底面の二重圏線内に花卉文。底部外面に「大明成化年製」。畳付に多量の砂付着。一部反転復元。初期伊万里。

報告書No.	登録No.	地区	大区画	小区画	遺構No.	検出面	層位	産地	種類	器種	残存率	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	備考
675	T-266	1区	J13	h・i19	518	第4面		肥前系	染付	碗	75%	9.9	6.2	3.9	外面に一重網目文。高台内は無釉。
676	T-266	1区	J13	h・i19	518	第4面		肥前系	染付	碗	20%	(8.8)	(5.1)	4.1	外面に一重網目文。高台内は無釉。内外面に粗い貫入。一部反転復元。
677	T-266	1区	J13	h・i19	518	第4面		肥前系	染付	碗	30%	-	(3.2)	4.4	高台内は無釉。高台菜に煤付着（二次焼成？）。
678	T-266	1区	J13	h・i19	518	第4面		肥前系	青磁染付	碗	25%	(10.8)	7.4	4.3	陶胎の青磁染付？Ｏｒ生焼けか？外面青磁、内底に花弁を描く。高台は無釉。一部反転復元。
679	T-266	1区	J13	h・i19	518	第4面		肥前系	青磁	碗	25%	9.6	6.6	5.4	高台内は露胎となる。畳付に砂付着。外面中位に二条の沈潜が巡る。
680	T-266	1区	J13	h・i19	518	第4面		肥前系	青磁染付	筒茶碗	50%	(8.2)	7.1	5.2	窓絵に桐とみられる文様。畳付の釉削り取り。一部反転復元。
681	T-266	1区	J13	h・i19	518	第4面		肥前系	染付	小杯	15%	(7.5)	(3.45)	-	外面に草花文。　二次焼成を受ける。中国製か？
682	T-266	1区	J13	h・i19	518	第4面		肥前系	染付	蕎麦猪口	75%	9.8	5.5	5.2	外面は対象位置に草花文を描く。外底に二重方形枠に渦福。
683	T-266	1区	J13	h・i19	518	第4面		肥前系	染付	皿	12%	(12.7)	2.7	(5.0)	畳付の釉削り取り。畳付に砂付着。
684	T-266	1区	J13	h・i19	518	第4面		肥前系	染付	稜花皿	25%	(25.0)	3.4	(15.6)	外面は唐草文。内面は口縁から見込みにかけて四方襷文と花唐草文を巡らす。見込みの文様は欠損のため不明。反転復元。
685	T-266	1区	J13	h・i19	518	第4面		肥前系	施釉陶器	碗	50%	(11.4)	7.4	4.6	外面中位から内面に褐釉を施釉。二次焼成を受ける。底部に縮緬皺。一部反転復元。
686	T-266	1区	J13	h・i19	518	第4面		肥前系	施釉陶器	碗	30%	(10.2)	5.4	4.4	外面下位から内面に褐釉を施釉。畳付を砥石で平滑にする。二次焼成を受けている。反転復元。
687	T-266	1区	J13	h・i19	518	第4面		肥前系	施釉陶器	碗	40%	(12.0)	(7.8)	-	二次焼成を受ける。施釉は褐釉か？反転復元。
688	T-266	1区	J13	h・i19	518	第4面		肥前系	施釉陶器	皿	80%	36.4	10.6	11.9	刷毛目唐津大皿。口縁部は鍔縁状となる。内面は銅緑釉と鉄釉で加飾する。
689	T-266	1区	J13	h・i19	518	第4面		瀬戸美濃系	施釉陶器	天目茶碗	70%	11.2	6.7	4.4	外底部は無釉。二次焼成を受ける。
690	T-266	1区	J13	h・i19	518	第4面		瀬戸美濃系	施釉陶器	茶碗	25%	(12.8)	7.5	(5.4)	筒形茶碗。内外面に灰釉と褐釉の掛け分け。口縁部を歪ましている。高台は無釉。内外面に細かい貫入。
691	T-266	1区	J13	h・i19	518	第4面		肥前系	施釉陶器	瓶？	35%	(13.3)	(8.7)	(6.4)	外面にヘラで施文。二次焼成で釉が白く変色。畳付の釉削り取り。内外面に灰釉を施釉。
692	T-266	1区	J13	h・i19	518	第4面		肥前系	施釉陶器	瓶	50%	-	(4.4)	8.4	褐釉を施釉。高台は無釉であるが外底を施釉。一部反転復元
693	T-266	1区	J13	h・i19	518	第4面		肥前系	染付	香炉？	50%	(5.4)	8.0	4.7	外面に牡丹と竹を描く。内面無釉。底部無釉。一部反転復元。線香立か？
694	T-266	1区	J13	h・i19	518	第4面		肥前系？	白磁	合子	50%	-	1.8	-	外底は無釉。細かい貫入有り。香合の身。
695	T-266	1区	J13	h・i19	518	第4面		丹波	焼締陶器	擂鉢	48%	24.4	7.2	9.4	外面に焼台痕跡あり。擂り目の単位は重複して読みとりにくい。口縁直下の指押さえが顕著。
696	T-266	1区	J13	h・i19	518	第4面		丹波	焼締陶器	擂鉢	10%	-	(12.1)	12.8	擂目の単位５条/1.4㎝。体部下半の破片。反転復元。
697	T-266	1区	J13	h・i19	518	第4面		丹波	焼締陶器	擂鉢	20%	37.4	14.0	16.0	外面体部指押さえ顕著。擂目の単位６条/1.6㎝。
698	T-694	1区	J13	h・i19	518	第4面			土師質土器	塩壺	100%	6.8	8.2	6.2	底部に簀子状圧痕。体部上方側面に『サカイ　泉州麻生　御塩所』の刻印あり。
699	T-266	1区	J13	h・i19	518	第4面			土師質土器	焙烙	10%	(13.6)	(6.05)	-	体部下半に並行タタキ。反転復元。
700	T-262	1区	J13	h・i24	571	第4面			土師器	灯明皿	15%	(10.6)	(1.8)	-	内面に透明釉を施釉。反転復元。
701	T-262	1区	J13	h・i24	571	第4面			土師器	小皿	80%	6.5	1.4	4.7	底部糸切。煤の付着が認められない。
702	T-262	1区	J13	h・i24	571	第4面		肥前系	染付	碗	35%	(8.5)	4.6	(3.4)	外面に丸文と花を描く。畳付の釉削り取り。内外面には細かい貫入。反転復元。
703	T-262	1区	J13	h・i24	571	第4面		肥前系	染付	碗	70%	(9.6)	5.2	4.0	内外面は丸文散らし。外面口縁部に四方襷が巡る。外底面に渦福。畳付の釉掻き取り。内外面に細かい貫入。反転復元。
704	T-262	1区	J13	h・i24	571	第4面		肥前系	染付	碗	75%	(9.6)	5.3	(3.8)	外面には印判で花卉文？をチドリに配する。外底面には大明年製の崩し文字。畳付釉掻き取り。砂付着。
705	T-262	1区	J13	h・i24	571	第4面		肥前系	染付	碗	70%	(10.1)	5.9	(4.0)	外面の文様は不明。内面無文。外底に大明年製の崩し文字。畳付の釉掻取り。砂付着。反転復元。
706	T-262	1区	J13	h・i24	571	第4面		肥前系	染付	碗	28%	(10.6)	5.85	(4.4)	外面に草花文。内面は無文。反転復元
707	T-262	1区	J13	h・i24	571	第4面		肥前系	染付	碗	40%	(10.1)	5.7	(3.5)	外面に草花文。内面は無文。畳付の釉掻き取り。反転復元。
708	T-262	1区	J13	h・i24	571	第4面		肥前系	染付	碗	40%	(10.2)	6.0	(3.9)	外面に草花文を描く。高台畳付の釉掻き取り。反転復元。
709	T-262	1区	J13	h・i24	571	第4面		肥前系	白磁	碗	37%	(8.0)	4.0	3.1	高台畳付の釉削り取り。口縁部が若干内彎する。反転復元。
710	T-262	1区	J13	h・i24	571	第4面		肥前系	白磁	碗	28%	(8.5)	4.7	(4.0)	反転復元。高台の釉を削り取る。
711	T-262	1区	J13	h・i24	571	第4面		肥前系	染付	蓋	80%	(9.5)	3.0	-	外面には印判による桐文。摘み内には大明年製。つまみ外径は 3.7cm。反転復元。
712	T-262	1区	J13	h・i24	571	第4面		肥前系	染付	皿	23%	(13.1)	3.5	(7.6)	外面に唐草文。内面にも唐草文？畳付の釉削り取り。畳付に砂付着。反転復元。
713	T-262	1区	J13	h・i24	571	第4面		肥前系	染付	鉢	8%	-	4.6	(15.0)	内外面の文様は不明。内底面に唐草文。高台の釉削り取り。反転復元。
714	T-262	1区	J13	h・i24	571	第4面		肥前系	青磁染付	碗	48%	(7.3)	4.6	(3.6)	外面に漢字の一の文字か？反転復元。
715	T-262	1区	J13	h・i24	571	第4面		肥前系	染付	紅猪口	48%	(6.9)	4.8	-	畳付の釉は掻取り。畳付に砂付着。高台径は 3.0cm。二次焼成を受けている。反転復元
716	T-262	1区	J13	h・i24	571	第4面		肥前系	染付	猪口	85%	5.3	4.0	2.8	外面に粗花文を描く。畳付に砂付着。
717	T-262	1区	J13	h・i24	571	第4面		肥前系	染付	小坏	95%	6.3	3.0	2.5	外面に印判による菊紋を施文。高台畳付に砂付着。
718	T-262	1区	J13	h・i24	571	第4面		肥前系	染付	紅猪口	90%	5.6	3.0	2.1	外面に草花文を描く。
719	T-262	1区	J13	h・i24	571	第4面		肥前系	施釉陶器	皿	30%	-	2.6	(5.5)	刷毛目唐津。内外面は白土による刷毛目。反転復元。
720	T-262	1区	J13	h・i24	571	第4面		肥前系	施釉陶器	皿	40%	-	3.1	(3.9)	刷毛目唐津。外面は白土による刷毛目。見込蛇の目釉剥ぎ。反転復元。
721	T-262	1区	J13	h・i24	571	第4面		肥前系	施釉陶器	碗	35%	-	3.3	(4.8)	高台畳付は釉掻き取り。畳付内に砂付着。内外面は刷毛目を施文。透明釉を施釉。反転復元。
722	T-262	1区	J13	h・i24	571	第4面		肥前系	施釉陶器	鉢	40%	(14.0)	6.8	(6.4)	刷毛目唐津鉢。口縁は玉縁状。外面の刷毛は波状文、内面は横線を施文する。外面下半は鉄釉を施釉。反転復元。
723	T-262	1区	J13	h・i24	571	第4面		肥前系	青磁	香炉	15%	(6.3)	3.6	-	体部上半のみ遺存。内面無釉。反転復元。
724	T-262	1区	J13	h・i24	571	第4面			瓦質土器	不明	10%	-	3.0	(6.9)	器形不明。体部に孔の痕跡有り。反転復元。
725	T-262	1区	J13	h・i24	571	第4面			土師質土器	焙烙	5%	(28.6)	5.3	-	体部に煤付着。反転復元。
726	T-262	1区	J13	h・i24	571	第4面			土師質土器	焙烙	10%	(23.7)	5.7	-	体部に煤付着。反転復元。
727	T-262	1区	J13	h・i24	571	第4面		肥前系	染付	瓶	10%	-	8.1	(6.4)	外面草花文か？畳付の釉掻き取り。

報告書 No.	登録 No.	地区	大区画	小区画	遺構 No.	検出面	層位	産地	種類	器種	残存率	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	備考
728	T-234	1 区	J13	f・g20・21	502・503	第 4 面			土師器	皿	25%	12.2	2.1	6.0	よく水簸された胎土。反転復元
729	T-234	1 区	J13	f・g20・21	502・503	第 4 面		肥前系	施釉陶器	皿	80%	12.4	3.6	5.2	見込みに胎土目。底部外面ちりめん皺。
730	T-234	1 区	J13	f・g20・21	502・503	第 4 面		肥前系	施釉陶器	皿	65%	11.1	3.7	5.2	見込みに胎土目。底部外面ちりめん皺。
731	T-234	1 区	J13	f・g20・21	502・503	第 4 面		肥前系	施釉陶器	皿	10%	25.0	(5.2)	-	口縁部は外反する。内面に段をもつ。内面に鉄絵。反転復元。
732	T-234	1 区	J13	f・g20・21	502・503	第 4 面		肥前系	施釉陶器	向付	70%	15.0	3.9	5.0	絵唐津向付。鉄絵に透明釉を施釉。底部外面ちりめん皺。
733	T-234	1 区	J13	f・g20・21	502・503	第 4 面		瀬戸美濃系	施釉陶器	皿	98%	11.2	2.4	5.8	灰釉折縁皿。高台釉掻き取り。内型成形。内禿げ。
734	T-234	1 区	J13	f・g20・21	502・503	第 4 面			土師質土器	火鉢	90%	47.0 × 30.5	15.2	-	内面中位を巡るように煤の帯が付着する。灰・炭を入れていた位置か？底部の長辺に 4 脚を貼付け。
735	T-243	1 区	J13	h18	498	第 4 面		肥前系	施釉陶器	碗	40%	(10.8)	6.0	(5.0)	唐津碗。外面下位から内面に灰釉を施す。見込みに粗い貫入。反転復元。
736	T-244	1 区	J13	i・j18・19	514	第 4 面			土師器	皿	100%	6.4	1.1	4.0	底部糸切。底部に簀痕。内底面ナデ調整。口縁部に僅かに煤付着。
737	T-244	1 区	J13	i・j18・19	514	第 4 面			土師器	皿	30%	(11.3)	2.0	-	口縁部に煤付着。内側面横ナデ調整。
738	T-244	1 区	J13	i・j18・19	514	第 4 面			土師器	皿	100%	10.9 ～ 11.2	1.9	-	口縁三ヶ所煤付着。内外面に煤付着。内側面横ナデ調整。外底面ナデ調整。
739	T-244	1 区	J13	i・j18・19	514	第 4 面		肥前系	施釉陶器	碗	不明	-	(2.3)	(4.5)	内・外面灰釉を施釉。畳付に砂付着。反転復元。
740	T-244	1 区	J13	i・j18・19	514	第 4 面		肥前系	施釉陶器	碗	30% 以下	-	(2.9)	(4.8)	透明釉を施釉。内底面に砂目。反転復元。
741	T-248	1 区	J13	j19・20	519	第 4 面			土師器	皿	100%	11.0	1.9	-	内外口縁部ナデ調整後指押さえ。外底部ナデ調整。口縁部は煤が全周する。
742	T-248	1 区	J13	j19・20	519	第 4 面			土師器	皿	70%	9.4	2.0	6.0	底部糸切。口縁部に煤付着。
743	T-248	1 区	J13	j19・20	519	第 4 面		肥前系	染付	碗	50%	-	(3.2)	4.8	畳付釉掻き取り。内外面に貫入。
744	T-248	1 区	J13	j19・20	519	第 4 面		肥前系	染付	碗	30%	(11.6)	6.4	(5.0)	外面に草花文を描く。畳付釉掻き取り。畳付砂付着。内外面に粗い貫入。反転復元。
745	T-248	1 区	J13	j19・20	519	第 4 面		肥前系	施釉陶器	皿	20%	-	(3.2)	(3.6)	透明釉を施釉。兜巾あり。反転復元。
746	T-248	1 区	J13	j19・20	519	第 4 面		肥前系	施釉陶器	皿	30%	(28.1)	7.4	9.5	外面中位から内面に灰釉を施釉。内面に鉄絵による文様。見込みと畳付に砂目 4 箇所。反転復元。
747	T-258	1 区	J13	p11	562	第 4 面		中国	青花	碗	10% 以下	(11.6)	(3.4)	-	漳洲窯。二次焼成か？反転復元
748	T-238	1 区	J13	a21	476	第 4 面		肥前系	染付	瓶	98%	(2.0)	9.5	3.9	外面対象位置に草花文を描く。高台畳付は釉掻き取り。畳付に砂付着。口縁端部はラッパ状に外反する。口縁部は反転復元。
749	T-237	1 区	J13	c22	475	第 4 面		肥前系	施釉陶器	皿	10% 以下	(39.6)	(3.5)	-	刷毛目唐津大皿。内面白化粧土に飛びカンナで文様を施文。
750	T-236	1 区	J13	a・b23	472	第 4 面			土師器	灯明受け皿	25%	-	(2.0)	(3.2)	底部糸切。透明釉を施釉。
751	T-236	1 区	J13	a・b23	472	第 4 面		堺・明石系	焼締陶器	擂鉢	10% 以下	(14.2)	(5.0)	-	櫛目の単位は 10 条 /2.0㎝。反転復元。
752	T-617	2-1 区	東区		4	第 1 面			土師器	皿	30%	11.3	2.5	-	口縁部内外面床ナデ調整。底部ナデ調整。外面体部指押え。反転復元。
753	T-617	2-1 区	東区		4	第 1 面			土師器	皿	40%	13.4	2.2	8.6	口縁部内外面床ナデ調整。底部ナデ調整。内面の体部と見込みの境に段がつく。反転復元。
754	T-617	2-1 区	東区		4	第 1 面		肥前系	染付	碗	30%	14.8	6.4	5.2	内外面に微塵唐草文。高台側面に○×文。高台畳付は釉削り取り。型紙摺り？
755	T-617	2-1 区	東区		4	第 1 面		瀬戸美濃？	染付	皿	60%	8.6	2.1	3.6	内底面に草花文を描く。畳付き釉掻き取り。
756	T-617	2-1 区	東区		4	第 1 面		肥前系	染付	蓋	55%	8.8	2.8	摘み 5.6	外面に暦文を描く。摘み口唇部は釉掻き取り。
757	T-617	2-1 区	東区		4	第 1 面		瀬戸美濃？	施釉陶器〈瀬戸？〉	鉢	65%	9.5	4.9	3.5	口縁から内外面に、部分的に呉須を掛け流し。胎土には微細な砂を含む。畳付きの釉掻き取り。
758	T-617	2-1 区	東区		4	第 1 面		瀬戸美濃？	施釉陶器	鉢	48%	6.3	3.2	3.0	外面中位から内面に褐釉を施釉。反転復元。
759	T-644	3-2 区	東側配管		2	第 2 面			土師器	皿	90%	7.9	1.5	-	口縁部は横ナデ調整。径 1 ～ 2mm の長石、片岩、チャート、雲母を含む。
760	T-644	3-2 区	東側配管		2	第 2 面		肥前系	染付	碗	35%	7.7	3.9	2.4	外面に草花文。内面は無文。畳付き釉掻き取り。反転復元。
761	T-644	3-2 区	東側配管		2	第 2 面		肥前系	染付	皿	40%	13.0	3.6	6.6	外面に唐草文を描く。内側面に扇と樹木を描く。内底面に五弁花。高台畳付の釉削り取り。反転復元。
762	T-644	3-2 区	東側配管		2	第 2 面		肥前系	染付	鉢	20%	17.2	7.0	6.4	高台畳付き釉掻き取り。内底面蛇の目釉剥ぎ。内底面に五弁花。反転復元。
763	T-644	3-2 区	東側配管		2	第 2 面		肥前系	施釉陶器	小碗	40%	7.6	4.6	3.6	二次焼成を受ける。器面の釉は爛れている。反転復元。元は褐釉か？
764	T-644	3-2 区	東側配管		2	第 2 面		肥前系	施釉陶器	鉢	48%	17.5	10.0	7.3	畳付から高台内面は無釉。内外面に細かい貫入。口唇部～内面上方部釉き掻取り。外面は白化粧土により刷毛目。
765	T-644	3-2 区	東側配管		2	第 2 面		丹波	焼締陶器	擂鉢	10%	34.2	(8.8)	-	櫛目の単位 7 条 /1.6㎝。反転復元。
766	T-643	3-2 区	東側配管		1	第 2 面		丹波	焼締陶器	擂鉢	20%	-	(10.1)	14.0	内外面に焼台の痕跡が認められる。擂り目の単位 9 条 /1.9㎝。径 1 ～ 6mm の長石、石英、チャートを多く含む。
767	T-646	3-2 区	東側配管	中央	3	第 2 面		不明	施釉陶器	壷	10%	-	(5.4)	7.5	褐釉壺。粘土巻上げ成形。反転復元。
768	T-659	3-2 区	東側配管	北	10	第 2 面			土師器	皿	100%	7.8	1.9	-	口縁部横ナデ調整。底部ナデ調整。胎土に径 1 以下の石英、赤色斑粒、雲母含む。
769	T-658	3-2 区	東側配管	中央	10	第 2 面			土師器	皿	48%	7.6	1.8	-	径 1mm 以下の長石、赤色斑粒、雲母粒を含む。口縁部はキツイ横ナデ調整のため端部は肥厚する。底部ナデ調整。
770	T-658	3-2 区	東側配管	中央	10	第 2 面			土師器	皿	100%	9.3 × 8.4	1.6	-	口縁部はきつい横ナデ調整。全体歪む。赤色斑粒を含む。
771	T-657	3-2 区	東側配管	南	10	第 2 面		肥前系	染付	碗	10%	10.8	5.8	4.8	外面に松竹梅を描く。畳付き釉掻取り。内外面に細かい貫入。
772	T-657	3-2 区	東側配管	南	10	第 2 面		肥前系	染付	碗	40%	10.1	5.2	4.2	畳付の釉掻き取り、砂付着。外面に松を描く。内外面に貫入。反転復元。
773	T-657	3-2 区	東側配管	南	10	第 2 面		肥前系	染付	皿	30%	12.4	2.7	7.8	外側面に唐草文、内側面に花弁を描く。畳付の釉掻き取り。反転復元。
774	T-657	3-2 区	東側配管	南	10	第 2 面		肥前系	染付	皿	25%	11.6	3.1	5.4	内側面に唐草文を描く。内底面に五弁花。畳付の釉掻き取り。
775	T-658	3-2 区	東側配管	中央	10	第 2 面			染付	壺	95%	6.2	14.2	4.8	外面に柳を描く。畳付の釉は削取り、多量の砂付着。口縁部は反転復元。
776	T-657	3-2 区	東側配管	南	10	第 2 面		瀬戸美濃系	施釉陶器	汁次？	-	-	(5.9)	5.6	外面下位から上部に飴釉を施釉。内面は泥醤を施釉。体部下半～底部部分のみ残存。

観察表２　瓦類

報告書 No.	登録 No.	地区	大区画	小区画	遺構 No.	検出面	層位	種類	器種	瓦当(径)厚み(cm)	長さ(cm)	幅(cm)	備考
777	k-350	1区	J13	c19		整地土	2層	軒瓦	三巴文軒丸瓦	12.6	(15.0)	12.0	巴は左巻。瓦当の径に対して巴の径が小さい。凸面は丁寧なナデ仕上げ。内面は粗いゴザ状の布目痕。珠文の数は12。コビキB。
778	k-295	1区	J13	j～l16		整地土	2層	軒瓦	三巴文軒丸瓦	13.7	(3，5)	13.5	巴は右巻。瓦当面のみ遺存。巴の断面形は台形を呈する。尾が延びて円を形成する。珠文は小さく、数は18。
779	k-399	1区	J13	d24・25		整地土	3層	軒瓦	三巴文軒丸瓦	13.0	(5.0)	-	巴は左巻。瓦当面のみ遺存。瓦当径に対し巴の径が小さい。珠文の数は13。
780	k-416	1区	J13	f24・25		整地土	3層	軒瓦	三巴文軒丸瓦	(10.8)	-	-	巴は右巻き。瓦当面のみ遺存。瓦当面は摩耗が著しい。
781	k-394	1区	J13	d20		整地土	3層	軒瓦	三巴文軒丸瓦	13.8	(9.4)	(12.0)	巴は右巻き。瓦当面が遺存。巴の断面形状は台形を呈し、尾が延びて円を形成する。珠文は小さく、数は18である。コビキB。
782	k-438	1区	J13	l16・17		整地土	3層	軒瓦	三巴文軒丸瓦	(8.9)	-	-	巴は右巻。瓦当の中心部のみ遺存。巴の断面は台形を呈し、尾が延びて円を形成する。珠文は細かい。
783	k-454	1区	J13	k～m24・25		整地土	4層	軒瓦	三巴文軒丸瓦	(5.9)	25.4	12.4	巴は左巻。凸面中央部と尻に釘穴あり。瓦当の径に対して巴径が小さい。内面ゴザ状の粗い布目痕が顕著。コビキB。
784	k-461	1区	J13	g・h18・19		整地土	4層	軒瓦	三巴文軒丸瓦	14.0	(23.0)	14.0	巴は左巻。体部中位～尻および玉縁まで欠損。巴の頭および珠文の断面が半円形となる。瓦当面にキラコ(離型材)が確認できる。瓦当の裏面丁寧なナデ。胴部凸面は丁寧なナデ仕上げ。内面はゴザ状の粗い布目。珠文の数は16。コビキB。
785	k-447	1区	J13	d・e19・20		整地土	4層	軒瓦	三巴文軒丸瓦	12.8	(9.0)	12.0	巴は左巻。巴の断面形は台形。内面はゴザ状の粗い布目。珠文は細かく、数は17。
786	k-464	1区	J13	j・k16～18		整地土	4層	軒瓦	三巴軒丸瓦	13.8	(6.0)	12.5	滴水軒平瓦とセットになる軒丸瓦。瓦当および頭のみ遺存。巴は左巻。巴の断面は台形を呈する。珠文は小さく、数は16。コビキB。
787	k-463	1区	J13	g・h17・18		整地土	4層	軒瓦	三巴軒丸瓦	(7.2)	23.2	14.0	滴水軒平瓦とセットになる軒丸瓦。巴は左巻。内面は粗いゴザ状の布目痕。尻付近に釘穴を穿つ。凸面は丁寧なナデ仕上げ。コビキB。
788	k-059	1区	J13	c24	111	第2面		軒瓦	三巴文軒丸瓦	(6.5)	-	-	巴は左巻。瓦当の下位のみ遺存。巴の断面は台形を呈する。
789	k-240	1区	J13	j16・17	350	第3面		軒瓦	三巴文軒丸瓦	13.0	(7.0)	-	巴は左巻。瓦当面と凸面頭のみ遺存。瓦当径に対して巴の径が小さい。珠文の数は12。
790	k-253	1区	J13	b23・24	437	第3面		軒瓦	三巴文軒丸瓦	13.5	(10.7)		巴は左巻。瓦当と頭が遺存。巴の頭に版傷。珠文の数は14。コビキB。
791	k-130	1区	J13	a20・21	212	第2面		軒瓦	三巴文軒丸瓦	(7.7)	-	-	巴は左巻。瓦当面の下部が僅かに遺存。巴の断面は台形状となる。
792	k-134	1区	J13	j・k14	218	第2面		軒瓦	三巴文軒丸瓦	(12.3)	-	-	巴は左巻。瓦当面の中位～下部のみが遺存。巴の断面形が台形状となり、尾が延びて円を形成する。
793	k-112	1区	J13	k14	192-1	第2面		軒瓦	三巴文軒丸瓦	(7.1)	-	-	巴は左巻。瓦当面の一部遺存。巴の断面は台形状を呈する。二次焼成を受ける。
794	k-287	1区	J13	h・i16～18	555	第4面		軒瓦	軒丸瓦	14.4	(10.6)		滴水軒平瓦とセットになる軒丸瓦。巴は左巻。瓦頭と丸瓦の接合は鈍角。内面は粗いゴザ状の布目痕の下に細かな布目痕が認められる。凸面は丁寧なナデ仕上げ。コビキB。
795	D-038	1区	J13	d18	K60			軒瓦	軒平瓦	-	-	(14.7)	瓦当面のみの遺存(接合面から剝れている)。瓦当面ほぼ中央に『泉劢．谷川瓦株式會社．製造人宮川徳太郎』の方形刻印あり。
796	D-015	1区	J13	b16・17	K18			軒瓦	軒平瓦	4.4	(14.5)	24.6	均整唐草文軒平瓦。中心飾りは橘。体部中位から尻が欠損。
797	k-286	1区	J13		k286			軒瓦	軒平瓦	3.9	(8.5)	-	瓦当の半部が遺存。中心飾りは橘文。
798	k-287	1区	J13		k287			軒瓦	軒平瓦	4.3	(9.1)	-	均整唐草文軒平瓦。中心飾りは三葉。子葉の巻き込みがやや弱い。瓦当上端面は中心部のみに面取りが認められる。凹面は丁寧なナデ仕上げ。
799	k-320	1区	J13	f19		整地土	1層	軒瓦	波状文軒平瓦	4.4	(12.9)	-	瓦当面に離れ砂。
800	k-428	1区	J13	j14・15		整地土	3層	軒瓦	軒平瓦	3.7	(14.0)	24.4(復元)	均整唐草文軒平瓦。模様は中央が凹む。中心飾りは中央が膨らむ単弁の花文。
801	k-411	1区	J13	f23		整地土	3層	軒瓦	軒平瓦	4.0	(11.5)	-	均整唐草文軒平瓦。瓦当面に離型材(キラコ)付着。中心飾りは橘。唐草の子葉は巻いていない。
802	k-236	1区	J13	h17	343	第3面		軒瓦	軒平瓦	4.6	(22.7)	-	均整唐草文軒平瓦。中心飾りは三葉で、子葉は巻き込まれる。凹面に頭部分に菊花の刻印。凹面には所々にゴザ状の粗い布目痕が残り、ナデて擦り消している。
803	k-133	1区	J13	k14	218	第2面		軒瓦	軒平瓦	3.3	(4.9)	-	均整唐草文軒平瓦。唐草は繊細。
804	k-135	1区	J13	l14	218	第2面		軒瓦	軒平瓦	4.3	(4.8)	-	均整唐草文軒平瓦。中心飾りは橘文で、未だ雫型になっていない段階。文様は中央を凹ませる。
805	k-105	1区	J13	j15・16	192	第2面		軒瓦	軒平瓦	4.3	(7.0)	-	瓦当中央部のみ遺存。中心飾りは橘で、文様は中を凹ます。
806	k-287	1区	J13	h・i16～18	555	第4面		軒瓦	軒平瓦	6.3	(21.9)	-	均整唐草文軒平瓦。中心飾りは菊花文。文様は中央を凹ませる。大振りな軒平瓦である。瓦当上端面を面取り。凹面および瓦当の裏面と側縁も丁寧なナデ仕上げ。
807	k-105	1区	J13	j15・16	192	第2面		軒瓦	滴水瓦	-	-	-	唐草文滴水瓦。実測断面は中央欠損のため唐草にかからない。文様は中央を凹ます。
808	k-501	3-2区	東配管		3	第2面		軒瓦	滴水瓦	(2.4)	(6.5)		唐草文滴水瓦。瓦当面の80％程度の遺存。拓本はパーツ接合復元。文様の中央を凹ます。焼成は軟質で断面色調がサンドイッチ状となる。
809	k-017	1区	J13	d・e19・20	K19			軒瓦	軒桟瓦	8.3-5.6	25.5	26.5	一文字型。裏面に14条1単位の滑り止め3箇所を横方向に施す。
810	k-020	1区	J13	d・e20～23	k19			軒瓦	軒桟瓦	10.6	(19.0)	(16.5)	石持軒瓦。瓦当面に『松葉菱の中に土．登録商標．泉州．谷川瓦○○會社．製造人田中浅太郎』の方形刻印あり。瓦当面(石持、垂れ)および裏面、側面の仕上げ調整は、非常に平滑で綺麗である。
811	k-014	1区	J13	h・i17・18	K25			軒瓦	軒桟瓦	9.9	(13.0)	(16.1)	石持軒瓦。瓦当面に『泉州谷川．製造元．田中六平』の刻印あり。二次焼成をうけ赤色化。
812	k-305	1区	J13	b20		整地土	1層	軒瓦	軒桟瓦？	(1.7)	(13.7)	-	瓦当が接合箇所から剝れる。裏面中央に『松葉菱の中に土．商標登録(松葉菱)．泉州．……製造人……』の刻印あり。
813	k-395	1区	J13	d21		整地土	3層	丸瓦	丸瓦	5.9	22.9	11.9	頭部の一部欠損。内面粗いゴザ状の布目痕あり。玉縁の裏は強いナデを施す。
814	k-447	1区	J13	d・e19・20		整地土	4層	軒瓦	唐草文軒桟瓦	4.2	(11.3)	-	瓦当面と頭が遺存し、袖部が欠損。中心飾りは蓮花で結節が大きい。
815	k-253	1区	J13	b23・24	437	第3面		桟瓦	軒桟瓦	3.7	(6.0)	-	均整唐草文軒桟瓦。瓦当面の約半分が遺存。中心飾りは橘文。花弁中央が雫型となる。
816	D-018	1区	J13	e19	K19			丸瓦	丸瓦	-	(22.0)	14.0	内面に11条の滑り止めが2箇所あり。凸面に『松葉菱の中に土．登録商標．泉州．谷川瓦株式會社．製造人池田治一』の方形刻印あり。
817	k-306	1区	J13	b23		整地土	1層	丸瓦	丸瓦		(15.6)	-	凸面に『松葉菱の中に土．商標登録．泉州．谷川……』の方形刻印あり。尻の裏側に1単位11条の滑り止めのクシ目。丸瓦にしているが、軒丸瓦の可能性もある。
818	k-295	1区	J13	j～l16		整地土	2層	丸瓦	丸瓦		(23.0)	12.3	凸面に2箇所の釘穴あり。内面にゴザ状の粗い布目痕あり。頭部欠損のため軒丸瓦の可能性もある。背は丁寧なナデ仕上げ。
819	k-416	1区	J13	f24・25		整地土	3層	丸瓦	丸瓦	-	22.9	12.0	内面はゴザ状の粗い布目痕。凸面は頭～玉縁まで丁寧なナデ仕上げ。
820	k-361	1区	J13	c～e23		整地土	3層	道具瓦	雁振り瓦	3.2	(14.5)	(11，7)	雁振り瓦の半部と考えられ、完形品は曲率の緩い「く」の字状になる。
821	k-466	1区	J13	j・k18・19		整地土	4層	丸瓦	丸瓦		26.1	12.8	完形。胴部凸面中央に釘穴を穿つ。凸面は頭から玉縁まで丁寧なナデを施す。内面はゴザ状の粗い布目痕をナデ消している部分も認められる。コビキB。
822	k-450	1区	J13	g・h19・20		整地土	4層	丸瓦	丸瓦		31.0	15.5	玉縁付近に「菊花」の刻印。内面に吊り紐痕が顕著。凸面を丁寧にナデ仕上げ。内面は粗いゴザ状の布目。コビキB。

報告書 No.	登録 No.	地区	大区画	小区画	遺構 No.	検出面	層位	種類	器種	瓦当 (径) 厚み (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)	備　　考
823	k-059	1 区	J13	c24	111	第 2 面		丸瓦	丸瓦		22.1	12.1	凸面は丁寧なナデ仕上げ。内面はゴザ状の粗い布目痕の上から幅約 1.0㎝の縦方向のヘラ調整で仕上げる。ヘラ調整は粗い。
824	k-130	1 区	J13	a20･21	212	第 2 面		丸瓦	丸瓦	-	(3.5)	13.1	凸面の中程～玉縁まで遺存。内面はゴザ状の粗い布目痕。凸面は丁寧なナデ仕上げ。
825	k-020	1 区	J13	d･e20 ～ 23	K19			平瓦	平瓦	3.4(厚み)	25.6	25.2	表面磨滅。裏面に、先端の尖った工具で突いた様な粗い刻目が、やや斜め方向に直線状に 8 条はいる。滑り止めと考えられる。大振りな瓦で、普通の家屋には葺いていなかったと思われる。
826	k-287	3-2 区	東配管		撹乱			平瓦	平瓦	3.0	32.1	26.0	井戸枠に転用か？平瓦に比べると曲率はやや緩く、全面平滑に仕上げている。特に四周の側面はより丁寧に仕上げ角はほぼ直角である。平面形はやや長方形。
827	k-059	1 区	J13	c24	111	第 2 面		平瓦	平瓦		(17.8)	(19.0)	表面は丁寧なナデ仕上げを行っているが、所々摩耗している。頭の端部は面取りを行う。
828	k-221	1 区	J13	i ～ k22	360	第 3 面		平瓦	平瓦	1.6	(23.7)	(18.6)	凹面は横方向の粗いナデ。
829	k-253	1 区	J13	b23･24	437	第 3 面		平瓦	平瓦	1.5	22.3	20.4	平瓦にしては曲率が弱く、焼歪か？硬質に焼かれている。凹面は横方向の粗いナデ。
830	k-284	1 区	J13	e ～ g16･17	530	第 4 面		平瓦	平瓦	2.7	27.3	24.8	井戸枠に転用。平瓦に比べると曲率はやや緩く、全面平滑に仕上げている。特に四周の側面はより丁寧に仕上げ角はほぼ直角である。平面形はやや長方形。
831	k-141	1 区	J13	a ～ d19	244	第 2 面		瓦	海鼠壁瓦	2.1	21.8	(17.9)	通路状遺構の西側立瓦に使用。穿孔径 8 ～ 9mm の穿孔 2 箇所あり。転用か？
832	k-091	1 区	J13		181	第 2 面		塼？	塼？	4.1	14.5	13.0	側面は丁寧なナデ仕上げ。
833	k-043	1 区	J13	m16･17	431	第 3 面		平瓦	平瓦	2.7	28.0	24.6	井戸枠に転用。平瓦に比べると曲率はやや緩く、全面平滑に仕上げている。特に四周の側面はより丁寧に仕上げ角はほぼ直角である。頭の側縁中央には『菱型の中に楕円』の刻印を押す。平面形はやや長方形。
834	k-043	1 区	J13	m16･17	431	第 3 面		平瓦	平瓦	2.9	27.8	24.7	井戸枠に転用。平瓦に比べると曲率はやや緩く、全面平滑に仕上げている。特に四周の側面はより丁寧に仕上げ角はほぼ直角である。頭の側縁中央には『菱型の中に楕円』の刻印を押す。平面形はやや長方形。
835	D-038	1 区	J13	d18	K60			道具瓦	鬼瓦	-	-	-	跨鬼の脚部分のみ遺存。
836	D-053	1 区	J13	m22	撹乱			道具瓦	鬼瓦	-	-	-	鬼瓦の右脚元の一部が遺存する。珠文は竹管押し。
837	k-201	1 区	J13	d20	288	第 3 面		道具瓦	鬼瓦	-	-	-	小振りな鬼瓦。周縁の裏貼りは明瞭に確認できる。裏側の把手は欠損。
838	k-170	1 区	J13	c18	96	第 2 面		道具瓦	鬼瓦	-	-	-	家紋鬼瓦。家紋は『下り藤』で、調査地の安藤家の瓦と考えられる。裏貼りと把手を一体化。

観察表３　土製品・ミニチュア土器

報告書 No.	登録 No.	地区	大区画	小区画	遺構 No.	検出面	層位	種類	器種	縦 (口径) (cm)	器高 (cm)	横 (底径) (cm)	残存率 (％)	備　　考
839	C － 014	1 区	J13	c20	撹乱 1			土師質土器	虚無僧	2.9	(6.3)	2.3	80%	型合わせの痕跡が明瞭に側面に現われる。頭部欠損。
840	C － 046	1 区	J13	h･i19	撹乱			土師質土器	人形（不明）	-	-	2.4	30%	大夫か？胸部から腹部の着物に赤色顔料が残る。頭部および左半身欠損。底部の円錐形の穿孔(長 7.8㎝)あり。
841	C － 019	1 区	J13	b16･17	撹乱 18			土師質土器	人形 (不明)	3.9	(3.3)	3.0	40%	上半身欠損。雲母粉がわずかに遺存。底部に円錐形の穿孔あり。
842	C － 016	1 区	J13	j15	撹乱 2			土師質土器	人形 (不明)	-	-	-	-	型合わせで中空となる。頭部～胸部のみが遺存。内面指押さえ。三味線弾きか？
843	C － 018	1 区	J13	c･d24	撹乱 14			土師質土器	独楽	4.0	1.6	-	100%	中心に直径 5mm の円錐状の孔を穿つ。全面に雲母粉が僅かに遺存。
844	C － 034	1 区	J13	h･i17･18	撹乱 25			染付磁器	ミニチュア碗	4.0	1.8	1.8	98%	口縁部の一部が欠ける。体部側面に草花文を巡らす。
845	C － 021	1 区	J13	j･k･l19･20		整地土	1 層	土師質土器	箱庭道具 (塔)	3.2	(4.8)	(2.9)	50%	1mm 大の石英粒、長石粒を僅かに含む。
846	C － 017	1 区	J13	f19		整地土	1 層	土師質土器	仏像	(4.1)	(6.3)	2.6	60%	頸部から上部は欠損。底部に円錐形の穿孔あり。底部に合わせ痕あり。
847	C － 070	1 区	J13	b18		整地土	1 層	土師質土器	泥面子	2.8(直径)	0.9(厚み)	-	70%	表面の
848	C － 001	1 区	J13	h19		整地土	1 層	磁器	ミニチュア赤絵碗	2.3	1.2	0.9	65%	ままごと道具。
849	C － 028	1 区	J13	c24･25		整地土	2 層	土師質土器	天神	4.5	6.1	1.7	100%	底部 3mm 大の円錐形の穿孔あり。
850	C － 027	1 区	J13	e18		整地土	2 層	土師質土器	人形（不明）	2.4	(3.9)	1.7	90%	顔面半分および後頭部欠損。底部 3mm 大の円錐状の穿孔あり。
851	C － 029	1 区	J13	j･k15		整地土	2 層	土師質土器	騎馬武者	(5.6)	(4.2)	2.2	50%	馬の前足および武者の上半身欠損。底部に 2mm 大の円錐形の穿孔あり。
852	C － 025	1 区	J13	h16･17		整地土	2 層	土師質土器	犬	8.9	(4.5)	3.5	80%	4 足および耳が欠損。
853	C － 030	1 区	J13	b19		整地土	2 層	土師質土器	人形（布袋）	-	-	-	-	型合わせで中空。内外面に雲母粉多量に付着。内面粗い指押さえ。
854	C － 015	1 区	J13	f16･g17		整地土	2 層	施釉陶器	水滴（布袋）	(6.0)	4.8	2.8	80%	背中に 4mm 程度の孔を穿つ。膝から脚部が欠損。
855	C － 031	1 区	J13	c19		整地土	2 層	土師質土器	泥面子	4.6	1.3	4.5	98%	扇の型押し。底部若干欠損する。
856	C － 077	1 区	J13	d23		整地土	2 層	土師質土器	ミニチュアお釜の蓋	2.5	0.8	-	95%	ままごと道具。若干上部の持ち手部分が欠損。
857	C － 026	1 区	J13	i･j16･17		整地土	2 層	施釉陶器	ミニチュア皿	2.5	0.8	1.6	98%	内外面の殆どに施釉。轆轤ナデ。底部ヘラおこし。
858	C － 037	1 区	J13	d23･24		整地土	3 層	土師質土器	大黒	2.7	4.4	2.1	95%	底部に直径 2mm 程度の円錐形の穿孔あり。胸元の一部欠損。
859	C － 041	1 区	J13	c22･23		整地土	3 層	土師質土器	飾り馬	6.0	(4.2)	2.3	80%	脚部欠損。背部に雲母粉微量に付着。
860	C － 044	1 区	J13	j13･14		整地土	3 層	土師質土器	狐	3.7	(6.5)	2.4	80%	頭部欠損。底部に直径 1.2㎝大の円錐形の穿孔あり。背面に接合痕明瞭に残る。
861	C － 038	1 区	J13	j19･20		整地土	3 層	土師質土器	鷹	(6.1)	(5.3)	3.1	80%	尾羽根部欠損。型合わせ接合部の上面と下面をナデて摺り消す。
862	C － 035	1 区	J13	j16		整地土	3 層	土師質土器	人形（不明）	6.0	(5.3)	3.6	70%	頭部欠損。底部に約 2.0㎝大の円錐形の穿孔あり。
863	C － 047	1 区	J13	j･k15･16		整地土	3 層	土師質土器	亀	5.8	1.8	4.2		型合わせで中空。背面頭から尾まで施釉する。脚部（四肢）欠損。
864	C － 036	1 区	J13	d24･25		整地土	3 層	土師質土器	泥面子	2.6	1.0	3.0	100%	文様は花卉文の様に思われるが、断定しずらい。
865	C － 065	1 区	J13	k･l13 ～ 15		整地土	3 層	施釉陶器	ミニチュア鍋	3.9	1.6	-	95%	薄い透明釉が掛かる
866	C － 076	1 区	J13	i ～ k19･20		整地土	4 層	土師質土器	騎馬武者	5.9	(5.4)	2.2	70%	馬、人物共に頭部欠損
867	C － 074	1 区	J13	k ～ m24･25		整地土	4 層	土師質土器	鳩	(5.6)	3.8	3.0	90%	底部穿孔尾の部分が欠損

報告書 No.	登録 No.	地区	大区画	小区画	遺構 No.	検出面	層位	種類	器種	縦 (口径) (cm)	器高 (cm)	横 (底径) (cm)	残存率 (%)	備　　考
868	C － 075	1 区	J13	i ～ k19･20		整地土	4 層	土師質土器	兎	8.9	4.2	-	50%	左右貼り付けの半分が欠損
869	C － 032	1 区	J13	j16	169	第 2 面		土師質土器	騎馬武者	(6.1)	(4.9)	1.6	70%	馬の脚部および武者の頭部欠損。
870	C － 042	1 区	J13	j15･16	192	第 2 面		土師質土器	飾り馬	5.3	(3.3)	1.6	60%	脚部欠損。腹部に接合痕（バリ）が明瞭に残る。
871	C － 045	1 区	J13	k14･15	405	第 3 面		施釉陶器	西行	2.4	(4.0)	1.6	80%	頭部欠損。全面に薄い透明釉を施釉。前面の一部に緑釉が斑点状に掛る。側縁と底部に接合痕（バリ）が明瞭。
872	C － 033	1 区	J13	j14	208	第 2 面		土師質土器	大夫	-	-	-	10%	頭部のみ遺存。
873	C － 039	1 区	J13	j14	218	第 2 面		土師質土器	仏像	2.7	(2.2)	2.2	15%	台座部のみ遺存。底部に 2mm × 4mm 程度の穿孔あり。
874	C － 055	1 区	J13	j19	514	第 4 面		土師質土器	猿	-	8.8	3.8	95%	頭部～顔にかけて若干欠損全面表と後ろを貼合わせ
875	C － 043	1 区	J13	b22	342	第 3 面		土師質土器	巫女	(4.6)	8.8	(1.6)	50%	型合わせで中空。背面は殆んど遺存するが、表面は鈴のみ遺存。内外面に雲母粉付着。
876	C － 056	1 区	J13	k19	540	第 4 面		土師質土器	雀	8.0	5.7	4.9	100%	底部穿孔 . 中に玉あり
877	C － 058	1 区	J13	j･k19	540	第 4 面		土師質土器	鶏	6.5	6.0	3.3	100%	左右で貼合わせ
878	C － 059	1 区	J13	j･k19	540	第 4 面		施釉陶器	猿	4.2	4.3	4.0	100%	腕部分に斑点状に緑釉が掛かる
879	C － 020	1 区	J13	a18･19	56	第 1 面		土師質土器	箱庭道具 (鳥居)	(5.7)	(3.9)	(1.4)	55%	両脚部が欠損。雲母片わずかに遺存。
880	C － 023	1 区	J13	a17	47	第 1 面		土師質土器	用途不明品	4.5	1.4	4.3	100%	泥面子？
881	C － 009	3-2 区	東配管		2	第 2 面		土師質土器	飾り馬	4.6	(4.8)	2.2		19 世紀第 2 四半期
882	C － 008	3-2 区	東配管		2	第 2 面		土師質土器	鳥	5.0	(5.7)	3.0	80%	頭部は欠損している。底部に円錐形の穿孔あり。
883	C － 010	3-2 区	東配管		2	第 2 面		土師質土器	人形（不明）	6.2	(4.5)	3.6	80%	頭部欠損。裃部分に赤色の彩色が僅かに残る。裃雛か？。底部に円錐形の穿孔あり。18 世紀中頃。
884	C － 003	3-2 区	東配管		2	第 2 面		施釉陶器	犬	3.3	2.7	2.2	100%	殆ど全面に施釉。手捻り。17 世紀前葉。
885	C － 004	3-2 区	東配管		2	第 2 面		施釉陶器	ミニチュア鉢	3.6	1.8	1.4	100%	薄く全体に施釉。
886	C － 002	3-2 区	東配管		2	第 2 面		施釉陶器	ミニチュア鉢	3.3	1.8	2.6	40%	反転復元。内面施釉。
887	C － 005	3-2 区	東配管		2	第 2 面		施釉陶器	ミニチュア鉢	-	-	(2.7)	20%	焼成前に、体部中央に直径 3mm 程度の穿孔をする。底部糸切痕。
888	C － 011	3-1 区			1	第 2 面		施釉陶器	ミニチュア鉢	2.4	1.3	1.5	100%	口縁端部に線維痕あり。

観察表４　石製品

報告書 No.	登録 No.	地区	大区画	小区画	遺構 No.	検出面	層位	器種	石材	長さ (㎝)	幅 (㎝)	厚さ (㎝)	重さ (g)	備　　考
889	S － 042	1 区	J 1 3	c19		整地土	2 層	硯	緑色片岩	(17.5)	8.3	1.3 ～ 1.6	395.36	落潮から上位の海部が欠損。周囲の硯側が殆ど欠損。陸部と硯側の比高差 2 mm。陸部のほぼ中央に長楕円形の使用痕が認められる。裏面は陸部とほぼ同形で窪ます。
890	S － 041	1 区	J 1 3	c19		整地土	2 層	硯	緑色粘板岩系	17.5	6.0	2.4	372.92	陸部の使用痕は中央やや左寄りに認められる。海部の左側硯側が欠損。裏面は砥石として使用したような使用痕が認められる。
891	S － 040	1 区	J 1 3	i･j16･17	350	第 3 面		砥石	緑色粘板岩系	18.3	6.6	1.8 ～ 2.1	353.29	主に両面を使用している。片面は刃部が平らなものを、他の片面は丸鑿のようなものを研いだ痕跡が認められる。1 面は欠損が著しい。
892	S － 0 3 9	3-2 区	東側配管	中央	3	第 2 面		硯	泥岩	(12.6)	7.7	1.4	162.44	落潮から上位の海部が欠損。左隅部分の硯側が欠損。陸部と硯側の比高差 2 mm。

観察表５　金属製品

報告書 No.	登録 No.	地区	大区画	小区画	遺構 No.	検出面	層位	種類	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ（g）	残存率 (%)	備　　考
893	M-94	1 区	J 1 3	i20	k 32			鉄製品	錠前	15.0	11.1	2.4	584.02	95%	「双犬印」の錠前。鍵穴の横に別の鉄製品が付着。全体に錆つく。
894	M-091	1 区	J 1 3	h･i17･18	k 25			鉄製品	樋受け	23.8	18.1	0.7	306.30	100%	受けの部分は幅 11㎝程度の「U」字状となり、柄部の断面は長方形を呈し、先端は打ち込みのためか釘状に尖る。全体に錆びて、柄部の中位は膨張。
895	M-086	1 区	J 1 3	d･e20 ～ 23	k 19			鉄製品	庖丁	(13.5)	(0.9 ～ 2.3)	0.1 ～ 0.4	40.54	90%	先端部欠損。刃渡り 9.8㎝遺存。全体に錆がまわり、片面中位は膨張。
896	M-091	1 区	J 1 3	h･i17･18	k 25			銅製品	キセルの吸口	5.3	0.9	0.9	4.83	90%	吸口先端部分が欠損。吸口湾曲している。所々に緑青付着。
897	M-020	1 区	J 1 3	h16･17		整地土	2 層	鉄製品	出刃庖丁	(16.7)	5.3	0.1 ～ 0.6	153.74	80%	先端部欠損。口金部が遺存し、柄元が木質部に差し込まれている状態。推定刃渡り 13.5㎝。刃は錆びて膨張著しい。
898	M-059	1 区	J 1 3	j ～ m17 ～ 21		整地土	3 層	鉄製品	釘	(6.3)	0.5	0.5	11.48	80%	先端部欠損。頭部と胴部が錆のため膨張。
899	M-053	1 区	J 1 3	f23		整地土	3 層	銅製品	口金	2.0	2.4	2.0	4.52	80%	厚さ 0.8㎜程度の薄い銅板を楕円形に合わせている。全体に緑青が付着。内面に炭化材のようなものが付着。
900	M-053	1 区	J 1 3	f23		整地土	3 層	銅製品	キセルの雁首	1.7	1.6	1.3	2.90	-	火皿部分。外面緑青付着。
901	M-104	1 区	J 1 3	d23		整地土	3 層	銅製品	キセルの雁首	5.9	1.1	1.0	9.40	90%	雁首の体部が押し潰れている。所々緑青が付着。
902	M-054	1 区	J 1 3	i16 ～ 18		整地土	3 層	鉄製品	鏡	19.0	1.0	1.1	134.18	100%	背部は打ち込みのため凹む。
903	M-051	1 区	J 1 3	d21		整地土	3 層	鉄製品	熊手	(9.9)	6.6	-	149.20	80%	手の部分の厚みは腐食の進んでいない部分で 0.5㎝。柄の差込み部には若干の木質が遺存。

報告書No.	登録No.	地区	大区画	小区画	遺構No.	検出面	層位	種類	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ（g）	残存率(%)	備考
904	M-074	1区	J１３	i ～ k16		整地土	４層	鉄製品	釘	(6.8)	0.4	0.3	6.40	80%	先端部欠損。頭部と胴部が錆のため膨張。
905	M-073	1区	J１３	h･i18･19		整地土	４層	鉄製品	釘	(11.2)	0.6	0.5	18.00	90%	頭部欠損。錆びて全体が膨張。
906	M-072	1区	J１３	h･i16･17		整地土	４層	鉄製品	お玉状鉄製品	-	11.3	0.2 ～ 0.6	177.12	50%	柄の部分欠損。
907	M-071	1区	J１３	h16･17		整地土	４層	鉄製品	鎌	12.1	(11.9)	0.1 ～ 0.5	153.00	70%	刃先欠損。刃部の幅 4.1㎝。柄に差異込むために鈎状に曲げているのか？刃部と差込み部はほぼ直角をなす。全体は錆で膨張。
908	M-026	1区	J１３	b19	96	第２面		鉄製品	釘	(9.1)	0.5	0.3	20.90	70%	３つに折れる。頭部から胴部は錆で膨張。
909	M-026	1区	J１３	g16 ～ 18	245	第２面		鉄製品	釘	(10.7)	0.9 ～ 1.0	1.2	56.06	60%	頭部の幅は 2.6㎝。頭部から胴部にかけて錆のため膨張。
910	M-011	1区	J１３	k13	10	第１面		鉄製品	釘	(5.9)	0.6	0.5	5.23	50%	全体錆びて膨張。胴部に木質付着。
911	M-011	1区	J１３	k13	10	第１面		鉄製品	釘	8.7	0.6	0.5	8.66	100%	完形。頭部から胴部中位にかけて錆びて膨張する。頭部の幅は 1.8㎝を測る。
912	M-44	3-2区	東配管	中央	13	第２面		銅製品	キセルの雁首	6.6	0.9	0.8	6.16	90%	雁首先端から火皿部が上方に屈曲。火皿部が殆ど欠損。全体緑青著しい。
913	M-025	1区	J１３	a16･17	96	第２面		鉄製品	鎌	(14.6)	1.4 ～ 2.7	0.1 ～ 0.3	43.96	25%	差し込み部分（鈎状）が遺存。
914	M-028	1区	J１３	c17	96	第２面		鉄製品	槍先	20.0	3.4	0.3	78.40	99%	先端部分は若干欠損する。刃部長は 15.0㎝。胴部中程は錆が著しいため膨張。
915	M-025	1区	J１３	a16･17	96	第２面		鉄製品	円盤状鉄製品	14.1	(13.6)	0.2	123.07	90%	上部両側に径３mm 程度の穿孔あり。中央に径 1.1㎝の鈕状の突起が付く。懸仏か？全体に錆が付着。
916	M-106	1区	J１３	i･j16･17	350	第３面		銅製品	簪	14.5	3.3	0.1	5.01	100%	平打簪か？全体に鍍金。飾りは櫛、笄で先端に耳かきが付く。

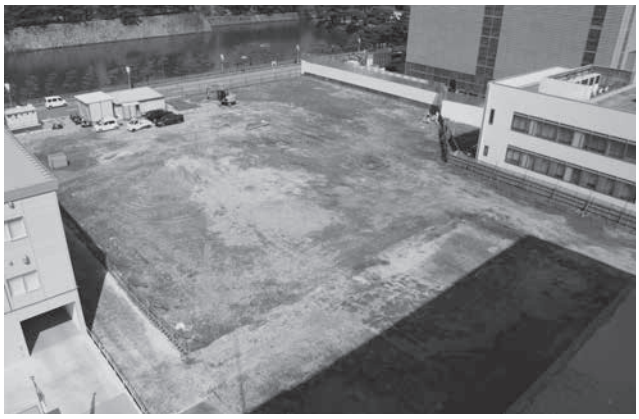
観察表６　木製品

報告書No.	登録No.	器種	地区	大区画	小区画	遺構No.	検出面	長さ(口径)(cm)	幅(高さ)(cm)	厚さ(cm)	残存率	備考
933	W069	下駄	1区	J13	h・i16 ～ 18	555	4面	(16.0)	9.5	3.9	80%	連歯下駄 (一木刳り抜き)。角型。台の後部欠損。台の表面には足裏の凹みが認められるが､左右のどちらかは不明。眼 (鼻緒の穴) は 0.6 ～ 0.7㎝程度。台の先端裏側が擦り減っている。
934	W074	下駄	1区	J13	h・i16 ～ 18	555	4面	21.1	8.7	2.1 ～ 2.5	98%	連歯下駄 (一木刳り抜き)。角型。台の表面には足裏の圧痕が認められ凹む。右足用と思われる。眼 (鼻緒の穴) は 0.7 ～ 1.2㎝程度。歯は前歯に比べ後歯の方が擦り減っている。
935	W058	下駄	1区	J13	h・i16・17	555	4面	21.4	9.1	5.2	90%	差歯下駄。丸型。表面形状は前後丸みを帯びる。前の差し歯が途中から欠損。台の表面中央、歯の位置に前後２箇所の 0.8 × 1.3㎝の長方形の孔を穿つ。歯の交換時のためのものと思われる。眼の径は約 0.8㎝内外。
936	W050	下駄	1区	J13	k19	540	4面	20.4	7.3	3.0	60%	差歯下駄。角型。台部の片側側面欠損する。両歯欠損。台の表面に僅かに漆が遺存。後部の眼は朽ちて肥大化する。
937	W049	下駄	1区	J13	j・k19	540	4面	22.8	8.2	3.9	90%	刳り下駄（一木の刳り抜き）。やや丸型。前歯の右半部が欠損。台の厚さ 1.1㎝。台の裏側先端擦り減る。
938	W038	下駄	1区	J13	j・k19	540	4面	20.2	7.4	1.8 ～ 2.7	80%	刳り下駄（一木の刳り抜き）。やや丸型。歯は３枚。中歯は一部欠けている。後歯は前歯に比べ摩耗している。眼 (鼻緒を通す穴) は前が直径 0.9㎝の円形、後は 0.9㎝× 1.2㎝の楕円形。
939	W046	下駄	1区	J13	j・k19	540	4面	21.0	8.2	2.9	60%	差歯下駄。角型。台 (足をおく板) の表面に漆が所々に遺存する。両歯欠損。台の裏側、後歯の後部の斜めのカット部分に商標か？
940	W047	下駄	1区	J13	j・k19	540	4面	(13.8)	6.1	2.3	60%	刳り下駄（一木の刳り抜き）。丸型。台の前半部が欠損のため復元長不明。眼は後部の片方のみ遺存。
941	W001	下駄	1区	J13	i・j16・17	350	3面	(20.1)	9.4	4.3	90%	連歯下駄 (一木抉り抜き)。丸型。台の側面の一部と末端部が若干欠損。後歯に比べ前歯の方がよく擦り減っている。眼 (鼻緒の穴) は 1.3 ～ 1.6㎝。板部分の厚みは 1.0㎝。
942	W024	下駄	1区	J13	i・j16・17	350	3面	(15.3)	7.2	2.8	90%	一木抉り出し。台部の後方が欠損。前方の眼（鼻緒穴）の１穴は遺存するが、後方の２穴は欠損。眼の位置は、台の裏側に 1.0 × 1.8㎝大の方形の穴を刳り、鼻緒の結び目が納まる様にしている。
943	W023	下駄	1区	J13	i・j16・17	350	3面	(14.2)	7.2	2.3	60%	一木抉り出し。前歯から先端が欠損。眼 (鼻緒穴) は 1.2 × 0.8㎝。後歯に比べ前歯が擦り減る。台の厚みは 1.0㎝。
944	W079	曲物の底板	1区	J13	h・i16・17	555	4面	13.2	-	1.0	100%	表面は平滑にするため、幅２㎝内外の加工痕あり。周縁の端部は面取りを行う。
945	W080	曲物の底板	1区	J13	h・i16 ～ 18	555	4面	14.0 ～ 14.8	-	1.0	95%	端部が若干欠損。やや楕円形。側面は面取りを行い、対象となる４箇所に径 1.5mm の竹釘の孔が確認できる。表面には約 2.5㎝幅の加工痕が認められる。
946	W068	曲物の底板	1区	J13	h・i16 ～ 18	555	4面	7.6	-	0.6	50%	約半分が遺存。端部を面取り。
947	W070	樽の蓋？	1区	J13	h・i16 ～ 18	555	4面	(32.2)	-	0.9	20%	３枚或いは４枚の結合で完形になると思われる。その内の端の１枚である。内側断面に径４mm 程度の結合孔を２箇所穿けている。内側断面には２×４㎝ (元は直径４㎝) の半円状に穿って加工している。表面には平滑にするため幅３㎝程度の加工痕が認められる。
948	W039	曲物の底板	1区	J13	j・k19	540	4面	(30.8)	-	0.6	10%	復元径 30.8㎝。隅の対象箇所に２箇所の直径３mm の目釘あり。
949	W045	曲物の底板	1区	J13	j・k19	540	4面	(7.0)		0.3	70%	復元径 7.0㎝。直径を割り出した時の中心点あり。両端を斜めに切断。
950	W043	曲物の底板	1区	J13	j・k19	540	4面	(8.6)	-	0.3	70%	復元径 8.6㎝。直径を割り出した時の中心点あり。
951	W035	曲物の底板	1区	J13	i・j16・17	530	3面	１０．４	-	0.7	90%	片端欠損。周囲をやや斜めに加工。平面には 1.5 ～ 1.7㎝幅の平滑にするための加工痕が認められる。1 個は欠損しているが、側面の４箇所の対象位置に径２mm の孔を穿つ。
952	W031	曲物の底板	1区	J13	h・i19	518	4面	11.5 ～ 11.8		1.2	100%	片方の端部は斜めに面取りを行っている。中心には加工の際に径をだした痕跡あり。
953	W010	曲物の蓋	1区	J13	i・j16・17	350	3面	8.8	-	0.5	70%	板材の結合のため１mm 幅で長さ５mm の孔が２箇所あり樹皮 (桜樺？) が遺存。中心には摘み細工の取付けのためか 1.5 ミリ程度の孔が穿たれる。端部は丸みを帯びる。
954	W011	曲物の底板	1区	J13	i・j16・17	350	3面	7.6	-	0.5	55%	約半分が欠損。
955	W081	桶底	1区	J13	p11	562	3面	29.7	-	1.2	70%	底板は４枚に分割の内、片方の端が欠損。板には製作時の加工痕 (傷) が認められる。
	W081	桶底	1区	J13	p11	562	3面					〃
	W081	桶底	1区	J13	p11	562	3面					〃
956	W060	曲物の側板	1区	J13	h・i16・17	555	4面	14.2	(4.0)	0.3	-	遺存状態は樺で結合しているが、上下は破砕および欠損しているため高さが不明である。

報告書 No.	登録 No.	器種	地区	大区画	小区画	遺構 No.	検出面	長さ（口径）(cm)	幅（高さ）(cm)	厚さ (cm)	残存率	備　　考
957	W063	曲物の側板	1 区	J13	h・i16 ～ 18	555	4 面	13.8	(6.0)	0.2 ～ 0.3	-	柄杓か？側板の上下は一部破損。結合部の樹皮（樺？）が遺存しているが、破砕箇所も認められる。中位やや下方に縦 1.4、横 1.8㎝の長方形の孔あり。孔の周囲には縦横に樺が通され、柄の挿込み部分の補強か？
958	W071	曲物側板	1 区	J13	h・i16 ～ 18	555	4 面	-	13.5	0.5	-	柄杓か？曲物側板の一部分で、結合部である。２個体に割れている。樺綴じが明瞭に遺る。結合部には２枚の板に縦 1.8㎝、横 2.4㎝の長方形の柄の挿込み口が穿けられている。
	W071	曲物側板	1 区	J13	h・i16 ～ 18	555	4 面					〃
959	W036	曲物の側板	1 区	J13	e ～ g17	530	4 面	16.9	2.5	0.3	-	曲物側板の縦方向の一部分と思われる。遺存状態は折れたため「U」字状を呈する。樺による結合部が遺存。
960	W037	曲物の側板	1 区	J13	e ～ g17	530	4 面	-	3.7	0.4	-	曲物側板の縦方向の一部分と思われる。樺による結合部が遺存。
961	W030	曲物の側板	1 区	J13	h・i19	518	4 面	20.0	5.5	0.4	90%	３個体に割れている。結合部分がはずれて開いている状態。下部は所々欠損する。
	W030	曲物の側板	1 区	J13	h・i19	518	4 面					〃
	W030	曲物の側板	1 区	J13	h・i19	518	4 面					〃
962	W017	曲物の側板	1 区	J13	j16・17	350	3 面	(14.5)	(2.7)	0.5	90%	曲物側板の一部。遺存状態は結合部が欠損していることから撥ねて楕円形状となる。
	W018	曲物の側板	1 区	J13	j16・17	350	3 面					〃
963	W025	曲物の側板	1 区	J13	i・j16・17	350	3 面	13.5	4.8	0.3 ～ 0.4	90%	遺存形状は「U」字状となる。割れて伸びている状態か？樺の結合部は遺存。
964	W078	手桶の側板	1 区	J13	h・i16 ～ 18	555	4 面	18.7	7.2	1.5	100%	手桶の側板の１枚である。やや内側に湾曲する。中央やや上部に持ち手の柄を挿込むための縦 3.4㎝、横 1.6㎝の方形の穴を穿つ。上端部の角を斜めに面取り。
965	W059	木簡	1 区	J13	h・i16 ～ 18	555	4 面	11.7	2.0	0.5	95%	頭の部分に紐を結ぶための抉りを入れる。表裏に墨書あり。解読不明。頭部の端が欠損。
966	W064	箸	1 区	J13	h・i16 ～ 18	555	4 面	26.5		0.4 ～ 0.8	100%	〃
967	W065	箸	1 区	J13	h・i16 ～ 18	555	4 面	25.1		0.5 ～ 0.7	100%	先端から頭にかけて中膨らみの形状となる。断面形状は丸を意識しているため、側面に幾条かの面取りをしている。
968	W066	箸	1 区	J13	h・i16 ～ 18	555	4 面	25.6		0.3 ～ 0.6	100%	〃
969	W067	箸	1 区	J13	h・i16 ～ 18	555	4 面	26.3		0.4 ～ 0.8	100%	〃
970	W057	手桶の側板	1 区	J13	k19	540	4 面	(16.9)	6.4	1.2	-	中央上部に縦 2.6㎝、横 1.8㎝の臍穴を穿つ。桶の持ち手の差し込み穴と思われる。
971	W012	楔状木製品	1 区	J13	j16・17	350	3 面	10.5	2.5	0.5 ～ 2.8	97%	先端部やや欠損し、尖っていない。平面形は先端を丸く加工している。内面に削りの加工痕が認められる。
972	W013	楔状木製品	1 区	J13	j16・17	350	3 面	10.0	2.2	0.2 ～ 1.9	97%	先がやや欠損。内面に削りの加工痕が認められる。
973	W014	楔状木製品	1 区	J13	j16・17	350	3 面	9.0	2.0	0.5 ～ 2.2	95%	先端欠損。内面に削りの加工痕が認められる。
974	W015	楔状木製品	1 区	J13	j16・17	350	3 面	9.9	2.1	0.3 ～ 1.8	97%	先端やや欠損。
975	W018	漆塗りの蓋	1 区	J13	i・j16・17	350	3 面	8.5	-	1.4	100%	平面形状は円形。上部から側面に黒漆を塗布。上面側縁の６等分した位置に径 1.5mm 程度の木釘を打込む。上面には有機物付着。
976	W019	漆塗りの木片	1 区	J13	i・j16・17	350	3 面	10.8	1.4	0.6	100%	漆塗布の端々が剥離している。端部は面取りを行っている。用途不明品。
977	W016	扇子	1 区	J13	j13	451	3 面	10.9	0.8	1.1	-	親骨の部分および要が遺存するが、途中から欠損。中骨が貼りついた状態で若干遺存。元々の形状が不明なため残存率が不明。
978	W005	工具の柄？	1 区	J13	i・j16・17	350	3 面	10.6	3.0	2.5	100%	握りの断面形状は楕円形を呈する。金属片（刃部）が６mm 遺存。柄の先端付近に径 2.5mm の穿孔が斜めに認められ、収納時の紐通しの孔と思われる。柄の下方の先端付近は使用時の握圧でやや窪む。
979	W073	漆椀	1 区	J13	h・i16・17	555	4 面	-	(9.0)	0.6 ～ 1.2	70%	口縁部～体部中位まで欠損。内面は朱漆、外面は黒漆。高台畳付は面取りを行っている。底部の厚みは 2.3㎝。
980	W061	漆椀	1 区	J13	h・i16 ～ 18	555	4 面	-	-	0.8	-	３個体に割れている。体部中位から底部が遺存。実測は反転復元。漆膜の色調は内面は 2.5YR3/6(暗赤褐)、外面は黒漆に朱で文様を描く。文様は不明。底径は 6.3㎝。
	W061	漆椀	1 区	J13	h・i16 ～ 18	555	4 面					〃
	W061	漆椀	1 区	J13	h・i16 ～ 18	555	4 面					〃
981	W062	漆椀	1 区	J13	h・i16 ～ 18	555	4 面	12.0	5.2	0.2 ～ 0.7	-	２個体に割れる。内面は朱漆、外面は黒漆に赤漆で文様を描く。文様は不明。底径は 5.8㎝。
	W062	漆椀	1 区	J13	h・i16 ～ 18	555	4 面					〃
982	W053	漆椀	1 区	J13	k19	540	4 面	13.0	7.6	0.2 ～ 1.2	90%	全面に黒漆塗布。畳付は漆欠損。外面胴部に蒔絵？
983	W055	漆椀	1 区	J13	k19	540	4 面	11.0	5.3	0.2 ～ 0.8	30%	外面黒漆、内面赤漆を塗布。外面に扇模様の蒔絵。
984	W054	漆椀	1 区	J13	k19	540	4 面	10.6	(3.9)	0.2 ～ 0.8	65%	底部欠損。外面黒漆、内面赤漆を塗布。
985	W032	漆椀	1 区	J13	h・i19	518	4 面	-	-	0.3 ～ 0.6	-	殆どが欠損。内面は朱漆、外面は黒漆である。外面黒漆の上から朱漆で文様を描く。文様は不明。反転復元。残存高 2.9㎝、底径 5.8㎝。
986	W033	漆椀	1 区	J13	h・i19	518	4 面	-	-	-	-	底部の一部のみ遺存、高台部は欠損。内面は朱漆、外面は黒漆。反転復元。残存高は 2.2㎝、碗の底部の厚みは 1.9㎝。
987	W034	漆椀	1 区	J13	h・i19	518	4 面	-	-	-	-	４個体に割れて、接合しても完形とならず口縁と高台が欠損する。内外面は朱漆。反転復元。残存高は 6.0㎝、残存最大径 10.2㎝。
	W034	漆椀	1 区	J13	h・i19	518	4 面					〃
	W034	漆椀	1 区	J13	h・i19	518	4 面					〃
	W034	漆椀	1 区	J13	h・i19	518	4 面					〃
988	W029	漆椀	1 区	J13	j13	451	3 面	14.0	(6.7)	0.3 ～ 0.6	-	６個体に割れている。底部欠損。高台内漆膜が剥離。漆の色調は 10R2/2（極暗赤褐）。
	W029	漆椀	1 区	J13	j13	451	3 面	-	-	-	-	〃
	W029	漆椀	1 区	J13	j13	451	3 面	-	-	-	-	〃
	W029	漆椀	1 区	J13	j13	451	3 面	-	-	-	-	〃
	W029	漆椀	1 区	J13	j13	451	3 面	-	-	-	-	〃
	W029	漆椀	1 区	J13	j13	451	3 面	-	-	-	-	〃
989	W026	漆椀	1 区	J13	i・j16・17	350	3 面	-	(6.5)	0.4 ～ 1.1	60%	２個体に割れている。口縁端部から体部中位まで欠損。内面は朱漆、外面は黒漆で蒔絵を施す。実測№ 127 と同一個体。
	W026	漆椀	1 区	J13	i・j16・17	350	3 面	-	(6.5)	0.4 ～ 1.1	60%	２個体に割れている。口縁端部から体部中位まで欠損。内面は朱漆、外面は黒漆で蒔絵を施す。実測№ 123 と同一個体。
990	W027	漆椀	1 区	J13	i・j16・17	350	3 面	-	(5.5)	0.2k ～ 0.9	-	殆どが欠損。口縁端部から体部下方までの一部分が僅かに遺存。内外面黒漆が塗布される。内面には朱漆で花弁文様が描かれる。

写　真　図　版

図版 1

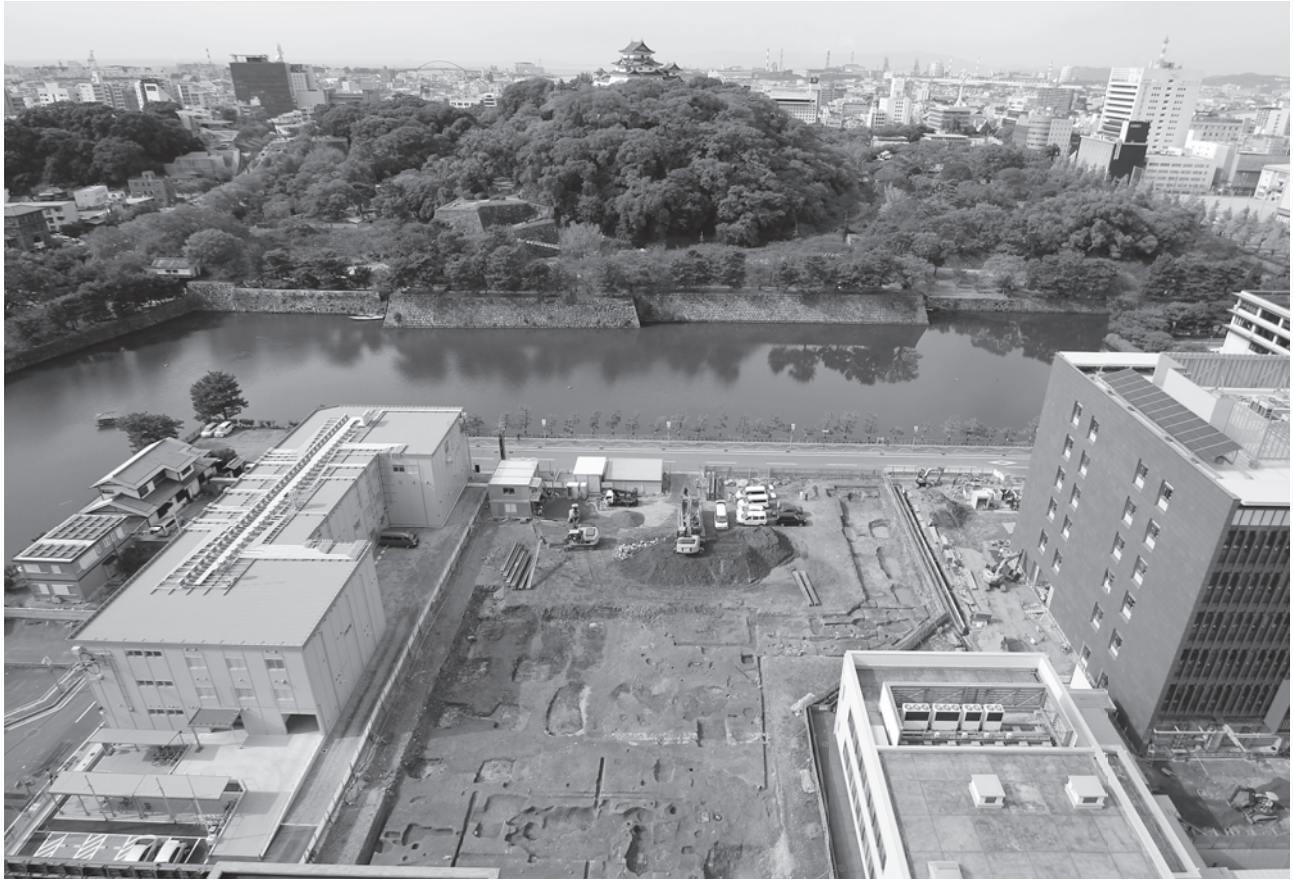


1. 調査前全景（南東から）

2. 調査前全景（北西から）

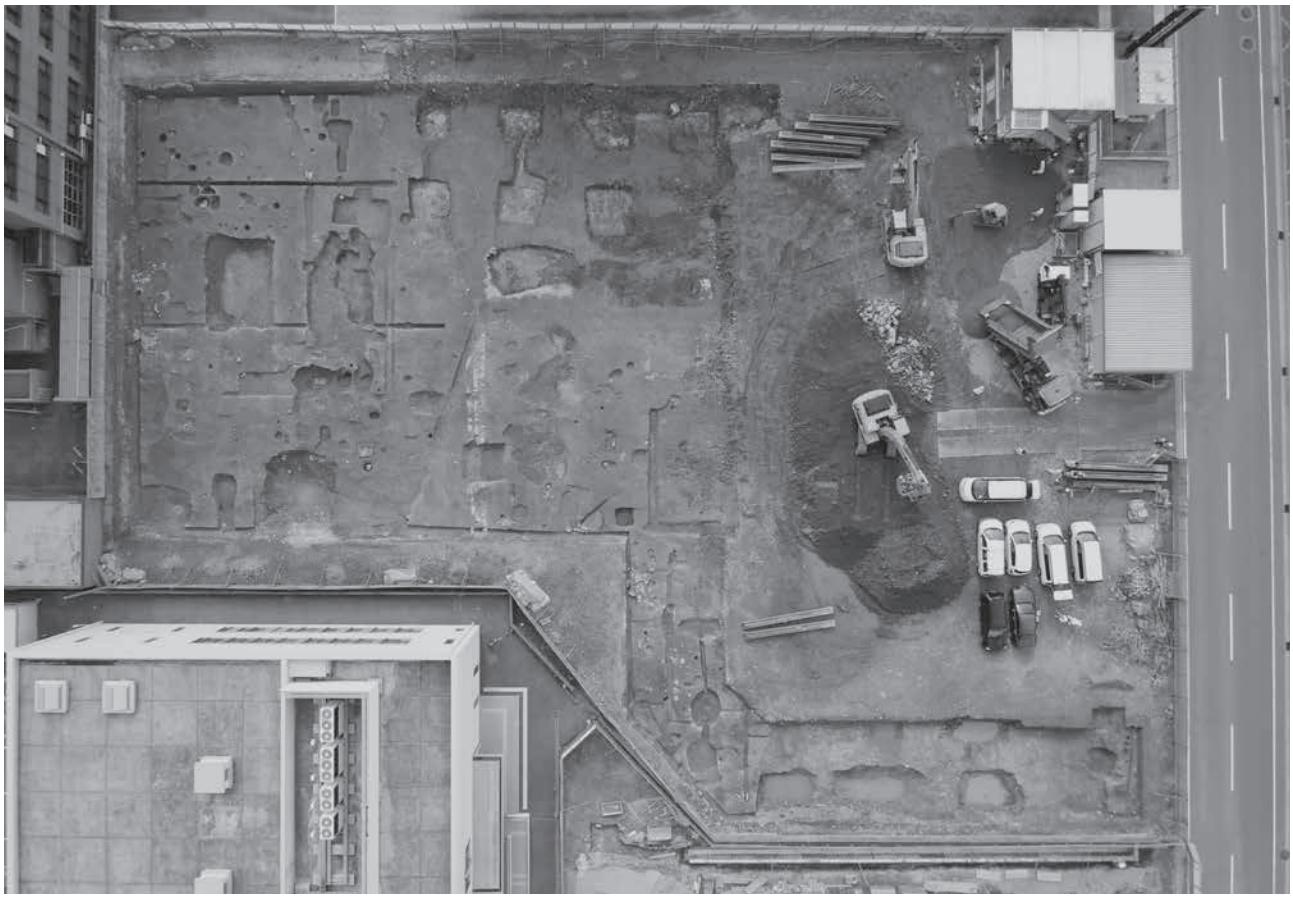
3. 調査地（西から）

4. 調査地（西から）



5. 調査地から和歌山城天守を望む（東から）

図版２



１．１区　第１遺構面　調査区全景

２．１区　調査区全景（北から）

３．１区　調査区全景（北から）

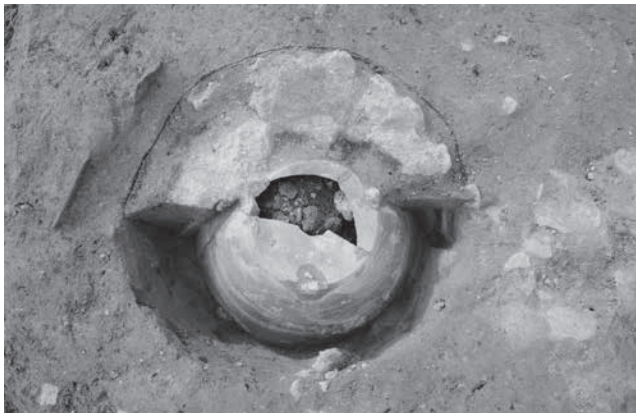
４．１区　調査区全景（北西から）

５．１区　調査区全景（北東から）

図版３

１．１区　第１遺構面全景（南東から）

２．１区　和歌山大空襲時の焼土分布（南西から）



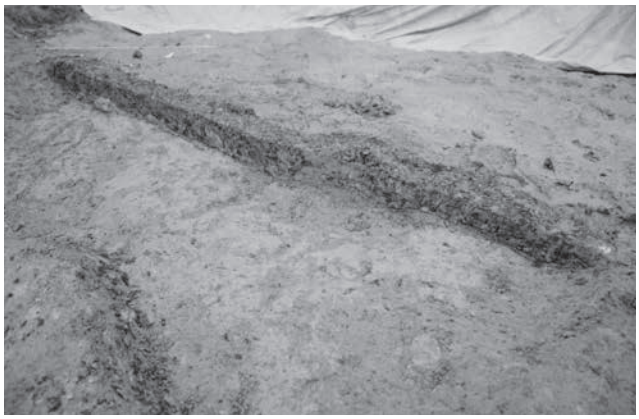
３．１区　遺構 70　水琴窟１（東上から）

４．１区　遺構 78　水琴窟２（南から）

５．１区　遺構１～４　柱穴列（北西から）

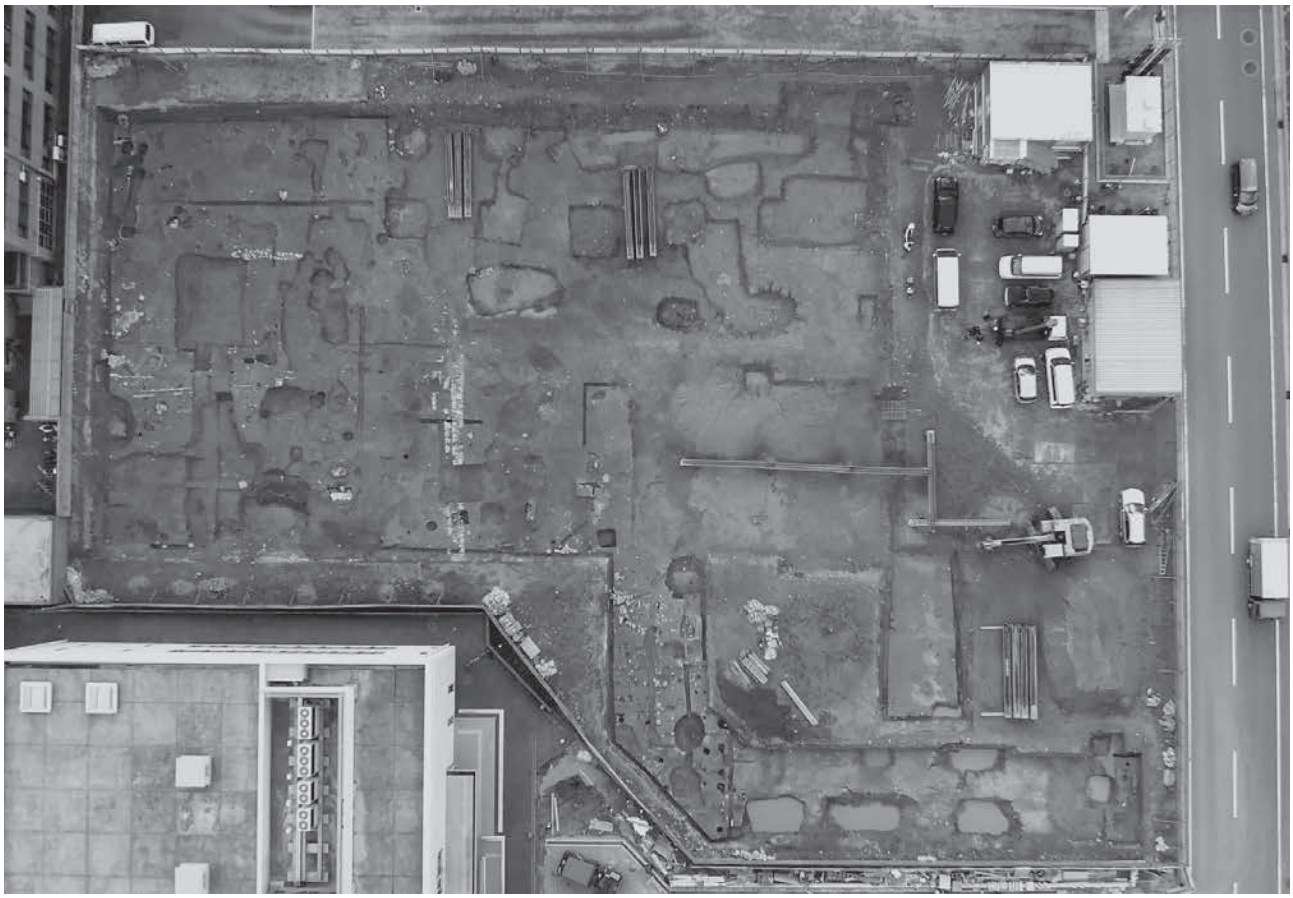
６．１区　遺構 87　瓦積井戸１（南から）

７．１区　遺構 431　瓦積井戸２（北東から）



８．１区　遺構６　土層断面（西から）

図版４



１．１区　第２遺構面　調査区全景

２．１区　遺構 86　土塀基礎全景（北から）

３．１区　遺構 86　土塀基礎全景（南から）

４．１区　遺構 86　断割り（西から）

図版５

１．１区　遺構 212　苑池状遺構１（東から）

２．１区　遺構 212　ｃ－ｃ’土層断面（南東から）

３．１区　遺構 212　ｅ－ｅ' 土層断面（南から）

４．１区　遺構 212　瓦集積状況（西から）

５．１区　遺構 212　敷石土坑断割り（南東から）

図版６

１．１区　遺構 115　焼土充填土坑群（東から）

２．１区　遺構 115-5・6　ａ－ａ' 土層断面（北から）

３．１区　遺構 115-2・5・6　ｂ－ｂ ' 土層断面（北から）

４．１区　遺構 96　ｄ－ｄ ' 土層断面（北東から）

５．１区　遺構 96　ｆ－ｆ ' 土層断面（南西から）

図版７

１．１区　遺構 244　通路状遺構（西から）

２．１区　遺構 244　ｆ－ｆ’土層断面（東から）

３．１区　遺構 127　土層断面（南東から）

４．１区　遺構 181　土層断面（西から）

５．１区　遺構 89　土層断面（南から）

６．１区　遺構 234　土層断面（北から）

７．１区　遺構 90　土層断面（南西から）

８．１区　遺構 90　土層断面（南東から）

図版８

１．１区　遺構 91　土層断面（南から）

２．１区　遺構 94　土層断面（南から）

３．１区　遺構 97　土層断面（東から）

４．１区　遺構 100　土層断面（南から）

５．１区　遺構 111　土層断面（北から）

６．１区　遺構 118　土層断面（南から）

７．１区　遺構 119　土層断面（南から）

８．１区　遺構 121　土層断面（南から）

図版９

１．１区　遺構 124　土層断面（北から）

２．１区　遺構 125（左）・126（右）　土層断面（北から）

３．１区　遺構 211 石列（東から）

４．１区　遺構 104　土器出土状況（西から）

５．１区　遺構 188　石敷遺構（南から）

６．１区　遺構 188　b － b' 土層断面（南から）

７．１区　遺構 190 雨落状遺構・遺構 192 礫集積箇所（北西から）

８．１区　遺構 190　雨落状遺構（西から）

図版 10

1．1区　遺構 190　土層断面（南東から）

2．1区　遺構 190　土層断面（西から）

3．1区　遺構 192　c－c ’土層断面（北から）

4．1区　礎石建物跡 1（北から）

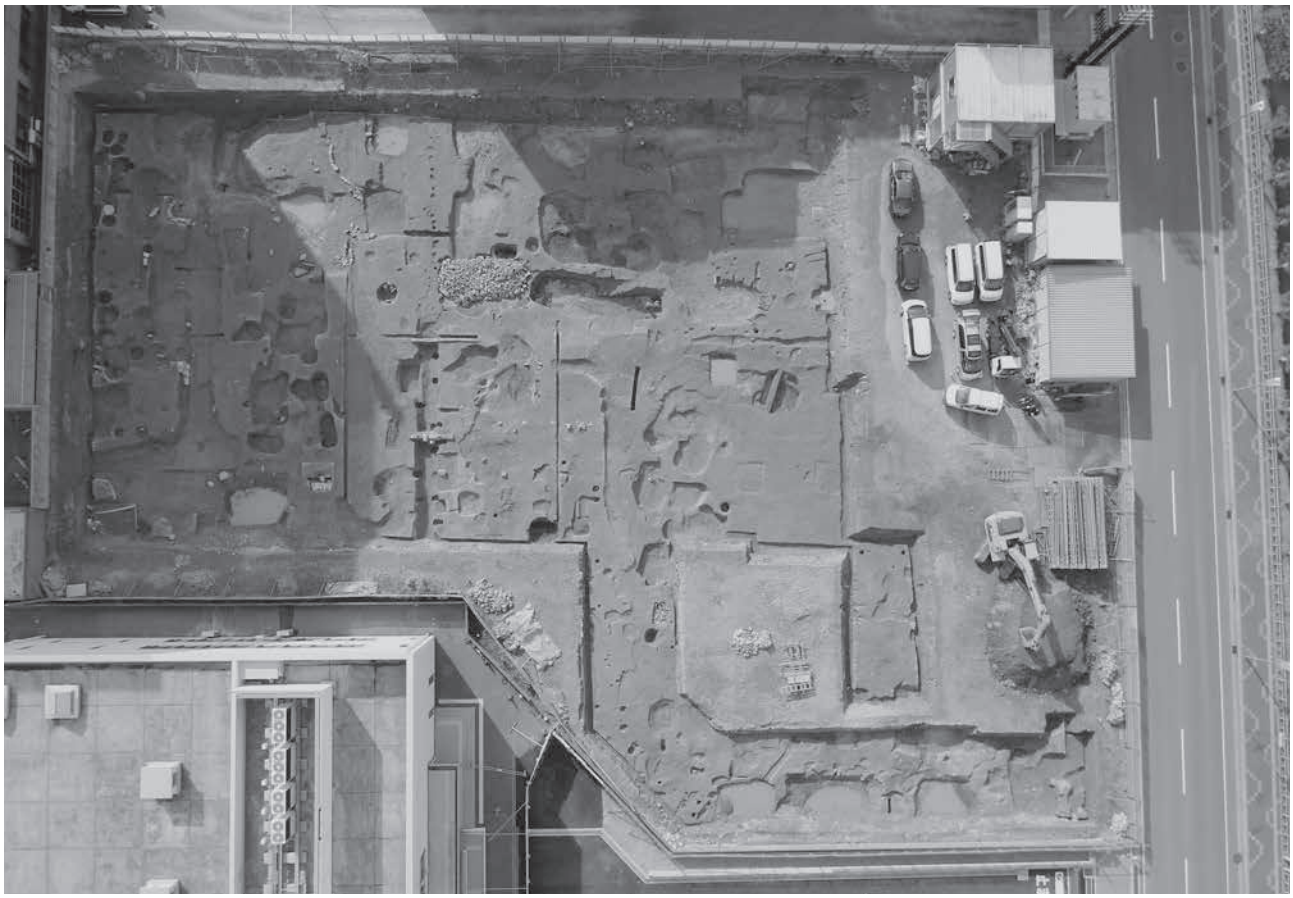
5．1区　遺構 218　c－c ’土層断面（西から）

6．1区　遺構 218　d－d ’土層断面（西から）

7．1区　遺構 223　小礫根固め柱断割り（南西から）

8．1区　遺構 228　小礫敷き根固め柱穴土層断面（西から）

図版 11



1．1区　第３遺構面　調査区全景

2．1区　調査区全景（西から）

3．1区　調査区南東隅（西から）

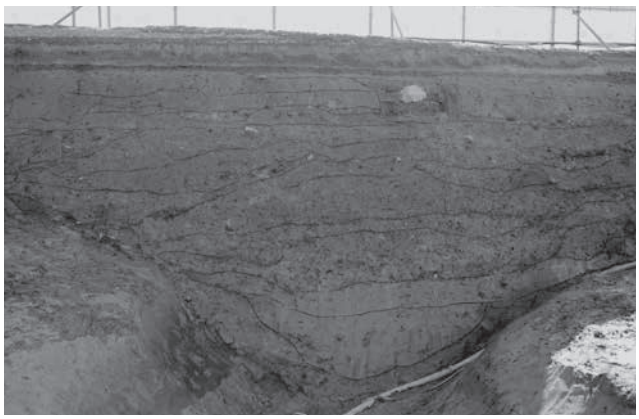
4．1区　調査区北西隅（西から）

5．1区　調査区北側（南西から）

図版 12

1．1区　遺構 437　苑池状遺構２（東から）

2．1区　遺構 437　護岸状況（南から）



3．1区　遺構 437　南壁土層堆積状況（北西から）

4．1区　遺構 342　通路状遺構２（北から）

5．1区　遺構 342　通路状遺構２（北から）

図版 13

1．1区　遺構 342　a－a ’土層断面（北から）

2．1区　遺構 342　b－b ’土層断面（南から）

3．1区　遺構 342　石積検出状況（西から）

4．1区　遺構 438　礫出土状況（北西から）

5．1区　遺構 439　礫出土状況（西から）

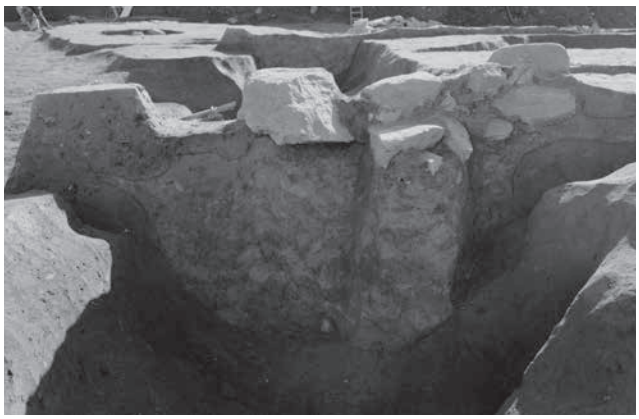
6．1区　遺構 402・403・404　柱穴列（南から）

7．1区　遺構 401　小礫検出状況（北から）

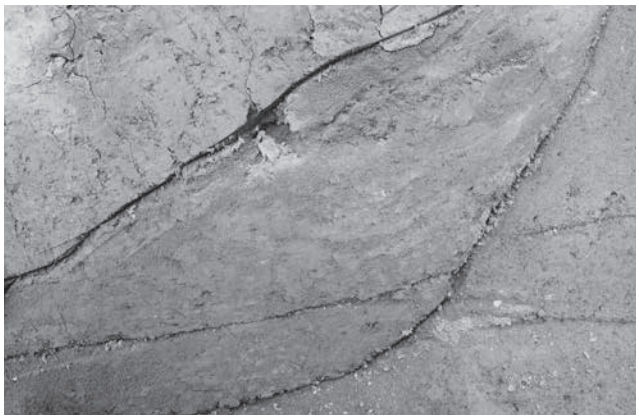
8．1区　遺構 401　土層断面（東から）

図版 14

1．1区　遺構 436　屋敷地境界溝 1（北東から）



2．1区　遺構 436　a － a’ 土層断面（北から）

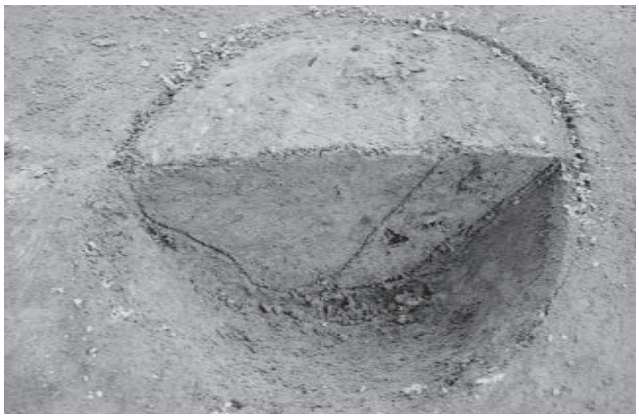


3．1区　遺構 436　屋敷地境界溝 1 内のラミナ

4．1区　屋敷地境界柱穴列 1（遺構 262 ～ 276）（南から）

図版 15

1．1区　遺構 267　土層断面（西から）



2．1区　遺構 271　土層断面（西から）

3．1区　遺構 276　土層断面（西から）

4．1区　遺構 280　土層断面（西から）

5．1区　遺構 281　土層断面（西から）

6．1区　遺構 279　土層断面（西から）

7．1区　遺構 289　土層断面（西から）

8．1区　遺構 277　土層断面（西から）

図版 16

1．1区　遺構 360（左）・361（右）　地下式倉庫（東から）

2．1区　遺構 360　土層断面（東から）

3．1区　遺構 361　土層断面（東から）

4．1区　遺構 361　地下式倉庫スロープ部（北西から）

5．1区　遺構 451　地下式倉庫（北西から）

6．1区　遺構 451・452　土層断面（北東から）

7．1区　遺構 368　g－g ’土層断面（西から）

8．1区　遺構 368　b－b ’土層断面（西から）

図版 17

1．1区　遺構 368　屋敷地境界溝２（西から）

2．1区　遺構 315　土層断面（南から）

3．1区　遺構 317　土層断面（南から）

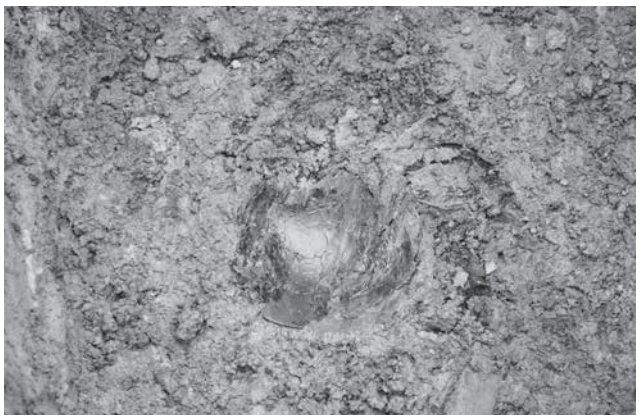
4．1区　遺構 320　土層断面（南から）

5．1区　遺構 321　土層断面（南から）

図版 18

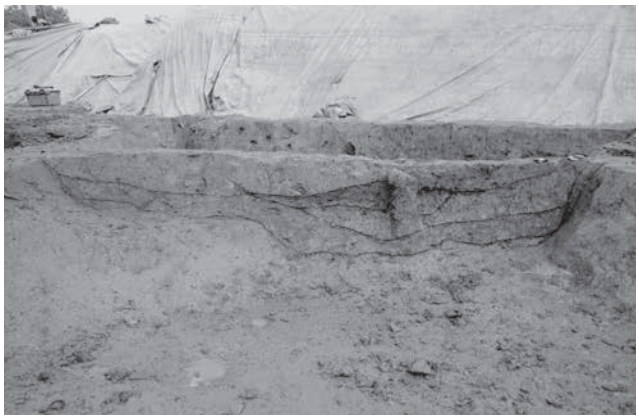
1．1区　遺構 350　土器出土状況（東から）

2．1区　遺構 350　土層断面（南から）



3．1区　遺構 350　漆塗り椀出土状況

4．1区　遺構 442　土層断面（西から）

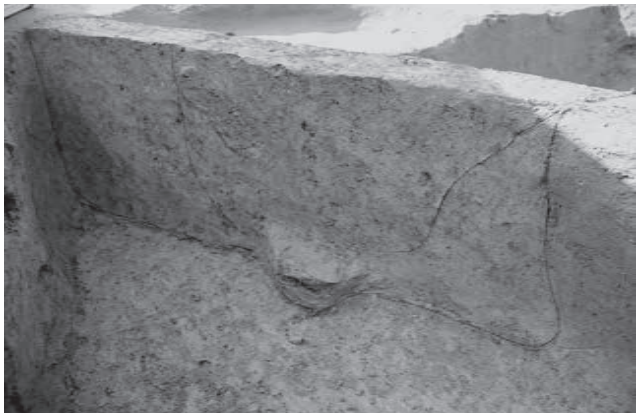


5．1区　遺構 419　b－b ' 土層断面（南東から）

図版 19

1．1区　遺構 419　c－c ’土層断面（南から）

2．1区　遺構 453　j－j ’土層断面（南から）

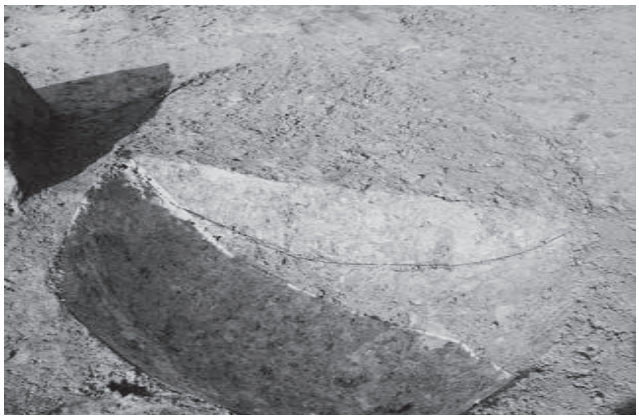


3．1区　遺構 453・454　k－k ’土層断面（南西から）

4．1区　遺構 447　土層断面（東から）

5．1区　遺構 448　土層断面（南西から）

6．1区　遺構 449　土層断面（西から）



7．1区　遺構 450　土層断面（南東から）

8．1区　遺構 455　土層断面（南東から）

図版 20

1．1区遺構 456　土層断面（東から）

2．1区　遺構 457　土層断面（東から）

3．1区　遺構 458　土層断面（西から）

4．1区　遺構 459　土層断面（南から）

5．1区　遺構 459　完掘状況（南西から）

6．1区　遺構 454　礎石列 1 検出状況（北東から）

7．1区　遺構 454　m－m ’ 土層断面（西から）

8．1区　遺構 454　l － l ’ 土層断面（東から）

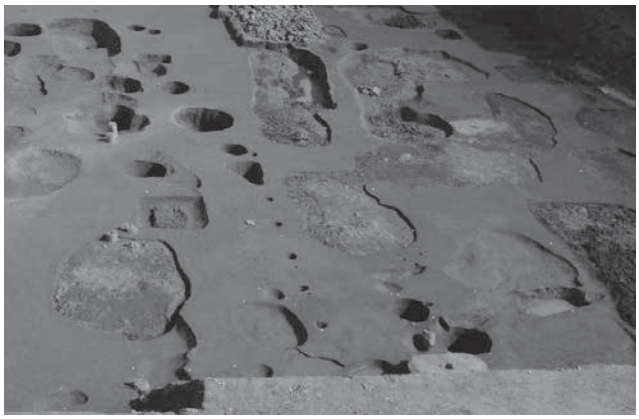
図版 21

1．1区　第4遺構面　調査区全景

2．1区　調査区全景（西から）

3．1区　調査区東側（南から）

4．1区　調査区全景（南西から）



5．1区　調査区全景（西から）

図版 22

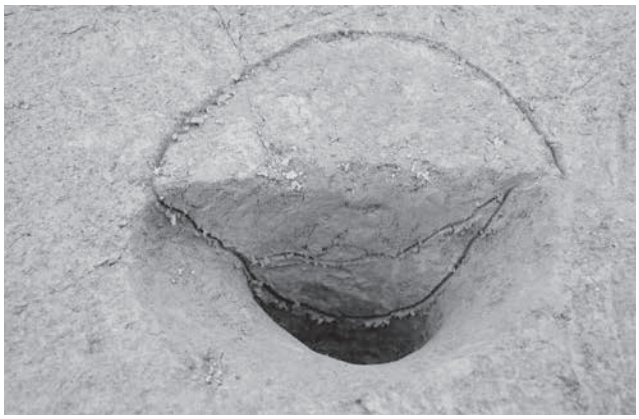
1．1区　遺構 541（右）　屋敷地境界溝 3・遺構 539（左）
屋敷地境界柱穴列 2（南から）

2．1区　遺構 538　屋敷地境界柱穴列 3（西から）

3．1区　遺構 541-2　土層断面（南から）

4．1区　遺構 541-5　土層断面（南から）

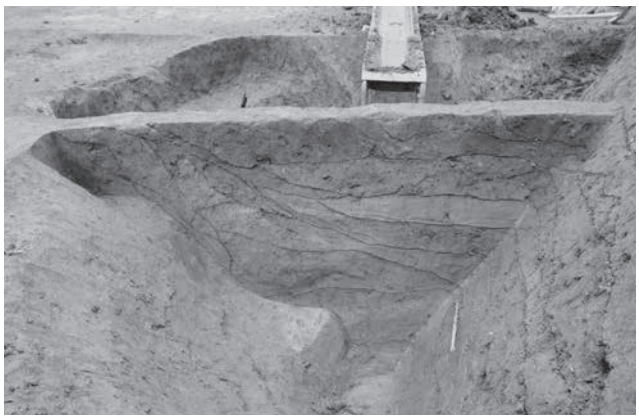
5．1区　遺構 538-4　土層断面（南から）



6．1区　遺構 538-5　土層断面（南から）

図版 23

1．1区　遺構 530・540・555　廃棄土坑群（西から）



2．1区　遺構 530　土層断面（東から）

3．1区　遺構 540　土層断面（南から）

4．1区　遺構 540　土層断面（南から）

5．1区　遺構 540　土層断面（西から）

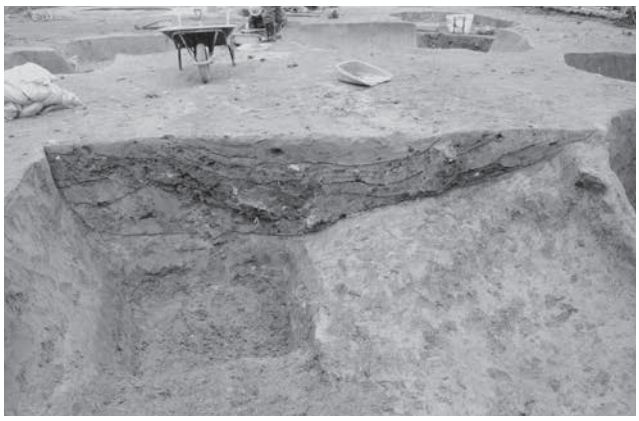
図版 24

1．1区　遺構 540　土層断面（西から）

2．1区　遺構 540　遺物出土状況

3．1区　遺構 555　土層断面（南東から）

4．1区　遺構 555　墨書荷札出土状況



5．1区　遺構 518　土層断面（東から）

6．1区　遺構 571　土層断面（北から）

7．1区　遺構503(左)・502(右)　土層断面(南から)

8．1区　遺構 498　大型土坑土層断面（南から）

図版 25

1．1区　遺構 532　大型土坑土層断面（東から）

2．1区　遺構 533　大型土坑土層断面（南東から）

3．1区　遺構 474・476・478・481・486
素掘井戸群 1（北西から）

4．1区　遺構 474　土層断面（北東から）

5．1区　遺構 476　土層断面（東から）

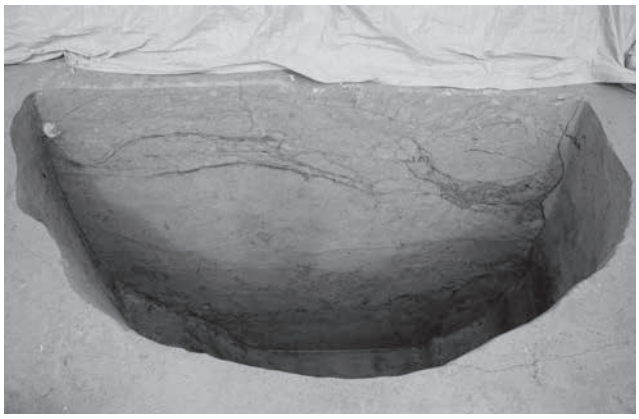
6．1区　遺構 481　土層断面（北東から）

7．1区　遺構 551　大型土坑土層断面（南西から）

8．1区　遺構 514　土層断面（東から）

図版 26

1．1区　遺構 519　土層断面（南から）



2．1区　遺構 562　大型土坑土層断面（南から）

3．1区　遺構 481　断割り状況（北東から）

4．1区　遺構 486　土層断面（東から）

5．1区　遺構 468　土層断面（南東から）

6．1区　遺構 468　土層断面（南から）

7．1区　遺構 472　土層断面（東から）

8．1区　遺構 473　土層断面（北東から）

図版 27

1．1区　遺構 473-2　土層断面（北東から）

2．1区　遺構 475　i－i' 土層断面（北から）

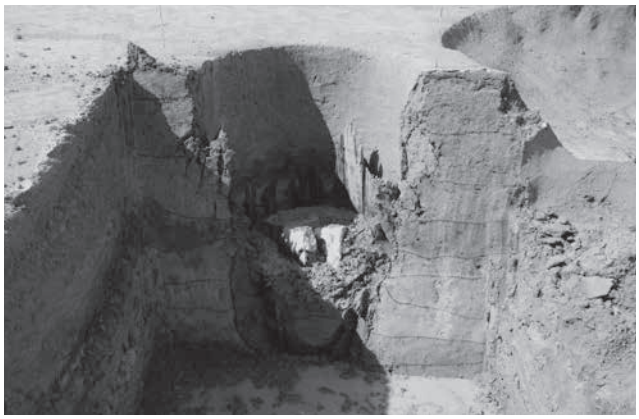
3．1区　遺構 475　h－h ' 土層断面（南から）

4．1区　遺構 536　素掘井戸土層断面（南西から）

5．1区　遺構 537　素掘り井戸土層断面（南から）

6．1区　遺構 536・537　完掘状況（南西から）

7．1区　遺構 492　木枠井戸 1（南東から）



8．1区　遺構 492　木枠井戸 1 断割り状況(東から)

図版 28

1．1区　遺構 527　木枠井戸２土層断面（南東から）

2．1区　遺構 554　木枠井戸３土層断面（南東から）

3．1区　北壁土層堆積状況（南東から）

4．1区　南壁土層堆積状況（北西から）

5．1区　東壁土層堆積状況（北西から）

図版 29

1．2-1 区　第 1 遺構面　完掘状況（西から）

2．2-1 区　遺構 4　完掘状況（東から）

3．2-1 区　第 2 遺構面　検出状況（西から）

4．2-1 区　西壁土層堆積状況（東から）

5．2-1 区　南壁東半部土層堆積状況（北西から）

6．2-1 区　南壁西半部土層堆積状況（北東から）

7．2-2 区　全景（西から）

8．2-2 区　全景（東から）

9．2-2 区　全景（北から）

図版 30

1．3-1 区　南側配管部第 2 遺構面完掘状況（西から）

2．3-2 区　西側配管部第 2 遺構面全景（北東から）

3．3-2 区　東側配管部完掘状況第 2 遺構面（南から）

4．3-1 区　第 2 遺構面　石列遺構（南から）

5．3-2 区　西側配管部第 3 遺構面遺構 14（北東から）

3-2 区　西側配管部第 3 遺構面遺構 12（東から）

3-2 区　西側配管部第 3 遺構面遺構 13 完掘状況（北東から）

3-2 区　東側配管部第 2 遺構面遺構 10（東から）

3-2 区　東側配管部第 2 遺構面遺構 9（南西から）

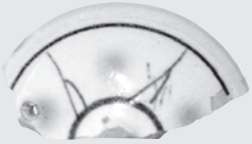
図版 31

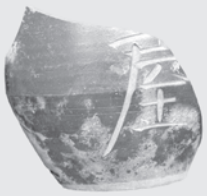
5

6

16

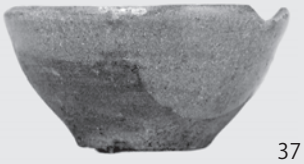
22


23


26

31

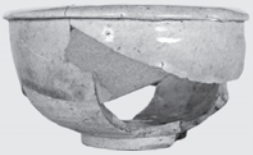
35

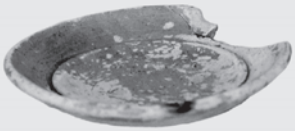

37

39

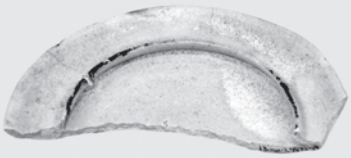
40

41

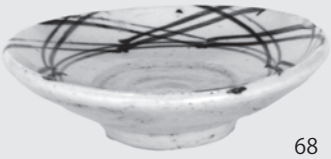

42

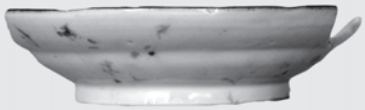

52

55


58

62


68


70

71

77

図版 32

79

85

88

89

95

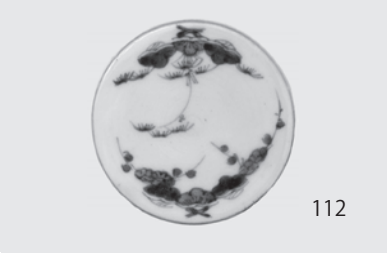
101

104

105

106

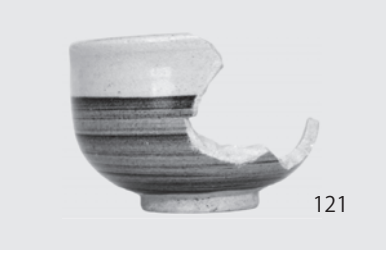
110


112

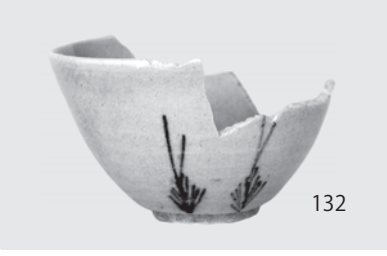
114

115

116


121

123


132

138

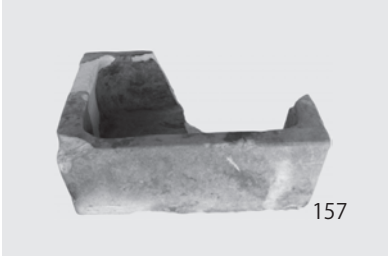
139

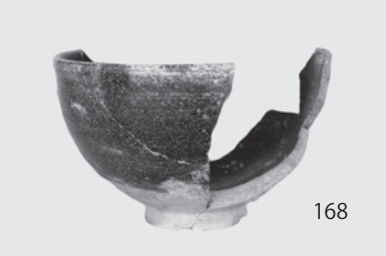
142

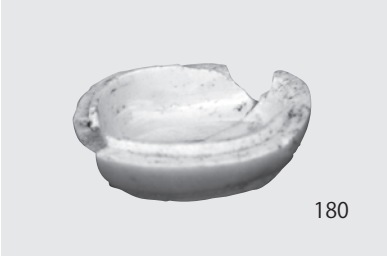
150

図版 33

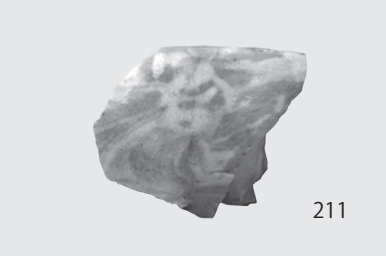
151

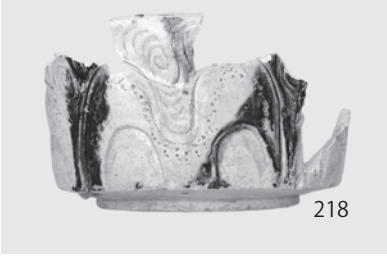

157


168

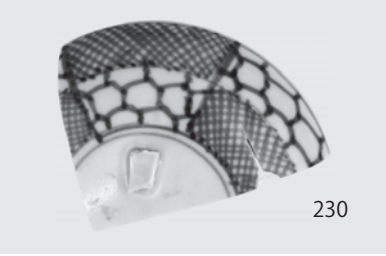

180

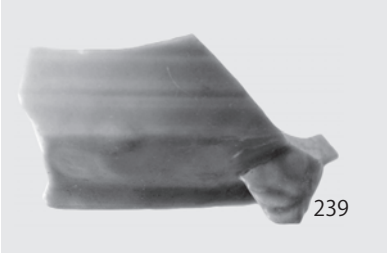
194


211

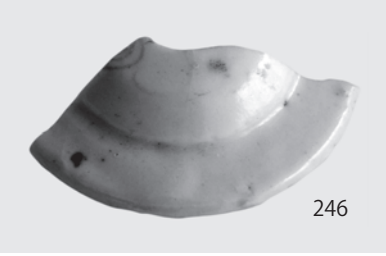

218

219

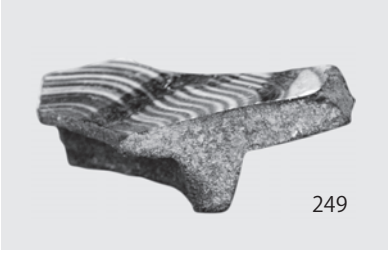

230

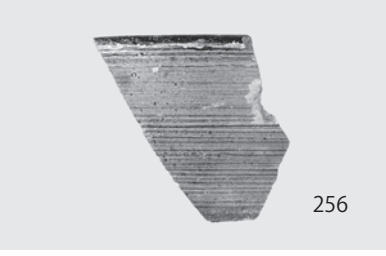

239

242

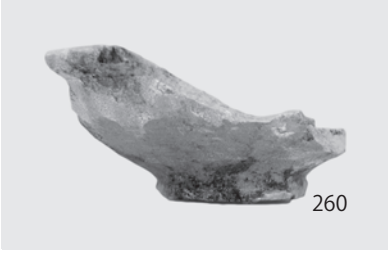

246

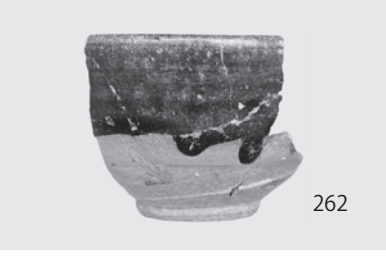
248

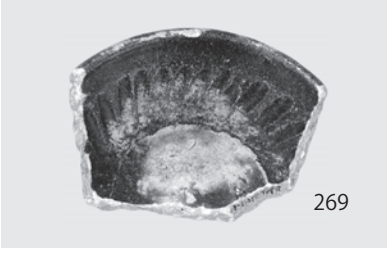

249

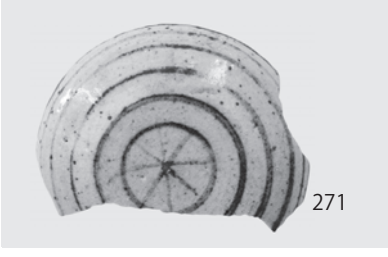

256

258


260


262

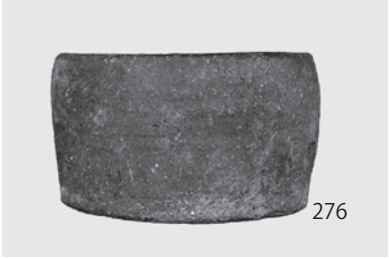

269


271

273

図版 34

274

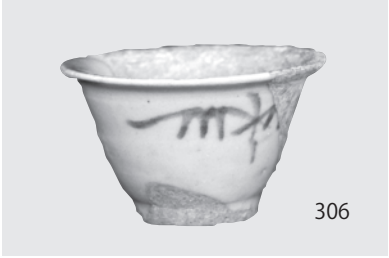

276

279

286

287

300


306

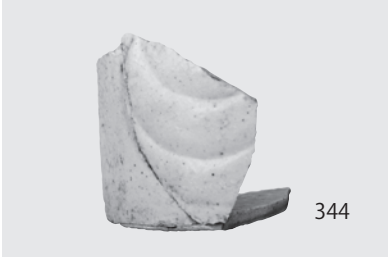
307

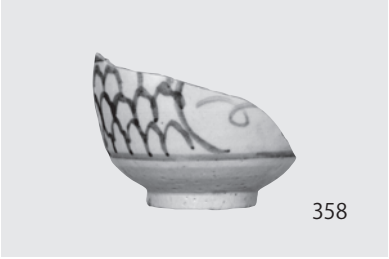
317

319

325

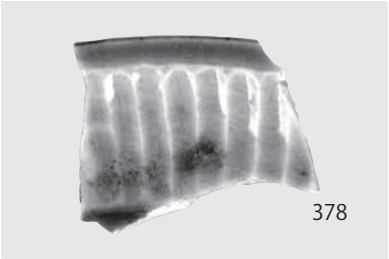
336

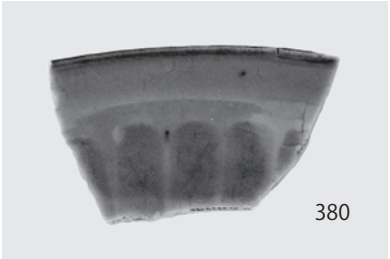

344

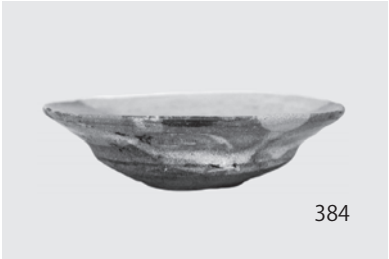

358

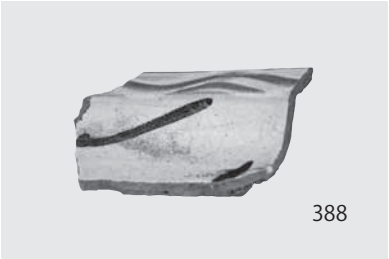
369

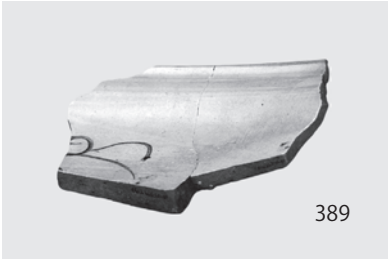
371


378


380


384

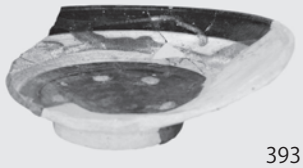

388


389

図版 35

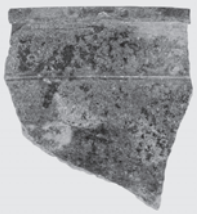
390

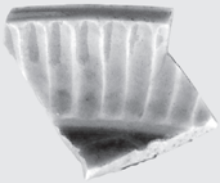
391


393

408

412


414

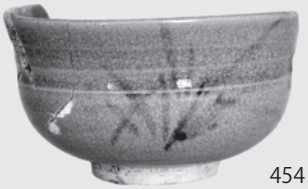

426

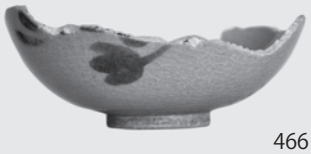
430

438

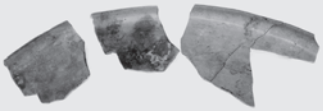
443

452


454


466

470

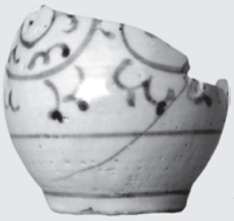

480

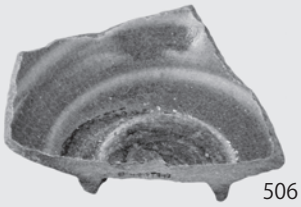
484

493

498

501

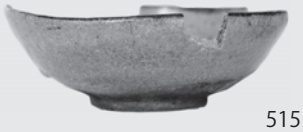

505


506

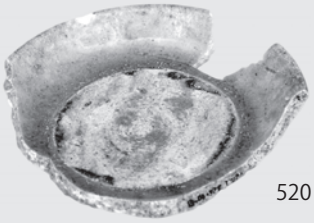
図版 36

508

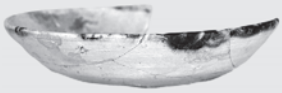
513

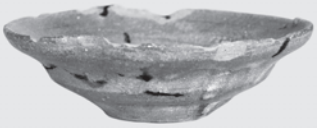

515

518

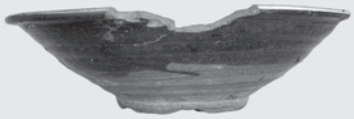

520

522 523 521 524


525


530

531


532

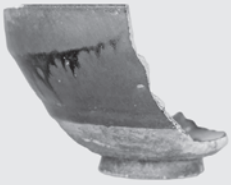
533

534

536

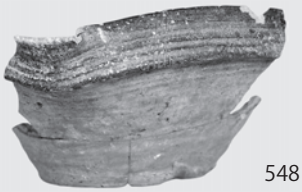
537

538

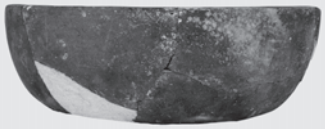

541

543

544


548

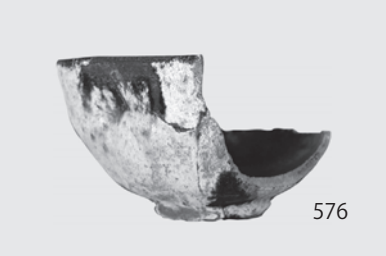
550


551

図版 37

570

571


576

579

586

588

593

595

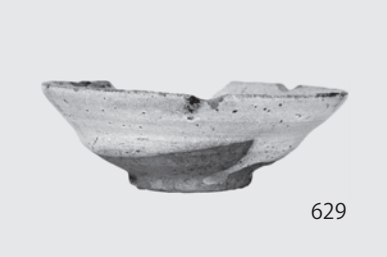
598

604

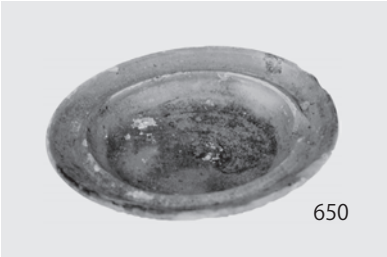
614

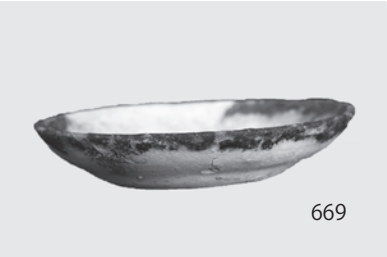
615

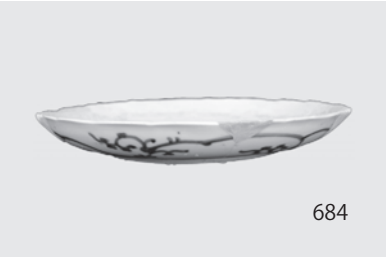
621

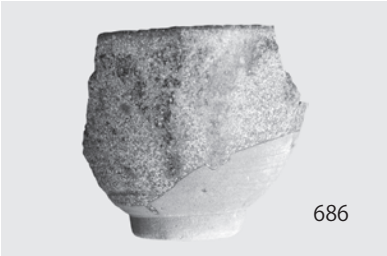

629

630


650


669


684


686

694

695

図版 38

697

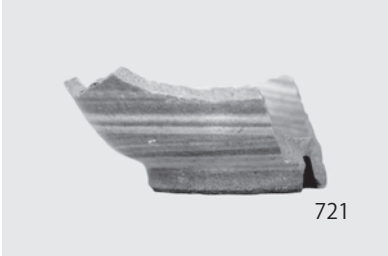
698

704

707

715

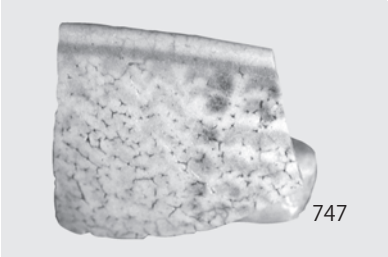
719


721

730

732

744


747

754

756

757

758

765

771

775

776

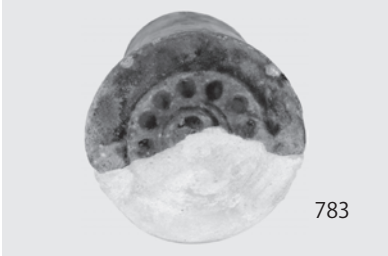
773

777

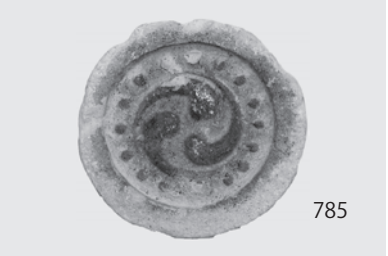
778

779

781


783

784


785

786

789

790

796

797

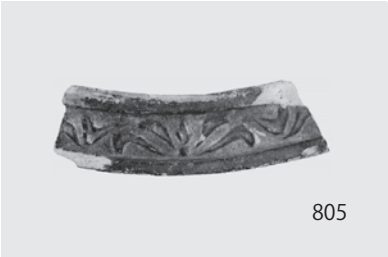
798

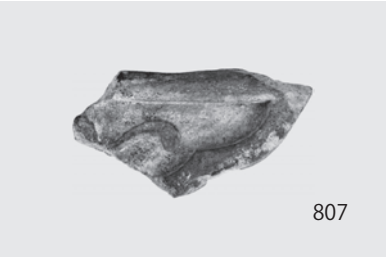
799

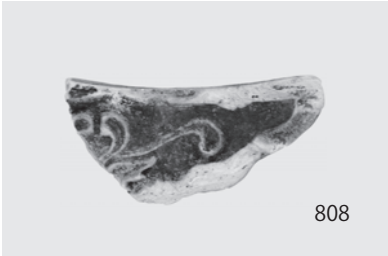
801

802

803


805

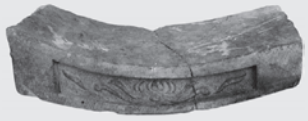

807


808

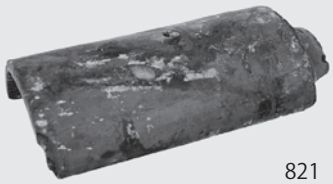
809

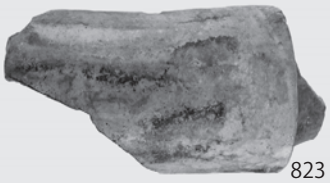
811

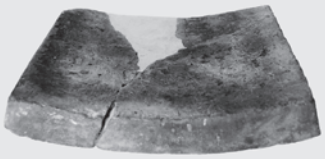
図版 40

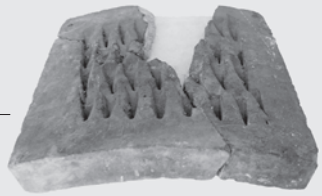

814

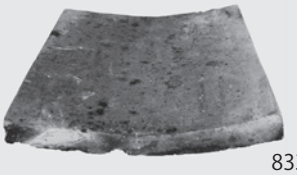
815

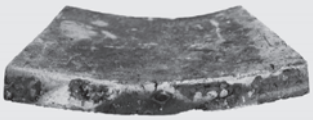

821


823




825


833


834

836

839

840

841

842

845

846

847

850

851

853

854

855

図版 41

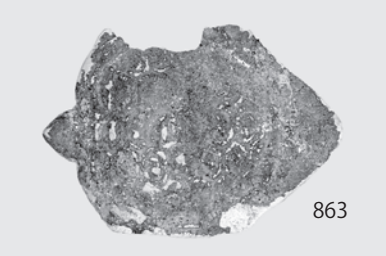
858

859

860

861

862


863

864

865

867

868

870

871

872

873

874

875

879

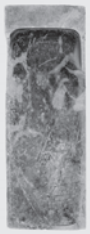
883

885

889

890

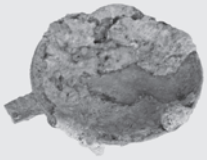
図版 42


891

892

893

898


906

907

908

927

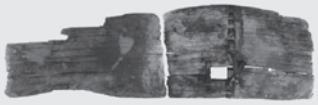
937

939

941

942

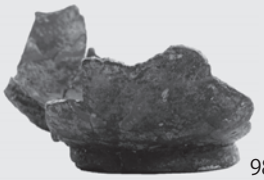
956


958

963

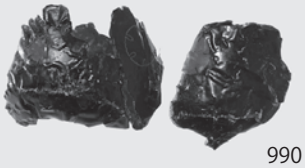
977

978


980

981

987


990

図版 43

7

8

14

43

87

108

111

117

122

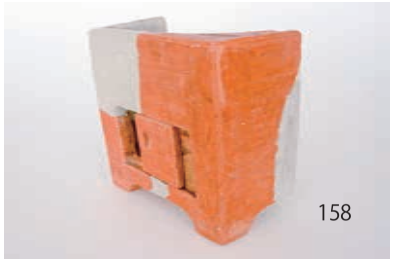
135

140

143

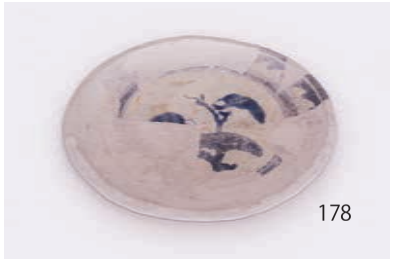
148

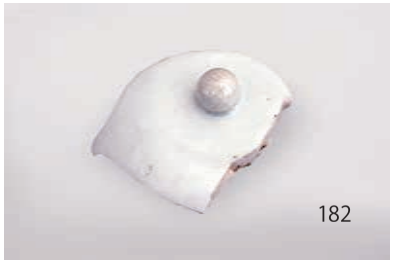
155


158

161

162


178


182

186

195

図版 44

206

215

268

272

275

295

297

312

314

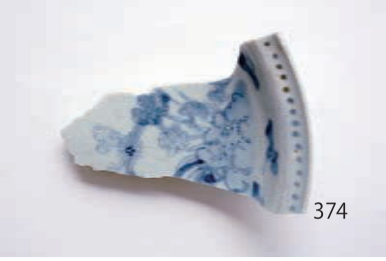
324

326

330

333

348


374

386

394

397

399

400

401

図版 45

423

439

444

445

455

456

462

463

465

467

468

469

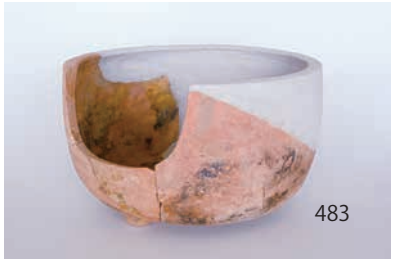
471

474

475

479

482


483

491

492

509

図版 46

511

517

528

535

539

545

546

547

549

552

553

554

560

561

563

569

575

580

581

582

585

図版 47

587

590

594

596

589

600

597

589
・
590

603

616

620

622

626

632

637

636

638

639

640

図版 48

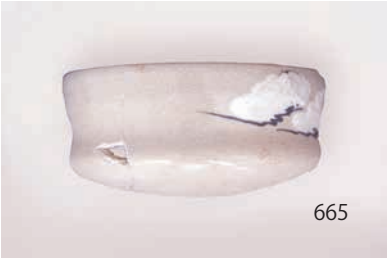
641

643

642

644

664


665

675

678

679

680

682

685

688

689

690

693

703

714

716

図版 49

717

722

733

734

741

748

749

764

766

794

806

810

837

838

843

849

876

877

878

884

901

図版 50

914

916

957

965

965

965
赤外線写真

979

982

984

933

935

参 1
焼塩壺

参 2
焼塩壺

参 3
十能

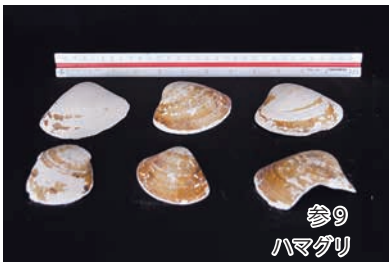
参 4
火消壺

参 5
行平鍋

参 6
埴輪

参 7
櫛払い

参8
ヤマトシジミ


参9
ハマグリ

参 10
鹿の頭骨

参考遺物は掲載外

報　告　書　抄　録

ふりがな	わかやまじょうあと
書　　名	和　歌　山　城　跡
副　書　名	和歌山地方合同庁舎新築に伴う発掘調査報告書
編著者名	佐伯和也
編集機関	公益財団法人　和歌山県文化財センター
所　在　地	〒640-8301　　和歌山市岩橋 1263 番地の 1　　TEL　073 － 472 － 3710
発行年月日	2016 年３月 24 日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
和歌山城跡	和歌山市二番町	3020150	379	34° 13′ 37″	135° 10′ 33″	2013. 8. 28 ～ 2014. 3. 4	2,824 ㎡	和歌山地方合同庁舎新築

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
城跡	近　世	屋敷地区画 施設 土坑 ピット 井戸	陶磁器 瓦類 木製品 金属製品 土人形	出土遺物で肥前系の遺物が最も多かった。中でも珍品として染付の瓶に『ＡＤ』の英字が描かれたものが出土している。他に美濃瀬戸系遺物として織部向付も数点出土している。

要　　約

和歌山城三の丸跡の調査を行った。調査範囲には紀州徳川家の重臣屋敷跡が 3 区画検出された。屋敷地の区画は 17 世紀中頃から 19 世紀前半の時期のもので、この敷地の区画がどのような変遷を辿ったか溝、柱穴列、土塀基礎などの検出遺構から明らかにした。また、現代まで遺っている絵図との整合性を図りつつ整理作業を進めた。

和 歌 山 城 跡

—和歌山地方合同庁舎新築に伴う発掘調査報告書—

2016 年 3 月 24 日

編集・発行　公益財団法人和歌山県文化財センター

印刷・製本　白光印刷株式会社